文明堂
庫

謡曲集

上

緒言

謠曲は猿樂の能に伴ふ章曲にして、室町幕府の世、能の發達と相俟つて形成せられたる一大文學也。而して、其能が古來幾多の舞樂の集大成せられたるものなるが如く、文亦各種の文學の綜合と見るべきものにして、上古、中古の古典に見ゆる傳說、歌物語等より、近古時代の戰記物に至るまで、凡そ有名なる文章と話篇とは、殆ど擧げて謠曲の材料に供せられたりと稱するも、敢て過言に非ず。而して、その行文の多くは歌語を根底とし、更に釋氏の說法を以て潤色せり。蓋し文學卽歌、思想卽佛に過ぎざりし時代精神の反映と稱すべし。

謠曲の結構は泰西の所謂戲曲（ドラマ）に髣髴たるものありと雖も、而も尙頗る幼稚にして、全然叙事詩の痕跡を殘せる物尠からず。その神事能といひ、幽靈能といひ、又は狂女物といふが如き、殆ど同巧異曲にして、甚だ變化に乏し。然りと雖も、能く古來の文學を綜合集成して　國民の文學上の聯想に憩へ、或は淸婉羽衣の如き、艶麗松

風の如き、幽玄大原御幸の如き、壯烈安宅の如き、幾多の名曲を成せる技量は、亦大いに見るべきものあり、殊にその影響を江戸文學に及ぼしたる効果に至りては、特に其偉大なるを認めずんばあらず。

本書の校訂上に採りたる方針大略次の如し。

一、觀世流改訂謡本を底本とし、その内外二百番を上下二册に分ちて刊行す。

一、讀物として文章に重きを置くに努めたれど、次第、一聲、道行、歌、語等の文句の上の名目をも記し、サシ、クリ、ロンギ、クセ、ワカ、キリ等謡ひ方の上の名目をも掲げ、舞の箇所をも示せり。蓋し謡曲は詞と謡とを二大要素とすれば也。

大正三年六月

校訂者　野村八良

謠曲集上 目錄

內一

高砂……一
田村……七
江口……一四
班女……二〇
鵜飼……二七

內二

難波……三四
兼平……四一
千手……四八
卒都婆小町……五五

紅葉狩……六三

內三

老松……六七
賴政……七三
井筒……七九
三井寺……八五
天鼓……九三

內四

白樂天……一〇一
實盛……一〇七
楊貴妃……一一五
玉葛……一二三
融……一二七

內五
養老……一三五
清經……一四一
采女……一四九
通小町……一五六
小袖曾我……一六一
內六
竹生島……一六九
朝長……一七四
姨捨……一八三
柏崎……一八八
阿漕……一九六
內七
志賀……二〇三
鵺……二〇九
大原御幸……二一五
梅枝……二二四
誓願寺……二三〇
內八
蟻通……二三七
忠度……二四三
熊野……二五〇
遊行柳……二六八
藤戶……二七四
內九
玉井……二八一

景清……二七七
杜若……二八六
二人靜……二九二
安達原……二九八

內十

賀茂……三〇五
俊寬……三一一
松風……三一七
西行櫻……三二五
浮舟……三三一

內十一

吳服……三三七
八島……三四三
鸚鵡小町……三五三
葛城……三五八
當麻……三六四

內十二

海士……三七一
鞍馬天狗……三七九
定家……三八六
咸陽宮……三九三
東岸居士……三九九

內十三

龍田……四〇三
夜討曾我……四〇九
夕顏……四一七

隅田川……四三
雲林院……四三

內　十四

春日龍神……四三七
船　橋……四四三
源氏供養……四四九
花　筐……四四五
富士太鼓……四六五

內　十五

皇　帝……四六九
通　盛……四七四
檜　垣……四八〇
櫻　川……四八六
山　姥……四九五

內　十六

氷　室……五〇三
善　界……五一〇
芭　蕉……五一五
百　萬……五三一
船辨慶……五三七

內　十七

右　近……五三五
女郎花……五四一
關寺小町……五四八
自然居士……五五五
大　會……五六四

內 十八

三輪……五六九
安宅……五七四
東北……五八五
蟬丸……五九〇
猩々……五九八

內 十九

白髭……六〇一
盛久……六〇七
佛原……六一五
善知鳥……六二〇
小鹽……六二七

內 二十

邯鄲……六三三
殺生石……六三九
野宮……六四五
錦木……六五二
唐船……六六〇

內 二十一

弓八幡……六六七
鉢木……六七三
羽衣……六八五
道成寺……六九一
龍虎……六九九

內 二十二

芦刈……七〇三

敦盛……七二
木賊……七九
葵上……七七
輪藏……七三

謡曲集

内一

高砂

梗概　古今集の序に、「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ、とあるに據りて、この名木の縁を出して由來を語らしむるめでたき祝言能なり。（脇能）

前シテ　松の精（尉）　後シテ　住吉明神
シテツレ　松の精（嫗）　ワキ　神主

ワキ三人次第謡「今を始の旅衣、今を始の旅衣、日も行く末ぞ久しき。ワキ詞「そも〳〵是は九州肥後國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候程に、此度思立ち都に上り候。又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。三人道行謡「旅衣

末はるゞゝの都路を、末はるゞゝの都路を、今日思ひ立つ浦の波、舟路のどけき春風の、幾日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるゞゝと、さしも思ひし播磨潟、高砂の浦に著きにけり。高砂の浦に著きにけり。

尾上―尾上寺

シテ、ツレ二人一聲謡「高砂の、松の春風吹き暮れて、尾上の鐘もひゞくなり。ツレ謡「波は饅の磯がくれ、二人謡「音こそしほの滿干なれ。シテ、ザシ謡「誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、二人謡「過ぎ來し世々はしら雪の、積りゝて老の鶴の、塒に殘る有明の、春の霜夜の起居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅蓆の、思を述ぶるばかりなり。

誰をかも―末句
友ならなくに
（古今集）

下歌おとづれは松にこと問ふ浦風の、葉落衣の袖そへて、木陰の塵を掻かうよ。木陰の塵を掻かうよ。上歌所は高砂の、所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久き名所かなそれも久き名所かな。

生の松―筑前の生の松原

ワキ詞「里人を相待つ處に、老人夫婦來れり　いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「こ

古今集―醍醐の御宇紀貫之等勅を奉じて撰ぶ

なたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ。シテ詞「唯今木蔭を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキ詞「高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに、なにとて相生の松とは申し候ぞ。シテ詞「仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も、相生のやうに覺えとありさながら、この尉は津の國住吉の者、これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。ワキ謠「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てゝ住むと、云ふはいかなる事やらん。ツレ謠「うたての仰せ候や、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣の、妹背の道は遠からず。シテ詞「まづ案じても御覽ぜよ。シテ、ツレ二人謠「高砂住の江の、松は非情のものだにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを。ワキ謠「謂れを聞けば面白や。さて〳〵さきに聞えつる。相生の松の物語を、所に言ひ置く謂れはなきか。シテ詞「昔の人の申しゝは、是はめでたき世のためしなり。ツレ謠「高砂といふは上代の、

萬葉集の古の義、シテ詞「住吉と申すは、今此御代に住み給ふ延喜の御事、ツレ謡「松とは盡ぬ言の葉の、シテ詞「榮えは古今相同じと、シテ、ツレ二人謡「御代をあがむる喩なり。ワキ謡「よくよく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の、シテ謡「光和らぐ西の海の、ワキ謡「かしこは住の江、シテ謡「こよは高砂、ワキ謡「松も色そひ、シテ謡「春も、ワキ謡「長閑に、上歌　四海波靜にて、國も治る時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや。逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても言もおろかや斯る世に、住める民とて豐なる、君の恵ぞありがたき。君の恵ぞありがたき。

ワキ詞「猶々高砂の松のめでたき謂れ、委く御物語り候へ。クリ地謡「それ草木心なしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の德を具て、南枝花始て開く。シテサシ謡「然れども此松は、其氣色長へにして、花葉時を分ず、地謡「四つの時至ても、一千年の色雪の内に深く、又は松花の色十返りとも云へり。シテ謡「かゝるたよりを松が枝の、地謡「言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、シテ謡「生きとし生けるもの毎に、地謡「敷島の陰によるとかや。

時つ風云々　王充論衡に「太平之世五日一風十日一雨風不鳴條雨不破塊」

クセ然るに長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌に漏るゝ事なし。草木土砂風聲水音迄、萬物の緘る心あり。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。中にも此松は、萬木に優て、十八公の粧ひ、千秋の綠を爲して、古今の色を見ず、始皇の御爵に、あづかる程の木なりとて、異國にも本朝にも、萬民之を賞翫す。シテ謠「高砂の尾上の鐘の音すなり。地謠「曉かけて、霜はおけども松が枝の、葉色は同じ深綠、立ち寄る蔭の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、眞なり松の葉の、散り失せずして色は猶、正木の蔓長き世の、譬なりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。ロンギげに名を得たる松が枝の、げに名を得たる松が枝の、老木の昔現して、其名を名乘給へや。シテ、ツレ二人謠「今は何をか包べき。是は高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ來りたり。地謠「ふしぎやさては名所の、松の奇特を現して、シテ、ツレ二人謠「草木心なけれども、地謠「畏き代とて、シテ、ツレ二人謠「土も木も、地謠「吾大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと、夕波の汀

長能―藤原氏一條天皇の頃の歌人今「ちやうのう」と讀へり
十八公―松の字
吳丁固の故事
始皇云々―秦始皇帝泰山に封禪して雨を松下に避け其樹を封じて五大夫とす
松の葉の散りうせずして云々―古今集序の詞

なる、海人の小舟に打ち乗りて　追風にまかせつよ、沖の方に出にけりや、沖の方に出にけり。ワキ上歌謡「高砂や、此浦舟に帆をあげて、此浦舟に帆をあげて、月もろともに出で汐の、波の淡路の島陰や、遠く鳴尾の沖過て、はや住の江に著きにけり。早や住の江に著きにけり。後シテ謡「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾世經ぬらん。睦ましと君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゞしめ給へ御奴たち。地謡「西の海、あはきが原の波間より、シテ謡「現れ出でし神松の、春なれや。殘の雪の淺香潟、地謡「玉藻刈るなる岸陰の、シテ謡「松根に倚つて腰を摩れば、地謡「千年の緑手に滿てり。シテ謡「梅花を折つて頭に挿せば、地謡「二月の雪衣に落つ。（神舞）ロンギ地謡「ありがたの影向や、ありがたの影向や。月住吉の神遊、御影ををがむあらたさよ。シテ謡「げにさまざまの舞姫の、聲も澄むなり住の江の、松影も映るなる。青海波とは是やらん。地謡「神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、シテ謡「それぞ還城樂の舞。地謡「さて萬歳の、シテ謡「小忌衣、地謡「さす腕には惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福を

われ見ても―伊勢物語の歌
睦ましと―末句「久しき世よりいはひそめてき」伊勢物語の歌住吉明神、前の歌に對へたりといふ
西の海―「西の海や磯が原の波間よりあらはれ出し住吉の神」續古今集の歌
あはきが原―今「あをきが原」と謡ふ
青海波、還城樂、千秋樂、萬歳樂―共に樂名

抱き、千秋樂は民を撫で、萬歲樂には命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲ぞ樂む。颯々の聲ぞ樂む。

田村

梗概　京都清水寺にて、田村丸の靈、旅僧に觀世音の功德を述べ、かたがた東夷征伐の際、鈴鹿の惡冦を鎭めし軍功を物語るめでたき曲なり。八島、箙と共に勝修羅三番の稱あり。勝修羅は勝軍を脚色せる能なり。（二番目）

シテ　田村丸（前は童子）　ツキ　僧

ワキ三人次第謡「鄙の都路隔て來て、鄙の都路隔て來て、九重の春に急がん。ワキ詞「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此春思立て候。ワキ三人道行謡「頃もはや、彌生なかばの春の空、彌生なかばの春の空、影も長閑にめぐる日の、霞む其方や音羽山、瀧の響も靜なる、清水寺に著きにけり。清水寺に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に是は都清水寺とかや申すけに候。是なる櫻の盛とみえて候。人を待ちて委く尋ねばやと思ひ候。シテ一聲謡「おのづから、春の手向となりにけり、地主權現の花ざかり。ワキそれ

十惡―殺生、偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡。
三十三身―觀音の身を三十三種に示現すること。
五濁―劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

花の名所多しといへども、大悲の光色添ふゆゑか、この寺の地主の櫻に若くはなし。されば にや大慈大悲の春の花、十惡の里に芳く、三十三身の秋の月、五濁の水に影きよし。下歌千早振神の御庭の雪なれや、上歌白妙に、雲も霞もうづもれて、雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重一重、げに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆる氣色かな。時ぞと見ゆる氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる人に尋ね申すべきことの候。シテ詞「こなたの事にて候か。何事にて候ぞ。ワキ詞「見申せばうつくしき玉箒を持ち、木陰を清め給ひ候は、若し花守にて御入り候か。シテ詞「さん候。是は此地主權現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木陰を清め候程に、花守とや申さん、又御奴とや申すべき。いづれに由ある者と御覽候へ。ワキ詞「けに〳〵由ありげに見えて候。先々當寺の御來歷、くはしく語り給ふべし。

シテ詞「そも〳〵當寺淸水寺と申すは、大同二年の御草創〳〵、坂上の田村丸の御願なり。昔大和國子島寺といふ所に、賢心といへる沙門、正身の觀世音を拜まんと誓ひしに、ある

檀那―施主
安樂世界―極樂
淨土
娑婆―現世
閻浮提寺―桓武天皇御宇紹鑒法師之を開く

時木津川の川上より、金色の光さしょを、尋ね上つて見れば一人の老翁あり。かの翁語つていはく、我は是れ行叡居士といへり。汝一人の檀那を待ち大伽藍を建立すべしとて、東をさして飛び去りぬ。されば行叡居士といつぱ、これ觀音薩埵の御再誕、謠又檀那を待てとありしは、是れ坂上の田村丸。上歌地謠今も其、名に流れたる清水の、名に流れたる清水の、深き誓ひも數々に、千手の御手のとりぐ、さまぐの誓ひ普くて、國土萬民を漏らさじの、大悲の影ぞありがたき。げにや安樂世界より。今この娑婆に示現して、我らが爲の觀世音、仰ぐも愚なるべしや。仰ぐも愚なるべしや。

ワキ詞「近頃おもしろき人に參り逢ひて候ものかな。又見え渡りたるは皆名所にてぞ候らん。御教へ候へ。シテ詞「さん候、皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし。ワキ詞「まづ南に當つて塔婆の見えて候は、いかなる所にて候ぞ。シテ詞「あれこそ歌の中山清閑寺、今熊野まで見えて候へ。ワキ詞「また北に當て入相の聞え候は、いかなる御寺にて候ぞ。シテ詞「あれは上見ぬ鷲尾の寺。や、御覽候へ、音羽の山の嶺よりも、出でたる月のかよやきて、

この地主の櫻にうつる景色、まづ〳〵これこそ御覽じ事なれ。ワキ謠「げに〳〵是こそ暇惜しけれ。こと心なき春の一時。シテ謠「げに惜しむべし、ワキ謠「惜しむべしや。シテツキ二人謠「春宵一刻、價千金、花に淸香、月に影。シテ謠「げに千金にもかへじとは、いま此時かや。地謠「あらあら面白の、地主の花の景色やな。櫻の木のまに漏る月の、雪もふる夜嵐のさそふ花とつれて、散るや心なるらん。クセさざな名にしおふ、花の都の春の空、げに時めける粧ひ、靑楊の影みどりにて、風のどかなる、音羽の瀧の白糸の、くり返しかへしても面白や、ありがたやな。地主權現の、花の色も異なり。シテ謠「只賴め、標茅原のさしも草、地謠「われ世の中に、あらんかぎりはの御誓願、にごらじ物を淸水の、緣もさすや靑柳の、げにも枯れたる木なりとも、花櫻木の粧ひ、いづくの春もおしなめて、長閑き影は有明の、天も花に醉へりや。面白の春べや。あら面白の春べや。

ロンギ地謠「げにやけしきを見るからに、只人ならぬ粧ひの、其名いかなる人やらん。シテ謠「いかにとも、いさやその名も白雪の、跡を惜まば此寺に、歸る方を御覽ぜよ。地謠「歸るや

たゞ頼め―新古今集の歌清水觀音の御歌と傳ふ但初句尚頼め
枯れたる木云々―枯木開花は千手觀音弘誓の利生

いづく蘆垣の、間近きほどか遠近の、シテ謡「たづきも知らぬ山中に、地謡「おぼつかなくも思ひ給はど、わが行く方を見よやとて、地主權現の御前より、下るかと見えしが、くだりはせで坂上の田村堂の軒もるや、月のむら戸を押しあけて、内に入らせ給ひけり。内陣に入らせ給ひけり。（中入）

ワキ上歌謡「夜もすがら、散るや櫻の蔭に居て、散るや櫻の蔭に居て、花も妙なる法の場、迷はぬ月の夜と共に、此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

後シテ一聲謡「あらありがたの御經やな。清水寺の瀧つ波、まこと一河の流を汲んで、他生の緣ある旅人に、言葉をかはす夜聲の讀誦、これぞすなはち大慈大悲の、觀音擁護の結緣たり。

ワキ謡「不思議やな花の光にかょやきて、男體の人の見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ謡「今は何をか包むべき。人皇五十一代、平城天皇の御宇にありし、坂上の田村丸、地謡「東夷を平げ惡魔を鎭め、天下泰平の忠勤たりしも、すなはち當寺の佛力なり。サシ「しか

遠近の一古今集の歌下句「憂事なくも呼子鳥かな」

るに君の宣旨には、勢州鈴鹿の惡魔を鎭め、都鄙安全になすべしとの、仰せによつて軍兵を調へ、既に赴く時節に至りて、此觀音の佛前に參り、祈念をいたし立願せしに、シテ謠「不思議の瑞驗あらたなれば、地謠「歡喜微笑の頼を含んで、急ぎ凶徒に、打つ立ちけり。クセ普天の下、卒土の中、いづく王地にあらざるや。やがて名にしおふ、關の戸さゝで逢坂の、山を越ゆれば浦波の、粟津の森やかけろふの、石山寺を伏し拜み、是も清水の一佛と、頼みはあひに近江路や、勢田の長橋踏みならし駒も足竝や勇むらん。シテ謠「既に伊勢路の山ちかく、地謠「弓馬の道もさきかけんと、勝色みせたる梅が枝の、花も紅葉も色めきて、猛き心はあらかねの、土も木もわが大君の神國に、もとより觀音の御誓ひ、佛力といひ神力も、猶數々に大丈夫が、待つとは知らでさを鹿の、鈴鹿の禊せし世々までも、思へば佳例なるべし。

地謠「さる程に山河を動かす鬼神の聲、天に響き地に滿ちて、滿目青山動搖せり。シテ詞「いかに鬼神もたしかに聞け、昔もさる例あり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王意を背く

普天の下―詩經に「普天之下莫非王土率土之濱莫非王臣」
かげろふの―石山の枕詞
土も木も―土も木も我大君の國なるにいづくか鬼のすみかなるらん」天智の朝に叛臣千方あり鬼を使ふ紀友雄之を討つ時右の歌を送る諸鬼退散すといふ

天罰にて、千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。謡ましてや間近き鈴鹿山、地謡ふりさけ見れば伊勢海、ふりさけ見れば伊勢海、阿濃松原むらだち來つて、鬼神は黒雲鐵火をふらしつゝ、數千騎に身を變じて、山の如くに見えたる所に、シテ謡あれを見よ不思議やな。地謡あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の、光を放つて虛空に飛行し、千の御手毎に、大悲の弓には智惠の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霰とふりかゝつて、鬼神の上に亂れおつれば、ことゞく矢先にかゝつて、鬼神は殘らず討たれにけり。ありがたしありがたしや。眞に咒咀、諸毒藥念彼、觀音の力を合せて、すなはち還著於本人、すなはち還著於本人の、敵は亡びにけり。これ觀音の佛力なり。

咒咀諸毒藥念彼云々―法華經普門品の語

江口

梗概

江口の君の幽靈四行法師と歌詠み交したる昔語をなす事を脚色す。この故事法師の作といはるゝ撰集抄に見ゆ。末段普賢菩薩と現はるゝことは、書寫の性空上人が生身の菩薩を拜せむと祈り室の遊女の家に行きて奇瑞に會ふ事を加味せるなり。此故事亦同書及び古事談に見ゆ。（緣物）

シテ　江口の君（前は里女）　ツレ　遊女

ワキ　僧

ワキ次第謠「月は昔の友ならば、月は昔の友ならば、世の外いづくならまし。　詞これは諸國一見の僧にて候。我未だ津の國天王寺に參らず候程に、此度思立ち天王寺に參らばやと思ひ候。道行謠都をば、まだ夜深きに旅立ちて、まだ夜深きに旅立ちて、淀の川舟行末は、宇殿の蘆のほの見えし、松の煙の浪よする　江口の里に著きにけり。江口の里に著きにけり。狂言しかし〳〵。　ワキサシ謠「さてはこれなるは江口の君の舊跡かや。痛はしやその身

宇殿―津國島上郡、廐の名所
江口―同國江口の君は此里の遊女

は土中に埋むといへども、名は留りて今までも、昔語りの舊跡を、今見る事のあはれさよ。詞實にや西行法師この所にて、一夜の宿を借りけるに、主の心なかりしかば、謡世の中を厭ふまでこそ難からめ、詞假の宿りを惜む君かなと詠じけんも、此所にての事なるべし。謡あら痛はしや候。

シテ詞「なう〳〵あれなる御僧、今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候ぞ。ワキ詞「不思議やな人家も見えぬ方よりも、女性一人來りつよ、今の詠歌の口ずさみを、如何にと問はせ給ふ事、そも何故に尋ね給ふぞ。シテ詞「忘れて年を經し物を、又思ひ染む言の葉の、謡草の蔭野の露の世を、厭ふまでこそ難からめ、かりの宿りを惜むとの、其言の葉も恥かしければ、さのみは惜み參らせざりし、其理をも申さん爲に、是まで現れ出でたるなり。ワキ詞「心得ず假の宿りを惜む君かなと、西行法師が詠ぜし跡を、たど何となく弔ふ所に、さのみは惜まざりにしと、ことわり給ふ御身はさて、謡如何なる人にてましますぞ。シテ詞「いやさればこそ惜まぬよしの御返事を、申しょ歌をば何とてか　詠じもせさせ給はざる

其身は土中に一
白氏文集に「謂門原上土堆骨不埋名」

色好みの一古今集序に色好の家に埋木の人知れぬ事となりてといふ

我宿の一拾遺集の歌

一樹の陰云々一他生の縁あるをいふ

らん。ワキ謡「げに其返歌の言の葉は、世を厭ふ、シテ謡「人とし聞けば假の宿に、嗣心留むなと思ふばかりぞ。心とむなと捨人を、諫め申せば女の宿りに、とめ参らせぬも理ならずや。ワキ謡「げに理なり西行も、假の宿りを捨人といひ、シテ謡「此方も名におふ色好の、家にはさしも埋木の、人知れぬ事のみ多き宿に、ワキ謡「心とむなと詠じ給ふは、シテ謡「捨人を思ふ心なるを、ワキ謡「唯惜むとの、シテ謡「言の葉は、上歌地謡「惜むこそ、惜まぬ假の宿なるを、惜まぬ假の宿なるを、などや惜むと夕波の、かへらぬ古は今とても、捨人の世語りに、心な留め給ひそ。

ロンギ地謡「ゆにや浮世の物語、聞けば姿も黄昏に、かげろふ人は如何ならん。シテ謡「黄昏にたゞずむ影はほのぐと、見え隠なる川隈に、江口の流れの君とや見えん恥かしや。地謡「さては疑ひ荒磯の、波と消えにし跡なれや。シテ謡「假に住み來し我宿の、地謡「梅の立枝や見えつらん。シテ謡「思の外に、地謡「君が來ませるや、一樹の陰にや宿りけん。又は一河の流の水、汲みても知し召されよや。江口の君の幽靈ぞと、聲ばかりして失せにけり。

聲ばかりして失せにけり。（中入）

ワキ詞「さては江口の君の幽靈假に現れ、我に言葉をかはしけるぞや。謡いざ弔ひて浮めんと、言ひもあへねば不思議やな。言ひもあへねば不思議やな。月澄み渡る河水に、遊女のうたふ舟遊び、月に見えたる不思議さよ。月に見えたる不思議さよ。

上歌「聖地謡」河船を、とめて逢瀬の波枕、とめて逢瀬の波枕。浮世の夢を見習はしの、驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦潟、かたしく袖の涙の、唐舟の名殘なり。また宇治の橋姫も、訪はんともせぬ人を待つも、身の上とあはれなり。よしや吉野の、よしや吉野の花も雪も雲も波も、あはれ世にあはどや。

ワキ謡「不思議やな月澄み渡る水の面に、遊女のあまたうたふ謡、色めきあへる人影は、そも誰人の舟やらん。シテ謡「何此舟を誰が舟とは、恥しながら古の、江口の君の川遊遙の、月の夜舟を御覽ぜよ。ワキ謡「そもや江口の遊女とは、それは去りにし古の、シテ詞「いや古とは、御覽ぜよ、月は昔にかはらめや。シテ、ツレ二人謡「我等もかやうに見え來るを、

佐用姫―其の夫大伴狹手彦任那に遣はされし時別を惜しむ　橋姫―此神は女神にて之に通ふ男神ありとの傳說あり　川遊遙―船遊びのこと　秋の水―秋水雜來船三速（和漢朗詠集）

いにしへ人とは現なや。シテ詞「よし〳〵何かと宣ふとも、シテ、ツレ二人謡「言はじや聞かじ。シテ謡「むつかしや。シテ、ツレ三人謡「秋の水、みなぎり落ちて去る船の、シテ謡「月もかげさす棹の歌、うたへやうたへうたかたの、あはれ昔の戀しさを、いまも遊女の船遊び、世を渡る一節を、歌ひて、いざや遊ばん。クリ地謡「それ十二因縁の流轉は、車の庭に廻るが如し。シテ謡「烏の林に遊ぶに似たり。地謡「前生又前生、シテ謡「曾て生々の前を知らず。地謡「來世なほ來世、更に世々の終をわきまふる事なし。シテサシ謡「或は人中天上の善果を受くといへども、地謡「顚倒迷妄して未だ解脱の種を植ゑず。シテ謡「或は三途八難の惡趣に墮して、地謡「患にさへられて、既に發心のなかだちを失ふ。シテ謡「然るに我等たま〳〵受けがたき人身を受けたりといへども、地謡「罪業深き身と生れ、殊にためし少なき河竹の、流れの女となる。前の世の報いまで、思ひやるこそ悲しけれ。ダセ紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黃綉綵の林、色を含むといへども、朝の霜にうつろふ。松風蘿月に詞をかはす賓客も、去つて來る事なし、翠帳

十二因縁―無明行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死

三途―火途、血途、刀途の三惡道

八難―地獄、餓鬼、畜生、越北鬱單、長壽天、佛後佛前、盲聾瘖啞、世智辯聰

紅閨に枕をならべし妹背も、いつの間にかは隔つらん。およそ心なき草木、情ある人倫、いづれあはれを遁るべき。かくは思ひ知りながら、シテ謡ある時は色に染み、貪著の思淺からず。地謡又ある時は聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口に言ふ、妄舌の縁となる物を。實にや皆人は、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、見る事聞く事に、迷ふ心なるべし。

地謡おもしろや、（序の舞）シテ謡實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地謡隨縁眞如の波の、たゞぬ日もなし。たゞぬ日もなし。シテ謡波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、地謡心とめずは浮世もあらじ、シテ謡人をも慕はじ。地謡待つ暮もなく、シテ謡別路も嵐吹く、地謡花よ紅葉よ月雪のふることも、あらよしなや。シテ謡思へば假の宿、地謡思へば假の宿に、心とむなと人をだに、誡めし我なり。是までなりや歸るとて、すなはち普賢菩薩と現れ、船は白象となりつゝ、光とともに白妙の、白雲に打ち乘りて、西の空に行き給ふ。有難くぞ覺ゆる、有難くこそは覺ゆれ。

六塵―色聲香味觸法
六根―眼耳鼻舌身意
五塵―六塵の法塵を除く
六欲―六根より起る欲
ふること―古來の詩歌

班女

概　模

吉田の少將と契をこめし花子といふ女形見の扇を持ちて少將を戀ひ慕ひ、遂に狂亂せしが、少將糺の社へ參詣して、花子に巡り會ふよしを作る。戀の古歌と扇の故事とを以て文飾とす。曲名は班婕妤より來る。（狂女物）

シテ　花子　　ワキ　吉田少將

トモ　從者　　狂言　宿の長

上歌―女の美稱

狂言「かやうに候ものは、美濃國野上の宿の長にて候。さてもわれ花子と申す上臈を持ち參らせて候が、過ぎにし春の頃都より、吉田の少將殿とやらん申す人の、東へ御下り候が、此宿に御泊り候ひて、かの花子と深き御契の候ひけるが、扇を取替へて御下り候ひしより、花子扇に詠め入り、閨より外にいづる事なく候程に、彼の人を呼び出し追ひ出ださばやと思ひ候。いかに花子、今日よりしてこれには叶ひ候まじ。とく〳〵何方へも

御出で候へ。シテ謡「ゆにやもとよりも定めなき世といひながら、うきふししげき河竹の、流の身こそ悲しけれ。下歌分け迷ふ、行くへも知らで濡衣、上歌野上の里を立ち出でて、野上の里を立ち出でて、近江路なれど憂き人に、わかれしよりの袖の露、そのまゝ消えぬ身ぞつらき。そのまゝ消えぬ身ぞつらき。（中入）

ワキ三人次第謡「歸るぞ名殘富士の嶺の、歸るぞ名殘富士の嶺の、ゆきて都に語らん。ワキ詞「是は吉田の少將とはわが事なり。扨もわれ過ぎにし春の頃東に下り、はや秋にもなり候へば、只今都に上り候。ワキ三人道行謡「都をば、霞と共に立ちいでて、霞と共に立ちいでて、しばし程ふる秋風の、おと白河の關路より、又立ち歸る旅衣、浦山すぎて美濃國、野上の里に著きにけり。野上の里に著きにけり。ワキ詞「いかに誰かある。急ぐ間これははや美濃國野上の宿にて候。此所に花子といひし女に契りし事あり。未だ此所にあるか、尋ねて來り候へ。トモ詞「畏つて候。花子の事を尋ね申して候へば、長と不和なる事の候ひて、今は此所には御入りなきよし申し候。ワキ詞「さては定めなき事ながら、若其花子歸り來る

都をば一隅と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關（能因法師）

事あらば、都へついでの時は申し上せ候へと、かたく申しつけ候へ。急ぐ間程なく都に著きて候。われ宿願の仔細あれば、是より直に糺へ参らうずるにて候。皆々参り候へ

後シテ一聲謡「春日野の雪間をわけて生ひ出でくる、草のはつかに見えし君かも。詞よしなき人に馴衣の、日を重ね月はゆけども、謡世を秋風のたよりならでは、ゆかりを知らする人もなし。詞夕暮の雲の旅手に物を思ひ、謡うはの空にあくがれ出でて詞身を徒になすことを神や佛も憐みて、謡思ふことをかなへ給へ。それ足柄箱根玉津島、貴船や三輪の明神は、夫婦男女のかたらひを、守らんと誓ひおはします。此神々に祈誓せば、などか驗のなかるべき。謹上再拜。戀ひすてふ、我名はまだき立ちにけり、地謡人知れずこそ思ひそめしか。シテ謡あら恨めしの人心や。サシ詞にや祈りつよ、御手洗川に戀せじと、誰かいひけん虚言や。されば人心、眞すくなき濁江の、澄まで頼まば神とても、受け給はぬはことわりや。とにもかくにも人知れぬ、思ひの露の、下歌地謡置き所、いづくならまし身の行方。上歌心だに、誠の道にかなひなば、誠の道にかなひなば、祈らずとても神や

糺―下賀茂
春日野の云々―古今集の歌
夕されの一夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人をこふとて（古今集）
戀すてふ云々―壬生忠見の歌
御手洗川に戀せじと―戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけずぞなりにけらし（古今集）

心だに云々―曾公の歌と言ひ傳ふ

班女の扇―班婕妤の怨歌行に見ゆ

班女が閨云々―朗詠集の詩句

夏はつる―末句皆かんとすらん新古今集の歌

守らん、われらまで、眞如の月は曇らじを、知らで程へし人心、衣の玉はありながら、恨ありやともすれば、猶同じ世と祈るなり。猶同じ世と祈るなり。

トモ詞「いかに狂女、何とて今日は狂はぬぞ。面白う狂ひ候へ。シテ詞「うたてやなあれ御覽ぜよ、今まではゆるがぬ梢と見えつれども、風のさそへば一葉も散なり。謠たま〳〵心すぐなるを、狂へと仰せある人々こそ、風狂じたる秋の葉の　心もともに亂れ髮の、あら悲や狂へとな仰せありさむらひそよ。トモ詞「さて例の班女の扇は候。シテ詞「うつゝなや我名を班女と呼び給ふぞや。よし〳〵それも憂き人の、形見の扇手にふれて、うちおきがたき袖の露、古事までも思ひぞ出づる。謠班女が閨のうちには秋の扇の色、楚王の臺の上には夜の琴の聲、地謠「夏はつる、扇と秋の白露と、いづれか先に臥起の、床冷しや獨寢のさみしき枕して、閨の月をながめん。

クリ地謠「月重山にかくれぬれば、扇を擧てこれを譬へ、シテ謠「花琴上に散りぬれば、地謠「雪を聚めて春を惜む。シテ、サシ謠「夕の嵐朝の雲、いづれか思ひのつまならぬ。地謠「さみしき夜

半の鐘の音、雞籠の山に響きつゝ、明けなんとして別れを催し、シテ謡「せめて閨もる月だにも、地謡「しばし枕に殘らずして、又獨寢に成りぬるぞや。クセ翠帳紅閨に、枕ならぶる床の上、なれし衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の、命のみをさりともと、いつまで草の露の間も、比翼連理のかたらひ、其驪山宮の私言も、誰か聞き傳へて、今の世まで漏らすらん。さるにても我夫の、秋より前に必ずと、夕の數は重なれど、あだし言葉の人心、賴めて來ぬ夜は積れども、欄干に立ちつくして、そなたの空よとながむれば、夕暮の秋風嵐山風野分も、あの松をこそは音づれ。我待つ人よりの、音づれをいつ聞かまし。シテ謡「せめてもの、形見の扇手にふれて、「風のたよりと思へども、夏もはや杉の窓の、秋風冷かに吹き落ちて、團雪の扇も雪なれば、名を聞くもすさまじくて、秋風怨あり。よしや思へば是もけに、逢ふは別れなるべし。非報いなれば今さら、世をも人をも恨むまじ。たゞおもはれぬ身の程を、思ひつゞけて獨居の、班女が閨ぞさみしき。地謡「繪にかける。（中の舞）シテ謡「月を隱して懷に、持たる扇、地謡「とる袖も三重が

比翼連理云々―楊貴妃の故事

「國寶」の扇―本朝文粹江匡衡の詩序の句

月をかくして云云―白氏文集に「藏月入懷中」とあり、月は扇の繪なり

あふぎとは―扇に逢ふを掛く

形見こそ―伊勢物語の歌

さね、シテ謡「其色衣の、地謡「夫のかねごと、シテ謡「かならずと夕暮の、月日もかさなり、地謡「秋風は吹けども荻の葉の、シテ謡「そよとの便も聞かで、地謡「鹿の音蟲の音も、かれがれの契、あらよしなや、シテ謡「かたみの扇より、地謡「かたみの扇より、猶裏表あるものは、人心なりけるぞや。あふぎとはそらごとや。逢はでぞ戀は添ふものを、逢はでぞ戀は添ふものを。

ワキ詞「いかに誰かある、あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ。トヨ詞「いかに狂女、あの御輿の内より、狂女のもちたる扇御覽じたきとの御事にて候。まゐらせられ候へ。シテ詞「是は人のかたみなれば、身を離さでもちたる扇なれども、謡形身こそ今はあだなれ是なくは、忘るゝ隙もあらまし物をと、思へどもさすが又、添ふ心地するをり〳〵は、扇とる間も惜きものを、人に見する事あらじ。

ロンギ地謡「こなたにも、忘れがたみの言の葉を、磐手の杜の下蹶蹈、色に出ですはそれぞとも、見てこそ知らめこの扇シテ謡「見てはさて、何の爲ぞと夕暮の、月をいだせる扇の繪

の、かくばかり問ひ給ふは、何の御爲なるらん。地謡何ともよしや白露の、草の野上の旅寢せし、契の秋は如何ならん。シテ謡野上とは、野上とは、東路の、末の松山波こえて歸らざりし人やらん。地謡末の松山たつ波の、何か恨みん契りおく、シテ謡形見の扇そなたにも、地謡身にそへ持ちしこの扇、シテ謡與のうちより、地謡取り出せば、折節黄昏に、ほのほの見れば夕顔の、花をかきたる扇なり。此上は惟光に、紙燭めして、ありつる扇、御覽ぜよ、たがひにそれぞと知られ、白雪の扇のつまのかたみこそ妹背の中の情なれ。妹背の中の情なれ。

黄昏にはのゝ〳〵みえし云々―源氏物語夕顔の巻の故事を引く

鵜飼

梗概　甲斐國石和川は殺生禁斷の場所なるに、夜毎に忍びて鵜を使ふ漁夫あり。里人之を捕へて水に沈め擧んぬ。其の亡靈たま〳〵日蓮上人の囘向を受け、成佛す。（五番目）

シテ　閻王（前は鵜使の體）
ワキ　日蓮上人　ツレ　從僧

ワキ詞「是は安房の清澄より出でたる僧にて候。我未だ甲斐國を見ず候程に、此度甲斐國行脚と志して候。サシ謡行末いつと白波の、安房の清澄立ち出でて、六浦のわたり鎌倉山、ワキ二人上歌謡「やつれはてぬる旅姿、やつれはてぬる旅姿、捨つる身なれば恥ぢられず。一夜假寐の草莚、鐘を枕の上に聞く、都留の郡の朝立つも、日たけて越ゆる山道を、過ぎて石和に著きにけり。過ぎて石和に著きにけり。

シテ一聲謡「鵜舟にともす篝火の、のちの闇路を如何にせん。サシ實にや世の中を、憂と思は

清澄―清澄寺　日蓮上人の師の房
六浦―武藏金澤
都留の郡―甲斐
石和―甲斐山梨郡

遊子伯陽一夫を遊子といひ婦を伯陽といふ共に月を愛し偕老を契る後死して天星となる

ば捨つべきに、其心更に夏河に、鵜使ふ事の面白さに、殺生をするはかなさよ。詞傳へ聞く遊子伯陽は、月に誓つて契をなし、夫婦二つの星となる。謡今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲み給ふに、我はそれには引きかへ、月の夜頃を厭ひ、闇になる夜を悦べば、

下歌 鵜舟にともす篝火の、消えて闇こそ悲しけれ。上歌つたなかりける身の業と、つたなかりける身の業と、今は先非を悔ゆれども、かひも浪間に鵜舟漕ぐ、是程惜しめども叶はぬ命つがんとて、營む業の物憂さよ。營む業の物憂さよ。

シテ詞「いつもの如く御堂に上り鵜を休めうずるにて候。や、是は往來の人の御入り候よ。

ワキ詞「さん候。往來の僧にて候が、里にて宿を借り候へば、禁制の由申し候程に、さて此御堂に泊りて候。シテ詞「實に〳〵里にて御宿參らせうずる者は覺えず候。ワキ詞「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。シテ詞「さん候是は鵜使にて候が、いつも月の程は此御堂に休らひ、月入りて鵜を使ひ候。ワキ詞「さては苦しからぬ人にて候ぞや。見申せば早拔群に年長け給ひて候が、かょる殺生の業勿體なく候。あはれ此業を御とまりあつて、餘の業にて身

命を御つぎ候へかし。シテ詞仰せ尤もにて候へども、若年より此業にて身命を扶かり候程に、今更止まつゝべうもなく候。ワキツレ詞如何に申し候。此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三箇年前に、此河下岩落と申す所を通り候ひしに、かやうの鵜使に行き逢ひ候程に、科の中の殺生の由を申して候へは、實にもとや思ひけん、我が家に連れて歸り。一夜けしからず攝して候ひしよ。シテ詞さては其時の御僧にて渡り候か、ワキツレ詞さん候其時の僧にて候。シテ詞なうその鵜使こそ空しくなりて候へ。ワキ詞それは何故空くなりて候ぞ。シテ詞恥しながら此業にて空くなりて候。其時の有樣語つて聞かせ申し候べし、跡を弔うて御やり候へ。ワキ詞心得申し候。シテ詞抑此石和河と申すは、上下三里が間は堅く殺生禁斷の所なり。今仰せ候岩落邊に鵜使は多し、夜な〳〵此所に忍び上つて鵜を使ふ。惡き者のしわざかな、彼を見顯はさんと計みしに、それをば夢にも知らずして、又或る夜忍び上つて鵜を使ふ。狙ふ人々ばつと寄り、一殺多生の理にまかせ、彼を殺せと言ひあへり。誠其時左右の手を合せ、かゝる殺生禁斷の所とも知らず候。向後の事をこ

科の中の云々―殺生は佛敎にては最も重き戒とす

一殺多生―一を殺して多を助くる意

そ心得候べけれとて、手をあはせ歎き悲しめども、助くる人も波の底に、屍にし給へば、叫べど聲が出でばこそ。詞其鵜使の亡者にて候。ワキ詞言語道斷の事にて候。さらば罪障懺悔に、業力の鵜を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候べし。シテ詞あら有難や候。さらば業力の鵜を使うて御目にかけ候べし。跡を弔うて給はり候へ。ワキ詞心得申し候。

シテ詞既に此夜も更け過ぎて、鵜使ふ頃にもなりしかば、いざ業力の鵜を使はん。ワキ謠是は他國の物語、死したる人の業により、かく苦みの憂き業を、今見る事の不思議さよ。シテ詞しめる松明ふり立てよ、ワキ謠藤の衣の玉襷、シテ詞鵜籠を開き取り出し、ワキ謠島つ巢おろし荒鵜ども、シテ詞此河波にばつと放せば、地謠面白の有樣や　底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひあげ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後世も、忘れはてゝ面白や。下瀨漲る水の淀ならば、生簀の鯉やのぼらん。玉島河にあらねども、小鮎さばしるせゞらぎに、かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の、燃えても影の

他國―拾葉抄に韃靼かと疑へり

玉島河―神功皇后肥前松浦玉島川に鮎を釣り給ふ故事あり

暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ。鵜舟の篝影消えて、闇路に歸る此身の、名殘惜しさを如何にせん。名殘惜しさを如何にせん。（中入）

ワキ上歌謡「河瀬の石を拾ひ上げ、河瀬の石を拾ひ上げ、妙なる法の御經を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔はゞ、などかは浮まざるべき。などかは浮まざるべき。

後シテ謡「それ地獄遠きにあらず、眼前の境界、惡鬼外になし。抑〳〵彼者、若年の昔より、詞江河に漁つて其罪おびたゞし。されば鐵札數を盡し、金紙をよごす事もなく、謡無間の底に墮罪すべかつしを、一僧一宿の功力に引かれ、急ぎ佛所に送らんと、惡鬼心を和らげて、鵜舟を弘誓の船に爲し、謡法華の御法の助舟、篝火も浮むけしきかな。地謡「迷の多き浮雲も、シテ謡「實相の風あらく吹いて、地謡「千里が外も雲はれて、眞如の月や出でぬらん。

上ロンギ地謡「有難の御事や。奈落に沈む惡人を、佛所に送り給ふなる、其瑞相のあらたさよ。

シテ謡「法華は利益深き故、魔道に沈む群類を、救はん爲に來りたり。地謡「實に有難き誓か

妙なる法―妙法蓮華經のこと

鐵札云々―閻魔王宮にて重罪の者を鐵の札に記し善人を金の札に記すと云ふ

無間―阿鼻地獄のこと

群類―總ての生類

な。妙の一字はさて如何に。シテ謡それは褒美の詞にて、妙なる法と說かれたり。地謡經とはなどや名づくらん。シテ謡それ聖教の都名にて、地謡二つもなく、シテ謡三つもなく、地謡「唯一乘の德によりて、奈落に沈みはてよ、浮みがたき惡人の、佛果を得ん事は、此經の力ならずや。サリこれを見彼を聞く時は、是を見彼を聞く時は、たとひ惡人なりとても、慈悲の心を先として、僧會を供養するならば、其結緣に引かれつよ、佛果菩提に至るべし。實に往來利益こそ、他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

往來利益―如來出世の利益

内二

難波

梗概

古今集の序に和歌の六義を説く。曰く「そも〳〵歌のさま六つなり。唐のうたにもかくぞあるべき。その六くさの一つにはそへ歌、大さゝぎの御門をそへたてまつれる歌。難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」とあるによりて作る。そへ歌は詩の六義の諷に當る。この花は梅なり。卽ちこの歌王仁の詠めるなりと傳ふるにより王仁を出し、この花の歌よりして開耶姫をも出す。かくて御代をことほぐ意をあらはす。祝言能なり。（脇能）

シテ　王仁（前は老翁）　ツレ　男　ツレ　木華開耶姫

ワキ　臣下

ワキ三人次第謡「山も霞みて浦の春、山も霞みて浦の春。波風靜かなりけり。ワキ詞「抑是は當今

風莫の濱―紀伊吹上の濱―同國紀路の關―雄の山にありたりと言ふ

長柄の橋―云々古今集の序にある詞

春日野に云々―下句覗ふ心は神ぞしるらん古今集の歌

に仕へ奉る臣下なり。我三熊野を信じ、毎年年籠仕り候。此度は、所願成就し、年歸る春にも成り候へば、唯今都に下向仕り候。ワキ三人道行謠春立つや、實にも長閑けき風莫の、實にも長閑けき風莫の、濱の眞砂も吹上の、浦傳ひして行く程に、早くも紀路の關越えて、是も都か津の國の、難波の里に著きにけり。難波の里に著きにけり。シテ、ツレ一聲謠君が代の、長柄の橋も造るなり。難波の春も幾久し。ツレ謠雪にも梅の冬籠、シテ、ツレ謠今は春べのけしきかな。シテサシ謠それ天長く地久くして、神代の風長閑に傳はり、シテ、ツレ謠皇の賢き御代の道廣く、國を惠み民を撫でて、四方に治まる八洲の波、靜に照す日の本の、影ゆたかなる時とかや。下歌春日野に、若菜摘みつゝ萬代を、上歌祝ふなる、心ぞしるき曇りなき、心ぞしるき曇りなき、天つ日嗣の御調物、運ぶ巻や都路の直なる御代を仰がんと、關の戸さゝで千里まで、普く照らす日影かな。普く照らす日影かな。

ワキ詞如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞こなたの事にて候か何事にて候ぞ。

ワキ詞「不思議やな諸木こそ多き中に、是なる梅の木蔭を立ち去らずして、蔭を清め賞翫し給ふ事不審なり。若し此梅は名木にて候か。シテ詞「御姿を見奉れば、都の人にて御座候が、此難波の浦に於て、色異なる梅花を御覧じて、名木かとの御尋ねは、御心なきやうにこそ候へ。ツレ謡「それ大方春ののの花、木々の盛は多けれども、花の中にも始めなれば、梅花を花の兄ともいへり。シテ詞「其上梅の名所々々〳〵國々所は多けれども、六義の始のそへ歌にも、難波の梅こそ詠まれたれ。ツレ謡「御代も開けし栄花といひ、シテ詞「あまねき花の嘉例と云ひ、シテ、ツレ謡「とにもかくにも津の國の、こや都路の難波津に、名を得て咲くやこの花を、名木かとの御尋ねは、事新しき御諚かな。ワキ詞「實に〳〵難波の梅の事、名木やらんと尋ねしは、愚なりける問事かな。然れば歌にも難波津に、咲くやこの花冬ごもり、今は春べと咲くやこの、花の春冬かけてよめる、謡歌の心は何如なるぞ。シテ詞「それこそ帝をそへ歌の　心詞は顯はれたれ。難波の御子は皇子ながら、未だ位に即き給はねば、冬咲く梅の花の如し。ワキ謡「御即位ありて難波の君の、位に備はり給ひし時は、シテ詞「今

難波の御子―仁徳天皇

こそ時の花の如く、ワキ謡「天下の春を知ろしめせば、シテ謡「今は春べと咲くやこの、ワキ謡「花の盛は大鷦鷯の、シテ謡「帝を花にそへ歌の、ワキ謡「風も治まり、シテ謡「立つ波も、上歌地謡「難波津に、咲くやこの花冬ごもり、咲くやこの花冬ごもり、今は春べに匂ひ來て、吹けども梅の風、枝を鳴らさぬ御代とかや、實にや津の國の、なにはの事に至るまで、豐かなる世の例こそ、實に道廣き治めなれ。實に道廣き治めなれ。

クリ地謡「抑難波津の歌は帝の御はじめ、又淺香山の詞は、采女の土器とりぐ〳〵なり。シテ、ツレ謡「昔唐國の堯舜の御代にも越えつべし。地謡「萬機の政おだやかにして、慈悲の波四海に普く、治めざるに平なり。シテ謡「君君たれば臣も亦、地謡「水よく船を浮むとかや。

クセ高き屋に、登りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけりと、叡慮にかけまくも、かたじけなくぞ聞えける。然れば此君の、代々にためしを引く事も、實に有難き詔、國々に普く、三年の御調ゆるされし、其年月も極まれば、濱の眞砂の數積りて、雪は豐年の御調物、ゆるす故にや中々、いやましに運ぶ御寶の、千秋萬歲の、千箱の玉を奉る。

難波津の歌は云云—古今集序に「云々」
淺香山の詞—「淺香山かげさへみゆる山の井の淺き心を我思はなくに」
水よく舟を浮む—荀子に「君者舟也庶人者水也水則載舟舟水則覆舟矣」
高き屋に—此歌新古今集に仁德

の御製として出づ

然れば普き御心の一此のわたり古今集序ゝより文句を綴く

シテ謡「然れば普き御心の、地謡「いつくしみ深うして、八洲の外まで波もなく、廣き御恵、筑波山の蔭よりも、茂き御蔭は大君の、國なれば土も木も、榮え榮うる津の國の、難波の梅の名にしおふ、匂ひも四方に普く、一花ひらくれば天下皆、春なれや萬代の、なほ安全ぞめでたき。

ロンギ地謡「實に萬代の春の花、實に萬代の春の花、榮え久しき難波津の、昔語ぞ面白き。

シテ謡「實に名にし負ふ難波津に、鳥の一聲をりしもに、鳴く鶯の春の曲、春鶯囀を奏せん。地謡「不思議や御身誰なれば、かく心ある花の曲、舞樂を奏し給ふべき。ツレ謡「我は知らずや此梅の、春年々の花の精、地謡「今一人の老人は、シテ謡「今ぞ顯はす難波津に、地謡「唉くやこの花と詠じつゝ、位をすゝめ申せし、百濟國の王仁なれや。今もこの花に戲れ、百囀の聲立て、春の鶯の舞の曲、夜もすがら慰め申すべしや。下臥して待ち給へ。花の下ぶしに待ち給へ。（中入）

暮靄嚠喨―樂の名

ワキ三人上歌謡「見て暮す、花の下臥更くる夜の、花の下臥更くる夜の、月影ともに靜なる、

けしきに染て音樂の、花に聞ゆる不思議さよ。花に聞ゆる不思議さよ。

後シテ謡「誰かいひし、春の色は、東より來るといへども、南枝花初めて開く。こゝは所も西の海に、向ふ難波の春の夜の、月雪もすむ浦の波、よるの舞樂は面白や。夢ばし覺し給ふなよ。ツレ天女謡「是は難波の浦に年を經へて、開くる代々の惠を受くる、木花開耶姫の神靈なり。シテ謡「我は又百濟國より此國に渡り、君をあがめ國を守る。王仁と云つし相人なり。地謡「むかし仁德の御宇には、御代の鏡の影をうつし、シテ謡「治まる御代の榮花をなしょも、地謡「この花の匂ひ、シテ謡「又は開くる言の葉の綠、地謡「難波の事か法ならぬ、遊び戲れいろ〳〵の舞樂面白や。（天女舞）ツレ天女謡「梅が枝に來居る鶯春かけて、シテ謡「鳴けども雪は、古き鼓の苦むして、打ち鳴らす、打ち鳴らす人もなければ君が代に、地謡「懸けし鼓も、シテ謡「時守の眠り、地謡「覺むるは難波の、シテ謡「鐘も響き、地謡「浦は潮の、シテ謡「波の聲々、地謡「入江の松風、シテ謡「村蔦の葉音、地謡「いづれを聞くも悅びの、諫鼓苦むし、難波の烏も、驚かぬ御代なり。有難や。（舞）

ゐひしー卯月本いつしとあり

木花開耶姫ー大山祇神の御女

梅が枝に云々ー下句「鳴けどもまだ雪はふりつゝ」古今集の歌

諫鼓云々ー江相公詩「刑錯誰朽鑒空去、諫鼓苔深鳥不驚」

ロンギ地謡」あらおもしろの音樂や、時の調子にかたどりて、春鶯囀の樂をば、シテ謡」春風と諸共に、花を散らしてどうと打つ。地謡」秋風樂は如何にや。シテ謡」秋の風もろ共に、波を響かしどうと打つ。地謡」萬歳樂は、シテ謡」よろづ打つ。地謡」青海波とは青海の、シテ謡」波立て打つは採桑老。地謡」抜頭の曲は、シテ謡」かへり打つ、地謡」入日を招きかへす手に、入日を招きかへす手に、今の太鼓は波なれば、よりては打ち返りては打ち、此音樂に引かれつゝ聖人御代に又出で、天下を守り治むる、天下を守り治むる、萬歳樂ぞめでたき。

秋風樂、萬歳樂、青海波、採桑老、抜頭―皆樂の名

萬歳樂ぞめでたき。

兼平

概　　梗

今井四郎兼平は木曾義仲の郎黨なり。武勇最も人に勝る。諸方の合戰に高名せずと云ふ事無し。壽永三年正月粟津の合戰に主君義仲討たれ、兼平亦殉ふ。事は平家物語にあり。この軍物語を材料としたるは本曲なり。初に舟人を出して湖上の景勝を語らしめ、後兼平の亡靈を出して修羅の物語をなさしむ。（二番目）

シテ　兼平（前は舟人）　ワキ　僧

ワキ次第謡　始めて旅を信濃路や、始めて旅を信濃路や、木曾の行方を尋ねん。詞　是は木曾の山家より出でたる僧にて候。さても木曾殿は、江州粟津原にて果て給ひたる由承り及び候程に、彼の御跡を弔ひ申さばやと思ひ。唯今粟津原へと急ぎ候。行道謡　信濃路や、木曾の棧名にしおふ、木曾の棧名にしおふ、其跡とふや道のべの、草の蔭野の假枕、夜を重ねつゝ日を添へて、行けば程なく近江路や、矢橋の浦に著きにけり。矢橋の浦に著

きにけり。

シテ　聖謡「世の業の、憂きを身に積む柴舟や、焚かぬ前よりこがるらん。ワキ謡「なう〳〵其船に便船申さうなう。シテ謡「是は山田矢橋の渡舟にてもなし。御覧候へ柴積みたる舟にて候程に、便船は叶ひ候まじ。ワキ謡「此方も柴舟と見申して候へども、折節渡りに舟もなし、出家の事にて候へば別の御利益に、謡舟を渡してたび給へ。シテ謡「實にも〳〵出家の御身なれば、詞餘の人にはかはり給ふべし。實に御經にも如渡得船、ワキ謡「船待ち得たる旅行の暮、シテ謡「かゝるをりにも近江の海の、シテ、ワキ謡「矢橋をわたる船ならば、それは旅人の渡舟なり。上歌地謡「是は又浮世を渡る柴舟の、浮世を渡る柴舟の、ほされぬ袖も水馴棹の、見馴れぬ人なれど、法の人にてましませば、船をばいかで惜むべき。とく〳〵召され候へ。とく〳〵召され候へ。

ワキ謡「如何に船頭殿に申すべき事の候。見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候らん。御教へ候へ。シテ謡「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ、教へ申し候べし。ワキ謡「まづ向ひに

山田―近江

如渡得船―法華經藥王品の文句

當つて大山の見えて候は比叡山候ふか。シテ詞「さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社、茂りたる峯は八王子、戸津坂本の人家まで殘りなく見えて候。ワキ詞「さてあの比叡山は、王城より艮に當つて候よなう。シテ詞「中々の事それ我山は、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふのみならず謠一佛乘の嶺と申すは、傳へ聞く鷲の御山を象れり、又天台山と號するは、震旦の四明の洞をうつせり。詞傳敎大師桓武天皇と御心を一つにして、延曆年中の御草創、我が立つ杣と詠じ給ひし、謠根本中堂の山上まで、殘りなく見えて候。ワキ詞「さて〳〵大宮の御在所波止土濃とやらんも、あの坂本の內にて候か。シテ詞「さん候麓に當つて、少し木深き蔭の見えて候こそ、大宮の御在所波止土濃にて御入り候へ。ワキ詞「有難や一切衆生悉有佛性如來と聞く時は、我等が身までも賴もしうこそ候へ。シテ詞「仰せの如く佛衆生通ずる身なれば、御僧も我も隔てはあらじ。謠一佛乘の、ワキ謠「峰には遮那の梢を竝べ、シテ詞「麓に止觀の海を湛へ、ワキ謠「又戒定惠の三學を見せ、シテ謠「三塔と名づけ、ワキ謠「人は又、地謠「一念三千の機を現して、三千人の衆徒を置き、

山王二十一社―日吉神社は廿一社あり八王子はその一なり
一佛乘の嶺―比叡山のこと大成佛得脫を專要とするより一佛乘といふ
鷲の御山―天竺靈鷲山
我が立つ杣―傳敎大師の歌に「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ」
遮那―大日如來
戒定惠―戒律禪定智惠

三塔　東塔西塔
横川
七社―廿一社中の社

圓融の法も曇なき、月の横川も見えたりや。さて又麓はさゝ波や、志賀辛崎の一つ松、七社の神輿の、御幸の梢なるべし。さゝ波の水馴棹、こがれ行く程に、遠かりし向ひの浦波の、粟津の森は近くなりて、跡は遠きさゝ波の、昔ながらの山櫻は青葉にて、面影も夏山の、うつり行くや青海の、柴舟のしばゝ〳〵も、暇ぞ惜きさゝ波の、寄せよ〳〵磯際の、粟津に早く著きにけり。粟津に早く著きにけり。（中入）

ワキ上歌謡「露を片敷く草筵。露を片敷く草筵。日も暮れ夜にもなりしかば、粟津の原のあはれ世の、なきかげいざや弔はん。なきかげいざや弔はん。

後シテ一聲謡「白刃骨を碎く苦み、眼睛を破り、紅波楯を流す粧、胡籙に殘花を亂す。雲水の、粟津原の朝風に、地謡「閧つくり添ふ聲々に、シテ謡「修羅の巻は騒がしや。

ワキ謡「不思議やな粟津原の草枕に、甲冑を帶し見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。

シテ謡「愚と尋ね給ふものかな。御身是まで來り給ふも、我なき跡をとはん爲の、御志にてましまさずや。兼平是までまゐりたり。ワキ謡「今井四郎兼平は、今は此世に亡き人

御法の舟―佛力にて悟を得しむることを譬ふ

御腹召され―切腹のこと

なり。さては夢にて有るやらん。シテ詞「いや今見る夢のみか、現にも早水馴棹の、舟にて見みえし物語、早くも忘れたまへりや。ワキ謡「そもや舟にて見みえしとは、矢橋の浦の渡守の、シテ詞「其舟人こそ兼平が、現に見みえし姿なれ。ワキ謡「さればこそ始より、樣ある人と見えつるが、さては昨日の舟人は、シテ謡「舟人にもあらず、ワキ謡「漁夫にも、シテ謡「あらぬ、上歌地謡「武士の、矢橋の浦の渡守、矢橋の浦の渡守と、見えしは我ぞかし。同じくは此舟を、御法の舟に引きかへて、我を又彼岸に、渡してたばせ給へや

クリ地謡「實にや有爲生死の巷、來つて去る事早し、老少もつて前後不同、夢幻泡影いづれならん。シテ、サシ謡「唯是槿花一日の榮、地謡「弓馬の家に澄む月の、僅に殘る兵の、七騎となりて木曾殿は、此近江路に下り給ふ。シテ謡「兼平瀬田より參りあひて、地謡「又三百餘騎になりぬ。シテ謡「其後合戰度々にて、又主從二騎に討ちなさる。地謡「今は力なし、あの松原に落ち行きて、御腹召され候へと、兼平勸め申せば、心細くも主從二騎、粟津の松原さして落ち給ふ。クセ兼平申すやう、後より御敵、大勢にて追つかけたり、防矢仕

らんとて、駒の手綱を返せば、木曾殿御詫ありけるは、多くの敵を遁れしも、汝一所にならばやの、所存ありつゝ故ぞとて、同く返し給へば、兼平又申すやう、こは口惜き御詫かな、さすがに木曾殿の、人手にかゝり給はん事、末代の御恥辱、唯御自害有るべし今井もやがて參らんとの、兼平に諫められ、又引つ返し落ち給ふ。さて其後に木曾殿は、心細くも只一騎、粟津原のあなたなる、松原さして落ち給ふ。シテ謡「頃は正月の末つ方、地謡「春とゝきながらさえかへり、比叡の山風の、雲行く空も呉織、あやしや通路の、する〳〵白雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果、せん方もなくあきれはて、此まゝ自害せばやとて、刀に手を掛け給ひしが、さるにても兼平が、行方如何にと遠方の、跡を見かへり給へば、シテ謡「何處より來りけん、地謡「今ぞ命は槻弓の、矢一つ來つて、内兜にからりと射る。痛手にてましませば、たまりもあへず馬上より、遠近の土となる、處はこゝぞ我よりも、主君の御跡を、まづ弔ひてたび給へ。ロンギ實にいたはしき物語り、兼平の御最期は何

呉織―あやしといふ爲めの序　呉…暮れ　あやし…鈍…怪し

とかならせ給ひける。シテ謡兼平はかくぞとも、知らで戦ぶ其隙にも、御最期の御供を、心にかくるばかりなり地謡さて其後に思はずも、敵の方に聲立てて、シテ謡木曾殿討たれ給ひぬと、地謡呼ばはる聲を聞きしより、シテ謡今は何をか期すべきと、地謡思ひ定めて兼平は、シテ謡是ぞ最期の廣言と、地謡鐙踏んばり、シテ謡大音上げ、木曾殿の御内に今非四郎、地謡兼平と名乗りかけて、大勢に割つて入れば、もとより一騎當千の、祕術を現し大勢を、粟津の汀に追つつめて、磯打つ波のまくり切り、蜘蛛手十文字に、撃ち破り駈け通つて、其後自害の手本よとて、太刀を銜はへつよ、逆さまに落ちて、つなぬかれ失せにけり。兼平が最期の仕儀、目を驚かす有様なり。目を驚かす有様なり、

千手

梗概　三位中將重衡、一の谷にて捕はれ、鎌倉に下り、狩野介宗茂に預けらる。賴朝千手の前といふ女をして接伴せしむ。この事亦平家物語に基く。（鑓　物）

シテ　千手　ツレ　重衡
ワキ　宗茂

相國―太政大臣清盛をさす

宇越―駿河

ワキ詞「これは鎌倉殿の御内に、狩野介宗茂にて候。さても相國の御子重衡卿は、此度一谷の合戰に生捕られ給ひ候を、某預り申して候。朝敵の御事とは申しながら、賴朝いたはしく思し召され、よく勞はり申せとの御事にて、昨日も千手の前を遣はされて候。かの千手の前と申すは、手越の長が娘にて候が、優にやさしく候とて、御身ちかく召し使はれ候を遣され候ふ事、まことに有難き御志にて御座候。今日はまた雨中御つれづれ、酒を勸め申さばやと存じ候。

シテ謡「琴の音そへて音づるよ、琴の音そへて音づるよ、これや東屋なるらん。サシそれ春の花の樹頭に榮え、秋の月の水底に沈むも、世のはかなさの有樣を、見てもあはれや重衡の、その古は雲の上、かけても知らぬ身のゆくへ、波に漂ひ舟に浮き、さらばよるべのよそならで、有りしにかへる有樣かな。下歌都にだにも留めぬ、御涙なるを痛はしや。上歌陸奥の、しのぶに堪へぬ雨の音、しのぶに堪へぬ雨の音、降りすさみたる折しもは、思ひの露もちりぐに、心の花もしをくと、しをるゝ袖の色までも、今日の夕のたぐひかな。今日の夕のたぐひかな。

シテ詞「いかに案内申し候はん。ワキ詞「誰にて渡り候ぞ。シテ詞「千手の前が參りたる由、それ御申し候へ。ワキ詞「暫く御待ち候へ。御機嫌を以て申さうずるにて候。

ツレサシ謡「身はこれ槿花一日の榮、命は蜉蝣のさだめなきに似たり。心は蘇武が胡國に囚はれ、岩窟の内に籠められて、君邊を忘れぬ志、それはやうりが謀にて、敵を亡ぼし舊里に歸る。我はいつとなく敵陣に籠められて、縲紲の責を受くる、知らず今日もや限

脇武―眞の臣匈土に使して囚はれ具に辛酸を嘗め後歸り來るやうりー匿利の亂なちん

ならん。あら定めなや候。

ワキ詞「いかに申し上げ候。千手の御参りにて候。ツレ詞「唯今は何のためにて候ぞ。よし〳〵何事にてもあれ、今日の對面は叶ふまじきと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。いかに申し候。御参りの由申して候へば、何と思し召し候やらん、今日の御對面は叶ふまじき由仰せ出だされて候。シテ詞「これも私にあらず、頼朝よりの御諚にて、琵琶琴持たせて参りたり、此由かさねて御申し候へ。ワキ詞「御諚の趣申して候へば、これも私にあらず、頼朝よりの御諚にて、琵琶琴持たせて参りたり。よし〳〵御憚はさる事なれども、謡ただこなたへと請ずれば、シテ謡「その時千手立ちよりて、上歌地謡「妻戸をきりゝと押し開く、御簾の追風にほひ來る、花の都人に、恥ながら見みえん。けにや東の果しまで、人の心の奥深き、その情こそ都なれ。花の春紅葉の秋、たが思出となりぬらん。

ツレ詞「いかに千手の前、昨日あからさまに申しつる、出家の御暇の事聞かまほしうこそ候へ。シテ詞「さん候其由申して候へば、朝敵の御事なるを、私として出家を許し申さ

ん事、思も寄らずとこそ候ひつれ。謡わらはも御心の内おしはかり参らせて　いかはと細々と申して候へども、かひなき出家の御望み、痛はしうこそ候へ。ッレ謡くちをしや我一谷にて如何にもなるべき身の生捕られ、今は東のはてまでも、かやうに面をさらす事、前世の報と云ひながら、謡又思はずも父命により、佛像を亡ぼし人壽を絶ちし、現當の罪を果すこと、前業よりなほ恥うこそ候へ。シテ謡けに〳〵是は御理さりながら、かかる例は古今に、多き習ひと聞くものを、獨となく歎き給ひそとよ。ッレ謡けによく慰めたまへども、たぐひはあらじ憂き身のはて、シテ謡昨日は都の花と榮え、ッレ謡今日は東の春に來て、シテ謡移り變れる、ッレ謡身の程を、上歌地謡思へたど、世は空蟬の唐衣、きつゝなれにしつましある、都の雲居を立ち離れ、はるゞ〳〵來ぬる旅をしぞ思ふ衰への、憂き身の果ぞ悲しき。水ゆく川の八橋や、蜘蛛手に物を思へとは、かけぬ情の中々に、馴るゝや恨なるらん。馴るゝや恨なるらん。

ワキ謡今日の雨中の夕の空、御つれづれを慰めんと、樽を抱きて參りつゝ、既に酒宴を始

佛像を亡ぼし云云―重衡南都を攻め東大寺等を燔きしをいふ
現當―現在當來、この世後の世

唐衣―きつゝなれにしつましあれば遥々きぬる旅をしぞ思ふ、在原業平の歌
八橋―三河國杜若の名所、伊勢物語に見ゆ

めんとす。シテ謡千手も此よし見るよりも、御酌に立ちて重衡の、御前にこそ參りけれ。ツレ謡今はいつしか憚の、心ならずに思はずも、手まづ遮る盃の、心一つに思ふ思ひ。ワキ謡それ〳〵いかに何にても、おん肴にと勸むれば、シテ謡その時千手とりあへず、羅綺の重衣たる、情なき事を機婦に妬む、シテ、ツレ、ワキ三人謡唯今詠じたまふ朗詠は、忝なくも北野の御作、此詩を詠ぜば聞く人までも、守るべしとの御誓なり。ツレ謡さりながら重衡は、今生の望なし。三人謡たゞ來世の便こそ、聞かまほしけれと宣へば、シテ謡わらは仰せを承り、十惡といふとも引摺すと、地謡朗詠してぞ奏でける。

シテ謡さてもかの重衡は、相國のすゑの御子とは申せども、地謡兄弟にも勝れ一門にも越えて、父母の寵愛かぎりなし。シテ、サシ謡されども時うつり、平家の運命こと〴〵く、月の夜すがら聲たてよ、なくや牡鹿の津の國の、生田の河に身を捨てよ、防ぎ戰ふと申せども、シテ謡森の下風木の葉の露、地謡落されけるこそあはれなれ。クセいまは梓弓、よし力なし重衡も、引かんとするにいづかたも、網を置きたる如くにて、遁れかねたる淀鯉

北野―菅家

牡鹿の一角の緣により津の國の序とす

の、生捕られつゝありて憂き、身をうろくづの其儘に、沈みは果てずして、名をこそ流せ川越の、重房が手に渡り、心の外の都入。シテ謡「げにや世の中は、地謡「定めなきかな神無月、時雨降りおく奈良坂や、衆徒の手に渡りなば、とにもかくにも果てはせで、又鎌倉に渡さるゝよ。こゝは何處ぞ八橋の、雲居の都いつか又、三河國や遠江、足柄箱根うち過ぎて、明けもやすらん星月夜、鎌倉山に入りしかば、憂き限ぞと思ひしに、馴るればこゝも忍音に、あはれ昔を思妻の、燈暗うしては、敷行慮氏が涙の、雨さへ頻る夜の空。シテ謡「四面に楚歌の聲の内、地謡「何とか返す舞の袖、思ひの色にや出でぬらん、涙を添へて廻らすも、雪の古枝の枯れてだに、花さく千手の袖ならば、重ねていざや返さん忘れめや、（序ノ舞）シテ謡「一樹の陰や一河の水、地謡「皆これ他生の縁といふ、白拍子をぞ諭ひける。ツレ謡「其時重衡輿に乘じ、地謡「其時重衡輿に乘じ、琵琶を引きよせ彈じ給へば、又玉琴の緒合に、シテ謡「合せて聞けば、地謡「峰の松風かよひ來にけり。琴を枕の短夜のうたゝね、夢も程なく東雲もほの〴〵と、明けわたる空の、シテ謡「あさまにやなりぬべき。

煙噎うして云々―朗詠集の詩句 項羽の故事

緒合―合奏の意

地謡「あさまにやなりなんと、酒宴を止め給ふ、おん心の内ぞいたはしき。

地謡「かくて重衡勅により、かくて重衡勅により、また都にとありしかば、武士守護し出で給へば、シテ謡「千手も泣く〳〵立ち出で、地謡「なに中々の憂き契はやきぬ〳〵に引き離るゝ、袖と袖との露涙、げに重衡の有様、目もあてられぬ氣色かな。目もあてられぬ氣色かな。

卒都婆小町

梗概

弘法大師の作とも傳へらるゝ玉造小町壯衰書といふ書に、小町といふ美女の老衰の狀を記したるに據り、小野小町と深草少將との傳說を加味して作れり。初め小町が卒都婆に腰打掛けたるより、僧と問答することあり、後少將の靈のつきそひて戀物語をなす。かくて佛果を得る趣を示す。老女物として重き曲柄なり。

シテ　小野小町　　ワキ　僧

ツレ　僧

次ワキ二人謠「山は淺きに隱れがの、山は淺きに隱れがの、深きや心なるらん。ワキ詞「これは高野山より出でたる僧にて候。我このたび都にのぼらばやと思ひ候。サシ謠それ前佛は既に去り、後佛はいまだ世に出でず、ワキ二人謠「夢の中間に生れ來て、何を現と思ふべき。たまたま受け難き人身を受け、逢ひ難き如來の佛教に逢ひ奉る事、これぞ悟の種なると、思

高野山より出でたる僧―弘法大師と見るべし
前佛―釋迦
後佛―彌勒
中間―今生

ふ心もひとへなる、墨の衣に身をなして、上歌うまれぬさきの身を知れば、うまれぬさきの身を知れば、憐むべき親もなし。親のなければ我ために、心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず、野に臥し山に泊る身の、これぞ誠のすみかなる。これぞ誠のすみかなる。

シテ次第謡身は浮草をさそふ水、身は浮草をさそふ水、なきこそかなしかりけれ。サシあはれやげにいにしへは、驕慢もつとも甚しう翡翠の簪は婀娜とたをやかにして、楊柳の春の風になびくが如し。また鶯舌の囀は、露を含める糸萩の、かごとばかりに散りそむる、花よりもなほめづらしや。今は民間賤の女にさへ穢なまれ、諸人に恥をさらし、嬉からぬ月日身につもつて、百年の姥となりて候。下歌都は人目つよましや、もしもそれとか夕まぐれ、上歌月もろともに出でて行く、月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大内山の山守も、かょる憂き身はよも咎めじ、木がくれてよしなや。鳥羽の戀塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎゆく人は誰やらん。漕ぎゆく人は誰やらん。詞あまりに苦しう候程

身は浮草をー「わびぬれば身を浮草のねをたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」驕慢云々ー玉造小町壯衰書の文句による

に、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候。ワキ詞「なうはや日の暮れて候。道を急がうずるにて候。や、これなる乞食の腰かけたるは、正しく卒都婆にて候。教化して除うずるにて候。いかにこれなる乞丐人、お事の腰かけたるは、かたじけなくも佛體色性の卒都婆にては無きか。そこ立ち退きて餘の所に息み候へ。シテ詞「佛體色性のかたじけなきとは宣へども、是ほどに文字も見えず、刻める像もなし、たゞ朽木とこそ見えたれ。ワキ謡「たとひ深山の朽木なりとも、花咲きし木はかくれもなし。詞いはんや佛體に刻める木、などかしるしのなかるべき。シテ謡「我も賤しき埋木なれども、心の花の未有れば、手向になどかならざらん。詞さて佛體たるべき謂は如何に。ワキツレ謡「それ卒都婆は金剛薩埵、假に出化して三摩耶形を行ひ給ふ。シテ詞「行ひなせる形は如何に。ワキ謡「地水火風空、シテ謡「五體五輪は人の體、何しに隔あるべきぞ。ワキツレ謡「形はそれに違はずとも、心功德は變るべし。シテ詞「さて卒都婆の功德は如何に。ワキ謡「一見卒都婆永離三惡道。シテ謡「一念發起菩提心、それも如何でか劣るべき。ワキツレ謡「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ。シテ謡「姿

佛體色性―佛體にひとしき意

金剛薩埵―金剛部諸尊の通號
三摩耶形―四種曼荼羅の一
地水火風空―五大といふ即ち人體の原質なりといふ
五體五輪―二肘二膝頭頂

が世をも厭はばこそ、心こそ厭へ。ワキ謡心なき身なればこそ、佛體をば知らざるらめ。シテ詞佛體と知ればこそ卒都婆には近づきたれ。ワキツレ謡さらばなと禮をばなさで敷きたるぞ。シテ謡とても臥したる此卒都婆、我も息むは苦いか。ワキ謡それは順縁にはづれたり。シテ詞逆縁なりと浮むべし。ワキツレ謡提婆が悪も、シテ詞觀音の慈悲、ワキ謡槃特が愚癡も、シテ詞文殊の智恵。ワキツレ謡悪と云ふも、シテ謡善なり。ワキ謡煩惱といふも、シテ謡菩提なり。ワキツレ謡菩提もと、シテ謡植木にあらず。ワキ謡明鏡また、シテ謡臺に無し。上歌地謡げに本來一物なき時は、佛も衆生も隔なし。もとより愚癡の凡夫を、救はん爲の方便の、深き誓ひの願なれば、逆縁なりと浮むべしと、ねんごろに申せば、眞に悟れる非人なりとて僧は頭を地につけて、三度禮し給へば、シテ謡我は此時力を得、なほ戯れの歌を詠む。極樂の内ならばこそ悪しからめ、そとは何かは苦しかるべき。地謡むつかしの僧の教化や。むつかしの僧の教化や。

ワキ詞さて御事は如何なる人ぞ名を御名のり候へ。シテ詞恥しながら名を名のり候べし。

菩提もと云々―傳燈錄「菩提本非樹心鏡亦非臺本來無一物何假拂塵埃」の文による

そとは何かは―外はと卒都婆とを言掛く

痛はしやな小町は云々ー以下又玉造小町壯衰書の文句に據る

これは出羽の郡司小野の良實が娘、小野の小町がなれる果にてさむらふなり。ツキ二人「痛はしやな小町は、さもいにしへは優女にて、花の貌輝き、桂の黛青うして、白粉を絕さず、羅綾の衣多うして、桂殿の間に餘りしぞかし。シテ「歌を詠み詩を作り、地「醉をすゝむる盃は、閑月袖に靜なり。まこと優なる有樣の、いつ其程に引きかへて、上歌頭には霜蓬をいたゞき、嬋妍たりし兩鬢も、肌に悴けて墨亂れ、艷々たりし雙蛾も、遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくも髪、斯かる思ひは有明の、影はづかしき我身かな。

百年に一年足らぬ云々ー伊勢物語の歌

ロンギ地「頸に懸けたる袋には、如何なる物を入れたるぞ。シテ「今日も命は知らねども、明日の飢を助けんと、粟豆の餉を袋に入れて持ちたるよ。地「後に負へる袋には、シテ「垢膩の垢づける衣あり。地「膚にかけたる簀には、シテ「白黑の田烏子あり。地「破れ簑、シテ「破笠、地「面ばかりも隱さねば、シテ「まして霜雪雨露、地「涙をだにも抑ふべき袂も袖もあらばこそ。今は路頭にさそらひ、往き來の人に物を乞ふ。乞ひ得ぬ時は惡心、また狂亂の心つきて、聲かはりけしからず。

シテ謡「なう物給べなう御僧なう。ワキ詞「何事ぞ。シテ詞「小町がもとへ通はうよなう。ワキ詞「おことこそ小町よ、何とて現なき事をば申すぞ。シテ詞「いや小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文、謡かきくれて降る五月雨の、詞空言なりとも一度の返事もなうて、謡いま百年になるが報うて、あら人戀しや。あら人こひしや。ワキ詞「人こひしいとは、さてお事には如何なる者のつきそひてあるぞ。シテ詞「小町に心を懸けし人は、多き中にも、殊に思ひ深草の四位の少將の、地謡「恨みの數のめぐり來て、車の榻に通はん。日は何時ぞ夕暮、月こそ友よ通路の、關守はありとも留まるまじや、出で立たん。シテ謡「淨衣の袴かいとつて、地謡「淨衣の袴かいとつて、立烏帽子を風折り、狩衣の袖をうちかついで、人目忍ぶの通路の、月にも行く暗にも行く、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪深し。シテ謡「軒の玉水とく〳〵と、地謡「行きてはかへり、かへりては行き、一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、豐の明の節會にも、逢はでぞ通ふ庭鳥の、時をもかへず曉の、榻のはしがき、百夜までと通ひて、九十九夜になりたり。シテ謡「あら苦し目まひや、

深草の四位の少將―本居内遠の小町考に良岑宗貞即ち僧正遍昭の事ならんと云へり

鵺の云々―鵺の鳴の羽がきもゝはがきの歌句を言ひかふ

地謡「胸くるしやと悲しみて、一夜を待たで死したりし、深草の少將の、その怨念が附き添ひて、かやうに物には狂はするぞや。これにつけても後の世を、願ふぞ眞なりける。沙を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を佛に手向けつゝ悟の道に入らうよ。悟の道に入らうよ。

紅葉狩

概　梗

平維茂は鎮守府将軍にして、一條天皇の御宇の人なり。曾て信州戸隠山にて鬼女を退治したりとの口碑によりて、此の曲成る。紅葉の景趣を以て文飾し、末段凄にして壯なり。（五番目）

シテ　鬼女（前は女）　ツレ　女（四人又は三人）

ワキ　平維茂　　トモ　従者（列卒大勢）

次第ツレ四人謡「時雨を急ぐ紅葉狩、時雨を急ぐ紅葉狩、ふかき山路を尋ねん。ツレ、サシ謡「是はこのあたりに住む女にて候。げにやながらへて浮世に住むとも今ははや、たれ白雲の八重雉、茂れる宿の淋しきに、人こそ見えね秋の來て、庭の白菊移ふ色も、うき身のたぐひと哀なり。シテ謡「あまり淋しき夕まぐれ、しぐるゝ空をながめつゝ、四方の梢もなつかしさに、ツレ下歌謡「伴ひ出づる道のべの、草葉の色も日に添ひて、上歌下紅葉、夜の間の

八重雉云々―拾遺集の歌末句秋は來にけり

谷河に云々―古今集の歌下句流れもあへぬ紅葉なりけり　渡らば錦―同集の歌「立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中やたえなん」　ぬれてや鹿の云云―新古今集の歌「下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてや獨鹿のなくらん」

露や染めつらん、夜の間の露や染めつらん、朝の原は昨日より、色深き紅を、分け行く方の山深み　けにや谷河に、風のかけたる柵は、流れもやらぬもみぢ葉を、渡らば錦中絶えんと、まづ木の本に立ち寄りて、四方の梢を眺めて、暫く休み給へや。ワキ謠「面白や頃は長月廿日あまり、四方の梢もいろ〳〵に、錦を色どる夕時雨、ぬれてや鹿のひとり鳴く、聲をしるべの狩場のすゑ、けに面白き景色かな。トモ大勢謠「明けぬとて、野邊より山に入る鹿の、跡吹き送る風の音に、駒の足並勇むなり。上歌大丈夫が、彌猛心の梓弓、彌猛心の梓弓、いる野の薄露分けて、行くへも遠き山陰の、鹿垣の道のさかしきに、落ちくる鹿の聲すなり。風のゆくへも心せよ。風のゆくへも心せよ。ワキ詞「如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あの山陰にあたつて人影の見え候は、如何なる者ぞ名を尋ねて來り候へ。トモ詞「畏つて候。名を尋ねて候へば、やごとなき上﨟の、幕うちまはし屏風を立て、酒宴半と見えて候程に、懇にたづねて候へば、名をば申さず、只さる御方とばかり申し候。ワキ詞「あら不思議や。此あたりにてさやうの人は思ひもよら

ず候。よし誰にてもあれ上臈の、道のほとりの紅葉狩、ことさら酒宴の半ならば、謡かたがた乗打叶ふまじと、上歌謡馬よりおりて沓をぬぎ、馬よりおりて沓をぬぎ、道を隔て山陰の、岩のかけぢを過ぎ給ふ、心づかひぞたぐひなき。心づかひぞたぐひなき。

シテ謡げにや數ならぬ身ほどの山の奥に來て、人は知らじと打ち解けて、ひとり眺むるもみぢ葉の、色見えけるか如何にせん。ワキ謡我は誰とも白眞弓、たどやごとなき御事に、恐れて忍ぶばかりなり。シテ謡忍ぶもぢずり誰ぞとも、知らせ給はぬ道のべの、たよりに立ち寄り給へかし。ワキ謡思ひよらずの御事や。何しに我をば留め給ふべきと、謡さらぬやうにて過ぎ行けば、シテ謡あら情なの御事や。一村雨の雨宿り、ワキ謡一樹の陰に、シテ謡立ち寄りて、地謡一河の流を酌む酒を、いかでか見捨て給ふべきと、恥しながらも袂にすがりとどむれば、さすが岩木にあらざれば、心よわくも立歸る、所は山路の菊の酒、何かは苦しかるべき。

クリ地謡げにや虎溪を出でしいにしへも、心ざしをば捨てがたき　人の情の盃の、深き

かけぢ―嶮路なり
身はどの山の―歌ならぬ身がか程の山奥に來ての義歟
岩木にあらざれば―文選に人非木石豈無感矣
虎溪を出して古も―三笑の故事

林間に云々―白樂天の詩句

竹の葉―酒のこと

塹（ず青苔云々―白樂天の詩句

豚り行く雲に嵐の云々―新古今集の歌末句、高城の山

契のためしとかや。シテ謠「林間に酒を煖て紅葉を焚くとかや。地謠「げに面白や所から、巖の上の苔筵、片敷く袖も紅葉衣の、くれなる深き顔ばせの、ワキ謠「此世の人とも思はれず、地謠「胸うち騒ぐばかりなり。クセさなきだに人心、亂るゝふしは竹の葉の、露ばかりだに受けじとは、思ひしかども盃に、向へばかはる心かな。されば佛も戒の、道はさまぐ〳〵多けれど、ことに飲酒を破りなば、邪婬妄語も諸共に、亂心の花かづら、かゝる姿はまた世にも、たぐひ嵐の山櫻、よその見る目も如何ならん。シテ謠「よしや思へば是とても、地謠「前世の契淺からぬ、深き情の色見えて、かゝる折しも道のべの、草葉の露のかごとをも、かけてぞ賴む行末を、契るもはかなき打ちつけに、人の心も白雲の、立ちわづらへる氣色かな。かくて時刻も移り行く　雲に嵐の聲すなり。散るか正木の葛城の、神の契の夜かけて、月の盃さす袖も　雪を廻す袂かな。塹へず紅葉、（中ノ舞）シテ謠「塹へず紅葉青苔の地、地謠「塹へず紅葉青苔の地、又これ涼風暮れゆく空に、雨うち濺ぐ夜嵐の、物凄しき山陰に、月待つほどのうたゝ寐に、かたしく袖も露深し。夢ばし覺まし給ふなよ。

あらたなりける夢の告―霊験ある瑞想

咸陽宮の烟―秦始皇帝の宮殿の兵火に罹れるをいふ　かぼく―枯木の訛ならん

夢ばし覺まし給ふなよ。（中入）

ワキ謡「あらあさましや我ながら、無明の酒の酔心、まどろむ隙もなき内に、あらたなりける夢の告と、地謡「驚く枕に雷火みだれ、天地もひゞき風遠近の、たづきも知らぬ山中に、覺束なしや恐しや、上歌不思議や今までありつる女、不思議や今までありつる女、とり〳〵化生の姿を現はし、或は巖に火焔を放ち、又は虚空に焔を降らし、咸陽宮の烟の中に　七尺の屏風の上に猶、あまりて其たけ一丈の鬼神の、角はかほく眼は日月、面を向くべきやうぞなき。

ワキ謡「維茂すこしも騒がずして　地謡「維茂すこしも騒ぎ給はず、南無や八幡大菩薩と、心に念じ、劍を抜いて待ちかけ給へば、微塵になさんと飛んでかゝるを、飛び違ひむずと組み、鬼神の眞中刺し通す所を、頭をつかんであがらんとするを、斬り拂ひたまへば、劍に恐れて巖へ上るを、引きおろし刺し通し、忽ち鬼神を従へ給ふ、威勢の程こそ恐しけれ。

内三

老松

梗概　菅公の遺跡なる太宰府安樂寺にて、老松の神靈現じ、梅松のめでたき謂れを示す事を作る。祝言に用ふる重き曲なり。（脇能）

シテ　老松の靈（前は翁）　ツレ　男

ワキ　梅津の某

北野―天滿宮

安樂寺―太宰府に在り菅公の廟所

ワキ次第謡けに治まれる四方の國、けに治まれる四方の國關の戸さゝで通はん。ワキ謡そもそも是は都の西、梅津の何某とは我事なり。われ北野を信じ、常に歩みを運び候所に、ある夜の靈夢に、我を信ぜば筑紫安樂寺に參詣まうせと、あらたに御靈夢を蒙りて候間、只今九州に下向仕り候。ワキ道行謡何事も、心にかなふ此時の、心にかなふこ

のときの、ためしもありや日の本の、國豊なる秋津洲の、波も音なき四つの海、高麗唐土も殘りなき、御調の道の末こゝに、安樂寺にも著きにけり。安樂寺にも著きにけり。シテ二人謡梅の花笠春も來て、縫ふてふ鳥の梢かな。ツレ謡松の葉色も時めきて、十返り深き綠かな。シテ、サシ謡風を逐つて密に開く、年の葉守の松の戸に、春をむかへて忽に、露ふ四方の草木まで、神の恵に靡くかと、春めきわたる盛かな。下歌歩みをはこぶ宮寺の、光のどけき春の日に、上歌松が根の、岩間をつたふ苔筵、岩間をつたふ苔筵、敷島の道までも、げに末ありや此山の、天ぎる雪の古枝をも、猶惜まるゝ花盛、手折りやすると守る梅の、花垣いざや圍はん、梅の花垣をかこはん。ワキ詞いかに是なる老人に尋ね申すべき事の候。シテ詞此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞聞き及びたる飛梅とは何れの木を申し候ぞ。ツレ詞あら事も愚や我等はたゞ、紅梅殿とこそ崇め申し候へ。ワキ詞げにげに紅梅殿とも申すべきぞや。謡忝くも御詠歌により、今神木となり給へば、崇めても猶飽き足らずこそ候へ。シテ詞さて此方なる松をば、何とか御覽じ分けられて候ぞ、

梅の花笠―古今集「霞の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」
葉守―樹木を守る神

飛梅―菅公の筑紫へ赴かるゝを慕ひ「東風吹かば匂ひこせ上梅の花あるじなしとて春を忘るな」と名殘を惜しまれし梅筑紫迄飛び行きしといふ傳說あり

ワキ詞「げに〳〵是も垣結ひまはし御注連を引き、誠に妙なる神木と見えたり。謡いかさま是は老松の、シテ詞「遅くも心得給ふ物かな。シテ、ワキ謡「紅梅殿は御寵ずらん、色も若木の花守までも、華やかなるに引きかへて、下歌地謡「守る我さへに老が身の、影古びたるまつ人の、翁さみしき木のもとを、老松と御覧ぜぬ、神慮もいかゞ恐しや。ワキ詞「猶々當社のいはれ委しく御物語り候へ。シテ、サシ謡「先社壇の體を拜み奉れば、北に峨々たる青山あり。地謡「朧月松閣の中に映じ、南に寂々たる瓊門あり。斜日竹竿のもとに透けり。シテ謡「左に火焔の輪塔あり、地謡「翠帳紅閨の粧昔を忘れず。右に古寺の舊跡あり、晨鐘夕梵の響絶うる事なし。クセけにや心なき、草木なりと申せども、かゝる浮世の理をば　知るべし、知るべし。諸木の中に松梅は、殊に天神の御自愛にて、紅梅殿も、老松も　皆末社と現じ給へり。されば此二つの木は、我朝よりもなほ、漢家に德をあらはし、唐の帝の御時は、國に文學盛なれば、花の色を增し、匂ひ常より優りたり、文學廢れば匂ひもなく　其色も深からず、さてこそ文を、好む木なりけりとて、梅をば、好

翁さみしき―翁さびとかく、翁さびは翁めきたる事

末社―附屬の祠　好文木―晉の起居注に「晉武好文則梅開、廢學則梅不開」

文木とは附けられたれ。さて松を大夫といふことは、秦の始皇の御狩の時、天俄にかき曇り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の陰に寄り給ふ　此松俄に大木となり、枝を垂れ葉を竝べ、木の間透間を塞ぎて、其雨を漏らさざりしかば、帝大夫といふ爵を贈り給ひしより、松を大夫と申すなり。シテ謡「かやうに名高き松梅の、地謡「花も千代までの、行末久に御垣守、守るべし守るべしや。神はこゝも同じ名の、天満つ空も紅の、花も松も諸共に、萬代の春とかや　千代萬代の春とかや。（中入）

三人上歌謡「嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、此松陰に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん。神の告をも待ちて見ん。

後シテ謡「如何に紅梅殿。今夜の客人をば、何とか慰め給ふべき。地謡「けに珍らかに春も立ち、シテ謡「梅も色そひ、地謡「松とても、シテ謡「名こそ老木の若緑、地謡「空澄渡る神神樂、シテ謡「歌をうたひ舞をまひ、地謡「舞樂を供ふる宮寺の、聲も滿ちたる、有難や。（眞ノ序舞）シテ謡「さす枝の、地謡「さす枝の、楢は若木の花の袖、シテ謡「是は老木の神松の、地謡「是は老木の神

秦の始皇の御狩の時云々―高砂にも見ゆ、史記始皇本紀に「始皇東行郡縣、乃遂上泰山、立石封祠祀、下風雨暴至、休於松樹下、因封其樹爲五大夫」

松の、千代に八千代にさゞれ石の、巌となりて苔のむすまで、シテ謡「苔のむすまで松竹鶴亀の、地謡「齢を授くる此君の、行末護れと我神詫の、告を知らする松風も梅も、久しき春こそめでたけれ。

此君―梅津の某をさす、竹を此君といふ王子猷の故事により、特に此語を用ひたり

頼政

梗概

頼政は清和源氏の流、父は仲正といふ。頼政仲綱の父子、以仁王に勧め申して、平家を討たんとして軍を挙げ、宇治に戦ひて敗れ、平等院に入りて自刃す。頼政時に年七十五。頼政文武の譽あり。事平家物語に詳也。此曲は頼政の幽霊を出して、宇治橋の戦を物語らしむ。朝長、實盛と共に三修羅の稱あり。（二番目）

シテ　頼政（前は老人）　ワキ　僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて、洛陽の寺社殘りなく拝み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候。道行謡　天雲の、稻荷の社伏しをがみ、稻荷の社伏しをがみ、猶行末は深草や、木幡の關を今越えて、伏見野澤田見え渡る、水の水上尋ねきて、宇治里にも著きにけり。宇治里にも著きにけり。狂言シカ〳〵　ワキ謡「けにや遠國にて聞き及びにし宇治里、殊に山の姿川の流れ、遠の里、橋の氣色、見所多き名所かな。詞　あはれ里

稻荷の社―伏見にあり

橋―宇治橋

人の來り給へかし。

シテ詞「なう〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「是は此所はじめて一見の者にて候。此宇治の里に於て、名所舊跡殘りなく御をしへ候へ。シテ詞「所には住み候へども、いやしき宇治の里人なれば、名所とも舊跡とも、「いさ白波の宇治の川に、舟と橋とは有りながら、渡りかねたる世の中に、住むばかりなる名所舊跡、何とか答へ申すべき。ワキ詞「いやさやうには承り候へども、勸學院の雀は蒙求を囀るといへり。所の人にてましませば、御心にくうこそ候へ。先喜撰法師が住みける庵は、いづくの程にて候ぞ。シテ詞「さればこそ大事の事を御尋ねあれ。喜撰法師が庵は、謠「我庵は都の巽しかぞ住む、詞「世を宇治山と人はいふなり、謠「人はいふなりとこそ、主だにも申し候へ。尉は知らず候。ワキ詞「又あれに一村の里の見えて候は、槇の島候か。シテ詞「さん候槇の島とも申し、又宇治の河島とも申すなり。ワキ謠「是に見えたる小島が崎は。シテ詞「名にたちばなの小島が崎。ワキ詞「向ひに見えたる寺は、いかさま恵心の僧都の、御法を說きし寺候な。シテ謠「なう〳〵旅人あれ

勸學院　云々―謠、勸學院は藤原家の學問所にて、弘仁十二年建立す　蒙求は書名唐李瀚の撰
喜撰法師―六歌仙の一人
槇の島―宇治橋の西北にありしとぞ
小島が崎―宇治橋の南にあり
向ひに見えたる寺―圓泉寺

朝日山―宇治川の東

平等院―宇治橋の南に在り永承七年關白左大臣宇治川別業を以て寺となしたるもの是也

宮軍―高倉宮以仁王の軍し給へるをいふ

御覽ぜよ。上歌名にも似ず、月こそ出づれ朝日山、地謡「月こそ出づれ朝日山、山吹の瀨に影見えて、雪さし下す島小舟、山も川もおぼろ〳〵として、是非を分ぬ氣色かな。げにや名にし負ふ、都にちかき宇治の里、聞きしにまさる名所かな。聞きしにまさる名所かな。

シテ詞「いかに申し候、此所に平等院と申す御寺の候を御覽ぜられて候か。ワキ詞「不知案内の事にて候程に、未だ見ず候ふ、御教へ候へ。シテ詞「此方へ御出で候へ。是こそ平等院にて候へ。又是なるは釣殿と申して、面白き所にて候。よく〳〵御覽候へ。ワキ詞「げにけに面白き所にて候。また是なる芝を見れば、扇の如く取り殘されて候は、何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「さん候、此芝に付いて物語の候。語つて聞かせ申し候べし。昔此所に宮軍の有りしに、源三位頼政合戰に打ち負け給ひ、此所に扇を敷き自害し果て給ひぬ。されば名將の古跡なればとて、扇のなりに取り殘して、今に扇の芝と申し候。ワキ詞「痛はしやさしも文武に名を得し人なれども、跡は草露の道の邊となつて、行人征馬のゆく

への如し。あら痛はしや候。シテ謡「げによく御弔ひ候ふものかな。しかも其宮軍の月も日も今日に當りて候は如何に。ワキ詞「何と其宮軍の月も日も今日に當りたると候や。シテ謡「かやうに申せば我ながら、よそにはあらず旅人の、草の枕の露の世に、姿見えんと來りたり。現とな思ひ給ひそとよ。上歌地謡「夢の浮世の中宿の、夢の浮世の中宿の、宇治の橋守年を經て、老の浪も打ち渡す、遠方人に物申す、我頼政が幽靈と、名のりもあへず失せにけり。名のりもあへず失せにけり。（中入）

ワキ詞「さては頼政の幽靈假に現れ、我に言葉を交しけるぞや。謡いざや御跡弔はんと、上歌思ひ寄るべの波枕、思ひ寄るべの波枕、汀も近し此庭の、扇の芝を片敷きて、夢の契を待たうよ、夢の契を待たうよ。

後シテ謡「血は涿鹿の河となつて、紅波楯を流し、白刃骨を碎く、世を宇治川の網代の波、あら閻浮戀しや。伊勢武者は皆緋威の鎧著て、宇治の網代にかよりけるかな。うたかたの、あはれはかなき世の中に、地謡「蝸牛の角の爭も、シテ謡「はかなかりける心かな。

涿鹿―黄帝と蚩尤と戰ひし野
伊勢武者は云々―頼政の子仲の歌平家物語に出づ

詞　あら尊の御事や　猶々御經讀み給へ。ワキ謡「不思議やな法體の身にて甲冑を帶し、御經讀めと　承るは、いかさま聞きつる源三位の、其幽靈にてましますか。シテ詞「げにや紅は園生に植ゑても隱れなし、謡名のらぬさきに、詞賴政と御覽ずるこそ恥しけれ　只々御經讀み給へ。ワキ謡「御心やすく思し召せ。五十展轉の功力だに、成佛まさに疑なし。ましてや是は直道に、のシテ謡「弔ひなせる法の力、ワキ謡「合ひに合ひたり所の名も、シテ謡「平等院の庭の面、ワキ謡「思ひ出でたり。シテ謡「佛在世に、上歌地謡「佛の說きし法の場、佛の說きし法の場。こよぞ平等大慧の、功力に賴政が、佛果を得んぞありがたき。シテ謡「今はなにをか包むべき、是は源三位賴政、執心の波に浮き沈む、因果の有樣現すなり。地謡「抑治承の夏のころ、よしなき御謀叛をすゝめ申し、名も高倉の宮の內、雲居のよそに有明の、月の都を忍び出でて、シテ謡「憂き時しもに近江路や、地謡「三井寺さして落ち給ふ。タセさる程に、平家は時を廻さず、數萬騎の兵を、關の東に遣すと、聞くや音羽の山續く、山科の里近き、木幡の關をよそに見て、こよぞ憂き世の旅心、宇治の

五十展轉の功力―經文を傳へ傳へて五十人目の人さへ福を受くといふ法の場―靈鷲山にて法華經を說きしをいふ

治承の夏―四年五月

河橋打ち渡り、大和路さして急ぎしに、シテ謡「寺と宇治との間にて、地謡「關路の駒のひまもなく、宮は六度まで御落馬にて、煩はせ給ひけり。是は先の夜、御寢ならざる故なりとて、平等院にして、暫く御座を構へつゝ、宇治橋の中の間引き離し、下は河波上に立つも、共に白旗を靡かして、よする敵を待ち居たり。

シテ詞「さる程に源平の兵、宇治川の南北の岸に打ち望み、鬨の聲矢叫の音、波にたぐへておびたゝし。橋の行桁を隔てゝ戰ふ。謡味方には筒井の淨妙詞一賴法師、敵味方の目を驚かす。かくて平家の大勢、橋は引いたり水は高し、謡さすが難所の大河なれば、詞左右なう渡すべきやうも無かりし處に、謡田原又太郎忠綱と名のつて、詞宇治川の先陣我なりと、謡名のりもあへず三百餘騎、地謡「轡を揃へ河水に、少しもためらはず、群れゐる村鳥の翅を竝ぶる、羽音もかくやと白波に、ざつ〳〵と打ち入れて、浮きぬ沈みぬ渡しけり。シテ謡「忠綱兵を下知していはく、地謡「水の逆巻く所をば、岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てゝ、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓筈を取らせ、互に力

田原又太郎―平家物語足利に作る。この一節平家物語參照（本文庫本二百頁前後）

を合はすべしと、只一人の下知に依つて、さばかりの大河なれども、一騎も流れず此方の岸に、をめいてあがれば味方の勢は、我ながら踏みもためず、半町ばかり覺えずしさつて、切先を揃へて、こゝを最期と戰うたり。さる程に入り亂れ、我もく〳〵と戰へば、シテ詞「頼政が頼みつる、地謡「兄弟の者も討たれければ、シテ謡「今は何をか期すべきと、地謡「唯一筋に老武者の、シテ謡「是までと思ひて、地謡「是までと思ひて、平等院の庭の面、是なる芝の上に、扇を打ち敷き、鎧脱ぎ捨て座を組みて、刀を抜きながら、さすが名を得し其身とて、シテ謡「埋木の花咲く事もなかりしに、身のなるはては哀なりけり。地謡「跡とひ給へ御僧よ、假初ながら是とても、他生の種の縁に今、扇の芝の草の陰に、歸るとて失せにけり。たち歸るとて失せにけり。

兄弟の者―仲綱、景綱

埋木の云々―頼政辞世の歌、下の句、身のなるはてぞ悲しかりける

南都七堂―奈良七大寺のこと　初瀬―与謝郡在原寺―石上在原山本光明寺といふ

井筒

梗概

在原業平は阿保親王の第五子なり。在五中将といひ六歌仙の一人なり。その事蹟をおぼろげに書き集めたる歌物語は名高き伊勢物語なり。その一節に、幼馴染の女と「筒井筒井筒にかけしまろが丈すぎにけらしな妹見ざるまに」比べ來し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」と歌詠み交して、相語らひしが、後男河内の高安の女の許に通ひしを、彼の女恨まずして「風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらん」と詠めりといふ物語あり。此曲は井筒の女を紀有常の女として脚色し、昔を語らしむ。（鬘物）

シテ　有常の女（前は里女）　ワキ　僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は南都七堂に參りて候。又是より初瀬に參らばやと存じ候。是なる寺を人に尋ねて候へば、在原寺とかや申し候程に、たちより一見せばやと思ひ候。謡さては此在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、夫婦住み給ひし石上

なるべし。風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけんも、此所にての事なるべし。下歌昔がたりの跡訪へば、其業平の友とせし、紀有常の常なき世、妹脊をかけて弔はん。妹脊をかけて弔はん。

シテ次第謡「暁ごとの閼伽の水、暁ごとの閼伽の水、月も心や澄ますらん。サシさなきだに物の淋しき秋の夜の、人目稀なる古寺の、庭の松風更け過ぎて、月も傾く軒端の草、忘れて過ぎし古を、忍ぶ顔にていつまでか、待つ事なくてながらへん。げに何事も思ひ出の、人には残る世の中かな。下歌只いつとなく一筋に、頼む佛の御手の糸、導きたまへ法の聲。上歌迷をも、照らさせ給ふ御誓、照らさせたまふ御誓、げにもと見えて有明の、行方は西の山なれど、眺めは四方の秋の空、松の聲のみ聞ゆれども、嵐はいづくとも、定めなき世の夢心、何の音にか驚めてまし。何の音にか驚めてまし。

ワキ詞「我此寺にやすらひ、心を澄ますをりふし、いとなまめける女性、庭の板井を結び上げ花水とし、是なる塚に回向の氣色見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「是は此

佛の御手の糸―佛に従て淨土へ導かるる縁として佛像の御手の糸を取ること

板井―板にて組み上げたる井戸

本願―寺を建立せし願主

昔男―伊勢語に「昔男ありけり云々」と書き出せるをさす

穂に出づる―あらはるゝ意

あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業平は、世に名を留めし人なり。されば其跡のしるしも是なる塚の陰やらん　妾も委くは知らず候へども、花水を手向け、御跡を弔ひ参らせ候。ワキ詞「げに〳〵業平の御事は、世に名を留めし人なりさりながら、今は遙に遠き世の、昔語の跡なるを、しかも女性の御身として、かやうに弔ひ給ふ事　其在原の業平に、謡いかさま故ある御身やらん。シテ詞「故ある身かと問はせ給ふ、其業平は其時だにも、昔男といはれし身の、ましてや今は遠き世に、故もゆかりもあるべからず。ワキ謡「もつとも仰せはさる事なれども、こゝは昔の舊跡にて、シテ謡「主こそ遠く業平の、ワキ謡「あとは殘りてさすがにいまだ、シテ謡「聞えは朽ちぬ世語を　ワキ謡「語れば今も、シテ謡「昔　男の、上歌地謡「名ばかりは、在原寺の跡古りて、在原寺の跡古りて、松も老いたる塚の草、是こそそれよ亡き跡の、一村ずすきの穂に出づるは、いつの名殘なるらん。草茫々として、露深々と古塚の、まことなるかな古の、跡なつかしき氣色かな　跡なつかしき氣色かな。

ワキ詞「猶々業平の御事委く御物語候へ。クリ地謡「むかし在原の中將、年經てこゝに石上、ふりにし里も花の春、月の秋とて住み給ひしに、シテサシ謡「其頃は紀有常が娘と契り　妹脊の心淺からざりしに、地謡「又河内國高安里に、知る人ありて二道に　忍びて通ひ給ひしに、シテ謡「風ふけば沖つ白波龍田山、地謡「夜半にや君がひとり行くらんと、おぼつかなみのよるの道、ゆくへを思ふ心遂けて、よその契はかれ〴〵なり。シテ謡「げに情知るうたかたの、地謡「あはれを述べしも理なり。クセ むかし此國に、住む人の有りけるが　宿をならべて門の前、井筒によりてうなゐ子の、友達語らひて、互に影を水鏡、面をならべ袖を懸け、心の水の底ひなく、うつる月日も重なりて、おとなしく恥ぢがはしく、互に今はなりにけり。其後彼まめ男、言葉の露の玉章の、心の花も色そひて、シテ謡「筒井筒、井筒に懸けしまろが丈、地謡「生ひにけらしな妹見ざる間にと、詠みておくりける程に、其時女もくらべこし、振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべきと、互に詠みし故なれや。筒井筒の女とも、聞えしは有常が、娘の古き名なるべし。

紀有常―惟喬親王に仕へ業平と親交あり

うたかたの―あわの枕詞、歌に云ひかけ且音通により下はれのとす

非筒―井戸側うなゐ子―髪をあげざる童

まめ男―まめは實意ある意

ロンギ地謡「けにや古りにし物語、聞けば妙なる有様の、あやしや名のりおはしませ、ツ謡「誠は我は戀衣、紀有常が娘とも、いさ白波の龍田山、夜半にまぎれて來りたり。地謡「不思議やさては龍田山、色にぞ出づるもみぢ葉の、シテ謡「紀有常が娘とも、地謡「又は井筒の女とも、シテ謡「恥ながら我なりと、地謡「いふや注進繩の長き世を、契りし年は筒井筒、井筒の陰に隱れけり。井筒の陰に隱れけり。（中入）

上歌謡「更けゆくや、在原寺の夜の月、在原寺の夜の月、昔を返す衣手に、夢待ちそへて假枕、苔の筵に臥しにけり。苔の筵に臥しにけり。

後シテ一聲「あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年に稀なる人も待ちけり。かやうによみしも我なれは、人待つ女ともいはれしなり。我筒井筒の昔より、眞弓槻弓年を經て、今は亡き世に業平の、形見の直衣身に觸れて、はづかしや昔男に移舞、地謡「雪を廻らす花の袖（序ノ舞）シテ謡「こよに來て、昔ぞかへす在原の、地謡「寺井に澄める月ぞさやけき。月ぞさやけき。シテ謡「月やあらぬ、春や昔と詠めしも、いつの頃ぞや筒井筒、地謡「つゝるづつ、井筒

昔を返す衣手―古今集の「いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣を返してぞ寢る」といふ歌の意に據るあだなりと云々―伊勢物語の歌「月やあらぬ―業平の歌の句

にかけし、シテ謡「まろが丈、地謡「生ひにけらしな。シテ謡「老いにけるぞや。地謡「さながら見みえし昔男の、冠直衣は女とも見えず、男なりけり業平の面影、シテ謡「見ればなつかしや。地謡「我ながらなつかしや。亡婦魄靈の姿は、凋める花の色無うて、匂殘りて在原の、寺の鐘もほの〳〵と、明くれば古寺の、松風や芭蕉葉の、夢も破れて覺めにけり。夢は破れ明けにけり。

凋める花の云々―古今集序に業平の歌を評せる語

三井寺

梗概

駿河國清見が關の女、一子を人買に誘拐せられ、それを嘉ひ歎きて、物狂となりしが、靈夢の告にあづかりて、江州三井寺に到る。頃は仲秋三五の夜、明月湖上に浮べり。こゝに當寺の兒となれる我が子に廻り會ふ。鐘に關する引句を以て文飾したる一段頗る精彩あり。（狂女物）

シテ　狂女　ワキ　住僧　ツレ　從僧

子方　千萬　狂言　夢下者

シテ謡「南無や大慈大悲の觀世音さしも草、さしもかしこき誓の末、一稱一念なほ頼みあり。ましてや此程日を送り、夜を重ねたる頼みの末、などか其かひなからんと、思ふ心ぞあはれなる。下歌憐れみ給へ思ひ子の、行末何となりぬらん。行末何となりぬらん。上歌枯れたる木にだにも、枯れたる木にだにも、花咲くべくはおのづから、いまだ若木のみどり子に、再びなどか逢はざらん。再びなどか逢はざらん。詞あら有難や候、少し睡

一稱一念―一度觀音の御名をが〈念ずること　さしも草―「唯たのめしめじが原のさしも草我世の中にあらん限は」の歌によるる

訪ひ慰むる人―夢占の人（狂言方）

眠の内に、あらたなる靈夢を蒙りて候は如何に。妾を何時も訪ひ慰むる人の候。あはれ來り候へかし語らばやと思ひ候。狂言シカ〳〵。シテ詞「唯今少し睡眠の内に、あらたなる御靈夢を蒙りて候。我子に逢はんと思はば、三井寺へ參れとあらたに御靈夢を蒙りて候。狂言シカ〳〵。シテ詞「あら嬉しと御合せ候物かな。告に任せて三井寺とやらんへ參り候べし。

園城寺―三井寺のこと

ワキ、ツレ謡「秋も半の暮待ちて、秋も半の暮待ちて、月に心や急ぐらん。ワキ詞「是は江州園城寺の住僧にて候。又是に渡り候幼き人は、愚僧を頼む由仰せ候間、力なく師弟の契約をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候程に、幼き人を伴なひ申し、皆々講堂の庭に出でて、月を詠めばやと存じ候。

四人次第

四人上歌「類なき名を望月の今宵とて、名を望月の今宵とて、夕を急ぐ人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふやかねてより、月の名頼む日影かな。月の名頼む日影かな。

後シテ謡「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん、志賀の山越うち過ぎて、眺の一聲

雪ならば云々―古歌下句花の吹雪の志賀の山越

關堂―經論聖教の講釋論義などする所

上見ぬ鷲…謎、比叡を鷲峰山になぞらへいふ

都の秋を捨てゝ云々…古今集の「春霞たつをみすてゝ行く雁は花なき里に住みやならへる」を序案す

花園の里…志賀の都の時遊覧の地たり

桂生三五夜…唐の李嶠の詩句

三五夜中新月色云々…白樂天の詩句

水の面に云々…順の歌下句今宵ぞ秋のもなかなりける、月なみは月次の意

末は湖の、鴈照る比叡の山高み、上見ぬ鷲の御山とやらんを、今目の前に拝む事よ。あら有難の御事や。詞かやうに心あり顔なれども、我は物に狂ふよなう。いや我ながら理なり。あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし。謡ましてや人の親として、いとほし悲しと育てつる、一聲子の行方をも白糸の、地謡「亂れ心や狂ふらん。シテ謡「都の秋を捨てゝ行かば、地謡「月見ぬ里に住みや習へると、さこそ人の笑はめ。よし花も紅葉も、月も雪も故郷に、我子のあるならば、田舎も住みよかるべし、いざ故郷に歸らん。いざ故郷に歸らん。歸ればさゝ波や、志賀辛崎の一つ松、緑子の類ならば、松風に事問はん、松風も、今は厭はじ櫻咲く、春ならば花園の、里をも早く杉間吹く、風冷ましき秋の水の、三井寺に著きにけり。三井寺に早く著きにけり。

ワキ謡桂は實る三五の暮、名高き月にあこがれて、庭の木蔭に休へば、シテ謡實に〳〵今宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心、水の面に照る月なみを數ふれば、秋も最中夜も半、所からさへ面白や。上歌地謡「月は山、風ぞ時雨に鴈の海。風ぞ時雨に鴈の海、

波も粟津の森見えて、海ごしの幽に向ふ影なれど、月は眞澄の鏡山、山田矢走の渡舟の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はゞおのづから、舟もこがれて出づらん、舟人もこがれ出づらん。

さゝ波や三井の古寺云々―新撰歌枕にある歌秀郷―下野押領使田原藤太と號す

シテ詞「面白の鐘の音やな。我が故郷にては清見寺の鐘をこそ常に聞き馴れしに、是は又ささ波や、謡三井の古寺鐘はあれど、詞昔にかへる聲は聞えず。誠や此鐘は、秀郷とやらんの龍宮より、取りて歸りし鐘なれば、謡龍女が成佛の緣に任せて、妾も鐘を撞くべきなり。次第地謡「影はさながら霜夜にて、影はさながら霜夜にて、月にや鐘は冴えぬらん。

龍女が成佛の緣に任せて―法華經にあり

ワキ詞「やあ〳〵暫く、狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ、急いで退き候へ。シテ詞「夜庾公が樓に登りしも、月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ。ワキ詞「それは心有る古人の言葉。狂人の身として鐘撞くべき事、思も寄らぬ事にて有るぞとよ。シテ詞「今宵の月に鐘撞く事、狂人とてな厭ひ給ひそ。或る詩に曰く、謡團々として海嶠を離れ、詞漸々として雲儔を出づ。此後句無かりしかば、明月に向つて心を澄まいて、謡今宵一輪滿てり、淸光何れの所に

庾公―晉の庾亮、南樓に登て月を愛す

團々として云々―詩の前半原文と小異あり

諸行無常云々―涅槃經の四句の偈

五障―女人は罪深くして五の障害ありと佛說にいふ

長樂―漢高祖の宮殿との所詠集の詩句に據る

山寺の春の夕暮云々―新古今集能因法師の歌

か無からんと、詞此句を設けて餘りの嬉しさに心亂れ、高樓に登つて鐘を撞く。人々如何にと咎めしに、是は詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしだに、月には亂るゝ心有り。ましてや拙なき狂女なれば、地謠「許したまへや人々よ。煩惱の夢を覺ますや、法の聲も靜に、先初夜の鐘を撞く時は、シテ謠「諸行無常と響くなり。地謠「後夜の鐘を撞くときは、シテ謠「是生滅法と響くなり。地謠「晨朝の響は、シテ謠「生滅々已〳〵、地謠「入相は、シテ謠「寂滅、地謠「爲樂と響きて、菩提の道の鐘の聲、月も數添ひて、百八煩惱の眠の、驚く夢の世の迷ひも、はや盡きたりや後夜の鐘に、我も五障の雲晴れて、眞如の月の影を眺め居りて明かさん。クリ夫れ長樂の鐘のこゑは、花のほかに盡きぬ。シテ謠「また龍池の柳の色は、地謠「雨のうちに深し。シテサシ謠「其外こよにも世々の人、言葉の林のかねて聞く、地謠「名も高砂の尾上の鐘、曉かけて秋の霜、曇るか月もこもりくの、初瀨も遠し難波寺、シテ謠「名所多き鐘の音、地謠「盡きぬや法の聲ならん。クセ山寺の、春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。實に惜めども、なほ夢の春と暮れぬらん。其外曉の、妹脊を惜むきぬ〴〵の、恨

みを添ふる行方にも、枕の鐘や響くらん。又待つ宵に、更け行く鐘の聲聞けば、あかぬ別れの、鳥は物かはと詠ぜしも、戀路の便の、音信の聲と聞く物を。又は老いらくの、寢覺程ふる古へを、今思ひ寢の夢だにも、涙心のさみしさに、此鐘のつくぐと、思ひを盡す曉を、いつの時にか比べまし。シテ謠「月落ち烏鳴いて、地謠「霜天に滿ちて冷ましく、江村の漁火もほのかに、半夜の鐘の響きは、客の船にや通ふらん。蓬窓雨したどりて、馴れし汐路の楫枕、浮寢ぞかはる此海士、波風も靜にて、秋の夜すがら月すむ三井寺の鐘ぞさやけき。

子謠「如何に申すべき事の候。ワキ謠「何事にて候ぞ。子謠「是なる物狂の國里を問うて給はり候へ。ワキ謠「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。去りながら易き間の事尋ねて參らせうずるにて候。如何に是なる狂女、おことの國里は何くの者にて有るぞ。シテ謠「是は駿河國清見が關の者にて候。子謠「何なう清見が關の者と申し候ふか。シテ謠「あら不思議や、今の物仰せられつるは、正しく我子の千滿殿ござめれ。あら珍しや候。ワキ謠「暫く。是な

待宵に云々―小侍從の歌平家物語にあり

月落ち云々―唐の張繼の楓橋夜泊の詩による古來扁とかきてトリと讀へり

ござめれ―ござあるめれの約

る狂女は篤忽なる事を申す者かな。さればこそ物狂にて候。シテ謠「なう是は物には狂はぬものを。物に狂ふも別れ故逢ふ時は何しに狂ひ候べき。是は正しき我子にて候。ワキ詞「さればこそ我子と申すか條なき事を申し候。急いで退き候へ。子詞「あら悲しやさのみな御打ち候ひそ。ワキ詞「言語道斷はや色に出で給ひて候。此上はまつすぐに御名のり候へ。子謠「今は何をか包むべき、我は駿河國、清見が關の者なりしが、人商人の手に渡り、今此寺に在りながら、母上我を尋ね給ひて、かやうに狂ひ出で給ふとは、夢にも我は知らぬなり。シテ謠「又妾も物に狂ふ事、あの兒に別れし故なれば、たま〳〵逢ひ見る嬉しさのまゝ、やがて母よと名のる事、我子の面伏なれど、子故に迷ふ親の身は、恥も人目も思はれず、

ロンギ地謠「あら痛はしの御事や、よそ目も時による物を、逢ふを悦び給ふべし。シテ謠「嬉しながらも衰ふる、姿はさすが羽束師の、漏りて餘れる涙かな。地謠「實に逢ひ難き親と子の、緣は盡きせぬ契とて、シテ謠「日こそ多きに今宵しも、地謠「此三井寺に廻り來て、シテ謠「親

面伏―恥辱

羽束師―歌枕、普通にて漏の序とす山城にあり

常の契―男女の中

子に逢ふは、地謡―何故ぞ。此鐘の聲立てよ　物狂の有るぞとて、御咎め有りし故なれば、常の契には、別れの鐘と厭ひしに、親子のための契には　鐘故に逢ふ夜なり。嬉しき鐘の聲かな。ヤリかくて伴なひ立ち歸り、かくて伴なひ立ち歸〳〵　親子の契盡きせずも、富貴の家となりにけり。實に有難き孝行の、威徳ぞめでたかりける。威徳ぞめでたかりける。

天鼓

梗概

唐土に天鼓といふ者あり。その持てる鼓を内裏に召されんとし、勅命に背きて非業の死を遂ぐ。然るに鼓は宮殿に据ふられしまゝ鳴る事なし。かくて天鼓の父召出されてこれを打つに、父子恩愛の験あらはれて、鳴り出でければ感ぜぬ者なし。即ち天鼓の亡靈は厚き弔を受くといふ筋なり。（四番目）

前シテ　父　後シテ　天鼓　ワキ　勅使

ワキ詞「是は唐土後漢の帝に仕へ奉る臣下なり。さてもこの國の傍に、王伯、王母とて夫婦の者あり、彼者一人の子を持つ。其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名づくる事は、彼が母夢中に天より一つの鼓降り下り、胎内に宿ると見て出生したる子なればとて、其名を天鼓と名づく。其後天より誠の鼓降り下り、打てば其聲妙にして、聞く人感を催せり。此由帝聞し召され、鼓を内裏に召されしに、天鼓深く愒み、鼓を抱き山中に隠れぬ。

然れどもいづくか王地ならねば、官人を以て捜し出だし、天鼓をば瀘水の江に沈め、鼓をば内裏に召され、阿房殿雲龍閣に据ゑ置かれて候。又其後かの鼓を打たせらるれども更に鳴る事なし。いかさま主の別を歎き鳴らぬと思召さるゝ間、彼者の父王伯を召して打たせよとの宣旨に任せ、只今王伯が私宅へと急ぎ候。

シテ謡「露の世になほ老の身のいつまでか、また此秋にのこるらん。ツレ傳へ聞く孔子は鯉魚に別れて、思の火を胸に焚き、白居易は子を先だてゝ、枕に殘る藥を恨む。是れ皆仁義禮智信の祖師、文道の大祖たり。我等が歎くは科ならじと、思ふおもひに堪へかぬる、涙いとなき袂かな。下歌思はじと、思ふ心のやどやらん、夢にもあらず現にも、なき世の中ぞ悲しき。なき世のなかぞ悲しき。上歌よしさらば、思ひ出でじと思寢の、おもひ出でじと思寢の、闇の現に生れ來て、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。只何故の憂き身の、命のみこそ恨みなれ、命のみこそ恨みなれ。

ワキ謡「如何に此屋の内に王伯があるか。シテ謡「誰にて渡り候ぞ。ワキ謡「是は帝よりの宣旨に

鯉魚―伯魚ともいふ孔子の子
白居易―樂天といふ、金鑾子を哭すといふ詩に故衣猶架上殘藥尚頭邊の句ありいとなき―いとまなき

て有らぞ。シテ詞「宣旨とはあら思ひよらずや何事にて御座候ぞ。ワキ詞「さても天鼓が鼓内裏に召されて後、いろ〳〵打たせらるれども更に鳴る事なし。如何さま主の別を歎き鳴らぬと思召さるゝ間、王伯に参りて仕れとの宣旨にて有るぞ、急いで参内仕り候へ。シテ詞「仰せ畏つて承り候さりながら、勅命にだに鳴らぬ鼓の、老人が参りて打ちたればとて、何しに聲の出づべきぞ。いや〳〵是も心得たり。勅命を背きし者の父なれば、謡重ねて失はれんためにぞ有るらん。よし〳〵それも力なし。我子のために失はれんは、それこそ老の望なれ。あら歎くまじや頓てまゐり候べし。ワキ謡「いや〳〵左様の宣旨ならず、只々鼓を打たせんとの、其爲ばかりの勅諚なり。急いで参り給ふべし。シテ謡上歌「假令罪には沈むとも、地謡「假令罪には沈むとも、又は罪にも沈まずとも、憂きながら我子の形見に、帝を拜み参らせん。帝を拜み参らせん。

ワキ詞「急ぐ間程なく内裏にて有るぞ、此方へ來り候へ。シテ詞「勅諚にて候程に、是までは参りて候へども、謡老人が事をば、御免あるべく候。ワキ謡「申す所は理なれども、まづ

鼓を仕り候へ、鳴らずは力なき事急いで仕り候へ。シテ詞「さては辭すとも叶ふまじ。勅に應じて打つ鼓の、聲もし出でばそれこそは、我子の形見と夕月の、謡上に輝く玉殿に、始めて臨む老の身の、次第地謡「生きてある身は久方の、生きてある身は久方の、天の鼓を打たうよ。

クリ地謡「その磧礫にならつて玉淵を窺はざるは、驪龍の頷る所を知らざるなり。シテ謡「實にや世々ごとの、假の親子に生れ來て、地謡「愛別離苦の思ひ深く、恨むまじき人を恨み、悲しむまじき身を歎きて、我と心の闇深く、輪廻の波にたどよふ事、生々世々もいつまでの、シテ謡「思ひのきづな長き世の、地謡「苦の海に沈むとかや。クセ地を走る獸、空を翔る翅まで、親子の哀知らざるや。況んや佛性同體の人間、此生に此身を浮めずは、いつの時か、生死の海を渡り山を越えて、彼岸に至るべき。シテ謡「親子は三界の首枷と、地謡「聞けば誠に老心、別れの涙の雨の袖、しをれぞ增さる草衣、身を恨みても其かひの、なき世に沈む罪科は、只命なれや明暮の、時の鼓の現とも、思はれぬ身こそ恨みなれ。

臨二其磧礫一不レ窺二王淵一者、失レ知二驪龍之所一レ頷也一文選吳都賦の文

三界一欲界色界無色界

疎衣一草にて摺りたる衣

時の鼓一時刻を報ずる鼓

ロンギ地謡「鼓の時も移るなり、涙を止めて老人よ、急いで鼓打つべし。シテ謡「實に〳〵是は大君の、忝しや勅命の老の時も移るなり。急いで鼓打たうよ。地謡「打つや打たずや老波の、立ち寄る影も夕月の、シテ謡「雲龍閣の光さす、地謡「玉の階、シテ謡「玉の床に、地謡「老の歩みも足弱く、薄氷を踏む如くにて、心も危き此鼓、打てば不思議や其聲の、心耳を澄ます聲出でて、實にも親子の驗の聲、君も哀と思召して、龍顔に御涙を、浮め給ふぞ有難き。

ワキ詞「如何に老人、只今鼓の音の出でたる事、誠に哀と思し召さるゝ間、老人には數の寶を下さるゝなり。又天鼓が跡をば、管絃講にて御弔ひあるべきとの勅諚なり。心安く存じ、まづ〳〵老人は私宅に歸り候へ。シテ詞「あら有難や候。さらば老人は私宅に歸り候べし。（中入）

管絃講―音樂にて佛事を營むこと

ワキ謡「さても天鼓が身を沈めし、瀘水の堤に御幸なつて、同じく天の鼓をうつ、上歌糸竹呂律の聲々に、糸竹呂律の聲々に、法事をなして亡き跡を、御弔ひぞ有難き。頃は初秋の

三伏の夏云々―和漢朗詠集に「池冷水無二三伏夏一、松高風有二一聲秋一」

けしたる―化したる、化生のものなどの意

月宮の昔―玄宗皇帝遊に天上に遊びし故事

空なれば、地早三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、水滔々として波悠々たり。

後シテ一聲「あら有難の御弔ひやな。勅を背きし天罰にて、盧水に沈みし身にしあれば、後の世までも苦みの、海に沈み波に打たれて、呵責の責も隙無かりしに、思はざる外の御弔ひに、浮み出でたる盧水の上、曇らぬ御代の有難さよ。

ワキ謡「不思議やな早更け過ぐる水の面に、けしたる人の見えたるは、如何なるものぞ名を名のれ。シテ詞「是は天鼓が亡靈なるが、御弔ひの有難さに、是まで現れ参りたり。ワキ謡「さては天鼓が亡靈なるかや。詞しからばかゝる音樂の、舞樂も天鼓が手向の鼓、打ちて其聲出づならば、謡實にも天鼓が驗なるべし。はや〳〵鼓を仕れ。シテ詞「うれしやさては勅諚ぞと、夕月かゝやく玉座のあたり、ワキ謡「玉の笛の音聲すみて、シテ詞「月宮の昔もかくやとばかり、ワキ謡「天人も影向、シテ謡「菩薩もこゝに、シテ、ワキ謡「天くだります氣色にて、同じく打つなり天の鼓、上歌地謡「打ち鳴らす其聲の、打ち鳴らす其聲の、盧水の波は

滔々と、打つなり打つなり、汀の聲の、より引く糸竹の、手向の舞樂は有難や。シテ謠「面白や時も實に、地謠「面白や時も實に、秋風樂なれや松の聲、柳葉を拂つて月も涼しく、星も相逢ふ空なれや、烏鵲の橋の下に紅葉を敷き、二星の館の前に、風冷に夜も更けて、夜半樂にも早なりぬ。人間の水は南、星は北にたんだくの、天の海面雲の波、立ち添ふや瀘水の堤の月に嘯き、水に戯むれ波を穿ち、袖を返すや、夜遊の舞樂も時去りて、五更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのぐと、夜も明け白む時の鼓、數は六つの巻の聲に、又打ち寄りて現か夢か、又うち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。

秋風樂夜半樂―樂の名

たんだく―拱すること

六つの巻―六道のこと、地獄餓鬼畜生修羅人天

内四

白樂天

概　　楔

白樂天は唐代の文人、その白氏文集は夙に我が邦に渡來し、詩風の影響顯著なりき。この曲は住吉明神をして、我が國風たる歌道を讃歎せしめ、以て漢才の到底奈何ともし難きを諷したり。卽ち歌德神德併せ現ずる意は末段の諸神舞樂に見ゆ。（脇能）

シテ　住吉明神（前は漁翁）　ツレ　漁夫

ワキ　白樂天

太子の賓客―太子に奉仕する官

ワキ謡「そも〳〵是は唐の太子の賓客、白樂天とは我が事なり。詞扨も是より東に當つて國あり、名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り、日本の智惠を計れとの宣旨に任せ、只今海路に赴き候。三人次第謡「舟漕ぎ出でて日の本の、舟漕ぎ出でて日の本の、其方の國を尋

ねん。道行東海の、波路遙に行く舟の、波路遙に行く舟の、跡に入日の影殘る、雲の旗手の天つ空、月また出づる其方より、山見えそめて程もなく、日本の地にも著きにけり。日本の地にも著きにけり。詞海路を經て急ぎ候程に、是ははや日本の地に著きて候。暫く此所に碇をおろし、日本のやうを詠めばやと存じ候。

一聲謡「不知火の、筑紫の海の朝ぼらけ、月のみ殘るけしきかな。シテ、ツレ謡「巨水漫々として碧浪天を浸し、シテ、ツレ謡「越を辭せし范蠡が、扁舟に楫を移すなる、五湖の煙の波の上、かくやと思ひ知られたり。あら面白の海上やな。下歌松浦潟西に山なき有明の、上歌月の入る、雲も浮むや沖つ舟、雲も浮むや沖つ舟、互にかよる朝まだき、海は其方か唐土の、船路の旅も遠からで、一夜泊と聞くからに、月も程なき名殘かな。月も程なき名殘かな。

ワキ詞「我萬里の波濤を凌ぎ、日本の地にも著きぬ。是に小船一艘浮めり、見れば漁翁なり。如何にあれなるは日本の者か。シテ詞「さん候。是は日本の漁翁にて候。御身は唐の白

不知火―筑紫の枕詞　范蠡―越王句踐の爲に呉を滅して會稽の恥を雪ぎ功成り名遂げて後退けり　松浦潟―肥前

樂天にてましますな。ワキ謠「不思議やな。始めて此土に渡りたるを、白樂天と見る事は、何の故にてあるやらん。ツレ謠「其身は漢土の人なれども、名は先立つて日本に聞ゆ。隱れなければ申すなり。ワキ謠「たとひ其名は聞ゆるとも、それぞとやがて見知る事、あるべき事とも思はれず。シテ、ツレ謠「日本の智恵を計らんとて、樂天來り給ふべきとの、聞えは曾き日の本に、西を眺めて沖の方より、船だに見ゆれば人毎に、すはやそれぞと心づくしに、上歌地謠「今や〳〵と松浦舟、今や〳〵と松浦舟、沖より見えて隱れなき、唐舟の唐人を、樂天と見る事は、何か空目なるべき。むつかしや言さやぐ、唐人なれば御詞をも、とても聞きも知らばこそ。あらよしな釣竿の暇をしや、釣垂れん。暇をしや釣垂れん。ワキ詞「なほ〳〵尋ぬべき事あり舟を近づけ候へ。如何に漁翁、さて此頃日本には何事を翫ぶぞ。シテ詞「さて唐土には何事を翫び給ひ候ぞ。ワキ詞「唐には詩を作つて遊ぶよ。シテ詞「日本には歌をよみて人の心を慰め候。ワキ詞「そも歌とは如何に。シテ詞「それ天竺の靈文を唐土の詩賦とし、唐土の詩賦を以て我朝の歌とす。されば三國を和らげ來るを以て大き

空目―見違ひ　甘さやぐ―唐の枕詞

天竺の靈文―經の陀羅尼

に和ぐと書いて大和歌と讃めり。しろし召されて候へども、翁が心を御覺ぜんため候な。ワキ詞「いや其儀にてはなし。いでさらば目前の氣色を詩に作つて聞かせう。青苔衣をおびて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰を廻る。心得たるか漁翁。シテ詞「青苔とは青き苔の、巖の肩にかゝれるが衣に似たるとかや。白雲帶に似て山の腰をめぐる。面白し、面白し。日本の歌もたゞ是候よ。謡苔衣著たる巖はさもなくて、衣著ぬ山の帶をするかな。ワキ謡「不思議やな其身は賤しき漁翁なるが、かく心ある詠歌を連ぬる、其身は如何なる人やらん。シテ詞「人がましやな名も無き者なり。されども歌をよむ事は、人間のみに限るべからず。牛きとし生ける物毎に、歌をよまぬは無きものを。ワキ謡「そもや生きとし生ける物とは、さては鳥類畜類までも、シテ謡「和歌を詠ずる其ためし、ワキ謡「和國に於て、シテ謡「證歌多し。上歌地謡「花に鳴く鶯、水に住める蛙まで、唐土は知らず日本には、歌をよみ候ぞ。翁も大和歌をば、形の如くよむなり。クセそも〳〵鶯の歌をよみたる證歌には、孝謙天皇の御字かとよ、大和國高天寺に住む人の、しきねんの春の頃、軒端の梅

青苔云々―江談に後中書王文集詩云白雲似帶圖山嘯青苔如衣貧嚴背云々又其歌に「苔衣きたるいはほまひろげきぬ山の帶するはなぞ」とあり

生きとし生ける物云々―古今集序に「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば生きとし生ける物何れか歌を詠まざりける」

しきねん―或年の或を式に誤りて音讀せるならんといふ

に鶯の、來りて鳴く聲を聞けば、初陽毎朝來、不遭還本栖と鳴く。文字に寫して是を見れば、三十一文字の、詠歌の詞なりけり。シテ謠「初春のあした毎には來れども、地謠「あはでぞ歸る、もとのすみかにと聞えつる、鶯の聲を始めとして、其外鳥類畜類の、人にたぐへて歌をよむ、ためしは多く荒磯海の、濱の眞砂の數々に、生きとし生ける物、何れも歌をよむなり。

ロンギ地謠「實にや和國の風俗の、實にや和國の風俗の、心有りける海士人の、實に有難き[1]ひかな。シテ謠「とても和國の翫び、和歌を詠じて舞歌の曲、そのいろ〳〵を現さん。

地謠「そもや舞樂の遊びとは、其役々は誰ならん。シテ謠「誰なくとても御覽ぜよ。我だにあらば此舞樂の、地謠「鼓は波の音、笛は龍の吟ずる聲、舞人は此尉が、老の波の上に立つて、青海に浮みつゝ、海青樂を舞ふべしや。シテ謠「蘆原の、地謠「國も動かじ萬代までに。

(中入)

後シテ謠「山影の、うつるか水の青き海の、地謠「波の鼓の海青樂。(眞ノ序ノ舞)シテ謠「西の海、檝

が原の波間より、地謡「現れ出でし住吉の神、住吉の神住吉の、シテ謡「現れ出でし住吉の、地謡「住吉の、神の力のあらん程は、よも日本をば従へさせ給はじ。速に浦の波、立ち歸り給へ樂天。

上歌地謡「住吉現じ給へば、住吉現じ給へば、伊勢石清水賀茂春日、鹿島三島諏訪熱田、安藝の嚴島の明神は、娑竭羅龍王の第三の姫宮にて、海上に浮んで、海青樂を舞ひ給へば、八大龍王は八りんの曲を奏し、空海に翔りつゝ、舞ひ遊ぶ小忌衣の、手風神風に、吹きもどされて唐船は、こゝより漢土に歸りけり。實に有難や神と君、實に有難や神と君が代の、動かぬ國ぞ久しき。動かぬ國ぞ久しき。

石清水一男山八幡宮八大龍王一春日明神に准ず　八りんーりんはいんの訛八音は金石絲竹匏土革

實盛

梗概　平家の侍齋藤別當實盛の亡靈、なにがし上人の回向を受けて、彌陀の來迎に預るよしを作る。後半實盛が最後の合戰を物語る所は、平家物語の本文に據れり。（二番目）

シテ　實盛（前は老翁）　ワキ　僧

ワキツレ僧二人

ワキ、サシ謠「それ西方は十萬億土、遠く生るゝ道ながら、こゝも己心の彌陀の國、貴賤群集の稱名の聲、ワキ、ツレ謠「日々夜々の法の場、ワキ謠「げにも誠に攝取不捨の、ツレ謠「誓に誰か、ワキ謠「殘るべき。三人上歌謠「獨なほ、佛の御名を尋ね見ん。佛の御名を尋ね見ん。おのおの歸る法の場、知るも知らぬも心ひく、誓の網に漏るべきや。知る人も、知らぬ人をも渡さばや、彼國へゆく法の船、浮むもやすき道とかや。浮むもやすき道とかや。シテ、サシ謠「笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。あら尊や今日も又、紫雲の立つ

西方十萬億土―極樂淨土　攝取不捨―念佛する衆生を佛の救ひて捨て給はずとの意

笙歌遙聞孤雲上　聖衆來迎落日前―大江定基入道寂照辭世の詩句

て候ぞや。詞鐘の音、念佛の聲の聞え候。さては聽聞も今なるべし。さなきだに立居苦しき老の波の、寄もつかずは法の場に、よそながらもや聽聞せん。謡一念稱名の聲の内には、攝取の光明曇らねども、老眼の通路なほ以て明かならず。よし〳〵少しは遲くとも、こゝを去る事遠かるまじや。南無阿彌陀佛。

ワキ詞「いかに翁、さても毎日の稱名に怠る事なし。されば志の者と見る所に、おことの姿餘人の見る事なし。誰に向つて何事を申すぞと皆人不審し給り。今日は御事の名をなのり候へ。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天ざかる、鄙人なれば人がましやな、名もあらばこそ名のりもせめ、只上人の御下向、偏に彌陀の來迎なれば、謡かしこうぞ長生して、詞此稱名の時節にあふ事、謡盲龜の浮木優曇華の、花待ち得たる心地して、老の幸身に越え、悦の涙袂に餘る。されば此身ながら、安樂國に生るゝかと、無比の歡喜をなす所に、輪廻忘執の閻浮の名を、又あらためて名のらん事、口惜しうこそ候へとよ。ワキ詞「げに〳〵翁の申す所ことわり至極せりさりながら、一つは懺

天ざかる―鄙の枕詞　盲龜の浮木―盲龜大海中に浮木を得る事　優曇華―三千年一たび現ずといふめでたき花、前者と共に逢ふ事稀なる譬　閻浮―この世界　懺悔の廻心―罪を悔いて思ひ愼む心

の廻心ともなるべし。たゞ御事が名を名のり候へ。シテ詞「さては名のらでは叶ひ候ふまじきか。ワキ詞「中々のこと急いで名のり候へ。シテ詞「さらば御前なる人を除けられ候へ　近う參りて名のり候べし。ワキ詞「もとより翁の姿餘人の見る事はなけれども、所望ならば人を除くべし、近う寄りて名のり候へ。シテ詞「昔長井の齋藤別當實盛は、此篠原の合戰に討たれぬ。聞しめし及ばれてこそ候らめ。ワキ詞「それは平家の侍、弓取つての名將、其軍物語は無益、唯御事の名を名のり候へ。シテ詞「いやさればこそ其實盛は、此御前なる池水にて鬢鬚をも洗はれしとなり。されば其執心殘りけるか、今も此あたりの人には、幻の如く見ゆると申し候。ワキ詞「さて今も人に見え候か。シテ謠「深山木の其梢とは見えざりし、櫻は花に顯はれたる、老木をそれと御覽ぜよ。ワキ謠「不思議やさては實盛の、昔を聞つる物語、人の上ぞと思ひしに、身の上なりける不思議さよ。扨は御事は實盛の、其幽靈にてましますか。シテ詞「われ實盛が幽靈なるが、こゝは冥途にありながら、魄は此世にとどまりて、ワキ謠「なほ執心の闇浮の世に、シテ詞「二百餘歳の程は經れども、ワキ謠「浮み

長井―武藏
篠原―加賀

深山木の―詞花集賴政の歌末句あちはれにけり

もやらで篠原の、シテ謡「池のあだ波よるとなく、ワキ謡「晝とも分かで心の闇の、シテ謡「夢ともなく、ワキ謡「現ともなき、シテ謡「思ひをのみ、上歌篠原の、草葉の霜の翁さび、地謡「草葉の霜の翁さび、人な咎めそ假初に、あらはれ出でたる實盛が　名を洩し給ふなよ、なき世語も恥とて、御前を立ち去りて、行くかと見れば篠原の、池の邊にて、姿は幻となりて、失せにけり　幻となりて、失せにけり。（中入）

ワキ謡「いざや別時の稱名にて、彼幽靈を弔はんと、三人上歌「篠原の、池のほとりの法の水、池のほとりの法の水、深くぞ賴む稱名の、聲すみわたる弔ひの、初夜より後夜に至るまで、心も西へ行く月の、光と共に曇無き、鉦を鳴らして夜もすがら。ワキ謡「南無阿彌陀佛、南無彌陀佛。

後シテ謡「極樂世界に行きぬれば、長く苦界を越え過ぎて、輪廻の故郷隔たりぬ、歡喜の心いくばくぞや。所は不退の所、命は無量壽佛となう、賴もしや念々相續する人は、地謡「念念毎に往生す。シテ謡「南無と言つぱ、地謡「卽ち是歸命、シテ謡「阿彌陀と言つぱ、地謡「其行

鶴さび云々―伊勢物語の歌詞

別時の稱名―臨時の念佛

不退―退轉せざること卽ち衰へざることなり　南無といつは云云―普勸玄義といふ書の語

此義を以ての故に、シテ謡「必ず往生を得べしとなり。地謡「ありがたや。

ワキ謡「不思議やな白みあひたる池の面に、幽に浮み寄る者を、見ればありつる翁なるか、甲冑を帯する不思議さよ。シテ謡「埋木の人知れぬ身と沈めども、心の池の言ひがたき、修羅の苦患の数々を、浮めてたばせ給へとよ。ワキ謡「是ほどにまのあたりなる姿言葉を、餘人は更に見も聞きもせで、シテ詞「只上人のみ明に、ワキ謡「見るや姿も殘の雪の、シテ謡「鬢髭白き老武者なれども、ワキ謡「其出立は花やかなる、シテ謡「粧殊に曇無き、ワキ謡「月の光、シテ謡「燈火の影、上歌地謡「闇からぬ、夜の錦の直垂に、夜の錦の直垂に、萌黄匂の鎧著て、黄金作のたち刀、今の身にてはそれとても、何か寶の、池の蓮の臺こそ寶なるべけれ。けにや疑はぬ、法の教は朽ちもせぬ、黄金の言葉多くせば、などかは至らざるべき。などかは至らざるべき。

シテ、ツレ謡「それ一念彌陀佛即滅無量罪、地謡「即ち廻向發願心。心を殘す事勿れ。シテ、サシ謡「時到つて今宵逢ひ難き御法を受け、地謡「慚愧懺悔の物語、猶も昔を忘れかねて、忍ぶに似

修羅―六道の一

夜の錦―末段「故郷へは錦を著て」云々の伏服也、其條（一一三頁）の頭註參照

一念彌陀佛即滅無量罪―雙王論の語

たる篠原の、草の陰野の露と消えし、有樣語り申すべし。シテ詞「さても篠原の合戰破れしかば、源氏の方の手塚太郎光盛、木曾殿の御前に參りて申すやう、光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ、大將かと見ればつゞく勢もなし、又侍かと思へば錦の直垂を著たり　名のれ〳〵と責むれども終に名のらず、聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿、あつぱれ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん、然らば鬢鬚の白髮たるべきが、黑きこそ不審なれ、樋口次郎は見知りたるらんとて召されしかば、樋口參り只一目見て、涙をはらはらと流いて謠あなむざんやな、齋藤別當にて候ひけるぞや、實盛常に申しゝは、六十に餘りて軍をせば、若殿原と爭ひて、先をかけんも大人氣なし、又老武者とて人々に、あなづられんも口惜かるべし、鬢鬚を墨に染め、若やぎ討死すべきよし常々申し候ひしが　誠に染めて候、洗はせて御覽候へと、申しもあへず首を持ち、地謠御前を立つてあたりなる、此池波の岸に臨みて、水の綠も影うつる、柳の糸の枝たれて　上歌氣霽はれて風新柳の髮を梳り、氷消えては浪舊苔の鬚を洗ひて見れば　墨は流れ落ちて、もとの

坂東聲―東國訛リ

樋口の次郎―兼光

氣霽風梳新柳髮
氷消浪洗舊苔鬚
―都良香の詩句
朗詠集に出づ

白髪となりにけり。げに名を惜む弓取は、誰もかくこそ有るべけれや。あらやさしやとて、皆感涙をぞ流しける。ツヽ　又實盛が、錦の直垂を著る事、私ならぬ望なり。實盛都を出でし時、宗盛公に申すやう、故郷へは錦を著て、歸るといへる本文あり。實盛生國は、越前の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏の長井に、居住仕り候ひき、此度北國に、罷り下りて候はゞ、定めて討死仕るべし、老後の思出これに過ぎじ、御免あれと望みしかば、赤地の錦の、直垂を下し賜はりぬ。ヲヲ語「然れば古歌にももみぢ葉を、地謡「分けつゝ行けば錦著て、家に歸ると、人や見るらんと詠みしも、此本文の心なり。されば古への、朱買臣は、錦の袂を會稽山に飜へし、今の實盛は名を北國の巷に揚げ、隱れ無かりし弓取の、名は末代に有明の、月の夜すがら、懺悔物語まうさん。ロンギけにや懺悔の物語、心の水の底清く、濁を殘し給ふなよ。ヲヲ語「其執心の修羅の道、廻り〳〵て又こゝに、木曾と組まんとたくみしを、手塚めに隔てられし、無念は今にあり。地謡「つゞく兵誰々と、名のる中にも先進む、ヲヲ語「手塚太郎光盛、地謡「郎等は主を

故郷へは云々―史記項羽本紀に富貴不歸故郷如衣繡夜行

もみぢ葉を―後撰集の歌

朱買臣―前漢の人家貧なりしが後會稽の太守となる

討たせじと、シテ謡「かけ隔たりて實盛と、地謡「押し竝べて組む所を、シテ謡「あつぱれおのれは、日本一の剛の者と、ぐんでうずよとて、鞍の前輪に押しつけて、首かき切つて捨てゝけり。地謡「其後手塚太郎、實盛が弓手にまはりて、草摺を疊みあげて、二刀さす所を、むずと組んで二疋が間に、どうと落ちけるが、シテ謡「老武者の悲しさは、地謡「軍には爲疲れたり、風にちどめる枯木の力も折れて、手塚が下になる所を、郎等は落ち合ひて、終に首をば掻き落されて、篠原の土となつて、影も形もなき跡の、影も形も南無阿彌陀佛、弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。

ぐんでうずよ―組んで失すよ
草摺―鎧の名どころ、腰の周に垂れたり

楊貴妃

梗概　白氏文集に、長恨歌として唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵幸せし事を作れる長編の詩あり。其中に方士が貴妃の魂を仙島に求むる條あり。此れを材料として脚色せるものこのなり。詩中の語句を點綴して文飾とす。（三番目）

シテ　楊貴妃の靈　ワキ　方士

ワキ次第謡「わが未知らぬ東雲の、わが未知らぬ東雲の、道を何處と尋ねん。囃子は唐土玄

玄宗―明皇帝號　宗第三子　方士―仙術を行ふ人　楊家の娘―楊玄琰の女　上碧落下黃泉―天地のこと此語長恨歌に據る　蓬萊宮―東海にありといふ仙島　太乙眞人此に居る　尋ねゆく―源氏物語桐壺卷の歌下句魂のありかをそことしるべく

も、幻もがなつてにても、魂の在所は其處としも、波路を分けて行く舟の、仄に見えし島山の、草の假寢の枕ゆふ、常世の國に著きにけり。常世の國に著きにけり。詞急ぎ候程に、蓬萊宮に著きて候。此所にて委く尋ねばやと存じ候。狂言シカ〳〵

ワキ謡有りし教に隨つて蓬萊宮に來て見れば、宮殿盤々として更に邊際もなく、莊嚴巍々としてさながら七寶をちりばめたり、漢宮萬里の粧ひ、長生殿山の有樣も、是には更になぞらふべからず。あら美しの所やな。詞又教の如く宮中を見れば、太眞殿と額の打たれたる宮あり。まづ此所に徘徊し、事の由をも伺はばやと存じ候。

シテ謡「昔は驪山の春の園に、共に詠めし花の色、移れば變るならひとて、今は蓬萊の秋の洞に、ひとり詠むる月影も、濡るゝ顏なる袂かな。あら戀しの古へやな。

ワキ謡唐の天子の勅の使、方士是まで參りたり、玉妃は內にましますか。シテ謡「何唐帝の使とは、何しにこゝに來れるぞと、九華の帳を押し除けて、玉の簾を撥けつゝ、ワキ謡「立ち出で給ふ御姿シテ謡「雲の鬢づら、ワキ謡花の顏ばせ、シテ、ワキ謡「寂寞たる御眼のうちに、

七寶—諸說あり普通には金銀瑠璃珊瑚琥珀瑪瑙を云ふ
長生殿山—宮殿の名
太眞殿—楊貴妃の魂の住む所

梨花一枝云々―このあたり長恨歌の語を用ゐる　太液―池の名　未央―宮殿の名　六宮―後宮

まさり草―菊の異名、掛詞として用ひ次にかれがれの縁語を導く

涙を浮めさせたまへば、上歌地謡「梨花一枝、雨を帯びたる粧の、雨を帯びたる粧の、太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑も、是にはいかでか優るべき。實にや六宮の粉黛の、顔色の無きも理や。顔色の無きも理や。

ワキ詞「如何に申し上げ候、さても后宮世にまし〳〵し時だにも、朝政は怠り給ひぬ。況やかくならせ給ひて後、只ひたすらの御歎に、今は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せ是まで尋ね参り、御姿を見奉る事、謡只是君の御志、淺からざりし故と思へば、いよ〳〵御痛はしうこそ候へ。シテ詞「げに〳〵汝が申す如く、今はかひなき身の露の、有るにもあらぬ魂のありかを、是まで尋ね給ふ事、御情には似たれども、謡訪ふにつらさのまさり草、かれ〴〵ならば中々の、便の風は恨めしや。又今更の戀慕の涙、舊里を思ふ魂を消す。

ワキ謡「さてしも有るべき事ならねば、急ぎ歸りて奏聞せん。詞さりながら、御形見の物をたび給へ。シテ詞「是こそありし形見よとて、玉の釵とり出でて、謡方士に與へたびけれ

ば、ワキ詞「いやとよ是は世の中に、類有るべき物なれば　いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず、契り給ひし言の葉あらば、謡それをしるしに申すべし。シテ詞「實に〳〵是も理なり。思ひぞ出づる我も又、謡其初秋の七日の夜、二星に誓ひし言の葉にも、地謡「天に在らば願はくは、比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは、連理の枝とならんと、誓ひし言を密に傳へよや。私語なれども、今洩れ初むる涙かな。上歌されども世の中の、されども世の中の、流轉生死の習とて、其身は馬鬼に留まり、魂は仙宮に至りつゝ、比翼も友を戀ひ、獨翅を片敷き　連理も枝朽ち」忽ち色を變ずとも、同じ心の行方ならば、終の逢ふ瀬を頼むぞと語り給へや。

ロンギ「さらばといひて出舟の　伴ひ申し歸るさと、思はどうれしさの、猶如何ならん其心。シテ「我は又なに中々に三重の帶、廻り逢はんも知らぬ身に、よしさらば暫し待て、有りし夜遊をなすべし。地謡「實にや驪山の宮の内、月の夜遊の羽衣の曲、シテ謡「其かざしにて舞ひしとて　地謡「又取りかざし、シテ謡「さす袖の、地謡「驚破霓裳羽衣の曲、驚破霓裳

二星―織女牽牛
天に在らば云々―之れ亦長恨歌の語
比翼の鳥は一二鳥片羽宛ありて一體となる
連理の枝―二木相接して一樹となれる也、夫婦の契を譬ふ

羽衣の曲、そゞろに濡るゝ袂かな。シテ謡「何事も夢幻の戯れや。地謡「あはれ胡蝶の舞ならん。

シテ、クリ謡「それ過去遠々の昔を思へば、いつを衆生の始と知らず。地謡「未來永々の流轉更に生死の終もなし、シテ、サシ謡「しかるに二十五有の内、何か生者必滅の理に洩れん。地謡「先天上の五衰より、須彌の四州のさま〴〵に、北州の千年終に朽ちぬ。シテ謡「況や老少不定の境、地謡「歎きの中の歎きとかや。シテ、クセ謡「我も其かみは、上界の諸仙たるが、往昔の因ありて、假に人界に生れ來て、楊家の深窓に養はれ、いまだ知る人なかりしに、君聞し召されつゝ急ぎ召し出だし、后宮に定め置き給ひ偕老同穴のかたらひも、緣盡きぬれば徒に、又此島にたゞ獨、歸り來りてすむ水の、あはれはかなき身の露の、たまさかに逢ひ見たり。靜に語れ憂き昔。シテ謡「さるにても、思ひ出づれば恨ある、地謡「其文月の七日の夜、君とかはせし睦言の、比翼連理の言の葉も、かれ〴〵になる私語の、笹の一夜の契だに、名殘は思ふならひなるに、ましてや年月、馴れて程經る世の中に、さ

二十五有―二十五所の世界死後もこゝを廻りて生死盡きずと也
五衰―天人命終の時に現ずる衰滅の相譬喩あり
四州―四大部洲ともいふ東弗于逮西瞿耶尼閻浮提北鬱單越
北州―四州の一
胡蝶の舞―舞樂の名、莊子の胡蝶の夢の故事を合めたり
世の中にさらぬ別の―伊勢物語の歌末句、なくもがな千代もと所る人の子のため

らぬ別のなかりせば、千代も人には添ひてまし。よしそれとても遁れ得ぬ、會者定離ぞと聞く時は、逢ふこそ別なりけれ。羽衣の曲、（序ノ舞）シテ謡、羽衣の曲、稀にぞ返す少女子が、地謡「袖打ち振れる心しるや。心しるや。シテ謡「戀しき昔の物語、地謡「戀しき昔の物語、盡さば月日も移り舞の、しるしの釵又賜はりて、暇申してさらばとて、勅使は都に歸りければ、シテ謡「さるにてもさるにても、地謡「君には此世逢ひ見ん事も、蓬が島つ鳥、浮世なれども戀しや昔、はかなや別の、常世の臺に、伏し沈みてぞ留まりける。

蓬が島―蓬萊のこと　島つ鳥―鵜の枕詞、浮世のうに係る

玉葛

梗概

これは源氏物語に基ける作なり。玉葛内侍は夕顔の上の子なるが、四歳の折乳母の夫太宰少貳に伴はれて筑紫に下りしが、年經て後少貳死したれば乳母は玉葛を伴ひて都に上り、初瀬の觀音に詣づ。たま〳〵夕顔の侍女たりし右近とめぐり會ふ。かくて玉葛は源氏の君に迎へ取られ、六條院に住む。後内侍となり、又髭黒大將の妻となる。この曲は玉葛の幽靈現れて、昔語をなし、行脚僧の弔ひを受けて成佛するよしに作る（四番目）

シテ　玉葛内侍（前は女舟人）　ワキ　僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は南都に候ひて、靈佛靈社殘りなく拜みめぐりて候。又是より初瀬詣と志して候。道行謠「楢の葉の、名におふ宮の古ことを、名におふ宮の古ことを、思ひつゞけて行末は、石上寺ふし拜み、法のしるしや三輪の杉、山本ゆけば程もなく、初瀬河にも著きにけり。初瀬河にも著きにけり。詞「急ぎ候程に、初瀬川に著

初瀬―長谷の觀音の―古今集文屋有季の歌　楢の葉の―古今集の歌　初句神無月時雨ふりおける末句古ことぞこれ萬葉集の事をいふ　三輪の杉―古今集に「我宿は三輪の山本戀しくはとむらひきませ杉たてる門」とあり、しるしつゝといふ

舟人も一玉篇の歸京する折少貳の假のよめる歌末句聲のきこゆる

海士小舟―初瀬の枕詞

きて候。心靜に參詣申さうずるにて候。

シテ謡一聲謡程もなき、舟の泊や初瀬川、のぼりかねたる氣色かな。ツシ舟人も誰を戀ふとか大島の、うらかなしげに聲たてゝ、こがれ來にける古の、果しもいさや白波の、よるべいづくぞ心の月の、御舟はそこと果しもなし。下歌只われひとり水馴棹、しづくも袖のいろにのみ、上歌暮れてゆく、秋の涙か村時雨、秋の涙か村時雨、古河野邊のさみしくも、人や見るらん身の程も、なほ浮舟の楫を絕え、綱手かなしき類かな　綱手かなしき類かな。ワキ詞「不思議やな此河は山川の、さも淺くしてしかも漲る岩間づたひを、小さき舟に棹さす人を見れば女なり。そも御身は如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此初瀬寺に詣で來る者なり。又此川は所から、謡名に流れたる海士小舟、初瀬の川とよみおける、其河の邊のえにしあるに、不審はなさせ給ひそとよ。ワキ詞「あら面白の言葉やな、げに海士小舟初瀬とは、古き詠めの言葉なるべしさりながら、又其類も浪小舟、謡さして謂のあるやらん。シテ謡「いや何事のそれよりも、先御覽ぜよ折柄に、上歌地謡「ほの見えて、色づく木

木の初瀬山、色づく木々の初瀬山、風もうつろふ薄雲に、日影も匂ふ一しほの、さぞな氣色もかく河の、浦わの眺めまで、けに類なや面白や。川音聞えて里つゞき、奥もの深き谷の戸に、つらなる軒を絕々の、霧間に殘す夕かな。霧間に殘す夕かな。かくて御堂に參りつよ、かくて御堂に參りつよ、補陀洛山も目のあたり、四方のながめも妙なるや、紅葉のいろに常磐木の、二本の杉に著きにけり。二本の杉に著きにけり。

シテ詞「是こそ二本の杉にて候へ能々御らん候へ。ワキ詞「さては二本の杉にて候ひけるぞや。謠二本の杉の立所を尋ねずは、詞古河のべに君を見ましやとは　何とよまれたる古歌にて候ぞ。シテ詞「是は光源氏のいにしへ、玉葛の内侍此初瀬に詣で給ひしを、右近とかや見奉りて詠みし歌なり。謠共にあはれと思召して御跡を、よく弔ひ給ひ候へ。

クリ地謠「けにや有りし世を、猶夕顔の露の身の、消えにしあとはなか〳〵に、何なでしこの形見も憂し。シテ・ツレ謠「あはれ思ひの玉葛、かけてもいさや知らざりし。地謠「心盡しの木の間の月、雲居のよそにいつしかと、鄙の住居の憂きのみか、さてしも堪へてあるべき身

二本杉―古今集の旋頭歌に「初瀬川古河野邊に二本ある杉年を經て又も逢見ん二本ある杉」

を、シテ謡「猶しをりつる人心の、地謡「あらき浪風立ちへだて、クセたよりとなれば早舟に、乗り後れじと松浦潟、唐船を慕ひしに、心ぞかはる我はたど　浮島を、漕ぎ離れても行く方や、いづく泊と白波に、響の灘も過ぎ、思に障る方も無し。かくて都の内とても、われは浮きたる舟のうち、なほや憂き目を水鳥の、路にまどへる心地して、たづきも知らぬ身の程を、思ひ歎きて行き悩む、足曳の大和路や、唐までも聞ゆなる、初瀬の寺に詣でつゝ、シテ謡「年も經ぬ、祈る契は初瀬山、地謡「尾上の鐘のよそにのみ、思ひ絶えにし古の、人に二度ふた本の、杉のたちどを尋ねずは、古川のべと詠めける。今日の逢ふ瀬も同じ身を、思へば法の衣の、玉ならば玉曇、迷ひを照し給へや。

ロンギ地謡「げに古き世の物語り、聞けば涙もこもり江に、こもれる水のあはれかな。シテ謡「あはれとよ　思ひは初めよ初瀬川、早くも知るや淺からぬ、地謡「緣にひかるよ、シテ謡「心とて、地謡「たゞ賴むぞよ法の人、弔ひ給へ我こそは、涙の露の玉の名と、名のりもやらずなりにけり。名のりもやらずなりにけり。（中入）

松浦潟云々―佐用姫の故事
浮島を―此歌玉篦の伴へる兵部の君といふ女の詠めるなり末句知らずもあるかな
響の灘―筑前の海
年も經ぬ―新古今集の歌末句よその夕暮
早くも知るや！―右近の歌の返しに玉篦の詠める瀬川早くの事は知られねども今日のあふせにみさへ流れぬとあり

ワキ詞「さては玉葛の内侍假に現れ給ひけるぞや。謡たとひ業因おもくとも、上歌照らさざらめや日の光、照らさざらめや日の光、大慈大悲の誓ある、法の燈明かに、亡き影いざや弔はん。亡き影いざや弔はん。

後シテ謡「戀ひわたる、身はそれならで玉葛、いかなるすぢを尋ね來ぬらん。尋ねても、法の教に逢はんとの、心ひかるゝ一筋に、其まゝならで玉葛の、亂るゝ色は恥かしや。つくも髪、つくも髪、我や戀ふらし面影に、地謡「立つやあだなる塵の身は、シテ謡「拂へど拂へど執心の、地謡「ながき闇路や、シテ謡「黑髪の、地謡「飽かぬやいつの寢亂髪、シテ謡「むすほほれゆく思ひかな。

地謡「げに妄執の雲霧の、げに妄執の雲霧の、迷ひもよしや憂かりける、人を初瀨の山颪、はげしく落ちて、露も涙もちり〳〵に秋の葉の身も、朽ち果てぬ恨めしや。シテ謡「恨は人をも世をも、地謡「恨は人をも世をも、思ひ思はじ唯身ひとつの、報いの罪やかず〳〵の、憂き名に立ちしも懺悔の有樣、あるひは湧き返り、岩もる水の思ひに咽び、あるひは焦

戀ひわたる―源氏の君の歌二句それなれどつくも髪―老人の乱れたる髪をいふ、伊勢物語の歌に「もゝとせに一とせ足らぬつくも髪我を戀ふらし面影に見ゆ」

るよや身より出る、玉と見るまで包めども、螢に亂れつる、影もよしなや恥かしやと、此妄執をひるがへす、心は眞如の玉葛、心は眞如の玉葛、長き夢路は覺めにけり

螢に亂れつる影―兵部卿宮玉葛に通ひし折源氏の君螢を玉鬘の前に放ちしこと螢の巻にあり

融（とほる）

梗概

源融は嵯峨天皇の御子にして、貞觀の頃左大臣たり。館を河原院といへり。傳ふらく、池をほり水を湛へて、陸奥の鹽釜の浦を模し、而も海水を難波より運ばせ、鹽焼くさま迄もなしたりといふ。後大臣の靈、この院に住みしともいふことと今昔物語に見ゆ。この曲は卽ち融の幽靈を出してありし昔を物語らしめたるなり。（五番目）

シテ　融（前は鹽汲の尉）　ワキ　僧

ワキ詞「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上り候。下歌詣思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け、舟路を渡り山を越え、千里も同じ一足に、千里も同じ一足に、上歌夕を重ね朝毎の、夕を重ね朝毎の、宿の名殘も重なりて、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早都に著きて候。此あたりをば六條河原院とやらん申し候。暫く休らひ一見せばやと思ひ候。

六條河原院―拾芥抄に六條坊門南萬里小路東

陸奥はいづくはあれど―古今集歌下句浦こぐ舟の綱手かなしも　水の面に―古今集の句、末句最中なりにける　諸白髪―友白髪に同じ夫婦老弱となること

シテ謡「月も早、出汐になりて鹽竈の、うらさび渡る氣色かな。サシ陸奥はいづくはあれど鹽竈の、恨みて渡る老が身の、よるべもいさや定めなき、心も澄める水の面に、照る月なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なる、實にや移せば鹽竈の、月も都の最中かな。下歌秋は半身は既に、老い重なりて諸白髪、上歌雪とのみ積りぞ來ぬる年月の、積りぞ來ぬる年月の、春を迎へ秋を添へ、時雨るょ松の風までも、我が身の上と汲みて知る、汐馴衣袖寒き、浦わの秋の夕かな。浦わの秋の夕かな。

ワキ詞「如何にこれなる尉殿、御身は此あたりの人か。シテ詞「さん候、此所の汐汲にて候。ワキ詞「不思議やこょは海邊にてもなきに、汐汲とは誤りたるか尉殿。シテ詞「あら何ともなや。さてこょをば何處と知し召されて候ぞ。ワキ詞「此所をば六條河原院とこそ承りて候へ。シテ詞「河原院こそ鹽竈の浦候よ。融の大臣陸奥の千賀の鹽竈を、都の内に移されたる海邊なれば、謡名に流れたる河原院の、河水をも汲め池水をも汲め、こょ鹽竈の浦人なれば、汐汲となどおほさぬぞや。ワキ詞「實に〳〵陸奥の千賀の鹽竈を、都の内に移された

籬が島―鹽竈の浦の沖にあり

孤舟に歸る―三體詩に五湖歸去孤舟月賈島―唐代の詩人推すも敲くも―賈島が僧敲月下門の敲を始め推とし後敲と改むるにつきて苦心せること

る事承り及びて候。さてはあれなるは籬が島候か。シテ詞「さん候あれこそ籬が島候よ。融の大臣常に御舟を寄せられ、御酒宴の遊舞さま〴〵なりし所ぞかし。や、月こそ出でて候へ。ワキ詞「實に〳〵月の出でて候ぞや。あの籬が島の森の梢に、鳥の宿し囀りて、詩文に移る月影までも、謡孤舟に歸る身の上かと、思ひ出でられて候。シテ詞「何と只今の面前の景色が御僧の御身に知らるゝとは、若も賈島が言葉やらん。謡鳥は宿す池中の樹、ワキ謡僧は敲く月下の門、シテ謡推すも、ワキ謡敲くも、シテ謡古人の心、シテワキ謡今目前の秋暮にあり。上歌地謡實にや古へも、月には千賀の鹽竈の、月には千賀の鹽竈の、浦わの秋も半にて、松風も立つなりや。霧の籬の島隱れ、いざ我も立ち渡り、昔の跡を陸奥の、千賀の浦わを詠めんや。千賀の浦わを詠めん。ワキ詞「鹽竈の浦を都の内に移されたる謂御物語り候へ。シテ詞「嵯峨天皇の御宇に、融の大臣陸奥の千賀の鹽竈の眺望を聞し召し及ばせ給ひ、此所に鹽竈を移し、あの難波の御津の浦よりも、日毎に潮を汲ませ、こゝにて鹽を燒かせつゝ、一生御遊の便とし給ふ。然れども其後は相續して翫ぶ人も

無ければ、浦は其まゝ干汐となつて、謡池邊に淀む溜水は、雨の殘りの古き江に、落葉散り浮く松陰の、月だに澄まで秋風の、音のみ殘るばかりなり。されば歌にも、君まさで煙絶えにし鹽竈の、うらさみしくも見え渡るかなと、貫之も詠めて候。地謡實にや眺むれば、月のみ滿てる鹽竈の、浦寂しくも荒れはつる、跡の世までもしほじみて、老の波も歸るやらん。あら苦戀しや。上歌戀しや戀しやと、慕へども歎けども、かひもなぎさの浦千鳥、音をのみ鳴くばかりなり。音をのみ鳴くばかりなり。

ワキ詞「如何に尉殿。見え渡りたる山々は皆名所にてぞ候らん御教へ候へ。シテ詞「さん候。皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし。ワキ詞「先あれに見えたるは音羽山候か。シテ詞「さん候。あれこそ音羽山候よ。ワキ詞「音羽山音に聞きつゝ逢坂の、關のこなたにとよみたれば、逢坂山も程近うこそ候らめ。シテ詞「仰せのごとく關のこなたにとは詠みたれども、あなたにあたれば逢坂の、山は音羽の峯に隱れて、謡此邊よりは見えぬなり。ワキ謡「さてさて音羽の嶺つゞき、次第々々の山竝の、名所々々を語り給へ。シテ詞「語りも盡さじ言

君まさで―古今集の歌

しほじみ―永く辛苦すること

音羽山―清水寺の山

音羽山云々―古今集在原元方の歌末句年をふるかな

の葉の歌の中山清閑寺、謡今熊野とはあれぞかし。ワキ謡さて其末につゞきたる、里一村の森の木立、シテ詞それをしるべに御覽ぜよ。まだき時雨の秋なれば、紅葉も青き稻荷山、ワキ謡風も暮れ行く雲の端の、梢も青き秋の色。シテ詞今こそ秋よ名にしおふ、春は花見し藤の森、ワキ謡緑の空も影青き、野山につゞく里は如何に。シテ詞あれこそ夕されば、ワキ謡野邊の秋風、シテ謡身にしみて、ワキ謡鶉鳴くなる、シテ謡深草山よ。地謡木幡山、伏見野、竹田、淀鳥羽も見えたりや。ロンギ詠めやる、其方の空は白雲の、はや暮れ初むる遠山の、嶺も木深く見えたるは、如何なる所なるらん。シテ謡あれこそ大原や、小鹽の山も今日こそは、御覽じ初めつらめ。猶々問はせ給へや。地謡聞くにつけても秋の風、吹く方なれや峰つゞき、西に見ゆるは何處ぞ。シテ謡秋も早、秋も早、半更け行く松の尾の、嵐山も見えたり。地謡嵐吏け行く秋の夜の、空澄み上る月影に、シテ謡さす汐時もはや過ぎて、地謡隙もおし照る月にめで、シテ謡興に乘じて、地謡身をば實に、忘れたり秋の夜の、長物語よしなや、まづいざや汐を汲まんとて、持つや田子の浦、東からげの汐

歌の中山清閑寺―清水寺の南
今熊野―同觀音あり

脇の森―伏見の北
夕されば―千載集俊成卿の歌末句深草の里

大原や―業平の歌下句神代の事も思ひ出づらめ

田子―桶なり鍛冶河の地名に官掛く
東からげ―裾をからぐるこ

望汐―十五夜の潮湖

白衣の袖―天人のこと

雪を廻らす―廻雪といふ舞曲

曲水―三月上巳の宴

衣、汲めば月をも、袖に望汐の、汀に歸る波のよるの、老人と見えつるが　汐曇にかき紛れて、跡も見えずなりにけり。跡をも見えずなりにけり。（中入）　ワキ上歌謡「磯枕、苔の衣を片敷て、苔の衣を片敷て　岩根の床に夜もすがら、猶も奇特を見るやとて、夢待ちがほの旅寢かな。夢待ちがほの旅寢かな。

後シテ謡「忘れて年を經しものを、又いにしへに歸る波の、滿つ鹽竈の浦人の、今宵の月を陸奥の、千賀の浦わも遠き世に、其名を殘す大臣、融の大臣とは我が事なり。われ鹽竈の浦に心を寄せ、あの籬が島の松陰に、明月に舟を浮め、月宮殿の白衣の袖も、三五夜中の新月の色、千重ふるや、雪を廻らす雲の袖、地謡「さすや桂の枝々に、シテ謡「光を花と散らす粧ひ、地謡「こゝにも名に立つ白河の波の、シテ謡「あら面白や曲水の盃、地謡「浮けたり浮けたり遊舞の袖。（早舞）ロンギあら面白の遊樂や。そも明月の其中に、まだ初月の宵々に、影も姿も少なきは、如何なる謂なるらん。シテ謡「それは西岫に、入日のいまだ近ければ、其影に隱さるよ、たとへば月の有る夜は、星の薄きが如くなり。地謡「青陽の春の始には、

シテ謡「霞む夕の遠山、地謡「黛の色に三日月の、シテ謡「影を舟にも譬へたり。地謡「又水中の遊魚は、シテ謡「釣と疑ふ、地謡「雲上の飛鳥は、シテ謡「弓の影とも驚く。地謡「一輪も降らず、シテ謡「萬水も昇らず、地謡「鳥は地邊の樹に宿し、シテ謡「魚は月下の波に伏す。地謡「聞くとも飽かじ秋の夜の、シテ謡「鳥も鳴き、地謡「鐘も聞えて、シテ謡「月もはや、地謡「影傾きて明方の、雲となり雨となる、此光陰に誘はれて、月の都に入り給ふ粧、あら名殘惜しの面影や、名殘惜しの面影。

内五

養老

梗概

美濃國當耆郡多度山美泉の事、續日本紀元正天皇の詔に見え、孝子養老の事、十訓抄などに記す。この曲は勅使養老の瀧に向はれしに、山神出現して、藥の水を捧ぐる事を作る。酒及び菊水の故事を以て文飾とす。時代を雄略天皇の御代とし、靈泉を本巢郡とせるは肯ひ難し。（脇能）

シテ　山神の靈（前は父）　ツレ　子

ワキ　勅使

三人次第「風も靜に楢の葉の、風も靜に楢の葉の、鳴らさぬ枝ぞのどけき。ワキ詞「抑是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州本巢郡に、不思議なる泉出でくる由を奏聞す、急ぎ見て參れとの宣旨に任せ、只今濃州本巢郡へと急ぎ候。三人道行「治まるや、國

四方に道あるー交通の開けたるにたとへて君徳の洽きを併せ云ふ

富み民も豊にて、國富み民も豊にて、四方に道ある關の戸の、秋津島根やあまざかる、鄙の境に名を聞きし、美濃の中道ほどなく、養老の瀧に著きにけり　養老の瀧に著きにけり。

茅店の云々ー三體詩に鷄聲茅店月人迹板橋霜　臭山の深谷の下のためしー商陽鄜縣の菊水延齢の故事　長生の家ー和漢朗詠集に長生殿裏春秋富不老門外日月遅

シテ、ツレ「年を經し、美濃の御山の松陰に、猶澄む水の綠かな　ツレ謡「通ひなれたる老の坂、一聲　謡「行く事易き心かな。シテ、シ謡「故人眠早く覺めて、夢は六十の花に過ぎ、シテ、ツレ謡「心は茅店の月に嘯き、身は板橋の霜に漂ひ、白頭の雪は積れども、老を養ふ瀧川の、水や心を清むらん。下歌奥山の、深谷の下のためしかや、流れ汲むとよも絶えじ。流を汲むとよも絶えじ。上歌長生の家にこそ、長生の家にこそ、老せぬ門はあるなるに、是も年ふる山住の、千世のためしを松陰の、岩井の水は藥にて、老を延べたる心こそ、猶行く末も久しけれ、猶行く末も久しけれ。

ワキ詞「いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「こなたのことにて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「お事は聞き及びたる親子の者か。シテ詞「さん候是こそ親子の者にて候へ。ワキ詞「是

は帝よりの勅使にてあるぞとよ。シテ詞「ありがたや雲居遙かに見そなはす、我大君の詔を、賤き身として今承ることのありがたさよ。是こそ親子の民にて候へ。ワキ詞「さても此本巣郡に、不思議なる泉出でくる由を奏聞す、急ぎ見て参れとの宣旨に任せ、是まで勅使を下さるゝなり。先々養老と名づけ初めし、謂を委しく申すべし。シテ詞「さん候是に候は此尉が子にて候が、朝夕は山に入り薪を採り、我らを育み候ふ処に、ある時山路の疲れにや、此水を何となく掬びて呑めば　世の常ならず心も涼しく疲れも助かり、ツレ謡「さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られつよ、やがて家路に汲み運び、父母に是を與ふれば、シテ詞「呑む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、ツレ謡「朝寝の床も起き憂からず、シテツレ謡「夜の寝覺も淋しからで、勇む心は眞清水の、絕えずも老を養ふ故に、養老の瀧とは申すなり。ワキ謡「げに〳〵聞けばありがたや。さて〳〵今の薬の水、此瀧川の内にても、とりわき在所のあるやらん。シテ詞「御覽候へ此瀧壺の、少し此方の岩間より、出でくる水の泉なり。ワキ謡「さては是かと立ちより見れば、實に潔き山の

忘れ水―摂津・大和・播磨の名所ごとは唯老を忘るといふ意

井の、シテ謡「底澄み渡るさゞれ石の、巌となりて苔のむす、ワキ謡「千代に八千代のためしまでも、シテ謡「まのあたりなる薬の水、ワキ謡「眞に老を、シテ謡「養ふなり。上歌地謡「老をだに養はゞ、まして盛の人の身に、薬とならばいつまでも、御壽命も盡きまじき、泉ぞめでたかりける。實にや玉水の水上すめる御代ぞとて、流れの末の我らまで、豐にすめる嬉さよ。豐にすめる嬉さよ。

クリ地謡「實にや尋ねても、蓬が島の遠き世に、今のためしも生薬、水また水はよも盡きじ。シテサシ謡「夫れ行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にはあらず、地謡「流れに浮む泡沫は　かつ消えかつ結んで、久しく澄める色とかや。シテ謡「殊にけに是はためしも夏山の、地謡「下行く水の薬となる、奇瑞を誰か習ひ見し。下歌いざや水を掬ばん。いざ〳〵水を掬ばん。上歌甕の竹葉は、甕の竹葉は、陰や綠を重ぬらん。其外籬の荻花は、林葉の秋を汲むなりや。晉の七賢が樂み、劉伯倫が酲び、只此水に殘れり。汲めや汲め御藥を、君の爲に捧げん。曲水に浮ぶ鸚鵡は、石にさはりて遲くとも、手にまづ取りて夜

玉水―池をほめていふ　水上すめる―君の明かなるにと生薬―不死の薬　夫れ行く川の云云―鴨長明の方丈記の文句を引く　甕の竹葉―白氏文集に甕頭竹葉經春熟とあり、竹葉は酒の異名　晉の七賢―晉の康阮嵇阮咸、向秀劉伶、王戎、山濤を竹林七賢と謂ふ　鸚鵡―盃の名

もすがら、馴れて月を汲まうよや。馴れて月を汲まうよ。

ロンギ地謡「山路の奥の水にては、何れの人か養ひし。シテ謡「彭祖が菊の水、滴る露の養ひに、仙徳を受けしより、七百歳を経る事も、薬の水と聞く物を、地謡「げにや薬と菊の水、其養ひの露のまに、シテ謡「千年を経るや天地の、地謡「開けし種の草木まで、シテ謡「花咲き實なることわり、地謡「其折々といひながら、シテ謡「只これ雨露の恵にて、地謡「養ひ得ては、花の父母たる雨露の、翁も養はれて、此水に馴れ衣の、袖ひぢて掬ぶ手の、影さへ見ゆる山の井の、實にも薬と思ふより、老の姿も若水と、見るこそ嬉しかりけれ。

ワキ詞「實にありがたき薬の水、急ぎ帰りて我君に、奏聞せんこそ嬉しけれ。シテ詞「翁もかかる御恵廣き御影を尊めば、ワキ詞「勅使も重ねて感涙して、かゝる奇特に逢ふことよと、上歌地謡「云もあへねば不思議やな、云もあへねば不思議やな、天より光かゝやきて、瀧の響も聲すみて、音樂聞え花降りぬ、是只事と思はれず。これ只事と思はれず。（中入）

後シテ謡「ありがたや治まる御代の習ひとて、山河草木おだやかに、五日の風や十日の、天

彭祖―列仙傳、萬世統譜等に、陸終氏の子姓より夏を經て殷末に及び、壽八百歳なる事見ゆ　其養ひの露のまに古今集に、ぬれてはす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけん」

が下照る日の光、曇はあらじ玉水の、薬の泉はよも盡きじ、あらありがたの奇瑞やな。地謡「是とても誓は同じ法の水、盡せぬ御代を守るなる、シテ謡「我は此山山神の宮居、地謡「又は楊柳觀音菩薩、シテ謡「神といひ、地謡「佛といひ、シテ謡「只是水波の隔てにて、地謡「衆生濟度の方便の聲、シテ謡「峯の嵐や、谷の水音滔々と、地謡「拍子を揃へて音樂の響、瀧つ心を澄ましつよ、諸天來去の影向かな。（神樂）

シテ謡「松陰に千代をうつせる緑かな。地謡「さも潔き山の井の水、山の井の水。山の井の、シテ謡「水滔々として浪悠々たり。治る御代の君は船、地謡「君は船、臣は水、水よく船を浮め浮めて、臣よく君を仰ぐ御代とて、幾久しさも盡きせじや盡きせじ。君に引かるゝ玉水の、上澄む時は下も濁らぬ瀧つの水の、浮き立つ浪の返すゞ〳〵も、よき御代なれや、よき御代なれや、萬歳の道に歸りなん、萬歳の道に歸りなん。

楊柳觀音―養老寺の本尊

影向―神の示現すること

君は船云々―前子の語

上澄む時は―前子に君子養源源清則流清矣

清經

梗　梗

平清經は重盛の三男にて左近衞中將たりし人なり。壽永二年豐前柳が浦にて入水す。初め深く契りし女房あり、都落のをりこれを伴はんとしたれども得ず、途より髮を切りて形見としたるを、其後女房今は形見もよしなしとてそな返して歌を添へて曰く、見るからに心づくしの髮なればうさにぞ返すもとの社に」と。此曲平家物語に據り、清經の靈の女房の許に現れて物語る樣を作る。この種の曲を公逢物と云ふ。（二番目）

シテ　清經の靈　ツレ女　ワキ　淡津三郎

ワキ次第謠「八重の汐路の浦の波、八重の汐路の浦の波、九重にいざや歸らん。詞是は左中將清經の御內に仕へ申す、淡津三郎と申す者にて候。さても賴み奉り候清經は、過ぎにし筑紫の軍に打負け給ひ、都へはとても歸らぬ道芝の、雜兵の手にかゝらんよりはと思召しけるが、豐前國柳が浦の沖にして、更け行く月の夜船より、身を投け空しく爲

邊ぎにし筑紫の軍―平家物語に平家は緒方三郎惟義が三萬餘騎の勢にて院に寄すと聞えしかば取る物も取敢へず太宰府をこそ落ち給へとある時の事　更け行く月の一同書に清經は…或る月の夜船はたに立出で橫笛音取朗詠して遊ばされけるが…ながらへはつべき身にも非ずとて靜に經讀み念佛して海にぞ沈み給ひけるとあり

り給ひて候。又船中を見奉れば、御形見に鬢の髪を殘し置かれて候間、かひなき命助かり、御形見を持ち、只今都へ上り候。道行諸此程は、鄙の住居に馴れ〳〵て、鄙の住居に馴れ〳〵て、たま〳〵歸る故郷の、昔の春に引きかへて、今は物憂き秋暮れて、はや時雨ふる旅衣、しをるゝ袖の身のはてを、忍び〳〵に上りけり。忍び〳〵に上りけり。詞急ぎ候程に、是は早都に著きて候。如何に案内申し候、筑紫より淡津三郎が參りて候それ〳〵御申し候へ。ツレ詞「何淡津三郎と申すか。人までもなし此方へ來り候へ。さて只今は何の爲の御使にてあるぞ。ワキ詞「さん候面目もなき御使に參りて候。ツレ詞「面目もなき御使とは、若し御遁世にてあるか。ワキ詞「いや御遁世にても御座なく候。ツレ詞「過ぎにし筑紫の軍にも、御恙なきとこそ聞きつるに。ワキ詞「さん候過ぎにし筑紫の軍にも、御恙御座なく候ひしが、清經心に思召すやうは、都へはとても歸らぬ道芝の、雜兵の手にかゝらんよりはと思召されけるが、豐前國柳が浦の沖にして、更け行く月の夜舟より、身を投げ空しくなり給ひて候。ツレ謠「なに身をなげ空しくなり給ひたるとや。恨めし

や　せめては討たれ若は又、病の床の露とも消えなば、力無しとも思ふべきに、我と身を投げ給ふ事、偽りなりつるかねことかな。實に怨みても其かひの、なき世となるこそ悲けれ。下歌地謡「何事もはかなかりける世の中の、上歌此程は、人目をつゝむ我が宿の、人目をつゝむ我が宿の、垣ほの薄吹く風の、聲をも立てず忍音に、泣くのみなりし身なれども、今は誰をか憚りの、有明月の夜たどとも、何か忍ばん時鳥、なをも隠さで鳴く音かな。名をも隠さで鳴く音かな。

ワキ詞「又船中を見奉れば、御形見に髪の髪を殘し置かれて候。是を御覽じて御心を慰められ候へ。ツレ謡「是は中將殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え、猶も思のまさるぞや。見る度に心盡しの髪なれば、うさにぞかへす本の社にと、地謡「手向けかへして夜もすがら、涙と共に思寢の、夢になりとも見え給へと、寢られぬに傾くる、枕や戀を知らすらん。枕や戀を知らすらん。

シテ・サシ謡「聖人に夢なし誰あつて現と見る、眼裡に塵有つて三界窄く、心頭無事にして一

生虜し。實にや憂しと見し世も夢、辛しと思ふも幻の、いづれ跡ある雲水の、往くも歸るも閻浮の故郷に、たどる心のはかなさよ。轉寢に戀しき人を見てしより、夢てふものは頼み初めてき。如何にいにしへ人、清經こそ參りて候へ。ツレ謡「不思議やなまどろむ枕に見え給ふは、實に清經にてましませども、正しく身を投け給へるが、夢ならで如何で見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を、見みえ給ふぞ有難き。さりながら命を待たで我と身を、捨てさせ給ふ御事は、偽りなりけるかねことなれば、只恨めしう候。シテ謡「さやうに人をも恨み給はゞ、我も恨みは有明の、詞見よとて贈りし形見をば、何しに返させ給ふらん。ツレ謡「いやとよ形見を返すとは、思ひあまりし言の葉の、見る度に心づくしの髪なれば、シテ詞「うさにぞかへすもとの社にと、さしも贈りし黒髪を、あかずは留むべき形見ぞかし。ツレ謡「愚と心得給へるや。慰めとての形見なれども、見れば思の亂髪、シテ詞「分きて贈りしかひもなく、形見を返すは此方の恨み、ツレ謡「我ば捨てにし命の恨み、シテ謡「互にかこち、ツレ謡「かこたるよ、シテ謡「形見ぞつらき、ツレ謡「黒髪の、上歌地謡「恨みを

閻浮―現世
轉寢に―古今集小町の歌いにしへ人―女を指すくねる―恨みすねること

さへに言ひそへて、うらみをさへに言ひそへて、くねる涙の手枕を、ならべて二人が逢ふ夜なれど、恨むれば獨寢の、ふし〴〵なるぞ悲しき。實にや形見こそ、なか〳〵憂けれ、是なくは、忘るゝ事もありなんと　思ふも濡らす袂かな。思ふも濡らす袂かな。

シテ詞「古への事ども語つて聞かせ申し候べし、今は恨みを御晴れ候へ。謠　さても九州山鹿の城へも、敵寄せ來ると聞きし程に、取る物も取りあへず夜もすがら、高瀬舟に取り乘つて、豐前國柳といふ所に著く。地謠「實にや所も名を得たる、浦は竝木の柳蔭、いと假初の皇居を定む。シテ謠「それより宇佐八幡に御參詣あるべしとて、地謠「神馬七疋、其外金銀種々の捧物、卽ち奉幣の爲なるべし。

ツレ謠「かやうに申せば猶も身の、恨に似たる事なれども、さすがに未だ君ましまし、御代の境や一門の、果をも見ずして徒に、御身一人を捨てし事、誠に由なき事ならずや。

シテ謠「實に〳〵是は御理さりながら、賴みなき世のしるしの告、語り申さん聞き給へ。

地謠「そも〳〵宇佐八幡に參籠し、さま〴〵祈誓怠らず、數の賴みをかけまくも、忝くも

ゲにや形見とそ―伊勢物語に「形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝひまもあらましものを」山鹿の城―平家物語に新羅百濟高麗契丹雲のはてまでも落ちゆかばやと思はれけれども彼風向ひて叶はねば力及ばず…山鹿の城にぞ籠り給ふとあり

さりともと云々―千載集後成の歌
三寶―佛法僧の三つ

みとしろの、錦の内よりあらたなる、御聲を出だしてかくばかり、シテ謡「世の中のうさには神もなき物を、何祈るらん心づくしに。地謡「さりともと思ふ心も蟲の音も、弱りはてぬる秋の暮かな。シテ謡「さては佛神三寶も、地謡「捨てはて給ふと心細くて、一門は、氣を失ひ力をおとして、足弱車のすごゝと、還幸なし奉る、哀なりし有樣。クセかゝりける處に、長門國へも、敵向ふと聞きしかば、又船に取り乘りて、いづくともなくおし出だす、心の内ぞ哀なる。實にや世の中の、うつる夢こそ誠なれ。保元の春の花、壽永の秋の紅葉とて、散々になり浮む、一葉の船なれや　柳が浦の秋風の、追手顔なる跡の波、白鷺の群れ居る松見れば、源氏の旗をなびかす　多勢かと肝を消す、こゝに淸經は、心にこめて思ふやう　さるにても八幡の、御託宣あらたに、心魂に殘ることわり　誠正直の、頭にやどり給ふかと、只一筋に思ひ取り、シテ謡「あぢきなや　とても消ゆべき露の身を、地謡「猶置き顔に浮草の、波に誘はれ、船に漂ひていつまでか、憂き目を水鳥の、沈みはてんと思ひ切り、人には言はで岩代の、待つ事ありや曉の、月に嘯く氣色にて、船

の舳板に立ちあがり、腰より横笛抜き出だし、音もすみやかに吹き鳴らし、今様を歌ひ朗詠し、來し方行く末をかどみて、終にはいつかあだ波の、歸らぬは古へ、とまらぬは心づくしよ、此世とても旅ぞかし、あら思ひ殘さずやと、よそ目には、ひたふる狂人と人や見るらん。よし人は何ともみるめをかりの夜の空、西にかたむく月を見れば、いざや我も伴なと、南無阿彌陀佛彌陀如來、迎へさせ給へと、只一聲を最期にて、舟よりかつぱと落汐の、底の水屑と沈みゆく、うき身の果ぞ悲しき。ッレ謠「聞くに心もくれはとり、憂き音に沈む涙の雨の、怨めしかりける契かな。

ッテ謠「いふならく、那落も同じうたかたの、あはれは誰もかはらざりけり。さて修羅道に遠近の、地謠「さて修羅道に遠近の、たづきは敵、雨は矢先、土は清劍山は鐵城、雲の旗手をついて、憍慢の劍をそろへ、邪見の眼の光、愛欲貪恚痴痛患道場、無明も法性も、亂るゝ敵、打つは波、引くは潮、西海四海の因果を見せて、是までなりや、誠は最期の、十念みだれぬ御法の舟に、頼みしまゝに疑ひもなく　實にも心は清經が、實にも心は清

みるめをかりの夜―見る目に海松を掛けそれを刈る意より假に掛く

那落―地獄

遠近の―古今集に「遠近のたづきも知らぬ山中にもばつかなくも呼子鳥かな」

十念―念佛十返のこと

經(きやう)が、佛果(ぶつくわ)を得(え)しこそ有難(ありがた)けれ。

采女

梗概

奈良の帝に仕へたる采女が寵なくなりて猿澤の池に身を投げし事、大和物語に見ゆ。これはこの歌文を材とし、采女に關する故事を交へて作る。その靈を出し、旅僧の回向を受けしむるは幽靈能共通の作意也。（三番目）

シテ　采女（前は里女）　ワキ　僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて　洛陽の寺社殘りなく拜み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候。サシ謠　頃は彌生の十日餘り、花の都を旅立ちて、まだ夜をこめて東雲の、上歌影ともに、我も都を下り月、我も都を下り月、殘る朝の朝霞、深草山の末つゞく、木幡の關を今朝越えて、宇治の中宿井手の里、過ぐれば是ぞ奈良坂や、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。詞　急ぎ候程に、春日の里に著きて候。心靜に社參申さばやと思ひ候。

宇治の中宿―京都より奈良に行くには宇治を中宿にするなり

シテ次第謠「宮路正しき春日野の、宮路正しき春日野の、寺にもいざや參らん。サシ更闌け夜靜にして、四所明神の寶前に、耿々たる燈火も、世を背けたる影かとて、共に憐む深夜の月、朧々と杉の木の間を洩りくれば、神の御心にも、若く物なくや思すらん。下歌月に散る、花の陰行く宮めぐり、上歌はこぶ歩みの數よりも、はこぶ歩みの數よりも、積る櫻の雪の庭、又色添へて紫の、花を垂れたる藤の門、明くるを春の景色かな。明くるを春の氣色かな。

四所明神―春日神社は武甕槌命、齋主命、天津兒屋根命、姫大神の四所の祭神あり

藤の門―藤氏一門のこと春日は其の氏神なり

ワキ詞「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ、ワキ詞見申せば是程茂りたる森林に、重ねて木を植ゑ給ふ事不審にこそ候へ、シテ詞「さては當社始て御參詣の人にて御入り候か。ワキ詞「さん候、始て此所に參りて候。當社のいはれ委しく御物語り候へ。シテ詞「そも〳〵當社と申すは、神護景雲二年に、河内國平岡より、此春日山本宮の峰に影向ならせ給ふ。されば此山、もとは端山の陰淺く、木陰一つもなかりしを、陰賴まんと藤原や、氏人よりて植ゑし木の、もとより恵み深き故、程な

平岡―枚岡ともかく

くかやうに深山となる。然れば當社の御誓にも、人の參詣は嬉けれども、木の葉の一葉も裳裾に著きてや去りぬべきと、惜み給ふも何故ぞ。人の煩ひ茂き木の、陰深かれと今も皆、諸願成就を植ゑ置くなり。謠されば慈悲萬行の日の影は、三笠の山に長閑にて、五重唯識の月の光は、春日の里に隈もなし。下歌地謠陰頼みおはしませ、只かりそめに植うるとも、草木國土成佛の神木と思召し、あだにな思ひたまひそ。上歌あらかねの其始め、あらかねの其始め、治まる國は久方の、あめはょこぎの綠より、花開け香殘りて、佛法流布の種久し、昔は靈鷲山にして、妙法華經を說き給ふ、今は衆生を度せんとて、大明神と現れ、此山に住み給へば、鷲の高嶺とも、三笠の山を御覽ぜよ。さて菩提樹の木陰とも、盛なる藤咲きて、松にも花を春日山、長閑けき陰は靈山の、淨土の春におとらめや。淨土の春におとらめや。

シテ詞「如何に申し候。猿澤の池とて隱れなき名池の候を御覽ぜられて候か。ワキ詞「承り及びたる名池にて候ふ御敎へ候へ。シテ詞「此方へ御出で候へ。是こそ猿澤の池にて候へ。

慈悲萬行―春日明神の著籠號
五重唯識―遺蘊存寶鏡抢遍智純熟攝末歸本識隱劣顯勝轉遣相攝性顯の五つその譬無き法心を月に喩ふ
あめはょこぎ―雨は母子は木の意　昔は云々―釋尊說法の故事

吾妹子が云々―拾遺集大和物語に見ゆ

又思ふ仔細の候へば、此池の邊にて、御經を讀み佛事をなして賜はり候へ。ワキ詞「やすき間の事佛事をばなし申すべし。さて誰と志して回向申し候べき。シテ詞「是は昔采女と申しょ人、此池に身を投け空しくなりしなり。されば天の帝の御歌に、謡吾妹子が寢ぐたれ髪を猿澤の、詞池の玉藻と見るぞ悲しきと、よめる歌の心をば、しろし召され候はずや。ワキ詞「實に〳〵此歌は承り及びたるやうに候。委しく御物語り候へ。シテ詞「昔天の帝の御時に、一人の采女有りしが、采女とは君に仕へし上童なり、始めは叡慮淺からざりしが、程なく御心變りしを、及ばずながら君を怨み參らせて、此池に身を投け空しくなりしなり。ワキ謡「實に〳〵我も聞き及びしは、帝あはれと思召し、此猿澤に御幸なつて、シテ詞「采女が死骸を叡覽あれば、ワキ謡「さしもさばかり美しかりし、シテ謡翡翠の簪婵娟の鬢、ワキ謡柱の黛、シテ謡丹花の唇、ワキ謡柔和の姿引きかへて、シテ、ワキ謡「池の藻屑に亂れ浮くを、君もあはれと思召して、上歌地謡「わぎもこが、寢ぐたれ髪を猿澤の、寢ぐたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しきと、叡慮に懸けし御情、かたじけなやな下とし

水の月とは—猿が水中の月を捉へんとして溺るる事より猿澤と言掛く

龍女—八歳龍女の男子と化して成佛せる佛說補陀洛の—南の岸に聳立てゝ今ぞ榮えん北の藤なみ、新古今集に春日の神歌といふ

て、君を怨みしはかなさは、たとへば及びなき水の月取る猿澤の、生ける身と思すかや、我は采女の幽靈とて、池水に入りにけり。池水の底に入りにけり。（中入）

ワキ上歌謠「池の浪、夜の汀に座をなして、寄るの汀に座をなして、假に見えつる幻の、采女の衣の色々に、弔ふ法ぞまことなる。弔ふ法ぞまことなる。

後シテ謠「有難や妙なる法を得るなるも、心の水と聞くものを、騒がしくとも教へあらば、浮む心の猿澤の、池の蓮の臺に座せん、よく〳〵弔ひ給へとよ。ワキ謠「不思議やな池の汀に現れ給ふは、采女と聞きつる人やらん。シテ詞「恥かしながらいにしへの、采女が姿を現すなり。ワ「佛果を得しめおはします。ワキ謠「もとよりも人々同じ佛性なり、なに疑ひも波の上、シテ謠「水の底なる鱗や、ワキ謠「乃至草木國土まで、シテ謠「悉皆成佛ワキ謠「疑ひなし。上歌地謠「ましてや人間に於てをや。龍女が如く我もはや、變成男子なり。采女となほ給ひそ。しかも所は補陀洛の、南の岸に至りたり。これぞ南方無垢世界、生れん事もたのもしや。生れん事もたのもしや。

クリ地謡實にやいにしへに、奈良の都の代々を經て、神と君との道すぐに、國家を守る誓とかや。シテ、サシ謡しかれば君に仕へ人、その品々の多き中に、地謡分きて采女の花衣の、裏紫の心を碎き、君邊に仕へ奉る。シテ謡されば世上に其名を弘め、地謡情内にこもり、言葉外に現るゝためし、世以て類多かりけり。クセ葛城王、勅に從ひ陸奥の、忍ぶもぢずり誰も皆、こともおろそかなりとて、設けなどしたりけれど、猶しもなどやらん、王の心解けざりしに、采女なりける女の、土器取りし言の葉の、露の情に心解け、叡感以て甚し。されば淺香山、影さへ見ゆる山の井の、淺くは人を思ふかの、心の花開け、風もをさまり雲靜かに、安全をなすとかや。シテ謡然れば采女の戲れの、地謡色音に移る花鳥の、とぶさに及ぶ雲の袖、影も廻るや盃の、御遊の御酒の折々も、采女の衣の色添へて、大宮人の小忌衣、櫻をかざす朝より、今日も吳織、聲の綾をなす舞歌の曲拍子を揃へ袂を飜へして、遊樂快然たる、采女の衣ぞ妙なる。取り分き忘れめや、曲水の宴の有りし時、御土器たび〳〵廻り、有明の月更けて、山時鳥誘ひ顏なるに、叡

葛城王―橘諸兄公

淺香山云々―下句淺き心は我思はなくに

慮を受けて遊樂の月に鳴け、（序ノ舞）シテ謡「月に鳴け、同じ雲の上の時鳥、地謡「天つ空音の萬代までに。シテ謡「萬代と、限らじ物を天衣、撫づとも盡きぬ巖ならなん。松の葉の、地謡「松の葉の、散り失せずして、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡絶えず、天地おだやかに、國土安穩に、四海波靜なり。シテ謡「猿澤の池の面、地謡「猿澤の池の面に、水滔々として、波又悠々たりとかや。石根に雲起つて、雨は草葉を打つなり。遊樂の夜すがら是れ、采女の戲れと思すなよ、讃佛乘の因緣なるものを、よく弔はせ給へやとて、又波に入りにけり、又波の底に入りにけり。

月になけ―古歌か未詳
撫づとも盡きぬ―拾遺集に「君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらん」松の葉の云々―古今集序の詞

通小町

梗概

古今集の歌に「曉の鴫の羽れがきも〳〵羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」とあるに基きて、女の許へ百夜通はんとせる男の九十九夜になり、殘る一夜は障る事ありし話あり。それが更に小町と深草少將との話となりしならむ。この曲は少將小町二人の靈を出して、往昔を語らしめ、法師の回向を受くるに終る。（四番目）

シテ　深草少將　ツレ　小野小町（前は里女）

ワキ　僧

ワキ詞「是は八瀬の山里に一夏を送る僧にて候。こゝに何處とも知らず女性一人、毎日果實爪木を持ちて來り候。今日も來りて候はゞ、いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

ツレ次第詞「拾ふ爪木も燒物の、拾ふ爪木も燒物の、匂はぬ袖ぞ悲しき。是は市原野のあたりに住む女にて候。詞さても八瀬の山里に、貴き人の御入り候程に、いつも果爪木を持

八瀬―比叡山の西麓

市原野―鞍馬路なり

古〳〵見劔れし云々―椎は車を作る木材なれば椎の實につきて四位少將を思ふ也　人丸の垣穂の柿の本―人丸の社にありといふ歟　櫻麻の云々―新古今集作者俊成の歌　―櫻麻のおふる浦波立返り見れどもかぬ山　柿の邊の笹栗―山畑なる赤人の廟所にありといふ

ちて參り候。今日もまた參らばやと思ひ候。如何に申し候、又こそ參りて候へ。ワキ詞「いつも來れる人か。今日は果の數々御物語り候へ。ツレ謠「拾ふ果は何々ぞ、地謠「拾ふ果は何々ぞ。ツレ謠「古へ見劔し車に似たるは、嵐にもろき落椎、地謠「歌人の家の果には、ツレ謠「人丸の垣穂の柿、山の邊の笹栗、地謠「窓の梅、ツレ謠「園の桃、地謠「花の名にある櫻麻の、苧生の浦梨猶もあり。櫟香椎眞手葉椎、大小柑子金柑、あはれ昔の戀しきは、花橘の一枝、花橘の一枝。

ワキ詞「果の數々は承りぬ。さて〳〵御身は如何なる人ぞ、名を御名のり候へ。ツレ謠「恥かしや己が名を、地謠「小野とはいはじ薄生ひたる、市原野邊に住む姥ぞ、跡とひ給へ御僧とて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。

ワキ詞「かゝる不思議なる事こそ候はね。只今の女性の名を委しく尋ねて候へば、小野とはいはじ薄生ひたる、市原野に住む姥と申し、かき消すやうに失せて候。こゝに思ひ合はする事の候。或人市原野を通りしに、薄一村生ひたる蔭よりも、謠「秋風の吹くに付けて

もあなめあなめ、詞小野とはいはじ薄生ひけりとあり。是れ小野の小町の歌なり。さては疑ふ所もなく、只今の女性は小野の小町の幽靈と思ひ候程に、彼市原野に行き、小町の跡を弔はばやと思ひ候。上歌謡此草菴を立ち出でて、此草菴を立ち出でて、猶草深く露しけき、市原野邊に尋ね行き、座具を展べ香を焼き、南無幽靈成等正覺、出離生死頓生菩提。

ツレ一聲謡「うれしのお僧の弔ひやな、同じくは戒授け給へお僧。シテ謡「いや叶ふまじ戒授け給はば、恨み申すべし。早歸り給へお僧。ツレ謡「こは如何に、たま〳〵かゝる法に逢へば、猶其苦患を見せんとや。シテ謡「二人見るだに悲きに、おん身一人佛道ならば我思ひ、重きが上の小夜衣、重ねて憂目を三瀬川に、沈みはてなばお僧の、授け給へるかひも有るまじ。早歸り給へやお僧達。

上歌地謡「猶も其身は迷ふとも、猶も其身は迷ふとも、戒力に引かれば、などか佛道ならざらん。只共に戒を受け給へ。ツレ謡「人の心は白雲の、我は曇らじ心の月、出でてお僧に弔

座具―敷物
南無幽靈―回向の文

重きが上の―新古今集の歌「さちぬだに重きが上の小夜衣わが妻なら妻なら重ねそ」
三瀬川―冥途の三途の川

はれんと、薄おし分け出でければ、シテ謡「包めど我も穂に出でて、包めど我も穂に出でて、尾花招かばとまれかしと。ツレ謡「思ひは山の鹿にて、招くと更にとまるまじ。シテ謡「さらば煩悩の犬となつて、打たるゝと離れじ。ツレ謡「恐ろしの姿や。シテ謡「袂を取つて引きとむる、ツレ謡「引かるゝ袖も、シテ謡「控ふる、地謡「我が袂も、共に涙の露、深草の少将。ワキ詞「さては小野の小町四位の小将にてましますかや。とてもの事に車の榻に、百夜通ひし所をまなうで御見せ候へ。ツレ謡「もとより我は白雲の、かゝる迷ひの有りけるとは、シテ詞「思ひもよらぬ車の榻に、百夜通へと偽りしを、謡「眞と思ひ、詞「暁毎に忍び車の榻に行けば、ツレ謡「車の物見もつゝましや。姿を變へよといひしかば、シテ詞「輿車はいふに及ばず、ツレ謡「いつか思ひは、地謡「山城の、木幡の里に馬はあれども、シテ謡「君を思へば徒歩跣足。ツレ謡「さてその姿は、シテ謡「笠に蓑、ツレ謡「身のうきよとや竹の杖、シテ詞「月には行くも暗からず。シテ詞「さて雪には、シテ謡「袖を打ち拂ひ、ツレ謡「さて雨の夜は、シテ謡「目に見えぬ、詞「鬼一口も恐ろしや。ツレ謡「たま〳〵曇らぬ時だにも、シテ謡「身獨に降る涙の雨

深草少將―卒都婆小町に注す
榻―轅を載する臺

山城の云々―萬葉遺集の歌「山城の木幡の里に馬はあれどかち　よりぞ行く君を思ひかねて」

か、あら暗の夜や。ツレ謡「夕暮は、一方ならぬ思ひかな。シテ謡「夕暮は何と、地謡「一方ならぬ思ひかな。シテ謡「月は待つらん月をば待つらん。我をば待たじ空言や。地謡「暁は、暁は、數々多き思ひかな。シテ謡「我爲ならば、地謡「鳥もよし鳴け、鐘も只鳴れ、夜も明けよ、たゞ獨寢ならばつらからじ。シテ謡「かやうに心を盡し盡して、地謡「かやうに心を盡し盡して、榻の數々よみて見たれば、九十九夜なり。今は一夜よ嬉しやとて、待つ日になりぬ、急ぎて行かん、姿は如何に、シテ謡「笠も見苦し、地謡「風折烏帽子、シテ謡「簑をも脫ぎ捨て、地謡「花摺衣の、シテ謡「色重ね、地謡「うら紫の、シテ謡「藤袴、地謡「待つらんものを、シテ謡「あら急がしや、すは早今日も、地謡「紅の狩衣の、衣紋けたかく引き繕ひ、飲酒は如何に、月の盃なりとても、戒めならば保たんと、只一念の悟にて、多くの罪を滅して、小野の小町も少將も、共に佛道成りにけり。共に佛道成りにけり。

只一念―飲酒戒を保たんとする一念にて成佛するなり

小袖曾我

概　概

十郎祐成(幼名一萬)、五郎時致(幼名箱王)は河津三郎祐泰の遺孤也。其母曾我祐信に再縁す。故に曾我兄弟と名乘る事人の知る所也。富士の牧狩を好機として、兄弟父の仇を報ぜんとし、母の許へ暇乞に出づ。時致は勘當せられ居れども此時許さるゝなり。曲名を小袖と題せるは、母の形見の小袖を受けて別るゝ事曾我物語にあればなり。(四番目

シテ　祐成　ツレ　時致　ツレ　團三郎

ツレ　鬼王　ツレ　母　狂言　春日局

シテ、ツレ四人次第「命をしかの隱れ里、命をしかの隱れ里、富士の裾野を狩らうよ。シテ詞「是は曾我の十郎祐成にて候。さても賴朝富士の御狩に御出で候ふ間、我等も罷り出で候。また是なる時致は、母にて候者の勘當にて候程に、申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候。四人サシ、ツレ謠「時しも頃は建久四年、五月半の富士の雪、五月雨雲に降り交ぜて、鹿の子

をしか―惜しと牡鹿とにかく

星月夜―鎌倉の枕詞鹿の星毛と言掛く　鎌倉殿―頼朝　祐經―工藤祐經　曾我兄弟が父の仇　人知れぬ―頼政の歌の句　名を富士の嶺に―名を高く揚げんとの意

斑や群山の、裾野の鹿の星月夜、鎌倉殿の御狩の御遊、げにたぐひなき御事かな。シテ謡「東八箇國の兵ども、皆御供に參るなれば、四人シテ、ツレ謡「定めて敵の祐經も、御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの、事は夏野の鹿なりとも、ねらひて見ばやと大丈夫の、狩人にまぎれ打ち出づる。下歌人知れぬ大内山の山守も、上歌木隱れて、それとは見えじ梓弓、それとは見えじ梓弓、矢頃にならば鹿よりも、祐經を射とどめて、名を富士の嶺に揚げばやと、思ひ立ちぬる狩衣、たとへば君の御咎め、よしそれとても數ならぬ、身にはなか〳〵恐れなし、身にはなか〳〵恐れなし。

シテ詞「是に暫く御待ち候へ。某參りて案内を申さうずるにて候。如何に案内申し候。

春日詞「誰にて御座候ふぞ。や、祐成の御參りにて候。シテ詞「さん候某が參りたる由申し候へ。春日詞「畏つて候。大方殿よりの御誂には、祐成の御參りならば申せ、時致の御參りならばな申しそと仰せ出だされて候。シテ詞「只某がまゐりたると申し候へ。

春日詞「いかに申し上げ候。祐成の御參りにて候。母詞「此方へと申し候へ。あら珍しや十郎

向顔―對面

殿、いづくへの序ぞや、母がために態とはよも。シテ詞「さん候久しく參らず候程に向顔のため、又は富士の御狩と申し候程に。母詞「さればこそ思ひし事よ君がため、御狩に出づる序ぞや。シテ謠「いつしか親子の御戯れ、珍し顔に羨しやと、時致謠「思ひながらも時致は、不興の身なれば物の隙より、地謠「高間の山の峰の雲、よそにのみ見てや止みなん。同じ子に、同じはゝそのもり乳母、同じはゝそのもり乳母、隔なくこそ育てしに、さも引きかへて祐成には、いろ〳〵の御もてなし、御祝言の御盃、たとへば時致は、後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて、御おぼえ葦垣の、隔てあるこそ悲しけれ。シテ詞「日本一の御機嫌にて候。あれへ御參りあつて、春日局をもつて申され候へ。時致詞「某が事は御機嫌いかゞ計りがたく候間、先々まゐり候まじ。シテ詞「只某に御任せあつて、急いで御參り候へ。時致詞「如何に春日の局、時致が參りたる由それ〳〵申し候へ。謠「いつしか守乳母まで、心變りし春日野の、飛火の野守出でてだに見候はぬぞや。詞「時致が參りたる由それ〳〵申し候へ。

不興の身―母より勘當せられたる身
高間の山の―新古今集の歌に、「よそにのみ見てやみなん葛城や高間の山の嶺の白雲」はゝそのもり―柞に母、森に守を掛く
御もぼえ―寵愛
春日野の―古今集の歌末句、出でてみよ今幾日ありて若菜つみてん、春日の局を掛く

九上の禪師―是も兄弟の一人越後の九上に出家してあり

御簾―見ずに掛く

かせぎ―鹿、時致を喰へたる事元より也

母詞「あら不思議や　祐成は只今來りぬ、九上の禪師は寺にあり、それならで子はなきに時致といふは誰そや。今思ひ出だしたり、箱根の寺に有りし箱王と云ひしえせ者か。それならば母が出家になれと申しゃを聽かざりしほどに勘當せしに、押して是まで來れるは、猶重ての勘當とや。伊豆箱根富士權現も御覽ぜよ、ほな此後も勘當と、時致謠「御誓言に部遣戸を、地謠「立て添へられて茫然と、やるかたもなき此身かな。うたてやせめて今一目、御簾几帳も下りたり、あら情なの御事や。

シテ謠「祐成は、かくとも知らで時致が、時移りたり事よきかと、中門を見やりつゃ、早此方へと招けば、時致謠「招かれて山のかせぎ、地謠「泣く〳〵來りたり。打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず。なつかしければ去りやらず。シテ詞「さて御機嫌は何と御座候ぞ。時致詞「以ての外の御機嫌にて、猶かさねての御勘當と仰せ出だされて候。

母詞「如何に誰かある。春日詞「御前に候。母詞「時致が事を申さば、祐成共に勘當と申し候へ。

春日詞「畏つて候。いかに申し候。時致の御事を御申しあらば、祐成ともに御勘當と仰せ出

だされて候。シテ詞「まづ畏つたると申し候へ。某存ずる子細の候間、此度は同心にて申さうずるにて候。時致詞「いや〳〵某はまゐり候まじ。シテ詞「只御参り候へ。いかに申し候。我等が親の敵の事、世に隠れなく候處に、餘りに便なく候間、時致が事を申し直し、連れて御狩に出づべき所に、時致が事を申さば、祐成共に御勘當と候や。よくよくこれを案じ見るに、クリ謡惣じて祐成をも誠は思ひ給はぬぞや。地謡「たとひ時致出家の暇を申すとも、兄祐成に郎等もなし、しかも身に思ひあり、おのれらさへに見捨つるかと、却つて御叱り候ひてこそ、慈悲の母とも申すべけれ。シテ・ツレ謡「それに時致を法師にならぬとの御勘當、たとひ仰せに從ひ、出家仕り候とも、地謡「我等が事は世に隠れなし。あれ見よ河津が子供こそ、敵を遁れんとの出家、正しく弘法のためならず、同宿も思ひ卑しまば、心も染まぬ墨衣の、浦島が子の箱根寺にて、明暮くやしと思ふならば、中々俗には劣るべし。クセ時致は、箱根に有りししるしに、法華經一部讀み覺え、常は讀誦し母上の、現世安穩、後世善所と祈念する。又は毎日に、六萬遍の念佛、父河津殿に

同宿―同寺の僧　墨衣―墨染の衣　即ち法衣　浦島が子―箱根といはん序にて箱より明けと續く　俗―俗ならぬ人

廻向する。かほどに他念なき身を、此三年不興蒙る、恩顔を拜せねば、御戀しさも一つ、又は狩場への門出、御暇ごひしさ、一方ならぬ望なり。大かた治まる御代なれども、狩場や漁に、不慮の爭ひあるものを、シテ謠「其上我等は、狩場において例悪しょ。地謠「昔を思ひ伊豆の奥の、赤澤山のかりくらにて、父も失せさせ給はずや。今とても、狩場とあらばなどしも、御心にも懸けざると、恨み顔にも兄弟は、泣く〳〵立つて出でければ、母謠「母は聲をあげ、あれとめ給へ人々よ。地謠「不興をも勘當をも、許すぞ許すぞ時致とて、泣く〳〵出でさせ給へば、二人謠「兄弟は嬉し泣きに、伏しまろべばや、地謠「見る人も思ひやりて、泣き居たりや。

母詞「祐成申すによつて、時致が勘當許すにてあるぞ。近う來りて、狩場への門出祝ひて御入り候へ。シテ詞「如何に時致近う參りて、この年月の御物語申し候へ。さるにても地謠「此ほど時致が、盡す心に引き替へて、いまはいつしか思ひ子の、母の情有難や。あまりの嬉さに、祐成御酌に立ちて、とり〴〵、時致と共に祝言の、地謠「謠ふ聲、シテ〳〵謠「高き

雪を廻らす―廻雪といふ樂の名

名を、雲居にあげて富士の嶺の、地謡「雪を廻らす舞のかざし、（男舞）地謡「舞のかざしの其ひまに、舞のかざしの其ひまに、兄弟目をひき、これや限の親子の契と、思へば涙もつきせぬ名殘、牡鹿の狩場に遲參やあらんと、暇申してかへる山の、富士野の御狩の折をえて、年來の敵、本望を遂げんと、たがひに思ふ瞋恚の焔、胸の烟を富士風に、晴らして月を清見が關に、終にはその名をとめなば兄弟、親孝行の、ためしにならん嬉しさよ。

内六

竹生島

概　榎

竹生島は琵琶湖上に浮べり。祭神は宇賀魂命と稱す。傳ふらく行基菩薩此島に來りしに、神女示現あり、依て寺を立て、辨才天女像を置くと。此曲は神德を讃歎する意に出で、天女、龍神形を現して、天下泰平國土安穩を誓ひ給ふめでたき作なり（脇能）

シテ　龍神（前は漁翁）　ツレ　天女（前は女）

ワキ　臣下

竹に生るゝ鶯といはん序にて竹生島の名を含めたり

ワキ三人次第謡「竹に生るよ鶯の、竹に生るよ鶯の、竹生島詣いそがん。ワキ詞「そも〳〵これは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は、靈神にて御座候間、此度君に御暇を申し、只今竹生島に參詣仕り候。道行ワキ三人「四の宮や、河原の宮居末はやき、

走井―逢阪の關にあり
鳰の浦―琵琶湖を鳰のうみといふ
鰷―魚類
わび人―貧しき人
船呼ばひ―船を呼ぶこと

河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、くもらぬ御代に逢坂の、關の宮居を伏し拜み山越近き志賀の里、鳰の浦にも著きにけり。鳰の浦にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、鳰の浦に著きて候。あれを見れば釣舟の來り候。暫く相待ち便船を乞はばやと存じ候。シテ、サシ謡「おもしろや頃は彌生の半なれば、波もうらゝに海の面、ツレ謡「霞み渡れる朝ぼらけ、一聲謡「のどかに通ふ船の道、シテ、ツレ謡「憂きわざとなき心かな。シテ、サシ謡「これはこの浦里に住みなれて、明け暮運ぶ鱗の、數をつくして身ひとつを、助けやせんとわび人の、隙も波間に明け暮れて、世を渡るこそ物うけれ。下歌よし〳〵同じ業ながら、世にこえたりなこの海の、上歌名所多き數々に、名所多き數々に、浦山かけて眺むれば、志賀の都花園　昔ながらの山櫻、眞野の入江の船呼ひ、いざさしよせて言問はん。いざさしよせて言問はん。

ワキ詞「いかに是なる船に便船申さうなう。シテ詞「これは渡し船にてもなし。御覽候へ釣船にて候よ。ワキ詞「こなたも釣船と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に始めて參

誓の船―佛の衆生濟度を喩ふ

都の富士―比叡山のこと

緑樹影沈魚上木浦波月落鬼奔浪―鑑眞寺の自休蔵主竹生島に詣でたる時の句

辨財天―大辨天又妙音天女ともいふ多く山嶽深險の樹林の處に居す

詣の者なり。謡誓の船に乗るべきなり。シテ詞「げに此所は靈地にて、歩みを運び給ふ人を、とかく申さば御心にも違ひ、又は神慮も計りがたし。ツレ謡「さらばお船を參らせん。ワキ謡「嬉しやさては迎への舟、法の力とおぼえたり シテ詞「けふは殊更のどかにて、心にかよ風もなし。地謡「名こそさよ波や、志賀の浦にお立ちあるは、都人かいたはしや。お舟に召されて浦々を眺め給へや。地謡「所は海の上、所は海の上、國は近江の江に近き、山山の春なれや。花はさながら白雪の、降るか殘るか時知らぬ、山は都の富士なれや、猶さえかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとても、沖漕ぐ船はよも盡きじ。旅のならひの思はずも、雲居のよそに見し人も、同じ舟に馴衣、浦を隔てゝ行くほどに、竹生島も見えたりや。シテ謡「緑樹影沈んで、地謡「魚木に上る氣色あり。月海上に浮んでは、兎も浪を奔るか。面白の島のけしきや。

シテ詞「舟が著いて候御上り候へ。ワキ詞「あら嬉しや頓て神前へ參り候べし。シテ詞「この尉が御道しるべ申さうずるにて候。これこそ辨財天にて候へ、よく〳〵御祈念候へ。ワキ詞「承

九生如來―大日如來の事

利生―利益

此湖の主―龍神

り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候。不思議やな此島は、女人禁制とこそ承りて候に、あれなる女人は何とて參られて候ぞ。シテ詞「それは知らぬ人の申し事にて候忝くも此島は、九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそ參るべけれ。シテ謡「なうそれまでもなきものを、地謡「辨財天は女體にて、辨財天は女體にて、その神德もあらたなる、天女と現じ在しませば、女人とて隔なし。只知らぬ人の言葉なり。クセかよる悲願を起して、正覺年ひさし。獅子通王のいにしへより、利生さらに怠らず。シテ謡「げに〳〵かほど疑ひも、地謡「荒磯島の松陰を、便に寄する海人小舟、われは人間にあらずとて、社壇の扉をおし開き、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に、入るかと見しが白波の、立ち返り、われは此湖の主ぞと言ひすてゝ、また波に入らせ給ひけり。（中入）

地謡「御殿頻に鳴動して、日月光輝きて、山の端出づる如くにて、現れ給ふぞかたじけなき。天女謡「そも〳〵これは、此島に住んで神を敬ひ國を守る、辨財天とはわが事なり。地謡「その時虛空に音樂聞え、その時虛空に音樂聞え、花ふりくだる春の夜の、月にかよ

やく少女の袂　かへすがへすも面白や。（天女舞）

地謡「夜遊の舞樂も時すぎて、夜遊の舞樂も時すぎて、月澄みわたる海づらに、浪風靜に鳴動して、下界の龍神あらはれたり。

地謡「龍神湖上に出現して、龍神湖上に出現して、光もかゝやく金銀珠玉を、彼のまれびとに、捧ぐるけしき、ありがたかりける奇特かな。シテ謡「もとより衆生濟度の誓、地謡「もとより衆生濟度の誓　様々なれば、或は天女の形を現じ、有緣の衆生の諸願をかなへ、又は下界の龍神となつて、國土を靜め誓を現し、天女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなはち湖水に飛行して、浪を蹴立て水を返して、天地に群がる大蛇のかたち、天地に群がる大蛇のかたちは、龍宮に飛でぞ入りにける。

下界―こゝは龍宮の意

まれびと―客人　稀人の義

有緣の衆生―佛の信徒

朝長

梗概

源朝長は義朝の二男なり。平治の戦に打負けて、父子共に青墓の宿まで落ちしが、朝長はこゝにて自刃して死せり。此曲はその有様を半ば女に語らせ、半ば幽霊に語らす。旅僧の觀音懺法の一段有名なり。（二番目）

シテ　女　ツレ　従者　後シテ　朝長
ワキ　僧　ワキツレ　僧

ワキ詞「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の亂れに、義朝都を御開き候。中にも大夫進朝長は、美濃國青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御ゆかりの者にて候程に、急ぎ彼所に下り、御跡をも弔ひ申さんと思ひ立ちて候。三人道行詞「近江路や、瀬田の長橋うちわたり、瀬田の長橋うちわたり、猶行く末は鏡山、老曾の森を打ち過ぎて、末に伊吹の山風の、不破の關路を過ぎ行き、青墓の宿に著

清涼寺―釋迦堂あり
御開き―落つるを忌みていふ語
大夫進―大夫は五位進は中宮少進の略

きにけり。青墓の宿に著きにけり。

シテ、ツレ謡　花の跡訪ふ松風や、花の跡訪ふ松風や、雪にも恨みなるらん。シテ謡「是は青墓三人次第の長者にて候。ツレ三人謡「それ草の露水の泡、はかなき心のたぐひにも、哀をしるは習なるに、是は殊更思はずも、人のなげきを身のうへに、かゝる涙の雨とのみ、しをるゝ袖の花薄、穂にいだすべき言の葉も、泣くばかりなる有様かな。下歌光の陰を惜めども、月日の數は程ふりて、上歌雪の内、春は來にけり鶯の、春は來にけり鶯の、凍れる涙今は早、解けても寢ざれば夢にだに、御面影の見えもせで、痛はしかりし有様を、思ひ出づるもあさましや。思ひ出づるもあさましや。

雪の内に―古今集の歌末句今や解くらん

シテ詞「不思議やな此御墓所へ我ならでは、七日々々に參り、御跡弔ふ者もなきに、旅人と見えさせ給ふ御僧の、涙を流し懇に弔ひ給ふは、如何なる人にてましますぞ。ワキ詞「さん候。是は朝長の御ゆかりの者にて候が、御跡弔ひ申さんため是まで參りて候。シテ詞「御ゆかりとは懐かしや、さて朝長の御ため如何なる人にてましますぞ。ワキ詞「是は朝長の御

かやうの姿―僧體

抖擻―梵語。頭陀の漢譯、佛道修行のこと　行脚―一所不住の僧をいふ

三世―過去、現在、未來　二世―現在、未來

北邙―唐土の火葬場、轉じて一般に火葬の義にいふ

傳何某と申す者にて候ひしが、さる事有りて御暇賜はり、はや十ヶ年に餘り、かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り、御跡弔ひ申したくは候ひつれども、怨敵のゆかりをば出家の身をも許さねば、抖擻行脚に身をやつし、忍びて下向仕りて候。シテ詞「さては取り分きたる御なじみ、さこそは思召すらめ。わらはも一夜の御宿に、あへなく自害し果て給へば、たゞ身のなげきの如くにて、かやうに弔ひ參らせ候。ツキ謠「げに痛はしや我れとても、もと主從の御契、是も三世の御知遇、シテ詞「わらはも一樹の蔭のやどり、他生の緣と聞く時は、實に是とても二世の契の、ツキ謠「今日しも互にこゝに來て、シテ謠「弔ふ我も、ツキ謠「朝長も、上歌地謠「死の緣の、所も逢ひに青墓の、所も逢ひに青墓の、跡のしるしか草の蔭の、青野が原は名のみして、古葉のみの春草は、さながら秋の淺茅原、荻の燒原の跡までも、げに北邙の夕煙、一片の雲となり、消えし空は色も形も、なき跡ぞあはれなりける。なき跡ぞあはれなりける。

ツキ詞「如何に申し候。朝長の御最期の有樣くはしく語つて御聞かせ候へ。シテ詞「申すにつ

けて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入りて、門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ねしに、鎌田殿と仰せられし程に門を開かすれば、武具したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子、鎌田金王丸とやらん、わらばを頼みおほしめす。明けなば河船に召され、野間の内海へ御落あるべきとなり。又朝長は、都大崩にて膝の口を射させ、とかく煩ひ給ひしが、夜更け人靜つてのち、朝長の御聲にて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と二聲宣ふ。鎌田殿參り、こはいかに朝長の御自害候と申させ給へば、義朝驚き御覽ずれば、はや御肌衣も紅に染みて、目もあてられぬ有樣なり。其時義朝、何とて自害しけるぞと仰せられしかば、朝長息の下より、謀さん候都大崩にて膝の口を射させ、既に難儀に候しを、馬にかゝり是までは參り候へども、今は一足も引かれ候はず、路次にて捨てられ申すならば、犬死すべく候、只返す〳〵御前途をも見屆け申さで、かやうになり行き候事、さこそ云ひがひなき者と、思召され候はんずれども、道にて敵に逢ふならば、雜兵の手にかゝらん事、あまりに口惜しう候へば、是にて御暇賜はらんと、地謡「是を最

鎌田殿―正清といふ義朝の從者
野間の内海―尾張國大崩―地名

三世十方―三世は前に注す、十方は四方四隅天地
佛陀の聖衆―諸佛菩薩
觀音懺法―經文の名
鉦鼓―讀經と共に鳴らす器

期のお言葉にて、事切れさせ給へば、義朝正清とりつきて、歎かせ給ふ御有様は、よその見る目も、哀さをいつか忘れん。上歌 悲しきかなや、形を求むれば、苔庭が朽骨、見ゆるもの今は更になし。さて其聲を尋ぬれば、草徑が亡骨となづて答ふる者も更になし。三世十方の佛陀の聖衆も、あはれむ心あるならば、亡魄幽靈も、さこそ嬉しとおもふべき。下歌 かくて夕陽影うつる、かくて夕陽影うつる、雲たえ〴〵に行く空の、青野原の露分けて、彼の旅人を伴ひ、青墓の宿に歸りけり。青墓の宿に歸りけり。

ワキ詞「御僧に申し候。見苦しく候へども、暫く是に御逗留候ひて、朝長の御あとを御心靜かに弔ひ參らせられ候へ。ワキ詞「眞に御志有難う候、暫くこれに候べし。シテ詞「誰かある罷り出でて、御僧に宮仕へ申し候へ。（中入）

ワキ謡「さても幽靈朝長の、佛事はさま〴〵多けれども、ワキツレ謡「とりわき亡者の貴み給ひし、ワキ謡「觀音懺法讀みたてまつり、上歌 諸ワキ三人「聲滿つや、法の山風月更けて、法の山風月更けて、光和らぐ春の夜の、眠を覺ます鉦鼓、時もうつるや後夜の鐘、音澄み渡る折

からの、御法の夜聲感涙も、浮むばかりの氣色かな。浮むばかりの氣色かな。後シテ謡「あらありがたの懺法やな。昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀。婆婆示現觀世音、三世利益同一體。眞なるかな眞なるかな、頼もしや、聞けば妙なる法の御聲。地謡「吾今三點、シテ謡「楊枝淨水唯願薩埵と、地謡「心耳を澄ませる玉文の瑞諷、感應肝に銘ずる折から、シテ謡「あら尊の弔ひやな。

ワキ謡「不思議やな觀音懺法聲すみて、燈の影幽なるに、まさしく見れば朝長の、影の如くに見え給ふは、若々夢か幻か。シテ謡「もとよりも夢まぼろしの假の世なり、其疑ひを止め給ひて、猶々御法を講じ給へ。ワキ謡「げに〳〵かやうにまみえ給ふも、偏に法の力ぞと、思ひの玉の數ぐりて、シテ謡「聲を力にたよりくるは、ワキ謡「眞の姿か。シテ謡「幻かと、ワキ謡「見えつ、シテ「隱れつ、ワキ謡「面影の、上歌地謡「あれはとも、いはど形や消えなまし。いはど形や消えなまし。消えずはいかで燈火を、背くなよ朝長を、共にあはれみて深夜の、月も影添ひて、光陰を惜み給へや。けにや時人を、待たぬ浮世の習ひなり。只何事もう

玉文―經文

思ひの玉―念珠、珠をいふ

朝有紅顔誇世路暮爲白骨朽郊原―朗詠集の詩句

彌平兵衛―宗清

長田―平忠致

一切の男子云々―經文の語

ち捨てよ、御法を說かせ給へや。御法を說かせ給へや。

シテ、クリ謠「それ朝に紅顔あつて、世路に誇るといへども、地謠「夕には白骨となつて、郊原に朽ちぬ。シテ、サシ謠「昔は源平左右にして、朝家を守護し奉り、地謠「御代を治め國家を鎭めて、萬機の政すなほなりしに、保元平治の世の亂れ、いかなる時か來りけん、シテ謠「思はざりにし弓馬のさわぎ、地謠「ひとへに時節到來なり。クセさるほどに、嫡子惡源太義平は、石山寺に籠りしを、多勢に無勢かなはねば、力なく生捕られて、終に誅せられにけり。三男兵衛の佐をば、彌平兵衛が手にわたり、是も都へぞ捕られける。父義朝は是よりも、野間の內海に落ちゆき、長田をたのみ給へども、賴む木のもとに雨漏りて、やみやみ討たれ給ひぬ。いかなれば長田は、云ひかひなくて主君をば、討ち奉るぞや。如何なれば此宿の、あるじはしかも女人の、かひ〳〵しくも賴まれて、一夜の情のみか、かやうに跡までも、御弔ひになる事は、シテ謠「そも〳〵いつの世の契ぞや。地謠「一切の男子をば、生々の父と賴み、萬の女人を、生々の母と思へとは、今身の上に知られたり。さ

ながら親子の如くに、御歎きあれば弔ひも、誠に深き心ざし、請け悦び申すなり。朝長が後生をも、御心易く思召せ。

一乗―法華經のこと
善所―極樂

ロンギ地謡「けに頼むべき一乗の、功力ながらになどされば、未だ瞋恚の甲冑の、御有樣ぞ、いたはしき。シテ謡「梓弓、もとの身ながら玉きはる、魂は善所に赴けども、魄は修羅道に殘つて、しばし苦しみを受くるなり。地謡「そも〳〵修羅の苦患とは、いかなる敵にあひ竹の、シテ謡「此世にて見し有樣の、地謡「源平兩家、シテ謡「入り亂るゝ、地謡「旗は白雲紅葉の、散りまじり戰ふに、運の極の悲さは、大崩にて朝長が、膝の口を篦深に射させて、馬の太腹に射つけらるれば、馬は頻に跳ねあがれば、鐙を越して下り立たんとすれども、難儀の手なれば、一足もひかれざりしを、乘替にかきのせられて、憂き近江路をしのぎ來て、此青墓に下りしが、雜兵の手にかゝらんよりはと思ひ定めて、腹一文字にかき切つて、其まゝに修羅道に遠近の、土となりぬる青野が原の、亡き跡とひてたびたまへ。亡き跡を訪ひてたび給へ。

白雲紅葉―源平の旗色を喩ふ
乘替―用意の替馬

姨捨

梗概

大和物語に、或る男老いたる叔母を養ひしが、妻姑を憎しみて、そを山に捨てよと勧めければ、男老女を山に捨てしに、後悲しさに堪へず、山上の月を見て「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠み又行きて老女を迎へ來れりとの話あり。そを脚色して老女に昔語をなさしめたるもの即ちこれなり。重き能とす。

月の名近き―月の縁近き秋

中宿―途中の旅宿

シテ　姨(前ば里女)　ワキ　旅僧

ワキ次第「月の名近き秋なれや、月の名近き秋なれや、姨捨山を尋ねん。詞かやうに候者は、都方に住居仕る者にて候。我未だ更科の月を見ず候程に、この秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候。道行詞此程の、しばし旅居の假枕、しばし旅居の假枕、また立ち出る中宿の、明かし暮らして行く程に、こよぞ名におふ更科や、姨捨山に著きにけり。姨捨山に著きにけり。詞さても我姨捨山に來て見れば、嶺平かにして萬里の空もへだてなく、千

里に隈なき月の夜、さこそと思ひやられて候。いかさま此所に休らひ、今宵の月を詠めばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵あれなる旅人は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候是は都の者にて候が、はじめてこの所に來りて候。さて〳〵御身はいづくに住む人ぞ。シテ詞「是は此更科の里に住む者にて候。今日は名におふ秋の半、暮るゝを急ぐ月の名の、殊に照り添ふ天の原、隈なき四方の氣色かな。いかに今宵の月の面白からんずらん。ワキ謠「さては更科の人にてましますかや。さて〳〵古へ姨捨の、在所はいづくの程にて候ぞ。シテ詞「姨捨山のなき跡と、問はせ給ふは心得ぬ。謠我が心慰めかねつ更科や、詞姨捨山に照る月を見てと、詠ぜし人の跡ならば、是に小高き桂の木の、陰こそ昔の姨捨の、其なき跡にて候へとよ。ワキ謠「さては此木の陰にして、捨て置かれにし人の跡の、シテ詞「其まゝ土中に埋れ草、かりなる世とて今は早、ワキ謠「昔語りになりし人の、猶執心や殘りけん。シテ謠「なき跡までも何とやらん、ワキ謠「物凄しき此原の、シテ謠「風も身にしむ、ワキ謠「秋の心。上歌地謠「今と

桂の木ー月中に桂樹ありといふより月の縁とず

一重山―姨捨山十三景の内　雲靄きて一雲の晴るるをいふ

執心―執著心

ても、慰めかねつ更科や、慰めかねつ更科や、姨捨山の夕暮に、松も桂もまじる木の、緑も殘りて秋の葉の、はや色づくか一重山、薄霧も立ち渡り　風すさまじく雲靄きて、寂しき山の氣色かな。寂しき山の氣色かな。

シテ詞「旅人はいづくより來り給ふぞ。ワキ詞「されば以前も申すごとく、都の者にて候が、更科の月を承り及び、始めて此所に來りて候よ。シテ詞「さては都の人にてましますかや。さあらば妾も月と共に、現れ出でて旅人の、夜遊を慰め申すべし。ワキ詞「そもや夜遊を慰めんとは、御身はいかなる人やらん。シテ謠「誠は我は更科の者。ワキ謠「さてはいまは又何方に。シテ謠「住家といはんは此山の、ワキ謠「名にしおひたる、シテ謠「姨捨の、上歌地謠「それといはんも恥かしや、それといはんも恥かしや。其古へも捨てられて、只一人此山に、すむ月の名の秋毎に、執心の闇を晴らさんと、今宵あらはれ出でたりと、夕陰の木の本に、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。

ワキ上歌謠「夕影過ぐる月影の、夕影過ぐる月影の、はや出で初めて面白や、萬里の空も隈

三五夜中新月色
二千里外故人心
―白樂天の詩句

明けば又云々―
定家の歌

月の友人―月見の連中

女郎花の草衣―
女郎花衣は裘青裏葡萄黄とゝは老女の袖しほたれて―露に萎るゝこと

なくて、いづくの秋も隔てなき、心も澄みて夜もすがら、三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心。

後シテ謡「あら面白の折からやな、あら面白の折からや。明けば又秋の半も過ぎぬべし、今宵の月の惜きのみかは、さなきだに秋待ちかねてたぐひなき、名を望月の見しだにも、おぼえぬ程に隈もなき、姨捨山の秋の月、餘りに堪へぬ心とや。昔とだにも思はぬぞや。

ワキ謡「不思議やな早更けすぐる月の夜に、白衣の女人現れ給ふは、夢か現か覺束な。

シテ詞「夢とはなどや夕暮に、現れ出でし老の姿、恥かしながら來りたり。

ワキ謡「何をか包み給ふらん、もとより所も姨捨の、

シテ謡「山の老女が住み所の、

ワキ謡「昔に歸る秋の夜の、

シテ謡「月の友人圓居して、

ワキ謡「草を敷き、

シテ謡「花に起き臥すそでの露の、

シテ、ワキ謡「さも色々の夜遊の人に、いつ馴れそめてうつゝなや。

上歌地謡「盛ふけたる女郎花の、盛ふけたる女郎花の、草衣しほたれて、昔だに、捨てられし程の身を知らで、又姨捨の山に出でて、面を更科の、月に見ゆるも恥かしや。よしや何事も夢の世の、なか〳〵云はじ思はじや、

興にひかれて―晉王子猷が冬夜戴逵を訪はんとて舟に乗りその門に入らずして引返せり曰く興に乗じて來り興盡て返ると此の語に據る　一輪滿てる―三井寺にあり超世の悲願―世に超えたる慈悲の誓願　三光―日月星　寶の池―極樂の八功德池なり又姨捨山十三景の内　迦陵頻伽―淨土に棲む美音の鳥

思ひ草花にめで、月に染みて遊ばん。

クリ地謡「實にや興にひかれて來り、興盡きて歸りしも、今の折かと知られたる、今宵の空の氣色かな。シテ、サシ謡「然るに月の名所、いづくはあれど更科や、地謡「姨捨山の曇りなき、一輪滿てる淸光の影、團々として海嶠を離る。シテ謡「然れば諸佛の御誓、地謡「いづれ勝劣なけれども、超世の悲願普き影、彌陀光明に若くはなし。クセさるほどに、三光西に行く事は、衆生應じて西方に、勸め入れんが爲とかや。月は彼の如來の右の脇士として、有緣を殊に導き、重き罪を輕んずる、天上の力を得る故に、大勢至とは號すとか天冠の間に、花の光かよやき、玉の臺の數々に、他方の淨土を現す。玉珠樓の風の音糸竹の調とりぐに、心ひかるよ方もあり。蓮色々に咲きまじる、寶の池の邊に立つや竝木の花散りて、芬芳しきりに颯れたり。シテ謡「迦陵頻伽のたぐひなき、地謡「聲をたぐへて諸共に孔雀鸚鵡の、同じく囀る鳥のおのづから、光も影もおしなめて、至らぬ隈もなければ、無邊光とは名づけたり。然れども雲月の、ある時は影滿ち、又ある時は影缺く

る、有爲轉變の世の中の、定めのなきを示すなり。

シテ謡「昔戀しき夜遊の袖。（舞）ワカ我が心、慰めかねつ更科や、地謡「姨捨山に照る月を見て、姨捨山に照る月を見て。シテ謡「月に馴れ、花に戯るゝ秋草の、露のまに、地謡「露のまに、中々何しにあらはれて、胡蝶の遊び、シテ謡「たはむるゝ舞の袖、地謡「返せや返せ、シテ謡「昔の秋を、地謡「思ひいでたる妄執の心、やる方もなき今宵の秋風、身にしみ〴〵と、戀しきは昔、忍ばしきは閻浮の、秋よ友よと思ひ居れば、夜も既にしら〳〵と、はやあさまにもなりぬれば、我も見えず、旅人も歸るあとに、シテ謡「獨捨てられて老女が、地謡「昔こそあらめ今も又、姨捨山とぞなりにける、姨捨山となりにけり。

柏崎

梗概

柏崎何某の妻夫に死別し、又その子花若の遁世したる悲しみに堪へずして、氣も心も狂ひ亂れ、故郷を浮れ出でて、善光寺に詣でしに、不思議や我が子に廻り會へり。後半、阿彌陀如來の佛說を述ぶる事詳なり。（四番目）

シテ　狂女（前は女）　子方　花若

ワキ　小太郎　ツレ　僧

ワキ次第 夢路も添ひて故郷に、夢路も添ひて故郷に、歸るや現なるらん。 謂 是は越後國柏崎殿の御内に、小太郎と申す者にて候。さても頼み奉りし人は、訴訟の事候ひて、在鎌倉にて御座候ひしが、只かりそめに風の心地と仰せ候ひて、程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も、同じく在鎌倉にて御座候ひしが、父御の御別れを歎き給ひ、何處ともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に、御形見の品々を取り添へ、只今故

雪の下山の内一共に鎌倉の地名

郷柏崎へと急ぎ候。道行詞　乾しぬべき、日影も袖やぬらすらん。日影も袖やぬらすらん。今行く道は雪の下、一通り降る村時雨、山の内をも過ぎ行けば、袖さえまさる旅衣、碓氷の峠打過ぎて、越後に早く著きにけり、越後に早く著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、故郷柏崎に著きて候。まづ〳〵案内を申さうずるにて候。如何に申し候。鎌倉より小太郎が参りて候。それ〳〵御申し候へ。シテ詞「なに小太郎とは、もし殿の御帰りありたるか。あら珍しや何とて物をば申さぬぞ。ワキ詞「さん候是までは参りて候へども、謡何と申しあぐべきやらん、更に思ひも辨へず候。シテ詞「あら心もとなや。物をば申さでさめ〴〵と泣くは、さて花若が方に何事かある。ワキ詞「さん候花若殿は御遁世にて御座候。シテ詞「何と花若が遁世したるとは、さては父の叱りけるか、など追手をばかけざりしぞ。ワキ詞「いや左様にも御座なく候。様々の御形見の物を持ちて参りて候。シテ謡「何さま〴〵の形見とは、さては花若が父の空しくなりたるな。謡此程は其方の風もなつかしく、便も嬉しかりつるに、形見を届くる音信は、なか〳〵聞きても恨めしきぞ

やがてと言ひし―やがて歸らんと言ひし

や。只假初に立ち出でて、やがてと言ひし其主は、地謡「昔語りに早なりて、形見を見るぞ涙なる。

ロンギ謡「さてや最期の折節は、いかなる事か宣ひし、委しく語りおはしませ。せめては聞いて慰まん。ワキ謡「只故郷の御事を、おほつかなく思召し、御最期までも人知れずひそかに御誦ありしなり。シテ謡「實にやさこそはおはすらめ。三年離れて其後は、我も御名殘、いつの世にかは忘るべき。ワキ謡「御ことわりと思へども、歎きをとどめおはしまし、形見を御覽候へ。シテ謡「實にや歎きても、かひなき世ぞと思へば、地謡「形見を見るからに、すすむ涙はせきあへず。

さても〳〵―これより文の文句

ワキ詞「花若殿の御文の候。これを御覽候へ。シテ謡「さても〳〵父御前、勞はりつかせ給ひ、程なく空くなりたまへば、心の内の悲しさは、只思召しやらせ給へ。我も歸りて御有樣、見參らせたくは候へども、思ひ立ちぬる修行の道、もしや止められ申さんと、思ふ心を便にて、心強くも出づるなり、命つれなく候はゞ、三年が内には參るべし、樣々の形見

命つれなく―命が無情にて死なずに

を御覽じて、御心を慰みおはしませと、書いたる文の恨めしや。地謡「亡からん父が名殘には、子ほどの形見あるべきか。上歌父が別れは如何なれば、父が別れは如何なれば、悲しみ修行に出づる身の、などや生きてある、母に姿を見みえんと、思ふ心のなかるらん、恨めしの我子や。憂き時は、恨みながらもさりとては、我子のゆくへ安穩に、守らせ給へ神佛と、祈る心ぞあはれなる。祈る心ぞあはれなる。（中入）

ワキ（僧）詞「かやうに候者は、信濃國善光寺の住僧にて候。又是に渡り候人は、いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に、師弟の契約をなし、此程出家させ申して候。さる間毎日如來堂へ伴なひ申し候。今日も又參らばやと思ひ候。一曲シテ詞「是なる童部どもは何を笑ふぞ。なに物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は、訪ひてこそ給ぶべけれ、それをいかにといふに、夫には死して別れ、只ひとり忘れ形見とも思ふべき、諭子の行方をも白糸の、地謡「亂れ心や狂ふらん。シテ謡「實にや人の身のあだなりけりと、誰かいひけん空言や。又思ひには死なれざりけりと、詠みしもことわりや。今身の上に知られた

恨みながらも―實はかはゆき意

善光寺―阿彌陀院百濟寺と號す　推古天皇十年草

如來堂―其寺の本堂

り。是もひとへに夫や子の、故と思へば恨めしや。地謡「うき身は何と楢の葉の、柏崎をば狂ひ出で、上歌 越後の國府に著きしかば、越後の國府に著きしかば、人目も分かぬ我姿、いつまで草のいつまでと、知らぬ心は麻衣、浦はるゞと行くほどに、松風遠く寂しきは、常盤の里の夕かや 我にたぐへて、あはれなるは此里。子故に身をこがしょは、野邊の木島の里とかや、降れども積らぬ淡雪の、淺野といふは是かとよ。桐の花咲く井の上の、山を東に見なして、西に向へば善光寺、正身の彌陀如來、わが狂亂はさておきぬ、死して別れし、夫を導きおはしませ。

越後の國府―頸城郡に在り

脩齒の里―以下地名皆善光寺道中

木島―雉子を官掛く

ワキ、ツレ詞「いかに狂女、御堂の內陣へは叶ふまじきぞ、急いで出で候へ。シテ詞「極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂とこそ見えたれ。ワキ、ツレ詞「是は不思議の物狂ひかな。そも左樣の事をば誰が教けるぞ。シテ詞「教は本よりみだ如來の、御誓にてはましまさずや。唯心の淨土と聞く時は、此善光寺の如來堂の、內陣こそは極樂の、九品上生の臺なるに、女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば、如來の仰せありけるか。よし人々は何と

內陣―本尊を安置せる所

極重惡人云々―往生要集の文

九品―極樂の運の塞に九等あり上品中品下品の各〻に上生中生下生あるなり

もいへ、謡聲こそしるべ南無阿彌陀佛、地謡「頼もしや、頼もしや　シテ謡「釋迦は遣り、地謡「彌陀は導く一筋に、こゝを去ること遠からず。是ぞ西方極樂の、上品上生の、内陣にいざや參らん。光明遍照十方の、誓ぞ著き此寺の、常の燈火影頼む、夜念佛申せ人々よ、夜念佛いざや申さん。

シテ詞「いかに申し候。如來へ參らせ物の候。此烏帽子直垂は、別れし夫の形見なれども、謡形見こそ今はあだなれ是なくは、忘るゝひまもあらまし物をと、よみしも思ひ知られたり。是を如來に參らせて、夫の後生善所をも、祈らばやと思ひ候。あらいとほしや此烏帽子直垂の主は、詞よろづ何事につきても闇からず、弓は三物とやらんを射そろへ、歌連歌の道も達者なりし上、又酒盛などの折節は、いで人々に亂舞まうて見せんとて、謡鎧直垂とりいだし、衣紋うつくしく著ないて、緣塗取つて打ちかづき、手拍子人に囃させて、扇おつ取り鳴るは瀧の水。

クリ地謡「それ一念稱名の聲の内には、攝取の光明を待ち、聖衆來迎の雲の上には　シテ

形見こそ―伊勢物語の歌

三つ―射藝の名　流鏑馬、笠掛、犬追物の三つ

緣塗―絹製の烏帽子の緣を塗りたるもの　鳴るは瀧の水―亂舞の謡

白虹地に滿ちて―彌陀來迎の光明をいふ

身三口四意三の十の道―十惡なり、殺生偸盜邪婬は身の罪、妄語綺語惡口兩舌は口の罪、貪欲瞋恚愚痴は意の罪

初の御法―釋迦が最初に說きし華嚴經のこと

黃金の岸―極樂の池底には金沙を敷けりといふ

謠「九品蓮臺の花散りて、地謠「異香みち〳〵て人に薰じ、白虹地に滿ちて列れり。シテ、ツレ謠「つらつら世間の幻相を觀ずるに、飛花落葉の風の前には、有爲の轉變を悟り、地謠「電光石火の影の中には、生死の去來を見る事、始て驚くべきにはあらねども、幾世の夢とまとはりし、假の親子の今をだに、添ひ果てもせぬ道芝の、露のうき身の置き所シテ謠「誰に問はまし旅の道、地謠「是もうき世のならひかや。クセ悲しみの涙眼にさへぎり、思の煙胸に滿つ。つら〳〵之を案ずるに、三界に流轉して、猶人間の妄執の、晴れ難き雲の端の、月の御影や明けき、眞如平等の臺に、いたらんとだにも歎かずして、煩惱の絆に、結ぼほれぬるぞ悲しき。罪障の山高く、生死の海深し。如何にとしてか此生に、此身を浮めんと、けに歎けども人間の、身三口四意三の、十の道おほかりき。シテ謠「されば初めの御法にも、地謠「三界一心なり、心外無別法、心佛及衆生と聞く時は、是三無差別、なに疑ひのあるべきや。己身の彌陀如來、唯心の淨土なるべくは、尋ぬべからず此寺の、御池の蓮の、得ん事をなどか知らざらん。只願はくは影たのむ、聲を力の助船、黃金の岸に至

量無き命の佛―無量壽佛阿彌陀如來

圖原や―新古今集是則の歌末句逢はぬ君かな

るべし。そも〳〵樂みを極むなる、教あまたにうまれ行く、道さま〴〵の品なれや。寶の池の水、功德池の濱の眞砂、數々の玉の床、臺も品々の、樂みを極め、量無き命の佛なるべしや。若我成佛、十方の世界なるべし。シテ謠「本願誤り給はずは、地謠「今の我らが願はしき、夫の行方をしら雲の、たなびく山や西の空の、彼國に迎へつょ、一つ淨土の緣となし、望を叶へ給ふべしと、稱名も鉦の音も、曉かけて燈火の、善き光ぞと仰ぐなりや。南無歸命彌陀尊、願をかなへ給へや

ロンギ地謠「今は何をか包むべき、是こそ御子花若と、いふにもすょむ涙かな。シテ謠「我子ぞと、聞けば餘りに堪へかぬる、夢かとばかり思ひ子の、何れぞさてもふしぎやな。地謠「ともにそれとは思へども、かはる姿は墨染の、シテ謠「見しにもあらぬ面忘れ、地謠「母の姿もうつょなき、シテ謠「狂人といひ、地謠「衰へといひ、互にあきれてありながら、よく〳〵見れば園原や、伏屋に生ふる帚木の、ありとは見えて逢はぬとこそ、聞きしものを今はは や、疑もなき、其母や子に逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふこそ嬉しかりけれ。

阿漕

梗概

伊勢の阿古木が浦は昔太神宮へ調進の鰒の隹肴を漁する所たり。故に一般の漁獵は禁制たりき。然るに阿古木といふ漁夫之れを犯して度重なり、顯れければ、罪に問はれて果てぬとぞ。この傳説に據りて、漁夫の亡靈を出し、昔語をなさしめ、旅僧の弔を受けしむ。前に掲げたる鵜飼に似たる曲なり。（四番目）

シテ　阿漕（前ば漁翁）　ワキ　旅僧

ワキ、次第謡「心盡しの秋風に、心盡しの秋風に、木の間の月ぞすくなき。詞是は九州日向國の者にて候。我未だ伊勢大神宮に參らず候程に、只今思ひ立ちて候。道行謡日に向ふ、國の浦舟漕ぎ出でて、國の浦舟漕ぎ出でて、八重の汐路をはるぐと、分けこし波の淡路潟、通ふ千鳥の聲聞きて、旅の寢覺を須磨浦、關の戸ともに明け暮れて、阿漕が浦に著きにけり、阿漕が浦に著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早伊勢國阿濃の郡とやらん申し候。暫

心盡しの―古今集に、木の間よりもりくる月の影みれば心盡しの秋はきにけり　淡路潟―金葉集に「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寢覺めぬ須磨の關守」

く人を相待ち、所の名所をも尋ねばやと思ひ候。

シテ謡「一聲波ならで、乾す隙もなき海士衣、身の秋いつと限らまし。サシ夫れ世を渡る習ひ、我一人に限らねども、せめては職を營む田夫ともならず、かく淺ましき殺生の家に生れ、明暮物の命を殺す事の悲さよ。詞拙かりける殺生かなとは思へども、浮世の業にて候程に、今日も又釣に出でて候。ワキ詞「如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ謡「伊勢の國にとりても、此浦をば如何なる所と申し候ぞ。シテ詞「さん候、此所をば阿漕が浦と申し候。ワキ詞「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや。古き歌に、謡伊勢の海阿漕が浦に引く網も、詞度重なれば顯れにけり。かやうに詠まれし浦なるぞや。あら面白や候。シテ詞「あらやさしの旅人や。所の和歌なればなどかは知らで候べき。彼の六帖の歌に、謡逢ふ事も阿漕が浦に引く網も、詞度重ならば顯はれやせん。かやうに詠まれし海士人なれば、さも心なき伊勢をの海士の、みるめも輕き身なればとて、賤しみ給ひ候なよ。ワキ謡「實にや名所舊跡に、馴れて年經ば心な

身の秋いつと―海士なれば袖のぬるゝは秋の露を待たずとなり

六帖―紀家六帖といふ貫之女撰と稱す　逢ふ事も―六帖には下句數重なれば人も知りなんとあり

き、シテ謡「海士の焼く藻の夕煙、ワキ謡「身を焼くべきにはあらねども、シテ謡「住めば所による波の、ワキ謡「音も變るか、シテ謡「聞き給へ。上歌地謡「物の名も、所によりて變りけり、所によりて變りけり、難波の芦の浦風も、こゝには伊勢の濱荻の、音をかへて聞き給へ。藻鹽燒く、煙も今は絶えにけり、月見んとての、海士のしわざにと、許され申す海士衣、敷島により來る、人なみに如何で漏るべき。

ワキ詞「此浦を阿漕浦と申すいはれ御物語候へ。シテ詞「總じて此浦を阿漕浦と申すは、伊勢大神宮御降臨より以來、御膳調進の網を引く所なり、されば神の御誓によるにや、海邊のうろくづ此所に多く集まるによつて、浮世を渡るあたりの海士人、此所にすなどりを望むといへども、神前の恐あるにより、堅く戒めてこれを許さぬ所に、阿漕といふ海士人、業に望む心の悲しさは、夜々忍びて網を引く。しばしは人も知らざりしに、度重なれば顯れて、阿漕を縛め所をかへず、此浦の沖に沈めけり。謎さなきだに伊勢をの海士の罪深き、身を苦しみの海の面、重ねておもき罪科を、受くるや冥途の道までも、地謡「娑婆

物の名も「草の名も所により」てかはるなり難波のあしは伊勢の濱荻」といふ連歌あり　藻鹽燒く―續後拾遺集の歌初句　鹽竈のとあり

にての名にしおふ、今も阿漕が恨めしや。阿責の責の隙なくて、苦しみも度重なる、罪弔はせ給へや。クセ　恥かしや古へを、語るもあまり實に、阿漕が浮名もらす身の、なき世語の色々に、錦木の數積り、千束の契怨ぶ身の、阿漕がたとへ浮名立つ、憲清と聞えし、其歌人の忍び妻、阿漕々々といひけんも、責一人に、度重なるぞ悲しき。ロンギ地謡「不思議やさては幽靈の、幻ながら現れて、執心の浦波のあはれなりける値遇かな。シテ謡「一樹の宿をも、他生の縁と聞くものを、御身も前の世の、値遇をすこし松陰に、うらぶれ給へ墨衣。地謡「日も夕暮の汐煙、立ち添ふ方や漁火の、シテ謡「影もほのかに見え初めて、地謡「海邊も晴るゝ村霧に、シテ謡「すはや手繰の、地謡「網の綱、繰返し〳〵、浮きぬ沈むと見しよりも、俄に疾風吹き、海面暗くかき暮れて、數波も立ち添ひ、漁の燈消え失せて、こはそも如何にと叫ぶ聲の、波に聞えしばかりにて、跡はかもなく失せにけり。跡はかもなく失せにけり。（中入）

上歌「いざ弔はん數々の、いざ弔はん數々の、法の中にも一乘の、妙なる花の紐解きて、

錦木―同名の謡曲を見よ　慶清―西行法師の俗名、上臈に思をかけし事をいふ

うらぶれ給へ―浦といふ語を含めてつゞけたるにて、こゝは馴れ休む意　數波―重なる波

苔の衣の玉ならば、終に光は暗からじ、終に光は暗からじ。

後シテ謡「海士の刈る、藻に住む蟲の我からと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ。今宵は少し波あれて、御膳の贄の網はまだ引かれぬよなう。詞よき隙なりと夕月なれば、脊よりやがて入汐の、潟道をかへ人目を、忍び〳〵に引く網の、沖にも磯にも船は見えず、只我のみぞ英虞の海、阿濃が鹽木こりもせで、地謡「なほ執心の網置かん。シテ謡「伊勢の海、清き渚のたま〳〵も、地謡「弔ふこそたより法の聲、シテ謡「耳には聞けどもなほ心には、地謡「只罪をのみ持網の、波はかへつて猛火となるぞや。あら熱や堪へがたや。丑みつ過ぐる夜の夢、丑みつ過くる夜の夢、見よや因果の廻り來る、火車に業積む、數苦しめて目の前の、地獄も眞なり。實に恐しのけしきや。シテ謡「思ふも怨めし古への、地謡「思ふも恨めし古への、娑婆の名を得し、阿濃が此浦に、なほ執心の、心引く網の手馴れしうろくづ今は却つて、惡魚毒蛇となつて、紅蓮大紅蓮の氷に身を傷め、骨を碎けば叫ぶ息は、焦熱大焦熱の、焔煙り、雲霧立居に隙もなき、冥途の責も度重なる、阿濃浦の罪科を、助け給へ

海士の刈る藻に住む蟲の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ―古今集、藤原直子の歌

伊勢の海清き渚の―催馬樂歌の語、たま〳〵といふ爲の序

火車に業積む―地獄の火の車に罪を積むこと

紅蓮大紅蓮―地獄の名　焦熱大焦熱―同

や旅人よ、助け給へや旅人とて、また波に入りにけり、また波の底に入りにけり。

内七

志賀

梗概

古今集の序に「大伴の黒主はそのさまいやしいはゞ薪を負へる山人の花の陰に休めるが如し」とあるによりて、黒主の住國近江志賀の地に寄せて、その靈出でて歌語りをなす事を作る。歌道を説き、御代を頌する意を帯ぶ。（脇能）

シテ　大伴黒主（前は樵夫）　シテツレ　樵夫

ワキ　臣下　　アキツレ　臣下

三人次第謡「道ある御代の花見月、道ある御代の花見月、都の山ぞ長閑けき。ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻、今を盛なる由承り及び候程に、只今志賀の山路へと急ぎ候。三人道行謡「春の色、棚引く雲の朝ぼらけ　棚引く雲の朝ぼら

花見月＝三月の異名

志賀の山越＝北白河より近江に超ゆる道

け、長閑けき風の音羽山、今朝越え來れば是ぞ此、名に負ふ志賀の山越や、湖遠き眺めかな。湖遠き眺めかな。ワキ詞「急ぎ候程に、江州志賀の山に著きて候。暫く此所に候ひて花を詠めうずるにて候。一聲謡シテツレ「さゝ波や、志賀の都の名を留めて、昔ながらの山櫻、ツレ謡「春に馴れてや心なき、シテツレ謡「身にも情の殘るらん。シテサシ謡「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲、シテツレ謡「人間萬事様々の、世を渡り行く身の有樣、物毎に遮る眼の前、光の影をや送るらん。下歌餘に山を遠く來て、雲また跡を立ち隔て、上歌入りつるかたも白波の入りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて、半日の客たりしも、今身の上に知られたり。今身の上に知られたり。

ワキ詞「不思議やな是なる山賤を見れば、重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ、休む所も花の陰なり。是は心有りて休むか、只薪の重さに休み候か。シテ詞「仰せ畏つて承り候ひぬ。先薪に花を折る事は、謡道のべの便の櫻折り添へて、詞薪や重き春の山人と、歌人も御不審有りし上、今更何とか答へ申さん。ツレ謡「又奥深き山路なれば、松も檜原も

さゝ波や―千載集の歌「さゝ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」恩度の歌なると平家物語に見ゆ

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲―朗詠集の詩句

山遠雲埋行客之跡―同　謡入仙家爲半日之客―同

道のべの―雲玉集に黒主の歌としてあり

多けれども、取り分き花の陰に休むを、シテ詞「只薪の重さに休むかとの、おほせは面目なきよなう。シテ、ツレ謡「さりながら彼黒主が歌のごとく、其様賤しき山賤の、薪を負ひて花の陰に、休む姿は實にも又、其身に應ぜぬ振舞なり。許し給へや上臈達。ワキ詞「こは如何に優るをも羨まざれ、劣るをも賤しむなとの、古人の掟は眞なりけり優しくも、古歌の喩への心を以て、謡今の返答申したり。シテ詞「いや〳〵古歌の喩へとやらんも、更々知らぬ身なれども、賤しき身にも思ひよりて、ワキ謡「彼大伴の黒主が、心を寄する老の波、シテ謡「和歌の浦わの藻鹽草、ワキ謡「かく喩へ置く世語の、シテ謡「それは黒主、ワキ謡「是は眞に、シテ謡「さまも賤しき、ワキ謡「山賤の、地謡「身には應ぜぬ事なれど、許させ給へ都人、とてもの思出に、花の陰に休まん。實にや今までも、筆を殘して貫之が、詞の玉のおのづから、古へ今の道とかや。古へ今の道とかや。

クリ地謡「それ賢かつし時代を尋ぬるに、延喜の聖代の古へ、國を恵み民を撫でて、萬機の政を治め給ふ。シテ、サシ謡「然れば其御時に至つて、和歌の道盛んにして、古今の詠歌を

心を寄する―歌道に熱心なること

古今の道―古今集の意を含む

二聖―人麿赤人
六歌仙―僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主
其外の人々―以下古今集序の詞を用ゐる

無見頂相の如来―三十一字は如来の無見頂相を除きて世二相を表し又世一尊に讃歎すとなり

撰み、地謡「二聖六歌仙を始として、其外の人々は、野邊の葛のはひ廣ごり、林に茂き木の葉の露の、色に染み行く歌人の、心は花になるとかや。シテ謡「實に埋木の人知れぬ、地謡「ことわざまでの情とかや。クセそも〳〵難波津淺香山の、影見えし山の井の、淺くは誰か思ひ草の、露往き霜來る色なれや。濱の眞砂より、數多き言の葉の、心の花の色香までも、妙なりや敷島の、道有る御代の翫び。然れば三十一文字の、神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れたまへば、君も安全に、萬民時を樂みて、都鄙圓滿の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬歳の、響は長閑けかりけり。シテ謡「今天皇の御代久に、地謡「萬の政の、道直ぐに渡る日の、東南に雲をさまり、西北に風靜にて、言葉の林榮ゆくや、花も常磐の山松の　巷に諠ふ聲までも、是和歌の詠に漏るべしや　天地を動かし、鬼神も感をなすとかや。

ロンギ「地謡「實にや異なる山賤の、實にや異なる山賤の、家路いづくの末ならん。ゆかしき心なるべし。シテ謡「今は何をか包むべき、其いにしへは大伴の、黒主といはれしが、時代とて

此山の、神とも人や見るらん。地謡「そも此山の神ぞとは、不思議やさては大伴の、シテ謡「それは黒主が家の名の、地謡「大伴か。シテ謡「我はたど、地謡「薪負ふ友もなくて、ひとり山路の花の陰に、長休みしつる恥やと、夕の雲に立ち隠れて、志賀の宮路に帰りけり。志賀の宮路に帰りけり。（中入）

いざ今日は―古今集黒主の歌に「鏡山いざ立寄りて見て行かん年経ぬる身は老やしぬると」薪の斧の―晉王賀山に入り仙人の碁を打つを見て斧のくちたる故事

今集雑性の歌末句花の陰かは

上歌謡「いざ今日は、春の山邊にまじりなん、春の山邊にまじりなん、暮れなばなけの花の陰、月に詠じて天の原、時の調子に移り来る、舞歌の聲こそあらたなれ。舞歌の聲こそあらたなれ。

後シテ謡「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山、越えても同じ花園の、里も春めく近江の湖の、志賀辛崎の松風までも、千聲の春の長閑けさよ。海越に、見えてぞ向ふ鏡山、地謡「年經ぬる身は老が身の、シテ謡「それは老が身これは志賀の、地謡「神の白木綿かけまくも、忝しや神樂の舞。（神舞）

シヾ地謡「不思議なりつる山人の、不思議なりつる山人の、薪の斧の永き日も、殘る和光

のあらたさよ。シテ謡實に惜むべし君が代の、長閑けき色や春の花の、塵に交はる雪ならば、踏む跡までも心せよ。地謡實に心して春の風、聲も添ふなり御神樂の、シテ謡小忌の衣の色はえて、地謡花は梢の白和幣、シテ謡松は立枝の、地謡青和幣、かくるやかへるや梓弓、春の山邊を越え來れば、道も去りあへず散る花の、雲の羽袖を返しつよ、紅の御袴のそばを取り、拍子を揃へて神かぐら、實に面白き奏かな。實に面白き奏かな。

梓弓春の山邊を―古今集の歌末句花ぞ散りける

鵺

梗概

源三位頼政が、内裏に於て、鵺といふ怪物を射取りし功名談は載せて平家物語にあり。此曲はそを資料として脚色し、鵺の霊出でて昔語をなし、旅僧の弔を受くといふ例の如き形式なり。（四番目）

シテ　鵺（前は舟人）　ワキ　僧

次第「世を捨人の旅の空、世を捨人の旅の空、来しかた何処なるらん。詞是は諸国一見の僧にて候。我此程は三熊野に参りて候。又是より都に上らばやと思ひ候。道行詞程もなく、帰り紀の路の關越えて、帰り紀の路の關越えて、猶行く末は和泉なる、信田の森をうち過ぎて、松原見えし遠里の、こよ住の江や難波潟、蘆屋の里に著きにけり。蘆屋の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、是ははや津の國蘆屋の里に著きて候。日の暮れて候程に、宿を借らばやと思ひ候。

紀―來に掛く

遠里―遠里小野のこと、をりをのともいふ

實魂の浮木―實盛に注す
空穂舟―九太舟のこと

シテ、ワキ「謡」悲きかなや身は籠鳥、心を知れば盲龜の浮木、たゞ闇中に埋木の、さらば埋れも一聲「謡」果てずして　亡心何に殘るらん。一聲浮き沈む、涙の波の空穂舟、地謡「こがれて堪へぬいにしへを、シテ謡「忍びはつべき隙ぞなき。

古き歌にも盧の屋の―伊勢物語の歌

ワキ謡「不思議やな夜も更け方の浦波に、幽に浮び寄るものを、見れば聞きしに變らずして、舟の形は有りながら、只埋木の如くなるに、乘る人影も定かならず。あら不思議の者やな。シテ詞「不思議の者と　承る、其方は如何なる人やらん。謡　もとより憂き身は埋木の、人知れぬ身とおぼしめさば、不審は爲させ給ひそとよ。ワキ謡いや是は只此里人の、さも不思議なる舟人の、夜々來ると言ひつるに、見れば少しも違はねば、我も不審を申すなり。シテ詞「此里人とは蘆の屋の、灘の鹽燒く海士人の、類ひを何と疑ひ給ふ。ワキ謡「鹽燒く海士の類ひならば、業をばなさで暇ありげに、夜々來るは不審なり。シテ詞「實に〳〵暇の有る事を、疑ひ給ふも謂れあり。古き歌にも蘆の屋の、ワキ謡「灘の鹽燒き暇なみ、黃楊の小櫛はさゝず來にけり。シテ謡「我も憂きには暇なみの、ワキ謡「汐にさゝれて、シテ謡「舟

人は、上歌地謡「さゝで來にけり空穗舟、さゝで來にけり空穗舟、現か夢か明けてこそ、みるめも刈らぬ蘆の屋に、一夜寢て海士人の、心の闇を弔ひ給へ。有難や旅人は、世を遁れたる御身なり、我は名のみぞ捨小舟、法の力を賴むなり、法の力を賴むなり。ワキ詞「何と見申せども更に人間とは見えず候。如何なる者ぞ名を名乘り候へ。シテ詞「是ほ近衞の院の御宇に、賴政が矢先にかゝり、命を失ひし鵺と申しゝ物の亡心にて候。其時の有樣委しく語つて聞かせ申し候べし。跡を弔うて賜はり候へ。ワキ詞「さては鵺の亡心にて候か。其時の有樣委しく語り候へ。跡をば懇に弔ひ候べし。

有驗―前繩の外驗有る意

クリ地謡「さても近衞の院の御在位の時、仁平のころほひ、主上夜な〳〵御惱あり。シテ謡「有驗の高僧貴僧に仰せて、大法を修せられけれども、そのしるし更になかりけり。地謡「御惱は丑の刻ばかりにてありけるが、東三條の森の方より、黑雲一村立ち來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえ給ひけり。シテ謡「卽ち公卿詮議あつて、地謡「定めて變化の者なるべし、武士に仰せて警固有るべしとて、源平兩家の兵を選ぜられける程に、賴政を選

み出だされたり。ワキ頼政其時は、兵庫の頭とぞ申しける。頼みたる郎等には、猪早太。只一人召し具したり。我身は二重の狩衣に、山鳥の尾にて矧いだりける、尖矢二筋、滋藤の弓に取り添へて、御殿の大床に伺候して、御悩の刻限を、今や今やと待ち居たり。さる程に案の如く、黒雲一村立ち来り、御殿の上に蔽ひたり。頼政きつと見上ぐれば、雲中に、怪きものの姿あり。シテ謡「矢取つて打ちつがひ、地謡「南無八幡大菩薩と、心中に祈念して、よつぴきひやうと放つ矢に、手應へしてはたと當る。得たりやおうと、矢叫びして、落つる所を猪早太、つょと寄りて縋けさまに、九刀ぞ刺いたりける。さて火を燈し能く見れば、頭は猿、尾は蛇、足手は虎のごとくにて、鳴く聲鵺に似たりけり。恐ろしなんども、愚かなる形なりけり。

ロンギ地謡「實に隠なき世語りの、その一念を翻し、浮む力となりたまへ。シテ謡「浮むべき、たより渚の淺緑、三角柏に有らばこそ、沈むは浮む縁ならめ。地謡「實にや他生の縁ぞとて　シテ謡「時もこそあれ今宵しも、地謡「なき世の人に合竹の、シテ謡「棹取り直し空穂舟。

猪早太―名は高直
二重―二藍の輪韈青花と赤花とにて染めたるなり
尖矢―さきの鋭き矢
滋藤の弓―籐をしげく巻きたる弓
矢叫び―掛聲
鵺―聲鵺に似たり―此は鳥なり　鬼の類怪鳥其啼聲を図とす
三角柏―三葉柏をいふ　續古今集の歌に、思ひ餘り三角柏に問ふ事の沈むに浮くは涙なりけり

地謡「乗ると見えしが、シテ謡「夜の波に、地謡「浮きぬ沈みぬ、見えつ隠れ絶々の、幾重に聞くは鵜の聲、恐ろしや凄ましや、あら恐ろしや、凄ましや。（中入）

ワキ上歌謡「御法の聲も浦波も、御法の聲も浦波も、皆實相の道弘き、法を受けよと夜と共に、此御經を讀誦する、此御經を讀誦する。一佛成道觀見法界、草木國土悉皆成佛、後シテ謡「有情非常皆倶成佛道。ワキ謡「頼むべし、シテ謡「頼むべしや。地謡「五十二類も我同性の、涅槃にひかれて眞如の月の、夜汐に浮みつゝ是まで來れり。有難や。ワキ謡「不思議やな目前に來る者を見れば、面は猿、足手は虎、聞きしに變らぬ變化の姿、あら恐ろしの有樣やな。シテ謡「さても我惡心外道の變化となつて、佛法王法の障りとならんと、王城近く遍滿して、東三條の林頭に暫く飛行し、丑三ばかりの夜な〳〵に、御殿の上に飛びさがれば、地謡「即ち御惱しきりにて、玉體を惱まして、おびえ魂消らせ給ふ事も、我が爲す業よと怒りをなしゝに、思ひもよらざりし頼政が、矢先に中れば變身失せて、落々磊々と地に倒れて、忽ちに滅せし事、思へば頼政が矢先よりは、君の天罰を

一佛成道云々―鶏迦田山の譚五十二類―諸の大比丘より菩薩人天帝王鬼神飛鳥樹林神象王仙人四天魔王自在天まで五十二類として涅槃經に載く

當りけるよと、今こそ思ひ知られたれ。其時主上御感あつて、獅子王と言ふ御劍を、賴政に下されけるを、宇治の大臣賜はりて、階を下り給ふに、折節郭公音づれければ、大臣とりあへず、シテ謡「ほとゝぎす名をも雲井に上ぐるかなと、仰せられければ、地謡「賴政右の膝をついて、左の袖をひろげ月を少し目に懸けて、弓張月のいるに任せてと仕り、御劍を賜はり、御前を罷り歸れば、賴政は名をあげて、我は名を流す空穗舟に、押し入れられて淀川の、よどみつ流れつ行く末の、宇渡野も同じ蘆の屋の、浦わの浮洲に流れ留まつて、朽ちながら空穗舟の、月日も見えず暗きよ〳〵　暗き道にぞ入りにける。遙かに照らせ山の端の、遙かに照らせ山の端の、月と共に海月も入りにけり、海月と共に入りにけり

宇治の大臣―賴長

いるに任せて―弓を射ると月の入るとを言掛く

暗きより云々―拾遺集和泉式部の歌

大原御幸

梗概

平家の一門壽永の秋のあはれを留めて西海の藻屑となりぬ。建禮門院は再び都へ上り給ひしかど星移り物變りければ、御出家ありて大原の寂光院に籠らせ給ふこそいたましけれ。かくて後白河法皇忍びの御幸あり。御對面ありて往昔を語り合ひ給ふ。事は平家物語に名文として存す。此曲はこれを脚色せるもの、景情雙絶頗る閑寂の趣あり。

（三番目）

シテ　建禮門院　　ツレ　阿波内侍

ツレ　大納言局　　ツレ　後白河法皇

ワキ　萬里小路中納言　　トモ　官人

先帝―安徳天皇
二位殿―清盛の内室
女院―建禮門院
安徳天皇の御母

ワキ大臣詞「是は後白河院に仕へ奉る臣下なり、扨も此度先帝二位殿を始め奉り、平家の一門長門の國早鞆の沖にして、ことごとく果て給ひて候。女院も御身を投げさせ給ひ候を取り上げ奉り、かひなき御命助かりおはしまし候。三河守範頼、九郎大夫判官義

經兄弟倶奉し申し、三種の神寶事故なく都に納まりたまひ候。さるほどに女院は都に移らせたまふべかりしを、先帝安徳天皇の御菩提竝に、二位殿の御跡御弔ひの爲に、大原の寂光院に浮世を厭ひ御座候を、法皇御幸をなされ、御訪ひあるべきとの勅諚にて候間、御幸の山路をも申し付けばやと存じ候。いかに誰かある。大原へ御幸あるべきなれば、行幸の道をもつくり、其清めを仕り候へ。

シテ、ツレ三人「サシ」謡「山里は物の寂しき事こそあれ、世の憂きよりはなかくに、住みよかりける柴の樞、都の方の音信は、間遠に結へる笆垣や、憂き節繁き竹柱、立居につけて物思へど、人目なきこそ安かりけれ。下歌地謡「折々に心なけれど訪ふ物は、上歌賤が妻木の斧の音、賤が妻木の斧の音、梢の嵐猿の聲、これらの音ならでは、正木の葛青つづら、來る人稀になりはてゝ草、顔淵が巷に、滋き思ひの行方とて、雨原憲が樞とも、濕ふ袖の涙かな。濕ふ袖の涙かな。

シテ詞「いかに大納言の局、後の山に上り樒を摘み候べし。局詞「わらはも御供申し、妻木蕨

山里は―古今集の歌末句住みよかりけり

正木の葛青つゞら―共に葛の名繰るより來ると冒掛く　草故顔淵巷雨濕原憲樞―朗詠集の句二人共に賢にして貧なりき

悉達太子―釋迦のこと　淨飯王―釋迦の父

を折り供御にそなへ申し候べし。シテ、サシ謡「たとへば便なき事なれども、悉達太子は淨飯王の都を出で、檀特山の嶮しき道を凌ぎ、菜摘み水汲み薪、地謡「とりぐ〳〵様々に難行し、仙人に仕へさせ給ひて、終に成道なるとかや。我も佛の爲なれば、御花筐取りぐ〳〵、猶山深く入り給ふ、猶山深く入り給ふ、

一ワキ、ツレ謡「九重の、花の名殘を尋ねてや、青葉をしたふ山路かな。分けゆく露もふかみ草、分けゆく露もふかみ草、大原の御幸急がん。ワキ詞「行幸をはやめ申し候間、大原に入御候。謡「かくて大原に御幸なつて、寂光院の有樣を見渡せば、露結ぶ庭の夏草繁りあひて、青柳糸を亂しつゝ、池の浮草波に搖られて、錦を曝すかと疑はる。岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絕間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇謡「法皇池の汀を叡覽あつて、池水に汀の櫻散り敷きて、波の花こそ盛なりけれ。上歌地謡「ふりにける、岩のひまより落ちくる、岩のひまより落ちくる、水の音さへよしありて、綠蘿の垣翠黛の山、繪にかくとも、筆にも及びがたし。一字の御堂あり。

（頭書）
「荒れ果てたる狀をあらはす」―院の荒れ果ては云々
「霧を香に、月を燈火に見立てたるなり」

燒き、櫪落ちては月も又、常住の燈火をかゝぐとは、かゝる所か物すごや、かゝる所か物すごや。

ワキ詞「是なるこそ女院の御庵室にてありけに候。謡軒には蔦朝顔はひかゝり、藜藿深く鎖せり、あらものすごの氣色やな。詞いかに此庵室の内へ案内申し候。内侍詞「誰にてわたり候ぞ　ワキ詞「是は萬里小路の中納言にて候。内侍詞「それはさて人目まれなる山中へは、何とて御わたり候ぞ。ワキ詞「さん候、女院の御住居御訪ひのため、法皇是まで御幸にて候。内侍詞「女院は上の山へ花つみに御出でにて、今は御留守にて候。ワキ詞「御幸の由申して候へば、女院は上の山へ花摘みに御出でにて、今は御留守の由候。暫く此所に御座をなされ、御歸りを御待ちあらうずるにて候。法皇詞「やあ如何にあの尼前、汝はいかなる者ぞ。内侍詞「けに〳〵御見忘れは尤ことわり、是は信西が娘、阿波の内侍がなれる果にて候。謡かくあさましき姿ながら、明日をも知らぬ此身なれば、恨みとは更に思はずさむらふ。法皇詞「女院はいづくに御渡り候ぞ。内侍詞「上の山へ花摘みに御出でにて候。

信西―少納言通憲の法號

法皇詞「さて御供には、内侍詞「大納言の局。今少し待たせおはしまし候へ、やがて御歸りにて候べし。

シテ、ツシ謡「昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。明日をも知らぬ此身ながら、只先帝の御面影、忘るゝ隙はよもあらじ。極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り、二位殿一門の人々、成等正覺、南無阿彌陀佛。詞や、庵室のあたりに人音の聞え候。局詞「しばらく是に御休み候へ。

内侍詞「只今こそあの岨傳ひを女院の御歸りにて候。法皇詞「さて何れが女院、大納言の局はいづれぞ。内侍謡「花がたみ臂に懸けさせ給ふは、女院にてわたらせ給ふ。妻木に蕨折添へたるは、大納言の局なり。詞いかに法皇の御幸にて候。シテ謡「なか〳〵に猶妄執の闇浮の世を、忘れもやらで浮名を又、漏せば漏るゝ涙の色、袖の氣色もつゝましや。下歌地謡「とは思へども法の人、同じ道にと頼むなり。上歌一念の窓の前、一念の窓の前に、攝取の光明を期しつゝ、十念の柴の樞には、聖衆の來迎を待ちつるに、思はざりける今日の暮、古

極重惡人云々―往生要集の文句
成等正覺―成佛のこと

法の人―法皇を指す
同じ道―女院も法皇も共に佛法證なればなり

へに歸るかと、猶思出の涙かな。げにや君こゝに叡慮のめぐみ末かけて、あはれもさぞな大原や、芹生の里の細道、瓶の清水月ならで、御影や今に殘るらん。ロンギ地謡「さてや御幸の折しもは、いかなる時節なるらん。シテ謡「春過ぎ夏もはや、北祭の折なれば、青葉にまじる夏木立、春の名殘ぞ惜しまるゝ。地謡「遠山にかゝる白雲は、シテ謡「散りにし花の形見かや。地謡「夏草の、しげみが原のそことなく、分け入り給ふ道の末、シテ謡「こゝとてや、こゝとてや、げに寂光の寂かなる、光の影を惜しめたゞ、地謡「光の影も明らけき、玉松が枝に喰き添ふや、シテ謡「池の藤波夏かけて、地謡「是も御幸を、シテ謡「待ち顔に、地謡「青葉隱れの遲櫻、初花よりも珍かに、なか〳〵樣變る有樣を、あはれと叡慮にかけまくも、かたじけなしや此御幸、柴の樞のしばしが程も、あるべき住居なるべしや、あるべき住居なるべしや。

シテ謡「思はずも深山の奥の住居して、雲井の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに、此山里までの御幸、かへすゞ〳〵も有難うこそ候へ。法皇詞「先つ頃ある人の申せしは

腮の清水―寂光院の與にあり北祭―來ると言掛く、賀茂祭のこと。

玉松―松の美稱

初花よりも―金葉集に「夏山の青葉交りの遲櫻初花よりも珍しきかな」

観身岸頭離根草論命江頭不繫船―朗詠集の詩句

六道―ところの文中に見ゆる餓鬼地獄修羅畜生人天

女院は六道の有様まさに御覧じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこそ候へ。シテ詞「勅諚はさる御事なれども、つら〳〵我身を案じ見るに、クリそれ身を觀ずれば、岸の額に根を離れたる草、地謡「命を論ずれば、江のほとりに繫がざる舟。シテ、サシ謡「されば天上の樂みも、身に白露の玉かづら、地謡「ながらへ果てぬ年月も、つひに五衰のおとろへの、シテ謡「消えもやられぬ命の中に、地謡「六道の巷に迷ひしなり。クセまづ一門、西海の波に浮き沈み、よるべも知られぬ船の内、海にのぞめども、潮なれば飲水せず、餓鬼道の如くなり。又ある時は、汀の波の荒磯に、打ちかへすかの心地して、船擧りつゝ泣き叫ぶ、聲は叫喚の、罪人もかくや淺ましや。シテ謡「陸の爭ひある時は、地謡「是ぞ誠に目の前の、修羅道の戰。あら恐ろしや數々の、駒の蹄の音聞けば、畜生道の有樣を、見聞くも同じ人道の、苦しみとなり果つる、憂き身の果ぞ悲しき。

法皇詞「眞に有難き事どもかな、先帝の御最期の有樣、何とか渡り候ひつる御物語り候へ。シテ謡「恥かしながら、語つて聞かせ申し候べし。其時の有樣申すにつけて恨めしや長門

鈍色の二つ衣―薄黒き色の二枚重ね　練袴―練絹にて作れる袴

今ぞ知る―長門本平家物語にては二位局の歌とす

國早鞆とやらんにて、筑紫へ一先落ちゆくべきと一門申し合ひしに、緒方の三郎が心變りせしほどに、薩摩潟へや落さんと申しょ折節、上り汐に支へられ、今はかうよと見えしに、能登の守教經は、安藝の太郎兄弟を左右の脇に挟み、最期の供せよとて海中に飛んで入る。謡新中納言知盛は、嗣沖なる船の碇を引き上げ、兜とやらんに戴き、乳母子の家長が、弓と弓とを取りかはし、其まゝ海に入りにけり。謡其時二位殿鈍色の二つ衣に、練袴のそば高く挟んで、我が身は女人なりとても、敵の手には渡るまじ、主上の御供申さんと、安德天皇の御手を取り舷に臨む。いづくへ行くぞと勅諚ありしに、此國と申すに逆臣多く、かくあさましき處なり、極樂世界と申して、めでたき所の此波の下にさむらふなれば、御幸なし奉らんと、泣く〳〵奏し給へば、さては心得たりとて、東に向はせ給ひて、天照大神に御暇申させ給ひて、地謡「又十念の御爲に、西に向はせおはしまし、シテ謡「今ぞ知る、地謡「御裳濯川の流れには、波の底にも都ありとはと、是を最期の御製にて、千尋の底に入り給ふ。自らも續いて沈みしを、源氏の武士とりあげて、か

ひなき命ながらへ、二度龍顔に逢ひ奉り、不覺の涙に、袖をしぼるぞ恥かしき。いつまでも、御名殘はいかで盡きぬべき、はや還幸とすゝむれば、はや還幸とすゝむれば、御輿を早め遙々と、寂光院を出で給へば、シテ謠「女院は柴の戸に、地謠「暫しが程は見送らせ給ひて、御庵室に入り給ふ。御庵室に入り給ふ。

梅枝

梗概　富士といふ樂人、非命の最期を遂げしかば、その妻この世に執心を殘して、浮みやらざりしが、旅僧に一宿を許し、その功德によつて成佛する意に作る。末段懺悔のため舞樂奏づる事あり。（四番目）

シテ　富士の妻の靈（前は女）
ワキ　僧　ツレ　僧

沙門―僧のこと
雲水の身―行脚僧のこと

次第、ツレ「捨てよも廻る世の中は、捨てよも廻る世の中は、心の隔てなりけり。ワキ詞「是は甲斐國身延山より出でたる沙門にて候。われ緣の衆生を濟度せんと、多年ののぞみにて候程に、此度思ひ立ち廻國に赴き候。道行、ツレ詞「何處にも、住みは果つべき雲水の、住みは果つべき雲水の、身は果知らぬ旅の空、月日程なく移り來て、所を問へば世を厭ふ、我が衣手や住の江の、里にも早く著きにけり。里にも早く著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、

是はや津の國住吉に著きて候。あら笑止や、俄に村雨の降り候、是なる菴に宿を借らばやと思ひ候。如何に此屋の内へ案内申し候。

草壁の宿―茅屋の意
正木のかづら―後拾遺集に「旅寝する宿は深山にとぢられて正木の葛來る人もなし」
利益―功徳

シテ謡「實にや松風草壁の宿に通ふといへども、正木の葛來る人もなく、心も澄める折節に、事問ふ人は誰やらん。ワキ詞「是は無縁の沙門にて候。一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「實にげに出家の御事、一宿は利益なるべけれども、さながら傾く軒の草、埴生の小家のいぶせくて、何と御身を置かるべき。ワキ謡「よし〳〵内はいぶせくとも、降りくる雨に立ち寄る方なし、只さりとては貸し給へ。シテ謡「實にや雨降り日もくれ竹の、一夜を明かさせ給へとて、地謡「早此方へと夕露の、葎の宿はうれたくとも、袖を片敷きて、御泊りあれや旅人。上歌西北に雲起りて、西北に雲起りて、東南に來る雨の脚、早くも吹き晴れて、月にならん嬉しや。所は住吉の、松吹く風も心して、旅人の夢を覺ますなよ、旅人の夢を覺ますなよ。

葎の宿はうれたくとも―伊勢物語の歌に「葎生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり」

ワキ詞「如何に主に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「是に飾りたる太鼓、同じく

伶人―樂人

逆縁―順縁と對する語、始より其心ありて弔ふを順縁不用意なるを逆縁といふ

太鼓は朽ちず云云―朗詠集に謙鼓若深鳥不驚の句あり唐舞の代太平にして謙の鼓の用なるによしなかりしをいふ

舞の衣裳の候不審にこそ候へ。シテ詞「實によく御不審候ものかな。是は人の形見にて候。是に付き哀れなる物語の候、語つて聞かせ申し候べし。ワキ詞「さらば御物語り候へ。シテ詞「昔當國天王寺に、淺間といひし伶人あり。同じく此住吉にも富士と申す伶人有りしが、其頃内裏に管絃の役を爭ひ、互に都に上りしに、富士此役を賜はるによつて、淺間安からずに思ひ、富士をあやまつて討たせぬ。其後富士が妻夫の別れを悲しみ、常は太鼓を打つて慰み候ひしが　それも終に空しくなりて候。逆縁ながら弔ひて給はり候へ。ワキ詞「かやうに委しく承り候は、其古への富士が妻の、ゆかりの人にてましますか。シテ詞「いやとよそれは遙の古へ、思ふも遠き世語の、ゆかりといふ事あるべからず。ワキ謡「さらば何とて此物語、深き思ひの色に出でて、涙を流し給ふぞや。シテ詞「なう何れも女は思ひ深し。殊に戀慕の涙に沈むを、などか哀れと御覽ぜざらん。ワキ謡「猶も不審は殘るなり。形見の太鼓形見の衣、こよには殘し給ふらん。シテ謡「主は昔になり行けども、太鼓は朽ちず苔むして、ワキ謡「鳥羽かぬ、シテ謡「此御代に、上歌地謡「住むもかひなき池水の、

住むもかひなき池水の、忘れて年を經しものを、又立ち歸る執心を、助け給へと云ひ捨てて、かき消す如くに失せにけり。（中入）

是盛第一―法華經提婆品の文

ワキ謠「それ佛法さまざまなりと申せども、法華は是最第一、ワキ、ツレ謠「三世の諸佛の出世の本懷、衆生成佛の直道なり。ワキ謠「なかんづく女人成佛疑ひあるべからず。ワキ、ツレ謠「一者不得作梵天王、二者帝釋三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身云何女身、地謠「速得成佛、何疑ひか荒磯海の、深き執心を、晴らして浮み給へや。上歌或は若有聞法者、或は若有聞法者、無一不成佛と說き、一度此經を聞く人、成佛せずといふ事なし。只賴め賴もしや、弔ふ燈火の陰よりも、化したる人の來りたり。夢か現か見たりともなき姿かな。

一者不得作梵天王云々―同上の文即ち女人成佛の五障を云ふ

若有聞法者云々―同提婆品の文

變成男子―龍女が成佛して男子に變る事

ワキ謠「不思議やな見れば女性の姿なるが、舞の衣裳を著し、さながら夫の姿なり。調さては有りつる富士が妻の、其幽靈にてましますか。シテ謠「實にや碧玉の寒き簾、錐嚢に脫すとは、今身の上に知られさむらふぞや。さりながら妙なる法の受持に逢はゞ、變成男子

の姿とは、などや御覽じ給はぬぞ、然らば御弔ひの力にて、地謡「憂かりし身の昔を、懺悔に語り申さん。クセ さるにても我ながら、よしなき戀路に侵されて、長く惡趣に墮しけるよ。さればにや、女心の亂れ髪、ゆひかひなくも戀衣の、妻の形見を戴き　此狩衣を著しつゝ　常には打ちし此太鼓の、寢もせず起きもせず涙、敷妙の枕上に、殘る執心を晴らしつゝ、佛所に至るべし。嬉しの今の教へや。シテ謡「思ひ出でたる一念の、地謡「起るは病うとなりつゝ、繼がざるは是棄なりと、古人の教へなれば、思はじ〳〵、戀忘草も住吉の、岸に生ふてふ花なれば、手折りやせまし我が心。契麻衣の片思ひ、執心を助け給へや。

ロンギ地謡「實に面白や同じくは、懺悔の舞をかなでて、愛著の心を捨て給へ。シテ謡「いざいざさらば妄執の、雲霧を拂ふ夜の、月も半なり、夜半樂を奏でん。地謡「心も共に住吉の、松のひまよりながむれば、シテ謡「波もて結へる淡路潟、地謡「沖も靜に青海の、シテ謡「青海波の波返し　地謡「かへすや袖の折を得て、軒端の梅に鶯の、シテ謡「來鳴くや花の越殿樂、

惡趣―地獄畜生餓鬼の三惡道

戀忘草―古今集に「道知ばつみにもゆかん住吉の岸に生ふてふ戀忘草」

契麻衣の片思ひ―夫婦の緣淺かりしこと麻に淺を掛け衣より肩の緣語につゞけて片思といへり

波もてゆへる―古今集の歌上句わだつみのかざしにさせる白妙の末句淡路島山波返し―太鼓の手

梅が枝―催馬樂歌にあり

明ぐれ―夜明けのうすぐらき時

地謡「謳へや謳へ、シテ謡「梅が枝、地謡「梅が枝にこそ、鶯は巣をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯。シテ謡「面白や鶯の、地謡「面白や鶯の、聲に誘引せられて、花の陰に來りたり。我も御法に引き誘はれて、我も御法に引き誘はれて、今目前に立ち舞ふ舞の袖、是こそ女の夫を戀ふる、想夫戀の樂の鼓、うつょなの我が有樣やな。シテ謡「思へばいにしへを、地謡「思へばいにしへを、語るは猶も執心ぞと、申せば月も入り、音樂の音は松風にたぐへて、有りし姿は明けぐれに、面影ばかりや殘るらん。面影ばかりや殘るらん。

誓願寺

梗概　諸國遊行の一遍上人曾て熊野の御示現により、都誓願寺にて、御札を結縁せる時、和泉式部の亡靈現れ、その告げにより、て、誓願寺の額を六字の名號に改むる事當寺緣起に基きて作る。（三番目）

シテ　和泉式部（前は里女）　ツキ　一遍上人

ワキ次第「教の道も一聲の、教の道も一聲の、御法を四方に弘めん。ワキ詞「是は念佛の行者一遍と申す聖にて候。我此度三熊野に參り、一七日參籠申し證誠殿に通夜申して候へば、あらたに靈夢を蒙りて候。六十萬人決定往生の御札を、普く國土に弘めよとの靈夢に任せ、まづ都へと志して候。道行「三人」彌陀頼む、願も三つの御山を、願も三つの御山を、今日立ち出づる旅衣　紀の關守が手束弓、出で入る日數重なりて、時もこそあれ春の頃、花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。

證誠殿―熊野本宮阿彌陀如來を祀る

手束弓―弓の握りの大きなる弓をいふ

誓願寺　初め大和にありて三論宗なりしが後京都に遷されて淨土宗たり

連歌の獨りにしまぬ云々　僧正遍昭の歌の語

ワキ詞「急ぎ候程に、是は早都誓願寺に著きて候。告に任せて札を弘めばやと思ひ候。謡有難や實に佛法の力とて、貴賤群集の色々に、袖を連ね踵をついで、知るも知らぬもおしなめて、念佛三昧の道場に、出で入る人の有難さよ。

シテ謡「所は名におふ洛陽の、花の衣の今更に、心は空に墨染の、ワキ謡「夕の鐘の聲々に、稱名の御法、シテ謡「鳧鐘の響、ワキ謡「聽衆の人音、シテ謡「軒の松風、ワキ謡「おのれ〳〵と、シテ謡「かはれども　上歌地謡「彌陀頼む、心は誰も一聲の、心は誰も一聲の、内に生まるゝ蓮葉の、濁りにしまぬ心もて、何疑ひの有るべき。有難や此教、洩らさぬ誓目のあたり、受け悦ぶや上人の、御札をいざや保たん。御札をいざや保たん。

シテ詞「如何に上人に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「此御札を見奉れば、六十萬人決定往生とあり。扨々六十萬人より外は往生に洩れ候べきやらん、返す〳〵も不審にこそ候へ。ワキ詞「實によく御不審候物かな。是は三熊野の御夢想に四句の文有り、其四句の文の上の字を取りて、證文のために書き付けたり。たゞ決定往生南無阿彌陀

佛と、此文ばかり御頼み候へ。シテ詞「さて〳〵四句の文とやらんは、如何なる事にて有るやらん。謡愚痴の我等に示し給へ。ワキ詞「いで〳〵語つて聞かせ申さん。六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、此四句の文の上の字なれば、謡六十萬人とは書きたるなり。シテ詞「今こそ不審春の夜の、闇をも照らす彌陀の教へ、ワキ謡光明遍照十方世界に、漏さゞ方なき御法なるを、僅に六十萬人と、人數をいかでさだむべき。シテ謡「さては嬉や心得たり、この御札の六十萬人、其人數をばうち捨てよ、ワキ謡「決定往生南無阿彌陀佛と、シテ謡只一筋に念ずならば、ワキ謡「それこそ即ち決定する、シテ、ワキ謡「往生なれや何事も、皆うち捨てよ南無阿彌陀佛と、上歌地謡「稱ふれば、佛も我もなかりけり、佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり、至誠心深心廻向、發願の鉦の聲、耳に染みて有難や。誠に妙なる此教、十聲一聲數分かで、悟りをも迷ひをも、迎へ給ふぞ有難き。さる程に夕陽雲にうつろひて、西にかゞろふ夕月の、夜の念佛を急がん。夜念佛をいざや急がん。

六字名號云々―六字は南無阿彌陀佛、名號は念佛此を一遍唱ふれば萬善萬行の功德納る十界は大道に佛界（佛菩薩聲聞緣覺）を併せいふ其各依報正報あるを一遍の念佛によりて成佛すといふ萬行云々は一遍にて得道する意念佛の行人は上々の人なれば妙好專即ち分陀利華に喩ふ稱ふれば佛も我も一遍上人の歌末句壁ばかりして至誠心云々―至誠心深心回向發願心を淨土の三心といふ

涼しき―直ぐしきの傳字の誤か

八萬諸聖教―釋迦一代中の說教の數多きこと

ロンギ地謠「早更け行くや夜念佛の、聽衆の眠り覺まさんと、鉦うち鳴らし念佛す。シテ謠「有難や五障の雲のかゝる身を、助け給はば此世より、二世安樂の國に早、生れ行かんぞ嬉しき。地謠「實に安樂の國なれや、安く生るゝ蓮葉の、臺の緣ぞ誠なる。シテ謠「ありがたや、ありがたや。さぞな始めて彌陀の國、涼しき道ぞ賴もしき。地謠「賴みぞまこと此教。或は利益無量罪、シテ謠「又は餘經の後の世も、地謠「彌陀一教と、シテ謠「聞く物を、地謠「ありがたや　ありがたや、八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛なるべし。此御本尊も上人も、只同じ御誓願寺ぞと、佛と上人を、一體に拜み申すなり。

シテ詞「いかに上人に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「誓願寺と打ちたる額を除け、上人の御手跡にて、六字の名號になして給はり候へ。ワキ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。昔より誓願寺と打ちたる額を除け、六字の名號になすべき事、思もよらぬ事にて候。シテ詞「いや是も御本尊の御告と思召せ。ワキ詞「そも御本尊の御告とは、御身は何くに住む人ぞ。シテ詞「わらはが住家はあの石塔にて候。ワキ詞「不思議やなあの石塔は、

和泉式部―初は和泉守道貞の妻後は藤原保昌の妻

二十五菩薩―観世音大勢至藥王藥上普賢法自在王獅子吼陀羅尼虚空藏徳藏寶藏金藏金剛藏光明王山海慧花嚴王珠寶王月光王日照王三昧王定自在王大自在王白象王大威徳王無邊身の廿五

和泉式部の御墓とこそ聞きつるに、謡御住家とは不審なり。シテ詞「さのみな不審し給ひそよ。謡我も昔は此寺に、値遇の有れば、すむ水の、春にも秋や通ふらし。地謡「結ぶ泉のみづからの、名を流さんも恥かしや。よしそれとても上人よ、我偽りは亡き跡に、和泉式部は我ぞとて、石塔の石の火の、光と共に失せにけり。光と共に失せにけり。（中入）

ワキ詞「佛說に任せ誓願寺と打ちたる額を除け、六字の名號を書き付けて、謡佛前に移し奉れば、上歌不思議や異香薫じつよ、不思議や異香薫じつよ　花降り下り音樂の、聲する事のあらたさよ。是に付けても稱名の、心一つを賴みつよ、鉦打ち鳴らし、同音に、

ワキ謡「南無阿彌陀佛彌陀如來。

後シテ謡「あらありがたの額の名號やな。末世の衆生濟度のため、佛の御名を現して、佛前にうつす有難さよ。我も假なる夢の世に、和泉式部といはれし身の、佛果を得るや極樂の、歌舞の菩薩となりたるなり。二十五の、地謡「菩薩聖衆の御法には、紫雲たなびく夕日影、シテ謡「常の燈火影淸く、地謡「さながらこよぞ極樂世界に　生れけるかと有難さよ。

クリ地謡「そも〳〵當寺誓願寺と申し奉るは、天智天皇の御願、御本尊は慈悲萬行の大菩薩、春日の明神の御作とかや。シテ・ザシ謡「神と云ひ佛と云ひ、只これ水波の隔てなり。地謡「然るに和光の影廣く、一體分身現れて、衆生濟度の御本尊たり。シテ謡「されば毎日一度は、地謡「西方淨土に通ひ給ひて、來迎引攝の、誓を現しおはします。クセ笙歌遙かに聞ゆ、孤雲の上なれや、聖衆來迎す、落日の前とかや。昔在靈山の、御名は法華一佛、今西方の彌陀如來、慈眼視衆生現れて、娑婆示現觀世音、三世利益同一體。有難や我等がための悲願なり。シテ謡「若我成佛の、光りを受くる世の人の、地謡「我が力には行き難き、御法の御舟の水馴棹、さゝでも渡る彼岸に、至り〳〵て樂しみを、極むる國の道なれや。十惡八邪の、迷ひの雲も空晴れ、眞如の月の西方も、こゝを去る事遠からず。唯心の淨土とは、此誓願寺を拜むなり。シテ謡「歌舞の菩薩もさま〴〵の、地謡「佛事をなせる心かな。（舞）シテ謡「ひとり猶、佛の御名を尋ね見ん、地謡「各歸る法の場人、各歸る法の場人、法の場人の、シテ謡「實にも妙なる稱名の數々〳〵、地謡「虛空に響くは、シテ謡「音樂の聲、

皇歌遙聞孤聖上
聖衆來迎客日前
—大江定基入道
寂昭の詩

八邪—邪見恩惟
邪語邪業邪命邪
方便邪念邪定

地謡「異香薫じて、シテ謡「花降る雪の、地謡「袖をかへすや返すく〳〵も、貴き上人の利益かなと、菩薩聖衆は面々に、御堂に打てる六字の額を、皆一同に禮し給ふは、あらたなりける奇瑞かな。

内八蟻通

和歌の心を道として―玉津島明神は和歌の守護神なる故に比く云ふ

梗概

紀貫之雨中に泉州蟻通明神を過ぎ、歌を詠みて神慮を和げたる事を作る。貫之集に曰く「紀の國に下りてかへりのぼりし道にて、俄に馬の死ぬべくわづらふ處に、道行く人立ちどまりて曰くこれはこゝにいますかる神のし給ふならん、年頃社もなく、しるしは見えねど、うたてある神なり、さまざまかゝるには命をなん申すといふに幣帛もなければ何業もせで手洗ひて神おはしげもなしやそも！、なにの神とか聞えんと問べば蟻通の神といふを聞きて、よみて奉る。馬の心地やみにけり「掻曇りあやめもわかぬ大空にありとほしをば思ふべしやは」（四番目）

シテ　蟻通明神　ツキ　紀貫之

ワキ次第謡「和歌の心を道として、和歌の心を道として、玉津島に参らん。詞　是は紀の貫之にて候。我和歌の道に交はるといへども、いまだ住吉玉津島に参らず候程に、只今思ひ立

ち紀の路の旅にと志し候。行脚夢に寢て、現に出づる旅枕、現に出づる旅枕、夜の關戸の明暮に、都の空の月影を、さこそと思ひやる方も、雲居は跡に隔たり、暮れ渡る空に聞ゆるは、里近ゆなる鐘の聲、里近ゆなる鐘の聲。詞あら笑止や、俄に日暮れ大雨降りて、しかも乘りたる駒さへ伏して、前後を辨へず候は如何に。謠燈暗うしては數行虞氏が涙の雨の、足をも引かず、騅行かず、虞奈何すべき便りもなし。あら笑止や候。ンテ、サシ謠瀟湘の夜の雨頻に降つて、遠寺の鐘の聲も聞えず。なにとなく宮寺は、深夜の鐘の聲、御燈の光なんどにこそ、神さび心も澄み渡るに、社頭を見れば燈火もなく、すどしめの聲も聞えず、神は宜禰が習はしとこそ申すに、宮守一人もなき事よ。よし〳〵御燈は暗くとも、和光の影はよも暗からじ。あら無沙汰の宮守どもや。ワキ詞「なう〳〵其火の光に付いて申すべき事の候。シテ詞此あたりには御宿もなし。今少し先へ御通りあれ。ワキ詞「今の暗さに行く先も見えず、しかも乘りたる駒さへ伏して、前後を忘じて候なり。シテ詞「さて下馬は渡りもなかりけるか。ワキ詞「そもや下馬とは心得ず、

雲居―都

煙暗歌行盧氏涙―朗詠集の詩句　騅行かず―項羽の重圍に陷りたる時力拔山兮氣蓋世時不利兮騅不逝騅不逝兮可奈何虞兮々々奈若何と歌へり、謠の上にてはいかんすべきといふ字術れるが如し　すゝしめ―神樂を奏して神慮を涼しむること

下馬は渡り―下馬にて御通行

馬上のなき所―馬上にて通行せられざる所の意

雨雲の―此歌實之集と異同あり　ありとはし―星有りとといふに蠟通の神名を含めたり

こゝは馬上のなき所か。シテ詞「あら勿體なの御事や。蠟通の明神とて、物咎めし給ふ御神の、かくぞと知りて馬上あらば、よも御命は候べき。ワキ謠「是は不思議の御事かな。さて御社は、シテ謠「此森の中。ワキ謠「實にも姿は宮人の、シテ謠「ともしの光の影より見れば、ワキ謠「實にも宮居は、シテ謠「蠟通の、地謠「神の鳥居の二柱、立つ雲透に、見ればかたじけなや、實にも社壇の有りけるぞ。馬上に折り殘す、江北の柳陰の、糸もて繋ぐ駒、かくとも知らで神前を、恐れざるこそはかなけれ。恐れざるこそはかなけれ。

シテ詞「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は紀の貫之にて候が、住吉玉津島に參り候。シテ詞「貫之にてましまさば、歌を詠うで神慮に御手向け候へ。ワキ詞「是は仰せにて候へども、それは得たらん人にこそあれ、我等が今の詞の末、いかで神慮に適ふべきと、思ひながらも言の葉の、末を心に念願し、謠「雨雲の立ち重なれる夜半なれば、ありとほしとも思ふべきかは。シテ謠「雨雲の立ち重なれる夜半なれば、ありとほしとも思ふべきかは。詞「面白し面白し。我等適はぬ耳にだに、おもしろしと思ふ此歌を、などか納受

なかるべき。ワキ謡「心に知らぬ科なれば、何か神慮に背くべきと、シテ謡「萬の詞は雨雲の、ワキ謡「立ち重なりて暗き夜なれば、シテ謡「ありと星とも思ふべきかはとは、あら面白の御歌や。下歌地謡「凡そ歌には六義あり。是れ六道の巷に定め置いて、六つの色を見するなり。上歌されば和歌の事業は、神代よりも始まり、今人倫に遍し。誰か是を賞めざらん。中にも貫之は、御書所を承りて、古今までの、歌の品を選みて、喜びをのべし君が代の、直なる道を顯はせり。クセ凡そ思つて見れば、歌の心すなほなるは、是以て私なし。人代に及んで、甚だ起る風俗、長歌・短歌・旋頭・混本の類是なり。雜體一つにあらざれば、源流漸く繁る木の　花の内の鶯、又秋の蟬の吟の聲、いづれか和歌の數ならぬ。されば今の歌、我が邪をなさざれば、などかは神も納受の、心に適ふ宮人も、シテ謡「かよる奇特に逢坂の、地謡「關の清水に影見ゆる、月毛の此駒を、引き立て見れば不思議やな、もとの如くに歩み行く。越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶えたり。歌に和らぐ神心、誰か神慮の、誠を仰がざるべき。

喜多のベレー延喜の字を含めたり

旋頭・五七七五七七と續けたる歌

混本―短歌の末七字無きもの

逢坂の―貫之の歌「逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒」

越鳥云々―各々その古里を忘れぬ意

ワキ詞「宮人にてましまさば、祝詞を讀うで神慮をすゞしめ御申し候へ。シテ詞「承り候。
謡いで〳〵祝詞を申さんと、神の白木綿かけまくも、ワキ謡同じ手向と木綿花の、シテ謡雪を散らして、ワキ謡再拜す。シテ謡謹上再拜、敬つて白す神司、八人の八少女、五人の神樂男、雪の袖を返し、白木綿花を捧げつゝ、神慮をすゞしめ奉る。御神託に任せて、猶も神忠を致さん、有難や。そも〳〵神慮をすゞしむる事、和歌よりも宜しきはなし。其中にも神樂を奏し少女の袖、返すぐ〵も面白やな、神の岩戸のいにしへの袖、思ひ出てられて、和光同塵は結緣の始め、ワキ謡八相成道は利物の終り。シテ謡神の代七代、ワキ謡すなほに人あつうして、シテ謡精欲分つ事なし。地謡天地開け始まりしより、舞歌の道こそすなほなれ。

八相―如來の衆生濟度に出世せる八種の相降兜率託胎住胎出胎出家成道轉法輪入涅槃

シテ謡今貫之が言葉の末の、地謡今貫之が言葉の末の、妙なる心を感ずる故に、假に姿を見ゆるぞとて、鳥居の笠木に立ち隱れ　あれはそれかと見しまゝにて、かき消すやうに失せにけり。貫之も是を悦びの、名殘の神樂夜は明けて、旅立つ空に立ち歸る、旅立つ

空に立ち歸る。

忠度

梗概　平家の公達薩摩守忠度は、歌の道に志篤かりし人なり。出陣の途中より引返して、俊成卿の門を叩き、詠草を渡して、その勅撰集に入れられんことを頼みしに、その後よみ人知らずとして一首の歌の千載集に入りしは名高き話也。この曲はこれに忠度最後の事を加へて脚色す。材料は平家物語也。（二番目）

シテ　平忠度（前は樵夫）　ワキ　僧

ワキ次第謡「花をも憂しと捨つる身の、花をも憂しと捨つる身の、月にも雲は厭はじ。調是は俊成の御内に在りし者にて候。さても俊成なくなり給ひて後、かやうの姿となりて候。又西國を見ず候程に、此度思ひ立ち西國行脚と心ざし候。サシ謡城南の離宮に赴き、都をへだつる山崎や　關戸の宿は名のみして、泊りも果てぬ旅の習ひ、憂き身はいつも交りの塵の浮世の芥川、猪名の小篠を分け過ぎて、下歌月も宿かる昆陽の池、水底清く澄みなし

城南の離宮―鳥羽にあり
關戸の宿―昔關を置かれし所山城攝津の界

て、上歌蘆の葉分の風の音、蘆の葉分の風の音、聞かじとするに憂き事の、捨つる身までも有馬山、隠れかねたる世の中の、憂きに心はあだ夢の、覚むる枕に鐘遠き、難波は跡に鳴尾潟、沖浪遠き小舟かな、沖浪遠き小舟かな。

シテ、サシ「一聲、謡」實に世を渡る習ひとて、かく憂き業にもこりずまの、汲まぬ時だに鹽木を運べば、乾せども隙は馴衣の、浦山かけて須磨の海、海人の呼聲ひまなきに、しばなく千鳥音ぞ遠き。サシそも〳〵この須磨の浦と申すは、寂しき故に其名を得る。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつゝわぶと答へよ。實にや漁の海人小船、藻鹽の煙松の風、いづれか寂しからずと云ふ事なき。詞又此須磨の山陰に一木の櫻の候。是は或る人の亡き跡のしるしの木なり。謡殊更時しも春の花、手向の爲に逆縁ながら、足引の山より歸る折ごとに、薪に花を折りそへて、手向をなして歸らん、手向をなして歸らん。

ワキ詞「如何に是なる老人、おことは此山賤にてましますか。シテ詞「さん候、此浦の海人にて候。ワキ謡「海人ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべけ

薪木―薪燒くに用ひる薪

わくらはに―在原行平の歌

れ。シテ詞「そも海士人の汲む汐をば、焼かで其まゝ置き候べきか。ワキ謡「實に〳〵これは理なり。藻鹽焚くなる夕煙、シテ謡「絶間を遥しと鹽木とる、ワキ謡「道こそかはれ里離れの、シテ謡「人音稀に須磨の浦、ワキ謡「近き後の山里に、シテ上歌謡「柴といふ物の候へば、地謡「柴といふ物の候へば、鹽木の爲に通ひ來る。シテ謡「餘りに愚なる、御僧の御諚かなやな。地謡「實にや須磨の浦、餘の所にや變るらん。夫れ花に辛きは、嶺の嵐や山風の、音をこそ厭ひしに、須磨の若木の櫻は、海少しだにも隔てねば　通ふ浦風に、山の櫻も散る物を。ワキ詞「如何に尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「うたてやな此花の陰ほどの御宿の候ふべきか。ワキ謡「實に〳〵是は花の宿なれどもさりながら、誰を主と定むべき。シテ詞「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、謡「詠めし人は此花の下、痛はしや我等が樣なる海人だにも、常は立ち寄り弔ひ申すに、御僧達はなど逆緣ながら弔ひ給はぬ。おろかにまします人々かな。ワキ詞「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、謡「詠めし人は薩摩の守、シテ詞「忠度と申しゝ人は、

若木の櫻―須磨寺の門前にあり　名木忠度を喰ふ

忠度の聖一度に法を挙く　花の春一極楽の蓮臺

此一の谷の合戦に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる標の木にて候なり。ワキ謡「こはそも不思議の値遇の縁、さしもさばかり俊成の、シテ謡「和歌の友とて淺からぬ。ワキ謡「宿は今宵の、シテ謡「主の人、地謡「名も忠度の聲聞きて、花の臺に座し給へ　シテ謡「有難や今よりは、かく弔ひの聲聞きて、佛果を得んぞ嬉しき。地謡「不思議や今の老人の、手向の聲を身に受けて、喜ぶ氣色見えたるは、何の故にてあるやらん。シテ謡「御僧に弔はれ申さんとて、これまで來れりと、地謡「夕の花の陰に寢て、夢の告をも待ち給へ、都へ言傳て申さんとて、花の陰に宿木の、行くかた知らずなりにけり。行くかた知らずなりにけり。(中入)

定家一俊成の子

ワキ詞「先々都に歸りつゝ　謡「定家に此事申さんと、上歌夕月早くかけろふの、夕月早くかけろふの、おのが友よぶ村千鳥の、跡見えぬ磯山の、夜の花に旅寢して、浦風までも心して、春に聞けばや音すごき　須磨の關屋の旅寢かな。須磨の關屋の旅寢かな。

後シテ一聲謡「恥かしや亡き跡に、姿を歸す夢の内、覺むる心はいにしへに、迷ふ雨夜の物語、申さんために魂魄に、うつりかはりて來りたり。さなきだに妄執多き娑婆なるに、何なか

勅勘の身―朝敵よみ人知らず―さゝなみやの歌折角千載集には入りたれど名字をあらはされざりしなり

をかの千載集の、歌の品には入りたれども、勅勘の身の悲しさは、よみ人知らずと書かれし事、妄執の中の第一なり、されどもそれを撰じ給ひし、俊成さへ空しくなり給へば、御身は御内にありし人なれば、今の定家君に申し、然るべくは作者をつけてたび給へと、夢物語申すに、須磨の浦風も心せよ。

狐川―淀川に落つる川、白氏文集に狐藏蘭菊叢とある語を冠らしむ

今はかうよ―最早是迄の意

クリ地謡「實にや和歌の家に生れ、その道を嗜み、敷島の蔭に依つし事、人倫に於て專らなり。ワヤ、サシ謡「中にも此忠度は、文武二道を受け給ひて、世上に眼高し。地謡「そも〳〵後白河の院の御宇に、千載集を撰はる。五條の三位俊成の卿、承つて之を撰ず。下欠年は永壽の秋のころ、都を出でしときなれば、地謡「さも忙はしかりし身の、さも忙はしかりし身の、心の花か蘭菊の、狐川より引き返し、俊成の家に行き、歌の望みを嘆きしに、望み足りぬれば、又弓箭にたづさはりて、西海の波の上、暫しと頼む須磨の浦、源氏の住み所、平家の爲はよしなしと、知らざりけるぞはかなき。地謡「さる程に一の谷の合戰、今はかうよと見えし程に、皆々舟に取り乘つて、海上に浮む。シテ詞「我も船に乘らんとて、

汀の方に打ち出でしに後を見れば、武藏國の住人に、岡部の六彌太忠澄と名のつて、六七騎にて追つかけたり。是こそ望む所よと思ひ、駒の手綱を引つ返せば、六彌太やがてむずと組み、兩馬が間にどうと落ち、彼の六彌太を取つておさへ、既に刀に手をかけしに、地謡「六彌太が郎等御後より立ちまはり、上にまします忠度の、右の腕を打ち落せば、左の御手にて、六彌太を取つて投げ除け、今は叶はじと思召して、そこ退き給へ人々よ、西拜まんと宣ひて、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と宣ひし、御聲の下よりも、痛はしやあへなくも、六彌太刀を拔き持ち、つひに御首を打ち落す。シテ謡「六彌太心に思ふやう。地謡「痛はしや彼人の、御死骸を見奉れば、其年もまだしき、長月頃の薄曇り、降りみ降らずみ定めなき、時雨ぞ通ふ村紅葉の、錦の直垂は、たど世の常によもあらじ、如何さま是は公達の、御中にこそあるらめと、御名ゆかしき所に、箙を見れば不思議やな、短册を附けられたり。見れば旅宿の題をすゑ、行き暮れて木の下陰を宿とせば、シテ謡「花や今宵の主ならまし、忠度と書かれたり。地謡「さては疑ひあらしの音に、聞え

西拜まん―西方極樂淨土をいふ

其年もまだしき―まだ老人ならぬ意　よのつね―言尊常の人ならじとなり

し薩摩の守にてますぞ痛はしき。

サリ地謡「御身此花の、陰に立ち寄り給ひしを、かく物語申さんとて、日を暮らしとどめしなり。今は疑ひよもあらじ、花は根に歸るなり。我跡とひてたび給へ、木陰を旅の宿とせば、花こそ主なりけれ。

花は根に歸るなり―千載集の歌詞

熊野

梗概

平宗盛に熊野といふ侍女あり。老母の病氣の爲め暇を乞へど許されず、強ひて花見に伴はる。然るに落花につけて「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」と詠みて宗盛を感動せしむ。これ觀音の利益なりとの意を作る。都の春景色と老母を懷ふ情と信仰の念と、叙し去り叙し來りて、文章の優麗なる、謡曲中の白眉たる定評あり。（三番目）

シテ　熊野　ツレ　朝顏
ワキ　平宗盛　トモ　太刀持

平宗盛―清盛の三男八島大臣といふ

ワキ詞「是は平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候。久しく都に留め置て候が、老母のいたはりとて度々暇を乞ひ候へども、此春ばかりの花見の友と思ひ留め置て候。いかに誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「熊野來りてあらば此方へ申し候へ。

夢の間惜しき春
一巻は好時節にして一刻も惜しまるゝ意

トモ詞「畏つて候。

シテ次第謡「夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん。ツレ是は遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候。詞さても熊野久しく都に御入候が　此程老母の御いたはりとて、度々人を御上せ候へども、更に御下りもなき候程に、此度は朝顔が御迎にのぼり候。道行謡此程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕ぐれの宿ならん。夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早都に著きて候。是なる御内が熊野の御入り候所にてありけに候。まづ〳〵案内を申さばやと思ひ候。いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が參りて候、それ〳〵御申し候へ。

養得自爲孝父母一朗詠集の句

ツレ、サシ謡「草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たり、況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候らん。ツレ詞「池田の宿より朝顔がまゐりて候。シテ詞「なに朝顔と申すか、あら珍しや、さて御いたはりは何と御入りあるぞ。ツレ詞「以てのほかに御

見うずる—見むとするの意
笑止—氣の毒の意
御目にかけて—宗盛に見せんとの意
便無う—不都合の意
甘泉殿の云々—以下文の段、漢の武帝の李夫人の住みたる宮殿
驪山宮は唐の玄宗皇帝の寵姫楊貴妃住めり
末世一代教主の如來—釋迦をいふ
朽木櫻—老母を喩ふ

入り候。是に御文の候御覽候へ。シテ詞「あら嬉しや先々御文を見うずるにて候。あら笑止や、此御文のやうも頼み少う見えて候。ツレ詞「左樣に御入り候。シテ詞「此上は朝顏をも連れて參り、又此文をも御目にかけて、御暇を申さうずるにてあるぞ、こなたへ來り候へ。誰か渡り候。トモ詞「誰にて渡り候ぞ。や、熊野の御參りにて候。シテ詞「わらはが參りたる由御申し候へ。トモ詞「心得申し候。いかに申し上げ候。熊野の御參りにて候 ワキ詞「こなたへ來れと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。シテ詞「いかに申し上げ候。老母のいたはり以ての外に候とて、此度は朝顏に文をのほせて候。便無う候へども、そと見參に入れ候べし。ワキ「なにと故郷よりの文と候や。見るまでもなしそれにて高らかに讀み候へ。

シテ謡「甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあらず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しゝ如く、何とやらん此春は、年ふりまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱

き、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ぶばかりなり。たど然るべくはよきやうに申し、しばしの御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし。唯かへすゞ〳〵も命の内に今一度、見参らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別のありといへば、いよ〳〵見まくほしき君かなと、古事までも思出の涙ながら書きとどむ。上歌そも此歌と申すは、そも此歌と申すは、在原の業平の、其身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ、老母のよめる歌なり。さてこそ業平も、さらぬ別のなくもがな、千代もと祈る子の爲と、よみし事こそあはれなれ。よみし事こそあはれなれ。シテ謡今はかやうに候へば、御暇を賜はり、東に下り候べし。ワキ詞老母の痛はりは然る事なれどもさりながら、この春ばかりの花見の友、いかで見すて給ふべき。シテ謡御詞をかへせば忍れなれども、花は春あらば今に限るべからず、是はあだなる玉の緒の、長き別れとなりやせん。唯御暇を賜はり候へ。ワキ詞いやいや左樣に心弱き、身に任せてはかなふまじ。いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、

老いぬれば―伊勢物語の歌さらぬ別の―初句世の中に末句人の子の爲

もゝひの家の内―此世を火宅といふ思ひに火を胃掛く

春前有雨花開早秋後無霜葉遅―百聯抄解の詩

山外有山山不盡路中多路路無窮―同上

山青川白雲來去人樂人愁酒有無―同上

雖言春色從東到―朗詠集の詩句

謡ともに心を慰まんと、上歌地謡牛飼車寄せよとて、牛飼車寄せよとて、是もおもひの家の内、はや御出と勧むれど、心は先に行きかぬる、足弱車の力なき花見なりけり。

シテ謡名も清き、水のまに〳〵とめくれば、地謡河は音羽の山櫻、東路とても東山、せめて其方のなつかしや。地謡春前に雨有つて花の開くる事早し、秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山有つて山盡きず、路中に道多うして道きはまりなし。シテ謡山青く山白くして雲來去す。地謡人樂しみ人愁ふ、是れ皆世上の有様なり。誰か言ひし春の色、けに長閑なる東山。上歌四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を列ねて行末の、雲かと見えて八重一重、さく九重の花ざかり、名に負ふ春のけしきかな。名に負ふ春のけしきかな。

ロンギ地謡河原おもてを過ぎゆけば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拝む。シテ謡觀音も同座あり。闡提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや。地謡けにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。

闡提―大悪不信の徒それをも觀音は救ふとなりたらちねー母

シテ謡「實におそろしや此道は、冥途に通ふなるものを、心細鳥邊山、地謡「煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、シテ謡「北斗の星の曇りなき、地謡「御法の花も開くなる、シテ謡「經書堂は是かとよ。地謡「其たらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ謡「春の隙行く駒の道、地謡「はや程もなく是ぞこの、シテ謡「車宿り、地謡「馬留め、こゝより花車、おりるの衣播磨潟、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

ワキ詞「いかに誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「熊野はいづくにあるぞ。トモ詞「いまだ御堂に御座候。ワキ詞「何とて遅なはりたるぞ、急いで此方へと申し候へ。トモ詞「畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候、急いで御參りあれとの御事にて候。其よし仰せられ候へ。シテ、ツレ詞「心得申し候。いかに申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候、急いで御參りあれとの御事にて候。シテ謡「何と早御酒宴の始まりたると申すか。シテ、ツレ詞「さん候。シテ詞「さらば參らうずるにて候。

シテ詞「なう〳〵皆々近う御參り候へ、あら面白の花や候。今を盛と見えて候に、何とて

花車―花見車
播磨潟飾磨―飾磨の褐（かちん）といふ織物の事を以て徒歩の序とす

御當座などをも遊ばされ候はぬぞ。クリ謡實にや思ひ内にあれば、色外に顯る　地謡「よしやよしなき世の習ひ、歎きても又餘りあり。シテ・ツレ謡「花前に蝶舞ふ紛紛たる雪、地謡「柳上に鶯飛ぶ片片たる金。花は流水に隨つて香の來る事速し、鐘は寒雲を隔てゝ聲の至る事遲し。クセ清水寺の鐘の聲、祇園精舍をあらはし、諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色、娑羅雙樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ、實にためしある粧ひ、佛も元は捨てし世の、半は雲に上見えぬ、鷲の御山の名を殘す、寺は桂の橋柱、立ち出でて峯の雲、花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原、シテ謡南を遙かにながむれば、地謡大悲擁護の薄霞、熊野權現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、又花の春は清水の、唯たのめ賴もしき、春も千々の花盛、シテ謡山の名の、音羽嵐の花の雪、地謡深き情を人や知る。シテ詞「妾御酌に參り候べし。ワキ詞「いかに熊野、一さし舞ひ候へ。地謡「深き情を人や知る。（中ノ舞）シテ詞「なう〳〵俄に村雨のして花の散り候は如何に。ワキ詞「げに〳〵村雨の降り來つて花を散らし候よ。シテ謡「あら心なの村雨やな春雨

花前蝶舞紛々雪　柳上鶯飛片々金　―百聯抄解の詩

娑羅双樹―釋迦此木の下にて入滅す時に其木委れしとなり

青かりし葉の秋―和泉式部に對して童の詠みし歌に「時雨する稻荷の山の紅葉ばはをかりし上り思ひそめてき」
春雨の―古今集の歌末句人しなければ

の、地謡「降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人やある。ワキ詞「由ありげなる言葉の種取り上げ見れば、謡いかにせん都の春も惜しけれど、シテ謡「なれし東の花や散るらん。ワキ詞「げに道理なり哀なり。早々暇とらするぞ、東に下り候へ。シテ謡「なに御暇と候や。ワキ詞「なか〳〵の事、とく〳〵下り給ふべし。シテ謡「あら嬉しや尊やな、是觀音の御利生なり。是までなりや嬉しやな。地謡「是までなりや嬉しやな。かくて都に御供せば、またもや御意の變るべき、只このまゝに御暇と、木綿附の鳥が鳴く、東路さして行く道の、やがて休らふ逢坂の、關の戸ざしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見すつるかりがねの、それは越路我は又、東に歸る名殘かな。東に歸る名殘かな。

東の花―母を喩ふ

なか〳〵の事―いかにもといふ意

木綿附鳥―鶏のこと鳥が一くに東の枕詞

遊行柳

梗概　遊行上人、奥州下向の折しも、柳樹の精現れ、法力を受けて成佛する事を作る。末段柳に關する文學上の故事を加ふ。（三番目）

シテ　柳の精、前は老人　ワキ　遊行上人

ワキ次第謡　歸るさ知らぬ旅衣、歸るさ知らぬ旅衣、法に心や急ぐらん。詞　是は諸國遊行の聖にて候。我一遍上人の教を受け、遊行の利益を六十餘州に弘め、六十萬人決定往生の御札を、普く衆生に與へ候。此程は上總の國に候ひしが　これより奥へと志し候。道行謡　秋津洲の、國々廻る法の道、國々廻る法の道、迷はぬ月も光添ふ、心の奥を白河の、關路と聞けば秋風も、立つ夕霧の何くにか　今宵は宿を狩衣、日も夕暮になりにけり。日も夕暮になりにけり。詞　急ぎ候程に、音にきゝし白河の關をも過ぎぬ。又是にあまた道

奥―陸奥

何くにか―新古今集の歌下句日も夕暮の峯の嵐に

の見えて候、廣き方へ行かばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵遊行上人の御供の人に申すべき事の候。ワキ詞「遊行の聖とは札の御所望にて候か。老足なりともいま少し急ぎ給へ。シテ詞「ありがたや御札をも賜はり候べし。まづ先年遊行の御下向の時も、古道とて昔の街道を御通り候ひしなり。されば昔の道を教へ申さんとて、はる〴〵是まで參りたり。ワキ詞「不思議やさては先の遊行も、此道ならぬ古道を、謡通りし事の有りしよなう。シテ詞「昔は此道なくして、あれに見えたる一村の、森のこなたの河岸を、御通りありし街道なり。其上朽木の柳とて名木あり。謡かよる尊き上人の、御法の聲は草木までも、成佛の緣ある結緣たり。下歌地謡此方へいらせ給へとて、老いたる馬にはあらねども、道しるべ申すなり。急がせ給へ旅人。上歌けにさぞな所から、けにさぞな所から人跡絶えて荒れはつる、葎蓬生刈萱も、亂れあひたる淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露分衣きて見れば、昔を殘す古塚に、朽木の柳枝さびて、蔭踏む道は、末もなく、風のみ渡るけしきかな。風のみ渡るけしきかな。

老いたる馬―齊の管仲老馬を用ゐて踏み迷ひたる道を得し故事
淺茅生や―新古今集の歌下句忘れぬ夢をふく嵐かな

シテ詞「是こそ昔の街道にて候へ。又是なる古塚の上なるこそ朽木の柳にて候、よく〳〵御覽候へ。ワキ詞「さては此塚の上なるが名木の柳にて候ひけるぞや。謡けに川岸も水綠えて、河そひ柳朽ち殘る、老木はそれとも見えわかず　蔦葛のみはひかゝり、青苔梢を埋む有樣、眞に星霜年ふりたり。詞　さていつの世よりの名木やらん、委しく語り給ふべし。シテ詞「昔の人の申しおきしは、鳥羽の院の北面、佐藤兵衞憲清出家し、西行と聞えし歌人、此國に下り給ひしが、頃は水無月半なるに、此河岸の木のもとに、暫し立ちより給ひつつ　一首を詠じ給ひしなり。ワキ謡謂れを聞けば面白や。さて〳〵西行上人の、詠歌は何れの言の葉やらん。シテ詞「六時不斷の御勤めの、隙なき內にも此集をば、謡御覽じけるか新古今に、上歌地謡道のべに、清水ながるゝ柳陰、清水ながるゝ柳陰、しばしとてこそ立ちとまり、涼みとる言の葉の、末の世々までも、殘る老木はなつかしや。かくて老人上人の、御十念を賜はり、御前を立つと見えつるが、朽木の柳の古塚に、寄るかと見えて失せにけり、寄るかと見えて失せにけり。（中入）

北面―院の武士
水無月―六月
六時―初夜、中夜、後夜、晨朝
日中、日沒
道のべに―末句
しばしとてこそ立ちとまりつれ

思ひの珠―数珠

沉水羅紋海燕回　柳條恨到荊臺―三體詩李群玉送客詩なり沉水は川の名羅紋は浪の紋荊臺は地名

柳さびー烏帽子の一種柳烏帽子とも云ふ

此界一人云々―五會法事讃の文此界にて申す念佛を種として極樂に一の蓮花生ずる也其人命終の時は此花還來りて迎ふとなり

ワキ詞「不思議やさては朽木の柳、我に詞をかはしけるよと、上歌謡思ひの珠の數々に、思ひの珠の數々に、御法をなして稱名の、聲打ち添ふる初夜の鐘、月も曇らぬ夜もすがら、露をかたしく袂かな、露をかたしく袂かな。

後シテ謡「沉水羅紋海燕かへる、柳條恨みを牽いて荊臺に至る。徒に朽木の柳時を得て、地謡「今ぞ御法に合竹の、シテ謡「直に導く彌陀の教、地謡「衆生稱念、必得往生の、功力に引かれて草木までも、佛果に至る老木の柳の、髪も亂るゝ白髪の老人、忽然と現れ出でたる烏帽子も、柳さびたる有樣なり。ワキ謡「不思議やなさも古塚の草深き、朽木の柳の木の本より、其樣化したる老人の、烏帽子狩衣を著しつゝ、現れ給ふは不審なり。シテ詞「何をか不審し給ふらん。はや我が姿はあらはし衣の、日も夕暮の道しるべせし、其老人にて候なり。ワキ謡「さては昔の道しるべせし、人は朽木の柳の精、シテ謡「御法の教なかりせば、非情無心の草木の、臺に到る事あらじ。ワキ謡「中々なりや一念十念、シテ謡「唯一聲の内に生るゝ、ワキ謡「彌陀の教を、シテ謡「身に受けて、上歌地謡「此界一人念佛名、西方便有一

蓮生、但使一生常不退、此花歸つてこゝに向ひ、上品上生に至らん事ぞうれしき。

シテ謡「釋迦既に滅し、彌勒未だ生ぜず。彌陀の悲願を賴まずは、いかで佛果に至るべき。

クリ地謡「南無や灌濁歸命頂禮、本願僞りましまさず。超世の悲願に身を任せて、他力の船に法の道、シテ、サシ謡「則ち彼岸に至らん事、一葉の船の力ならずや、地謡「彼黃帝の貨狄が心、聞くや秋吹く風の音に、散りくる柳の一葉の上に、蜘蛛の乘りてさゝがにの、糸引き渡る姿より、たくみ出だせる船の道、これも柳の德ならずや。シテ謡「其外玄宗華清宮にも、地謡「宮前の楊柳寺前の花とて、眺め絕えせぬ名木たり。クセそのかみ洛陽や清水寺の古、五色に見えし瀧浪を、尋ね登りし水上に、金色の光さす、朽木の柳忽に、楊柳觀音と現れ、今に絕えせぬ跡とめて、利生あらたなる、歩を運ぶ靈地なり。されば都の花盛、太宮人の御遊にも、蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝たれて、暮に數ある沓の音、シテ謡「柳櫻をこきまぜて、地謡「錦をかざる諸人の、花やかなるや小簾の隙、洩りくる風の匂ひより、手飼の虎の引綱も、長き思ひに懶の葉の、其柏木の及びなき、戀路もよし

灑淨―祓除の智水をそゝぎ給へとなり　他力―佛の救をたのむこと　貧狄―船を作り初めし人

宮前楊柳寺前花―三體詩王建華淸宮詩

四本の木陰―鞠の庭のかゝりの木　手飼の虎―猫をいふ　柏木―源氏物語の柏木右衞門督が夕霧大將と蹴鞠をなし女三の宮を見初めし事

なしや。是は老いたる柳色の、狩衣も風折も、風に漂ふ足もとの、弱きもよしや老木の柳、氣力無うして弱々と、立ち舞ふも夢人を、現と見るぞはかなき。シテ謡「教嬉しき法の道、地謡「迷はぬ月につれてゆかん。(序ノ舞)シテ謡「青柳に鶯傳ふ羽風の舞、地謡「柳花苑とぞ思ほえにける。シテ謡「柳の曲も歌舞の菩薩の、舞の袂を返すぐ〳〵も、上人の御法を受け、喜ぶ報謝の舞も　是までなりと名殘の涙の、地謡「玉にも貫ける春の柳の、シテ謡「暇申さんと木綿附の鳥も鳴き、地謡「別れの曲には、シテ謡「柳條を綰ぬ。地謡「手折るは青柳の、シテ謡「姿もたをやかに、地謡「結ぶは老木の、シテ謡「枝もすくなく、地謡「今年ばかりの風や厭はんと、漂ふ足もとも、よろ〳〵よろ〳〵と、倒れ臥柳、假寢の床の、草の枕の一夜の契も、他生の緣ある上人の御法、西吹く秋の風打ち拂ひ、露も木の葉も散りぐ〳〵に、露も木の葉も散りぐ〳〵になり果てて、殘る朽木となりにけり。

柳花苑―樂の名

玉にもぬけるー古今集に「淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

藤戸

梗概

佐々木盛綱備前の兒島にて平家を攻めし時、淺瀬を敎へくれし漁夫を殺し、我一人の功名とせし物語により、漁夫の老母の亡靈を出し、恨を訴へしめ、法事の功德によりて得脫成佛する事を作る。（四番目）

シテ　海士の靈（前は老母）　ワキ　佐々木盛綱

トモ　從者

佐々木三郎盛綱―秀義の三男後入道して西念と云ふ

入部―入國のこと

ワキ次第「春の湊の行末や、春の湊の行末や、藤戸の渡なるらん。詞　是は佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に、兒島を賜はつて候。今日は日もよく候程に、只今入部仕り候。道行「秋津洲の、波靜なる島廻り、波靜なる島廻り、松吹く風も長閑にて、實に春めける朝ぼらけ、船も道ある浦傳ひ、藤戸に早く著きにけり。詞　如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「皆々訴訟あらんずる藤戸に早く著きにけり。

者は罷り出でよと申し候へ。ト云詞「畏つて候。如何に皆々たしかに聞き候へ。此浦の御主佐々木殿の御入部にて有るぞ。何事も訴訟あらん者は罷り出で申し候へ。シテ謡「一聖老の波、越えて藤戸の明暮に、昔の春の歸れかし。ワキ詞「不思議やな是なる女の、訴訟ありけに某を見てさめ〴〵と泣くは何事にてあるぞ。シテ謡「海士の刈る藻に栖む蟲の我からと、音をこそ泣かめ世をば實に、何か恨みん本よりも、因果の廻る小車の、彌猛の人の罪科は、皆報いぞといひながら、我が子ながらも餘り實に、科も例も波の底に、沈め給ひし御情なさ、申すにつけて便なけれども、御前に參りて候なり。ワキ詞「何と我が子を波に波めし恨みとは更に心得ず。シテ詞「さてなう我が子を波に沈め給ひし事は候。ワキ詞「あよ音高し何と〳〵。シテ謡「なう猶も人は知らじとなう。なか〳〵に其有樣を顯はして、跡をも弔ひ又は世に、生き殘りたる母が身をも、訪ひ慰めてたび給はば、少しは恨みも晴るべきに、下歌地謡「いつまでとてか忍ぶ山、忍ぶかひなき世の人の、扱ひ草も繁き物を、何と隱し給ふらん。上歌住み果てぬ、此世は假の宿なるを、此世は假の宿なるを、親

海士の刈る―古今集の歌宋句世をば恨みじ彌猛の人―武士

扱ひ草―人の持て扱ふ種話の種なり

骨高し―壁高しに同じ倒すること

子とて何やらん、幻に生れ來て、別るれば悲しみの、思ひは世々を引く、絆となつて苦しみの、海に沈め給ひしを、せめては訪はせ給へや、跡弔はせ給へや。

ワキ詞「言語道斷、かよる不便なる事こそ候はね。今は何をか包むべき。其時の有樣語つて聞かせ候べし。近う寄つて聞き候へ。語さても去年三月二十五日の夜に入りて、浦の男を一人近づけ　此海を馬にて渡すべき所やあると尋ねしに、彼者申すやう、さん候河瀨の樣なる所の候。月頭には東にあり、月の末には西にあると申す。卽ち八幡大菩薩の御告と思ひ、家の子若黨にも深く隱し、彼者と唯二人夜にまぎれ忍び出で、此海の淺みを見置きて歸りしが、盛綱心に思ふやう、いや〳〵下郎は筋なき者にて、又もや人に語らんと思ひ、不便には存じしかども、取つて引き寄せ二刀刺し、其まゝ海に沈めて歸りしが、さては汝が子にてありけるよな。よし〳〵何事も前世の事と思ひ、今は恨みを晴れ候へ。シテ詞「さてなう我子を沈め給ひし、在所は取り分き何處の程にて候ぞ。ワキ詞「あれに見えたる浮洲の岩の、少し此方の水の深みに、死骸を深く隱しょなり。シテ謠「さては

去年三月―元暦元年のこと平家物語には九月東鑑には十二月とす
月頭―月初め
筋なき者―條理を辨へぬ者

人の申しょも、少しも違はざりけり。あの邊ぞとゆふ波の、ワキ謡「夜の事にて有りし程に、人は知らじと思ひしに、シテ謡「やがて隠れはなき跡を、ワキ謡「深く隠すと思へども、シテ謡「好事門を出でず、地謡「悪事千里を行けども、子をば忘れぬ親なるに、失はれ參らせし、こはそも何の報いぞ。クセ實にや人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られたれ。もとよりも定めなき、世の理はまのあたり、老少不定の境なれば、若きを先立てて、つれなく殘る老鶴の、眠りの内なれや。夢とぞ思ふ親と子の、二十餘の年竝、かりそめに立ち離れしをも、待ち遠に思ひしに、又いつの世に逢ふべき。シテ謡「世に住めば、憂き節繁き河竹の、地謡「杖柱とも頼みつる、海士の此世を去りぬれば、今は何にか　命の露を繋けてまし。ありがひも有らばこそ、とてもの憂き身なるものを、亡き子と同じ道になしてたばせ給へと、人目も知らず伏し轉び、我子返させ給へやと、現なき有様を、見るこそ哀なりけれ。

ワキ謡「あら不便や候。今は恨みてもかひなき事にて有るぞ。彼者の跡をも弔ひ、又妻子

好事不出門惡事走千里―漢土の諺
人の親―後撰集の歌末句迷ひぬるかな

をも世に立てうずるにてあるぞ。まづ我家に歸り候へ。如何に誰かある。餘りに彼者不便に候程に、さま〴〵の弔ひをなし、又今の母をも世に立てうずるにて有るぞ　其由申し付け候へ。狂言「シカ〳〵。

ワキ謡「さま〴〵に、弔ふ法の聲立てよ、弔ふ法の聲立てよ、波に浮寢の夜となく、晝とも分かぬ弔ひの、般若の船の、おのづから其纜をとく法の、心を靜め聲を上げ、一切有情殺害三界不墮惡趣。

後一聲謡「憂しや思ひ出でじ、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。さるにても身はあだ波の定めなくとも、科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科も有るべきに、よしなかりける海路のしるべ　思へば三途の瀬踏なり。

ワキ謡「不思議やな早明方の水上より、化したる人の見えたるは、彼の亡者もや見ゆらんと、奇異の思ひをなしければ、シテ詞「御弔ひは有難けれども、恨みは盡きぬ妄執を、申さん爲に來りたり。ワキ謡「何と恨を夕月の、そのよに歸る浦波の、シテ詞「藤戸の渡り教へよ

般若―智恵のこと　一切有情云々―大般若經の文

との、仰せも重き岩波の、河瀬の様なる浅みの通りを、ワキ謡「教へしまゝに渡りしかば、シテ謡「弓矢の御名を揚ぐるのみか、ワキ謡「昔より今に至るまで、馬にて海を渡す事、シテ謡「希代の例なればとて、ワキ謡「此島を御恩に賜はる程の、シテ謡「御よろこびも我故なれば、ワキ謡「如何なる恩をも、シテ謡「給ぶべきに、地謡「思ひの外に一命を、召されし事は、馬にて海を渡するよりも、是ぞ希代の例なる。さるにても忘れがたや　あれなる浮洲の岩の上に、我を連れて行く水の、氷の如くなる刃を抜いて、胸のあたりを刺し通し、刺し通さるれば肝魂も、消え〳〵となる處を、其まゝ海に押し入れられて、千尋の底に沈みしに、シテ謡「折節引く汐に、地謡「折節引く汐に、引かれて行く波の、浮きぬ沈みぬ埋木の、岩のはざまに流れかゝつて、藤戸の水底の、悪龍の水神となつて、恨みをなさんと思ひしに、思はざるに御弔ひの、御法の御船にのりを得て、即ち弘誓の船に浮めば、水馴棹、さし引きて行く程に、生死の海を渡りて、願ひのまゝにやす〳〵と、彼岸に至り至りて、彼岸に至り至りて、成佛得脱の身となりぬ、成佛の身とぞなりにける。

弘誓―観音の衆生済度のこと

天神七代―第一に國常立尊第二に國狹槌尊第三に豐斟渟尊第四に泥土煮尊沙土煮尊（男女）第五に大戸道尊大戸間遊尊（男女）第六に面足尊惶根尊（男女）第七に伊弉諾尊伊弉冉尊（男女）地神四代―第一に天照大神第二に正哉吾勝々速日天忍穗耳尊第三に天津彦々火瓊々杵尊第四に彦火々出見尊かりそめ―借を掛く

内九 玉井

梗概

彦火々出見尊は獵をなし給ひ、御兄火闌降命は漁をなし給ひしが、或時各、業を交へてなし給ひしに、尊兄命の鉤を失ひ給ふ。そを返せと兄命の責め給ふに困じ給ひしが、鹽土翁の勸によりて海宮に行幸し給ひ、海神の助によりて鉤を得給ふのみならず、滿珠干珠をも得て還幸あり。遂に兄命を威服し給ふ。此古史神話を材料としたるもの卽ちこの曲なり。（脇能）

前シテ　豐玉姫　ツレ　玉依姫
後シテ　海神　ツレ　天女
ワキ　彦火々出見尊

ワキ、サシ謠それ天地開け始まりしより、天神七代地神四代に至り、火々出見尊とは我事なり。詞さても兄火闌降命の鉤針を、かりそめながら海邊に鉤を垂れしに、彼鉤針を魚

に取られぬ。此由を兄命に申せども、唯もとの釣をはたるさらば海中に入り、彼釣針を尋ねんと思ひ立て返すといへども、なほもとの釣をはたる、さらば海中に入り、彼釣針を尋ねんと思ひ立ちて候。謡わたづみのそこも知らぬ鹽土男の、翁の教に従ひて、無目籠の猛き心上歌直なる道を行く如く、直なる道を行く如く、波路遥かに隔て来て、こゝぞ名におふわたづみの、都と知れば水もなく、廣き眞砂に著きにけり。廣き眞砂に著きにけり。詞さても我鹽土男の翁が教に従ひ、わたづみの都に入りぬ。こゝに瑠璃の瓦を敷ける衡門あり、門前に玉の井あり。此井の有様銀色燿き世の常ならず。又湯津の柱の木あり、木の下に立ち寄り、暫く事の由をも窺はゞやと思ひ候。

ツレ「一聲謡」はかりなき、齢を延ぶる明暮の、長き月日の光かな。ツレ謡「いとなむ業も手ずさみに、ツレ謡「掬ぶも清き水ならん。シテ、サシ謡「濁りなき心の水の泉まで、老いせぬ齢を汲みて知る、ツレ謡「薬の水の故なれや、老いせぬ門に出で入るや。月日雲らぬ久堅の、天にもますや此國の行末遠き住居かな。下歌くり返す、玉の釣瓶の掛縄の、上歌長き命を汲

はたる—貰め促すこと　鹽土男—彦火々出見尊を救ひし翁なりその名義は詳ならねど汐つ路の義にて海路の案内者かといふ　無目籠—目の細なる籠といふ或は竹筵の帆を掛けたる舟ならんともいふ　湯津—五百個の榊

みて知る、長き命を汲みて知る、心の底も曇りなき、月の桂の光添ふ、枝を連ねて諸共に、朝夕なるよ玉の井の、深き契は頼もしや。深き契は頼もしや。

ワキ詞「われ玉の井の邊にたよずむ處に、其樣けたかき女性一人來り、玉の釣瓶を持ち水を汲む氣色見えたり。言葉をかけんも如何なれば、是なる桂の木陰に立ちより、身を隱しつよたよずみたり。シテ詞「人ありとだに白露の、玉の釣瓶を沈めんと、玉の井に立ち寄り底を見れば、桂の木陰に人見えたり。謠是は如何なる人やらん。ワキ謠忍ぶ姿も顯れて、あさまになりぬさりながら、なべてならざる御姿如何なる人にてましますぞ。シテ謠あら恥かしや我姿の、見えける事も我ながら、忘るよ程の御氣色、形も殊にみやびやかなり。唯人ならず見奉る。御名を名乘りおはしませ。ワキ詞「今は何をか包むべき。我は天孫地神四代、火々出見尊とは我が事なり。ツレ謠「あら有難や天の御神ノ、御孫の尊を目のあたり、見奉るぞ不思議なる。シテ詞「いやされば此始より、天孫の光隱れなし。さて是までの臨幸は、そも何事の故やらん。ワキ詞「實に御不審は御理。われ釣針を魚に取ら

れ、遙々是まで尋ね來る、こゝをば何處と申すやらん。謡委しく語り給ふべし。シテ詞「知ろしめさぬは御理。是は龍宮謡わたづみの宮、ワキ謡「かく言の葉をかはし給ふ、二人の御名は、シテ謡「豊玉姫、ツレ謡「我は妹の玉依姫、地謡「互に連枝の名乘して、つゝましながら御神の、みやびやかなるに、早打ち解けて木綿四手の、神にぞ靡く大幣の、引く手あまたの心かな。引く手あまたの心かな。

シテ詞「如何に申し上げ候。うちつけなる御事なれども、やがて父母に逢はせ奉り、彼釣針をも尋ぬべし、御心安く思召され候へ。ワキ詞「さらばやがて伴なひ申し、宮中へ參り候べし。クリ地謡「かたじけなくも天の御神の御孫、わたづみの都にいたり給ふ事、有難かりける御影かな。シテサシ謡「然れば高垣姫垣調ほり、地謡「高殿や照りかゝやき、雲の八重疊を數き、尊を請じ入れ奉り、シテ謡「父母の神いつきかしづき、地謡「臨幸の意趣を語り給ふ。クセわれ兄の釣針を、かりそめながら波間行く、魚に取られて無き由を、歎き給へど其針に、あらずは取らじとにかくに、せうとを痛めさまざまに、猛き心の如何ならんと、語

大帶の一伊勢物語の歌に「大麻の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」

高垣一周圍の高大なる垣　姫垣一高垣の上にある短少なる垣

潮満潮干の二つの玉―は潮を満たしめ一は干しむる如意珠なり
たゞならぬ姿―懐妊のこと

り給へば父の神、御心安く思召せ。まづ釣針を尋ねつよ、御國に歸し申すべし。シテ謡「猶兄の怒りあらば、地謡「潮満潮干の二つの玉を、尊に奉りなば御心に、任せて國も久堅の、天より降る御神の、外祖となりて豐姫も、たゞならぬ姿有明の、月日程なく、三年を送り給へり。

ワキ詞「かくて三年になりぬれば、我國に歸り上るべし。海路の案内如何ならん。シテ詞「御心安く思召せ。謡綿津見の宮主伴なひて、海中の乗物さまざまあり。地謡「大鰐に乗じ疾風を吹かせ、陸地に送りつけ申さん、其程は待たせおはしませ。〔中入〕

天女ツレ二人謡「光敬る、潮満玉のおのづから、くもらぬ御影仰ぐなり。地謡「各〻玉を捧げつよ各〻玉を捧げつよ、豐姫玉依二人の姫宮、金銀盤裏に玉を供へ、尊に捧げ奉り、彼釣針を待ち給ふ、綿津見の宮主持参せよ。

後シテ謡「まうとの君の命に隨ひ、綿津見の宮主釣針を尋ねて、天孫の御前に奉る。地謡「潮満潮干二つの玉を、潮満潮干二つの玉を、釣針に取り添へ捧げ申し、舞樂を奏し

豊姫玉依、袖をかへして舞ひ給ふ。

地謡「いづれも妙なる舞の袖、いづれも妙なる舞の袖、玉のかんざし桂の黛、月も照り添ふ花の姿、雪を廻らす袂かな。シテ謡「わたづみの宮主（笑）地謡「わたづみ宮主姿は老龍の雲に蟠り、鹿背杖にすがり、左右に返す袂も花やかに、足踏はとう〳〵と、拍子を揃へて時移れば、尊は御座を立ち給ひ、歸り給へば袂にすがり、わたづみの乘物を奉らんと、五丈の鰐に乘せ奉り、二人の姫に玉を持たせ、龍王立ち來る波を拂ひ、潮を蹴立て、遙に送りつけ奉り、遙に送りつけ奉りて、又龍宮にぞ歸りける。

鹿背杖―石突の二股になれる杖

景清

梗概

悪七兵衛景清は上總介忠清の三男なり。平家滅亡の後、幾度か復讐をはかりて成らず。盲目乞食のあさましき姿となりて、日向に在り。一女人丸、遙々と關東より下向して、父を訪ふ。景清は態と會はず。後對面して、八島合戦の錣引の物語をなす。（四番目）

シテ　景清　　ツレ　姫（人丸）　　トモ　従者

ワキ　里人

鎌が江が谷―扇谷と山内との間

ツレ次第「消えぬ便も風なれば、消えぬ便も風なれば、露の身いかになりぬらん。ツレ・トモ「是は鎌倉鰮が江が谷に、人丸と申す女にて候。さても我が父悪七兵衛景清は、平家の身方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら、物憂き事も旅の習ひ、又父ゆゑと心強く、ツレ・トモ「思ひ寝の涙かたし

く草の枕露を添へて、いと淋しき袂かな。上歌相摸國を立ち出でて、相摸國を立ち出でて、誰にゆくへを遠江、けに遠き江に旅舟の、三河にわたす八橋の、雲居の都いつかさて、假寢の夢に馴れて見ん。假寢の夢に馴れて見ん。トモ詞「やう〳〵御急ぎ候程に、是は早日向の國宮崎とかやに御著きにて候。これにて父御の御行方を御尋ねあらうずるにて候。

シテ詞「松門獨り閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時の移るをも辨へず。暗々たる庵室に徒に眠り、衣寒暖に與へざれば、膚は髑骨と衰へたり。上歌地謡「とても世を、背くとならば墨にこそ、背くとならば墨にこそ、染むべき袖のあさましや、窶れ果てたる有樣を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きを訪よしもなし。憂きを訪ふよしもなし。

ツレ詞「ふしぎやな是なる草の庵古りて、誰住むべくも見えざるに、聲珍らかに聞ゆるは、もし乞食のありかかと、軒端も遠くみえたるぞや。シテ詞「秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音信いづちとも、ツレ詞「知らぬ迷ひのはかなさを、しばし休らふ宿もなし。

遠江―間ふを掛く　八橋―杜若に名あり

松門―柴の戸などと云ふが如しみづから清光を見ざれば―盲目なればなり　髑骨と衰へ―骨立ち痩せさらばふ事

秋きぬと―古今集の歌下句風の音にぞ驚かれぬる

シテ詞「けに三界は所なし只一空のみ。誰とかさして事問はん。謡　又いづちとか答ふべき。

只一空―一切諸法皆自性無し畢竟空なりといふ

トモ詞「いかに此薬屋の内へ物問はう。シテ詞「そも如何なるものぞ。トモ詞「流され人の行方や知りてある。シテ詞「流され人にとりても、名字をば何と申し候ぞ。トモ詞「平家の侍悪七兵衛景清と申し候。シテ詞「けにさやうの人をば承り及びては候へども、本より盲目なれば見る事なし。謡　さもあさましき御有様承り、そぞろに哀を催すなり。委しき事をばよそにて御尋ね候へ。トモ詞「さては此あたりにては御座なけに候。是より奥へ御出であつて尋ね申され候へ。

親の絆―恩愛の情をいふ

シテ詞「ふしぎやな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば、この盲目なるものの子にて候はいかに。我一年尾張の國熱田にて遊女と相馴れ一人の子を設く、女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ、鎌倉殿が江が谷の長に預けおきしが、謡　馴れぬ親子を悲しみ、父に向つて言葉をかはす。上歌地謡「聲をば聞けど面影を、見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそ、なか〳〵親の絆なれ。なか〳〵親の絆なれ。

トモ詞「いかに此あたりに里人のわたり候か。ワキ詞「里人とは何の御用にて候ぞ トモ詞「流され人の行方や御存じ候。ワキ詞「流され人にとりても、いかやうなる人を御尋ね候ぞ。トモ詞「平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申し候。ワキ詞「只今こなたへ御出で候ふ山陰に、藁屋の候に人は候はざりけるか。トモ詞「其藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ。ワキ詞「なうその盲目なる乞食こそ、御尋ね候景清候よ。あらふしぎや、景清のことを申して候へば、あれにまします御事の、御愁傷のけしき見え給ひて候は、何と申したる御事にて候ぞ。トモ詞「御不審尤にて候、何をか包み申し候べき、是は景清の息女にてわたり候が、今一度父御に御對面ありたきよし仰せられ候ひて、是まではるゞ御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられて候ひて、景清に引き合せ申されてたまはり候へ。ワキ詞「言語道斷。さては景清の御息女にて御座候か。まづ御心を靜めて聞し召され候へ。景清は兩眼盲ひましくて、せん方なさに髪をおろし、日向の勾當と名を附き給ひ、命をば旅人をたのみ、我ら如き者の憐みをもつて身命を御つぎ候が、昔に引きかへたる御

有様を恥ぢ申されて、御名のりなきと推量申して候。某只今御供申し、景清と呼び申すべし、我名ならば答ふべし。其時御對面あつて、昔今の御物語候へこなたへわたり候へ。なう〳〵景清の渡り候か。悪七兵衛景清の渡り候か。ヂ「かしまし〳〵さなきだに、故郷の者とて尋ねしを、此仕儀なれば身を恥ぢて、名のらで歸す悲しさ、謡千行の悲涙袂を朽たし、詞萬事は皆夢の内のあだし身なりと打ち覺めて、今は此世に亡きものと、思ひ切つたる乞食を、悪七兵衛景清なんどと、呼ばゝ此方が答ふべきか、謡其上我名は此國の、上歌地謡「日向とは日に向ふ、日向とは日に向ふ、向ひたる名をば呼びたまはで、力なく捨てし梓弓、昔に歸る己が名の、悪心は起さじと思へども、又腹立ちや。ヂ「謡所に住みながら、所に住みながら、地謡「御扶持ある方々に、憎まれ申す者ならば、ひとへに盲の、杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、腹あしく由なき言事、只ゆるしおはしませ。シテ謡「目こそ閉けれど、地謡「目こそ閉けれども、人の思はく、一言の内に知る者を、山は松風、すは雪よ、見ぬ花のさむる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に、よする

あだし身―假の身

向ひたる名―日向の勾當といふ者

山は松風すは雪―上云々―守目なれど人の思はくは一言にて了解す松風吹くといへば雪と心得波の寄するを聽きて滿潮を知るとなり

波も聞ゆるは、夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり、物語始めて、御慰みを申さん。

シテ詞「いかに申し候。只今はちと心にかゝる事の候ひて、短慮を申して候御免あらうずるにて候。ワキ詞「いや〳〵いつもの事にて候程に苦しからず候。又我等より以前に、景清を尋ね申したる人はなく候か。シテ詞「いや〳〵御尋ねより外に尋ねたる人はなく候。ワキ詞「あら傷を仰せ候や。正しう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひし物を、何とて御包み候ぞ。あまりに御痛はしさに是まで御供申して候。急いで父御に御對面候へ。ツレ詞「なう自こそ是まで參りて候へ。謡「恨めしやはるゞの道すがら、雨風露霜を凌ぎて參りたる志も、いたづらになる怨めしや　さては親の御慈悲も、子によりけるかや情なや。シテ謡「今までは包み隱すと思ひしに、顯れけるか露の身の、置き所なや恥かしや。御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に我が名も顯るべしと、思ひ切りつゝ過ずなり。我を恨みと思ふなよ。地謡「あはれけに古は、疎き人をも訪へかしとて、怨み譏る

所狭くー船中なれば窮屈なるをいふ　取揖ー船の左の艫　麒麟も老いぬれば一名馬も老いては役立たずとなり

其報に、正しき子にだにも、訪はれじとおもふ悲しさよ。上歌一門の船の内、一門の船の内に、肩を竝べ膝を組みて、所狭くすむ月の、景清は誰よりも、御座船になくて適ふまじ、一類その以下、武略さま〴〵に多けれど、名を取揖の船に乗せ、主従隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば、駑馬に劣るが如くなり。

ワキ詞「あら痛はしや先かう渡り候へ。いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「屋島にて景清の御高名の様が聞し召されたき由仰せられ候、そと御物語あつて聞かせ申させ候へ。シテ詞「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども、是までは るばる來りたる志あまりに不便に候程に、語つて聞えまうし候べし。此物語過ぎ候はば、かの者をやがて故郷へ歸して給はり候へ。ワキ詞「心得申し候。御物語すぎ候はど、やがて歸し申さうずるにて候。

シテ詞「いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に張つて、たがひに勝負を決せんと欲す。謡能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山、備中の水

利無かつしま―利無かりしまいひとー勝れたること

物々しー事々しさもうしやーさもしやを延べていふ

島鵜越に至るまで、一度も身方の利無かつし事、ひとへに義経が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん、謀こそ有らまほしけれと宣へば、詞景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば易かりなんと思ひ、教経に最期の暇乞ひ、陸にあがれば源氏の兵、謡餘すまじとて駈け向ふ。上歌地謡景清是を見て、景清是を見て、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて、斬つてかゝればこらへずして、刃向いたる兵は、四方へばつとぞ逃げにける。遁さじと、シテ謡さもうしや方々よ、地謡「さもうしや方々よ、源平互に見る目も恥かし。一人を留めん事は案の打物、小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清と、名のりかけ、名のりかけ、手取にせんとて追うて行く。三保谷が著たりける、兜の鍬を、取りはづし取りはづし、二三度逃げのびたれども、思ふ敵なれば遁さじと、飛びかゝり兜をおつとり、えいやと引くほどに、鍬は切れて此方に留れば、主は先へ逃げのびぬ。遙に隔てゝ立ちかへり、さるにても汝おそろしや、腕の強きと言ひければ、景清は三保谷が、頸の骨こそ強けれと、笑

ひて左右へのきにける。むかし忘れぬ物がたり。衰へ果てて心さへ、亂れけるぞや恥かしや。此世はとても幾程の、命のつらさ未近し、はや立ち歸り亡き跡を、弔ひ給へ盲目の、闇き所の燈、あしき道橋と賴むべし。さらばよ留る行くぞとの、只一聲を聞き殘す、これぞ親子の形見なる。これぞ親子の形見なる。

杜若

梗概

伊勢物語に業平東下りのをりから、三河の八橋にて杜若をながめ「唐衣きつゝなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」とかきつばたの五文字を折句にして歌を詠じ、都を懐ふ情を寄せ、一行旅愁を催したる故事あり。此曲は之に據りて杜若の精を出し、旅僧の回向を受けしむ。末段伊勢物語の歌文を交へて、業平の閑雅なる風采を躍如たらしめたり。（三番目）

シテ　杜若の精　ワキ　旅僧

洛陽―京都

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此間は都に候ひて、洛陽の名所舊蹤殘りなく一見仕りて候。又是より東國行脚と志し候。道行謡夕べ〳〵の假枕、夕べ〳〵の假枕、宿はあまたに變れども、同じ憂き寢の美濃尾張、三河國に著きにけり。三河國に著きにけり。急ぎ候間、程なう三河國に著きて候。又これなる澤邊に杜若の今を盛と見えて候。立ちより眺めばやと思ひ候。謡げにや光陰とゞまらず、春過ぎ夏も來て、草木心無しとは

かほよ花―かほ花ともいふ杜若の異名

心なの旅人―此杜若の特に名高きに倣の心附かねばなり

蜘蛛手―流れの數多に分れたること

申せども、時を忘れぬ花の色、かほよ花とも申すやらん、あら美しの杜若やな。

シテ詞「なう〳〵御僧、何しに此澤には休らひ給ひ候ぞ。ワキ詞「是は諸國一見の者にて候が、杜若おもしろさに眺め居て候。さてこゝをばいづくと申し候ぞ。シテ詞「是こそ三河國八橋とて、杜若の名所にて候へ。さすがにこの杜若は、名におふ花の名どころなれば、謡色も一しほ濃紫の、なべての花のゆかりとも、思ひなぞらへ給はずして、取りわき眺め給へかし。あら心なの旅人やな。ワキ詞「けに〳〵三河國八橋の杜若は、古歌にもよまれけるとなり。何れの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ。シテ詞「伊勢物語にいはく、こゝを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるなり。其澤に杜若のいと面白く咲き亂れたるを、ある人かきつばたと云ふ五文字を句の上に置きて、旅の心を詠めと言ひければ、謡唐衣著つゝなれにし妻しあれば詞はる〴〵來ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原業平の、此杜若を詠みし歌なり。ワキ謡「あら面白やさては此、東のはての國々までも、業平は下り給ひけるか。シテ詞「事新しき問事かな。此八橋のこゝのみか、猶

しも心の奥深き、謡名所々々の道すがら、ワキ詞「國々ところは多けれども、取りわき心の末かけて、シテ謡思ひ渡りし八橋の、ワキ謡「三河の澤の杜若、シテ謡はるゞきぬる旅をしぞ、ワキ謡思ひの色を世に殘して、シテ謡主は昔に業平なれども、ワキ謡かたみの花は、シテ謡今ここに、上歌地謡在原の、跡な隔てそ杜若、跡な隔てそ杜若、澤邊の水の淺からす、契りし人も八橋の、蜘蛛手に物ぞ思はるゝ。今とても旅人に、昔を語る今日の暮、やがて馴れぬる心かな。やがて馴れぬる心かな。

シテ詞「いかに申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「見苦しく候へども、わらはが庵にて一夜を御明かし候へ。ワキ詞「あら嬉しや。やがて參り候べし。シテ詞「なう〳〵此冠唐衣御覽候へ。ワキ詞「不思議やな賤しき賤の臥處より、色もかゝやく衣を著、透額の冠を著し、これ見よと承る、こはそも何如なる事にて候ぞ。シテ詞「是こそ此歌に詠まれたる唐衣、高子の后の御衣にて候へ。又此冠は業平の、豐の明の五節の舞の冠なれば、かたみの冠五節―豐明節會の折舞姫の舞あり五節といふ　唐衣、身に添へ持ちて候なり。ワキ詞「冠唐衣は先々置きぬ。さて〳〵御身は如何なる人

昔に業平―昔なると言掛く

卯蛛手に物ぞ思はるゝ―色々に物思ふもとなり續古今集の歌に「戀せよとなれる三河の八橋のくもでに物を思ふ頃かな

透額―十六歳宋磯の人の著る冠額に透し穴あり

高子の后―清和天皇の皇后二條后といふ

豐の明―毎年十一月中の辰の日に行はるゝ公事

ぞ。シテ謡「真は我は杜若の精なり。植ゑおきし昔の宿の杜若と、よみしも女の杜若に、なりし謂の言葉なり。又業平は極楽の、歌舞菩薩の化現なれば、詠み置く和歌の言の葉までも、皆法身說法の妙文なれば、草木までも露の恵の、謡「佛果の縁を弔ふなり。ワキ謡「是は末世の奇特かな。正しき非情の草木に、言葉をかはす法の聲、シテ謡「佛事をなすや業平の、昔男の舞の姿。ワキ謡「是ぞ卽ち歌舞の菩薩の、シテ謡「假に衆生と業平の、ワキ謡「本地寂光の都を出でて、シテ謡「普く濟度、ワキ謡「利生の、シテ謡「道に、地謡「はる〴〵來ぬる唐ころも、はる〴〵來ぬる唐ころも、著つゝや舞を奏づらん。シテ謡「別れこし、跡の恨みの唐衣、地謡「袖の都に返さばや。

植ゑおきし云々―後撰集に「いひそめし昔の宿の杜若いさばかりこそ形見なりけれ」

昔男初冠して―伊勢物語に據る

シテ謡「そもく此物語は、如何なる人の何事によつて、地謡「思ひの露の信夫山、忍びて通ふ道芝の、始めもなく終りもなし。シテ謡「昔男初冠して奈良の京、春日の里に知るよしして狩にいにけり。地謡「仁明天皇の御宇かとよ、いともかしこき勅を受けて、大内山の春霞、立つや彌生の初めつかた、春日の祭の勅使として、透額の冠を許さる。シテ謡「君

住所求むとて―栗下りのこと

飛ぶ螢の雲の上まで―伊勢物語の歌末句胴に告げこせ

陰陽の神―男女の中を司る神

の恵の深き故、地謡「殿上にての元服の事、當時其例稀なる故に、初冠とは申すとかや。ワキ然れども世の中の、一度は榮え、一度は、衰ふる理の眞なりける身のゆくへ、住所求むとて、東の方に行く雲の、伊勢や尾張の海面に、立つ波を見て、いとどしく、過ぎにし方の戀しきに、羨ましくもかへる浪かなと、うち詠めゆけば信濃なる、淺間の嶽なれや、くゆる煙の夕氣色、シテ「さてこそ信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、地謡「遠近人の、見やはとがめぬと口ずさみ、猶はるゞの旅衣、三河の國に著きしかば、こゝぞ名にある八橋の、澤邊に匂ふ杜若、花紫のゆかりなれば　妻しあるやと、思ひぞ出づる都人。然るに此物語、其品多き事ながら、とりわき此八橋や、三河の水の底ひなく、契りし人人のかず〳〵に、名をかへ品をかへて、人待つ女物病み、玉すだれの、光も亂れて飛ぶ螢の、雲の上まで往ぬべくは、秋風吹くと假にあらはれ、衆生濟度の我ぞとは、知るや否や世の人の、シテ「暗きに行かぬ有明の、地謡「光普き月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我身ひとつはもとの身にして、本覺眞如の身を分け、陰陽の神といはれしも、只業平の

事ぞかし。かやうに申す物語、疑はせ給ふな旅人、遙々來ぬる唐衣、著つゝや舞をかなづらん。

花前に蝶舞ふ―飛野に往す

シテ謡「花前に蝶まふ紛紛たる雪、地謡「柳上に鶯飛ぶ片片たる金、（序ノ舞）シテ謡「植ゑ置きし、昔の宿のかきつばた、地謡「色はかりこそ昔なりけれ、色ばかりこそ昔なりけれ、色はかりこそ。シテ謡「昔男の名を留めて、花橘の匂ひうつる、菖蒲の鬘の、地謡「色はいづれ、似たりや似たり、杜若花菖蒲、梢に鳴くは、シテ謡「蟬の唐衣の、地謡「袖白妙の卯の花の雪の、夜も白々と明くる東雲の、淺紫の杜若の、花も悟りの心開けて、すはや今こそ草木國土、すはや今こそ草木國土、悉皆成佛の、御法を得てこそ失せにけれ。

菖蒲の鬘―五月五日菖蒲を冠に挿すこと

二人靜

梗概　靜御前の亡魂菜摘り女に憑きて昔語をなし、後又亡魂も形を現し、二女共に合舞をなす。地を吉野に取れるは、義經に緣故あればなり。（髻物）

シテ　靜御前　ツレ　菜摘女　ワキ　勝手神職

ワキ詞「是は三吉野勝手の御前に仕へ申す者にて候。扨も當社におき御神事さま〴〵御座候中にも、正月七日は菜摘川より若菜を摘ませ神前に備へ申し候。今日に相當りて候程に、女どもに申付け、菜摘川へ遣はさばやと存じ候。疾う〳〵女どもに菜摘川へ出でよと申し候へ。

ツレ謠「見渡せば、松の葉白き吉野山、幾世つもりし雪ならん。サン深山には松の雪だに消えなくに、都は野邊の若菜摘む、頃にも今やなりぬらん、思ひやるこそゆかしけれ。上歌木の芽春雨降るとても、木の芽春雨降るとても、猶消え難き此野邊の、雪の下なる若菜を

勝手―勝手大明神は愛宕の神を祀る

菜摘川―夏笹川とも書く吉野川の上流

見渡せば―拾遺集の歌末句雪にかもあるらん　深山には―古今集の歌末句若菜摘みけり　木の芽春雨―木の芽張るを春に言掛く

今幾日ありて―古今集に「春日野の飛火の野守出でてみよ今幾日ありて若葉つみてん」春立つと―拾遺集の歌下句山も霞みてけさはみゆちん

ば、今幾日有りて摘まょし。春立つと、云ふばかりにや三吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ道となれ、消えし跡こそ道となれ。

シテ詞「なう〳〵あれなる人に申すべき事の候。ツレ詞「如何なる人にて候ぞ。シテ詞「三吉野へ御歸り候はゞ言傳て申し候はん。ツレ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「三吉野にては社家の人、其外の人々にも言傳て申し候。あまりにわらはが罪業の程悲しく候へば、一日經書いて我が跡弔ひてたび給へと、よく〳〵仰せ候へ。ツレ詞「あら恐ろしの事を仰せ候や。言傳をば申すべし。さりながら御名をば誰と申すべきぞ。シテ詞「まづ〳〵此由仰せ候ひて、もしも疑ふ人あらば、其時わらはおことに憑きて、委しく名をば名乘るべし。謠かまへてよくよく屆け給へと、下歌地謠夕風迷ふあだ雲の、憂き水莖の筆の跡、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ツレ詞「かょる恐ろしき事こそ候はね、急ぎ歸り此由を申さばやと思ひ候。如何に申し候。只今歸りて候。ワキ詞「何とて遲く歸りたるぞ。ツレ詞「不思議なる事の候ひて、遲く歸りて

候。ワキ詞「さていかやうなる事ぞ。ツレ詞「菜摘川の邊にて、何くともなく女の來り候ひて、あまりに罪業の程悲しく候へば、一日經書いて跡弔ひて賜はれと、三吉野の人、取り分け社家の人々に申せとは候ひつれども、眞しからず候程に、申さじとは思へども。なに眞しからずとや　うたてやなさしも賴みしかひもなく　眞しからずとや。唯よそにてこそ三吉野の、花をも雲と思ふべけれ、近く來ぬれば雲と見し、歌櫻は花に顯はるゝ物を、あら恨めしの疑ひやな。

ワキ詞「言語道斷、不思議なる事の候物かな。狂氣して候は如何に。さて如何やうなる人の憑き添ひたるぞ名を名乘り給へ。跡をば懇に弔ひて參らせ候べし。ツレ詞「何をか包み參らせ候ふべき、判官殿に仕へ申せし者なり。ワキ詞「判官殿の御内の人は多き中にも、殊に衣河の御最期まで御供申したりし十郎權頭、ツレ謠「兼房は判官殿の御死骸、心靜かに取納め、腹切り焰に飛んで入り、殊にあはれなりし忠の者。されどもそれにはなきものを。誠は我は女なりしが、此山までは御供申し、こゝにて捨てられ參らせて、絕えぬ思ひの涙

なに眞しからずとやーこれよりシテの位になる
靜が遇きたる體なり
花をも雲と—古今集の序に吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなん覺えける
櫻は花に顯るー賴政の歌に「深山木の其梢とも見えざりし櫻は花に顯れにけり」
心靜にー文靜に思さんに靜御前の名を含む

の袖、地謡「つよましながら我が名をば　靜に申さん恥かしや。ワキ詞「さては靜御前にてましますかや、靜にて渡り候はゞ、隱れなき舞の上手にて有りしかば、舞をまうて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候べし。ツレ詞「我が著し舞の裝束を、勝手の御前に納めしなり。ワキ謡「さて舞の衣裳は何色ぞ。ツレ謡「袴は精好。ワキ謡「水干は、ツレ謡「世を秋の野の花盡し。ワキ詞「是は不思議の事なりとて、寶藏を開き見れば、けにけに疑ふ所もなく、舞の衣裳の候。是を召されて疾く〳〵御舞ひ候へ。靜御前の舞を御舞ひ有るぞ。皆々寄りて御覽候へ。ツレ謡「實に恥かしや我ながら、昔忘れぬ心とて、ワキ謡「さもなつかしく思出の、ツレ謡「時も來にけり、ワキ謡「靜の舞、ツレ一聲謡「今三吉野の河の名の、後シテ謡「菜摘の女と思ふなよ。地謡「川淀近き山陰の、香もなつかしき袂かな。シテ、ツレ謡「さても義經兒徒に準ぜられ、既に討手向ふと聞えしかば、小船に取り乘り、渡邊神崎より押し渡らんとせしに、海路心に任せず難風吹いて、もとの地に著きし事、天命かと思へば科なかりしも、地謡「科有りけるかと、身を怨むるばかりなり。クセさる程

精好―絹の織類
水干―上に著る裝束

川淀近き―萬葉集の歌に「吉野なる夏箕の川の川淀に鴨ぞなくなる山陰にして」

に、次第々々に道せばき、御身となりて此山に、分け入り給ふ頃は春、所は三吉野の花に宿かる下臥も、長閑ならざる夜嵐に、寝もせぬ夢と花も散り、まことに一栄一落、まのあたりなる浮世とて、又此山を落ちて行く。シテツレ謡「昔清見原の天皇、地謡「大友皇子に襲はれて、彼山に踏み迷ひ、雪の木陰を、頼み給ひける櫻木の宮、神の宮瀧西河の瀧、我こそ落ち行け　落ちても波はかへるなり。さるにても三吉野の、頼む木陰の花の雪、雨もたまらぬ奥山の、音さわがしき春の夜の、月は朧にて、猶足引の山深み、分け迷ひ行く有様は、シテツレ謡「唐土の、佐國は花に身を捨てよ、地謡「遊子殘月に行きしも、今身の上に白雪の、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜も靜かならで、騒がしき三吉野の、山風に散る花までも、追手の聲やらんと、跡をのみよし野の、奥深く急ぐ山路かな。地謡「それのみならず憂かりしは、頼朝に召し出だされ、靜は舞の上手なり、とく〳〵と有りしかば、心も解けぬ舞の袖、返す〴〵も恨めしく、昔戀しき時の和歌、シテツレ謡「賤や賤、（序ノ舞）シテツレ謡「賤や賤、賤の苧環繰返し、地謡「昔を今になすよしもがな。シテツレ謡「思ひ

清見原の天皇云云―壬申の亂のこと

唐土の佐國―新撰朗詠集に大江佐國の花を愛する詩あり唐土のとあるは誤し　遊子殘月に行きしも―齊の孟嘗君が函谷關を越えし故事　今身の上に白雪の―身の上に知ちるゝ意を含む　踏花同惜少年春―白樂天の詩句

かへせばいにしへも、地謡「思ひかへせばいにしへも、戀しくもなし憂き事の、今も恨みの衣川、身こそは沈め名をば沈めぬ、シテ・ツレ謡「武士の、地謡「物毎に浮世の習ひなればと思ふばかりぞ山櫻、雪に吹きなす花の松風、靜が跡を弔ひ給へ。靜が跡を弔ひ給へ。

安達原

梗概

旅僧行脚の砌、奥州安達が原の黒塚なる鬼女の家に泊り合せ、女の禁を犯して閨の内を覗ひしかば、女怒りて鬼形を顯し、遂ひ來りしを、法力を以て調伏する事を作ろ。前半女の悲しき述懐あり。後半一轉して物凄き光景を演出す。もと拾遺集の「陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりときくは誠か」の歌を以て根本資料とせり。（五番目）

シテ　鬼女（前は嫗）　ワキ　東光坊祐慶

ツレ　同行山伏

ワキ三人「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。ワキ、ツレ「是は那智の東光坊の阿闍梨、祐慶とは我事なり。ワキ、ツレ「夫れ捨身抖擻の行體は、山伏修行の便なり。ワキ「熊野の順禮廻國は、皆釋門の習ひなり。ツレ三人「然るに祐慶此間、心に立つる願あつて、廻國行脚に赴かんと、上歌我が本山を立ち出でて、我が本山を立ち出でて、分行く末は紀の路潟、鹽崎の浦をさし過ぎて、錦の濱のをり〳〵は、なほしをりゆ

那智の東光坊―熊野の内　阿闍梨―師匠の義この格式の我國に置かれしは　清和若しくは文徳の朝といふ　捨身抖擻―出家のこと　鹽崎の浪―紀伊　牟婁郡　錦の濱―同

わび人―住み煩へる人

く旅衣、日も重れば程もなく、名にのみ聞きし陸奥の、安達が原に著きにけり。安達が原に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に是ははや陸奥の安達が原に著きて候。あら笑止や日の暮れて候。此あたりには人里もなく候。あれに火の光の見え候程に、立ちより宿を借らばやと存じ候。

シテ、ザシ謡「實にわび人のならひ程、悲しきものはよもあらじ。かよるうき世に秋の來て、朝けの風は身にしめども、胸を休むる事もなく、昨日も空しく暮れぬれば、まどろむ夜半ぞ命なる。あら定めなの生涯やな。

ワキ詞「如何に此屋の内へ案内申し候。シテ詞「そも如何なる人ぞ。ワキ三人謡「如何にや主聞き給へ。我等始めて陸奥の、安達が原に行き暮れて、宿を借るべき便もなし。願はくは我等を憐みて、一夜の宿をかし給へ。シテ謡「人里遠きこの野邊の、松風はげしく吹きあれて、月影たまらぬ閨の内には、いかでか留め申すべき。ワキ謡「よしや旅寐の草枕、今宵ばかりの假寐せん。たゞ〳〵宿をかし給へ。シテ謡「我だにも憂き此庵に、ワキ謡「たゞ泊らん

と柴の戸を、シテ謡「さすが思へば痛はしさに、上歌地謡「さらばとどまり給へとて、樞を開き立ち出づる。異草も交じる茅筵、うたてや今宵敷きなまし。強ひても宿を狩衣、片敷く袖の露深き、草の庵のせはしなき、旅寐の床ぞ物憂き、旅寐の床ぞ物憂き。ワキ詞「今宵の御宿かへすぐ〳〵も有の難うこそ候へ。又あれなる物は見馴れ申さぬ物にて候。是は何と申したる物にて候ぞ。シテ詞「さん候、是は枠拵輪とて、いやしき賤の女のいとなむ業にて候。ワキ詞「あらおもしろや。さらば夜もすがら營うで御見せ候へ。シテ謡「實に愧かしや旅人の、見る目も恥ぢずいつとなき、賤が業こそ物憂けれ。ワキ謡「今宵とどまる此宿の、主の情深き夜の、シテ謡「月もさし入る、ワキ謡「閨の内に、次第地謡「眞赭の糸を繰返し、眞赭の糸を繰返し、昔を今になさばや。シテ謡「賤が績麻の夜までも、地謡「世わたる業こそ物憂けれ。シテ謡「あさましや人界に生を受けながら、かよる憂き世に明け暮らし、身を苦しむる悲しさよ。ワキ、ツレ謡「はかなの人の言の葉や。まづ生身を助けてこそ、佛身を願ふ便もあれ。地謡「かよる憂き世にながらへて、明暮ひまなき身なりとも、心だに誠

せはしなき―狭きこと

枠拵輪―絲繰道具

眞赭の糸―麻糸のこと。赭を含めたり。後頼の歌に花薄まそほの糸をくりかけてなどあり。昔を今に繰返しとあるより續けて歌詞を用ひたり。

生身を助けてこそ―生活の道を得てこそ

の道にかなひなば、祈らずとても終になど、佛果の緣とならざらん。ワキ只是れ地水火風の、假にしばらくも纏はりて、生死に輪回し、五道六道にめぐる事、只一心の迷ひなり。凡そ人間の、あだなる事を案ずるに、人更に若き事なし、終には老となる物を、かほどはかなき夢の世を、などや厭はざる我ながら、あだなる心こそ怨みてもかひなかりけれ。ロンギ扨そも五條あたりにて、夕顔の宿を尋ねしは、シテ謠日蔭の糸の冠著し、それは名高き人やらん。地謠加茂の御生れにかざりしは、シテ謠糸毛の車とこそ聞け。地謠糸櫻、色もさかりに咲く頃は、シテ謠くる人多き春の暮、地謠穗に出づる秋の糸薄、シテ謠月に夜をや待ちぬらん。地謠今はた賤が繰る糸の、シテ謠長き命のつれなさを、地謠長き命のつれなさを、思ひ明石の浦千鳥、音をのみひとりなき明かす　音をのみひとりなき明かす。

シテ詞如何に客僧達に申し候。ワキ詞承り候。シテ詞あまりに夜寒に候程に、上の山に上り木を取りて、焚火をしてあて申さうずるにて候、暫く御待ち候へ。ワキ詞御志ありが

佛果―成佛
地水火風―四大といふ佛說にては之を人體の原質とす
あだなる事―無常。

扨ても―以下絲に關する故事引句を列ねたり
五條あたり―源氏物語夕顔の故事
賀茂の御生れ―四月中の酉の日に行はるゝ葵祭

閨の内ばしレ―ばしはをばの意

たうこそ候へ。さらば待ち申さうずるにて候。やがて御歸り候へ。シテ詞「さらばやがて歸り候べし。や、如何に申し候、妾が歸らんまで此閨の内ばし御覽じ候な。ワキ詞「心得申し候。見申す事は有るまじく候。御心安く思召され候へ、シテ詞「あらうれしや候。かまへて御覽じ候な。此方の客僧も御覽じ候な。ワキ、ツレ詞「心得申し候。（中入）

膿血―以下物凄き訣を寫せり

ワキ謠「ふしぎや主の閨の内を、物の隙よりよく見れば、膿血忽ち融滌し、臭穢は滿ちて膨脹し、膚膩ことぐく爛壞せり。人の死骸は數しらず、軒と竝しく積み置きたり。如何さま是は音に聞く、安達が原の黒塚に、籠れる鬼の住所なり。ツレ謠「恐ろしやかょる憂き目をみちのくの、安達が原の黒塚に、鬼こもれりと詠じけん、歌の心もかくやらんと、ワキ、ツレ二人上歌謠「心も惑ひ肝を消し、心も惑ひ肝を消し、行くべき方は知らねども、足に任せて逃げて行く。足に任せて逃げて行く。

あさましになされ―禁を犯して見顯はされし意

後シテ謠「如何にあれなる客僧、詞とまれとこそ。さしもかくしょ閨の内を、あさましになされ參らせし、恨申しに來りたり。謠胸を焦がす炎、咸陽宮の煙紛紛たり。地謠「野風山風

吹き落ちて、シテ謡「鳴神稲妻天地に満ちて、地謡「空かき曇る雨の夜の、シテ謡「鬼一口に食はんとて、地謡「歩みよる足音、シテ謡「振り上ぐる鐵杖の勢、地謡「あたりを拂つて恐ろしや。ワキ謡「東方に降三世明王、ツレ謡「南方に軍荼利夜叉明王、ワキ謡「西方に大威徳明王、ツレ謡「北方に金剛夜叉明王、ワキ謡「中央に大日大聖不動明王、二人謡「唵呼嚕呼嚕旋荼利摩登枳、唵阿毘羅吽欠娑婆呵、吽多羅吒干翰、地謡「見我身者發菩提心、見我身者發菩提心、聞我名者斷惡修善、聽我說者得大智恵、知我身者卽身成佛、卽身成佛と、明王の縛にかけて、責めかけ〳〵祈り伏せにけり。さて懲りよ、シテ謡「今まではさしも實に、地謡「今まではさしも實に、怒りをなしつる鬼女なるが、忽ちに弱りはてゝ天地に身をつゞめ、眼くらみて足もとは、よろ〳〵とたゞよひめぐる、安達が原の黒塚に、隱れ住みしもあさましになりぬ。あさましや愧づかしの我姿やと、云ふ聲はなほ物冷ましく、云ふ聲はなほ冷ましき、夜嵐の音に、立ちまぎれ失せにけり。夜嵐の音に失せにけり。

内十　賀茂

梗概　賀茂明神の縁起を説き、神徳を謳歌せる神事能なり。丹塗矢の神話は釋日本紀所引山城風土記にあり。謡曲拾葉抄所引秦氏本系帳亦参照すべし。（脇能）

シテ　別雷神（前は里女）　シテツレ　天女（前は里女）
ワキ　神職　ワキツレ　神職

賀茂の宮居―上賀茂には別雷神、下賀茂には別雷神の御母玉依姫と丹塗矢とを祀る。

山陰の―社地の山を指す。神山、日影山などの名あり。

ワキ次第「清き水上尋ねてや、清き水上尋ねてや、賀茂の宮居に参らん。ワキ詞「抑是は播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の賀茂と、當社室の明神とは御一體にて御座候へども、いまだ参詣申さず候程に、此度思立ち都の賀茂へと急ぎ候。道行「ワキ三人「播磨潟、室の樞の曙に、室の樞の曙に、立つ旅衣色染むる、飾磨の徒路行く舟も、上る雲非や久堅の、月の都の山陰の、賀茂の宮居に著きにけり。賀茂の宮居に著きにけり。

シテ、ツレ「一聲」謡「御手洗や、清き心に澄む水の、賀茂の河原に出づるなり。ツレ謡「直に頼まば人の世も、シテ、ツレ謡「神ぞ糺の道ならん。シテ、サシ謡「半ゆく空水無月の影更て、秋程もなき御祓川、シテ、ツレ謡「風も涼しき夕波に、心も澄める水桶の、もちがほならぬ身にしあれど、命の程は千早振、神に歩を運ぶ身の、宮居曇らぬ心かな。下歌頼む誓は此神によるべの水を汲まうよ。上歌御手洗の、聲も涼しき夏陰や、聲も涼しき夏陰や、糺の杜の梢より、初音ふり行く時鳥、なほ過ぎがてに行きやらで　今一通り村雨の、雲もかけろふ夕づく日、夏なき水の河隈、汲まずとも陰は疎からじ、汲まずとも陰は疎からじ。ワキ詞「如何に是なる水汲む女性に尋ね申すべき事の候。シテ詞「是は此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり、何處よりの御參詣にて候ぞ。ワキ「實によく御覽じ候物かな。是は播州室の明神の神職の者にて候が、始めて當社に參りて候。先々是なる河邊を見れば、新しく壇を築き、白木綿に白羽の矢を立て、剩へ渇仰の氣色見えたり。こはそも何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「さては室の明神よりの御參詣にて候ぞや。また是なる御矢は、當社

糺―下賀茂の地
もちがほ―滿足の意
よるべの水―神社に備ふる瓶の水
御手洗の聲も涼しき―治遊愚草に「聞く毎に頼む心ぞ澤みまさる鴨の社の御手洗の聲」
白木綿―御幣

あざ〳〵しく―鮮かれの意
秦氏女―玉依姫の事
白羽の矢―丹塗矢のこと
賀茂三所―祭神三柱なればなり
弓箸―文武の道

の御神體とも、御神物とも、只此御矢の御事なり。謡あからさまなる御事なりとも、渇仰申させ給ひ候へ。ワキ謡實に有難き御事かな。さて〳〵當社の神祕に於て、さま〴〵有るべき其内に、詞分きて此矢の御謂、委しく語り給ふべし。シテ詞「總じて神の御事を、あざあざしくは申さねども、あら〳〵一義を顯すべし。むかし此賀茂の里に、秦氏女と云ひし人、朝な夕な此河邊に出でて水を汲み神に手向けけるに、ある時河上より白羽の矢一つ流れ來り、此水桶にとまりしを、取りて歸り庵の軒に挿す。主思はず懐胎し男子を生めり。此子三歳と申しょ時、人々圓居して父はと問へば、此矢をさして向ひしに、此矢卽ち鳴る雷となり、天に上り神となる。別雷の神是なり。ツレ謡其母御子も神となりて、賀茂三所の神所とかや。シテ謡「さやうに申せば憚りの、誠の神祕は愚なる、シテ、ツレ謡「身に辨へは如何にとも、いさ白眞弓彌猛の人の、治めん御代を告げ白羽の、八百萬代の末までも、弓箸に殘す心なり。ワキ謡「よく〳〵聞けば有難や。さて〳〵其矢は上る代の、今末の代にあたらぬ矢までも、詞御神體なる謂は如何に、シテ詞「實によく不審し給へども、

隔てはあらじ何事も、ワキ謡「心からにて澄むも濁るも、シテ謡「同じ流れのさまざまに、ワキ謡「鴨の河瀬も變はる名の、シテ謡「下は白河、ワキ謡「上は鴨河、シテ謡「又其内にも、ワキ謡「變はる名の、上歌地謡「石川や、瀬見の小河の清ければ、瀬見の小河の清ければ、月も流れを尋ねてぞ、澄むも濁るも同じ江の、淺からぬ心もて、何疑ひの有るべき。年の矢の、早くも過ぐる光陰、惜しみても歸らぬはもとの水、流れはよも盡きじ。絕えせぬぞ手向なりける。下歌いざ〳〵水を汲まうよ、いざ〳〵水を汲まうよ。

ロンギ地謡「汲むや心もいさぎよき、鴨の河瀬の水上は、如何なる所なるらん。シテ謡「何處と　か、岩根松が根凌ぎ來る、瀧つ流は白玉の、音ある水や貴船川、地謡「水も無く見えし大井　河、それは紅葉の雨と降る、シテ謡「嵐の底の戸無瀬なる、波も名にや流るらん。地謡「清瀧川の水汲まば、高嶺の深雪解けぬべき、シテ謡「朝日待ち居て汲まうよ。地謡「汲まぬ音羽の瀧浪は、シテ謡「受けて頭の雪とのみ、地謡「戴く桶も、シテ謡「身の上と、地謡「誰も知れ老いらくの、暮るゝも同じ程なさ、今日の日も夢の現ぞと、うつろふ影は有りながら、濁

石川や瀬見の小河の清ければ　月も流れを尋ねてぞ澄む　新古今集鴨長明の歌　石川や瀬見の小河は鴨川のこと

水も無く見えし大井河　後拾遺集「水もなく見えこそ渡れ大井川　紅葉は雨とふれども　清瀧川新古今集西行の歌　「ふりつみし高嶺のみゆきとけにけり清瀧川の水の白波」　老いらく　老いの事

むナぶの神―萬物育生の神、後世夫婦の縁を司る神の意とす

影向微妙の相好荘厳―神體示現の姿美しく厳かなること

りなくぞ水むすぶの神の慮汲まうよ、神の御慮汲まうよ。

ワキ詞「實に有難き御事かな。かやうに委しく語り給ふ、御身は如何なる人やらん。シテ詞「誰とは今は愚なり。謡 汝知らずや神慮に趣き、迎へ給はゞ君を守りの、此神德を告げ知らしめんと、現れ出でて、地謡「恥かしや我が姿 恥かしや我が姿の、眞を現さばあさましやな、あさましやなりなん、よし名ばかりは白眞弓の やごとなき神ぞかしと、木綿四手に立ち紛れて、神隱れになりにけりや。神隱れになりにけり。（中入）

天女謡「あら有難の折からやな。我此宮居に地を占めて、法界無緣の衆生をだに、一子と思し見そなはす 御祖の神德仰ぐべしやな。曇らぬ御代を守るなり。地謡「守るべし守るべしやなや、君の恵も今此時、天女謡「時至るなり時至る、地謡「感應あれば影向微妙の、相好荘厳まのあたりに、有難や。上歌地謡「賀茂の山竝御手洗の影、賀茂の山竝御手洗の影映り映ろふ緑の袖を、水に浸して涼みとる、涼みとる。裳裾をうるほす折からに、山河草木動搖して、まのあたりなる別雷の、神體來現し給へり。

風雨隨時ー五風十雨宜しきにかなふこと

後シテ謡「我は是れ、王城を守る君臣の道、別雷の神なり。地謡「或は諸天善神となつて、虚空に飛行し、シテ謡「又は國土を垂跡の方便、地謡「和光同塵結縁の姿　あら有難の御事やな。（舞）シテ謡「風雨隨時の御空の雲居、地謡「風雨隨時の御空の雲居、シテ謡「別雷の雲霧を穿ち、地謡「光稻妻の稻葉の露にも、シテ謡「宿る程だに鳴雷の、地謡「雨を起して降りくる足音は、シテ謡「ほろ〳〵、地謡「ほろ〳〵、とどろ〳〵と踏みとどろかす、鳴神の鼓の、時も至れば五穀成就も國土を守護し、治まる時には此神德と、威光を顯しおはしまして、御祖の神は糺の森に、飛び去り〳〵入らせ給へば、猶立ち添ふや雲霧を、別雷の、神も天路に攀ぢ昇り、神も天路に攀ぢ昇つて　虚空に上らせ給ひけり。

俊寛

梗概

俊寛成經康頼の三人、平家を覆さんとして、事顯れ共に鬼界が島に遠流のうきめを見たり。然るに年經て成經、康頼の二人は赦免せられ、俊寛一人のみ取殘されぬ。俊寛の愁歎思ひやるべし。此曲は平家物語によりて、其狀を脚色す。

（四番目）

シテ　僧都俊寛　　ツレ　平判官康頼　　ツレ　丹波少將成經

ワキ　赦免使

ワキ詞「是は相國に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波少將成經、平判官康頼二人赦免の御使をば、某承つて候間、只今鬼界が島へと急ぎ候。

ツレ次第「神を硫黄が島なれば、神を硫黄が島なれば、願ひも三つの山ならん。サシこれは九州薩摩潟、鬼界が島の流人の内、成經「丹波少將成經、康頼「平判官入道康頼、康頼「二

相國―太政大臣清盛をさす　中宮―高倉天皇の后建禮門院　御産―安徳天皇御誕生あるべき祈の事　神を硫黄が島―神を硫黄ふと言掛く　三つの山―熊野三山

人が果にて候なり。われら都にありし時、熊野参詣三十三度の、歩みをなさんと立願せしに、其半にも數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も空しく早なりぬ。せめての事の餘りにや、此島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の、九十九處の王子まで、下歌ことごとく順禮の、神路に幣を捧げつゝ、上歌こゝとても、同じ宮居と三熊野の、同じ宮居と三熊野の、浦の濱木綿一重なる、麻衣のしをるゝを、只其儘の白衣にて、眞砂を取りて散米に、白木綿花の御祓して　神に歩みを運ぶなり。神に歩みを運ぶなり。シテ一聲謡後の世を、待たで鬼界が島守と、地謡なる身の果の闇きより、シテ謡闇き道にぞ入りにける。サン　玉兎曹眠る雪母の地、金鷄夜宿す不萌の枝。寒蟬枯木を抱きて、鳴き盡して首を回さず。俊寛が身の上に知られて候。康頼謡あれなるは俊寛にてわたり候か。是までは何の爲の御出にて候ぞ。シテ謡早くも御覽じ咎めたり。道迎のその爲に、酒を持ちて參りて候。康頼謡そも一酒とは竹葉の、此島にあるべきかと立ち寄り見れば、や、是は水なり。シテ謡是は仰せにて候へども、それ酒と申す事は、もと是藥の水なれば、醴

浦の濱木綿―濱おもとと稱ふる草

玉兎曹眠雪母地、金雞夜宿不萌枝―祁師顯に出づといふ寒蟬抱枯木鳴盡不回首―梅花無盡藏の詩句

醴酒―淳酒也酒を地にまくこと

重陽―九月九日
彭祖―菊を服して齢七百歳に至る
濡れて干す―古今集の歌下句いつか千年を我はへにけん
喜見城―帝釋天の居所
流るゝも又涙川―古今集に「涙川なに水上を尋ねけん物思ふ時の我身なりけり」

酒にてなど無かるべき。康頼「成經も」げに〳〵是は理なり。頃は長月、シテ「時は重陽、康頭「成經も」所は山路、シテ「谷水の、シテ「康頼」彭祖が七百歳を經しも、心を汲み得し深谷の水。上歌地謡」飲むからに、げにも薬と菊水の、げにも薬と菊水の、心の底も白衣の、濡て干す、山路の菊の露のまに、我も千年をふる心地する。配所はさてもいつまでぞ、春すぎ夏たけて又、秋暮れ冬の來るをも、草木の色ぞ知らするや、あら戀しの昔や。思ひでは何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺、たど喜見城の春の花、今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや、落つる木の葉の盃、のむ酒は谷水の、流るゝも又涙川、水上は我なるものを、物思ふ時しもは、今こそ限なりけれ。

ワキ一聲「早船の、心に適ふ追風にて、舟子やいとど勇むらん。詞いかに此島に流され人の御座候か。都より赦免狀を持ちて參りて候。急いで御拜見候へ。シテ詞「あら有難や候。やがて康頼御覽候へ。康頼詞「何々中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行はるゝにより、國國の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波少將成經、平判官入道康頼、二人

赦免ある所也。シテ詞「何とて俊寛をば讀み落し給ふぞ。康頼詞「御名はあらばこそ、赦免の狀の面を御覽候へ。シテ詞「さては筆者の誤か。ワキ詞「いや某都にて承り候も、康頼成經二人は御供申せ、俊寛一人をば此島に殘し申せとの御事にて候。

シテ謡「こはいかに罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓の網に漏れて、沈み果てなん事は如何に。クドキ此ほどは三人一處に有りつるだに、さもおそろしく冷ましき、荒磯島にただ一人、離れて海士の捨草の、波の藻屑のよるべもなくて、あられんものか淺ましや。歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりなる有樣かな。クセ地謡「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。もとよりも此島は、鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所にて、今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと、此哀などか知らざらん。天地を動かし、鬼神も感をなすなるも、人のあはれなるものを、此島の鳥獸も、鳴くは我を弔ふやらん。シテ謡「せめて思ひの餘りにや、地謡「さきに讀みたる卷物を、又引き開き同じあとを、繰り返し繰り返し、見れども見れども唯、成經康頼

誓の網―佛の助
渚の千鳥―渚に舞きを掛く
感じ花瀾涙恨―別鳥驚心―杜子美の詩句

と、書きたる其名ばかりなり。もしも禮紙にやあるらんと、巻きかへして見れども、僧都とも俊寛とも、書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば、さめよ〳〵と現無き、俊寛が有様を見るこそ哀なりけれ。

ワキ謡「時刻うつりて叶ふまじ、成経康頼二人は早、御船に召され候へとよ。成經康頼謡「かくてあるべき事ならねば、よその歎きをふりすてよ　二人は船に乗らんとす。シテ詞「僧都も船に乗らんとて、康頼の袂にとりつけば、ワキ謡「僧都は船に叶ふまじと、さも荒けなく言ひければ、シテ詞「うたてやな公の私といふ事のあれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乗せて給び給へ。ワキ謡「情も知らぬ舟子とも、櫓櫂をふりあげ打たんとす。シテ謡「さすが命の悲しさに、又立ち歸り出船の。胴「纜に取りつき引きとむる。ワキ詞「舟人ともづな押し切つて、船を深みに押し出だす。シテ謡「せん方波にゆられながら　たど手を合はせて船よなう、ワキ謡「船よといへど乗せざれば、シテ謡「力及ばず俊寛は　地謡「もとの渚にひれふして、松浦佐用姫も、我身にはよも增さじと、聲も惜まず泣き居たり。

禮紙―書狀の上包　よその歎き―俊寛の愁歎をさす　向ひの地―九州をいふ

ワキ、成經謡「痛はしの御事や。我等都に上りなば、よき樣に申し直しつよ　やがて歸洛はあるべし。御心強く待ち給へ。シテ謡「歸洛を待てよとの、呼ばはる聲も幽なる、賴みを松蔭に、音を泣きさして聞きゐたり。ワキ、成經謡「聞くやいかにと夕波の、みな聲々に俊寬を、シテ謡「申し直さば程もなく、ワキ、成經謡「必ず歸洛あるべしや。シテ謡「これは眞か。ワキ、成經謡「なかなかに、シテ謡「賴むぞよたのもしくて、地謡「待てよ待てよといふ聲も、姿も次第に遠ざかる沖つ波の、幽なる聲絶えて、船影も人影も、消えて見えずなりにけり、あと消えて見えずなりにけり。

松風

梗概

在原行平は阿保親王の子にして、業平の兄なり。曾て須磨にさすらひしをりから、姉妹の海士少女を寵せし事ありと傳ふ。此曲は姉妹の幽靈あらはれて昔物語をなし、旅僧の回向を受くる事を作る。松風村雨の名は諸曲作者の設けしものならん。此曲文趣頗る優麗なるは、源氏物語須磨の巻に負ふ所多し。（鷺物）

シテ松風　ツレ村雨　ワキ僧

ワキ詞「これは諸國一見の僧にて候。我いまだ西國を見ず候程に、此度思ひ立ち西國行脚と志して候。あら嬉しや、急ぎ候程に、是ははや津の國須磨の浦とかや申し候。又是なる磯邊を見れば、樣ありげなる松の候。如何さま謂のなき事は候まじ、此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。狂言シカ〳〵。謡さては此松は、いにしへ松風村雨とて、二人の海士の舊跡かや。痛はしや其身は土中に埋もれぬれども、名は殘る世のしるしとて、變らぬ色の松

シカ〳〵―里人より松のいはれを聞く事あり　其身は土中に云云―白樂天の墓門原上土埋骨不埋名の意　緑の秋―秋になりても尚緑色なること

一木、緑の秋を残す事のあはれさよ。詞かやうに經念佛して弔ひ候へば、實に秋の日のならひとて程なう暮れて候。あの山本の里までは程遠く候程に、是なる海士の鹽屋に立ち寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。

シテ、ツレ一聲謡汐汲車わづかなる、うき世に廻るはかなさよ。ツレ謡波こゝもとや須磨の浦、月さへぬらす袂かな。シテ、サシ謡心づくしの秋風に、海はすこし遠けれども、彼の行平の中納言、關吹き越ゆるとながめ給ふ、浦わの波の夜々は、實に音近き海士の家、里離れなる通路の、月より外は友もなし。シテ謡實にや浮世の業ながら、殊につたなき海士小舟の、シテ、ツレ謡渡りかねたる夢の世に、住むとや云はんうたかたの、汐汲車よるべなき、身は海士人の袖ともに、思を乾さぬ心かな。地謡かくばかり經がたく見ゆる世の中に、うらやましくも澄む月の、出汐をいざや汲まうよ。出汐をいざや汲まうよ。上歌影はづかしき我姿、影はづかしき我姿、忍び車を引く汐の、跡に殘れる溜水、いつまですみは果つべき。野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに、是は磯邊に寄藻かく、海士の捨草

波こゝもとやー源氏物語須磨の巻に波たゝこゝもとに立ちくる心地しての句による

心づくしの秋風ー以下須磨の巻に「心づくしの秋風に海は少し遠けれど行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波よる〳〵はげにいと近く聞えて」云々の句に據る

關吹き越ゆるー「旅人の袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」かくばかり云々ー拾遺集の歌末句遣める月かな月の出汐ー月の出と共にさしくる汐

いたづらに、朽ち増り行く袂かな。朽ち増り行く袂かな。シテ、ツレ「面白や馴れても須磨の夕ま暮、海士の呼聲幽にて、シテ、ツレ「沖にちひさき漁舟の、影幽なる月の顔、雁の姿や友千鳥、野分汐風いづれも實に、かよる所の秋なりけり。あら心すごの夜すがらやな。シテ「いざ〳〵汐を汲まんとて、汀に滿干の汐衣の、ツレ「袖を結んで肩に掛け、シテ「汐汲む爲とは思へども、ツレ「よしそれとても、シテ「女車、上歌地謡「寄せては歸る潟をなみ　寄せては歸る潟をなみ、蘆邊の田鶴こそは立さわけ、四方の嵐も音添へて、夜寒何と過さん。更け行く月こそさやかなれ。汲むは影なれや。燒く鹽煙心せよ。さのみなど海士人の、憂き秋のみを過さん。松島や小島の海士の月にだに、影を汲むこそ心あれ。影を汲むこそ心あれ。ロンギ地謡「運ぶは遠き陸奥の、其名や千賀の鹽竈、シテ「賤が鹽木を運びしは、阿漕が浦に引く汐、地謡「其伊勢の、海の一見の浦、二度世にも出でばや。シテ「松の村立霞む日に、汐路や遠く鳴海潟、地謡「それは鳴海潟、こよは鳴尾の松蔭に、月こそさはれ蘆の屋、シテ「灘の汐汲む憂き身ぞと、人にや誰も黄楊の櫛、地謡「さしくる汐を汲

潟をなみ―赤人の歌に「和歌の浦に潮滿ちくれば潟を無み芦邊をさして鶴鳴き渡る」

松島や―新古今集に「松島や小島の海士の秋の袖月は物思ふ習ひのみかは」

蘆の屋―伊勢物語に「芦の屋の灘の汐焼いとまなみつげの小櫛もさゝず來にけり」さしくるは櫛をさすより汐のさすに言掛く

み分けて、見れば月こそ桶にあれ。シテ謡「是にも月の入りたるや、地謡「うれしや是も月あり。シテ謡「月は一つ、地謡「影は二つ満つ汐の、夜の車に月を載せて、憂しともおもはぬ汐路かなや。

ワキ詞「鹽屋の主の歸りて候。宿を借らばやと思ひ候。如何に是なる鹽屋の内へ案内申し候。ツレ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ詞「暫く御待ち候へ、主に其由申し候べし。如何に申し候、旅人の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候。シテ詞「餘りに見苦しき鹽屋にて候程に、御宿は叶ふまじきと申し候へ。ツレ詞「主に其由申して候へば、鹽屋の内見若しく候程に、御宿は叶ふまじき由仰せ候。ワキ詞「いやく見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば、平に一夜を明かさせて給はり候へと重ねて御申し候へ。ツレ詞「いや叶ひ候まじ。シテ詞「暫く。鹽月の夜影に見奉れば世を捨人、よしくかゝる海士の家、松の木柱に竹の垣、夜寒さこそと思へども、蘆火にあたりて、御泊りあれと申し候へ。ツレ詞「此方へ御入り候へ。ワキ詞「あらうれしやさ

松の木柱云々―是も須磨の巻の詞によれり

らばかう參らうずるにて候。

シテ詞「始めより御宿參らせたくは候ひつれども、餘りに見苦しく候程に、さて否と申して候。ワキ詞「御志有難う候。出家と申し旅といひ、泊りはつべき身ならねば、何くを宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人は、わざともわびてこそ住むべけれ。謠わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、詞藻鹽たれつゝわぶと答へよと、行平も詠じ給ひしとなり。又あの磯邊に一木の松の候を、人に尋ねて候へば、松風村雨二人の海士の舊跡とかや申し候程に、逆縁ながら弔ひてこそ通り候ひつれ。あら不思議や、松風村雨の事を申して候へば、二人共に御愁傷候。是は何と申したる事にて候ぞ。シテ、ツレ謠「實にや思ひ内にあれば、色外に顯れさむらふぞや。わくらには問ふ人あらばの御物語、餘りになつかしう候ひて、猶執心の闇浮の涙、再び袖をぬらしさむらふ。ワキ詞「なほ執心の闇浮の涙とは、今は此世に亡き人の詞なり。又わくらはの歌もなつかしいなどと、承り候。かたゞ〳〵不審に候へば、二人ともに名を御名のり候へ。シテ、ツレ謠「恥かしや申さんとすればわくら

わくらはに―かまさかに

はに、言問ふ人もなき跡の、世にしほじみてこりずまの、恨めしかりける心かな。クドキ此上は何をかさのみ包むべき。是は過ぎつる夕暮に、あの松陰の苔の下、亡き跡とはれ参らせつる、松風村雨二人の女の、幽靈是まで來りたり。さても行平三年が程、御つれ〳〵の御船遊び、月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海士少女に、おとゞひ選ばれ参らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ須磨の海士の、シテ謡「鹽焼衣色替へて、シテ、ツレ謡「緑の衣の空焼なり。シテ謡「かくて三年も過ぎ行けば、行平都に上りたまひ、ツレ謡「幾程なくて世を早う、去り給ひぬと聞きしより、シテ謡「あら戀しやさるにても、又いつの世の音信を、地謡「松風も村雨も、袖のみ濡れてよしなやな。身にも及ばぬ戀をさへ、須磨の餘りに罪深し。跡弔ひて給び給へ。

上歌地謡「戀草の露も思ひも亂れつゝ、露も思ひも亂れつゝ、心狂氣に馴衣の、巳の日の祓や木綿四手の、神の助けも波の上、あはれに消えし憂き身なり。クセあはれ古へを、思ひ出づればなつかしや。行平の中納言　三年はこゝに須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程

月にも馴るゝ―新後撰集に「汐風の波間衣秋をへて月になれたる須磨の海士人」
綫―堅織の約薄き絹布

の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、是を見る度に、彌增の思草、葉末に結ぶ露の間も、忘らればこそあぢきなや。形見こそ、今はあだなれ是なくは、忘るゝ隙も有りなんと、詠みしも理や、なほ思ひこそは深けれ。シテ謠「宵々に、ぬぎて我寢る狩衣、地謠「かけてぞ頼む同じ世に、住むかひあらばこそ、忘形見もよしなしと、捨てゝも置かれず、取れば面影に立ち增り、起臥わかで枕より、跡より戀の責め來れば、せんかた涙に、伏し沈む事ぞ悲しき。

シテ謠「三瀬河、絕えぬ涙の憂き瀨にも、亂るゝ戀の淵はありけり。あらうれしやあれに行平の御立有るが松風と召されさむらふぞや。いで參らう。ツレ謠「あさましや其御心故にこそ。執心の罪にも沈み給へ。婆婆にての妄執をなほ、忘れ給はぬぞや。あれは松にてこそ候へ。行平は御入もさむらはぬものを。シテ謠「うたての人の言事や。あの松こそは行平よ。謠たとひ暫しは別るゝとも、松とし聞かば歸りこんと、連ね給ひし言の葉は如何に。ツレ謠「實になう忘れてさむらふぞや。たとひ暫しは別るゝとも、待たば來んとの言の葉を、

形見こそ―伊勢物語の歌を引く
宵々に―古今集の歌下句かけて思はぬ時の間もなし
枕より―古今集の歌下句せん方なみぞ床中に居る
あらうれしやー狂亂の態

シテ謡「こなたは忘れず松風の、立ち歸りこん御音信、ツレ謡「終にも聞かば村雨の、袖しぼしこそぬるゝとも、シテ謡「まつに變らで歸りこば、ツレ謡「あら賴もしの、シテ謡「御歌や。

地謡「立ち別れ、（中舞）シテ謡「いなばの山の峰に生ふる、松しと聞かば今歸りこん。それは稻葉の遠山松、地謡「是はなつかし君ごよに、須磨の浦わの松の行平、立ち歸りこば我も木陰に、いざ立ち寄りて磯馴松の、なつかしや。松に吹き來る風も狂じて、須磨の高波はげしき夜すがら、妄執の夢に見みゆるなり。我跡弔ひて給び給へ。暇申して歸る波の音の、須磨の浦かけて、吹くや後の山おろし、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん、松風ばかりや殘るらん。

立ち別れ―行平の歌古今集に出づ

西行櫻

梗概　西行上人、京都の四山の草庵に在りし頃、櫻の精現れ、西行の「あたら櫻のとがにぞありける」の歌につきて問答せし物語を作る。九重の都の花景色を謡へる所精彩あり。（四番目）

シテ　櫻の精　ワキ　西行上人
ツレ　花見の人々　狂言　寺男

ツレ立衆「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩、山路の春に急がん。ツレ謡」かやうに候ふ者は、下京邊に住居仕る者にて候。さてもわれ春になり候へば、こゝかしこの花をながめ、さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主の櫻を一見仕りて候。今日は又西山西行の庵室の花、盛なるよし承りおよび候程に、花見の人々を伴ひ、只今西山西行の庵室へと急ぎ候。ツレ道行謡「百千鳥、囀る春は物毎に、囀る春は物毎に、あらたまりゆく日數經て、頃も彌生の空なれや、やよ留りて花の友、知るも知らぬも諸共に、誰も花な

地主―地主櫻現在ことは清水寺
百千鳥―古今集の歌下句取られども我ぞふりゆく

上求本來―上は御土に向ひて本來の菩提成佛を求むること
下化冥暗―下は人間に對して冥暗なる衆生を敎化すること
行く水に―朗詠集に「池冷水無三伏夏、松高風有二一聲秋一」

る心かな。誰も花なる心かな。

ツレ詞「急ぎ候程に、是ははや西行の庵室に著きて候。暫く皆々御待ち候へ。某案内を申さうずるにて候。如何に案内申し候。狂言詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「さん候是は都方の者にて候が、此御庵室の花、盛なる由承り及び、遙々是まで參りて候。そと御見せ候へ。狂言詞「易き間の御事にて候へども、禁制にて候さりながら、御機嫌を見てそと申して見うずるにて候。暫く御待ち候へ。ツレ詞「心得申し候。

ワキ、サシ詞「夫れ春の花は上求本來の梢にあらはれ、秋の月下化冥暗の水に宿る。誰か知る行く水に三伏の夏もなく、澗底の松の風一聲の秋を催す事。草木國土おのづから、見佛聞法の結緣たり。詞さりながら四つの時にも勝れたるは花實の折なるべし。謡あら面白や候。

狂言詞「日本一の御機嫌にて候やがて申さう。如何に申し候。都より此御庭の花を見たき由申して、是まで皆々御出でにて候。ワキ詞「何と都よりと申して、此庵室の花を眺めん爲

に、是まで皆々來り給ふと申すか。狂言調「さん候。ツヤ調「およそ洛陽の花盛、何處もと云ひながら、西行が庵室の花、花も一木、我も獨と見るものを、花故ありかを知られん事いかゞなれども、是まで遙々來りたる志を、見せでは如何で歸すべき。あの柴垣の戸を開き內へ入れ候へ。狂言調「畏つて候。如何に方々へ申し候。よき御機嫌に申して候へば、見せ申せとの御事にて候程に、急いで此方へ御出で候へ。ツレ調「心得申し候。

ツレ謠「櫻花咲きにけらしな足びきの、山のかひより見えしまよ、此木の本に立ち寄れば、ツヤ調「我は又心ことなる花の本に、飛花落葉を觀じつよ、獨り心を澄ますところに、ツレ謠「貴賤群集の色々に、心の花も盛んにて、ツヤ調「昔の春に歸る有樣、ツレ謠「隱れ所の山といへども、ツヤ謠「さながら花の、ツレ謠「都なれば、上歌地謠「捨人も、花には何と隱家の、花には何と隱家の、所は嵯峨の奥なれども、春に訪はれて山までも、浮世のさがになるものを、實にや捨てよだに、此世の外はなきものを、何くか終の住家なる。何くか終の住家なる。

花故ありかを知られん事―世を厭へる佗住居を花のために見あらはさるゝは迷惑なれどもの意

櫻花咲きにけらしな―古今集の歌末句見ゆる白雲

浮世のさがーさがは性のこと諦め斷く

花見んと云々―西行の歌

ワキ詞「如何に面々、是まで遙々來り給ふ志、かへすゞも優しうこそ候へさりながら、捨てゝ住む世の友とては、花獨なる木の本に、身には待たれぬ花の友、少し心の外なれば、謠花見んと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがには有りける。地謠「あたら櫻の陰暮れて、月になる夜の木の本に、家路忘れて諸共に、今宵は花の下臥して、夜と共に眺め明かさん。

埋木の云々―同

シテ謠「埋木の人知れぬ身と沈めども、心の花は殘りけるぞや。花見んと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがには有りける、ワキ謠「不思議やな朽ちたる花の空木より、白髪の老人現れて、詞西行が歌を詠ずる有樣、さも不思議なる仁體なり。シテ詞「これは夢中の翁なるが、今の詠歌の心を謠猶も、詞尋ねん爲に來りたり。ワキ謠「そもや夢中の翁とは、夢に來れる人なるべし。詞それに付きても只今の、詠歌の心を尋ねんとは、歌に不審の有るやらん。シテ詞「いや上人の御歌に、何か不審の有るべきなれども、謠群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがには有りける、詞さて櫻のとがは何やらん。ワキ詞「いや是は只浮世

を厭ふ山住なるに、貴賤群集の厭はしき、心を少し詠ずるなり。シテ謌「恐れながら此御意こそ、少し不審に候へとよ。浮世と見るも山と見るも、只其人の心にあり。非情無心の草木の、花に浮世のとがはあらじ。ワキ謌「實に〳〵是は理なり　さて〳〵かやうに理をなす、御身は如何さま花木の精か。シテ謌「眞は花の精なるが、此身も共に老木の櫻の、ワキ謌「花物言はぬ草木なれども、シテ謌「とがなき謂れを木綿花の、ワキ謌「影唇を、シテ謌「動かすなり。地謌「恥かしや老木の、花も少く枝朽ちて、あたら櫻の、とがのなき由を申し開く花の、精にて候なり。およそ心なき草木も、花實の折は忘れめや、草木國土皆成佛の御法なるべし。シテ謌「有難や上人の御知遇に引かれて、惠の露あまねく、地謌「花檻前に笑んで辭いまだ聞かず、鳥林下に鳴いて淚盡き難し。クリ地謌「夫れ朝に落花を踏んで相伴なつて出づ、夕には飛鳥に隨つて一時に歸る。シテ、ツレ謌「九重に咲けども花の八重櫻、地謌「幾代の春を重ぬらん。シテ謌「然るに花の名高きは、地謌「まづ初花を急ぐなる、近衞殿の糸櫻、セヅ見渡せば柳櫻をこき交ぜて、都は春の錦爛漫たり。千本の櫻を植ゑ置

影唇を動かす—朗詠集に輕漾漱兮影動唇

花突盤前曙未銷鳥啼秋下淚難盡—百聯抄　辭の詩句

朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時歸—白樂天の詩　見渡せば—古今集の歌下句都ぞ春の錦なりける　春宵一刻—蘇東坡の詩

き、其色を所の名に見する、千本の花盛、雲路や雪に殘るらん。毘沙門堂の花盛　四王天の榮花も、是にはいかで勝るべき。上なる黒谷下河原、むかし遍昭僧正の、シテ謡「浮世を厭ひし花頂山、地謡「鵜の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひ知られてあはれなり。清水寺の地主の花、松吹く風の音羽山、こゝは又嵐山、戸無瀬に落（る瀧つ波までも、花は大井河、井堰に雪やかゝるらん。シテ謡「すはや數添ふ時の鼓、地謡「後夜の鐘の音響ぞ添ふ。シテ詞「あら名殘惜の夜遊やな。惜しむべし惜しむべし、得難きは時、逢ひ難きは友なるべし。謡春宵一刻價千金、花に清香月に陰、春の夜の、（序ノ舞）

踏花同惜少年
翁―白樂天の詩

翁さびて―老人めくこと

シテ謡「花の陰より明け初めて、地謡「鐘をも待たぬ別れこそあれ、別れこそあれ。シテ謡「待てしばし待てしばし、夜はまだ深きぞ。地謡「白むは花の影なりけり。よそはまだ小倉の山陰に、殘る夜櫻の花の枕の、シテ謡「夢は覺めにけり。地謡「夢は覺めにけり。嵐も雪も散り敷くや、花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや、翁さびて跡もなし。翁さびて跡もなし。

浮船

梗概

此曲の材料は源氏物語なり。薫大将、宇治の里なる浮舟の君に契りしが匂兵部卿宮もまた言ひ寄りたり。浮舟つひに己がはかなき運命を悔て宇治川に身を投げんとしたまたま初瀬より下向の横川僧都に救はれ尼になれりといふ。之に基きて、浮舟の幽霊を出し、旅僧の弔ひを受くる事を作る。（四番目）

シテ　浮舟（前は里女）　ツキ　旅僧

ツキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は初瀬に候ひしが、是より都に上らばやと思ひ候。道行詞初瀬山、夕越え暮れし宿もはや、夕越え暮れし宿もはや、檜原の外に三輪の山、しるしの杉も立ち別れ、嵐と共にならの葉の、暫し休らふ程もなく、狛の渡りや足早み、宇治の里にも著きにけり。宇治の里にも著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早宇治の里に著きて候。暫く休らひ名所をも詠めばやと思ひ候。

初瀬山云々―新古今集に「初瀬山夕越え暮れて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹く」狛の渡り―山城

柴積船―宇治の名物なり源氏物語浮舟の巻に宇治橋のはるゝに柴積船のところどころに行違ひたる云々とあり

シテ一聲謡」柴積船の寄る波も、なほたづきなき憂き身かな。憂きは心の科ぞとて、たが世をかこつ方ともなし。サシ住み果ぬ住家は宇治の橋柱、立居苦しき思ひ草、葉末の露を憂き身にて、老い行く末も白眞弓、もとの心を歎くなり。下歌とにかくに、定めなき世の影頼む、上歌月日も受けよ行末の、月日も受けよ行末の、神に祈りの叶ひなば、頼みをかけて御注連縄、長くや世をも祈らまし。長くや世をも祈らまし。

ワキ詞」いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候。シテ詞」此方の事にて候か何事にて候ぞ。

ワキ詞」この宇治の里に於て、古へ如何なる人の住みたまひて候ぞ。委しく御物語り候へ。

シテ詞」所には住み候へども、賤しき身にて候へば、委しき事をも知らず候さりながら、古へ此所には、浮舟とやらんの住み給ひしとなり。謡同じ女の身なれども、數にもあらぬ憂き身なれば、いかでかさまでは知り候べき。ワキ詞」實に〳〵に光源氏の物語、なほ世に絶えぬ言の葉の、それさへ添へて聞かまほしきに、謡心に殘し給ふなよ。シテ詞」むつかしの事を問ひ給ふや。里の名を聞かじといひし人もこそあれ、謡さのみは何と問ひ給ふ

里の名を聞かじ―宇治は憂に掛けていふ浮舟の歌に「里の名を我身に知れば山城の宇治のわたりぞいとゞ住みうき」

ぞ。上歌地謡さなきだに古の、さなきだに古の、戀しかるべき橘の、小島が崎を見渡せば、河より遠の夕煙、立つ河風に行く雲の、跡より雪の色添へて、山は鏡をかけまくも、賢き世々に有りながら、猶身を宇治と思はめや、猶身を宇治と思はめや。ワキ詞猶々浮舟の御事委しく御物語り候へ。クリ地謡そも〳〵この物語と申すに、其品々も妙にして、事のこゝろ廣ければ、ひろひて云はん言の葉の、シテ、ツレ謡玉の數にもあらぬ身の、そむきし世をやあらはすべき。地謡まづ此里にいにしへは、人々あまた住み給ひたる類ひながら、取り分き此浮舟は、薫中將のかりそめに、する給ひし名なり。クセ人がらもなつかしく、心ざまよし有りて、おほどかに過し給ひしを、物いひさがなき世の人の、ほのめかし聞えしを、色深き心にて、兵部卿の宮なん、忍びて尋ねおはせしに、織り縫ふ業のいとまなき、宵の人目も悲しくて、垣間見しつゝおはせしも、いと不便なりし業なれや。其夜にさても山住の、めづらかなりし有樣の、心にしみて有明の、月澄み昇る程なるに、シテ謡水の面も曇りなく、地謡船さしとめし行方とて、汀の氷踏み分け

橘の小島が崎―宇治川の名所

おほどかー―おほやうなること

汀の氷―句兵部卿宮の歌に「峰の雪汀の氷ふみわけて君にぞまどふ道はまどはず」

て、道は迷はずと有りしも、淺からぬ御契なり。一方は長閑にて、訪はぬ程經る思さへ、晴れぬながめと有りしにも、涙の雨や增さりけん、とにかくに思ひわび、此世になくもならばやと、歎き末ははかなくて、終に跡無くなりにけり。終に跡無くなりにけり。

ワキ詞「浮舟の御事は委しく承りぬ。さて〳〵御身は何處に住む人ぞ。シテ詞「是は此所にかりに通ひものするなり。妾が住家は小野の者、都のつてに訪ひ給へ。ワキ詞「あら不思議や、何とやらん事たがひたるやうに候。さて小野にては誰とか尋ね申すべき。シテ詞「隱れはあらじ大比叡の、杉のしるしはなけれども、謠横川の水のすむ方を、比叡坂と尋ね給ふべし。下歌地謠「猶物の氣の身に添ひて、惱む事なんある身なり。法力を頼み給ひつゝ、あれにて待ち申さんと、浮き立つ雲の跡もなく、行く方知らずなりにけり。行く方知らずなりにけり。

ワキ詞「かくて小野には來たれども、何處を宿と定むべき。上歌謠「所の名さへ小野なれば、所の名さへ小野なれば、草の枕は理や、今宵はこゝに經を讀み、彼御跡を弔ふとかや。

一方―寮大將をさす
晴れぬながめ―源大將の歌に「氷まさる道の里人いかならん晴れぬながめにかきくらす頃」
小野―浮舟の母の尼君が住みし地
大比叡の杉のしるし―新續古今集に「大ひえや杉立つかげを尋ぬればしるしも同じ三輪の神垣」

彼御跡を弔ふとかや。

後シテ「一聲謡「亡き影の絶えぬも同じ涙川寄るべ定めぬ浮舟の、法の力を頼むなり。あさましや本より我は浮舟の、よる方わかで漂ふ世に、憂き名洩れんと思ひわび、此世になくもならばやと、明暮思ひ煩ひて、人皆寢たりしに、妻戸を放ち出でたれば、風烈しう河波荒う聞えしに、知らぬ男の寄り來つつ、誘ひ行くと思ひしより、心も空になりはてょ あふさきるさの事もなく、地謡「我かの氣色もあさましや。シテ謡「あさましやあさましやな橘の、地謡「小島の色は變らじを、シテ謡「此浮舟ぞよるべ知られぬ。地謡「大慈大悲の理は、大慈大悲の理は、世に廣けれど殊に我が心一つに怠らず、明けては出づる日の影を、絶えぬ光と仰ぎつょ、暮れては闇に迷ふべき、後の世かけて頼みしに、シテ謡「頼みしまょの觀音の慈悲、地謡「頼みしまょの觀音の慈悲、初瀬の便に横川の僧都に見付けられつょ小野に伴なひ、祈り加持して物の氣除けしも、夢の世に猶、苦しみは大比叡や、横川の杉の古き事ども、夢に顯れ見え給ひ、今此聖も同じ便に、弔ひ受けんと思びしに、思ひ

驟き名洩れんと―浮舟の歌に「なげきわび身をは捨つとも亡き影にうき名流さんことをこそ思へ」

小島の色は―兵部卿の歌に「年經ともかはらんものか橘の小島の崎に契る心は」

都卒―天上

のまゝに執心晴れて、都卒に生まるゝうれしきと、いふかと思へば明け立つ横川、いふかと思へば明け立つ横川の、杉の嵐や殘るらん。杉の嵐もや殘るらん。

内十一

吳服

梗概　應神天皇の時來朝せし吳織漢織の女工現はれて故事を語り御代を壽ぐ事を作る。めでたき曲なり。（脇能）

シテ　吳織（前は里女）　ツレ　里女

ワキ　臣下

三人次第「道の道たる時とてや、道の道たるときとてや、國々豐なるらん。ワキ詞「そもゝ是は當今に仕へ奉る臣下なり。我此間は攝州住吉に參詣申して候。又是より浦傳ひし、西の宮に參らばやと存じ候。三人道行詞「住の江や、のどけき浪のあさか潟、のどけき浪のあさか潟、玉藻刈るなる海士人の、道もすぐなる難波潟、ゆくへの浦も名を得たる、吳服の里に著きにけり。吳服の里に著きにけり。

西の宮―廣田明神と號す蛭子を祀る
吳服の里―攝津池田村といふ

シテ、ツレ「聲謡」くれはとり、綾の衣の浦里に、年經て住むや海士少女、ツレ謡「立ちよる浪も白糸の、シテ、ツレ謡「機織り添ふる音しけし。シテ、サシ謡「これは津の國呉服の里に、住みて久しき二人の者、シテ、ツレ謡「我この國にありながら、身は唐の名にしおふ、女工の昔を思ひ出づる、月の入るさや西の海、波路はるかに來し方の、身は唐人の年を經て、こゝに呉服の里までも、身に知られたる名所かな。下歌これもかしこき御代のため、送り迎へし機物の、上歌倭にも、織る唐衣の營みを、織る唐衣の營みを、今敷島の道かけて、言の葉草の花までも、あらはしぎぬの色そへて、心をくだく紫の、袖も妙なるかざしかな。袖も妙なるかざしかな。

送り迎へし機物―御調の織物をいふ

やごとなきー―やんごとなきともいふ貴きこと

ワキ詞「さても我此松原に來て見れば、やごとなき女性二人あり。一人は機を織り、今一人は糸を取り引き、互に常の里人とは見え給はず。そも方々はいかなる人ぞ。シテ、ツレ謡「はづかしや里ばなれなる松陰の、うしほも曇る夕月の、影にまぎれて浦波の、聲にたぐへて機物の、音ぎこえじと思ひしに、知られけるかや恥かしや。ワキ謡「何をか包み給ふらん

其身は常の里人ならで、詞此松陰に隠れ居て、機織り給ふは不審なり。謡いかさま名のり給ふべし。シテ詞「これは應神天皇の御宇に、めでたき御衣を織り初し、呉織漢織と申しゝ二人の者、今又めでたき御代なれば、現にあらはれ來りたり。ツキ謡不思議の事を聞くものかな。それは昔の君が代に、唐國よりも渡されし、詞綾織二人の人なるが、今現在にあらはれ給ふは、謡何といひたる事やらん。シテ詞はやくも心得給ふものかな。まづ此里を呉服の里と名づけ初めしも何故ぞ。我此所にありし故なり。ツレ謡又漢織とは機物の、糸を取り引く工ゆゑ、綾の紋をもなす故に、漢織とは申すなり。シテ詞呉織とは機物の、糸引く木をばくれはと云へば、くれはとる手によそへつゝ、謡呉織とは申すなり。ツレ謡「されば二人の名によせて、シテ謡「呉織ツレ謡「綾とは申し傳へたり。シテツレ謡「しかればわれらは唐人なれば、やまと詞は知らねども、シテ謡「くれはとりあやに戀しくありしかば、二村山とよみし歌も、ふたりを思ふ心なり。上歌地謡「くれはとり、怪しめ給ふ旅人の、怪しめ給ふ旅人の、御目の程はさすがげに、名にしおふ都人の、所から唐人と、われらを

呉織綾とは申し傳へたり―くれはとりをあやといふため枕詞とすること

くれはとりあやに戀しく―後撰集の歌下句二村山も越えずなりにき

御覽ぜらるゝは、實にかしこしや善き君に、仕ふる人かありがたや、仕ふる人かありがたや。

呉郡―今ゴセンと謡へり

クリ地謡「それ綾と云つぱ、もろこし呉郡の地より織りそめて、女工のながき營みなり。シテ・ツレ謡「しかるに神功皇后、三韓をしたがへ給ひしより地謡「和國異朝の道廣く、人の國まで靡く世の、我日の本はのどかなる、御代の光は普くて國富み民ゆたかなり。シテ謡「東南雲收まりて、地謡「西北に風靜かなり。クセ應神天皇の御宇かとよ、呉國の勅使此國にはじめて來り給ひしに、綾女糸女の女婦を添へ、萬里の滄波を凌ぎ來て、西日影殘りなく、呉服の里に休らひ、連日に立つる機物の、錦を折々の、綾の御衣を奉る。勅使奏覽ありしかば、叡感殊に甚し。それより名づけつゝ、衰龍の御衣の紋、いとなみも名高き、山鳩色を移しつゝ、氣色だつなり雲鳥の、羽ぶさをたゝむ綾となす、いともかしこかりけり。シテ謡「しかれば萬代に、絕えせぬ御調なるべしと、地謡「御定めありしより、呉服の文字をやはらげて、呉織漢織と、名づけさせ給へば、年を迎へて色をなす、綾

衰龍―天皇の御袍のこと

山鳩色―鵠塵の下は青上は黃雲鳥―雲と鵠とを織りつく

羽ぶさ―翼

の錦の唐衣、かへすゞも君が袖、古きためしを引く糸の、かゝる御世ぞめでたき。

ロンギ地謡「これにつけても此君の、これにつけても此君の、めでたきためし有明の、夜すがら機を織り給へ。シテ、ツレ謡「いざゝ〳〵さらば機物の、錦を織りて我君の、御調に備へ申さん。

地謡「けにや御調の數々に、錦の色は、シテ、ツレ謡「小車の、地謡「丑三つ時過ぎ、曉の空を待ち給へ、姿をかへて來らん。さらばといひて吳織、漢織は歸れども、鷄はまだ鳴かずや夜長なりと待ち給へ、夜長くとても待ち給へ。（中入）

ワキ上歌「うれしきかなやいざさらば、うれしきかなやいざさらば、此松陰に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん。神の告をも待ちて見ん。

後シテ謡「君が代は天の羽衣稀にきて、撫づとも盡きぬ巖ならなん。千代に八千代を松の葉の、散り失せずして色は猶、正木のかづら長き代の、ためしに引くや綾の紋、曇らざりける時とかや。地謡「此君の、かしこき世ぞと夕浪に、聲立て添ふる機の音、シテ謡「錦を織る機物の内に、相思の字をあらはし、衣うつ砧の上に怨別の聲、松の風、又は磯うつ浪

君が代は云々―拾遺集の歌末句
巖ならん―松の葉の云々―古今集序の詞
高砂にも見ゆ
織錦機中已辨相思之字擣衣砧上恨添怨別之聲―朗詠集

の音　地謡「しきりにひまなき機物の、シテ謡「取るや呉服の手繰の糸、地謡「我取るはあやは、シテ謡「蹈木の足音、地謡「きりはたりちやう、シテ謡「きりはたり、ちやう〳〵と、地謡「悪魔も恐るゝ聲なれや。げに織姫のかざしの袖、（中ノ舞）地謡「思ひ出でたり織女の、思ひ出でたり織女の、たま〳〵逢へる旅人の、夢の精靈妙童菩薩も、影向なりたる夜もすがら、夜もすがら、寶の綾を織り立て織り立て、我君に捧物、御代のためしの二人の織姫、呉服あやはのとり〴〵に、くれはあやはのとり〴〵の御調物、供ふる御代こそめでたけれ。

精靈妙童菩薩―夢を支配する菩薩

八島

梗概　源義經の靈現れ、八島合戰の錣引弓流しなどの事を物語る。勝修羅物の一にして、祝言能として用うる。中入の時狂言方那須の語り（與一扇を射る事）をなす事あり。（二番目）

八島一扉島とも書く

シテ　源義經（前は漁翁）　ツレ　漁夫

ワキ　僧

三人次第謠「月も南の海原や、月も南の海原や、八島の浦を尋ねん。ワキ詞「是は郡方より出でたる僧にて候。我未だ四國を見ず候程に、此度思ひたち西國行脚と志し候。三人道行謠「春霞、浮き立つ浪の沖つ舟、浮き立つ浪の沖つ舟、入日の雲も影添ひて、其方の空と行く程に、はる〴〵なりし舟路へて、八島の浦に著きにけり。八島の浦に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早讃岐國八島の浦に著きて候。日の暮れて候へば、是なる鹽屋に立ち寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。

漁翁夜傍西岸宿瞑汲湘水燒楚竹―柳宗元の詩

知らぬ火の―筑紫の枕詞　釣のいとま―絲を眼に盲掛く

シテ謡「おもしろや月海上に浮んでは波濤野火に似たり。ツレ謡「漁翁夜西岸に傍うて宿す、シテ謡「湘水を汲んで楚竹を燒くも、今に知られて蘆火のかげ、ほの見えそむる物すごさよ。シテ謡「月の出汐の沖つ波、ツレ謡「霞の小舟こがれ來て、シテ謡「海士のよび聲、シテ謡「里近し。シテ謡「一葉萬里の舟の道、唯一帆の風に任す。ツレ謡「夕の空の雲の浪、シテ謡「月のゆくへに立ち消えて、霞にうかむ松原の、かげは線に映ろひて、海岸そことも知らぬ火の、筑紫の海にや續くらん。下歌こよは八島の浦づたひ、海士の家居もかずかずに、上歌釣のいとまも波の上、釣のいとまも波の上、霞わたりて沖行くや、海士の小舟のほのぼのと、見えて殘る夕ぐれ、浦風までものどかなる、春や心をさそふらん。春や心をさそふらん。シテ謡「まづまづ鹽屋に歸り休まうずるにて候。

ワキ詞「鹽屋の主の歸りて候。立ち越え宿を借らばやと思ひ候。いかに是なる鹽屋の内へ案内申し候。ツレ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「諸國一見の僧にて候、一夜の宿を御貸し候へツレ詞「暫く御待ち候へ、主に其由申し候べし。いかに申し候、諸國一見の御僧の、一夜の

御宿と仰せ候。シテ詞「易き程の御事なれども、あまりに見苦しく候ほどに、御宿は叶ふまじき由申し候へ。ツレ詞「御宿の事を申して候へば、あまりに見ぐるしく候ほどに、叶ふまじき由仰せ候。ワキ詞「いや〳〵見ぐるしきは苦しからず候。殊に是は都方の者にて、此浦はじめて一見の事にて候が、日の暮れて候へば、ひらに一夜と重ねて御申し候へ。ツレ詞「心得申し候。唯今の由申して候へば、旅人は都の人にて御入り候が、日の暮れて候へば、平に一夜と重ねて仰せ候。シテ詞「何旅人は都の人と申すか。ツレ詞「さん候。シテ詞「げに痛はしき御事かな。さらば御宿を貸し申さん。ツレ謡「もとより住みかも蘆の屋の、シテ詞「たび草枕と思召せ。ツレ謡「しかも今宵は照りもせず、シテ謡「曇も果ぬ春の夜の、シテツレ謡「朧月夜に、しく物もなき海士の苫、地謡「八島に立てる高松の、苔の席は痛はしや。上歌地謡「さて慰みは浦の名の、さて慰みは浦の名の、群れゐる田鶴を御覧ぜよ。などか雲居に歸らざらん。旅人の故郷も都と聞けばなつかしや。われらも元はとて、やがて涙にむせびけり。

やがて涙にむせびけり。

照りもせず―新古今集の歌末句しくものぞなき　若くは敷くと書掛く

などか雲居に―新古今集に「天つ風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲居に翔らざるべき」

似合はぬ所望―僧の身として戦の話を望めばなり

いでたち―装束

背長―鎧鞍笠―鞍覆ともいふ

一院―後白河上皇

冒薬戦ひ―故身方屈り合ふこと

平家の方にも云云―前の景清と対照すべし

ワキ詞「いかに申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へども、いにしへ此所は、源平の合戦の儀と承りて候。よもすがら語つて御聞かせ候へ　シテ詞「やすき間の事かたつて聞かせ申し候べし。語いで其頃は元暦元年三月十八日の事なりしに、平家は海の面一町ばかりに舟を浮め、源氏は此汀に打ち出で給ふ。大将軍の御いでたちには、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の御著背長、鎧ふんばり鞍笠につょ立ちあがり一院の御使、源氏の大将検非違使五位の尉、源の義経と、語名のり給ひし御骨がら、あつぱれ大将やと見えし、今のやうに思ひ出でられて候。ツレ謡其時平家の方よりも、言葉戦ひ事終り、兵船一艘漕ぎよせて、波打際に下り立つて、詞陸の敵を待ちかけしに、シテ詞源氏の方にもつぐく兵五十騎ばかり、中にも三保の谷の四郎と名のつて、眞先かけて見えし処に、ツレ謡平家の方にも悪七兵衛景清と名のり、三保の谷を目懸け戦ひしに、シテ詞彼三保の谷は其時に、太刀打ち折つて力なく、すこし汀に引き退きしに、ツレ謡景清追つかけ三保の谷が、シテ詞「著たる兜の鍬を摑んで、ツレ謡後へ引けば三保の谷も、シテ謡身を遁れんと前へ引く。

ツレ謡「互にえいやと、シテ謡「引く力に、地謡「鉢附の板より引きちぎつて、左右へくわつとぞ退きにける。是を御覧じて判官、御馬を汀に打ち寄せ給へば、佐藤継信、能登殿の矢先にかゝつて、馬より下にどうと落つれば、舟には菊王も討たれければ、ともにあはれと思しけるか、舟は沖へ陸は陣に、相引に引く汐の、あとは関の聲たえて、磯の浪松風ばかりの、音寂しくぞなりにける。

ロンギ地謡「ふしぎなりとよ海士人の、あまり委しき物語、其名を名のり給へや。シテ謡「我名を何と夕浪の、引くや夜汐も朝倉や、木の丸殿にあらばこそ、名のりをしても行かまし。地謡「けにや言葉を聞くからに、其名ゆかしき老人の、シテ謡「昔を語る小忌衣。地謡「頃しも今は、シテ謡「春の夜の、地謡「潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし。其時は我名や名のらん。たとひ名のらずとも名のるとも、義経の浮世の、夢ばし覺まし給ふなよ。夢ばし覺まし給ふなよ。（中入）

ワキ詞「ふしぎや今の老人の、其名をたづねし答にも、義経の世の夢心、さまざで待てと聞

能登殿―能覚守教経

朝倉や―天智天皇の御製に「朝倉や木の丸殿に我居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」

義経―名のるとも尋し常の浮世と意を掛けたり

えつる、上歌謡聲も更け行く浦風の、聲も更け行く浦風の、松が根枕欹てよ、思ひをのぶる苔席、かさねて夢を待ちゐたり。かさねて夢を待ちゐたり。

後シテ謡落花枝にかへらず、破鏡ふたゝび照らさず。然れどもなほ妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境界にかへり、我と此身を苦しめて、修羅の儛に寄り來る波の、淺からざりし業因かな。

ワキ詞「ふしぎやな早曉にもなるやらんと、思ふ寢覺の枕より、甲冑を帶し見え給ふは、もし判官にてましますか。シテ詞「我義經の幽靈なるが　瞋恚に引かるゝ妄執にて、猶西海の浪に漂ひ、謡生死の海に沈淪せり。ワキ謡「おろかやな心からこそ生死の、海とも見ゆれ眞如の月の、シテ謡「春の夜なれど曇りなき　心も澄める今宵の空。ワキ謡「昔を今に思ひ出づる、シテ謡「舟と陸との合戰の道、ワキ謡「所からとて、シテ謡「忘れえぬ、上歌地謡「武士の、八島に入るや槻弓の、八島に入るや槻弓の、元の身ながら又こゝに、弓箭の道は迷はぬに、迷ひけるぞや生死の、海山を離れやらで、歸る八島の恨めしや。とにかくに執心の、殘り

落花云々―卿灯錄の落花雖上枝破鏡不重照の意
業因―罪業の因緣
槻弓―槻の木にて造れる弓の本末よりもとの身と續けたり

の海の深き夜に、夢物語申すなり。夢物語申すなり。

クリ地謡「忘れぬものを圓浮の故郷に、去つて久しき年波の、夜の夢路に通ひきて、修羅道の有樣あらはすなり。シテ、サシ謡「思ひぞ出づる昔の春、月も今宵にさへかへり。地謡「本の渚はこよなれや。源平互に矢先を揃へ、舟を組み駒を竝べて、打ち入れ打ち入れ足なみに、轡を浸して攻め戰ふ。シテ詞「其時何とかしたりけん、判官弓を取り落し、浪にゆられて流れしに、地謡「其をりしもは引く汐にて、遙に遠く流れゆくを、シテ詞「敵に弓を取られじと、駒を浪間におよがせて、敵船近くなりし程に、地謡「敵は是を見しよりも、船をよせ熊手にかけて、既に危く見え給ひしに、シテ詞「されども熊手を切りはらひ、終に弓を取り返し、もとの渚に打ちあがれば、地謡「其時兼房申すやう、口惜しの御振舞やな、渡邊にて景時か申しょも、是にてこそ候へ。たとひ千金を延べたる御弓なりとも、御命には換へ給ふべきかと、涙を流し申しければ、判官これを聞しめし、いやとよ弓を惜むにあらず、クセ義經源平に、弓矢を取つて私なし、然れども、佳名は未だ半ならず、されば此弓を

兼房―增尾十郎
權守兼房
渡邊にて三々―
梶原景時と逆纏
の論のこと

敵に取られ義経は、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極めと思ふべし。さらずは敵に渡さじとて、浪に引かるゝ弓取の、名は末代にあらずやと、語り給へば兼房さて其外の人までも、皆感涙を流しけり。

シテ謡「智者は惑はず、地謡「勇者は恐れずの、やたけ心の梓弓、敵には取り傳へじと、惜むは名のため、惜まぬは一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき、弓箏の跡なるべけれ。

シテ謡「又修羅道の闘の聲、地謡「矢叫びの音震動せり。シテ詞「今日の修羅の敵は誰そ。なに能登の守教經とや、あら物々しや、手竝は知りぬ、謡思ひぞ出づる壇の浦の、地謡「其船軍今は早、其船軍今は早、閻浮にかへる生死の、海山一同に震動して、舟よりは闘の聲、シテ謡「陸には波の楯、地謡「月に白むは、シテ謡「劍の光、地謡「潮にうつらは、シテ謡「兜の星の影、地謡「水や空、空ゆくもまた雲の波の、撃ち合ひ刺し違ふる、船軍の掛引、浮き沈むとせし程に、春の夜の浪より明けて、敵と見えしは群れゐる鷗、闘の聲と聞えしは、浦

智者云々―論語を引く

後記―後世の記錄のこと歷史なり

風なりけり。高松の浦風なりけり。高松の朝嵐とぞなりにける。

鸚鵡小町

梗概　小野の小町、老衰の後、勅に應じて鸚鵡返しの和歌を詠ずることを作る。老女物とて重き能柄の一つなり。

シテ　小野小町　ワキ　大納言行家

ワキ詞「是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。扨も我君敷島の道に御心を懸けられ、普く歌を撰ぜられ候へども、叡慮に叶ふ歌なし。こゝに出羽の國小野の良實が娘に小野の小町、彼はならびなき歌の上手にて候が、今は百年の姥となりて、關寺邊に在る由聞し召し及ばれ、帝より御憐みの御歌を下され候。其返歌により、重ねて題を下すべきとの宣旨に任せ、只今關寺邊小野の小町が方へと急ぎ候。

シテ一聲謡「身は一人、我は誰をか松坂や、四の宮河原四つの辻、いつ又六つの巷ならん。サシむかしは芙蓉の花たりし身なれども、今は藜藿の草となる。顔ばせは憔悴と衰へ、膚は凍梨の梨の如し。杖つくならでは力もなし。人を恨み身をかこち、泣いつ笑うつ安か

新大納言―末座の大納言をいふ　敷島の道―和歌　關寺―逢阪の關の東　六つの巷―六道のこと　藜藿―あかざ　凍梨―老人の膚を喩ふ

らねば、物狂ひと人は言ふ。上歌きりとては、捨てぬ命の身に添ひて　捨てぬ命の身に添ひて、面影に九十九髪、かよらざりせばかよらじと、昔を戀ふる忍寐の、夢は寐覺の長き夜を、飽きはてたりな我心。飽きはてたりな我心。

ワキ詞「如何に是なるは小町にてあるか。シテ詞「見奉れば雲の上人にてましますが、小町と承り候かや何事にて候ぞ。ワキ詞「さて此程は何くを住家と定めけるぞ。シテ詞「誰留むるとはなけれども、只關寺邊に日數を送り候。ワキ詞「實に〳〵關寺は、さすがに都遠からで、閑居には面白き所なり。シテ詞「前には牛馬の通路有つて、貴きも行き賤しきも過ぎ。ワキ謡「後には靈驗の山高うして、シテ謡「しかも道もなく、ワキ謡「春は、シテ謡「春霞、上歌地謡「立出でて見れば深山邊の、立出で見れば深山邊の、梢にかよる白雲は、花かと見えて面白や、松風も匂ひ、枕に花散りて、それとばかりに白雲の、色香面白き景色かな。北に出づれば湖の、志賀辛崎の一つ松は、身の類ひなる物を、東に向へば有難や　石山の觀世音、瀬田の長橋は狂人の、つれなき命の、かよるためしなるべし。

かくちざりせば―後拾遺集に「見る度に鏡の影のつきかなかくちざりせばかくちざらまし」とあり王昭君を詠める歌なり

長橋―危き意よりつれなき命と續く

涙の關寺―涙の堰き敢へぬ意を掛く　仙洞―院の御所

シテ詞「かくて都の戀しき時は、柴の庵に暫しと留むべき友もなければ、謡便梨の杖にすがり、謡都路に出でて物を乞ふ、詞乞ひ得ぬ時は涙の關寺に歸り候。ツヤ詞「如何に小町、扨今も歌をよみ候べきか。シテ詞「我いにしへ百家仙洞の交はりたりし時こそ、事によそへて歌をも詠みしが、今は花薄穂に出で初めて、霜のかゝれる有樣にて、浮世にながらふるばかりにて候。ツヤ詞「實に尤道理なり。帝より御憐みの御歌を下されて候。是々見候へ。シテ詞「何と帝より御憐みの御歌を下されたると候や。あら有難や候。老眼と申し文字もさだかに見え分かず候。それにて遊ばされ候へ。ツヤ詞「さらば聞き候へ。シテ詞「如何にも高らかに遊ばされ候へ。ツヤ詞「雲の上は、シテ詞「雲の上は、ツヤ謡「雲の上は、有りし昔にかはらねど、見し玉だれの内やゆかしき。シテ詞「あら面白の御歌や候。謡悲しやな古き流れを汲んで、水上を正すとすれど、歌詠むべしとも思はれず。詞又申さぬ時は恐れなり。所詮此返歌を只一字にて申さう。ツヤ詞「不思議の事を申す者かな。それ歌は三十一字を連ねてだに、心の足らぬ歌もあるに、一字の返歌と申す事、謡是も狂氣の故やらん。

古き流れを汲んだ―衣通姫の流のこと

シテ詞「いや、ぞと云ふ文字こそ返歌なれ。ツキ詞「ぞと云ふ文字とはさて如何に。シテ詞「さらば帝の御歌を、詠吟せさせ給ふべし。ツキ詞「不審ながらもさし上げて、謡雲の上は有りし昔にかはらねど、見し玉だれの内やゆかしき。シテ詞「さればこそ内やゆかしきを引きのけて、内ぞゆかしきとよむ時は、小町がよみたる返歌なり。ツキ謡「さて古もかゝるためしの有るやらん。シテ謡「なう鸚鵡返しと云ふ事は、上歌地謡「此歌の様を申すなり。帝の御歌を、ばひ参らせてよむ時は、天の恐も如何ならん。和歌の道ならば、神も許し在しませ。貴からずして高位に交はると云ふ事、たゞ和歌の徳とかや、たゞ和歌の徳とかや。クリ地謡「それ歌の様を尋ぬるに、長歌短歌旋頭歌、折句誹諧混本歌、鸚鵡返し、廻文歌なり。シテ、サシ謡「中んづく鸚鵡返しと云ふ事、唐に一つの鳥あり、地謡「その名を鸚鵡と云へり。人の云ふ言葉を受けて、即ちおのが嘲りとす。何ぞといへば何ぞと答ふ。鸚鵡の鳥の如くに、歌の返歌もかくの如くなれば、鸚鵡返しとは申すなり。クセ「にや歌の様、語るに附け、いにしへの、猶思はるゝはかなさよ。されば来し方の、代々の集めの歌人の、其多く

鸚鵡返し―人より贈られたる歌の口真似して返歌すること　旋頭歌―五七七を二度繰返したる歌　折句―前の杜若に見ゆる唐衣の歌の如きもの　誹諧―滑稽なる趣を含む歌今集を見よ　混本歌―卅一文字の末の七を省ける歌　廻文歌―上下何れより読みても同じ歌

和歌の六義―詩の六義即ち風賦比興雅頌より転じて歌数へ歌なずらへ歌醫へ歌たたとこと歌脱ひ歌の六つをいふたゞこと歌のためしにーいつはりのなき世なりせばの歌を古今集の序に出せりこれを小町の歌として然か言へるか

葛葉の里―河内

月にはめでじー業平の歌に「大方の月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」

ある中に、今の小町は、妙なる花の色好み、歌の様さへ女にて、只弱々とよむとこそ、家家の書傳にも、しるし置き給へり。シテ謡「和歌の六義を尋ねしにも、地謡「小町が歌をこそ、たゞこと歌のためしに、引くのみか我ながら、美人の形も世に勝れ、餘情の花と作られ、桃花雨を帶び、柳髪風にたをやかなり。紫笋なほ動きほこり、梨花は名のみなりしかど、今憔悴と落ちぶれて、身體疲痒する小町ぞ、あはれなりける。

ワキ詞「如何に小町、業平玉津島にての法樂の舞をまなび候へ。シテ詞「さても業平玉津島に參り給ふと聞えしかば、我も同じく參らんと、地謡「都をばまだ夜をこめて稻荷山、葛葉の里も浦近く、和歌吹上にさしかゝり、地謡「玉津島に參りつゝ、玉津島に參りつゝ、業平の舞の袖、思ひめぐらす信夫摺、木賊色の狩衣に、大紋の袴の稜を取り、風折烏帽子召されつゝ　シテ謡「和光の光玉津島、地謡「廻らす袖や波がへり。(舞)シテ謡「和歌の浦に汐滿ち來ればかたをなみの、地謡「蘆邊をさして鶴鳴き渡る鳴き渡る。シテ謡「立つ名もよしなや忍び音の、地謡「立つ名もよしなや忍び音の、月には愛でじ、シテ謡「是ぞ此、地謡「積れば人の、

シテ謡「老となるものを、地謡「かほどに早き光の陰の、時人を待たぬ習ひとは白波の、シテ謡「あら戀しの昔やな。地謡「かくて此日も暮れ行くまゝに、さらばと云ひて、行家都に歸りければ、シテ謡「小町も今は是までなりと、地謡「杖にすがりてよろ〳〵と、立ち別れ行く袖の涙、立ち別れ行く袖の涙も關寺の、柴の庵に歸りけり。

葛城

梗概

山伏葛城山に登り、雪中、女に宿を借る事より、葛城の神の物語に及ぶ。昔役行者吉野の金峰山と葛城山との間に岩橋を渡さんとし、神々を使役す。葛城の一言主神は其形醜きを恥ぢて、夜ならでは見えず。行者怒つて神を繋縛したりといふ古傳に基き、葛城の古歌を以て文飾とす。（四番目）

シテ　葛城の神（前は女）　ワキ　山伏

羽黒山―羽前にあり山伏の修行する所
大峯―吉野の奥

ワキ「次第謡」神の昔の跡とめて、神の昔の跡とめて、かづらき山に參らん。詞是は出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。我此度大峯葛城に參らばやと存じ候。道行謡篠懸の、袖の朝霜起臥の、袖の朝霜起臥の、岩根の枕松が根の、宿りも茂き嶺つゞき、山又山を分け越えて、ゆけば程なく大和路や　葛城山につきにけり。葛城山につきにけり。

ワキ詞「いそぎ候間、ほどなく葛城山に著きて候。あら笑止や、又雪のふり來りて候。これなれる木陰に立ちよらばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵あれなる山伏は何方へ御通り候ぞ。ワキ詞「此方の事にて候か。御身はいかなる人やらん。シテ詞「是は此葛城山に住む女にて候。柴採る道の歸るさに、踏み馴れたる通路をさへ、雪のふぶきにかきくれて、家路もさだかにわきまへぬに、謠ましてや知らぬ旅人の、末いづくにか雪の山路に、迷ひ給ふはいたはしや。詞見苦しく候へども、わらはが庵にて一夜を御あかし候へ。ワキ詞「うれしくも仰せ候物かな。今にはじめぬ此山の度々峯入して、通ひなれたる山路なれども、今の吹雪に前後を忘じて候に、御志ありがたうこそ候へ。謠さて御宿りはいづくぞや。シテ詞「此岨傳ひのあなたなる、谷の下庵みぐるしくとも、程ふる雪の晴間まで、御身をやすめ給ふべし。ワキ謠「さらば御供申さんと、夕べの山の常陰より、シテ謠「さらでも嶮しき岨傳ひを、ワキ謠「道しるべする山人の、シテ謠「笠はおもし呉山の雪、鞋は香ばし楚地の花、上歌地謠「肩上の笠には、肩上の笠には、無影の月を傾け、擔頭の柴には、不香の花を手折りつゝ、歸る姿や山人の、笠も薪も埋もれて、雪こそくだれ谷の道を、たどり〳〵歸りきて、柴の庵に著きにけり。柴の庵に

常陰―いつも日のさゝぬ所
笠重呉山雪鞋香楚地花―詩人玉屑に出でたる詩
山人の笠も云々―菅家の歌末句
谷の下道

著きにけり。

ワキ詞「あら嬉しや候。今の雪に前後を忘じて候處に、ことよひの御宿かへすゞ〳〵も有りがたうこそ候へ。シテ詞「あまりに夜寒に候程に、是なる標を解き傳し、火に焚きてあて參らせ候べし。ワキ詞「あらおもしろや標とは、此木の名にて候か。シテ詞「うたてやな此葛城山の雪の内に、結ひあつめたる木々の梢を、標と知ろしめされぬは御心なきやうにこそ候へ。ワキ謡「あら面白やさては此、標と言ふ木は葛城山に、由緒ある木にて候よなう。シテ詞「申すにや及ぶ古き歌の言葉ぞかし。標を結ひたる葛なるを、此葛城山の名に寄せたり。是大和舞の歌といへり。ワキ謡「げに〳〵ふるき大和舞の、歌の昔を思ひ出の、シテ謡「をりから雪も、ワキ謡「降るものを、上歌地謡「しもとゆふ葛城山にふる雪は、葛城山にふる雪は、間なく時なく、思ほゆるかなと詠む歌の、言の葉添へて大和舞の、袖の雪も古き世の、よそにのみ、見し白雲や高間山の、峯の柴屋の夕煙、松が枝そへて燒かうよ。松が枝そへて燒かうよ。

大和舞―大嘗會の儀式に行はる舞曲
しもとゆふ云々―古今集に出づ即ち大和舞の歌

葛城や木の間に光る云々―堀川院次郎百首兼昌の歌但し字句異同あり

そみかくた―山伏をいふ

三熱の苦しみ―日に三度熱き苦しみを受く

クセ葛城や、木の間にひかる稲妻は、山伏の打つ火かとこそ見れ。實にや世の中は、電光朝露石の火の、光の間ぞと思へたど、わが身のなげきをも、取り添へて、思ひ眞柴を焚かうよ。シテ謡「捨人の苦の衣の色深く、地謡「法に心は墨染の、袖もさながら白妙の、雪にや色をそみかくたの、篠懸もさえまさる、標を集め柴を焚き、寒風を防ぐ葛城の、山伏の名にし負ふ、かたしく袖の枕して、身を休め給へや。御身を休め給へや。ワキ詞「あら嬉しや篠懸を乾して候ぞや。いそぎ後夜の勤を始めばやと思ひ候。シテ詞「御勤めとは有難や。我に惱める心あり、御つとめのついでに祈り加持して賜り候へ。ワキ詞「そも御身に惱む事ありとは、何といひたる事やらん。シテ詞「さなきだに女は五障の罪深きに、法のとがめの咒詛を負ひ、此山の名にしおふ、葛葛にて身をいましめて、猶三熱の苦みあり、此身を助けてたび給へ。ワキ謡「そも神ならで三熱の、苦みといふことあるべきか。シテ詞「はづかしながら古の、法の岩橋かけざりし。其とがめとて明王の、索にて身をいましめて、今に苦しみ絕えぬ身なり。ワキ謡「是はふしぎの御事かな。さては昔の葛

城の、神の苦しみ盡きがたき、シテ謡「石は一つの神體として、ワキ謡「蔦葛のみかよる巖の、シテ謡「撫づとも盡きじ葛の葉、ワキ謡「はひ廣ごりて、シテ謡「露に置かれ、シテ謡「霜に責められ起臥の、立居も重き岩戸の内、下歌地謡「明くるわびしき葛城の、神の五衰の苦しみあり祈り加持してたび給へと、岩橋の末絶えて、神隱れにぞなりにける。神隱れにぞなりにける。（中入）

ワキ上歌謡「岩橋の、苔の衣の袖そへて、苔の衣の袖そへて、法の筵のことはに、法味をなして夜もすがら、彼葛城の神ごころ、夜の行ひ聲すみて、一心敬禮。

後シテ謡「われ葛城の夜もすがら　和光の影にあはられて、五衰の眠を無上正覺の月に覺まし、法性眞如の寶の山に、法味に引かれて來りたり。よく〳〵勤めおはしませ。

ワキ謡「ふしぎやな峨々たる山の常陰より、女體の神とおぼしくて、玉のかんざし玉葛の、なほ懸けそへて蔦かづらの、はひまとはるゝ小忌衣、シテ謡「これ見たまへや明王の、索は斯かる身をいましめて、ワキ謡「なほ三熱の神ごころ、シテ謡「年經る雪や、ワキ謡「しもとゆふ、

明くるわびしき―拾遺集に「岩橋の夜の契も絶ぬべし明くる侘しき葛城の神」

地謡「葛城山の岩橋の、夜なれど月雪の、さもいちじるき神體の、みぐるしき顔ばせの、神姿ははづかしや。よしや吉野の山かづら、かけて通へや岩橋の、高天の原は是なれや、神樂歌はじめて、大和舞いざやかなでん。

岩戸の舞―岩戸神樂面なや―面目無し

ツレ「ふる雪の、しもと木綿花の白和幣、地謡「高天の原の岩戸の舞、高天の原の岩戸の舞、ツレ天のかぐ山も向ひに見えたり。月白く雪白く、いづれも白妙のけしきなれども、名に負ふかづらきの、神の顔がたち、面なやおもはゆや、恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべし。あけぬ前にとかづらきの、あけぬ前にとかづらきの、夜の岩戸にぞ入り給ふ。岩戸の内に入り給ふ。

當麻

梗概　當麻寺の曼陀羅の縁起を脚色す。卽ち前は化尼女の二人あらはれ、後は中將姫現れて、蓮絲もて曼陀羅を織りし故事を叙べ、佛德を讃歎す。（五番目）

シテ　中將姫（前は老尼）　ツレ　化尼
ワキ　旅僧

ワキ次第謡「教うれしき法の門、教うれしき法の門、開くる道に出でうよ。洞是は念佛の行者にて候。我此度三熊野に參り、下向道に赴きて候。又是より大和路にかゝり、當麻の御寺に參らばやと思ひ候。道行餘程もなく、歸り紀の路の關越えて、歸り紀の路の關越えて、こや三熊野の岩田川、波も散るなり朝日影、夜晝わかぬ心地して、雲も其方に遠かりし、二上山の麓なる、當麻の寺に著きにけり。當麻の寺に著きにけり。

二上山―葛城山のつゞきにあり
當麻の寺―大和

シテ、サシ謡「一念彌陀佛卽滅無量罪とも說かれたり。ツレ謡「八萬諸聖教皆是阿彌陀とも有りけ

に候。シテ謡「釋迦は遣り、ツレ謡「彌陀は導く一筋に、シテ、ツレ謡「心ゆるすな南無阿彌陀佛と、シテ一聲謡「唱ふれば、佛も我もなかりけり。ツレ謡「南無阿彌陀佛の聲ばかり、シテ謡「すずしき道は、シテ、ツレ謡「頼もしや　シテ、ツレ次第謡「濁にしまぬ蓮の糸、濁にしまぬ蓮の糸の、五色にいかで染みぬらん。

シテ、ワキ謡「ありがたや諸佛の誓ひ様々なれども、わきて超世の悲願とて、迷ひの中にも殊に猶、シテ、ツレ謡「五つの雲は晴れやらぬ、雨夜の月の影をだに、知らぬ心の行くへをや、西へとばかり頼むらん、實にや頼めば近き道を、何遙々と思ふらん。下歌する㕝の世に、迷ふ我等が爲なれや、上歌説き遺す　御法はこれぞ一聲の、御法はこれぞ一聲の、彌陀の教へを頼まずは、末の法、萬年々經るまでに、餘經の法はよもあらじ。たま〳〵此生に浮まずは、又いつの世を松の戸の、明くれば出でて暮るゝまで、法の場に交るなり、御法の場に交るなり。

ワキ詞「如何に是なる方々に尋ね申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「是は當麻の御

唱ふれば―一遍上人の歌末句壁ばかりしてすゞしき道―極樂をいふ

五つの雲―女人の五障を雲に喩ふ

雨夜の月の―玉葉集に「彌陀頼む人は雨夜の月なれや雲はれねども西へこそ行け」末の法云々―慈恩大師の語に末法萬年餘經悉滅云々とあるに據る

寺にて候か。シテ詞「さん候當麻の御寺とも申し、又當麻寺とも申し候。ツレ謡「又是なる池は蓮の糸を、濯ぎて清めし其故に、染殿の井とも申すとかや。シテ謡「あれは當麻寺、ツレ謡「是は染寺、シテ謡「又此池は染殿のシテツレ謡「色々様々所々の、法の見佛聞法ありとも、それをもいさや白糸の、只一筋ぞ一心不亂に　南無阿彌陀佛。ワキ謡「實に有難き人の言葉、即ち是こそ彌陀一教なれ。詞　さて又是なる花櫻、常の色には變りつゝ、是も故ある寶樹と見えたり。ツレ謡「實によく御覽じ分けられたり。あれこそ蓮の糸を染めて、シテ詞「掛けて乾されし櫻木の、花も心の有る故に、謡　蓮の色に唉くとも云へり。ワキ謡「中々なるべし本よりも、草木國土成佛の、色香に染める花心の、シテ謡「法の潤び種添へて、ワキ謡「濁にしまぬ蓮の糸を、シテ謡「濯ぎて清めし人の心の、ワキ謡「迷ひを乾すは、シテ謡「緋櫻の、上歌謡「色はえて、掛けし蓮の糸櫻、掛けし蓮の糸櫻、花の錦の經緯に、雲の絕間に晴れ曇る、雪も、綠も、紅も、只一聲の誘はんや、西吹く秋の風ならん、西吹く秋の風ならん。ワキ詞「猶々當麻の曼陀羅の謂れ委しく御物語り候へ。クリ地謡「そも〳〵此當麻の曼陀羅と

法の潤ひ―佛法を雨露に喩ふ

曼陀羅―淨土の有樣を圖に繪出せるをいふ

横佩の右大臣―淡海公の孫武智麿の子

念佛三昧―熱心に念佛すること忘れ水―野中の流をいふ 座禪圓月の窓―座禪して心中妄念を去るを圓月に譬ふ

呼子鳥―古今集に「遠近のたづきも知らぬ山中に憂事無くも呼子鳥かな」

申すは、人皇四十七代の帝、廢帝天皇の御宇かとよ、横佩の右大臣豐成と申しゃ人、シテ、ザシ謠「その御息女中將姫、此山に籠り給ひつゃ、地謠「稱讃淨土經、毎日讀誦し給ひしが、心中に誓ひ給ふやう、願はくは正身の彌陀來迎あつて、我に拜まれおはしませと、一心不亂に觀念し給ふ。シテ謠「然らずは畢命を期として、地謠「此草庵を出でじと誓つて、一向に念佛三昧の定に入り給ふ。クセ所は山陰の、松吹く風も涼しくて、さながら夏を忘れ水の、音も絕々に、心耳を澄ます夜もすがら、稱名觀念の床の上、座禪圓月の窓の内、寥々しと有る折節に、一人の老尼の、忽然と來りたゃずめり。是は如何なる人やらんと、尋ねさせ給ひしに、老尼答へて宣はく、誰とはなどや愚なり、呼べばこそきたりたれと、仰せられける程に、中將姫はあきれつゃ、シテ謠「我は誰をか呼子鳥地謠「たづきも知らぬ山中に、聲立つる事とては、南無阿彌陀佛の稱へならで、又他事もなきものをと、答へさせ給ひしに、それこそ我名なれ、聲をしるべに來れりと、宣へば姫君も、さては此願成就して、正身の彌陀如來、實に來迎の時節よと、感涙肝に銘じつゃ、綺羅衣の

時正―彼岸の中日

御袖もしをるばかりに見え給ふ。

ロンギ地謡「實にや貴き物語、卽ち彌陀の教ぞと、思ふに付けて有難や。シテ、ツレ謡「今宵しも、二月中の五日にて、しかも時正の時節なり。法事をなさんため、今此寺に來りたり。地謡「法事のために來るとは、そもや如何なる御事ぞ。シテ、ツレ謡「今は何をか包むべき、其古への化尼、化女の、地謡「夢中に現じ來れりと、シテ、ツレ謡「言ひもあへねば、地謡「光さして、花降り異香薫じ、音樂の聲すなり。恥かしや旅人よ、暇申して歸る山の、一上の嶽とは二上の、山とこそ人はいへど、誠は此尼が、上りし山なる故に、尼上の嶽とは申すなり。老の坂を上り上る、雲に乘りて上りけり。紫雲に乘りて上りけり。（中入）

ワキ詞「かく有難き御事なれば、重ねて奇特を拜まんと、上歌謡いひもあへねば不思議やな、いひもあへねば不思議やな、妙音聞え光さし、歌舞の菩薩の目のあたり、現はれ給ふ不思議さよ。現はれ給ふ不思議さよ。

後シテ謡「只今夢中に現はれたるは、中將姫の精魂なり。我娑婆に在りし時、稱讃淨土經、

朝々時々に怠らず、信心誠なりし故に、微妙安樂の淨界の衆となり、本覺眞如の圓月に座せり。然れどもこゝを去る事遠からずして、法身却來の法味をなせり。地謠「有難や、盡虛空界の莊嚴は、眼は雲路にかゝやき、シテ謠「轉妙法輪の音聲は、聽覺利の耳に充てり。地謠「蕭然とある曉の心、シテ謠「眞に涼しき道に引かるゝ光陰の心、地謠「惜しむべしやな、惜しむべしやな、時は人をも待たざるものを。すなはちこゝぞ、唯心の淨土經、戴きまつれや、戴きまつれや。攝取不捨、シテ謠「爲一切世間、說此難信、地謠「之法是爲堪難、シテ謠「實にも此法甚しければ、地謠「信ずる事も難かるべしとや。シテ謠「唯賴め、地謠「賴めや賴め、シテ謠「慈悲加祐、地謠「令心不亂、シテ謠「亂るなよ、地謠「亂るなよ。シテ謠「十聲も、地謠「一聲ぞ有難や。（早舞）

シテ謠「後夜の鐘の音、地謠「後夜の鐘の音鳧鐘の響、稱名の妙音の、見佛聞法の色々の法事、實にも晉き光明遍照、十方の衆生を唯西方に迎へ行く、御法の舟の水馴棹、御法の舟のさをなぐるまの、夢の夜はほの〴〵とぞなりにける。

深界の衆―清淨世界佛菩薩の群に入る
盡虛空界云々―往生聚集の文を引く

爲一切世間云々―阿彌陀經の文句

後夜―今の夜二時
さをなぐるまの―舟の棹より櫂を投ぐると言掛く

内十二

海士

梗概　藤原房前、生母の海士の跡を弔ひ、その幽靈に會ひ、玉取の故事を語るを聽く事を作る。志度寺緣起に據る。（五番目）

前シテ　海士の靈　後シテ　龍女
シテツレ　房前大臣　ワキ　從者

天兒屋根命―藤原氏の祖神
追善―死者を弔ふ事
今ぞ榮えん！「補陀落の南の岸に佛立て〳〵今ぞ榮えん北の藤波」春日の神詠なりと傳ふ

ワヤ次第謠「出づるぞ名殘三日月の、出づるぞ名殘三日月の、都の西に急がん。ワキ、サシ謠「天地の開けし惠久方の、天の兒屋根の御讓、ツレ謠「房前の大臣とは我事なり。さてもみづからが御母は、讃州志度の浦、房前と申す所にて、空くなりたまひぬと、承りて候へば、急ぎ彼の所に下り、追善をもなさばやと思ひ候。ワヤ謠「習はぬ旅に奈良阪や、かへりみかさの山隱す、春の霞ぞ恨めしき。上歌三笠山今ぞ榮えん此岸の、今ぞ榮えん此岸の、南の

日の本のはじめ―諏訪明神先づ淡路島を生み給へるをいふ

海に急がんと、行けば程なく津の國の、こや日の本のはじめなる、淡路のわたり末近く、鳴門の沖に音するは、泊り定めぬ海士小舟、とまり定めぬ海士小舟。詞御急ぎ候ほどに、是は早讃州志度の浦に御著きにて御座候。又あれを見れば男女の差別は知らず人一人來り候。彼の者を御待ち有つて、この所の謂を委しく御尋ねあらうずるにて候。

海士の刈る―古今集の海士の刈る藻にすむ蟲のわれからとの歌を引く

シテ一聲謡「海士の刈る、藻に栖む蟲にあらねども、われから濡らす袂かな。サシ是は讃州志度の浦、寺近けれども心なき、あまのゝ里の海人にて候。げにや名に負ふ伊勢をの海士は夕波の、内外の山の月を待ち、濱萩の風に秋を知る。また須磨の海士人は鹽木にも、若木の櫻を折り持ちて、春を忘れぬたよりもあるに、此浦にては慰みも、名のみあまのの原にして、花の咲く草もなし。何をみるめ刈らうよ。下歌刈らでも運ぶ濱川の、刈らでも運ぶ濱川の、鹽海かけて流れ蘆の、世を渡る業なれば、心なしともいひがたき、あまの里に歸らん。あまのの里に歸らん。

何をみるめ―見る目より海松に言掛く

ワキ詞「いかに是なる女、おことは此浦の海士にてあるか。シテ詞「さん候此浦のかづきの

かづきの海士―波を潜りて海底の物を採る海士のこと

海士にて候。ワキ詞「かづきの海士ならば、あの水底のみるめを刈りて参らせ候へ。シテ詞「痛はしや旅づかれ、飢にのぞませ給ふかや。わが住む里と申すに、かほどいやしき田舎のはてに。謡不思議や雲の上人を、みるめ召され候へ。詞刈るまでもなし此みるめを召され候へ。ワキ詞「いや〳〵さやうの爲にてはなし。あの水底の月を御覽ずるに、海松藻繁りて障りとなれば、刈り除けよとの御諚なり。シテ詞「さては月のため刈り除けよとの御諚かや。昔もさるためしあり。明珠をこの沖にて龍宮へ取られしを、謡かづきあげしも此浦の、地謡「天みつ月も滿潮の、天みつ月も滿潮の、海松藻をいざや刈らうよ。ワキ詞「誓く。何と明珠をかづきあげしも此浦の海士にてあると申すか。シテ詞「さん候此浦の海士にて候。またあれなる里をばあまの里と申して、かの海士人の住み給ひし在所にて候。又是なる島は、彼の珠を取り上げ始めて見そめしによつて、新しき珠島と書いて、新珠島と申し候。ワキ詞「さて其玉の名をば何と申しけるぞ。シテ詞「玉中に釋迦の像まします、いづかたより拜み奉れども同じ面なるによつて、面を向ふに背かずと書いて、

興福寺―春日山の麓にあり不比等の建立

便なや―いとはしの意　恵開けし―賢栄せること

あまり申せば―海士を言掛く

簪木―母を言掛く

面向不背の珠と申し候。ワキ謡「かほどの寶を何とてか、漢朝よりも渡しけるぞ。シテ詞「今の大臣淡海公の御妹は、もろこし高宗皇帝の后に立たせ給ふ。されば其御氏寺なればとて、興福寺へ三つの寶を渡さるゝ。華原磬泗濱石、面向不背の玉、二つの寶は京著し、明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを、大臣御身をやつし此浦に下り給ひ、いやしき海士少女と契をこめ、ひとりの御子を設く。いまの房前の大臣是なり。ツレ詞「やあ是こそ房前の大臣よ。あらなつかしの海士人や。なほ〳〵語り候へ。シテ詞「あら何ともなや、今まではよその事とこそ思ひつるに、さては御身の上にて候ひけるぞや、あら便なや候。ツレ謡「みづから大臣の御子と生れ、恵開けし藤の門、されども心にかゝる事は、此身殘りて母知らず。ある時傍臣語りて曰く、忝くも御母は、讃州志度の浦、房前のあまり申せば恐ありとて言葉を殘す、さては賤しき海士の子、賤の女の腹に宿りけるぞや。上歌地謡「よしそれとても簪木に、よしそれとても簪木に、しばし宿るも月の光、雨露の恩にあらずやと、思へば尊ね來りたり。あらなつかしの海士人やと、御涙を流し給へば、シテ謡「げに

心なき海士衣、地謡「さらでもぬらす我が袖を重ねてしをれとや。かたじけなの御事や、かかる貴人の、賤しき海士の胎内に、宿り給ふも一世ならず。たとへば日月の、潦にうつりて、光陰を增す如くなり。われらも其海士の、子孫と答へ申さんは、事もおろかや我が君の、ゆかりに似たり紫の、藤喰く門の口を閉ぢて、いはじや水鳥の、御主の名をば朽たすまじ。

朽たす―汚すこと

ワキ詞「とてもの事に彼玉をかづきあけし所を、御前にてそと學うで御目にかけ候へ。シテ詞「さらばそと學うで御目にかけ候べし。其時海士人申すやう。もし此玉を取り得たらば、此御子を世繼の御位になし給へと申しょかば、仔細あらじと領承し給ふ。さては我子ゆゑに捨てん命、露ほども惜しからじと、千尋の繩を腰につけ、もし此玉を取り得たらば、此繩を動かすべし、其時人々力を添へ、引きあげ給へと約束し、謡「一のつ利劍を抜きもつて、地謡「かの海底に飛び入れば、空は一つに雲の波、煙の波を凌ぎつょ、海漫々と分け入りて、直下と見れども底もなく、邊も知らぬ海底に、そも神變はいさ知らず、取り

海漫々―白樂天詩ニ海漫々直下無底旁無邊雲煙浪最深處人間中有三神山一

大悲の利劒一瞬音力を劒に譬ふ

得ん事は不定なり。かくて龍宮に到りて、宮中を見れば其高さ、三十丈の玉塔に、かの珠を籠めおき、香花を供へ守護神は、八龍竝み居たり。其外悪魚鰐の口、のがれがたしや我命、さすが恩愛の、故郷の方ぞ戀しき。あの波のあなたにぞ、我子はあるらん、父大臣もおはすらん、さるにても此まゝに、別れはてなん悲しさよと、涙ぐみて立ちしが、又思ひ切りて手を合はせ、南無や志度寺の觀音薩埵の、力をあはせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮の中に飛び入れば、左右へばつとぞ退いたりける其ひまに、寶珠を盜みとつて、逃げんとすれば守護神追つかく。かねて計みし事なれば、持ちたる劒を取り直し、乳の下をかき切り玉を押しこめ、劒を捨てゝぞ伏したりける。龍宮のならひに死人を忌めば、あたりに近づく悪龍なし。約束の繩を動かせば、人々よろこび引きあげたりけり。玉は知らず海士人は、海上に浮び出でたり。

シテ謡「かくて浮は出でたれども、悪龍の業と見えて、五體もつゞかず朱になりたり。珠もいたづらになり、主も空しくなりけるよと、大臣歎き給ふ。其時島の下より申すやう、我

乳のあたりを御覽ぜとあり。げにも劍のあたりたる跡あり、其なかより光明赫奕たる玉を取り出す。さてこそ御身も約束のごとく、此浦の名によせて、房前の大臣とは申せ。今は何をか包むべき、是こそ御身の母海士人の幽靈よ。地謠「此筆の跡を御覽じて、不審をなさで弔へや。今は歸らんあだ波の、夜こそ契れ夢人の、明けて悔しき浦島が、親子のちぎり朝潮の、波の底に沈みけり。立つ波の下に入りにけり。（中入）

ワキ詞「いかに申し上げ候。あまりに不思議なる御事にて候ほどに、御手跡を披いて御覽ぜられうずるにて候。ツレ詞「さては亡母の手跡かと、ひらきて見れば、魂黃壤に去つて一十三年、骸を白沙に埋んで、日月の算を經、冥路昏々たり、我を弔ふ人なし、君孝行たらばわが冥闇をたすけよ。げにそれよりは十三年、地謠「さては疑ふ所なし。いざ弔はん此寺の、志ある手向草、花の蓮の妙經、色々の善をなし給ふ、色々の善をなし給ふ。地謠「寂寞無人聲、後シテ謠「あらありがたの御弔ひやな。此御經にひかれて、五逆の達多は天王記別を蒙り、八歲の龍女は、南方無垢世界に生を受くる。なほ〳〵、展讀し給ふ

明けて悔しき―夜開けて母子相別るゝをいふ

黃壤―黃泉

寂寞無人聲―法華經法師品の文句

五逆の達多―提婆達多の五逆罪を犯したること

天王記別を蒙り―天王如來の籍に入ること

べし。地謡「深達罪福相、遍照於十方、シテ謡「微妙淨法身、具相三十二、地謡「以八十種好、シテ謡「用莊嚴法身、地謡「天神所戴仰、龍人咸恭敬、あらありがたの御經やな。（早舞）シテ謡「今此經の德用にて、地謡「今此經の德用にて、天龍八部、人與非人、皆遙見彼、龍女成佛、さてこそ讃州志度寺と號し、毎年八講朝暮の勤行、佛法繁昌の靈地となるも、此供養と承はる。

深達罪福相云々―法華經提婆品の文句

八講―法華經八卷を毎日朝夕一卷宛講ずる佛事

鞍馬天狗

梗概　牛若丸鞍馬寺に在りし頃、大天狗より兵法の傳授を受け、平家追討の豫言を聞く事を作る。中に張良と黄石公との故事を交へたり。發端を美しき花見の場とせるは、後半の物凄き景と對照の妙を得たり。（五番目より未）

前シテ　客僧　後シテ　大天狗　子方　牛若丸
ワキ　東谷僧　狂言　能力

客僧―修行のため諸國在せる僧

シテ詞「かやうに候者は、鞍馬の奥僧正が谷に住居する客僧にて候。さても當山において、花見の由承り及び候間、立ち越え、よそながら梢をも眺めばやと存じ候。

狂言詞「是は鞍馬の御寺に仕へ申す者にて候。さても當山において毎年花見の御座候。殊に當年は一段と見事にて候。さる間東谷へ唯今文を持ちて參り候。いかに案内申し候。西谷より御使に參りて候。是に文の御座候御覽候へ。何々西谷の花、いまを盛と見えて

花咲かば一頼政の歌末句馬に鞍置け

遥見二人家有花一入不レ論貴賤與二親疎一一朗詠集の詩句

候に、など御音信にもあづからざる。一筆啓上せしめ候。古歌にいはく、謡けふ見ずはくやしからまし花ざかり、詞咲きものこらず散りもはじめず。謡げにおもしろき歌の心、たとひ音づれなくとても、木陰にてこそ待つべきに、上歌「花咲かば告げんといひし山里の、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の空珠櫻、手打栞をしるべにて、奥も迷はじ咲きつづく、木陰に竝み居て、いざ〳〵花をながめん。

狂言「いかに申し候、あれに客僧の渡り候。是は近頃狼藉なる者にて候。追つ立てうずるにて候。ワキ詞「暫く。さすがに此御座敷と申すに、源平兩家の童形達各〳〵御座候に、かやうの、外人は然るべからず候。しかれども又かやうに申せば人を選申すに似て候間、花をば明日こそ御覽候べけれ。まづ〳〵此所をば御立ち有らうずるにて候。狂言詞「いや〳〵それは御諚にて候へども、あの客僧を追ひ立てうずるにて候ワキ詞「いやたゞ御立ち有らうずるにて候。

シテ謡「遥に人家を見て花あれば卽ち入る、論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ、春の習ひ

多聞天―毘沙門に同じ　花の下の云々―平家物語丹波少将都遷りの條にある文句假初の契をいふ　深山櫻―容儀の身を喩ふ

三春―正二三月　樵柴の云々―新古今集に「御狩する狩場の小野の樵柴のなれはまさらで戀ぞまされる」

と聞くものを、浮世に遠き鞍馬寺。本尊は大悲多聞天、慈悲に洩れたる人々かな。牛若詞「げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友、詞それさへ好みはあるものを、あら痛はしや近うよつて花御覽候へ。シテ詞「思ひよらずや松蟲の、音にだに立てぬ深山櫻を、御訪ひの有難さよ此山に、牛若謠「ありとも誰か白雲の、立ち交はらねば知る人なし。シテ詞「誰をかも知る人にせん高砂の、牛若謠「松も昔の、シテ謠「友烏の、地謠「御物笑の種蒔くや、言の葉しげき戀草の、老をな隔てそ垣穗の梅、さてこそ花の情なれ。花に三春の約あり、人に一夜を馴れそめて、後いかならんうちつけに、心空に樵柴の、馴れは增らで、戀のまさらん悔しさよ。

シテ詞「いかに申し候、只今の兒達は皆々御歸り候に、なにとて御一人是には御座候ぞ。牛若詞「さん候只今の兒達は平家の一門、中にも安藝守清盛が子供たるにより、一寺の賞翫他山のおぼえ時の花たり。謠みづからも同山には候へども、よろづ面目もなきことどもにて、月にも花にも捨てられて候。シテ詞「あら痛はしや候、さすがに和上贔、常磐

見る人も云々―古今集の歌末句後ぜさかまし

腹には三界、毘沙門の沙の字をかたどり、御名をも沙那王殿と付け申す。」あら痛はしや御身を知れば、所も鞍馬の木陰の月、地謡「見る人もなき山里の櫻花、よその散りなん後にこそ、唉かばさくべきに、あら痛はしの御事や。

上歌地謡「松嵐花の跡訪ひて、松嵐花の跡訪ひて、雪と降り雨となる、哀猿雲に叫んでは、腸を斷つとかや。心凄のけしきや。夕を殘す花のあたり　鐘は聞えて夜ぞ遲き、奥は鞍馬の山道の、花ぞしるべなる。此方へ入らせ給へや。さても此程御供して、見せ申しつる名どころの、ある時は愛宕高雄の初櫻、比良や横河の遲櫻、吉野初瀬の名所を見のこす方も有らばこそ。

牛若謡「さるにても、如何なる人にましませば、我を慰め給ふらん、御名を名のりおはしませ。」シテ謡「今は何をか包むべき、我此山に年經たる、大天狗は我なり。地謡「君兵法の大事を傳へて、平家を滅し給ふべきなり。さも思召さるれば　明日參會申すべし。さらばといひて客僧は、大僧正が谷を分けて、雲を踏んで飛んでゆく。立つ雲を踏んで飛んで

ゆく。（中入）

牛若一聲謡「さても沙那王がいでたちには、肌には薄花櫻の單に、顯紋紗の直垂の、露を結んで肩にかけ、白糸の腹巻白柄の長刀、地謡「たとへば天魔鬼神なりとも、さこそ嵐の山櫻、華やかなりけるいでたちかな。

後シテ謡「そも〳〵是は、鞍馬の奥僧正が谷に、年經て住める大天狗なり。地謡「まづ御供の天狗は誰々ぞ。筑紫には、シテ謡「彦山の豐前坊、地謡「四州には、シテ謡「白峰の相摸坊、大山の伯耆坊、地謡「飯綱の三郎富士太郎、大嶽の前鬼が一黨、葛城高間、よそまでもあるまじ、邊土においては、シテ謡「比良、地謡「横川、シテ謡「如意が嶽、地謡「我慢高雄の峯に住んで、人の爲には愛宕山、霞とたなびき雲となつて、シテ謡「月は鞍馬の僧正が、地謡「谷に滿ち〳〵峯をうごかし、嵐木枯龍の音、天狗倒しはおびたゞしや。

シテ詞「いかに沙那王殿、只今小天狗を參らせて候に、稽古の際をばなんぼう御見せ候ぞ。

牛若詞「さん候、唯今小天狗ども來り候程に、薄手をも斬りつけ、稽古の際を見せ申したく

薄花櫻―表白裏赤の花の紋

顯紋紗―花の紋ある紗

直垂―上着の袖のくゝり腹巻―鎧にて袖なきもの

四州―四國

飯綱―信濃

前鬼―役行者の使役せし鬼

邊土―近邊の地

天狗倒し―深山に起る嵐の如き物音をいふ

は候ひつれども、師匠にや叱られ申さんと思ひ止まりて候。シテ謡あらいとほしの人や、詞さやうに師匠を大事に思召すに就いて、さる物語の候語つて聞かせ申し候べし。さても漢の高祖の臣下張良といふ者、黄石公に此一大事を相傳す。ある時馬上にて行きあひたりしに、何とかしたりけん左の履を落し、いかに張良あの履取つてはかせよといふ。安からずは思ひしかども履を取つてはかす。又其後以前の如く馬上にて行きあひたりしに、今度は左右の履を落し、やあ如何に張良あの履取つてはかせよといふ。謡猶やすからず、詞思ひしかども、よし〳〵此一大事を相傳する上はと思ひ、落ちたる履をおつとつて、地謡張良履を捧げつよ、張良履を捧げつよ、馬の上なる石公に、はかせけるにぞ心とけ、兵法の奥儀を傳へける。シテ謡其ごとくに和上臈も、地謡其ごとくに和上臈も、さも花やかなる御有樣にて、姿も心も荒天狗を、師匠や坊主と御賞翫は、いかにも大事を殘さず傳へて、平家を討たんと思召すかや。優しの志やな。

上歌地謡抑武略の譽の道、抑武略の譽の道、源平藤橘四家にも取りわき、彼の家の

此一大事―兵法のこと

彼の家の水上―源氏の起り

水上は、清和天皇の後胤として、あら〳〵時節を考へ來るに、驕れる平家を西海に追つ下し、煙波滄波の、浮雲に飛行の自在を受けて、敵を平らけ、會稽を雪がん御身と守るべし。是までなりや、お暇申して立ち歸れば、牛若袂にすがり給へば、實に名殘あり、西海四海の合戰といふとも、影身を離れず、弓矢の力を添へ守るべし、頼めやたのめと夕影くらき、頼めやたのめと夕影鞍馬の、梢に翔つて失せにけり。

定家

梗概

定家は藤原俊成の子にて和歌の名匠たり。嘗て式子内親王と情交あり。後定家の執心葛となりて、内親王の石塔にはひまつはれりと傳ふ。この傳説に據りて、内親王の亡靈、旅僧の回向を受け給ふ事を作る。（鹽物）

前シテ　里女　後シテ　式子内親王
ツレ　旅僧

ワキ次第「山より出づる北時雨、山より出づる北時雨、行方や定めなかるらん。詞是は北國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上り候。道行謡冬立や　旅の衣の朝まだき、旅の衣の朝まだき、雲も行きかふ遠近の、山又山を越え過ぎて、紅葉に殘る眺めまで、花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早都千本のあたりにて有りけに候。暫く此あたりに休らはばやと思ひ候。面白や頃は神無月十日餘、木々の梢も冬枯れて、枝に殘りの紅葉の色、所々の有樣までも、都の景色は

山より出づる云云―行脚僧の行方定めなきを時雨に譬へていふ

時雨を晴らさばや―雨の曇るを待たんとの意

時雨の亭―所在たしかならず

一入の眺め殊なる夕かな。あら笑止や。我に時雨が降り来りて候。是に由有りげなる宿りの候。立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵御僧、何しにその宿りへは立ち寄り給ひ候ぞ。ワキ詞「只今の時雨を晴らさんために立ち寄りてこそ候へ。シテ詞「それは時雨の亭とて由ある所なり。其心をも知し召して立ち寄らせ給ふかと、思へばかやうに申すなり。ワキ詞「實に〳〵是なる額を見れば、時雨の亭と書かれたり。折柄面白うこそ候へ。是は如何なる人の建て置かれたる所にて候ぞ。シテ詞「是は藤原の定家の卿の建て置き給へる所なり。都の内とは申しながら、心凄く時雨物哀れなればとて此亭を建て置き、時雨の頃の年々は、こゝにて歌をも詠じ給ひしとなり。地古跡といひ折からといひ、其心をも知し召して、逆縁の法をも説き給ひて彼御菩提を御弔ひあれと、勧め参らせん其ために、是まで現れ来りたり。ワキ詞「さては藤原の定家の卿の建て置き給へる所かや。さて〳〵時雨をとどむる宿の、歌はいづれの言の葉やらん。シテ詞「いやいづれとも定めなき、時雨の頃の年々なれば、分きてそれとは申

偽のなき世なりけり云々一世の中は偽ある物と思ひしに時雨の時を違へざるを見ては然ちずそは誰が心の誠によるなるらんとなり

し難しさりながら、時雨時を知るといふ心を、謡偽のなき世なりけり神無月、謡誰が誠よりしぐれそめけん。此言書に私の家にてと書かれたれば、もし此歌をや申すべき。

それとなくーその區別分き難くの意

ワキ謡「實にあはれなる言の葉かな。さしも時雨はいつはりの、なき世に殘る跡ながら、シテ謡人はあだなる古事を、語れば今も假の世に、ワキ詞「他生の縁は朽ちもせぬ、是ぞ一樹の陰の宿り、シテ謡「一河の流を汲みてだに、ワキ謡「心を知れと、シテ謡「折からに、上歌地謡「今降るも、宿は昔の時雨にて、宿は昔の時雨にて、心澄みにしその人の、哀を知るも夢の世の、實に定めなや定家の、軒端の夕時雨、舊きに歸る涙かな。庭も籬もそれとなく、荒れのみ增さる叢の、露の宿りもかれ〴〵に、物凄き夕なりけり。物凄き夕なりけり。

式子内親王ー後白河天皇第三の皇女

シテ詞「今日は志す日にて候程に、墓所へ參り候御參り候へかし。ワキ詞「それこそ出家の望みにて候へ。やがて參らうずるにて候。

シテ詞「なう〳〵是なる石塔御覽候へ。ワキ詞「不思議やな是なる石塔を見れば、星霜ふりたるに蔦葛はひまとひ形も見えず候。是は如何なる人のしるしにて候ぞ。シテ詞「是は式子内

定家葛―絡石とも書く　賀茂の齋院なり未婚の皇女にて加茂の齋主なり　下り居させ―齋院を退き給ふこと　心の風吹く山―伊勢物語の「山」　忍ぶの道も―「引く」を引く

親王の御墓にて候。又此葛をば定家葛と申し候。ワキ詞「あら面白や定家葛とは、如何やうなる謂にて候ぞ御物語り候へ。シテ詞「式子内親王始は賀茂の齋の宮に備はり給ひしが、程なく下り居させ給ひしを、定家の卿忍び〳〵の御契淺からず。其後式子内親王程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて御墓にはひ纏ひ、互の苦み離れやらず、謡共に邪淫の妄執を、御經を讀み弔ひ給はど、猶々語り參らせ候はん。クリ地謡「忘れぬ物をいにしへの、心の奥の信夫山、忍びて通ふ道芝の、露の世語りよしぞなき。シテサシ謡「今は玉の緒よ絕えなば絕えねながらへば、地謡「忍ぶる事の弱るなる、心の秋の花薄、穗に出でそめし契とて、又枯々の中となりて、シテ謡「昔は物を思はざりし、地謡「後の心ぞはてしもなき。クセあはれ知れ、霜より霜に朽ち果てよ、世々にふりにし山藍の、袖の涙の身の昔、憂き戀せじと御祓せし、賀茂の齋の宮にしも、そなはり給ふ身なれども、神や受けずもなりにけん、人の契の、色に出でけるぞ悲しき　包むとすれどあだし世の、あだなる中の名は洩れて、よその聞えは大方の、空恐ろしき日の光、雲の通ひ路絕え果てよ、少

歎くとも―定家の歌末句嶺の白雪

女の姿とどめ得ぬ、心ぞつらき諸共に、シテ謡實にや歎くとも、戀ふとも逢はん道やなき、地謡君葛城の嶺の雲と、詠じけん心まで、思へばかゝる執心の、定家葛と身はなりて、此御跡にいつとなく、離れもやらで蔦紅葉の、色焦がれまとはり、荊の髪もむすぼほれ、露霜に消えかへる、妄執を助け給へや。

ロンギ地謡「舊りにし事を聞くからに、今日も程なく呉織、怪しや御身誰やらん。シテ謡「誰とても、亡き身の果は淺茅生の、霜に朽ちにし名ばかりは、殘りても猶よしぞなき。地謡「よしや草葉の忍ぶとも、色には出でよ其名をも、シテ謡今は包まじ、地謡此上は、我こそ式子内親王、是迄見え來れども、誠の姿はかげろふの、石に殘す形だに、それとも見えず蔦葛、苦みを助け給へと、云ふかと見えて失せにけり。云ふかと見えて失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡夕も過ぐる月影に、夕も過ぐる月影に、松風吹きて物凄き、草の蔭なる露の身を、思ひの玉の數々に、弔ふ縁は有難や。弔ふ縁はありがたや。

後シテ謡「夢かとよ闇の現の宇津の山、月にもたどる蔦の細道。昔は松風蘿月に詞を変し、

翠帳紅閨に枕を並べ、地謡「さま〴〵なりし情の末、シテ謡「花も紅葉もちり〴〵に、地謡「朝の雲、シテ謡「夕の雨と、地謡「古事も今の身も、夢も現も幻も、共に無常の、世となりて跡も殘らず、何なか〳〵の草の蔭、さらば蓬の宿ならで、外はつれなき定家葛、是見給へや御僧。ワキ謡「あら痛はしの御有樣やな、あら痛はしや。佛平等說如一味雨、隨衆生性所受不同。

シテ謡「御覽ぜよ身は仇波の立ち居だに、亡き跡までの、苦しみの、定家葛に身を閉ぢられて、かよる苦しみ際なき所に、有難や只今讀誦し給ふは藥草喩品よなう。ワキ謡「なか〳〵なれや此妙典に、洩るよ草木のあらざれば、執心の葛を掛けはなれて、佛道ならせ給ふべし。シテ謡「あら有難や實にも〳〵、是ぞ妙なる法の敎、ワキ謡「昔ざ露の惠みを受けて、シテ謡「二つもなく、ワキ謡「三つもなき、地謡「一味の御法の雨のしたゞり、皆濕ひて草木國土、悉皆成佛の機を得ぬれば、定家葛もかよる涙も、ほろ〳〵と解けひろごれば、よろよろと足弱車の、火宅を出でたる有難さよ。此報恩にいざさらば、ありし雲居の花の袖、

月の顔ばせ―美しき形容
桂の黛―月の桂の語より月のこと
葛城の神姿―前の葛城を見よ

昔を今に返すなる、其舞姫の小忌衣、ヲヲ〳〵「おもなの舞の、地謡「有様やな。（序ノ舞）シテ、ワカ謡「おもなの舞の有様やな、地謡「おもなや、面はゆの有様やな。ヲヲ〳〵「本より此身は、地謡「月の顔ばせも、ヲヲ〳〵「曇りがちに、地謡「桂の黛も、ヲヲ〳〵「落ちぶるよ涙の、地謡「露と消えてもつたなや蔦の葉の、葛城の神姿、恥しやよしなや、夜の契の夢の内にと、有りつる所に歸るは葛の葉の、元の如く、はひ纏はるゝや定家葛、はひ纏はるゝや定家葛の、儚なくも形は埋れて失せにけり。

咸陽宮

梗概　燕の太子丹、秦に質たりしが、逃れ歸りて恨を報いんとし、荊軻、秦舞陽の二人を遣して、始皇を刺さしむ。始皇、花陽夫人に琴曲を奏せしめて之を妨げ、事遂に成らず。此曲は此史談を脚色せり。（五番目）

シテ　秦始皇　シテツレ　花陽夫人　ワキ　荊軻
ワキツレ　秦舞陽　ワキツレ　大臣　狂言　宮人

シテ謡「そも〳〵此咸陽宮と申すは、都のまはり一萬八千三百餘里、地謡「内裏は地より三里高く、雲を凌ぎて築きあげて、鐵の築地方四十里、シテ謡「又は高さも百餘丈、雲路を渡る雁がねも、雁門なくては過ぎがたし。地謡「内に三十六宮あり、眞珠の砂瑠璃の砂、黄金の砂を地には敷き、シテ謡「長生不老の日月まで萱を竝べて夥し。地謡「帝の御殿は阿房宮、銅の柱三十六丈、シテ謡「東西九町、地謡「南北五町、シテ謡「五丈の旗矛、地謡「りうしや雲居、シテ謡「さながら天に、地謡「飄り、上歌登れば玉の階の、登れば玉の階の、

長生不老―長生殿不老門
りうしや―複道を空に架したればそこを通る車を閣車といふなり
築土―外圍の塀

金銀を磨きて輝けり。たゞ日月の影を踏み、蒼天を渡る心地して、おの〳〵肝を消すとかや。おの〳〵肝を消すとかや。

ワキ、秦舞陽「一壁」思ひ立つ、朝の雲の旅衣、落葉重なる嵐かな。ワキ謡「山遠うしては雲行客の跡をうづみ、秦舞陽謡「松高うしては風旅人の夢を破る。ワキ謡「たとひ轅門は高くとも、秦舞陽謡「思ひの末は、ワキ謡「石に立つ、ワキ、秦舞陽上歌謡「やたけの心あらはれて、遠山の雲に日を重ね、やう〳〵行けば名も高き、咸陽宮に著きにけり。咸陽宮に著きにけり。

轅門―軍門

山遠雲埋行客跡、松高風破旅人夢―朗詠集の詩句

ワキ詞「急ぎ候程に、咸陽宮に著きて候。まづ奏聞申さうずるにて候。如何に奏聞申し候。燕の國の傍に、荆軻秦舞陽と申す兩人の者、高札の表にまかせ、燕の指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて、是まで參內申して候。狂言詞「シカ〳〵、大臣詞「何と申すぞ。燕の國の民に、荆軻秦舞陽と申す兩人の者、燕の指圖の箱、ならびに樊於期が首を持ちて參內したると申すか。かゝるめでたき事こそなけれ。やがて奏聞申し候べし。如何に奏聞申し

指圖―地圖

候。燕の國の民に、荊軻秦舞陽と申す兩人のもの、燕の指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて只今參內申して候。シテ詞「何と燕の國の傍に、荊軻秦舞陽と申す兩人のもの、指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて參內したると申すか。大臣詞「さん候。シテ詞「急いで參內させ候へ。大臣詞「畏つて候。只今のよしを奏聞申してあれば、急いで參內させよとの宣旨にて有るぞ。さりながら御大法の如く、太刀刀を汝預かり候へ。狂言詞「畏つて候。如何に方々へ申し候。急いで御參內あれとの御事にて候さりながら、御大法の事にて候間、面々の太刀刀を預かり申して參內させ申せとの御事にて候ぞ。太刀刀を賜はり候へ。ワキ詞「いかに秦舞陽、太刀刀を參らせよと承り候が、何と仕り候べき。樂詞「御大法にて候はど只參らせられ候へ。ワキ詞「さらば參らせうずるにて候。狂言「シカ〳〵。ワキ謠「荊軻は佩劍を解いて威儀をなし、節會の儀式に從ひて、雲上遙に見渡せば、樂謠「金銀珠玉の御階を踏み、三里が間を登り行けば、ワキ謠「薄氷を踏む心地して、荊軻は既に登れども樂謠「跡に立ちたる秦舞陽、身體わなゝき手を押して、登り兼ねてぞ休らひける。ワキ詞「あ

御大法―掟のこと

節會―恒例の朝儀をいふ

甄北磧礫不窺玉淵者未知驪龍之所蟠也―文選左太沖呉都賦の文句てんごくー典獄か

大床―廣間　胡床―床几

あ不覺なりとよ秦舞陽、燕のいやしき仕居にならつて、玉殿を踏む恐ろしさに、謡臆して上りかねけるか。桑詞「それをなさのみ諫め給ひそ。其磧礫に習つて玉淵を窺はざるは、謡驪龍の蟠る所を知らず。地謡「けに理とてんごくは、さしも嚴しき禁中に、轅門を解いて許しけり、轅門を解いて許しけり。

大臣謡「帝は之を聞しめし、臨時の節會を執り行ひ、燕使の參内を待ち給ふ。ワキ謡「舞陽荊軻は大床の、胡床に參著申しけり。桑謡「まづ秦舞陽進み出でて、樊於期が首を皇帝の、上覽に供へ立ちのけば、大臣謡「帝は笑めろ御氣色、御心も釋けて見え給ふ。ワキ詞「其時荊軻進みよつて、燕の指圖の箱の蓋を開き、謡上覽に供へ立ちのけば、シテ詞「不思議やな箱の底に劍の影、氷の如く見えければ、謡既に立去り給はんとす。地謡「荊軻は期したる事なれば、御衣の袖にむんずと縋つて、劍を御胸にさしあて奉りけり。（花陽后謡「あさましや聖人人にまみえずとは、今此時にて有りけるぞや。あらあさましの御事やな。シテ詞「如何に荊軻、秦舞陽もたしかに聞け。我三千人の后を持つ。其中に花陽夫人とて琴の上手あり。

玉の小琴―玉の緒即ち命の語を貫掛く
琴柱に落つる―雁の列を喩ふ

されば毎日怠る事なし。然れども今日は汝等が參内により　いまだ琴の音を聞かず。こととさら今は最期なれば、片時の暇をくれよ。彼琴の音を聞いて、黄泉の道をも免れうずると思ふは如何に。ワキ詞「いかに秦舞陽、さて何と有るべきぞ。秦詞「是程まで手籠申すうへは、片時の暇ならば參らせられ修へ。ワキ詞「さらば片時の御暇を參らせうずるにて候。シテ詞「如何に花陽夫人、急ぎ祕曲を奏し給へ。花陽詞「さらば祕曲を奏すべし。本より妙なる琴の音に、飛ぶ鳥も地に落ち武士も、やはらぐ程の祕曲なれば、ましてや今はの玉の小琴、さこそは御手も盡されけめ。地謡「花の春の琴曲は、花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は同じ曲の囀り、月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風、雲居に渡れる雁がね、琴柱に落つる聲々も、涙の露の玉章、たまさかに、たまさかに、人はよも白糸の、調を改めて、君きけや君きけや、七尺の屏風は、躍らば越えつべし、羅穀の袂をも、引かばなどか切れざらん、謀臣は有無に醉へり、群臣は聖人の御助けと、押し返し押し返し、二三返の琴の音を、君は聞し召されども、荆軻聞きは知らで、たど緩々と侵されて、眠れるが如く

霰の白玉云々―大珠小珠落玉盤と白樂天の琵琶行にある意

なり。時うつる時うつると、祕曲度々重なれば、シテ詞「荊軻が控へたる、地謡「御衣の袖を引つ切つて、屏風を躍り越え、電光の激するよそほひ、霰の白玉盤に落ちて、欄干を走る心地して、銅の御柱に、立ち隠れさせ給ひしかば、ツキ謡「荊軻は怒りをなして、地謡「劍を帝に投け奉れば、番の醫師は、藥の袋を劍に合はせて、投け止めければ、シテ謡「帝又劍を抜いて、地謡「帝又劍を抜いて、荊軻をも秦舞陽をも、八つ裂に裂きたまひ、忽に失しなひおはしまし、其後燕丹太子をも、程なく滅し秦の御代、萬歳を保ち給ふ事、只是れ后の琴の祕曲、ありがたかりけるためしかな。

東岸居士

概　　略

東岸居士は自然居士の弟子、東山雲居寺の僧なり。參禪を業とす。或は羯鼓を打つて踊り或は扇を執つて舞ふ。僧衣を著せず剃髪せず。世の常の沙門に異なり。この曲はその傳記に一遍上人緣起を加味して作りたるものなり。

（四番目）

シテ　東岸居士　　ワキ　旅人

ワキ詞「是は遠國方の者にて候。我此程は都に上り、彼方此方を一見仕りて候。又今日は清水寺へ參らばやと存じ候。

シテ一聲「松をさへ、皆櫻木に散りなして、花に聲ある嵐かな。ワキ詞「是は承り及びたる東岸居士にて渡り候か。さて今日は如何樣なる聽聞の御座候ぞ。シテ詞「事新しら問事かな。聽聞と云つぱ、萬事は皆目前の境界なれば、謠「柳は綠花ば紅、あら面白の春の氣色やな。ワキ謠「あら面白の答へや候。さて此橋は如何なる人の架け給ひたる橋にて候ぞ。

松をさへ云々―松迄も落花にて埋めたるを云ふ

萬事は云々―目前の事物總て悟の種たるを云ふ

シテ詞「是は先師自然居士の、法界無縁の功力を以て、渡し給ひし橋なれば、今又かやうに勧むるなり。ワキ謡「さて〳〵東岸西岸居士の、詞郷里は何處如何なる人の、謡父母を離れし御出家ぞや。シテ謡「むつかしの事を問ひ給ふや。本來きたる所もなければ、出家といふべき謂れもなし。出家にあらねば髪をも剃らず、衣を墨に染めもせで、只おのづから道に入つて、ワキ謡「善を見ても、シテ謡「進まず、ワキ謡「智を捨てよも、シテ謡「愚ならず。ワキ謡「折に觸れ、シテ謡「事に渡りて白川に、ワキ謡「架かれる橋は、シテ謡「西、ワキ謡「東の、地謡「東岸西岸の柳の、髪は長く亂るゝとも、南枝北枝の梅の花、開くる法の一筋に、渡らんための橋なれば、勧めに入りつゝ、彼岸に至り給へや。

ワキ詞「又いつもの如く歌うて御聞かせ候へ。シテ詞「實に〳〵是も狂言綺語を以て、讃佛轉法輪の誠の道にも入るなれば、人の心の花の曲、謡いざや歌はん是とても、上歌地謡「御法の舟の水馴棹、御法の舟の水馴棹、皆彼岸に至らん。シテ謡「面白や是も胡蝶の夢の内、地謡「遊び戯れ舞ふとかや。シテ謡「鈔に又申さく、あらゆる所の佛法の趣き、地謡「箇々縁生の道すぐ

東岸西岸の枘―朗詠集の東岸西岸之枘遥遠不同南枝北枝之梅開落已異を引く

狂言綺語―歌など謡ふこと　枘蝶の夢―莊子夢に胡蝶となりし故事　鈔―佛書の釋文　箇々縁生―圓成とも冠つ一つ〳〵の本心をいふ

正像―正像末の三時の事正法像法の前二期の過ぎたるをいふ

芝蘭の契―親しき交盟簽の衾の下―夫婦のこと

に、今に絕えせぬ跡とかや。シテ、サシ謠「但し正像既に暮れて、末法に生を受けたり。地謠「かるが故に春過ぎ秋來れども、進み難きは出離の道、シテ謠「花を惜しみ月を見ても、起り易きは妄念なり。地謠「罪障の山にはいつとなく、煩惱の雲あつうして、佛日の光晴れ難く、シテ謠「生死の海にはとこしなへに、地謠「無明の波荒くして、眞如の月宿らず。クセ生を受くるに任せて、苦にくるしみを受け重ね、死に歸るに隨つて、闇きより闇きに赴く、六道の衢には、迷はぬ所もなく、生死の樞には、宿らぬ住家もなし。生死の轉變をば夢とやいはん、又現とやせん。是等有りとはいはんとすれば、雲と上り煙と消えて後、其跡を留むべくもなし。無しといはんとすれば、又恩愛の中、心留まつて腸を斷ち、魂を動かさずといふ事なし。彼の芝蘭の契の袂には、屍をば愁嘆の焰に焦がせども、紅蓮大紅蓮の氷をば、終に解かす事なし。鴛鴦の衾の下に眼をば、慈悲の涙に濕せども、焦熱大焦熱の焰をば、終に示す事なし。かよる拙き身を持ちて、シテ謠「生殺偸盜邪淫は、地謠「身に於て作る罪なり。妄語綺語惡口兩舌は、口にて作る罪なり。貪欲嗔恚愚癡は又、心に於

て絶えせず、御法の船の水馴棹、皆彼の岸に至らん。

ワキ詞「とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。シテ詞「面白や松吹く風颯々として、波の聲茫々たり。ワキ謡「所は名におふ洛陽の、詠めも近き白河の、シテ詞「波の鼓や風の篳篥、ワキ謡「打ち連れ行くや橋の上、シテ謡「男女の往來、シテ謡「貴賤上下の、シテ謡「袖を連ねて玉衣の、さゐさゐ沈み浮波の、篳八撥打ち連れて、百千鳥、（羯鼓を打つ）シテ謡「百千鳥囀る春は物毎に、地謡「改まれども我ぞふり行く。シテ謡「行くは白河、地謡「行くは白河の、橋を隔てよ向ひは、シテ謡「東岸、地謡「此方は、シテ謡「西岸、地謡「さど波は、シテ謡「篳地謡「うつ波は、シテ謡「鼓、地謡「いづれもいづれも極樂の、歌舞の菩薩の御法とは、聞きは知らずや旅人よ旅人よ。あら面白や。シテ謡「おょ南無三寶、地謡「實に太鼓も羯鼓も笛篳篥、絃管ともに極樂の、御菩薩の遊びと聞くものを、シテ謡「何と唯、地謡「何と唯、雪や氷と隔つらん。萬法皆一如なる、實相の門に入らうよ、實相の門に入らうよ。

さゐさゐ―衣摺れの音
八撥―羯鼓のこと
百千鳥云々―古今集の歌
實相―眞實の佛道

内十三

龍田

梗概　龍田明神は龍田彦龍田姫を齊ひ祀る。風を司る御神なり。又佐保姫を春の神とし、此神を秋の神として相對せしむ。秋の神なれば、隨て紅葉の神なり。これは龍田社の緣起を說き、神德を讃歎せるめでたき曲也。（四番目）

シテ　龍田姫（前は女）　ワキ　旅僧

ワキ次第「敎の道も秋津國、敎の道も秋津國、數ある法を修めん。詞　是は六十餘州に御經を納むる聖にて候。我此程は南都に候ひて、靈佛靈社殘なく拜み廻りて候。又是より龍田越にかゝり、河內國へと急ぎ候。道行古き名の、奈良の都を立ち出でて、奈良の都を立ち出でて、有明殘る雲間の、西の大寺をよそに見て、早暮れ過ぎし秋篠や、外山の紅葉名に殘る、龍田の川に著きにけり。龍田の川に著きにけり。詞　急ぎ候程に、是は早龍

御經を納むる聖―國々の寺々に法華經を納めて修行する僧をいふ
龍田越―奈良より河內へ越す道
西の大寺―西大寺
秋篠―秋篠寺あり
外山―伊駒山の麓

田川に著きて候。此川を渡り明神に參らばやと思ひ候。

シテ詞「なう其川な渡り給ひそ申すべき事の候。ワキ詞「不思議やな此川を渡り、龍田の明神に參り候所に、何とて其河な渡りそとは承り候ぞ。シテ謡「さればこそ神に參り給ふも、神慮に合はんためならずや。心もなくて渡り給はゞ、謡神も人との中や絶えなん。よくよく案じて渡り給へ。ワキ詞「實に今思ひ出だしたり。龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなんとの、謡古歌の心を思へとや。シテ詞「なか〳〵の事此歌は、紅葉の水に散り浮きて、錦を張れる如くなれば、渡らば錦中や絶えなんとなり。それにつき猶々深き心もあり。紅葉と申すは當社の神體、神の畏れも有るべければと、戒め給ふ心もありワキ謡「實に〳〵それはさる事なれども、紅葉の頃も時過ぎて、河の面も薄氷にて、立つ波までも見えぬなり。許させ給へ渡りて行かん。シテ詞「いや〳〵猶も御科あり。氷にもまた中絶えんとの、其戒めもある物を。ワキ謡「不思議や紅葉の錦ならで、氷にもまた中絶えんとの、謂はいかなる事やらん。シテ詞「紅葉の歌は帝の御製、又其後家隆の歌に、謡龍田

龍田川紅葉亂れて―古今集の歌

家隆―新古今集撰者の一人龍田川紅葉を閉づる云々―家隆の家集壬二集に出づ

川紅葉を閉づる薄氷、詞渡らばそれも中や絶えなんと、謡重ねてかやうによみたれば、必ず紅葉に限るべからず。上歌地謡「氷にも中絶ゆる名の龍田川、中絶ゆる名の龍田川、錦織り掛く神無月の、冬川になるまでも、紅葉をとづる薄氷を、情なや中絶えて、渡らん人は心なや。さなきだに危きは、薄氷を履む理の、たとへも今に知られたり、たとへも今に知られたり。

ワキ詞「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。シテ詞「是は巫にて候。明神へ御参り候はど御道しからへ申し候べし。ワキ詞「あら嬉しや御供申し、宮廻り申さうずるにて候。シテ詞「是こそ龍田の明神にて御入り候へ、よく〳〵御拝み候へ。ワキ詞「不思議やな頃は霜降月なれば、木々の梢も冬枯れて、景色淋しき社頭の御垣に、盛なる紅葉一本見えたり、是は御神木にて候か。シテ詞「さん候當國三の輪の明神の神木は杉なり、當社は紅色に愛で給ふにより、紅葉を神木と崇め参らせ候。ワキ詞「有難や我國々は廻り、今日は又此御神に参る事の有難さよ。謡和光同塵は結縁の始、八相成道は利物の終、下歌地謡「下紅葉、塵に交

龍田川　錦織り掛く神無月―古今集の歌下句しぐれの雨を經緯にして

薄氷を履む―詩經に戰々兢々如臨深淵如履薄氷を引く

巫―神子のこと

霜降月―十一月のこと

和光同塵云々―止觀の文佛の光を和げて塵に交り佛道成就して衆生を濟ふこと

此度は幣取りあへぬ―宮家の歌の心

はる神心、和光の影の色添へて、我等を守り給へや。上歌殊更に此度は、殊更に此度は、幣取りあへぬ折なるに、心して吹け嵐、紅葉を幣の神心、神さび心も澄み渡る、龍田の嶺はほのかにて、河音も猶さえ増さる夕暮、いざ宮廻り始めんとて、名に負ふ龍田山、同かざしの榊葉を、取り〴〵に少女子が、裳裾をはへて袖をかざし、運ぶ歩みの数々に、度重なると見る程に、不思議やな今までは、たゞ巫と見えつるが、我は眞は此神の、龍田姫は我なりと、名乗りもあへず御身より、光を放ちて、くれなゐの袖を打ちかづき、社壇の扉を押し開き、御殿に入らせ給ひけり、御殿に入らせ給ひけり。（中入）

宜禰―巫女

ワキ上歌謡「神の御前に通夜をして、神の御前に通夜をして、有りつる告を待たんとて、袖をかたしき臥しにけり、袖をかたしき臥しにけり。後シテ謡「神は非禮を受け給はず、水上清しや龍田の川、地謡「御殿しきりに鳴動して、宜禰が鼓も聲々に、シテ謡「有明の月燈火の光、地謡「和光同塵おのづから、光も朱の玉垣赫きて、あらたに御神體現れたり。

初初―世の始

シテ謡「我劫初よりこのかた、此秋津洲に地を占めて、御代を守りの御矛を守護し、紅葉の

色も八葉の葉、即ち矛の刃先なるべし。劍の驗僧の法味に引かれて、夜半に神燈明かなり。

八葉―紅葉を連華に比す
劍の驗僧―行法の効驗あるを劍の利きに譬ふ
龍祭の御神―伊勢にあり、廣瀬龍田の神と同體異名

クリ地謡「そも〳〵瀧祭の御神とは、即ち當社の御事なり。シテ謡「昔天祖の詔、地謡「末明かなる御國とかや。シテ、サシ謡「然れば當國寶山に至り。地謡「天地治まる御代のためし、民安全に豐なるも、偏に當社の御故なり。シテ謡「梢の秋の四方の色、地謡「千秋の御影目前たり。クセ「年毎に、もみぢ葉流る龍田川、湊や秋のとまりなる。山も動せず、海邊も波靜にて、たのしみのみの秋の色、名こそ龍田の、山風も靜なりけり。然れば世々の歌人も、心を染めてもみぢ葉の、龍田の山の朝霞、春は紅葉にあらねども、たゞ紅色にめで給へば、今朝よりは、龍田の櫻色ぞ濃き、夕日や花の時雨なるらんと、よみしも紅に、心を染めし詠歌なり。シテ謡「神南備の、御室の岸やくづるらん、地謡「龍田の川の水は濁るとも、和光の影はあきらけき、眞如の月は猶照るや、龍田川紅葉亂れし跡なれや。いにしへは錦のみ、今は氷の下紅葉、あら美しや色々の、紅葉重の薄氷、わたらば紅葉も氷も、重

年經に―古今集貫之の歌末句とまりなるちん
神南備の―拾遺集の歌末句水の濁れる

歌至りて一時の歌殺りて深更となること

ねて中絶ゆべしや、いかで今は渡らん。

シテ謡「さる程に夜神楽の、地謡「さる程に夜神楽の、時移り事去りて、宜禰が鼓も數至りて、月も霜も白和幣、振り上げて聲澄むや、シテ謡「謹上、地謡「再拜。（神樂）シテ謡「久方の月も落ち來る瀧祭。地謡「波の龍田の、シテ謡「神の御前に、地謡「神の御前に散るはもみぢ葉、シテ謡「即ち神の幣。地謡「龍田の山風の時雨降る音は、シテ謡「颯々の鈴の聲、地謡「立つや川波は、シテ謡「それぞ白木綿、地謡「神風松風、吹き亂れ吹き亂れ、もみぢ葉散り飛ぶ木綿附鳥の、御祓も幣も翻へる小忌衣、謹上再拜、再拜々々と、山河草木國土治まりて、神は上らせ給ひけり。

夜討曾我

梗概

曾我兄弟父の仇工藤祐經を討たんとて、富士の裾野の陣屋に斬り込む事を作る。前半、兄弟が母への形見を贈る事あり。前の小袖曾我と關聯す。（四番目）

シテ　五郎時致　ツレ　十郎祐成
ツレ　團三郎　ツレ　鬼王
後ツレ　敵兵　後ツレ　御所の五郎丸

シテツレ四人次第「其名も高き富士の嶺の、其名も高き富士の嶺の、御狩にいざや出でうよ。

十郎詞「是は曾我の十郎祐成にて候。さても我君東八個國の諸侍を集め、富士の卷狩をさせられ候間、我等兄弟も人なみにまかり出で、唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人サシ謡「今日出でていつ歸るべき故郷と、思へば猶もいとどしく、上歌名殘を殘す我が宿の、名殘を殘す我が宿の、垣根の雪は卯の花の、咲き散る花の名殘ぞと、我が足柄や遠かりし、富士の裾野に著きにけり、富士の裾野に著きにけり。

幕を御打たせ―打つは張ること　あらまし―概則　せらこと

ながらへ候べき―生き延ぶべきとなり

形見の物―母へ殘す形見なり

十郎詞「急ぎ候程に、是ははや富士の裾野にて候。いかに時致、然るべき所に幕を御打たせ候へ。シテ詞「畏つて候。十郎詞「いかに時致、今に始ぬ御事なれども、我が君の御威光のめでたさは候。打ち竝べたる幕の内、目を驚かしたる有様にて候。かほどに多き人の中に、我等兄弟が幕の内程物さびたるは候まじ。シテ詞「さん候今にはじめぬ君の御威光にて候。さて彼のあらましは候。十郎詞「あらましとは何事にて候ぞ。シテ詞「あら御情なや、我等は片時も忘るゝ事はなく候。彼の袖經が事候よ。十郎詞「げに〳〵某も忘るゝ事はなく候。さていつをいつまでながらへ候べき、ともかくも然るべきやうに御定め候へ。シテ詞「御諚の如く、いつをいつとか定め候べき、今夜夜討がけに彼者を討たうずるにて候。十郎詞「それが然るべう候。さらばそれに御定め候へ。や、思ひ出だしたる事の候。我等故郷を出でし時、母にかくとも申さず候程に、御歎あるべき事、是のみ心にかゝり候間、鬼王か團三郎か、兄弟に一人形見の物を持たせ、故郷へ歸さうずるにて候。シテ詞「げに是は尤にて候さりながら、一人歸れと申し候はゞ、定めてとかく申し候べし。唯二人ともに御

かへしあれかしと存じ候。十郎詞「尤にて候。さらば二人ともに此方へ参れと御申し候へ。シテ詞「畏つて候。いかに團三郎、鬼王此方へ参り候へ。團三郎詞「畏つて候。シテ詞「團三郎兄弟是へ参りて候。十郎詞「いかに團三郎、鬼王もたしかに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか、又承引すまじきか眞直に申し候へ。團三郎詞「是は今めかしき御諚にて候。何事にても候へ御意を背く事はあるまじく候。十郎詞「あら嬉しや、さては承引すべきか。團三郎詞「畏つて候、何事も御諚をば背き申すまじく候。十郎詞「此上は委しく語り候べし。さても我等が親の敵の事、彼の祐經を今夜夜討かけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば、故郷の母歎き給はん事、あまりにいたはしく候程に、形見の品々を持ちて、二人ながら故郷へ歸り候へ。團三郎詞「是は思ひもよらぬ御諚にて候ものかな。御意も御意にこそより候へ。此年月奉公申し候も、此御大事に眞先かけて討死仕るべき爲にてこそ候へ。何と御諚候とも、此義に於ては罷り歸るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。鬼王詞「なか〳〵の事尤にて候。まかり歸る事はあるまじく候。十郎詞「何と歸るまじいと申すか。團三郎詞「ふ

今めかしき御諚―今更めきたる御語

御意―仰せ

歸るまじい―まじの意を延べてまじいといふふつつと―きつと

詞をかためて―誓ふこと

本意―己が望

つつとまかり歸るまじく候。十郎詞「是はふしぎなる事を申すものかな。さてこそ以前に詞をかためて候に、さてはふつつと歸るまじきか。團三郎詞「さん候。十郎詞「汝はふしぎなる者にて候。なう五郎殿あれを御歸し候へ。シテ詞「畏つて候。やあなにとてまかり歸るまじいとは申すぞ。さやうに申さうずると思召してこそ、始より詞をかためて仰せられ候に、何とて歸るまじいとは申すぞ。しかと歸るまじきか。鬼王詞「まづ畏つたると御申し候へ。團三郎詞「畏つて候。シテ詞「しかと歸らうずるか。團三郎詞「まかり歸らうずるにて候。シテ詞「おゝそれにてこそ候へ。まかり歸らうずると申し候。十郎詞「何と歸らうずると申すか。團三郎詞「さん候。いかに鬼王に申し候。鬼王詞「何事にて候ぞ。團三郎詞「さて何と仕り候べき。まかり歸れば本意に非ず、歸らねば御意に背く、とかく進退こゝに谷つて候。鬼王詞「仰せの如くまかり歸れば本意に非ず、又歸らねば御意に背く。我等も是非を辨へず候。但しきつと案じ出だしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら團三郎殿と是にて刺し違へ候べし。團三郎詞「ゆに〳〵いづくにても命をすつるこ

生々世々―未來

樊噲―漢の高祖の臣

水堂の跡―塞跡

そ肝要なれ、いざさらば刺し違へう。鬼王詞「尤にて候。シテ詞「あゝ誓く。是は何としたる事を仕り候ぞ。十郎詞「やあ兄弟の者歸すまじきぞ歸すまじきぞ。まづ〳〵心を靜めて聞き候へ。今夜此所にて祐經を討ち、我等兄弟空しくならば、さて故郷にまします母には誰か斯くと申すべきぞ。謠敬ふものに從ふは、君臣の禮と申すなり。之を聞かずは生々世々、永き世までの勘當と、上歌地謠「かきくどきのたまへば、かきくどきのたまへば、鬼王團三郎、さらば形見を賜はらんと、云ふ聲の下よりも、不覺の涙せきあへず。クリ地謠「夫れ人の形見をおくりし例には、彼の唐の樊噲が、母の衣を著替へしは、永き世までのためしかや。十郎、サシ謠「今當代の弓取の、母衣とは是を名づけたり。地謠「然れば我等が賤しき身を譬ふべきにはあらねども、恩愛の契のあはれさは、我等を隔てぬ習なり。クセさる程に兄弟、文こまぐ〳〵と書きをさめ、是は祐成が、いまはの時に書く文の、文字消えて薄くとも、形見に御覽候へ。皆人の形見には、手跡に勝る物あらじ。水莖の跡をば、心にかけて弔ひ給へ。老少不定と聞く時は、若き命も賴まれず、老いたるも殘

飛花落葉―無常のたとへに云ふ

縁なくとも―無くともの意　涙を文に巻き籠めて―出典不明

る世の習、飛花落葉の、ことわりと思召されよ。其時時致も、肌の守を取り出だし、是は時致が、形見に御覽候へ。形見は人のなき跡の、思ひの種と申せども、せめて慰むならひなれば、時致は母上に、添ひ申したると思召せ。今までは其主を、守佛の觀世音、此世の縁なくと、來世をば助け給へや。十郎謡「既に此日も入相の、地謡「鐘もはや聲々に、諸行無常と告げ渡る、さらばよ急げ急げ使。涙を文に卷き籠めて、其まゝやる、文の干ぬ間にと、詠ぜし人の心まで、今更思ひ白雲の、かゝるや富士の裾野より、曾我に歸れば兄弟すご〳〵とあとを見送りて、泣きて留まるあはれさよ。泣きて留まるあはれさよ。

（中入）

後ツレ地謡「寄せかけて、打つ白波の音高く、鬨を作つて騒ぎけり。ワキ謡「あら夥しの軍兵やな。詞我等兄弟討たんとて、多くの勢は騒ぎあひて、こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿十郎殿、何とて御返事はなきぞ十郎殿、宵に新田の四郎と戰ひ給ひしが、さては早討たれ給ひたるよな。口惜しや死なば骸を一所とこそ思ひしに、謡物思ふ春の花ざかり、

こゝを先途―最所のこと

散り〴〵になつてこゝかしこに、骸をさらさん無念やな。

上歌地謡「身方の勢は是を見て、身方の勢は是を見て、打物の鍔本くつろげ、時致を目がけてかゝりけり。シテ謡「あら物々しやおのれ等よ、地謡「あら物々しやおのれらよ。先に手並は知るらんものをと、太刀取り直し、立つたるけしき、ほめぬ人こそなかりけれ。かゝりける處に、かゝりける處に、御内方の古屋五郎、樊噲が怒をなし、張良が祕術を盡しつゝ、五郎が面に斬つてかゝる。時致も古屋五郎が抜いたる太刀の、鎬を削り、しばしが程は戰ひしが、何とか斬りけん古屋五郎は、二つになつてぞ見えたりける。かゝりける處に、かゝりける處に、御所の五郎丸、御前に入れたてかなはじものをと、肌には鎧の袖を解き、草摺輕げにざつくと投げかけ、上には藤衣引きかづき、唐戸の脇にぞ待ちかけたる。

シテ謡「今は時致も運槻弓の、地謡「今は時致も運槻弓の、力も落ちて、眞の女ぞと油斷して通るを、やり過し押しならべ、むんずと組めば、シテ謡「おのれは何者ぞ。五郎九謡「御所の五

打物の云々―刀を抜きかゝること物々レ―事々レに同じ

鍔を削り―必死の戰をいふ

藤衣―女の如く破衣をきる

槻弓―強きをかく

郎丸。地謡「あら物々しとわだがみつかんで、えいやえいやと組みころんで、時致上になりける處を、下よりえいやと又押し返し、其時大勢おり重なつて、千條の繩をかけまくも、かたじけなくも君の御前に、追つ立て行くこそめでたけれ。

わだがみ―頭の後方なりうしろがみのことめでたけれ―文意通ぜずうたてけれとあるべけれど憚りて態と此く言ひしならむ

夕顔

梗概

源氏物語を材料とせる曲なり。夕顔上は三位の中將の女也。幼くて父に後れしが、その後頭中將これに通へり。光源氏六條わたりの忍びありきの折たま〳〵夕顔の花咲ける宿にこの女を見それより淺からず契りしが、六條河原の院に會せし一夜夕顔上は物の氣に襲はれて空しくなれり。此曲は夕顔の靈が旅僧の回向を受くる事を作る。玉葛と同巧異曲也。（三番目）

シテ　夕顔の上（前は里女）　ワキ　旅僧

ワキ詞「是は豐後の國より出でたる僧にて候。さても松浦箱崎の誓も勝れたるとは申せども、猶も名高き男山に參らんと思ひ、此程都に上りて候。今日も又立ち出で佛閣に參らばやと思ひ候。サシ謠尋ね見る都に近き名所は、まづ名も高く聞えける、雲の林の夕日影、うつろふ方は秋草の、花紫の野を分けて、上歌賀茂の御社伏し拜み、賀茂の御社伏し拜み、紙の森も打ち過ぎて、歸る宿は在原の、月やあらぬとかこちける、五條あたりのあ

松浦―肥前松浦郡鏡の宮のこと　箱崎―筑前にあり八幡宮　男山―石清水八幡宮　雲の林―雲林院　花紫の野―京都北山の麓なる紫野をいふ　紙の森―下賀茂　月やあらぬ―在原業平の歌を引く

ばら屋の、主も知らぬ所まで、尋ね訪ひてぞ暮らしける。尋ね訪ひてぞ暮らしける。詞「急ぎ候程に、是は早五條あたりにて有りげに候。不思議やなあの屋づまより、女の歌を吟ずる聲の聞え候。暫く相待ち尋ねばやと思ひ候。

シテ謡「山の端の心も知らで行く月は、うはの空にて影や絶えなん。巫山の雲は忽に、陽臺のもとに消えやすく、湘江の雨はしば〳〵も、楚畔の竹を染むるとかや。サシコトは又もとより所も名を得たる古き軒端の忍草、しのぶかた〴〵多き宿を、紫式部が筆の跡に、たど何某の院とばかり、書き置きし世は隔たれど、見しも聞きしも執心の、色をも香をも捨てざりし、下歌涙の雨はのちの世の、障となれば今もなほ、上歌つれなくも、通ふ心の浮雲を、通ふ心の浮雲を、はらふ嵐の風の間に、眞如の月も晴れよとぞ、むなしき空に仰ぐなる。むなしき空に仰ぐなる。

ワキ詞「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「さてこゝをば何くと申し候ぞ。シテ詞「是こそ何某の院にて候へ。ワキ詞「不思議やな何

山の端の云々―六條河原の院にて夕顔の歌詠める歌源氏物語夕顔の巻にあり　巫山の雲―楚の襄王陽臺に幸して夢に神女に逢へる故事　湘江の雨云々―舜の后娥皇女英舜の崩御を哀しみて後を追ひしよりその廟前の竹に斑文を生じたりこれその悲涙のかゝりし名殘なりと傳ふ　しのぶかた〴〵―源氏と夕顔との上を指す　屋づま―軒のこと家といふ程の意

某の山何某の寺は、名の上の唯かりそめの言の葉やらん、又それを其名に定めしやらん承りたくこそ候へ。シテ詞「さればこそ初より、むつかしげなる旅人と見えたれ。紫式部が筆の跡に、唯何某の院と書きて、其名をさだかに顯さず、然れどもこゝは舊りにし融の大臣、住み給ひにし所なるを、其世を隔てゝ光君、謠「また夕顔の露の世に、上なき思ひを見給ひし、名も恐ろしき鬼の形、それもさながら苦むせる、河原の院と御覽ぜよ。ワキ謠「うれしやさては昔より、名に負ふ所を見る事よ。詞「我等も豐後の國の者、其玉葛のゆかりとも、なして今又夕顔の、露きえ給ひし世語を、謠「語り給へや御跡を、及びなき身も弔はん。

鬼の形―夕顔の枕上に女の形の顯れしをいふ

シテ謠「そも〳〵光源氏の物語、言葉幽艶を基として、理淺きに似たりといへども、地謠「心菩提心を勸めて義殊に深し。誰かは假にも語り傳へん。シテ謠「中にも此夕顔の卷は、殊に勝れて哀れなる、地謠「情の道も淺からず、契り給ひし六條の、御息所に通ひ給ふ、よすがに寄りし中宿に、シテ謠「唯休らひの玉鉾の、地謠「便りに立てし御車なり。ツヒ物のあや

六條の御息所―源氏の通ひし方

めも見ぬあたりの、小家がちなる軒のつまに、咲きかゝりたる花の名も、えならず見えし夕顔の、をり過さじとあだ人の、心の色は白露の、情おきける言の葉の、末をあはれと尋ね見し、閨の扇の色異に、互に秋の契とは、なさゞりし東雲の、道の迷の言の葉も、此世はかくばかり、はかなかりける蜉蝣の、命懸けたる程もなく、秋の日やすく暮れはてゝ、宵の間過ぐる故郷の、松のひゞきも恐ろしく、シテ謡「風にまたゝく燈火の、地謡「消ゆると思ふ心地して、あたりを見ればむば玉の、闇の現の人もなく、如何にせんとか思ふ河、うたかた人は息消えて、歸らぬ水の泡とのみ、散りはてし夕顔の、花は再び咲かめやと、夢に來りて申すとて、有りつる女も、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「いざさらば夜もすがら、いざさらば夜もすがら、月見がてらに明かしつゝ、法華讀誦の聲絶えず、弔ふ法ぞ誠なる。弔ふ法ぞ誠なる。

後シテ、サシ謡「さなきだに女は五障の罪深きに、聞くも氣疎き物の氣の、人失ひし有樣を、現

惛おきける言の葉―新古今集に「白雲の惛おきける言の葉やはのゝ」見えし夕顔の花」とあり源氏が夕顔に惛をかけしをいふ　闇の扇―前の班女を見よ　思河―筑前物の氣―人に取憑く惡靈

人失ひしは夕顔の上を取殺したること

す今の夢人の、跡よく弔ひ給へとよ。ワキ謡「不思議やさては宵の間の、山の端出でし月影の、ほの見えそめし夕顔の、末葉の露の消えやすき、本の雫の世語を、かけて現したまへるか。シテ謡「見給へこゝもおのづから、氣疎き秋の野らとなりて、ワキ謡「池は水草に埋もれて、古りたる松の陰暗く、シテ謡「又鳴き騒ぐ鳥のから聲、身にしみ渡るをりからを、ワキ謡「さも物凄く思ひ給ひし、シテ謡「心の水は濁江に、引かれてかゝる身となれども、優婆塞が行ふ道をしるべにて、地謡「來ん世も深き契絶えすな。來ん世も深き契絶えすな。シテ謡「御僧の今の弔ひを受けて、地謡「御僧の今の弔ひを受けて、かず〳〵うれしやと。シテ謡「夕顔の笑の眉、地謡「開くる法華の、シテ謡「花房も、地謡「變成男子の願のまゝに解脫の衣の袖ながら、今宵は何を包まんと、言ふかと思へば音羽山、嶺の松風通ひ來て、明け渡る横雲の、迷ひもなしや東雲の、道より法に出づるぞと、明けぐれの空かけて、雲の紛れに失せにけり。

末葉の露云々―僧正遍昭の「末の露本の雫や世の中の後れ先立つ例なるらん」を引く

優婆塞が云々―夕顔の卷なる源氏の歌也、末句叡慮ふな、優婆塞は善男なり佛の弟子をいふ

隅田川

梗概

梅若丸といふ童子、人商人に誘拐せられ都より奥州へ下る途中、隅田川の堤にて煩ひて失せぬ。母なる人、その跡を慕ひて物狂となり遙々こゝに尋ね來り、たま〳〵その一周忌に當る日、船中にて事の由を聽き、悲しみ歎きて、跡を弔ひしに、梅若丸の亡靈現れ出づる事を作る。世にも哀れなる物語なり。伊勢物語の業平東下りの和歌文句を以て文を飾れり。（四番目）

シテ　梅若丸母　子方　梅若丸幽靈
ワキ　渡守　ツレ　旅人（男）

此在所に一本母きの梅若塚をさす

ワキ詞「是は武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる仔細有つて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。其由皆々心得候へ。

男次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞かやうに候者は、都の者に

あと遠山―朗詠　集の山遠雲埋　行客跡の意

人の親の―後撰　集の歌末句迷ひぬるかな　思ひ白雪―思ひ知られぬる〳〵意をかけたり　聞くや如何に―新古今集の歌末句習ひあり

て候。われ東に知る人の候程に。彼の者を尋ねて只今まかり下り候。道行謡雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、幾關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名に負ふ隅田川。渡りに早く著きにけり。渡りに早く著きにけり。詞急き候程に、是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。ツヤ詞「なか〳〵の事召され候へ。先々御出で候あとの、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ツレ詞「さん候。都より女物狂下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ツヤ詞「さやうに候はゞ、暫く舟を留めて、彼の物狂を待たうずるにて候。

シテ、サシ謡「實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行人に言傳てよ、行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に上の空なる風だにも、地謡「松に音する習あり。シテ謡「眞葛が原の露の世に、地謡「身を恨みてや明け暮れん。シテ謡「是は都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、行方を

聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。地謡「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌地謡「もとよりも、契假なる一つ世の、契假なるひとつ世の、其中をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん、武藏國と、下總の中にある、隅田川にも著きにけり。隅田川にも著きにけり。

シテ詞「なう〳〵我をも舟に乘せて給はり候へ。ワキ詞「お事は何くより何方へ下る人ぞ。シテ詞「是は都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ詞「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には乘せまじいぞとよ。シテ詞「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ。謡かたの如くも都の者を、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事を宣ひそよ。ワキ詞「實に〳〵都の人とて、名にし負ひたる優しさよ、シテ詞「なう其詞はこなたも耳にとまるものを、彼業平も此渡りにて、謡名にし負はゞ、いざ事問はん都鳥、我が思ふ人は有りやなしやと。詞「なう舟人、あれ

契假なる一つ世―親子の緣の一世だけに止るを云ふ

四鳥の別れ―椙山の四鳥羽翼成りて親鳥の許を別れ行くをいふ

武藏の國と云々―伊勢物語の文句を引く

日も暮れぬ云々―同上

名にし負はゞ―伊勢物語にあり業平東下りの折の歌

に白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ謡「あれこそ沖の鷗候よ。シテ詞「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ、など此隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ謡實に〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ謡「沖の鷗と夕波の、ワキ謡「昔にかへる業平も、シテ謡「有りや無しやと事問ひしも、ワキ謡「都の人を思ひ妻、シテ謡「わらはも東に思ひ子の、ゆくへ尋ね問ふは同じ心の、ワキ謡「妻を忍び、シテ謡「子を尋ぬるも、ワキ謡「思ひは同じ、シテ謡「戀路なれば、地謡「我も又、いざ言問とはん都鳥、いざ言問はん都鳥、我思ひ子は東路に、有りやなしやと問へども問へども、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟競ふ、堀江の川の水際に、來居つゝ鳴くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川の東まで思へば限なく、遠くも來ぬる物かな。さりとては渡守、舟こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守、さりとては乘せてたび給へ。ワキ詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乘り候へ。此渡は大事の渡にて候。かまへて靜に召され候へ。

舟競ふ―萬葉集の歌末句都鳥かす

限なく遠くも云云―以下伊勢物語の文句を引く

ツレ詞「なうあの向ひの柳の本に、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ詞「さん候あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。此舟の向ひへ著き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。語さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候、人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、此幼き者、いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此河岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、此幼き者をば其まよ路次に捨てよ、商人は奥へ下つて候。さる間此邊の人々、此幼き者の姿を見候に、よし有りげに見え候程に、さまざまに痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しょ人の唯ひとり子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候、都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊に築き籠めて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに

奥—奥州
違例—病氣
前世の事—前世より定まりたる因緣
たんだ—唯
足手影—手足の影
築き籠めて—死骸を葬りて塚を築くこと

申し、念佛四五返唱へ遂に事終つて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が著いて候。とう〳〵御上り候へ。ッレ詞「如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ詞「如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ急いで上り候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。シテ詞「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ詞「去年三月今日の事にて候。シテ詞「さて其兒の年は。ワキ詞「十二歳。シテ詞「主の名は、ワキ謡「梅若丸。シテ詞「父の名字は。ワキ詞「吉田の何某。シテ詞「さて其後は親とても尋ねず、ワキ詞「親類とても尋ねこず、シテ詞「まして母とても尋ねぬよなう。ワキ詞「思ひもよらぬ事。シテ謡「なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう是は夢かやあらあさましや候。ワキ詞「言語道斷の事にて候物かな。今まではよその事とこそ存じて候へ、さては御身の子にて候ひけるぞ

や、あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし、こなたへ御出で候へ。

シテ謡今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて、生所を去つて東のはての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此下にこそ有るらめや。地謡「さりとては人々此土を、かへして今一度、此世の姿を、母に見せさせ給へや。上歌残りても、かひ有るべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、有るはかひなき帚木の、見えつ隠れつ面影の定めなき世の習、人間憂ひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。實に目の前のうき世かな、げに目の前のうき世かな。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。謡既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勤むれば、シテ謡「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、只ひれふして泣き居たり。ワキ詞「うたてやな餘の人多くましますとも母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふ

道のほとりの土―白樂天の詩に化作路傍土年々草生

帚木―信州園原にあり遠くより帚の如くみえ近くにては無きが如しと傳ふる木

母を言掛く

人間憂ひの花盛―愁の絶えずはかなきを花の盛の散り易きに喩ふ

無常の嵐―死期の迫ひ來るを花に嵐と喩ふ

生死長夜の月の影―生死の迷を長夜の夢に譬ふ

鳧鐘―こゝにては鉦のことにいへり

ます鏡―眞澄の鏡思ひは増すと鍛けたり

べけれと、地謡鉦鼓を母に參らすれば、シテ謡我が子の爲と聞けばげに、此身も鳧鐘を取り上けて、ワキ謡歎きをとゞめ聲澄むや、シテ謡月の夜念佛もろともに、ワキ謡心は西へと一すぢに、シテ謡南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、地謡南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謡隅田河原の波風も、聲立て添へて、地謡南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謡名にし負はゞ、都鳥も音を添へて、子方地謡南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞なう〳〵今の念佛の内に、正しく我子の聲の聞え候。此塚の内にて有りげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし、母御一人御申し候へ。シテ謡今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子謡南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地謡聲の内より、幻に見えければ、シテ謡あれは我子か、子謡母にてましますかと。地謡互に手に手を取りかはせば、又消え〳〵となり行けば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ、隱れつする程に、東雲の空もほの〴〵と明け行けば跡絶えて、我が子と見

えしは塚の上の、草茫々として只、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ。なるこそあはれなりけれ。

雲林院

梗概　雲林院は昔淳仁帝の離宮にして、常康親王の傳領たり、其後御願寺となる。紫野に在り。此曲は津の國声屋の里の公光といふ者平素伊勢物語を好み、靈夢を受けて、都に上り、雲林院に詣でしに、業平靈現れて物語の故實を語る事を作る。此物語の賞翫せられ、崇拜せられし時代の反映ならむ。

（四番目）

シテ　在原業平（前は老翁）　ワキ　公光

ワキ次第謡「藤咲く松も紫の、藤咲く松も紫の、雲の林を尋ねん。詞是は津の國蘆屋の里に、公光と申す者にて候。我幼かりし頃よりも、伊勢物語を手馴れ候處に、ある夜不思議なる靈夢を蒙りて候程に、只今都に上らばやと存じ候。サシ謡花の新に開くる日初陽潤へり、鳥の老いて歸る時、薄暮曇れる春の夜の、月の都に急ぐなり。下歌蘆屋の里を立ち出でて、我は東に赴けば、名殘の月の西の海、汐の蛭子の浦遠し、汐の蛭子の浦遠

雲の林―寺の名の文字を出す

花新開日初陽潤　鳥老關時薄暮陰―朗詠集の詩句

蘆屋の里―業平の領所なれば縁として謂ひけり

蛭子―汐の干るに掛けたり

し。上歌 松陰に、煙をかづく尼が崎、煙をかづく尼が崎、暮れて見えたる漁火の、あたりを問へば難波津に、咲くや木の花冬ごもり、今は現に都路の、遠かりし、ほどは櫻にまぎれある、雲の林に著きにけり。雲の林に著きにけり。

ワキ謡「遙に人家を見て花あればすなはち入るなればと、木陰に立ち寄り花を折れば、シテ詞「誰そやう花折るは、今日は朝の霞消えしまよに、夕の空は春の夜の、殊に長閑に眺めやる、嵐の山は名にこそ聞け　謡誠の風は吹かぬに、詞花を散らす鶯の、羽風に落つるか、松の響か、人か、謡それかあらぬか木の下風が、あら心もとなと散らしつる花や。詞やされば　こそ人の候。落花狼藉の人そこのき給へ。ワキ詞「それ花は乞ふも盗むも心有り。とても散るべき花な惜み給ひそ。シテ詞「とても散るべき花なれども、花に憂は嵐それも花ばかりをこそ散らせ、御事は枝ながら手折れば、風よりも猶憂き人よ。ワキ詞「何とて素性法師は、見てのみや人に語らん櫻花、手毎に折りて家土産にせんとは詠けるぞ。シテ詞「さやうに詠むも有り、又ある歌に、謡春風は花のあたりをよぎて吹け　詞心づからやうつ

難波津に―古歌下句今は春べと咲くやこの花

遙見入家花便入―白樂天の詩句

落花狼藉―花折る人の亂暴なること

見てのみや云々―古今集に出づ春風は云々―同上藤原好風の歌

春の夜の一時を一蘇東坡の詩に春宵一刻値千金花有清香月有陰千顆萬顆の玉一朗詠集の語を引く

花物いはぬ一朗詠集に誰謂花不語輕濕漲漲動唇輕濕は小波唇は水中の花をいふ

ろふと見ん。實にや春の夜の一時を千金に替へじとは、花に清香月に陰、千顆萬顆の玉よりも、寶と思ふ此花を、謡折らせ申す事は候まじ。ワキ謡實に〳〵是は御理、花物いはぬ色なれば、人にて花を戀衣、シテ詞「輕濕漲して影唇を動かせば、謡我は申さずとも、ワキ謡「花も惜しきと、シテ謡「いつつべし。上歌地謡「實に枝を惜しむは又春のため、手折るは見ぬ人の爲、惜しむも乞ふも情あり。二つの色の爭ひ、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なる。都ぞ春の錦なる。

シテ詞「いかに旅人、御身は何方より來り給ふぞ。ワキ詞「是は津の國蘆屋の里に、公光と申す者にて候が、我幼かりし頃よりも、伊勢物語を手馴れ候處に、ある夜の夢に、とある花の陰よりも、紅の袴召されたる女性、束帶たまへる男、伊勢物語の草子を持ち竹み給ふを、あたりにありつる翁に問へば、あれこそ伊勢物語の根本、在中將業平、女性は二條の后、所は都北山陰、紫の雲の林と語ると見て夢覺めぬ。餘りにあらたなる事にて候程に、是まで參りて候。シテ詞「さては御身の心を感じつよ、伊勢物語を授けんとなり。今

二條の后—清和帝の皇后

宋帝—此下「レ」字脫せるか

宵はこよに臥し給ひ、別れし夢を待ち給へ。ワキ謡「嬉しやさらば木の本に、袖を片敷き臥して見ん。シテ詞「其花衣を重ねつよ、又寝の夢を待ち給はど、などか疑のなかるべき。ワキ謡「かやうに委しく教へ給ふ、御身は如何なる人やらん。シテ詞「其様年の古びやう、昔男となど知らぬ。ワキ謡「さては業平にてましますか。シテ謡「いや、上歌地謡「我が名を何とゆふばえの、我が名を何とゆふばえの、花をし思ふ心故、木隠れの月に現れぬ。誠に昔を戀衣、一枝の花の蔭に寝て、我有様を見給はど、其時不審を晴らさんと、ゆふべの空の一霞、思ほえずこそなりにけれ、思ほえずこそなりにけれ。（中入）

ワキ上歌謡「いざさらば、木蔭の月に臥して見ん、木蔭の月に臥して見ん。暮れなばなげの花衣、袖を片敷き臥しにけり、袖を片敷き臥しにけり。

後シテ聲謡「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我身ひとつはもとの身にして。

ワキ謡「不思議やな雲の上人匂やかに、花にうつろひ現れ給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「今は何をか包むべき、昔男の古を、語らん爲に來りたり。ワキ謡「さらば夢

曾男―伊勢物語に業平の事を曾男ありけりと書出せり

月やあらぬ―伊勢物語にあり業平述懐の歌

中に伊勢物語の其品々を語り給へ。シテ詞「いで〳〵さらば語らんと、謡「花の嵐も聲添へて、ワキ謡「其品々を、シテ謡「語りけり。クリ抑〳〵この物語は、いかなる人の何事によつて、地謡「思ひの露を染めけるぞと、云ひけん事も理なり。シテ・サシ謡「まづは弘徽殿の細殿に、人目を深く忍び、地謡「心の下簾の、徒然と人は佇めば、我も花に心を染みて、共にあくがれ立ち出づる。クセ二月や、まだ宵なれど月は入り、我等は出づる戀路かな。抑日の本の、中に名所と云ふ事は、我大内にあり。彼の遍昭が連ねし、花の散り積る、芥川を打ち渡り、思ひ知らずも迷ひ行く、かづける衣は紅葉重ね、緋の袴踏みしだき、誘ひ出づるやまめ男、紫の一もとゆひの藤袴、しをるゝ裾をかい取つて、シテ謡「信濃路や、地謡「園原茂る木賊色の、狩衣の袂を、冠の巾子にうちかづき、忍び出づるや二月の、黄昏月も早入りて、いとど朧夜に、降るは春雨か、落つるは涙かと、袖打拂ひ裾を取り、しをしをすご〳〵と、たどり〳〵も迷ひ行く。シテ謡「思ひ出でたり夜遊の曲、地謡「返す眞袖を月や知る。（序ノ舞地謡「夜遊の舞樂も時移れば、夜遊の舞樂も時移れば、名殘の月も山蔭の

弘徽殿―后の御殿細殿は廊下

彼の遍昭が連ねし―言葉を連ぬること詠歌をいふ即ち「散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな」を指す芥川は業平の伴ひし女の絶え入りし所

木賊色―黄青黒の三色あり黒木賊は老色也

山藍―白地に藍にて模様を摺る

羽袖、かへすや夢の黄楊の枕、此物語語るとも盡きじ。シテ謡「松の葉の散り失せず、地謡「松の葉の散り失せず、末の世までも情知る、言の葉草のかりそめに、かく顯はせるいにしへの、伊勢物語かたる夜もすがら、覺むる夢となりにけりや　覺むる夢となりにけり。

内十四

春日龍神

梗概　明惠上人、名は高辨幼にして高尾に上り、修學し、後栂の尾に居る。寛喜四年示寂。嘗て入唐渡天の望あり、たま〳〵春日明神の神託によりて之れを止むといふ事、古今著聞集にあり。この趣を作曲せるものなり。後段龍神の化現を示す。惟ふに我國佛法繁昌の時勢の反映か。白樂天の曲と併せて國民的自覺の聲を聽くが如し。（五番目）

シテ　龍神（前は宮守）　ワキ　明惠上人

ワキ次第謠　月の行方も其方ぞと、月の行方も其方ぞと、日の入る國を尋ねん。詞　是は栂尾の明惠法師にて候。我入唐渡天の志有るにより、御暇乞のために春日の明神に參らばやと思ひ、只今南都に下向仕り候。道謠　愛宕山、樒が原をよそに見て、樒が原をよそに見て、月に雙の岡の松、緣の空も長閑なる都の山を跡に見て、是も南の都路や、奈良坂越えて

月の行方も云々―西方の國々を指していふ　渡天の志―支那天竺に渡らんとの志　樒か原―愛宕の内　雙の岡―仁和寺の南

三笠山、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。

シテ「謡」晴れたる空に向へば、和光の光あらたなり。ツレ夫れ山は動ざる形を現じて、古今に至る神道を表し、里は平安の儘を見せて、人間長久の聲滿てり。誠に御名も久方の天の兒屋根の世々とかや。下歌月に立つ、かけも鳥居の二柱、上歌御社の、誓もさぞな四所の、誓もさぞな四所の、神の代よりの末受けて、澄める水屋の御影まで、塵に交はる神心、三笠の森の松風も、枝を鳴らさぬ氣色かな。枝を鳴らさぬ氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる宮奴に申すべき事の候。シテ詞「や、是は栂尾の明恵上人にて御座候ぞや。只今の御參詣さこそ神慮に嬉しく思召し候らん。ワキ詞「さん候只今參詣申す事餘の儀にあらず。我入唐渡天の志あるにより、御暇乞のために只今參りて候。シテ詞「是は仰にて候へども、さすがに上人の御事は、年始より四季折々の御參詣の、時節の少し遲速をだに、待ち兼ね給ふ神慮ぞかし。されば上人をば太郎と名付け、笠置の解脱上人をば次郎と頼み、雙の眼兩の手の如くにて、晝夜各參の擁護懇なるとこそ承りて候

動ざる—今どうざると謡ふ、動ぜざるの意

二柱—鳥居の兩方の柱をさす

四所—春日の四座の神

水屋—春日の末社水屋明神のこと

少しの—今は少しの二字を脱す

解脱上人—名は貞慶建保元年寂す

に、日本を去り入唐渡天し給はん事、いかで神慮に適ふべき。只思召しとまり給へ。

ワキ詞「實に〳〵仰はさる事なれども、入唐渡天の志も、佛跡を拜まんためなれば、何か神慮に背くべき。シテ詞「これ又仰とも覺えぬものかな。佛在世の時ならばこそ、見聞の益も有るべけれ。今は春日の御山こそ、卽ち靈鷲山なるべけれ。其うへ上人初參の御時、

謠　奈良坂の此手を合せて禮拜する、人間は申すに及ばず心なき、上歌地謠「三笠の森の草木の、三笠の森の草木の、風も吹かぬに枝を垂れ、春日山、野邊に朝立つ鹿までも、皆ことごとく出で向ひ、膝を折り角を傾け、上人を禮拜する、かほどの奇特を見ながらも、眞の淨土は何處ぞと、問ふは武藏野の、果しなの心や。只返す返す我が賴む、神のまにまに留りて、神慮をあがめおはしませ。神慮をあがめおはしませ。

ワキ詞「猶々當社の御事委しく御物語り候へ。シテ・ツレ地謠「しかるに入唐渡天といつぱ佛法流布の名を留めし、地謠「古跡を尋ねんためぞかし。天台山を拜むべくは、比叡山に參るべし、五臺山の望あらば、吉野筑波を拜すべし。シテ地謠「昔は靈鷲山、地謠「今は衆生を度せ

此手を合せて―奈良坂のこのて柏といふ語を以て續けたり

天台―唐土にあり智顗禪師といふ　五臺山―清凉山ともいふ文殊菩薩此に居る

んとて、大明神と示現し、此山に宮居し給へば、シテ謡「即ち驚の御山とも、地謡「春日の御山を拜むべし。クセ我を知れ、釋迦牟尼佛世に出でて、さやけき月の世を照らすとはの、御神詠もあらたなり。然れば誓ある、慈悲萬行の神德の、迷を照らす故なれや、小機の衆生の益なきを、悲み給ふ御姿、瓔珞細輭の衣を脫ぎ、麁弊の散衣を著しつゝ、四諦の御法を說き給ひし、鹿野苑もこゝなれや。春日野に起き臥すは、鹿の苑ならずや。シテ謡「其外當社の有樣の、地謡「山は三笠に陰さすや、春日そなたに現れて、誓を四方に春日野の、宮路も末あるや、曇なき西の大寺月澄みて、光ぞまさる七大寺、御法の花も八重櫻の、都とて春日野の、春こそ長閑かりけれ。

ワキ詞「實に有難き御事かな、卽ち是を御神託と思ひ定めて、此度の入唐をば思ひ止まるべし。さて〳〵御身は如何なる人ぞ、御名を名のり給ふべし。シテ詞「入唐渡天をとゞまり給はど、三笠の山に五天竺を寫し、所耶の誕生伽耶の成道、鷲峰の說法、地謡「雙林の入滅まで、悉く見せ奉るべし。暫くこゝに待ち給へと、木綿四手の神の告、我は時風秀

我を知れ―續古今集に春日明神の御歌として載す　慈悲萬行―春日明神の誓願號　小機―凡夫の小乘の機をいふ　四諦―苦集滅道の四つ一切衆生をして生死を出離せしむる說法　鹿野苑―天竺波羅奈國にあり釋日野を之に比ず　七大寺―東大、西大、興福、元興、安藥師、法隆、の七箇寺　五天竺―天竺を中西南北中の五に分ちていふ　摩耶―釋迦の母伽耶―中天竺の地名　雙林―跋提河の邊の娑羅雙樹の林　時風秀行―此の人春日明神の鹿島よりこゝに遷ちれしをりに供人たりしかぜをトキフウと讀ふ

行ぞとて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワヤ上歌謡「神託まさにあらたなる、神託まさにあらたなる、聲の内より光さし、春日の野山金色の、世界となりて草も木も、佛體となるぞ不思議なる、佛體となるぞ不思議なる。

地謡「時に大地震動するは、下界の龍神の參會か。後シテ謡「すは八大龍王よ。地謡「難陀龍王、シテ謡「跋難陀龍王、地謡「婆伽羅龍王、シテ謡「和修吉龍王、地謡「德叉迦龍王、シテ謡「阿那婆達多龍王、地謡「百千眷屬引き連れ引き連れ、平地に波瀾を立てゝ、佛の會座に出來して、御法を聽聞する。シテ謡「其外妙法緊那羅王、地謡「又持法緊那羅王、シテ謡「樂乾闥婆王、地謡「樂音乾闥婆王、シテ謡「婆稚阿脩羅王、地謡「羅睺阿脩羅王の、恒沙の眷屬引き連れ引き連れ、是も同じく座列せり。地謡「龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、白妙なれやわだの原の、拂ふは白玉立つは綠の、空色も映る海原や　沖行く計月の御舟の、佐保の川面に浮み出づれば、シテ謡「八大龍王、（舞）八大龍王は、地謡「八つの冠を傾け、所は春日野の、月の三笠の雲に上り、飛火の野守も出でて見よや、摩耶の誕生鷲峰の說法、雙

八大龍王―本文には六大龍王を掲げて摩那斯優鉢羅の二龍王を洩せり

恒沙―恒河の沙夥しき數の形容

林の入滅悉く終りて、是までなりや明恵上人、さて入唐は、ワキ「とまるべし。地謡「渡天は如何に。ワキ「渡るまじ。地謡「さて佛跡は。ワキ「尋ねまじや。地謡「尋ねても尋ねても、此上嵐の雲に乗りて、龍女は南方に飛び去り行けば、龍神は猿澤の、池の青波蹴立て蹴立てよ、其丈千尋の大蛇となつて、天に群かり地に蟠りて、池水を返して失せにけり。

船橋

概　楪

萬葉集に「かみつけぬ佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかなくに」と有るは、舟橋にこと寄せて戀を詠ぜし歌なるが、之れを本として、忍び妻に通ひし男の溺死せる事に取成して作れり。（五番目）

シテ　里男（後は亡者）　ツレ　里女

ワキ　山伏

ワキ次第謡「山又山の行く末や、山又山の行く末や、雲路のしるべなるならん。詞　是は三熊野より出でたる客僧にて候。我未だ松島平泉を見ず候程に、此春思ひ立ち松島平泉へと急ぎ候。道行謡　幾瀬渡りの野洲の川、幾瀬渡りの野洲の川、彼七夕の契待つ、年に一夜はあだ夢の、醒が井の宿を過ぎ、膽吹おろしの音にのみ、月の霞むや美濃尾張、老を知れとの心かな、老を知れとの心かな。詞　急ぎ候間、是は早上野の國佐野と申す所に著きて候。此所にて宿を借らばやと存じ候。

野洲の河―近江

佐野―高崎の附近

法に依る云々―船橋を造りて衆生を渡す者は来世に福徳を受くとの經文による　夢の浮橋―もと吉野の夢の渡りの浮橋のことよりしてたゞ夢のごとくにいふ　二河の流れ―瞋恚火にて成れる火河と貪愛水にて成れる水河とを云ふ　渡瀬川佐野川の二流を譬ふ　十の道―十惡の事　橋の勸め―勸めは勸進客進

シテ、ツレ一聲謡「法に依る、道ぞと作る舟橋は、後の世かくる頼みかな。シテサシ謡「往事渺茫として何事も、見残す夢の浮橋に、シテ、ツレ謡「なほ數添へて舟競ふ、堀江の川の水際に、寄るべ定めぬあだ波の、浮世に歸る六つの道、遁れかねたる心かな。下歌戀しき物をいにしへの、跡はるゝと思ひやる、上歌前の世の、報のまゝに生れ來て、報のまゝに生れ來て、心にかけばとても身の、生死の海を渡るべき、船橋を造らばや。二河の流はありながら、科は十の道多し。誠の橋を渡さばや、まことの橋を渡さばや。シテ詞「如何に客僧、橋の勸めに入りて御通り候へ。ワキ詞「見申せば俗體の身として、橋興立の志返すゝも優しうこそ候へ。シテ詞「是は仰とも覺えぬ物かな。必ず出家にあらねばとて志のあるまじきにても候はず。まづ勸めに入りて御通り候へ。ワキ詞「勸めには參り候べし。さて此橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ぞ。シテ詞「萬葉集の歌に、東路の佐野の船橋取りはなし、よめる歌の、心をば知し召し候はずや。ツレ謡「いや左樣に申せば恥かしや、身のいにしへも淺間山、シテ詞「こがれ沈みし此河の、シテ、ツレ謡「さのみは申さ

三瀬川―三途の川　親し離くれば！萬葉集の詞を少し變へたり

一言葉―一言主神を言掛く

所は同じ名の―定家の歌に「跼とめて袖打拂ふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮」といへるは大和の地なるをいふ

じさなきだに、苦しみ多き三瀬川に、浮む便りの船橋を、渡して賜ばせ給へとよ。ヲヤ詞「げにげに親し離くればの物語。謡　さては古りにし船橋の、主を助けん其ためか。シテ詞「殊更是は山伏の、橋をば渡し給ふべし。ヲヤ謡「そも山伏の身なればとて、取り分き橋を渡すべきか。シテ詞「さのみな爭ひ給ひそとよ、役の優婆塞葛城や、祈りの久米路の橋は如何に。ツレ謡「たとふべき身にあらねども、我も女の葛城の神、シテ詞「一言葉にて止むまじや、只幾度も岩橋の、ツレ謡「など御心にかけ給はぬ。シテ、ツレ謡「さりながらよそにて聞くも葛城や、夜作るなる岩橋ならば、渡らん事も難かるべし。下歌地謡「是は長き春の日の、長閑けき水の船橋に、さして柱も入るまじや。徒に朽ち果てんを、作りたまへ山伏。上歌所は同じ名の、所は同じ名の、佐野の渡りの夕暮に、袖打ち拂ひて、御通りあるか篠懸の、頃も春なり河風の、花吹き渡せ船橋の、法に往來の、道作り給へ山伏。峯々廻り給ふとも、渡りを通らでは、何くへ行かせ給ふべき。

ヲヤ詞「さて〳〵萬葉集の歌に、東路の佐野の船橋取り放し、又鳥は無しと二流によまれた

紅蓮大紅蓮―地獄の名

中の道―地獄と極楽の間

三寶加持―山伏の行ふ祈禱

るは、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ詞「さん候それに付いて物語の候、語つて聞かせ申し候べし。昔此所に住みける者、忍び妻にあこがれ、所は川を隔てたれば、此船橋を道として夜な〳〵通ひけるに、二親此事を深く厭ひ、橋の板を取り放す。それをば夢にも知らずして、かけて頼みし橋の上より、かつぱと落ちて空しくなる。謡妄執と云ひ因果と云ひ、其まゝ三途に沈みはてゝ、紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて、地謡「浮む世もなき苦みの、海こそ有らめ河橋や、磐石に押され苦を受くる。ヲヤさらば沈みも果てずして、魂は身を責むる、心の鬼となり變り猶戀草の言茂く、邪婬の思ひに焦がれ行く、船橋も古き物語。眞は身の上なり、我が跡弔ひてたび給へ。シテ謡「夕日漸く傾きて、地謡「霞の空もかきくらし、雲となり雨となる、中有の道も近づくか。橋と見えしも中絶えぬ。ここはまさしく東路の、佐野の船橋とりはなし、鐘こそ響り夕暮の、空も別れになりにけり。空も別れになりにけり。（中入）

ワキ上歌謡「ふりにし跡を改めて、ふりにし跡を改めて、三寶加持の行に、五道の罪も消え

泣く涙云々―小野篁の妹の死を哭せる歌

是も妹瀬の一―古今集に「流れては妹背の山の中に落る吉野の川の上しや世の中

ぬべき、法の力ぞ有難き。法の力ぞ有難き。ツレ謡「如何に行者有難や。徒に三途に沈みし身なれども、法の力か船橋の、浮む身となる有難さよ。後シテ謡「如何に行者我は猶し、此妄執の故により、浮みかねたる橋柱の、重き苦患を見せ申さん。泣く涙、雨と降らなん渡り川、水増りなば歸り來るかに、地謡かへれやかへれあだ波の、シテ謡「柱を戴く磐石の苦患、地謡「これ〳〵見給へ淺ましや。シテ謡「見我身者發菩提の、功力を受けて謂ふならく、奈落の底の水屑となりしを、知我心者卽身成佛、有難や。

ワキ謡「痛はしやいまだ邪婬の業深き、其執心を振り捨てよ、猶々昔を懺悔し給へ。ツレ謡「何事も懺悔に罪の雲消えて、眞如の月も出でつべし。シテ謡「五障の霞の晴れがたき、春の夜の一時、胡蝶の夢の戲れに、いで〳〵姿を見え申さん。ツレ謡「よしや吉野の山ならねど、是も妹背の中川の、シテ謡「橋のとだえの有りけるとは、いさ白波の夜ごとに、ツレ謡「通ひ馴れたる浮船の、シテ謡「共にこがるゝ思ひ妻、宵々に通ひ馴れたる船橋の、さえ渡る夜の、月も半に更け靜まりて、地謡「人もねに臥し丑三つ寒き、川風も厭はじ逢瀨の向ひの、岸

に見えたる人影はそれか、心うれしや頼もしや。

上歌地謡「互にそれぞと見みえし中の、互にそれぞと見みえし中の、橋を隔てゝ立ち來る波の、より羽の橋か鵲の、行き合ひの間近くなり行くまゝに、放せる板間を踏みはづし、かつぱと落ちて沈みけり。シテ謡「東路の佐野の船橋とりはなし、親しさくれば妹に逢はぬかも、キリ執心の鬼となつて、地謡「執心の鬼となつて、共に三途の川橋の、橋柱に立てられて、惡龍の氣色に變り、程なく生死娑婆の妄執、邪婬の惡鬼となつて、我と身を責め苦患に沈むを、行者の法味功力により、眞如發心の玉橋の、眞如發心の玉橋の、浮める身とぞなりにける。浮める身とぞなりにける。

より羽の橋―新勅撰集に「鵲のより羽の橋をよそながら待ちたる夜になりにけるかな」橋柱に立てられて―橋杙に人柱として立てらるること

源氏供養

梗概

源氏物語表白といふは、安居院法印聖覚の作なりと傳ふ。源氏物語を作りし紫式部が、現世に狂言綺語の戒を破りし苦患を救ひ、安養浄土に迎へ給へと祈りし文なり。此曲は之によりて、法印が石山詣の折、紫式部の靈現れて、回向を受くる事を作れり。末段に紫式部を石山觀音の權化なりと說けるは、時代思想の一端を伺ふに足る。（靈物）

シテ　紫式部（前は里女）　ワキ　安居院法印

ワキツレ　從僧

三人次第「衣も同じ苦の道、衣も同じ苦の道、石山寺に參らん。ワキ詞「是は安居院の法印にて候。我石山の觀世音を信じ、常に歩みを運び候。今日も又參らばやと思ひ候。三人道行歌「時も名も、花の都を立ち出でて、花の都を立ち出でて、嵐につるゝ夕波の、白河表過ぎ行けば、音羽の瀧をよそに見て、關の此方の朝霞、されども殘る有明の、影もあなたに鳰の海、實に面白き氣色かな、げに面白き氣色かな。下歌さゝ波や、志賀唐崎の一つ松、鹽

衣も同じ―出家の衣を苦の衣といふによりてなり

鹽燒かねども―湖水なれば也

焼かねども浦の波、立つこそ水の煙なれ、立つこそ水の煙なれ。

シテ詞「なう〳〵安居院の法印に申すべき事の候。ワキ詞「法印とは此方の事にて候か。何事にて候ぞ。シテ謡「我石山に籠り、源氏六十帖を書き記し、亡き跡までの筆のすさみ、詞名の形見とはなりたれども、謡彼の源氏に終に供養をせざりし科により、浮む事なくさむらへば、然るべくは石山にて、源氏の供養をのべ、我が跡弔ひてたび給へと、此事申さんとて、是まで参りて候。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さりながら易き間の事供養をばのべ候べし。さて誰と志して廻向申し候べき。シテ詞「まづ石山に参りつゝ、源氏の供養をのべ給はゞ、其時我も現れて、謡共に源氏を弔ふべし。ワキ謡「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏を書きしは、シテ謡「恥かしや此身は浮世の土となれども、ワキ謡「名をば埋まぬ苔の下、シテ謡「石山寺に立つ雲の、ワキ謡「紫式部にてましますな。シテ謡「恥かしや、色に出づるか紫の、地謡「色に出づるか紫の、雲も其方か夕日影、さしてそれとも名乗り得ず、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

源氏六十帖―源氏物語五十四帖なるを天台の六十巻になぞらへて、十帖ともいひなせるはなり

立つ雲の―紫雲の語を紫式部と續けていへり

ワキ謡「さて石山に参りつゝ、念願を勤め事終り、夜も更け方の鐘の聲、心も澄める折節に、ワキツレ謡「有りつる源氏の物語、眞しからぬ事なれども、ワキ謡「供養をのべて紫式部の、ワキツレ謡「菩提を深く、ワキ謡「弔ふべきなり。三人上歌謡「とは思へどもあだし世の、とは思へどもあだし世の、夢にうつろふ紫の、色ある花も一時の、あだにも消えし古への、光源氏の物語、聞くにつけてもその眞、頼み少なき心かな。頼み少なき心かな。

後シテ聲「松風も、散れば形見となるものを、思ひし山の下紅葉、地謡「名も紫の色に出でて、シテ謡「見えん姿は恥かしや。ワキ謡「かくて夜も深更になり、鳥の聲をさまり、心すごき折節、詞燈火のかげを見れば、さも美しき女性、紫の薄衣のそばを取り、謡影の如くに見え給ふは、夢か現か覺束な。シテ謡「うつろひやすき花色の、鼈の衣の下こがれ、紫の色こそ見えね枯野の萩、本のあらまし末通らば、名乗らずと知ろし召されずや。ワキ謡「紫の色には出でずとあらましの、言葉の末とは心得ぬ。紫式部にてましますか。シテ謡「恥かしながら我姿、ワキ謡「其面影は昨日見し、シテ謡「姿に今も變らねば、ワキ謡「互に心を、

下こがれ―裾濃のこと
本のあらまし―本あらの萩という語に基る

おきもせぢー心置かぢの意より起きと續けたり

布施―僧への贈物

シテ謡「おきもせず、地謡「寝もせで明かす此夜半の、月も心せよ。石山寺の鐘の聲、夢をも誘ふ風の前、消えしはそれか燈火の、光源氏の跡とはん。光源氏の跡とはん。

シテ謡「あら有難の御事や、何をか布施に參らせ候べき。ワキ詞「いや布施などとは思ひもよらず候。とても此世は夢の内、昔に返す舞の袖、謡只今舞うて見せ給へ。シテ詞「恥かしながらさりとては、仰をばいかで背くべき、いで〳〵さらば舞はんとて、ワキ謡「本より其名も紫の、シテ謡「色珍らしき薄衣の、ワキ謡「日も紅の扇を持ち、シテ謡「恥かしながら弱々と、ワキ謡「あはれ胡蝶の、シテ謡「一遊び、地謡「夢の内なる舞の袖、夢の内なる舞の袖、現に返すよしもがな。シテ謡「花染衣の色襲、地謡「紫匂ふ袂かな。

シテ、クリ謡「夫れ無常といつぱ、目の前なれども形もなし。地謡「一生夢の如し、誰有つて百年を送る。槿花一日只おなじ。シテ、サシ謡「こゝに數ならぬ紫式部、頼みを懸けて石山寺、悲願を頼み籠り居て、此物語を筆に任す。地謡「されども終に供養をせざりし科により、妄執の雲も晴れ難し。シテ謡「今逢ひ難き縁に向つて、地謡「心中の所願を起し、一つの巻物に

成等正覺―成佛の意
桐壺云々―源氏の御母桐壺の更衣の失せ給ふこと以下巻の名を以て文を綴く
帚木云々―光源氏頭中將などの雨夜物語のこと
空蟬夕顔―共に女の名
四智―大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智の四つ
薄雲―女院藤壺のこと
紫磨―佛の姿を紫磨金といふ
玉葛の節―玉鬘の曲を見よ
かゞ―今カケと謡ふ
夢の浮橋―物語最終の巻

寫し、無明の眠を覺ます。南無や光源氏の幽靈成等正覺。クセそも〳〵桐壺の、夕の煙すみやかに、法性の空に至り、帚木の夜の言の葉は、終に覺樹の花散りぬ。空蟬の、空しき此世を厭ひては、夕顔の露の命を觀じ、若紫の雲の迎へ、末摘花の臺に座せば、紅葉の賀の、秋の落葉もよしや只、たま〳〵佛意に逢ひながら、榊葉の、さして往生を願ふべし。シテ謡花散る里に住むとても、地謡「哀別離苦の理、まぬかれ難き道とかや　唯すべからくは、生死流浪の須磨の浦を出でて、四智圓明の、明石の浦に澪標、いつまでも有りなん唯蓬生の宿ながら、菩提の道を願ふべし。松風の吹くとても、業障の薄雲は、晴るゝ事更になし。秋の風消えずして　紫磨忍辱の藤袴、上品蓮臺に、心を懸けて誠ある、七寶莊嚴の、眞木柱の本に行かん。梅が枝の、匂ひに移る我心、藤の裏葉に置く露の、其玉葛かけしばし、朝顔の光賴まれず。シテ謡朝には栴檀の、陰に宿木名も高き、地謡「官位を、東屋の内に籠めて、樂しみ榮えを、浮舟に喩ふべしとかや。是も蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋を打ち渡り、身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來、狂言綺

語を振り捨てよ、紫式部が後の世を、助け給へと諸共に、鐘打ち鳴らして、回向も既に終りぬ。

ロンギ地謡「實に面白や舞人の、名殘今はと鳴く鳥の、夢をも返す袂かな。シテ謡「光源氏の御跡を、弔ふ法の力にて、我も生れん蓮の、花の宴は頼もしや。地謡「實にや朝は秋の光、シテ謡「夕には影もなし。地謡「朝顔の露稻妻の影、何れかあだならぬ。定めなの浮世や。キリ地謡「よく〳〵物を案ずるに、よく〳〵物を案ずるに、紫式部と申すは、彼の石山の觀世音、假に此世に現れて、かよる源氏の物語、是も思へば夢の世と、人に知らせん御方便、實に有難き誓かな。思へば夢の浮橋も、夢の間の言葉なり。夢の間の言葉なり。

花筐

梗概

繼體天皇御卽位前越前に在せし頃寵幸ありし照日の前、帝の御形見たる花筐を携へて、京に上り、つひに本の如く召し仕はるゝ事を作る。狂女物なり。（四番目）

シテ　照日の前　　シテツレ　侍女

子方　天皇（謠無し）　　ワキ　供奉官人

ワキツレ　御使（男）

ワキツレ詞「是は越前國味眞野と申す所に御座候、男大迹の皇子に仕へ申す者にて候。さても都より御使あつて、武烈天皇の御代を、味眞野の皇子に御讓りあり、御迎の人々まかり下り御供申し、今朝とく御上洛にて候。さる間此程御寵愛あつて召しつかはれて候、照日の前と申す御方、此程御暇にて御里に御座候が、彼の御方へ俄の御上洛につき、御玉章と朝毎に御手に馴れし御花筐をまゐらせられ候を、某に持ちて參れとの御事にて候程に、只今照日の御里へと急ぎ候。あら嬉しや是へ御出で候よ。是にて申し候べし。いか

男大迹―をゝあとべと讀ふ日本書紀に此く記し古事記に袁本杼と記す

花筐―花を盛る籠

に申し候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキヅレ詞「我君は都より御迎下り、御位に即かせ給ひ、今朝とく御上りにて候。又是なる御文と御花筐とを、たしかにまゐらせよとの御事にて候。これこれ御覧候へ。シテ詞「さては我君御位に即かせ給ひ、都への御上り返すがへすも御めでたうこそ候へとよさりながら、謡此年月の御名残、いつの世にかは忘るべき。あら御名残惜しや。詞されども思召し忘れずして、御玉章を残し置かせ給ふ事のありがたさよ。急ぎ見まゐらせ候はん。謡我應神天皇の孫苗を繼ぎながら、帝位を履む身にあらざれども、天照大神の神孫なれば、毎日に伊勢を拝し奉りし、其神感の至りにや、君臣の撰みに出だされて、いざなはれゆく雲の上、廻りあふべき月影を、秋の頼みに残すなり、頼めただ袖ふれ馴れし月影の、しばし雲居に隔てありともと、地謡「書き置き給ふ水莖の、跡に残るぞ悲しき。上歌君と住む、ほどだにありし山里に、程だにありし山里に、ひとり残りて有明の、つれなき春も杉間吹く、松の嵐もいつしかに、花の跡となつかしき、御花筐玉章を、いだきて里に歸りけり。いだきて里に歸りけり。（中入）

我應神天皇の是より御文

雲の上―内裏

頼めたり―御製なり

つれなき春―わがために思ひやりなき春とて怨む意

次第立家「君の恵も高照す、君の恵も高照す、紅葉の御幸はやめん。ワキ、サシ謡「忝くも此君は、應神天皇五世の御末、男大迹の皇子と申しょが、當年御即位をさまりて、繼體天皇と申すなり。ワキツレ謡「されば治まる御代の御影、日の本の名もあひにあふ、ワキ謡「大和の國や玉穗の都に、ワキツレ謡「いま宮造り、ワキ謡「あらたなり。上歌萬代の、恵も久し富草の、恵も久し富草の、種も榮ゆく秋の空、露も時雨も時めきて、四方に色添ふ初紅葉、松も千年の綠にて、常磐の秋に廻りあふ、御幸の車早めん。御幸の車早めん。

後シテ謡「いかにあれなる旅人、都への道教へて給べ。詞何物狂とや。物狂も思ふ心のあればこそ問へ。謡など情なく教へ給はぬぞや。シテツレ謡「よしなう人は教へずとも、都への道しるべこそ候へ。あれ御覽候へ雁の渡り候。シテ詞「何雁の渡るとや。げに今思ひ出だしたり、秋にはいつも雁の、南へ渡る天つ空、シテツレ謡「そらごとあらじ君が住む、都とやらんも其方なれば、シテ詞「聲をしるべの便の友と、ツレ謡「我も田面の雁こそ、つれて越路のしるべなれ。シテ謡「其上名におふ蘇武が旅雁、ツレ一聲謡「玉章を、つけし南の都路に、

紅葉の御幸―觀楓の行幸
繼體―今ケイテイと誦へり
玉穗の都―隣余玉穗の宮といふ
富草―稻のこと
そらごと―天つ空の語より續けたり虛言なり
蘇武―漢の蘇武が胡國に囚はれし時雁の足に文を付けて故國に音信せし故事

地謡「我をも共に連れて行け。シテ謡「宿かりがねの旅衣、地謡「飛びたつばかりの心かな。シテ、ツレ謡「君が住む越の白山知らねども、行きてや見まし足引の、ツレ謡「大和は何方しら雪の、高間の山のよそにのみ、見てや止みなん及びなき、雲居はいづく御影山、日の本なれや大和なる、玉穂の都に急ぐなり。下歌地謡「こゝは近江の湖なれや、みづからよしなくも、及ばぬ戀に浮舟の、上歌こがれゆく、旅をしのぶの摺衣、旅をしのぶの摺衣、涙も色か黒髪の、あかざりし別路の、跡に心の浮かれ來て、鹿の起臥堰へかねて、猶通ひゆく秋草の、野暮れ山暮れ霞分けて、玉穂の宮に著きにけり。玉穂の宮に著きにけり。ワキ謡「時しも頃は長月や、まだき時雨の色うすき、紅葉の御幸の道の邊に、非形を戒め面面に、御幸の御先を淸めけり。シテ謡「さなきだに都に馴れぬ鄙人の、女と云ひ狂人と云ひ、シテ、ツレ謡「さこそ心は楢の葉の、風も颯と露霜の、御幸の先に進みけり。ワキ謡「不思議やな其さま人にかはりたる、狂女と見えて見苦しやとて、官人立ちより拂ひけり。詞そこ退き候へ。シテツレ詞「あら悲しや君の御花筵を打ち落されて候は如何に。シテ詞「何と君の御

君が住む―古今集の歌下句ゆきのまに〳〵あとは雪ねん

高間の山の―新古今集に「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」

涙も色か―涙も色に出でたるなり

非形―異形に同じ

渇仰―慕ふこと
大切にすること

かごと―かこちごとの意に籠を含めたり

花筐を打ち落されたるとや。あら忌はしの事や候。ワキ詞「いかに狂女、持ちたる花籠を君の御花筐とて渇仰するは、そも君とは誰が事を申すぞ。シテ詞「事あたらしき問事かな。此君ならで日の本に、又異君のましますべきか。シテツレ謡「我らは女の狂人なれば、知らじと思召さるゝか。忝くも此君は、應神天皇五世の御孫、過ぎし頃まで北國の、味真野と申す山里に、シテ詞「男大迹の皇子と申しょが、シテツレ謡「今は此國玉穂の都に、シシ謡「繼體の君と申すとかや。シテツレ謡「さればか程にめでたき君の。シテ謡「御花筐を恐れもなさで、シテツレ謡「打ち落し給ふ人々こそ、シテ謡「我よりも猶物狂よ。上歌地謡「恐しや、恐しや、世は末世に及ぶといへど、日月は地に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を、あらけなや荒金の、土に落し給はゞ、天の咎も忽に、罰あたり給ひて、我如くなる狂氣して、ともの物狂と言はれさせ給ふな。人に言はれさせ給ふな。シテ謡「かやうに申せば、地謡「かやうに申せば、只現なき花筐のかごとやおぼすらん。此君いまだ其頃は、皇子の御身なれど、朝ごとの御勤に、花を手向け禮拜し、南無や天照皇大神宮、天長地久と、稱へさせ給ひつょ、御手を

忘れ形見―匿を掛く
陸奥の―古今集の歌下句かつみる人に餘やわたらん
水の月望む猿―水中の月を捉へんとして溺るゝ猿猴の事佛說に出づ
眞王―眞武帝

合させ給ひし、御面影は身に添ひて、忘れ形見までもなつかしや戀しや。シテ謡「陸奥の、淺香の沼の花がつみ、地謡「且見し人を戀草の、忍ぶもぢずり誰故ぞ、亂心は君のため。こゝに來てだに隔てある、月の都は名のみして、袖にも移されず、又手にも取られず、唯徒に水の月を、望む猿の如くにて、叫び伏して泣き居たり。叫び伏して泣き居たり。ワキ詞「如何に狂女、宣旨にて有るぞ御車近う參りて、いかにも面白う狂うて舞ひ遊び候へ。叡覽あるべきとの御事にてあるぞ、急いで狂ひ候へ。シテ詞「うれしやさては及びなき、御影を拜み申すべき、謡いざや狂はん諸共に、シテ、ツレ謡「御幸に狂ふ囃こそ、地謡「御先を拂ふ袂なれ。シテ、ツレ謡「忝き御たとへなれども、いかなれば漢王は、地謡「李夫人の御別れを歎き給ひ、朝政神さびて、夜のおとゞも徒に、唯思ひの涙御衣の袂をぬらす。シテ謡「また李夫人は紅色の、地謡「花のよそほひ衰へて、萎るゝ露の床の上、塵の鏡の影を恥ぢて、終に帝に見え給はずして去り給ふ。クセ「帝ふかく歎かせ給ひつゝ、其御かたちを、甘泉殿の壁にうつし、我も靈圖に立ち添ひて、明暮歎き給ひけり。されどもなか〳〵、御思ひ

李少―李少君といふ方士の事を太子としたるなぢむくわすゐこく―未詳

反魂香―魂を招きかへす靈薬」

縹渺悠揚―物幽かなる意

は增されども、物いひ交す事なきを、深く歎き給へば、李少と申す太子のいとけなくましますが　父帝に奏し給ふやう、シテ謡「李夫人は本これ、地謡「上界の嬖妾、くわするこくの仙女なり。一旦人間に、生るゝとは申せども、終に本の仙宮に歸りぬ。泰山府君に申さく、李夫人の面影を、しばらくこゝに招くべしとて、九華帳の内にして、反魂香を燒き給ふ。夜ふけ人しづまり、風冷しく月秋なるに、それかと思ふ面影の有るか無きかにかけろへば、猶いやましの思ひ草、葉末に結ぶ白露の、手にも溜らでほどもなく、唯いたづらに消えぬれば、縹渺悠揚としては又尋ぬべき方なし。シテ謡「悲しさのあまりに、地謡「李夫人の住みなれし、甘泉殿を立ち去らず、空しき床を打ち拂ひ、古き衾古き枕、ひとり袂をかたしく。

ワキ詞「宣旨にてあるぞ、其花筐を參らせ上げ候へ。シテ謡「餘りのことに胸ふさがり、心空なる花筐を、恥かしながらまゐらする。ワキ謡「帝は之を叡覽あつて、疑ひもなき田舍にて、御手に馴れし御花筐、詞　同じく留め置き給ひし、謡　御玉章の恨を忘れ、狂氣を止めよ本

花の筐の名を留めて云々一形見の語の起りを此くいへるは作者の技巧のみ

の如く、召し使はんとの宣旨なり。シテ謡けにありがたや御めぐみ、直なる御代に歸るしるしも、思へば保ちし筐の德、ワキ謡かれこれ共に時に逢ふ、シテ謡花の筐の名を留めて、ワキ謡戀しき人の手馴れし物を、シテ謡かたみと名づけそめし事、ワキ謡此時よりぞ、シテ謡はじまりける。地謡有難やかくばかり、情の末を白露の、めぐみに洩れぬ花筐の、御かごとましまさぬ、君の御こゝろぞありがたき。

キリ地謡御遊も既に時過ぎて、御遊も既に時過ぎて、今は還幸なし奉らんと、供奉の人々御車やりつゞけ、もみぢ葉散り飛ぶ御先を拂ひ、拋ふや袂も山風に、誘はれゆくや玉穗の都、さそはれゆくや玉穗の都に、盡きせぬ契ぞ有難き。

富士太鼓

梗概　内裏にて舞樂行はれし砌、富士といふ樂人、淺間といふ樂人に嫉まれて討たれしあとに、富士の妻及び女たづね行きて、凶變を知り、その形見の裝束を受取りて悲歎にかきくるゝ事を作る。（四番目）

シテ　富士の妻　子方　子（姫）
ワキ　官人　狂言　從者

萩原の院―花園天皇の御事

ワキ詞「是は萩原の院に仕へ奉る臣下なり。さても内裏に七日の管絃の御座候により、天王寺より淺間と申す樂人、是は竝びなき太鼓の上手にて候を召し上せられ、太鼓の役を仕り候所に、又住吉より富士と申す樂人、是も劣らぬ太鼓の上手にて候が、管絃の役を望み罷り上りて候。此由聞し召され、富士淺間何れも面白き名なり。さりながら古き歌に、誠信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば、富士の煙のかひや無からんと聞く時は、名こそ上なき富士なりとも、あつぱれ淺間は增さうずるものをと勅諚有りしにより重

借濁なる―後撰集の歌三句燃ゆなれば

ねて富士と申す者もなく候。さる程に淺間此由を聞き　にくき富士が振舞かなとて、彼の宿所に押しよせ、あへなく富士を討つて候。まことに不便の次第にて候。定めて富士が緣の無きことは候まじ、もし尋ね來りて候はゞ　形見を遣はさばやと存じ候。

聖の上云々―富士山の形容

シテ、子方「雲の上なほ遙なる、雲の上なほ遙なる　富士の行力を尋ねん。シテ謡「これは津の國住吉の樂人、富士と申す人の妻や子にて候。さても內裏に七日の管絃のましますにより、天王寺より樂人召され參る由を聞き、妾が夫も太鼓の役、子方謡「世に隱れ無ければ、望み申さん其ために、都へのぼりし夜の間の夢、心にかゝる月の雨、下歌身を知る袖の涙かと、明かしかねたる夜もすがら、上歌寢られぬまゝに思ひ立つ　寢られぬまゝに思ひ立つ、雲居やそなた故郷は、跡なれや住吉の松の隙より眺むれば、月落ちかゝる山城も、はや近づけば笠をぬぎ、八幡に祈り掛帶の　結ぶ契の夢ならで　現に逢ふや男山、都にはやく著きにけり。都にはやくに著けり。

住吉の一賴政の歌下句月落ちかかる淡路島山

シテ謡「急ぎ候程に、都に著きて候。此所にて富士の御行方を尋ねばやと存じ候。いかに案

内申し候。狂言「シカ〳〵。シテ詞「是は富士がゆかりの者にて候。富士に引き合はせられて給はり候へ。狂言「シカ〳〵。ワキ詞「富士がゆかりと申すは何くにあるぞ。シテ詞「これに候。ワキ詞「さて是は富士がため何にて有るぞ。シテ詞「恥かしながら妻や子にて候。ワキ詞「なう富士は討たれて候よ。シテ詞「何と富士は討たれたると候や。ワキ詞「なか〳〵の事富士は淺間に討だれて候。シテ謡「さればこそ思ひ合はせし夢の占、重ねて問はばなか〳〵に、淺間に討たれ情なく、地謡「さしも名高き富士はなど、煙とは成りぬらん。今は歎くに其かひもなき跡に殘る思ひ子を、見るからにいとど猶すゝむ涙はせきあへず。ワキ詞「今は歎きてもかひなき事にて有るぞ。是こそ富士が舞の裝束候よ。それ人の噂には、形見に過ぎたる事あらじ。是を見て心を慰め候へ。シテ謡「今までは行方も知らぬ都人の、妾を田舎の者と思召して、偽り給ふと思ひしに、眞にしるき鳥甲、月日もかはらぬ狩衣の、疑ふ所もあらばこそ。痛はしや彼人出で給ひし時、みづから申すやう、天王寺の樂人は召にてのぼりたり、御身は勅諚なきに、押して參れば下として、上を量るに

重ねて問はゞ云云―中々に淺ましの意
煙とは成りぬちん―死したるこをいふ煙は富士山の緣

烏甲―樂人の頭に著る物

地給―住吉神社にて扶持を受くる意

似たるべし。其うへ御身は當社地給の樂人にて、明神に仕へ申すうへは、何の望の有るべきぞと申しゝを、知らぬ顔にて出で給ひし、地謡「その面影は身に添へど、まことの主は亡きあとの、忘形見ぞよしなき。上歌かねてより、かく有るべきとおもひなば、かく有るべきとおもひなば、秋猿が手を出だし、斑狼が涙にても、留むべきものを今更に、神ならぬ身を恨みかこち、歎くぞあはれなる。歎くぞあはれなりける

シテ詞「あら恨めしや如何に姫、あれに夫の敵の候ぞやいざ討たう。姫謡「あれは太鼓にてこそ候へ。思ひのあまりに御心亂れ、條なき事を仰せ候ぞや、あら淺ましや候。シテ詞「うたての人の言ひごとや。あかで別れし我夫の、失せにし事も太皷故、謡「たゞ恨めしきは太皷なり。夫の敵よいざ打たう。姫謡「げに 理なり父御前に、別れし事も太鼓故、さあらば親の敵ぞかし。打ちて恨みを晴らすべし。シテ謡「妾がためには夫の敵、いざやねらはん諸共に。姫謡「男の姿狩衣に、物の具なれや烏甲、シテ謡「恨の敵討ちをさめ、姫謡「鼓を苦に、シテ謡「埋まんとて、地謡「寄するや闕の聲立てゝ　秋の風より冷ましや。シテ「打てや打

こりの泣く—徳りに孤擧を掛く　遊狐欺魅なり

よしなの恨みや—之れより幽靈　遇きたる態　太鼓の燐火—太鼓の上に附きたる火焔をさす　眞の富士おろしに—之れより舞の形容　なつかしや—妻の本心に返りての詞

五常樂—樂名

千秋樂—同

太平樂—同　招きかへす舞の手—羅陵王といふ樂あり一名を蘭陵王又日還午樂といふ日を招返す手ありといふ

てやと攻鼓、地謠「あらさてこりの泣く音やな。

上歌地謠「なほも思へば腹たちや、なほも思へば腹たちや、けしたる姿に引きかへて、心言葉も及ばれぬ、富士が幽靈きたると見えて、よしなの恨や、もどかしと太鼓打ちたるや。(樂)シテ謠「持ちたる撥をば劍と定め、地謠「持ちたる撥をば劍と定め、嗔恚の焔は太鼓の烽火の、天にあがれば雲の上人、眞の富士おろしに、絕えず揉まれて裾野の櫻、四方へばつと散るかと見えて、花衣さす手も引く手も、伶人の舞なれば、太鼓の役は本より聞ゆる、名の下空しからず、たぐひなやなつかしや。

上歌地謠「けにや女人の惡心は、煩惱の雲晴れて、五常樂を打ち給へ。シテ謠「修羅の太鼓は打ちやみぬ、此君の御命、千秋樂と打たうよ。地謠「さてまた千代や萬代と、民も榮えて安穩に、シテ謠「太平樂を打たうよ。地謠「日も既に傾きぬ。日も既に傾きぬ。山の端を眺めやりて、招きかへす舞の手の、うれしや今こそは思ふ敵は打ちたれ。打たれて音をや出だすらん、我には晴るよ胸の煙、富士が恨を晴らせば、涙こそ上なかりけれ。

キリ地謡　是までなりや人々よ、これまでなりや人々よ。暇申してさらばと、伶人の姿鳥甲、皆ぬぎ捨てょ我心、みだれ笠みだれ髪、斯かる思は忘れじと、また立ちかへり太鼓ここ、憂き人の形見なりけれと、見置きてぞ歸りける。跡見置きてぞ歸りける。

内十五　皇帝

梗概　玄宗皇帝の寵幸せる楊貴妃の病悩を鎮めんとて、鍾馗大臣一の亡靈現れて、惡鬼を退散せしむる事を作る。（五番目）

シ　テ　鍾馗（前は老翁）　シテツレ　楊貴妃
シテツレ　鬼神
ワ　キ　玄宗皇帝　ワキツレ　大臣

ワキ、サシ謡　春は春遊に入つて夜は夜を專とし、後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身にあり。かく類なき貴妃の紅色、芙蓉の紅、色かへて、未央の柳の力もなし。地謡　たゞ弱弱と伏柴の、露の命もいかならん。上歌　心づくしの春の夜の、心づくしの春の夜の、木の間の月も朧にて雲井に歸る雁も、わが如くにや鳴き渡る。霞の内の樺櫻、ひとへに惜しき姿かな。ひとへに惜しき姿かな。

春は春遊に云々―白氏文集長恨歌の文意
芙蓉―蓮花
未央―宮の名
樺櫻―かにはざくら

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。ワキ詞「不思議やな宮中靜まり物さびて、心を澄ます折節に、御階の下に來るを見れば、さも不思議なる老人なり。そも汝はいかなる者ぞ。シテ詞「是は伯父の御時に、鍾馗と云ひし者なりしが、及第適はぬ事を歎き、玉階にて頭を打ち碎き、身を徒になしゝ者の、亡心是まで參りたり。ワキ詞「實にさる事を聞きしなり。其まゝ都の内に斂め、贈官せられし大臣の、其亡心は何のため、只今こゝに來れるぞ。シテ詞「實によく知ろし召されたり。贈官のみか綠袍を、死骸に蒙る舊恩に、今かく君の寵愛し給ふ、貴妃の病を平らけて、奇特を見せしめ申すべし。然らば件の明王鏡を、彼の御枕に立て置き給はど、謠必ず姿を現さんと、上歌地謠「直奏かたく申し上け、直奏かたく申し上け、我通力を起しつゝ、楊貴妃の花の姿、誘ふ風を靜めんと、申しもあへず其姿、御階の下に失せにけり。御階の下に失せにけり。

ワキ詞「いかに貴妃、今日はいつしか曇る日の、暮るゝ夕も、謠朧月夜の、晴れぬ心は如何なるぞ。貴妃謠「實にや衣を取り枕を推すべき力もなく、苦しき心にせきかぬる、涙の露の

斂め―葬ること
綠袍―官服
誘ふ風―花の姿といふより病氣を風に譬ふ
衣を攻り枕を推す―長恨歌の讀し衣推枕起徘徊の文意

玉鬘、かょる姿は恥かしや。ワキ謡「代るに代る物ならば、かく苦しみを見るべきかと、力を添へて木綿四手の、貴女謡「髪をも上げず、ワキ謡「ひれふすや、地謡「翠翹金雀とりぐに、かざしの花もうつろふや、枕破の斜紅の、世に類なき姿かな。實にや春雨の、風に従ふ海棠の、眠れる花の如くなり。

ワキ地謡「然るに明皇、榮花を極め世を保ち、色を重んじ給ふ故、類なき貴妃に斯く、契をこめて年月の、春宵短きを苦しみて、日高く起き出で、朝政も絶えぐに、移る方なき中なれど、ワキ謡「遁れ難しや世の中は、地謡「思はぬ障り有明の、月の都の舞樂まで、學び殘せる方もなく、祕曲傳へし笛竹の、壽なれや此契、天長く地久しくて、盡くる時もあるまじ。

ワキ謡「實に今思ひ出だしたり。彼老人の教の如く、明王鏡を取り出だし、彼の御枕に置くべきなり。大臣謡「勅諚尤も然るべしと、月卿雲客一同に、明王鏡を取り出だし、御枕近き御几帳に、立て添へてこそ置きたりけれ。上歌地謡「かくて暮れ行く雲の足、かくて暮れ

翠翹金雀―髪飾の具
枕破の斜紅―枕のあとの顔に紅を印すること
明皇―玄宗皇帝
御几帳―臺に柱をつけて垂れたそとばり

行く雲の足、漂ふ風も冷ましく、身の毛もよだつ折節に、不思議や鏡の其内に、鬼神の姿ぞうつりける。

地謡「九華の帳を押し除けて、九華の帳を押し除けて、彼御枕により竹の、笛をおつ取りさし上げて、勇み喜ぶ其氣色、鏡にうつり見えければ、帝は是を叡覽あつて、さては病鬼よ遁さじと、劍を抜いて立ち給へば、天に上り地に又下り、飛行自在を現して、帝に向ひ怒をなせば、劍を振り上げ斬り給へば、御殿の柱に立ち隱れて、姿も見えず失せにけり。ワキ謡「不思議や曇る空晴れて、宮中光りかゝやきて、地謡「鳴動することこそ恐しけれ。

後シテ謡「そも〳〵是は、武德年中に贈官せられし、鍾馗大臣の精靈なり。詞 さても此君寵愛し給ふ、貴妃の病を平げんと、通力を以て奇瑞を見す。謡 南無天形星王我劍降鬼と、祕文を稱へ駒に乘じ、虛空を翔つて參內せり。

上歌地謡「惡鬼は是を見るよりも、惡鬼は是を見るよりも、驚き騷ぎ、彼の眞木柱に隱れけるを、鍾馗の精靈馬より下り立ち、利劍をひつ提げ袂をかざし、明王鏡に向ひ給へば、鬼

九華の帳―花紋を織ひたる几帳より竹―流れ寄る竹

武德―唐高祖の時の年號

六宮＝後宮のこと大裏なり

神の姿は隠れもなし。（雅）鬼神謡「鬼神は通力自在も失せて、地謡「鬼神は通力自在も失せて、起きつ轉びつ走り出づるを、追つ詰め給へば御殿を飛び下り、六宮の玉階に、走り上るを、遁さじ物をと引き下し、利剣を振り上げづだ〳〵に斬り放し、庭上に投げ捨て忽に、貴妃も息災なほ此君の、恵を仰ぎ、守の神となるべしと、玉體を拝し奉り、玉體を拝し奉りて、姿は夢とぞなりにける。

通盛

梗概

平通盛は敎盛の子なり。一の谷の合戰に討死す。契をこめし小宰相局は、その音信を得て、世をはかなみ、阿波の海に投ず。此曲は二人の幽靈現れて、昔語をなし、旅僧の弔ひを受くる事を作る。（二番目）

シテ　平通盛（前は漁翁）　ツレ　小宰相局（前は女）

ワキ　僧

ワキ詞「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦は平家の一門果て給ひたる所なれば痛はしく存じ、毎夜此磯邊に出でて御經を讀み奉り候。只今も出でて弔ひ申さばやと思ひ候。シテ上歌「磯山に、暫し岩根のまつ程に、暫し岩根のまつ程に、誰が夜舟とは白波に、樒音ばかり鳴門の、浦靜なる今宵かな。浦靜なる今宵かな。

ツレ、サシ謡「すは遠山寺の鐘の聲、この磯ちかく聞え候。シテ謡「入相ごさめれ急ぎ給へ。ツレ謡「程なく暮るゝ日の數かな。シテ謡「昨日過ぎ、ツレ謡「今日と暮れ、シテ謡「明日またかく

一夏―安居として夏季九十日間佛道を修行すること

鳴門―撞音の鳴ると掛く

入相ごさめれ―晩鐘にてこそあるめれの意

こそ有るべけれ。ツレ謡「されども老に頼まぬは、シテ謡「身の行末の日數なり。シテ、ツレ一聖謡「いつまで世をばわたづみの、あまりに隙も波小舟、ツレ謡「何を頼みに老の身の、シテ謡「命のためにつかふべき、上歌地謡「憂きながら、心の少し慰むは、心の少し慰むは、月の出汐の海士小舟、さも面白き浦の秋の景色かな。所は夕浪の、鳴門の沖に雲つゞく、淡路の島や離れ得ぬ、浮世の業ぞ悲しき。浮世の業ぞ悲しき。シテ、ワキ謡「暗濤月を埋んで清光なし。ツレ謡「舟に焚く海士の篝火更け過ぎて、シテツレ謡「苫よりくゞる夜の雨の、蘆間に通ふ風ならでは、音する物も波枕に、夢か現か御經の聲の、嵐につれて聞ゆるぞや、楫音を靜め唐艫を抑へて、聽聞せばやと思ひ候。ワキ謡「誰そや此鳴門の沖に音するは。シテ謡「泊定めぬ海士の釣舟候よ。ワキ謡「さもあらば思ふ仔細有り此磯近く寄せ給へ。シテ謡「仰に隨ひさし寄せ見れば、ワキ謡「二人の僧は巖の上、シテ謡「漁の舟は岸の陰、ワキ謡「蘆火の影を假初に、御經を開き讀誦する。シテ謡「有難や漁する、業は蘆火と思ひしに、ワキ謡「善き燈火に、シテ謡「鳴門の海の、シテ、ワキ謡「弘誓深如海、

誰そや云々―古歌を引く

蘆火―蘆を焚くこと

弘誓云々―法華經普門品の文句

歴劫不思議の奇縁によりて、五十展轉の隨喜功徳品。下歌地謡「實にありがたやこの經の、おもてぞ暗き浦風も、蘆火の影を吹き立てゝ　聽聞するぞありがたき。上歌龍女變成と聞く時は、龍女變成と聞く時は、姥も頼もしや　おほぢはいふに及ばず　願ひも三つの車の、蘆火は淸く明かすべし。猶々御經遊ばせ。猶々御經遊ばせ。

ワキ詞「あら嬉しや　候、火の光にて心靜かに御經を讀み奉りて候。まづ〳〵此浦は平家の一門果て給ひたる所なれば、毎夜此磯邊に出でて御經を讀み奉り候、取り分き如何なる人此浦にて果て給ひて候ぞ、委しく御物語り候へ。シテ詞「仰の如く或は討たれ、又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ　や　諸共に御物語り候へ。ツレ謡「さるほどに平家の一門、馬上を改め、海士の小船に乘り移り、月に棹さす時もあり。シテ、サシ謡「こゝだにも都の遠き須磨の浦、シテツレ謡「思はぬ敵に落されて、實に名を惜しむ武士の　磯馴盧島や淡路潟、阿波の鳴門に著きにけり。ツレ謡「さる程に小宰相の局乳母を近づけ、シテツレ謡「如何に何とか思ふ、われ頼もしき人々は都に留まり、通盛は討たれぬ、誰を頼みてながら

ふべき。此海に沈まんとて、主従泣く〳〵手を取り組み舟端に臨み、ツレ謡「さるにてもあの海にこそ沈まうずらめ。地謡「沈むべき身の心にや、涙のかねて浮むらん。上歌地謡「西はと問へば月の入る、西はと問へば月の入る、其方も見えず大方の、春の夜や霞むらん、涙も共に曇るらん、乳母泣く〳〵取り付きて、此時の物思ひ、君一人に限らず、思召し止り給へと、御衣の袖に取り付くを、振り切り海に入ると見て、老人も同じ満汐の、底の水屑となりにけり。底の水屑となりにけり。（中入）

ワキ二人「此歌謡「此八軸の誓にて、此八軸の誓にて、一人も洩らさじの、方便品を讀誦する。ワキ謡「如我昔所願。

後シテ謡「今者已満足、ワキ謡「化一切衆生、シテ謡「皆令入佛道の、地謡「通盛夫婦、御經に引かれて立ち歸る波の、シテ謡「あら有難の御法やな。

ワキ謡「不思議やなさもなまめける御姿の、波に浮みて見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。ツレ謡「名ばかりはまだ消え果てぬあだ波の、阿波の鳴門に沈み果てし、小宰相の局

沈まうずらめ―沈まんとすらんの意　西―西方極樂淨土をさす

八軸―法華經八巻のこと　方便品―法華經の内

武將たつし譽―たりしの音便譽を得たる意を越前と續けりたり

追手―城の衆宗徒一軍だちたること

我ともかくも―若し討死にてもせばの意

數行虞氏が淚―千手に注ぐ

能登の守―敎經

の幽靈なり。ワキ謡「今一人は甲冑を帶し、兵具いみじく見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ謡「是は生田の森の合戰に於いて、名を天下に揚げ、武將たつし譽を、越前の三位通盛、昔を語らん其爲に、是まで現れ出でたるなり。ワキ地謡「そも〳〵此一の谷と申すに、前は海、上は嶮しき鴨越、眞に烏ならでは翔り難く獸も、足を立つべき地にあらず。シテ謡「只幾度も大手の陣を心もとなきぞとて、地謡「宗徒の一門さし遣さる、通盛も其隨一たりしが、忍んで我陣に歸り、小宰相の局に向ひ、クセ既に軍、明日にきはまりぬ、痛はしや御身は、通盛ならで此うちに、賴むべき人なし、我ともかくもなるならば、都に歸り忘れずは、亡き跡とひてたび給へ、名殘惜しみの盃、通盛酌を取り、指す盃の宵の間も、轉寢なりし睦言は、たとへば唐土の、項羽高祖の攻を受け、數行虞氏が淚も、是にはいかでまさるべき。燭暗うして、月の光にさし向ひ、語り慰む處に、シテ謡「舍弟の能登守、地謡「はや甲冑をよろひつゝ、通盛は何くにぞ、など遲なはり給ふぞと、呼ばはりし其聲の、あら恥かしや能登守、我弟といひながら、他人より猶恥かしや。暇

申してさらばとて、行くも行かれぬ一の谷の、所から須磨の山の、後髪ぞ引かるゝ。

シテ詞「さる程に合戦も半なりしかば、但馬守經政もはや討たれぬと聞ゆ。ツレ謡「さて薩摩守忠度の果はいかに。シテ謡「岡部の六彌太 詞忠澄と組んで討たれしかば、あつぱれ通盛も名ある 侍もがな、討死せんと待つ所に、謡すはあれを見よ好き敵に、地謡「近江國の住人に、近江の國住人に、木村源吾重章が、鞭を上げて驅け來る。通盛少も騒がず、抜き設けたる太刀なれば、兜の眞向ちやうと打ち、返す太刀にてさし違へ、共に修羅道の苦を受くる、憐みを垂れ給ひ、よく弔ひてたび給へ。ツレ讀誦の聲を聞く時は、讀誦の聲を聞く時は、惡鬼心を和げ、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もこゝに來迎す。成佛得脫の身となり行くぞありがたき。身となり行くぞありがたき。

近江―故に逢ふと冒掛く

檜垣

梗概　以前は白拍子なりし檜垣の姥が、晩て白河にて、藤原興範に歌詠みかけしことは後撰集に出で、後又大和物語にも潤飾して載せられたり。此曲は姥が地獄の苦患に堪へかねて、旅僧の弔問を受くといふ筋なり。重き能柄なり。（老女物）

シテ　檜垣姥（前は老女）　ワキ　僧

ワキ詞「是は肥後の國岩戸と申す山に居住の僧にて候。さても此岩戸の觀世音は、靈驗殊勝の御事なれば、暫く參籠し所の致景を見るに、謡南西は海雲漫々として萬古心の内なり。人稀にして慰み多く、致景あつて鄉里を去る、眞に住むべき靈地と思ひて、三年が間は居住仕つて候。詞こゝに又百にも及ぶらんとおぼしき老女、毎日閼伽の水を汲みて來り候。今日も來りて候はゞ　いかなる者ぞと、名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第謡「影白河の水汲めば、影白河の水汲めば、月も袂や濡らすらん。サシそれ籠鳥は雲

岩戸―磐岩寺あり觀音を本尊とす

致景―風景のこと

影白河―頭の白くうつることを白河に言掛く

貧家親知少身賤故人疎矣―本朝文粋橘在列の文句

後撰集―天暦の勅撰歌集

みつはくむ―老醜の形容なるが語源につきて諸説あり

檜垣―檜板にてつくれる垣

白拍子―歌舞を事とする遊女

輿範―仁和の比筑前守たり

を戀ひ、歸雁は友をしのぶ。人間もまた是れ同じ。貧家には親知少く、賤しきには故人疎し、老悴衰へ形もなく、露命窮つて霜葉に似たり。下歌流るゝ水のあはれ世の、その理を汲みて知る。上歌こゝは所も白河の、こゝは所も白河の、水さへ深き其罪を、浮かみやすると捨人に、値遇を運ぶ足引の、山下庵に著きにけり。詞いつもの如く今日もまた御水あけて參りて候。ワキ詞「毎日老女の歩み返すぐ〳〵も痛はしうこそ候へ。シテ謡「せめてはかやうの事にてこそ、少の罪をも遁るべけれ。亡からん跡を弔ひ給ひ候へ。詞明けなば又參り候べし。御暇申し候はん。ワキ詞「暫く。御身の名を名のり給へ。シテ詞「何と名を名乘れと候や。ワキ詞「なか〳〵の事。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰かな。彼後撰集の歌に、謡年ふればわが黑髪も白河の、詞みつはくむまで老いにけるかなと、よみしもわらはが歌なり。昔筑前の太宰府に、庵に檜垣しつらひて住みし白拍子、後には衰へて此白河の邊に住みしなり。ワキ謡「實にさる事を聞きしなり。其白河の庵のあたりを、藤原の輿範通りし時、シテ謡「水やあると乞はせ給ひし程に、其水汲みて參らするとて、

ワキ謡「みづはくむとは、シテ謡「よみしなり。地謡「そもみづはくむと申すは、そもみづはくむと申すは、唯白河の水にはなし。老いて屈める姿をば、みつはぐむと申すなり。其しるしをも見給はゞ、彼の白河の邊にて、我跡弔ひてたび給へと、夕まぐれして失せにけり。夕まぐれして失せにけり。

ワキ詞「さては古の檜垣の女假に現れ、我に言葉をかはしけるぞや。一つは末世の奇特ぞと、思ひながらも尋ね行けば、上歌謡不思議や早く日も暮れて、不思議や早く日も暮れて、河霧深く立ちこもる、陰に庵の燈火の、ほのかに見ゆる不思議さよ。ほのかに見ゆる不思議さよ。

後シテ謡「あら有難の弔ひやな。あら有難の弔ひやな。上歌風綠野に收つて煙條直し、雲巖頭に定まつて月桂圓なり。朝に紅顔あつて世路に樂しむといへども、地謡「夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ、シテ謡「有爲の有樣、地謡「無常の眞、シテ謡「誰か生死の理を論ぜざる。地謡「いつを限る習ひぞや。老少といつぱ分別なし、變るを以て期とせり。誰か必滅

夕まぐれして―夕暮に紛れ入ること

朝有紅顔詩世路蒼茫白骨朽郊原―朗詠集の詩句　有爲―有爲轉變のこと

を期せざらん。誰かは是れを期せざらん。

ワキ謡「不思議やな聲を聞けば有りつる人なり。同じくは姿を現し給ふべし。御跡とひて參らせん。シテ謡「さらば姿を現して、御僧の御法を受くべきなり。人にな現し給ひそとよ。ワキ謡「なか〳〵に人に現す事有るまじ早々姿を見え給へ。シテ謡「涙曇りの顔ばせは、それとも見えぬ衰へを、誰白河のみつはぐむ、老の姿ぞ恥かしき。ワキ謡「あら痛はしの御有樣やな。今も執心の水を汲み、輪廻の姿見え給ふぞや。早々浮み給へ。シテ詞「我いにしへは舞女の譽世に勝れ、其罪深き故により、今も苦しみを三瀬河に、熱鐵の桶をになひ、猛火の釣瓶を提げて此水を汲む。謡「其水湯となつて、我身を燒く事隙もなけれども、詞「此程は御僧の知遇に引かれて、釣瓶はあれども猛火はなし。ワキ謡「さらば因果の水を汲み、其執心を振り捨てよ、とく〳〵浮み給ふべし。シテ詞「いで〳〵さらば御僧のため、此かけ水を汲み乾さば、罪もや淺くなるべきと、ワキ謡「思も深き小夜衣の、袂の露の王襷シテ謡「影白河の月の夜に、ワキ謡「底澄む水を、シテ謡「いざ汲まん。地謡「釣瓶の水に影落ちて、袂を

執鐵の桶云々―地獄の苦役をさす

釣瓶の水に云々―月の映るさまをいふ

月や昇るらん。

氷は云々荀子に出で「出レ之而寒二於水一」と「氷而寒二於水一」とあるを引く

クリ地謡「それ殘星の鼎には北溪の水を汲み、後夜の爐には南嶺の柴を焚く。シテ・ツレ謡「それ氷は水より出でて水よりも寒く、地謡「青き事藍より出でて藍より深し。本の憂き身の報ならば、今の苦しみ去りもせで、シテ謡「いや增さりぬる思の色、地謡「紅の涙に身を焦がす、クセ釣瓶の懸繩繰り返し、憂きいにしへも、紅花の春のあした、紅葉の秋の夕暮も、一日の夢と早なりぬ。紅顏の粧、舞女の態もいとせめて、さも美しき紅顏の、翡翠の鬢花しをれ、桂も眉も霜降りて、水にうつる面影、老怜影沈んで、綠に見えし黑髮は、土水の藻屑塵芥、變りける身の有樣ぞ悲しき。實にや有りし世を、思ひ出づればなつかしや。其白河の波かけし、シテ謡「藤原の興範の、地謡「其いにしへの白拍子、今一節と有りしかば、昔の花の袖、今更色も麻衣、短き袖を返し得ぬ、心ぞつらき陸奥の、希婦の細布胸合はず、何とか白拍子、其面影の有るべき。よし〳〵それとても、昔手馴れし舞なれば、舞はでも今は適ふまじと、シテ謡「興範しきりに宣へば、地謡「淺ましながら麻の袖、露

波かけし藤の綠語

希婦の細布―けふの里より出す幅狹き布古歌の詞なり

うち拂ひ舞ひ出だす、シテ謡「檜垣の女の、地謡「身の果を。（舞）シテ謡「水掬ぶ、釣瓶の縄の繰り返し、地謡「昔に歸れ白河の波。白河の波白河の、シテ謡「水のあはれを知る故に、是まで現れ出でたるなり。地謡「運ぶ蘆鶴の、ねをこそ絕ゆれ浮草の、水は運びて參らする、罪を浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ。

ねをこそ―音と根とを掛く

櫻川

梗概

人商人にかどはかされし我が子の行方を慕ふ、狂亂のさまなる女の、常陸の櫻川にて、つひに尋ぬる子に廻り逢ふよしを作る。艶麗なる櫻花を以て景情を美化せしめたる作なり。前の三井寺と同巧異曲。（四番目）

シテ　狂女　子方　櫻子
ワキ　僧　ツレ　入商人　ツレ　里人

人商人―人の子の賣買をする者

ワキツレ詞「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。我久しく都に候ひしが、此度は筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮程に幼き人を買ひ取りて候。彼人申され候は、此文と身の代とを、櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて、慥に届けよと仰せ候程に、只今櫻子の母の方へと急ぎ候。此あたりにて有りげに候、まづ〳〵案内を申さばやと存じ候。いかに案内申し候、櫻子の母の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「さん候櫻子の御方より御文の候。又此代物をたしかに届け申せと仰せ候程に、是まで持ちて參りて候。か

さても〳〵―これより文の文言

是を云々―又文言を讀み上で出離―出家遁世のこと

木華開耶姫―大山祇神の御女

住みうかれたる―住み憂くなりたること

まひてたしかに届け申すにて候。ヱテ詞「あら思ひよらずや。先々文を見うずるにて候。謡さても〳〵此年月の御有樣、見るも餘りの悲しさに、詞人商人に身を賣りて東の方へ下り候。なう其子は賣るまじき子にて候ものを。や、あら悲しや、早今の人も行方知らずなりて候はいかに。謡是を出離の緣として、御樣をも變へ給ふべし、只返す〴〵も御名殘こそ惜しう候へ。地謡名殘をしくはなにしにか、添はで母には別るらん。上歌ひとり伏屋の草の戸の、ひとり伏屋の草の戸の、明し暮して憂き時も、子を見ればこそ慰むに、さりとては我が賴む、神も木華開耶姫の御氏子なるものを、櫻子留めてたび給へ。さなきだに、住みうかれたる故郷の、今は何にか明暮を、堪へて住むべき身ならねば、我子の行くへ尋ねんと、泣く〳〵迷ひ出でて行く。泣く〳〵迷ひ出でて行く。（中入）ワヤ次第謡頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩、山路の春に急がん。詞是は常陸國磯邊寺の住僧にて候。又是に渡り候幼き人は、何くとも知らず愚僧を賴む由仰せ候程に、師弟の契約をなし申して候。又此あたりに櫻川とて花の名所の候、今を盛の由申し候程に、

幼き人を伴なひ、只今櫻川へと急ぎ候。上歌謡筑波山、此面彼面の花盛、此面彼面の花盛、雲の林のかげ茂き、緑の空もうつらふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮む花の波、櫻川にも著きにけり。櫻川にも著きにけり。

雲の林―花を雲と見立てたるなり

ツレ詞「いかに申し候。何とて遅く御出で候ぞ待ち申して候。ワキ詞「さん候皆々御供申し候程に、さて遅なはりて候。あら見事や候。花は今を盛と見えて候。ツレ詞「なか〳〵の事花は今が盛にて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が、美しき掬ひ網を持ちて、櫻川に流るゝ花をすくひ候が、けしからず面白う狂ひ候。是に暫く御座候ひて、此物狂を幼き人にも見せ參らせられ候へ。ワキ詞「さらば其物狂を此方へ召され候へ。ツレ詞「心得申し候。やあ〳〵彼物狂に、いつもの如く掬ひ網を持ちて、此方へ來れと申し候へ。シテ一聲謡「いかにあれなる道行人、櫻川には花の散り候か。詞何散方になりたるとや。悲しやなさなきだに、行く事やすき春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。謡花散れる水のまにまにとめくれば、山にも春はなくなりにけりと聞く時は、少しなりとも休らはど、花

掬ひ網―魚をすくひて捕る網

花散れる云々―古今集深草の歌

櫻花散りにし云云―同集貫之の歌末句波ぞ立ちける

天ざかる―鄙の枕詞

にや疎く雪の色、櫻花、櫻花散りにし風の名殘には、地謡「水なき空に波ぞ立つ。シテ謡「思も深き花の雪、地謡「散るは涙の川やらん。シテ、サシ謡「是に出でたる物狂の、故郷は筑紫日向の者、さも思子を失ひて、思ひ亂るゝ心筑紫の、海山越えて箱崎の波立ち出でて、須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り來ぬ。實にや親子の道ならずば、遙けき旅を如何にせん。詞こゝに又名に流れたる櫻川とて、さも面白き名所あり。謡別れし子の名も櫻子なれば、形見といひ折柄といひ、名もなつかしき櫻川に、地謡「散り浮く花の雪を汲みて、自ら花衣の、春の形見殘さん。上歌花鳥の立ち別れつゝ親と子の、立ち別れつゝ親と子の、行くへも知らで天ざかる、鄙の長路に衰へば、たとひ逢ふとも親と子の、面忘れせば如何ならん。うたてや暫こそ、冬ごもりして見えずとも、今は春べなるものを、我子の花はなど唉かぬ。我子の花はなど唉かぬ。

ワキ詞「此物狂の事にて有りけに候。立ち寄りて尋ねばやと思ひ候。いかに是なる狂女、御事の國里は何くの人ぞ。シテ詞「是は遙かの筑紫の者にて候。ワキ詞「それは何とてかやうに

綾子―幼兒

狂亂とはなりたるぞ。シテ詞「さん候只一人ある忘形見の、綾子に生きて離れて候程に、思ひが亂れて候。ワキ詞「あら痛はしや候。又見申せば美しき掬ひ網を持ち、流るゝ花をすくひ、おまつさへ渴仰の氣色見え給ひて候は、何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「さん候我故郷の御神をば、木華開耶姫と申して、御神體は櫻木にて御入り候。されば別れし我子も其御氏子なれば、櫻子と名づけ育てしかば、謠神の御名も開耶姫、尋ぬる子の名も櫻子にて、又此川も櫻川の、名もなつかしき花のちりを、あだにもせじと思ふなり。ワキ謠「謂れを聞けは面白や。實に何事も緣は有りけり。さばかり遠き筑紫より、此東路の櫻川まで、下り給ふも緣よなう。シテ詞「先此川の名におふ事、遠きに付きての名譽あり。彼貫之が歌はいかに。ワキ謠「實に〳〵昔の貫之も、遙けき花の都より、シテ謠「いまだ見もせぬ常陸國に、ワキ謠「名も櫻川、シテ謠「有りと聞きて、上歌地謠「常よりも、春べになれば櫻川、春べになれば櫻川、波の花こそ、間なく寄すらめとよみたれば、花の雪も貫之も、ふるき名のみ殘る世の、櫻川、瀨々の白波しげければ、霞うながす信太の浮島の、浮か

遠きに付きて―遠國のことを云ふ

常よりも云々―後撰集に出づ

霞うながす―霞を流す意

め浮かめ水の花。けにおもしろき河瀬かな。けに面白き河瀬かな。

ワキ詞「いかに申し候。此物狂は面白う狂ふと仰せ候が、今日は何とて狂ひ候はぬぞ。

ツレ詞「さん候狂はする樣が候。櫻川に花の散ると申し候へば狂ひ候程に、狂はせて御目にかけうずるにて候。ワキ詞「急いで、御狂はせ候へ。ツレ詞「心得申し候。あら笑止や、俄に山風のして櫻川の花の散り候よ。シテ詞「よしなき事を夕山風の、奥なる花を誘ふござめれ。流れぬさきに花すくはん。ワキ謡「實に〳〵見れば山おろしの、木々の梢に吹き落ちて、シテ謡「花の水層は白妙の、ワキ謡「波かと見れば上より散る、シテ謡「櫻か、ワキ謡「雪か、シテ謡「波か、ワキ謡「花かと、シテ謡「浮き立つ雲の、ワキ謡「河風に、地謡「散ればぞ波も櫻川、散ればぞ波も櫻川、流るゝ花をすくはん。シテ謡「花の下に歸らん事を忘れ水の、地謡「雪を受けたる花の袖。

シテ謡「それ水流花落ちて春とこしなへにあり。地謡「月冷しく風高うして鶴かへらず。シテ謡「岸花紅に水を照らし、洞樹綠に風を含む。地謡「山花開けて錦に似たり、澗水

花の水層―落花の多きを水に譬ふ
花の下に云々―白氏文集に花下忘歸因美景忘れ水―野中に見え隱れする流れ
岸花紅照水洞樹綠含風―杜子美の詩
山花開似錦水澗如藍―碧巖集出づ

年を經て云々―古今集の歌

散りぬれば後は芥に―同集の歌下句思ひ知らずも迷ふ蟻かな　百千鳥花に馴れゆく―古今六帖の歌末句挟まれぬる

常陸帯云々―新古今集に「東路の道の果なる常陸帯のかごとばかりもあはんとぞ思ふかごとばかりは言分けほの煮たら櫻の―前の西行櫻にあり

たゞへて藍の如し。シテ謡面白や思はずこゝに浮れ来て、地謡名もなつかしみ櫻川の、一樹の陰一河の流、汲みて知る名も所から、合ひに合ひなば櫻子の、是又他生の縁なるべし。クセ實にや年を經て、花の鏡となる水は、散りかゝるをや曇るといふらん。まこと散りぬれば、後は芥になる花と、思ひ知る身もさていかに。我も夢なるを、花のみと見るぞはかなき。されば梢より、あだに散りぬる花なれば、落ちても水のあはれとは、いさ白波の花にのみ、馴れしも今は先立たぬ、悔の八千度百千鳥、花の馴れ行くあだし身は、はかなき程に羨まれて、饌を憐れみ露を悲しめる心なり。シテ謡さるにても、名にのみ聞きて遥々と。地謡思ひ渡りし櫻川の、波かけて常陸帯の、かごとばかりに散る花を、あだになさじと水をせき、雪をたゝへて浮波の、花の柵かけまくも、かたじけなしや是とても、木華開耶姫の、御神木の花なれば、風もよぎて吹き、水も影を濁すなと、袂を浸し裳裾を萎らかして、花によるべの水せきとめて、櫻川になさうよ。シテ謡あたら櫻の、地謡あたら櫻の、とがは散るぞ恨みなる、花も憂し風もつらし、散ればぞ誘ふ、シテ謡誘

へばぞ散る花かづら、地謡「掛けてのみながめしは、シテ謡「なほ青柳の糸櫻、地謡「霞の間には、シテ謡「棹櫻、地謡「雲と見しは、シテ謡「みよし野の、地謡「みよし野の、みよし野の、川淀瀧つ波の、花をすくはど若し、國栖魚やかゝらまし　又は櫻魚と、聞くもなつかしや。いづれも白妙の、花も櫻も、雪も波もみながらに、すくひ集め持ちたれども、是は木々の花、誠は我尋ぬる、櫻子ぞ戀しき。我櫻子ぞこひしき。

國栖魚―吉野川にてとるゝ鮎
櫻魚―小鮎

ロンギ地謡「いかにやいかに狂人の、言の葉聞けば不思議やな。若しも筑紫の人やらん。シテ謡「今までは、誰ともいさや知らぬ火の、筑紫人かと宣ふは、何の御爲に問ひ給ふ。地謡「何をか今は包むべき、親子の契朽ちもせぬ、花櫻子ぞ御覽ぜよ。シテ謡「櫻子と、櫻子と、聞けば夢かと見も分かず、いづれ我子なるらん。地謡「三年の日數程ふりて、別れも遠き親と子の、シテ謡「もとの姿は變れども、地謡「さすが見馴れし面だてを、シテ謡「よく〳〵見れば、地謡「櫻子の花の顏ばせの、こは子なりけり鶯の、逢ふ時も鳴く音こそ、嬉し涙なりけれ。

機變へて―剛毅すること

ヤツ地謡「かくて伴ひ立ち歸り、かくて伴ひ立ち歸り、母をも助け樣變へて、佛果の緣となりにけり。二世安樂の緣深き、親子の道ぞありがたき。親子の道ぞありがたき。

山姥

梗

此曲は、旅人の山中に行暮れて、山姥に遭へりといふ俗説に、山姥の山廻りを、輪廻轉生の佛説もて觀じたる趣を加味して作る。頗る幽玄の作なり。もと百鬼山姥の曲舞といふものの行はれたるに基けるが如し。（四番目）

シテ　鬼女山姥　ツレ　遊女山姥　ワキ　從者

ワキ次第謡「善き光ぞと影たのむ、善き光ぞと影たのむ、佛の御寺尋ねん。詞是は都方に住居仕る者にて候。又是に渡り候御事は、百魔山姥とて隱れなき遊女にて御座候。かやうに御名を申す謂れは、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作つて御謠ひあるにより、京童部の申しならはして候。又此頃は善光寺へ御參りありたき由承り候程に、某御供申し、只今信濃國善光寺へと急ぎ候。サシ謡都を出でて小波や志賀の浦船こがれ行く末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこ

善き光ぞと―善光寺の名を示す
曲舞―能より前に行はれし舞の名
有乳の山―近江　越前の國境
玉江の橋―越前

安宅―加賀
砥並山―加賀越中の國境
あげろの山―境川の奥

そ遙なれ。上歌梢波立つ汐越の、梢波立つ汐越の、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劔の砥並山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとゞ都は遠ざかる、境川にも著きにけり。境川にも著きにけり。

ワキ詞「御急ぎ候ほどに、是ははや越後越中の境川に御著きにて候。暫く是に御座候ひて猶々道の樣體をも御尋ねあらうずるにて候。狂言「シカ〳〵ッレ詞「げにや常に承る、西方の淨土は十萬億土とかや。是は又彌陀來迎の直路なれば、あげろの山とやらんに參り候べし。謡とても修行の旅なれば、乘物をば是にとゞめ置き、徒歩跣足にて參り候べし。道しるべして給び候へ。ワキ詞「あら不思議や　暮れまじき日にて候が俄に暮れて候よ。さて何と仕り候べき。

シテ謡「なう〳〵旅人御宿參らせうなう。詞是はあげろの山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば、わらはが宿にて一夜を明させ給ひ候へ。ワキ謡「あら嬉しや候。俄に日の暮れ前後を忘じて候。やがて參らうずるにて候。シテ謡「今宵の御宿參らする事、取り分き思ふ仔

細あり。詞「山姥の歌の一節うたひて聞かさせ給へ。年月の望なり闇の思出と思ふべし」謠そのためにこそ日を暮らし、御宿をも參らせて候へ　いかさまにも諭はせ給ひ候へ。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さて誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ぞ。シテ詞「いや何をか包み給ふらん。あれにましますは、百魔山姥とて隱れなき遊女にてはましまさずや。まづ此歌の次第とやらんに、謠よし足引の山姥が、山廻りすると作られたり。あら面白や候。詞是は曲舞に依りての異名、さて誠の山姥をば、如何なる物とか知ろしめされて候ぞ。ワキ詞「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ。シテ詞「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさむらはずや。謠年頃色には出ださせ給ふ。言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ、詞恨申しに來りたり。謠道を極め名を立てよ、世情萬德の妙花を開く事、此一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ、舞歌音樂の妙音の、聲佛事をもなし給はゞ、などか妾も輪廻をのがれ、歸性の善所に至らざらんと、恨を夕山の、鳥獸も鳴きそへ

て聲をあげろの山姥が、靈鬼是まで來りたり

ツレ謡「不思議の事を聞くものかな。さては眞の山姥の、是まで來り給へるか。シテ詞「我國々の山廻り、今日しもこゝに來る事は、我名の德を聞かん爲なり。謠ひ給ひてさりとては、我が妄執を晴らし給へ。ツレ謡「この上はとかく辭しなば恐ろしや。もし身のためや惡かりなんと、憚ながら時の調子を、取るや拍子をすゝむれば、シテ詞「しばさせ給へとてもさらば、暮るゝを待ちて月の夜聲に、謠ひ給はど我も又、眞の姿をあらはすべし。謠すはやかげろふ夕月の、上歌さなきだに、暮るゝを急ぐ深山邊の、地謠「暮るゝを急ぐ深山邊の、雲に心をかけ添へて、此山姥が一節を、夜すがら謠ひ給はど、其時わが姿をも、あらはし衣の袖つぎて、移舞を舞ふべしと、いふかと見れば、其まゝかき消すやうに失せにけり。（中入）

ツレ謡「あまりの事のふしぎさに、さらに眞と思ほえぬ、鬼女が詞を違へじと、ワキ上歌謡「松風ともに吹く笛の、松風ともに吹く笛の、聲すみわたる谷川に、手まづさへぎる曲水

時の調子―時節相應の調子
しばさせ給へ―暫く待ち給へ

の、月に聲すむ深山かな。月に聲すむ深山かな。

後シテ「一聲謡」あら物凄の深谷やな、あら物凄の深谷やな。寒林に骨を打つ、靈鬼泣く〳〵前生の業を恨む、深野に花を供ずる天人、かへすゞも歸性の善を悦ぶ。いや、善惡不二、何をか恨み何をか悦ばんや。萬箇目前の境界、懸河渺々として、巖峨々たり。山復山、いづれの工か青巖の形を削りなせる、水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる。ツレ謡「恐ろしや月も木深き山陰より、其さま化したる顔ばせは、其山姥にてましますか、シテ詞「とてもはや穂に出でそめし言の葉の、氣色にも知ろしめさるべし。我にな恐れ給ひそとよ。ツレ謡「此上は恐ろしながらむば玉の、闇まぎれより現れ出づる、姿詞は人なれども、シテ詞「髪にはおどろの雪を戴き、ツレ謡「眼の光は星の如し。シテ謡「さて面の色は、ツレ謡「沙丹塗の、シテ謡「軒の瓦の鬼の形を、ツレ謡「今宵始て見ることを、シテ謡「何にたとへん、ツレ謡「古への、上歌地謡「鬼一口の雨の夜に、鬼一口の雨の夜に、神鳴さわぎ恐ろしき、其夜を思ひ白玉か、何ぞと問ひし人までも、我身の上になりぬべき、浮世語も恥かしや、

寒林云々―梵語にては尸多遮那といひ死人を葬る所、こゝは前世の罪業ある死人自ら屍に鞭うち又前生惡趣なりし死人自ら屍を供養すと云ふ佛說の意

山復山　何工削成青巖之形　水復水誰家染出碧潭之色―朗詠集の文句

鬼一口―伊勢物語の芥川にて女の鬼にとられし故事

何はのこと―難波と受けて何かの事の意

浮世語も恥かしや。

シテ詞「春の夜の一時を千金に換へじとは、花に清香月に陰、是は顯のたまさかに、行き逢ふ人の一曲の、其ほどもあたら夜に、はや〳〵謡ひ給ふべし。ツレ謡「げに此上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、シテ詞「一聲の山鳥羽をたゝく。ツレ謡「皷は瀧波、シテ謡「袖は白妙、ツレ謡「雪を廻らす木の花の　シテ謡「何はのことか、ツレ謡「法ならぬ。上歌地謡「よし足引の山姥が、よし足引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。

シテ、クリ謡「夫れ山と謂つぱ、塵土より起つて、天雲かゝる千丈の峯、地謡「海は苦の露より滴りて、波濤を疊む萬水たり。シテ、サシ謡「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、地謡「無聲音を聞くたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと、望みしもけに此くやらん。シテ謡「ことに我が住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し。地謡「前には海水漾々として、月眞如の光をかゝけ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。シテ謡「刑鞭蒲朽ちて螢むなしく去る、地謡「諫皷苔深うして、鳥驚かずとも云ひつべし。クセ遠近のたづきも

海水漾々云マー長門本平家物語の文を引く　刑鞭云々ー朗詠集を引く

金輪際―地の底

一念化生―一念の向け方にて鬼女とも衆生とも

佛ともなる

色即是空―有即ち無の意

煩惱―迷ひ

菩提―悟り

してうつ―繁く

撮つ

知らぬ山中に、おほつかなくも呼子鳥の、聲凄き折々に、伐木丁々として、山更に幽なり、法性峯聳えては、上求菩提を現し、無明谷深き粧ひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。そも〳〵山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて、いたらぬ山の奥もなし。シテ謠「然れば人間にあらずとて、地謠「隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色即是空其まゝに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば、山姥もあり、柳は綠、花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事、ある時は山曉の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を貸し、月もろともに山を出で、里まで送るをりもあり、又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。シテ謠「世を空蟬の唐衣、地謠「拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絕間にも、千聲萬聲の、砧に聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや。都に歸りて、世語にせさせ給へと、思ふは猶も

讃佛乘ー經文を稱讃すること

妄執か。唯うち捨てよ何事も、よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。

シテ謡「あしびきの、地謡「山めぐり、シテ謡「一樹の陰一河の流、みなこれ他生の縁ぞかし。ましてや我名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに、讃佛乘の因ぞかし。あら御名殘惜しや、暇申して歸る山の、地謡「春は梢に咲くかと待ちし、シテ謡「花を尋ねて山めぐり、地謡「秋はさやけき影を尋ねて、シテ謡「月見る方にと山めぐり、地謡「冬はさえ行く時雨の雲の、シテ謡「雪を誘ひて山廻り、地謡「廻り廻りて、輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵つもつて山姥となれる、鬼女が有樣見るや見るやと、峯に翔り谷に響きて、今迄こゝにあるよと見えしが、山又山に山廻り、山又山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

内十六

氷室

梗概

氷室の故事を述べ、氷の物の御調を供ふることを語り、御代を壽ぐを主とす。氷室の神及び天女の出現する事を作る。

（脇能）

シテ　氷室の神（前は翁）　ツレ　天女（前は男）

ワキ　臣下

ワキ次第「八洲も同じ大君の、八洲も同じ大君の、御影の春ぞ長閑けき。ワキ詞「そも〳〵是は雄山の院に仕へ奉る臣下なり。我此度丹後國九世の戸にまゐり、既に下向道なれば、是より若狭路にかゝり、津田の入江青羽後瀬の、山々をも一見し、それより都に歸らばやと存じ候。三人ワキ道行詞「花の名の、白玉椿八千代經て、白玉椿八千代經て、緑にかへる空なれや、春の後瀬の山續く、青葉の木陰分け過ぎて、雲路の末の程もなく、都に近き丹

九世の戸―智音寺文殊普薩を祀る　津田の入江―青羽後瀬皆近江國緑にかへる―夫木抄の歌に「今朝よりは雪げの雲のあとはれて緑にかへる春の初空」

氷室―氷をかこひ置く所。

一花開天下春―大集經の文句

霜の翁―白髪を霜に喩ふ

波路や、氷室山にも著きにけり、氷室山にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、丹波國氷室山に著きて候。此所の人を待ち、氷室の謂れをも委く尋ねばやと存じ候。シテ、ツレ一聲「氷室守、春も末なる山陰や、花の雪をも集むらん。ツレ謡「深谷に立てる松陰や、シテ、ツレ謡「冬の氣色を殘すらん。シテ、サシ謡「夫れ一花開けぬれば天下は皆春なれども、松は常磐の色添へて、シテ、ツレ謡「緑に續く氷室山の、谷風はまだ音さえて、氷に殘る水音の、雨も靜に雪落ちて、實に豐年を見する御代の、御調の道も直なるべし。下歌「國土豐に榮ゆくや、千年の山も近かりき。上歌「變らぬや、氷室の山の深緑、氷室の山の深緑、春の氣色は有りながら、此谷陰は去年のまゝ、深冬の雪を集め置き、霜の翁の年々に、氷室の御調守るなり。

氷の物の供御―雪の御調に同じ四月より九月迄國々の氷室より獻ず

氷室の御調守なり。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「御事はこの氷室守にて有るか。シテ詞「さん候氷室守にて候。ワキ詞「さても年々に捧ぐる氷の物の供御、拜みは奉れども在所を見る事は、今始めなり。さて〳〵如何なる構へ

により、春夏まで氷の消えざる謂れ委く申し候へ。シテ詞「昔御狩の荒野に、一むらの森の下庵ありしに、頃は水無月半なるに、寒風御衣の袂に移りて、さながら冬野の御幸の如し。怪みたまひ御覽すれば、一人の老翁雪氷を屋の内にたゝへたり。彼翁申すやう、夫れ仙家には紫雪紅雪とて藥の雪あり、翁もかくの如しとて、氷を供御に供へしより、氷の物の供御始まりて候。ワキ謠「謂れを聞けば面白や。さて〳〵氷室の在所々々、上代よりも國々に、あまた替はりて有りしよなう。シテ詞「先は仁德天皇の御宇に、大和の國闘鷄の氷室より　供へ初めにし氷の物なり。ツレ謠「又其後は山陰の、雪も霰もさえ續く、便の風を松が崎、シテ詞「北山陰も氷室なりしを、ツレ謠「又此國に所を移して、深谷もさえけく谷風寒氣も、シテ謠「便ありとて今までも、シテ、ツレ謠「末代長久の氷の供御のため、丹波國桑田郡に、氷室を定め申すなり。ワキ謠「實に〳〵翁の申す如く、山も所も木深き蔭の、日影もさよぬ深谷なれば、春夏までも雪氷の、消えぬも又は、理なり。シテ詞「いや所により氷の消えぬと承るは、君の威光も無きに似たり。ワキ謠「只世の常の雪氷は、シテ詞「一夜の間にも

松が崎―山城これも氷室の一つ

年越ゆれば、ワキ謡「春立つ風には消ゆるものを、シテ謡「されば歌にも、ワキ謡「貫之が
上歌地謡「袖ひぢて、むすびし水の凍れるを、むすびし水の凍れるを、春立つ今日の、風や
解くらんと詠みたれば、夜の間に來る春にだに、氷は消ゆる習ひなり。ましてや春過ぎ
夏たけて、早水無月になるまでも、消えぬ雪の薄氷、供御の力にあらでは、如何でか殘
る雪ならん。いかでか殘る雪ならん。

クリ地謡「夫れ天地人の三才にも、君を以て主とし、山海萬物の出生、卽ち王地の恩德なり。
シテ、ツレ謡「皇圖長く堅く、帝道遙に盛なり。地謡「佛日光ますく〳〵にして、法輪常に轉ぜり
シテ謡「陽德折を違へずして、地謡「雨露霜雪の時を得たり。クセ夏の日に、なるまで消えぬ冬
氷、春立つ風やよぎて吹くらん。實に妙なれや、萬物時に有りながら、君の惠の色添へ
て、都の外の北山に、つぐや葉山の枝茂み、此面彼面の下水に、集むる雪の氷室山、土
も木も大君の、御陰にいかで洩るべき。實に我ながら身の業の、浮世の數に有りながら、
御調にも取り別きて、猶天照らす氷の物や、他にも異なる捧げ物、叡感以て甚しき、玉

袖ひぢて云々―古今集

皇圖―皇曆のこと　夏の日に云々―後拾遺集の歌

初春の一萬葉集の歌末句ゆらぐ玉の緒雪のしづり一木よりなだれ落つる雪

體を拜するも、深雪を運ぶ故とかや。シテ謠「然れば年立つ初春の、地謠「初子の今日の玉箒、手に取るからにゆらぐ玉の、翁さびたる山陰の、去年のまゝにて降り續く、雪のしづりをかき集めて、木の下水にかき入れて、氷を重ね雪を積みて、待ち居れば春過ぎて、はや夏山になりぬれば、いとど氷室の構して、立ち去る事も夏陰の、水にも住める氷室守、夏衣なれども、袖さゆる氣色なりけり。

ロンギ地謠「實に妙なりや氷の物の、實に妙なりや氷の物の、御調の道も直にある都にいざや歸らん。シテ謠「暫く待たせ給ふべし。とても山路の御序に、今宵の氷の御調、供ふる祭御覽ぜよ。地謠「そもや氷調の祭とは、如何なる事にあるやらん。シテ謠「人こそ知らね此山の、山神木神の、氷室を守護し奉り、每夜に神事有るなりと、地謠「言ひもあへねば山くれて、寒風松聲に聲立て、時ならぬ雪は降り落ち、山河草木おしなめて、氷を敷きて瑠璃壇に、なると思へば氷室守の、薄氷を踏むと見えて、室の內に入りにけり、氷室の內に入りにけり。（中入）

古鳥蘇―樂名

地謡「樂に引かれて古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ。（天舞女）天女謡「變らぬや、氷室の山の深綠。地謡「雪を廻らす舞の袖かな。

後シテ謡「曇無き、御世の光も天照らす、氷室の御調供ふなり。地謡「供へよや供へよや、さも潔き水底の砂、シテ謡「長じては又巖の陰より、地謡「山河も震動し天地も動きて、寒風頻に肝をつゞめて、紅蓮大紅蓮の、氷を戴く氷室の神體、さえ燿きてぞ現れたる。シテ謡「谷風水邊冴え凍りて、地謡「谷風水邊冴え凍りて、シテ謡「月も燿く氷の面、地謡「萬境を映す鏡の如く、シテ謡「晴嵐梢を吹き拂つて、地謡「陰も木深き谷の戸に、シテ謡「雪はしぶき、地謡「霰は横ぎりて、岩もる水もさざれ石の、深井の氷に閉ぢ付けらるゝを、引き放し引き放し、浮み出でたる氷室の神風。あら寒や冷やかや。シテ謡「畏き君の御調なれや、地謡「畏き君の御調なれや。波を收むるも氷、水を靜むるも氷の、日に添へ月に行き、年を待ちたる氷の物の供へ、供へ給へや、供へ給へと采女の舞の、雪を廻らす小忌衣の、袂に添へて薄氷を、碎くな碎くな、解かすな解かすなと氷室の神は、氷を守護し日影を

采女の舞―采女は主上の御陪膳に仕ふれば云ふ

隔て、寒水をそゝぎ清風を吹かして、花の都へ雪を分け、雲を凌ぎて北山の、すはや都も見えたり、すはや都も見えたり。急けや急け氷の物を、供ぶる所も愛宕の郡、捧ぐる供御も日の本の君に、御調物こそめでたけれ。

善界

梗概　唐土の天狗の首領善界坊、我が國に渡りて佛法の妨害を試みんとせしに、佛力神力の偉大なるに辟易して立去る事を作る。今昔物語の話に基くものなるべし。然らば僧は餘慶法師なり。（五番目）

シテ　善界坊　ツレ　太郎坊　ワキ　比叡山の僧

シテ次第謡「雲路を凌ぐ旅の空、雲路を凌ぐ旅の空、出づる日の本を尋ねん。詞是は大唐の天狗の首領善界坊にて候。扨も我國に於て、育王山青龍寺、般若臺に至るまで、少しも慢心の輩をば、皆我道に誘引せずと云ふ事なし。眞や日本は粟散邊地の小國なれども神國として、佛法今に盛んなる由承り及び候間、急ぎ日本に渡り、佛法をも妨げばやと存じ候。道行謡名にし負ふ、豐蘆原の國津神、豐蘆原の國津神、青海原にさし下ろす、天の瓊矛の露なれや　秋津洲根の朝ぼらけ、其方もしるく浮む日の、神の御國は是かと

善界坊―今昔物語には智羅永禪とあり
育王山―寧波府
青龍寺―天台山
般若臺―盧山
粟散邊地―小國の意

よ、神の御國は是かとよ、詞急ぎ候程に、是ははや日本の地に著きて候。先承り及びたる愛宕山に立ち越え、太郎坊に案内を申さばやと存じ候。是は早愛宕山にて有りげに候。山の姿、木の木立、是こそ我等が住むべき所にて候へ。如何に案内申し候。ッレ詞「誰にて渡り候ぞ。シテ詞「是は大唐の天狗の首領善界坊にて候が、御目に懸り申し談ずべき仔細の候ひて、是まで遙々参りて候。ッレ詞「さては承り及びたる善界坊にて渡り候か。先某が庵室へ御入り候へ。さて只今は何のために御出でにて候ぞ。シテ詞「さん候只今参る事餘の儀にあらず。我國に於て、育王山青龍寺、般若臺に至るまで、少しも慢心の輩をば、皆我道に誘引せずと云ふ事なし。眞や日本は、小國なれども神國として、佛法今に盛なる由承り候間、少し心に懸り、遙々是まで参りて候。同じくは御心を一つにして、自他の本意を達し給へ。ッレ詞「さてはやさしくも思召し立ち候ものかな。夫れ我國は天地開闢より此方、先以て神國たり。されば佛法今に盛なり。先々間近き比叡山、あれこそ日本の天台山候よ。謡心のまゝに窺ひ給へ。シテ謡「さてはいよ〳〵便あり。夫れ天

台の佛法は、權實二教に分ち、ツレ謡又密宗の奥義を傳へ、シテ謡顯密兼學の所なるを、

ツレ謡我等如きの類として、シテ謡たやすく窺ひ、ツレ謡給はん事、地謡蟷螂が斧とかや、

猿猴が月に相同じ。かくは知れどもさすが猶、我慢增上慢心の、便を得んと思ふにも、

大聖の威力を、いよ〳〵案じ連ねたり。

クリ地謡夫れ明王の誓約、まち〳〵なりと云へども、其利益餘尊に越え、正しく火生三昧

に入り給ひて、一切の魔軍を焚燒せり。シテ・ツレ謡外には忿怒の相を現ずといへども、

地謡内心慈悲の御恵、凝念不動の理を顯し、但住衆生心想之中、實に有難き悲願かな

クセ然りとはいへども、輪廻の道を去りやらで、魔境に沈む其歎き、思ひ知らずや我なが

ら、過去遠々の間に、さすが見佛聞法の、其結緣の功により、三惡道を出でながら、猶

も鬼畜の身を借りて、いとど佛敵、法敵となれる悲しさよ。今此事を歎かずは、未來永

永を經るとても、いつか般若の智水を得て、火生三昧の、焔を遁れ果つべき。シテ謡世の

中は夢か現か現とも、地謡夢ともいさや白雲の、かゝる迷ひを翻し、歸服せんとは思

願密―顯教は天台宗密宗は眞言宗

蟷螂が斧―弱者が強者に手向ひて身を滅す譬

猿猴が月―水中の月を捉へんとて溺る愚痴の譬

大聖―不動明王

火生三昧―火中に身を入れて世を限し又惡魔を燒盡すこと但住衆生云々―不動經の文

魔境―天狗界

はずして、いよ〳〵我慢の幢の、靡きもやらで徒に、行者の床を窺ひて、降魔の利劍を、待つこそはかなかりけれ。

ロンギ「かくては時刻移りなん。いざ諸共に立ち出でて、比叡の山邊の案内せん。シテ謡「法の爲、今ぞ愛宕の山の名に、頼みを懸けて思ひ立つ、雲の棧うち渡り、地謡「我名やよそに高雄山、東を見れば大比叡や、シテ謡「横川の杉の梢より、地謡「南に續く如意が嶽鷲の御山の雲や霞も、嵐と共に失せにけり。嵐と共に失せにけり。（中入）

ワキ一聲謡「勅を受け、我立つ杣を出でながら、急ぐも同じ名に高き、大内山の道ならん。かくてやう〳〵大比叡を、下りつゝ行けば不思議やな、あれに見えたる下り松の、上歌地謡「梢の嵐吹きしをり、消の嵐吹きしをり、雲となり雨となる、山河草木震動し、天に輝く電光、大地に響く雷は、肝魂を暗まかす、こはそも何の故やらん、こはそも何の故やらん。

後シテ謡「そも〳〵是は、大唐の天狗の首領、善界坊とは我事なり。詞あら物々しや如何に御

勅を受け―内裏の御修法のため下山すること
我立つ杣―比叡山のこと
高雄山―神護寺

坊、今更何の觀念をかなせる。それ若作障碍、卽有一佛魔境と說けり。あら痛はしや、欲界の内に生るゝ輩は、地謡「悟の道や其まゝに、魔道の巷となりぬらん。

上歌地謡「不思議や雲の内よりも、不思議や雲の内よりも、邪法を唱ふる聲すなり。本より魔佛一如にして、凡聖不二なり。自性清淨天然動きなき、是を不動と名づけたり。

ワキ詞「聽我說者得大智惠、叶多羅陀干滿。

地謡「その時御聲の下よりも、その時御聲の下よりも、明王現れ出で給へば、矜迦羅制多迦十二天、各降魔の力を合はせて、御先を拂つておはします。シテ謡「明王諸天はさて置きぬ、地謡「明王諸天はさて置きぬ、東風吹く風に東を見れば、シテ謡「山王權現、地謡「南に男山、西に松の尾、北野や賀茂の、山風神風吹き拂へば、さしもに飛行の翅も地に落ち、力も槻弓の八洲の波の、立ち去ると見えしが又飛び來り、さるにても、かほどに妙なる佛力神力、今より後は來るまじと、云ふ聲ばかりは虛空に殘り、言ふ聲ばかり、虛空に殘つて、姿は雲路に入りにけり。

魔我說者云々―不動ノ惡魔降伏を祈る文句

山王權現―日吉神社

男山―八幡宮　北野―天滿宮

芭蕉

梗概　これは支那の事として作る。芭蕉の精、女人として現れ、僧の弔を受く。これ法華經の功德なりと説けり。（三番目）

シテ　芭蕉の精前は女）　ワキ　僧

法華持經―法華經を持ちて信心すること

風射破窓燈易滅月穿疎屋夢難成―百聯抄解の時

ワキ詞「是は唐土楚國の傍小水と申す所に山居する僧にて候。さても我法華持經の身なれば、日夜朝暮彼御經を讀み奉り候。殊更今は秋も半、月の夜すがら怠る事なし。こゝに不思議なる事の候。此山中に我ならで、又住む者もなく候ふに、夜な〳〵讀經の折節、菴室のあたりに人のおとなひ聞え候。今夜も來りて候はゞ、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。サシ謠　既に夕陽西に遷り、山峽の陰冷ましくして、鳥の聲幽に物凄き、上歌夕べの空もほの〴〵と、夕べの空もほの〴〵と、月になり行く山陰の、寂寞とある柴の戸に、此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

シテ次第「芭蕉に落ちて松の聲、芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらん。サシ風破窓を

衣の珠―法華經にある佩說寶珠を衣の裡にかけても醉臥しては覺ちず不信者は如何ともし難しとの意

射て燈消え易く、月疎屋を穿ちて夢なり難き、秋の夜すがら所から、物冷ましき山陰に、住むとも誰か白露の、古り行く末ぞ哀なる。下歌あはれ馴るよも山曉の、友こそ岩木なりけれ。上歌見ぬ色の、ふかきや法の花ごころ、ふかきや法の花ごころ、染めずはいかが徒に、其唐衣の錦にも、衣の珠はよも掛けじ。草の袂も露涙、移るも過ぐる年月は、廻り廻れどうたかたの、哀れ昔の秋もなし。哀れ昔の秋もなし。

ワキ詞「さても我讀誦の聲怠らず、夢現とも分かざるに、女人の月に見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此あたりに住む者なるが、さも逢ひ難き御法を得、花を捧げ禮をなし、結緣をなすばかりなり。謠とても姿を見え參らすれば、何をか今は憚りの、言の葉草の菴の内を、露の間なりと法の爲に、結緣に貸させ給へとよ。ワキ詞「實に〳〵法の結緣は、誠に妙なる御事なれどもさりながら、なべてならざる女人の御身に、謠いかで御宿を參らすべき。シテ詞「其御心得はさる事なれども、よそ人ならず我もまた、謠住家はこゝぞ小水の、ワキ謠同じ流を汲むとだに、知らぬ他生の緣による、シテ謠一樹の陰の、

ワキ謡「菴の内は、上歌地謡「惜しまじな、月も假寝の露の宿、月も假寝の露の宿、軒も垣ほも古寺の、愁ひは崖寺の經るに破れ、魂は山行の深きに傷ましむ。月の影も冷ましや。誰かいひし蘭省の花の時、錦帳の下とは。廬山の雨の夜、草菴の内ぞ思はるゝ。

ワキ詞「餘りに御志深ければ、御經讀誦の程内へ御入り候へ。シテ詞「さらば内へ參り候べし。あら有難や此御經を聽聞申せば、我等如きの女人、非情草木の類迄も賴もしうこそ候へ。ワキ詞「實によく御聽聞候ものかな。只一念隨喜の信心なれば、一切の非情草木の類までも、何の疑ひの候べき。シテ詞「さては殊更有難や。さて〳〵草木成佛の、譬喩を猶も示し給へ。ワキ謡「藥草喩品顯れて、草木國土有情非情も、皆是諸法實相の、シテ謡「峯の嵐や、ワキ謡「谷の水音、シテ謡「佛事をなすや寺井の底の、心も澄める折からに、上歌地謡「燈火を、背けて向ふ月の下、背けて向ふ月の下、共に憐む深き夜の、心を知るも法の人の、教へのまゝなる心こそ、思ひの家ながら、火宅を出づる道なれや。されば柳は綠、花は紅と知る事も、唯其まゝの色香の、草木も成佛の國土ぞ、成佛の國土なるべし。

神傷山行　深愁破屋　寺古―杜子美の詩句
關省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中―白氏文集

蕫草喩品―法華經の卷の名

思ひの家―思ひに火を言掛く

ロンギ地謡「不思議やさても愚かなる、女人と見るにかくばかり、法の理白糸の、解くばかりなる心かな。シテ謡「なか〳〵に、何疑ひか有明の、末の闇路をはるけずは、今逢ひ難き法を得る。身とはいかゞ思はん。地謡「實に遇ひ難き法に遇ひ、受け難き身の人界を、シテ謡「受くる身ぞとやおぼすらん。地謡「恥かしや歸るさの、道さやかにも照る月の、影はさながら庭の面の、雪の中の芭蕉の、僞れる姿の、眞を見えば如何ならんと、思へば鐘の聲、諸行無常となりにけり。諸行無常となりにけり。

ワキ詞「さては雪の中の芭蕉の、僞れる姿と聞えしは、疑ひもなき芭蕉の女と、現れけるこそ不思議なれ。上歌謡「只是法の奇特ぞと、只是法の奇特ぞと、思へばいとゞ夜もすがら、月も妙なる法の場、風の芭蕉や傳ふらん。風の芭蕉や傳ふらん。

後シテ一聲謡「あら物すごの庭の面やな。あら物すごの庭の面やな。有難や妙なる法の教へには、逢ふ事稀なる優曇華の、花待ち得たる芭蕉葉の、御法の雨も豐なる、露の恵を受くる身の、人衣の姿御覽ぜよ。かばかりは、うつり來ぬれど花もなき、地謡「芭蕉の露のふり

雪の中の芭蕉―王原詩雪中の芭蕉を置けりといふ故事雪中に芭蕉はあるまじければ僞の序詞とせり

優曇華―佛說に三千年に一度花咲くといふ事の稀なる譬にいふ

庭のもせ―庭野もせなるべし

まさる。シテ謡「庭のもせ、山蔭のみぞ、ワキ謡「寝られねば枕ともなき松が根の、現れ出づる姿を見れば、有りつる女人の顔ばせなり。さもあれ御身は如何なる人ぞ。シテ詞「いや人とは恥しや。眞は我は非情の精、謡「芭蕉の女と現れたり。ワキ謡「そもや芭蕉の女ぞとは、何の縁にかかゝる女體の、身をば受けさせ給ふらん。シテ謡「其御不審は御あやまり。何か定めは荒金の、ワキ謡「土も草木も天より降る、シテ謡「雨露の恵を受けながら、ワキ謡「我とは知らぬ有情非情も、シテ謡「おのづからなる姿となりて、ワキ謡「さも愚なる、シテ謡「女とて、上歌地謡「さなきだに、あだなるに芭蕉の、女の衣は薄色の、花染ならぬに、袖のほころびも恥かしや。

一塵法界―塵一すぢにも佛法界ありといふ

近水樓臺―先得月向陽花木易逢春―宋の蘇麟の詩

クセ地謡「夫れ非情草木といつぱ、眞は無相眞如の體、一塵法界の心地の上に、雨露霜雪の形を見す　シテ、ザシ謡「然るに一枝の花を捧げ、地謡「御法の色をあらはすや、一花開けて四方の春、長閑けき空の日影を得て、楊梅桃李數々の、シテ謡「色香に染める心まで、地謡「諸法實相隔てもなし。クセ水に近き樓臺は、まづ月を得るなり、陽に向へる花木は又、春に逢

ふ事易きなる、其理も様々の、實に目の前に面白やな。春過ぎ夏たけ、秋來る風の音信は、庭の荻原先そよぎ、そよかゝる秋と知らすなり。身は古寺の軒の草、忍ぶとすれどいにしへも、花は嵐の音にのみ、芭蕉葉の、脆くも落つる露の身は、置き所なき蟲の音の、蓬がもとの心の、秋とてもなどか變らん。シテ謡「よしや思へば定めなき、地謡「世は芭蕉葉の夢の内に、牡鹿の鳴く音は聞きながら、驚きあへぬ人心、思ひいるさの山はあれど、唯月ひとり伴なひ、馴れぬる秋の風の音、起き臥し茂き小笹原、しのに物思ひ立ち舞ふ袖、暫しいざやかへさん。シテ謡「今宵は月も白妙の、地謡「氷の衣、霜の袴。（序ノ舞）シテ謡「霜の經、露の緯こそ弱からし。地謡「草の秩も、シテ謡「久方の、地謡「久方の、天つ少女の羽衣なれや。シテ謡「是も芭蕉の羽袖をかへし、地謡「かへす秩も芭蕉の扇の、風茫々と物凄き古寺の淺茅生、女郎花刈萱、面影うつろふ露の間に、山風松の風吹き拂ひ吹き拂ひ、花も千草もちり〳〵に、花も千草もちり〳〵になれば、芭蕉は破れて殘りけり。

世は芭蕉葉の云云　列子に見ゆる故事鄭人廐を獲て之を隱し蕉葉を以て覆ふ其所在を失ひて夢となす却て他人之を得たりといふ

百萬

梗概　百萬といふ女、失ひたる我子を慕ひて、狂亂の姿となりながら、嵯峨の大念佛の場に詣でて、つひに廻り逢ひたる事を作る。末段清涼寺の緣起を說き、佛德を讃歎す。（四番目）

シテ　百萬　子方　百万の子　ワキ　僧

ワキ次第「竹馬にいざやのりの道、竹馬にいざやのりの道、眞の友を尋ねん。詞「是は和州三芳野の者にて候。又是に渡り候幼き人は、南都西大寺のあたりにてひろひ申して候。此頃は嵯峨の大念佛にて候程に、此幼き人をつれ申し、念佛に參らばやと存じ候。狂言「ンカシカ、シテ謠「あら惡の念佛の拍子や候。わらは音頭を取り候べし。謠「南無阿彌陀佛、地謠「南無阿彌陀佛、シテ謠「南無阿彌陀佛、地謠「南無阿彌陀佛、シテ謠「彌陀賴む、地謠「人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へゆく、シテ謠「阿彌陀佛やなまうだと、地謠「誰かは賴まざる、誰か賴まざるべき。シテ謠「是かや春の物狂、地謠「みだれ心か戀草の、シテ謠「力車に七く

嵯峨の大念佛―清涼寺にて毎年三月六日より十五日迄行はる　彌陀賴む云々―玉葉集の歌末句　西へ行け　戀草の―萬葉集に「戀草を力車に七車つみてこふらくわが心から」

るま、地謡「積むとも盡きじ、シテ謡「重くとも、輓けやえいさらえいさと、地謡「一度に頼む彌陀の力。頼めやたのめ南無阿彌陀佛。

上歌地謡「げにや世々毎の、親子の道にまどはりて、親子の道にまどはりて、猶此闇を晴れやらぬ。シテ謡「朧月の薄曇り、地謡「わづかにすめる世に、倘三界の首枷かや、牛の車のとことはに、何くをさして引かるらん。えいさらえいさ。シテ謡「輓けや輓けや此車、地謡「物見なり物見なり。シテ謡「けに百萬が姿は、地謡「本よりながき黒髪を、シテ謡「荊棘の如く亂れて、地謡「古りたる烏帽子引きかづき、シテ謡「又眉根黒き亂れ墨、地謡「うつし心か村烏、シテ謡「憂かれと人は添ひもせで、地謡「思はぬ人を尋ぬれば、シテ謡「親子の契麻衣、地謡「肩を結んで裾にさけ、シテ謡「裾を結びて肩に懸け、地謡「綻片、シテ謡「萱簀の、地謡「亂れ心ながら南無釋迦彌陀佛と、信心をいたすも、我子に逢はんためなり。シテ謡「南無や大聖釋迦如來、我子に逢はせ狂氣をもとどめ、安穩に守らせ給ひ候へ。

子詞「如何に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。子詞「是なる物狂をよく〳〵見候へば、

牛の車―經律異相に提章といふ女人身を燒て天に生ぜんとせしを辨才法師がかくしてもいかで罪滅びん牛が車を推くとも新に車をかけらるべしといへり

故郷の母にて御入り候。謡恐れながらよその様にて、問うて給はり候へ。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。やがて問うて参らせうずるにて候。いかに是なる狂女、おことの國里は何くの者ぞ。シテ詞「是は奈良の都に百萬と申す者にて候。ワキ詞「それは何故かやうに狂人とはなりたるぞ。シテ詞「夫には死して別れ、只一人ある忘形見のみどり子に生きて離れて候程に、思が亂れて候。ワキ詞「扨今も子と云ふ者のあらば嬉しかるべきか。シテ詞「仰せまでもなしそれ故にこそ亂れ髪の、遠近人に面を晒すも、若しも我子に廻りや逢ふと、謡車に法の聲立てよ、念佛申し身を碎き、我子に逢はんと祈るなり。ワキ謡「げに痛はしき御事かな。眞信心わたくしなくば、かほど群集の其中に、などかは廻り逢はざらん。シテ詞「嬉しき人の言葉かな。それに付きても身を碎き、法樂の舞を舞ふべきなり。囃してたべや人々よ。謡忝くも此御佛も、羅睺爲長子と説き給へば、地謡「我子に鸚鵡の袖なれや、親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。シテ謡「百や萬の舞の袖、地謡「我子の行方祈るなり。

法樂―佛への手向　羅睺爲長子―釋迦在俗の時の子鸚鵡―逢ふを掛く

牛羊歸徑險鳥雀聚枝悲子美の詩

シテ「げにや惟れば、何くとても住めば宿、地謡「住まぬときには故郷もなし、この世も何くの程ぞや。シテ「牛羊徑街に歸り、地謡「烏雀枝の深きに集る。地謡「げに世の中はあだ浪の、よるべはいづく雲水の、身の果いかに楢の葉の、梢の露の故郷に、シテ「憂き年月を送りしに、地謡「さしも二世とかけし中の、契の末は花鬘、結びもとめぬあだ夢の、長き別れとなり果てゝ、シテ「比目の枕敷波の、地謡「あはれはかなき契かな。

奈良坂の云々―千手に注す

シテ「地謡「奈良坂の、兒の手柏の二面、兎にも角にも俟人の、なき跡の淚越す、袖の柵隙なきに、思ひ重なる年波の、流るゝ月の影惜しき、西の大寺の柳陰、みどり子のゆくへ白露の、置き別れて、いづちとも知らず失せにけり。一方ならぬ思草、葉末の露も青によし、奈良の都を立ち出でて、かへり三笠山、佐保の川を打ち渡りて、山城に井手の里、玉水は名のみして、影うつす面影、淺ましき姿なりけり。かくて月日を送る身の、羊の歩み隙の駒、足にまかせて行く程に、都の西と聞えつる、嵯峨野の寺に參りつゝ、四方の景色を眺むれば、シテ「花の浮木の鵜山や、地謡「雲に流るゝ大井河、眞に浮世の嵯峨なれ

羊の歩み―居所の羊を人間の無常に喩ふ

や、盛過ぎ行く、山櫻嵐の風、松の尾小倉の里の夕霞、立ちこそ續け小忌の袖、かざしぞ多き花衣、貴賤群集する、此寺の法ぞ尊き。彼よりも是よりも、只此寺ぞ有難き。忝くもかゝる身に、申すは恐れなれども、二佛の中間、我等如きの迷ひある、道明らめん主とて、毘首羯磨が作りし、赤栴檀の尊容、やがて神力を現じて、天竺震旦我朝、三國に渡り、有難くも此寺に現じたまへり。シテ謠「安居の御法と申すも、地謠「御母摩耶夫人の、孝養の御爲なれば、佛も御母を、かなしみ給ふ道ぞかし。況んや人間の身として、などかは母を悲しまぬと、子を恨み身をかこち、感歎してぞ祈りける、親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。地謠「あら我子戀しや。シテ謠「是程多き人の中に、などや我子の無きやらん、あら我子戀しや。我子給べなう、南無釋迦牟尼佛と、地謠「狂人ながらも子にもや逢ふと、信心はなきを南無阿彌陀佛、南無釋迦牟尼佛南無阿彌陀佛と、心ならずも逆縁ながら、誓に逢はせてたび給へ。

ツキ謠「餘りに見るも痛はしや、是こそお事の尋ぬる子よ。よく〳〵寄りて見給へとよ。

二佛―釋迦と彌勒
毘首羯磨―天竺の佛師
震旦―支那
安居―四月十六日より五月十六日迄
孝養―今は供養と書きてキヨオヨオと謠ふ

シテ詞「心強や、疾くにも名のり給ふならば、かやうに恥をば咽さじものを、あら恨めしとは思へども、地謡「たま〳〵逢ふは優曇華の、花待ち得たり。夢か現か幻か、キリ地謡「よくよく物を案ずるに、よく〳〵物を案ずるに、彼御本尊はもとよりも、衆生のための父なれば、母諸共に廻り逢ふ、法の力ぞ有難き。願も三つの車路を、都に歸る嬉しさよ。都に歸る嬉しさよ。

船辨慶

梗概　義經、兄頼朝と中違ひて、一先西國へ赴かんとて、大物の浦より船を出す。折しも靜と別を惜しみ、靜舞をかなづ。これ前段なり。このしめやかなる景情一轉して後段となれば、解纜の後、大風起りて怒濤澎湃と見れば波頭に浮べる知盛の幽靈、怨を晴らさんと義經に迫り、長刀もて働を演ず。辨慶祈りて調伏す。壯絶凄絶（五番目）

前シテ靜　後シテ知盛　子方義經　ワキ辨慶　ワキツレ從者　狂言船頭

西塔―比叡山の
判官殿―義經の
こと檢非違使尉
を判官といふ
いひかひなき者
―ユイカイと諸
ふこゝは梶原景
時をさす
御聞き―咎つる
こと盲薬を恩み
ていふ

次第　ワキ、ツレ「今日思ひ立つ旅衣、今日思ひ立つ旅衣、歸洛をいつと定めん。ワキ詞「かやうに候者は、西塔の傍にすまひする武藏坊辨慶にて候。さても我君判官殿は、頼朝の御代官として平家を亡し給ひ、御兄弟の御中日月の如く御座候べきを、いひかひなき者の讒言により、御中たがはれ候事、かへすゞも口惜き次第にて候。然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ、一まづ都を御開きあつて、西國の方へ御下向あり、御身にあやまりなき通

りを御歎き有るべき爲に、今日夜をこめ淀より御船に召され、津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候。ワキ立衆「謡」頃は文治の初めつかた、賴朝義經不會の由、すでに落居し力なく、判官「謡」判官都を遠近の、道狹くならぬ其さきに、西國の方へと志し、ワキ立衆「謡」まだ夜深くも雲居の月、出づるも惜き都の名殘、ひとよせ平家追討の、都出には引きかへて、たゞ十餘人すごくと、さも疎からぬ友舟の、下歌上り下るや雲水の、身は定めなきならひかな。上歌世の中の、人は何とも石清水、人は何とも石清水、澄み濁るをば神ぞ知るらんと、高き御影を伏し拜み、行けば程なく旅心、潮も波も共に引く、大物の浦に著きにけり。大物の浦に著きにけり。

不會―中違ひ

世の中の云々―八幡の御神詠なりと云ふ

ワキ詞「御急ぎ候程に、是ははや大物の浦に御著きにて候。某存じの者の候間、御宿の事を申し付けうずるにて候。如何に此屋の主の渡り候か。狂言詞「誰にて御入り候ぞ。ワキ詞「いや武藏にて候。狂言詞「さて只今は何の爲の御出候ぞ。ワキ詞「さん候我君を是まで御供申して候、御宿を申し候へ。狂言詞「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安く思召され

候へ。ワキ詞「如何に申し上げ候。恐れ多き申し事にて候へども、正しく靜は御供と見え申して候。今の折節何とやらん似合はぬ様に御座候へば、あつぱれ是より御かへしあれかしと存じ候。判官詞「ともかくも辨慶はからひ候へ。ワキ詞「畏つて候。さらば靜の御宿へ參りて申し候べし。

神妙―感心

何共なや―何共しやうの無き意

ワキ詞「いかに此屋の内に靜の渡り候か。君よりの御使に武藏が參じて候。シテ詞「武藏殿とはあら思ひよらずや。何のための御使にて候ぞ。ワキ詞「さん候。只今參る事餘の儀にあらず。我君の御詫には、是までの御參り、かへすゞ〳〵も神妙に思召し候さりながら、只今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば、是より都へ御歸りあれとの御事にて候。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せかな。いづくまでも御供とこそ思ひしに、諒頼みなきは人の心なり。あら何共なや候。ワキ詞「扨御返事をば何と申し候べき。シテ詞「自ら御供申し、君の御大事になり候はゞ留まり候べし。ワキ詞「あら事々しや候。たゞ御とまり有るが肝要にて候シテ詞「よく〳〵物を案ずるに、是は武藏殿の御計らひと思ひ候程に、わらは參り直に御返

事を申し候べし。ワキ詞「それはともかくもにて候。さらば御参り候へ。如何に申し上げ候、靜の御参りにて候。判官詞「いかに靜、此度思はずも落人となり落ち下る所に、是まではるばる來るこゝろざし、かへすゞ〳〵も神妙なりさりながら、はるゞ〳〵の波濤を凌ぎ下らん事然るべからず。先此度は都に上り、時節を待ち候へ。シテ詞「さては誠に我君の御詫にて候ぞや。よしなき武藏殿を恨み申しつる事のはづかしさよ。謠返すゞ〳〵も面目なうこそ候へ。ワキ詞「いや〳〵是は苦しからず候。只人口を思召すなり。謠御心變はるとな思召しそと、涙を流し申しけり。シテ謠いやとにかくに數ならぬ、身には恨みもなけれども、是は舟路の門出なるに、上歌地謠浪風も、靜を留め給ふかと、靜を留め給ふかと、涙を流し木綿四手の、神かけて變らじと、契りし事も定めなや。げにや別れより、まさりて惜き命かな、君に二たび逢はんとぞ思ふ行末。

判官詞「如何に辨慶、靜に酒をすゝめ候へ。ワキ詞「畏つて候。げに〳〵是は御門出の、行末千代ぞと菊の盃、謠靜にこそはすゝめけれ。シテ謠妾は君の御別れ、やる方なさにかき

人口―世間の風評を氣遣ふ意

別れより云々―千載集の歌末句あはんと思へば

渡口郷船風籌出波頭謫所日晴者―朗詠集の詩

立ち舞ふべくも―源氏物語紅葉賀巻の歌を引く

枝を連ぬる―連枝なり兄弟のこと只たのめ―田村を見よ

くれて、涙にむせぶばかりなり。ワキ詞「いや〳〵これは苦しからぬ、旅の舟路の門出の和歌、謡只一さしと勧むれは、シテ謡「其時静は立ち上り、時の調子を取りあへず、渡口の郵船は、風静まつて出づ、地謡「波頭の謫所は、日晴れて見ゆ。ワキ詞「是に烏帽子の候召され候へ。シテ謡「立ち舞ふべくもあらぬ身の、地謡「袖打ち振るも恥かしや。シテ、サシ謡「傳へ聞く陶朱公は勾践を伴ひ、地謡「會稽山に籠り居て、種々の智略をめぐらし、終に吳王を亡して、勾践の本意を達すとかや。シテ然るに勾践は、二度世を取り、會稽の恥を雪ぎしも、陶朱功を成すとかや。されば越の臣下にて、政を身に任せ、功名富み貴く心の如くなるべきを、功成り名遂げて身退くは、天の道と心得て、小船に棹さして、五湖の遠島を樂しむ。シテ謡「かよる例も有明の、地謡「月の都をふりすてよ。西海の波濤に赴き、御身の科のなきよしを、歎き給はゞ賴朝も、終にはなびく青柳の、枝を連ぬる御契、などかは朽ちし果つべき。地謡「只たのめ、（中ノ舞）シテ謡「只賴め標茅が原のさしも草、地謡「我世の中にあらん限りは。シテ謡「かく尊詠の、偈なくは、地謡「かく尊詠の、偈なくは、やがて御代に

とく〳〵―謡を解くといふより疾くとかけて解けたり

出舟の、船子どもはや纜をとく〳〵と、はや纜をとく〳〵と、すゝめ申せば判官も、旅の宿りを出で給へば、シテ謡「靜は泣く〳〵、地謡「烏帽子直垂ぬぎ捨てゝ、涙に咽ぶ御別れ、見る目もあはれなりけり。見る目もあはれなりけり。（中入）

ワキ詞「靜の心中察し申して候。やがて御舟を出ださうずるにて候。ワキツレ詞「いかに申し候。ワキ詞「何事にて候ぞ。ワキツレ詞「君よりの御諚には、今日は浪風あらく候程に、御逗留と仰せ出だされて候。ワキ詞「何と御逗留と候や。ワキツレ詞「さん候。ワキ詞「是は推量申すに、靜に名殘を御惜みあつて、御逗留と存じ候。先御思案有つて御覽候へ。今此御身にてかやうの事は、御運も盡きたると存じ候。其上一とせ渡邊福島を出でし時は、以ての外の大風なりしに、君御舟を出だし、平家を亡し給ひし事、今以て同じ事ぞかし。急ぎ御舟を出だすべし。ワキツレ謡「げに〳〵是は理なり。いづくも敵と夕浪の、ワキ謡「立ち騷ぎつゝ舟子ども、地謡「えいや〳〵と夕汐に、つれて舟をぞ出だしける。

ワキ詞「あら笑止や風が變はつて候。あの武庫山おろし弓紲羽が嶽より吹きおろす嵐に、此

あやかし—妖怪

御舟の陸地に著くべき様もなし。皆々心中に御祈念候へ。ワキツレ詞「いかに武藏殿、此御舟にはあやかしが付いて候。ワキ詞「あゝ暫く。さやうの事をば船中にては申さぬ事にて候、謡あら不思議や海上を見れば、西國にて亡びし平家の一門、おの〳〵浮み出でたるぞや。かゝる詞時節を窺ひて、恨をなすも理なり。判官詞「いかに辨慶。ワキ詞「御前に候。判官詞「今更驚くべからず。たとひ悪靈恨みをなすとも、そも何事の有るべきぞ。謡悪逆無道の其積り、神明佛陀の冥感に背き、天命に沈みし平氏の一類、地謡主上を始め奉り、一門の月卿雲霞の如く、波に浮みて見えたるぞや。後シテ謡抑〳〵是は、桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈なり。詞あらめづらしやいかに義經、謡思ひもよらぬ浦波の、地謡聲をしるべに出舟の、聲をしるべに出舟の、シテ謡知盛が沈みし其有様に、地謡又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮める長刀とり直し、巴浪の紋あたりを拂ひ、潮を蹴立て悪風を吹きかけ、眼もくらみ心もみだれて、前後を忘ずるばかりなり。判官謡「その時義經少しも騒がず、地謡「その時義經少しも騒がず、打物抜き持

月卿雲客—月卿雲客といふを訛りて雲霞と綴けたり

知盛—清盛の三男

巴浪—長刀をふりまはす形

打物—刀

ち、現の人に向ふが如く、言葉を交し戰ひ給へば、辨慶おし隔て、打物業にて叶ふまじと、珠數さら〳〵と押しもんで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威德、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王の索にかけて、祈り祈られ、惡靈次第に遠ざかれば、辨慶舟子に力を合はせ、御船を漕ぎのけ汀によすれば、猶怨靈は慕ひ來るを、追つ拂ひ祈りのけ、又引く汐にゆられ流れ、また引く汐にゆられ流れて、跡白波とぞなりにける。

東方云々―不動明王に祈る文句

跡白波―跡知らずの意を掛く

内十七

右近

梗概　伊勢物語に右近の馬場のひをりの日向ひに立てたる車に女の顔の見えたるに、業平の「見ずもあらず」の歌を詠み、女の「知るしらぬ」の返歌せし事見えたるを材料とし、花爛漫の春の日北野の神の現れて神徳を述ぶる事を作る。（脇能）

シテ　北野の神（前は女）　ツレ　女
ワキ　神主

右近の馬場―右近衛府の馬場　櫻狩云々―拾遺集の歌末句險に隠れん

ワキ三人次第「四方の山風長閑なる、四方の山風長閑なる、雲居の春ぞ久しき。ワキ詞「そも〳〵是は鹿島の神職何某とは我事なり。われ此度都に上り、洛陽の名花殘りなく一見仕りて候。また北野右近の馬場の花、今を盛りなるよし承り候間、今日は右近の馬場の花を眺めばやと存じ候。ワキ三人道行「雲の行く、そなたやしるべ櫻がり、そなたやしるべ櫻がり、雨

は降りきぬ同じくは、ぬるとも花の陰ならば、いざや宿らん松かけの、ゆくへも見ゆる梢より、北野の森もちかづくや、右近の馬場に著きにけり。右近の馬場に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早右近の馬場に著きて候。あれを見れば花見の人々と見えて、車をならべ輿をつゞけ、まことに面白う候。暫くやすらひ花を眺めばやと存じ候。シテ、一聲サシ謡「春風桃李花の開くる時、人の心も花やかに、あくがれいづる都の空、けに長閑なる時とかや、一聲シテ、ツレ謡「見渡せば、柳櫻をこきまぜて、錦をかざる花車、シテ謡「來る春ごとに誘はるゝ、シテ、ツレ謡「心もながき氣色かな。下歌花見車の八重一重見えて櫻の色々に、上歌ひをりせし、右近の馬場の木の間より、右近の馬場の木の間より、影も匂ふや朝日寺の、春の光も天霧てる、神の御幸の跡古りて、松も木高き梅が枝の、立枝も見えて紅の、初花車めぐる日の、轅や北につゞくらん、轅や北につゞくらん。ワキ謡「長閑なる頃は彌生の花見とて、右近の馬場の竝木の櫻の、陰踏む道に休らへば、シテ謡「けにや遙に人家を見て、花あれば卽入るなれば、木陰に車を立てよせけり。ワキ謡「む

花車―花やかなる車

ひをり―諸說區區たる語なり引折の日にて折目正しき裝束を著る晴れの日なりとも云ふ

朝日寺―北野天滿宮

遙見入家花便入―白樂天の詩

何かあやなく―伊勢物語の歌初句知るしらぬ末句しるべなりけれ

花下尼」題「因美景」―白樂天の詩百千鳥―古今六帖の歌末句襲まれぬる

かひを見れば女車の、所からなる昔語、思ひぞいづる右近の馬場の、ひをりの日にはあらねども、謡見ずもあらず、見もせぬ人の戀しくは、詞あやなく今日や詠め暮さん。是業平の此所にて、女車を詠みし歌、今更思ひいでられたり。シテ謡「あら面白の口ずさみや、右近の馬場のひをりの日、詞むかひに立てる女車の、所からなる昔語、はづかしながら今はまた、我身の上に業平の、何かあやなく分きていはん、謡思ひのみこそしるべなりしを。ワキ謡「さやうに詠めし言の葉の、其舊跡もこゝなれば、今又かやうに言問ふ人も、いつ馴れもせぬ人なれども、シテ謡「たゞ花ゆゑに北野の森にて、ワキ謡「言葉をかはせば、シテ謡「見ずもあらず、上歌地謡「見もせぬ人や花の友、見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花の陰に、相宿りして諸人の、いつしか馴れて花車の、榻立てゝ木のもとに、下りゐていざや眺めん。げにや花の下に、歸らん事を忘るゝは、美景によりて花心、馴れ馴れそめて眺めん。いざ〳〵馴れて眺めん。百千鳥、花になれゆくあだし身は、はかなき程に羨まれて、うはの空の心なれや。うはの空の心なれ。

ロンギ地謡「ゆに名にしおふ神垣や、北野の春も時めける、神の名所數々に、シテ謡「眺むれば、都の空のはる〳〵と、霞み渡るや北の宮居、御覽ぜよ時をえて、花櫻葉の宮所、地謡「花の濃染の色分けて、紅梅殿や老松の、シテ謡「綠より明けそめて、一夜松も見えたり。地謡「日影の空も茜さす、シテ謡「紫野行き標野ゆき、地謡「野守は見ずや君が袖、古き御幸の物見とて、車も立つや御輿岡、是ぞ此神の御旅居の、右近の馬場わたり、神幸ぞたつとかりける。

茜さす…袖ふる―萬葉集の歌　古き御幸―醍醐天皇の時

ワキ詞「あらありがたの御事や、かくしも委しく語り給ふ、社々の御本地を、なほ〳〵教へおはしませ。シテ詞「まことは我は此神の、末社と現れ君が代を、守りの神と思ふべし。

御本地―佛說にて神の本體を佛なりとし各の神に對して本地佛あり

ワキ謡「よく〳〵聞けば有難や。守りの神とはさて〳〵いづれの靈神にて、かやうに現れ給ふらん。シテ詞「あらはづかしや神ぞとは、謡「あさまには何と岩代の、地謡「待つこと有りや有明の、待つこと有りや有明の、月も曇らぬ久方の、天照神にては、櫻の宮と顯はれ、ここに北野の櫻葉の、神と夕の空晴れて、月の夜神樂を待ち給へと、花に隱れ失せにけり

や。花に隠れ失せにけり。

ワキ上歌謡「ゆに今とても神の代の、ゆに今とても神の代の、誓は盡きぬ驗とて、神と君との御恵み、眞なりけり有難や。眞なりけり有難や。

後シテ謡「天皇の賢き御代を守るなる、右近の馬場の春を得て、花上苑に明にして、輕軒九陌の塵に、交る神心、和光の影も曇なき、君の威光も影高く、花も搖がず治まる風も、のどかなる代のめでたさよ。地謡「曇なき天照神の恵みを受けては、櫻の宮居と現れ給ひ、シテ謡「こゝに北野の宮の宮居に、地謡「花櫻葉の神と現れ、曇らぬ威光を顯し衣の、袖もかざしの花盛、（中ノ舞）地謡「月も照り添ふ花の袖、月も照り添ふ花の袖、雪を廻らす神かぐらの、手の舞足踏拍子を揃へ、聲すみわたる雲の棧、花に戯れ枝に結ぼゝれ、かざしも花の糸櫻、（破ノ舞）シテ謡「治まる都の花盛、地謡「治まる都の花盛、東南西北も晉せぬ浪の、花も色添ふ北野の春の、御池の水に御影をうつし、うつしうつろふ櫻衣の、裏吹きかへす梢にあがり、枝に木傳ふ花鳥の、とぶさにかけり雲につたひ、遙に上るや雲の羽風に、

花明上苑ニ輕軒九陌之塵ニ朗詠集の句

櫻の宮―伊勢内宮の内

櫻衣―表白裏紫雲の羽風―雲の端と云ふを羽風とつゞけたり

神はあがらせ給ひけり。

女郎花

梗概

平城天皇の御宇、小野頼風と云ふ者、男山に住めり。契をこめし京の女、頼風の無情を恨みて、八幡の放生川に身を投ぐ。其衣朽ちて女郎花生ひ出でたりといふ物語あり。之れに據りて二人の靈を出し、昔語をなさしめ、邪婬の科を受けて地獄の苦患に惱めるさまを見せ、僧の弔ひを受けしむる事を作る。女郎花に關する古歌などもて文飾せり。（五番目）

シテ　小野頼風（前は老翁）　ツレ　妻

ワキ　僧

ワキ詞「是は九州松浦潟より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此秋思ひ立ち都に上り候。道行醋住み馴れし、松浦の里を立ち出でて、松浦の里を立ち出でて、末不知火の筑紫潟、いつしか跡に遠ざかる、旅の道こそ遙かなれ。旅の道こそ遙かなれ。詞急ぎ候程に、是ははや津の國山崎とかや申し候。向ひに拜まれさせ給ふは、石清水八幡宮にて御座候。我國の宇佐の宮と御一體なれば、詣らばやと思ひ候。又是なる野邊に女郎花の

不知火の―筑紫の枕詞

令を盛と咲き亂れて候。立ち寄り詠めばやも存じ候。

ワキ謡「さても男山麓の野邊に來て見れば、千種の花盛んにして、色を飾り露を含みて、蟲の音までも心あり顔なり。野草花を帶びて蜀錦を連ね、桂林雨を拂つて松風を調む。詞此男山の女郎花は、古歌にも詠まれたる名草なり。是も一つは家苞なれば、花一本を手折らんと、此女郎花の邊に立ち寄れば、シテ詞「なう其花な折り給ひそ。花の色は蒸せる粟の如し、俗呼ばつて女郎とす、戲れに名を聞いてだに偕老を契るといへり。謡ましてや是は男山の、名を得て咲ける女郎花の、多かる花に取り分きて、など情なく手折り給ふ、あら心なの旅人やな。ワキ詞「さて御身は如何なる人にてましませば、是程咲き亂れたる女郎花をば惜み給ふぞ。シテ詞「惜み申すこそ理なれ。此野邊の花守にて候。ワキ詞「たとひ花守にてゝもましませ、御覽候へ出家の身なれば、佛に手向と思召し、一本御ゆるし候へかし。シテ詞「實に〳〵出家の御身なれば、佛に手向と思ふべけれど、彼菅原の神木にも折らで手向けよと、其外古き歌にも、謡折り取らば手ぶさに穢る立てながら、詞三世の

花の色は―本朝文粹に花色如二蒸粟一俗呼爲二女郎一即名歟欲契偕老云々

菅原の神木―安樂寺の梅をいふ　新古今集に「情なく折る人つらし我宿の主忘れぬ梅の立枝を」折り取らは云々―後撰集に出づ

佛に花奉るなどと候へば、ことさら出家の御身にこそ、猶しも惜み給ふべけれ。ワキ詞「左様に古き歌を引かば、何とて僧正遍昭は、名にめでて折れるばかりぞ女郎花とはよみ給ひけるぞ。シテ詞「いやさればこそ我落ちにきと人に語るなと、深く忍ぶの摺衣の、女郎と契る草の枕を、竝べしまでは疑ひなければ、其御たとへを引き給はど　出家の身にては御誤り。ワキ謡「かやうに聞けば戯れながら色香にめづる花心、詞　とかく申すによしぞなき、暇申して歸るとて、謡　もと來し道に行き過ぐる。シテ詞「おう優しくも所の古歌をば知ろし召したり。謡　女郎花憂しと見つゝぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば。地謡「優しの旅人や。花は主ある女郎花、よし知る人の名にめでて、許し申すなり、一本折らせたまへや。上歌　なまめき立てる女郎花、なまめき立てる女郎花、うしろめたくや思ふらん。女郎と書ける花の名に、誰偕老を契りけん。彼邯鄲の假枕、夢は五十のあはれ世の、ためしもまことなるべしや　ためしもまことなるべしや。ワキ詞「此野邊の女郎花に眺め入りて、未だ八幡宮に參らず候。シテ詞「この尉こそ山上する

名にめでて云々―古今集に出づ　女郎花憂しと云云―古今集の歌　なまめきたてる―同集に、秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時」　うしろめたくや―同集に、女郎花うしろめたくも見ゆる哉荒れたる宿にひとり立てれば」　邯鄲の假枕―邯鄲を見よ

生けるを放つ―男山の放生會、八月十五日に行はる

三つの袂―三衣のこと僧の衣をいふ　神宮寺―八幡宮に附屬す　鳩の嶺―男山の異名

者にて候へ。八幡への御道しるべ申し候べし。此方へ御入り候へ。ワキ謡聞きしに越えて尊く有難かりける靈地かな。シテ謡山下の人家軒をならべ、シテ謡和光の塵も濁江の、河水に浮む鱗は、實にも生けるを放つかと、深き誓もあらたにて、恵ぞ繁き男山、榮行く道の有難さよ。地謡頃は八月半の日、神の御幸なる御旅所を伏し拜み、上歌久方の、月の桂の男山、月の桂の男山、さやけき影はところから、紅葉も照り添ひて、日もかげろふの石清水、苔の衣も妙なりや。三つの袂に影うつる、しるしの箱を納むなる、法の神宮寺、有難かりし靈地かな。巖松峙つて、山鳶え谷廻りて、諸木枝を連ねたり。鳩の嶺越し來て見れば、三千世界もよそならず、千里も同じ月の夜の、朱の玉垣御戸代の、錦かけまくも、忝しと伏し拜む。

シテ謡「是こそ石清水八幡宮にて御座候へ、よく〳〵御拜み候へ、はや日の暮れて候へば御暇申し候べし。ワキ謡「なう〳〵女郎花と申す事は、此男山につきたる謂にて候か。シテ謡「あら何ともなや。さきに女郎花の古歌を引いて、戯れを申し候も徒事にて候。女郎花と

申すこそ、男山に付きたる謂にて候へ。また此山の麓に、男塚女塚とて候を見せ申し候べし。此方へ御入り候へ。是なるは男塚、又此方なるは女塚。此男塚女塚に付いて、女郎花の謂も候。是は夫婦の人の土中にて候。ワキ詞「さて其夫婦の人の國は何處、名字は如何なる人やらん。シテ詞「女は都の人、男は此八幡山に、謡小野の頼風と申しゃ人上歌地謡「恥かしやいにしへを、語るもさすがなり。申さねば又亡き跡を、誰か稀にも弔ひの、便を思ひ頼風の、更け行く月に木隠れて、夢の如くに失せにけり。夢の如くに失せにけり。（中入）

便を思ひ頼風―頼に寄りを掛く

塚の草一束の間の語を塚にかく

ワキ上歌謡「一夜伏す、男鹿の角の塚の草、男鹿の角の塚の草、陰より見えし亡魂を、弔ふ法の聲立てよ、南無幽靈出離生死頓生菩提。

うら紫―末程遥き紫

後シテ一聲謡「おう曠野人稀なり。我古墳ならで又何物ぞ。ツレ謡骸を爭ふ猛獣は、禁ずるに能はず。シテ謡「なつかしや聞けば昔の秋の風。ツレ謡「うら紫か葛の葉の、シテ謡「歸らば連れよ妹背の波。地謡「消えにし魂の女郎花、花の夫婦は現れたり。あら有難の御法やな

男山の昔を思つて―古今集序の文意くねるひがみすねるこを

ワキ　影の如くに亡魂の、現れ給ふ不思議さよ。ツレ謡「妾は都に住みし者、彼頼風に契を籠めしに、シテ詞「少し契のさはりある、人間を眞と思ひけるか、ツレ謡「女心のはかなさは、都を獨あくがれ出でて、猶も恨みの思ひ深き、放生川に身を投ぐる。シテ詞「頼風是を聞き付けて、驚きさわぎ行き見れば、謡あへなき死骸ばかりなり。ツレ謡「泣く〳〵死骸を取りあげて、此山本の土中に籠めしに、シテ詞「其塚より女郎花一本生ひ出でたり。頼風心に思ふやう、謡さては我妻の女郎花になりけるよと、猶花色もなつかしく、草の袂も我袖も、露觸れそめて立ち寄れば、此花恨みたる氣色にて、夫の寄れば靡き退き、又立ち退けばもとの如し。地謡「こゝによつて貫之も、男山の昔を思つて、女郎花の一時を、くねると書きし水莖の、跡の世までもなつかしや。

クセ地謡「頼風其時に、彼哀れさを思ひ取り、無慙やな我故に、よしなき水の泡と消えて、徒なる身となるもひとへに、我科ぞかし、若かじ浮世に住まぬまでと、同じ道にならんとて、シテ謡「續いて此川に身を投げて、地謡「共に土中に籠めしより、女塚に對して、又男

山と申すなり。其塚はこれ、主は我 幻 ながら來りたり、跡弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。あら閻浮戀しや。キリ邪淫の惡鬼は身を責めて、邪淫の惡鬼は身を責めて、其念力の道も嶮しき劍の山の、上に戀しき人は見えたり嬉しやとて、行きのほれば、劍は身を通し、磐石は骨を碎く。こはそも如何に恐ろしや、劍の枝の撓むまで、いかなる罪のなれる果ぞや。よしなかりける花の一時を、くねるも夢ぞ女郎花、露の臺や花の緣に。浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ。

關寺小町

梗概　小野小町老衰して後、尼になりて近江の國關寺のあたりに在りし頃、歌道の譽れによりて、七夕祭に寺の招を受くといふことを作る。著しく古今集序を加味す。（老女物）

シテ　小野小町　　子　方寺の兒
ワキ　關寺住僧　　ワキツレ　同僧

ワキツレ次第「待ち得て今ぞ秋に逢ふ、待ち得て今ぞ秋に逢ふ、星の祭を急がん。ワキ詞「是は江州關寺の住僧にて候。今日は七月七日にて候程に、七夕の祭を取り行ひ候。又此山陰に老女の菴を結びて候が、歌道を極めたる由申し候程に、幼き人を伴ひ申し、彼老女の物語をも承らばやと存じ候。立衆サシ「颯々たる涼風と衰鬢と、一時に來る初秋の、七日の夕に早なりぬ。ワキ詞「今日七夕の手向とて、糸竹呂律の色々に、ワキツレ謡「事を盡して、ワキ謡「歡島の、上歌、ワキ、ワキツレ謡「道を願の糸はへて、道を願の糸はへて、織るや錦のはた薄花をも添へて

星の祭―七夕
颯々たる―白氏文集の颯々涼風與衰鬢誰教計會一時秋を引く

秋草の、露の玉琴かき鳴らす、松風までも折からの、手向に適ふ夕かな。手向に適ふ夕かな。

シテ、サシ謡「朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず、草衣夕の肌を隠さざれども、おぎぬふに便あり。花は雨の過ぐるによつて紅正に老いたり、柳は風に欺かれて綠漸く垂れり。人更に若き事なし、終には老の鶯の、百囀の春は來れども、昔に歸る秋はなし。あら來し方戀しや。あら來し方戀しや。ワキ詞「如何に老女に申すべき事の候。是は關寺に住む者にて候。此寺の兒達歌を御稽古にて候が、老女の御事を聞き給ひ、歌を詠むべき樣をも問ひ申し、又御物語をも承らん爲に、兒達も是まで御出でにて候。シテ詞「是は思ひも寄らぬ事を承り候物かな。埋木の人知れぬ事となり、花薄穗に出だすべきにしもあらず。心を種として言葉の花色香に染まば、などか其風を得ざらん。優しくも幼き人々の御心に好き給ふものかな。ワキ詞「先々普く人の翫び候は、難波津の歌を以て、手習ふ人の始めにもすべき由聞え候よなう。シテ詞「それ歌は神代より始まれども、文字の數定ま

願の糸―五色の糸を懸けて男女の願を叶へ給へと七夕に供ふること

花因雨遍紅將老　柳被風欺綠漸低―百聯抄解の詩句

埋木の云々―以下古今集序の文意

難波津の歌―「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」

らずして、事の心分き謡難かりけらし。詞今人の代となりて、めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて、難波津の歌を翫び候。ワキ詞「又淺香山の歌は、王の御心を和らげし故に、是又めでたき詠歌よなう。シテ詞「實によく心得給ひたり。此二歌を謡父母詞として、ワキ謡「手習ふ人の始めとなりて、シテ謡「高き賤しき人謡をも分かず、ワキ謡「都鄙遠國の鄙人や、シテ謡「我等如きの庶人までも、ワキ謡「好ける心に、シテ謡「近江の海の、上歌地謡「さゝ波や濱の眞砂は盡くるとも、濱の眞砂は盡くるとも、よむ言の葉はよも盡きじ。青柳の糸絶えず、松の葉の散失せぬ、種は心と思召せ。假令時移り事去るとも、此歌の文字あらば、鳥の跡も盡きせじや。鳥の跡も盡きせじや。ワキ詞「有難う候。古き歌人の言葉多しといへども、女の歌は稀なるに、老女の御事例少なうこそ候へ。我背子が來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞かねてしるしも。是は女の歌候か。シテ詞「是は古へ衣通姫の御歌なり。衣通姫とは允恭天皇の后にてましまします。形の如く我等も其流をこそ學び候へ。ワキ詞「さては衣通姫の流を學び給ふかや。近年聞えたる小野の小町こそ、衣通姫の流とは承れ。わび

淺香山の歌―「淺香山かげさ〈みゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」王―葛城王のこと

我等も其流を―小町は衣通姫の流なりといふ

ぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。是は小町の歌候な。シテ謡「是は大江の惟章が心變りせし程に、世の中物うかりしに、詞文屋の康秀が三河守になりて下りし時、田舎にて心をも慰めよかしと、我を誘ひし程に詠し歌なり。謡忘れて年を經し物を、聞けば涙の古事の、又思はるゝ悲しさよ。ワキ詞「不思議やなわびぬればの歌は、我がよみたりしと承る。又衣通姫の流と聞えつるも小町なり。實に年月を考ふるに、老女は百に及ぶといへば、たとひ小町の存ふるとも、未だ此世に在るべきなれば、今は疑ふ所もなく、御身は小町の果ぞとよ。謡さのみな包み給ひそとよ。シテ謡「いや小町とは恥かしや。色見えでとこそよみし物を、上歌地謡「移ろふ物は世の中の、人の心の花や見ゆる。恥かしやわびぬれば、身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらば今も、いなんとぞ思ふ恥かしや。クリ實にや包めども、袖に溜らぬ白玉は、人を見ぬ目の涙の雨、古事のみを思草の、花萎れたる身の果まで、何白露の名殘ならん。シテ・ツレ謡「おもひつゝ寢ればや人の見えつらんと、地謡「よみしも今は身の上に、存へ來ぬる年月を、送り迎へて春秋の、露行

色見えで―古今集に「色見えで移ろふ物は世の中の人の心の花にぞありける」包めども―古今集の歌末句涙なりけり　思ひつゝ―小町の歌下句遶と知りせばさめざらましを古今集に出づ

あるはなく云々―新古今集に出づ　つまで草の云云―いつまでぞといふを草の名にかけたり　壁生草をいふ花散し葉落つとは盛の過ぐること　初の老―初老は四十歳　玳瑁云々―玉造小町壮衰書の序文の意　枕づく―枕双ぶること妻屋にかけていふ　埴生のこや―小屋を此やに掛く　衰なる様にて―小町の歌風をいふ

き霜來つて草葉變じ、蟲の音も枯れたり。シテ謡「生命既に限りとなつて、地謡「唯槿花一日の榮に同じ。クセあるは無く、無きは數添ふ世の中に、あはれ何れの日まで歎かんと、詠ぜし事も我ながら、いつまで草の花散じ、葉落ちても殘りけるは、露の命なりけるぞ。戀しの昔や、忍ばしの古への身やと、思ひし時だにも、又古事になり行く身の、せめて今は又、初の老ぞ戀しき。あはれ實に古へは、一夜泊りし宿までも、玳瑁を飾り、垣に金花を懸け、戸には水精を連ねつゝ、繼輿屬車の玉衣の色を飾りて歎妙の、枕づく、妻屋の内にしては、花の錦の茵の起き臥しなりし身なれども、今は埴生のこや玉を敷きし床ならん。シテ謡「關寺の鐘の聲、地謡「諸行無常と聞くなれども、老耳には益もなし、逢坂の山風の、是生滅法の理をも得ばこそ、飛花落葉のをり〳〵は、好ける道とて草の戸に、硯をならしつゝ、筆を染めて藻鹽草、書くや言の葉の枯れ〴〵に、哀なる樣にて強からぬは女の歌なれば、いとどしく老の身の、弱り行く果ぞ悲しき。子謡「如何に申し候。七夕の祭遲なはり候。老女をも伴なひ御申し候へ。ワキ謡「如何に老女、七夕の祭を御出で有つ

て御覽候へ。シテ詞「いや〳〵老女の事は憚りにて候程に、思ひも寄らず候。ワキ詞「何の苦しう候べき、只々御出で候へとよ。上歌地謡「七夕の、織る糸竹の手向草、幾年經てかかけろふの、小野の小町の百年に、及ぶや天つ星合の雲の、上人に馴れ〳〵し、袖も今は麻衣の、淺ましや痛はしや、目もあてられぬ有樣、迚も今宵は七夕の、とても今宵は七夕の、手向の數も色々の、或は糸竹に、懸けて廻す盃の、雪を受けたる、童舞の袖ぞ面白き。星祭るなり呉竹の、シテ謡「世々を經て住む、行末の、地謡「幾久しさぞ萬歳樂、シテ詞「あら面白の只今の舞の袖やな。むかし豐の明の五節の舞姫の袖をこそ五度返しゃが、是は又七夕の手向の袖ならば、謡七返しにてや有るべき。詞狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて、謡狂人こそ走り候へ。百年は、(舞)ヲカ百年は、花に宿りし胡蝶の舞、地謡哀なり哀なり、老木の花の枝。シテ謡「さす袖も手忘れ、地謡「裳裾も足弱く、シテ謡「たどよふ波の、地謡「立舞ふ袂は、翻へせども、昔に返す袖はあらばこそ。シテ謡「あら戀しの古やな。地謡「さる程に初秋の短夜、はや明方の、關寺の鐘、シテ謡「鳥も頻に、地謡「告

星合―牽牛織女二星の歡會

豐の明―宮中の御宴十一月中の辰の日

狂人走れば云々―淮南子の語

胡蝶の舞―高麗樂の名

羽束師の森―山城

け渡る東雲の、あさまにもならば、シテ謡羽束師の森の、地謡羽束師の森の、木隠れもよもあらじ、暇申して歸るとて、杖にすがりてよろ〳〵と、本の藁屋に歸りけり。百年の姥と聞えしは、小町が果の名なりけり。小町が果の名なりけり。

自然居士

梗概

雲居寺のあたりに住める自然居士、説法の砌に、諷誦を上げ、布施を供養しに来れる女兒、人買に連れ行かれたるを、居士助けんとて追跡して近江に到り、人買に種々談ずるに、容易に肯はず。遂に居士の舞をかなでて、篠をすり羯鼓をうつ事によりて、人買どもの心を慰めやがて居士女子打連れ歸洛する事を作る。（四番目）

シテ　自然居士　子方　女兒（謡無し）
キリ　人商人　ワキツレ　同
狂言里人

狂言「かやうに候者は、東山雲居寺のあたりに住まひ仕る者にて候。こゝに自然居士と申す喝食の御座候が、一七日説法を御述べ候。今日結願にて御座候。皆々参りて聽聞申し候へ。

シテ「雲居寺造營の札召され候へ。夕の空の雲居寺、月待つ程の慰めに、説法一座述べ

喝食―僧には非ずもと寒山拾得の如く寺院にて齋非時に食物等をよびつく役をつとむるもの
結願―滿願
造營の札―造營の寄附を募る札を買へよとなり

導師―說法する僧　高座―經机讀盤等の事　發願の鉦―說法の初に鳴らす鐘　總神分―大小の神祇　諷誦―願文　西天の貧女―賢愚經に見ゆ

んとて、導師高座に上り、發願の鉦打ち鳴らし、謡謹み敬つて白す。一代教主釋迦牟尼寶號、三世の諸佛十方の薩埵に申して白さく、總神分に般若心經や、是は諷誦を御上げ候か。狂言詞「實に是は美しき小袖にて候。急いで此諷誦文を御覽候へ。シテ詞「敬つて申し受くる諷誦の事。三寶衆僧の御布施一裏、右志す所は、二親聖靈頓證佛果の爲、身の代衣一重。謡三寶に供養し奉る。彼の西天の貧女が、一衣を僧に供ぜしは、身の後の世の逆緣、今の貧女は親の爲、上歌地謡「身の代衣恨めしき、身の代衣恨めしき、浮世の中をとく出でて、先考先妣諸共に、同じ臺に生れんと、讀み上げ給ふ自然居士、墨染の袖を濡らせば、數の聽衆も色々の、袖を濡らさぬ人はなし。袖を濡らさぬ人はなし。ワキ詞「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。我此度都に上り、數多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候が、昨日少しの間暇を乞ひて候程に遣りて候が、未だ歸らず候。なう渡り候か、昨日の幼き者は、親の追善とやらん申して候ひつる程に、說法の座敷にあらうずると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候程に、立越え見

うずるにて候。ワキツレ詞「然るべう候。ワキ詞「や、さればこそこれに候、なう急いで連れて御入り候へ。狂言詞「やるまいぞ。ワキ詞「用がある。狂言詞「用が有らば連れて行け。如何に居士へ申し候。シテ詞「何事にて候ぞ。狂言詞「只今諷誦を上げて候女を、荒けなき男の來り候ひて追つ立てょ行き候程に、遣るまじきと申し候へば、用があると申し候程に遣りて候。シテ詞「あら曲もなや候。始めより彼女は樣有りげに見えて候。其上諷誦を上げ候にも、唯小袖とも書かず、身の代衣と書いて候よりちと不審に候ひしが、居士が推量申すは、彼者は親の追善の爲に、我身を此小袖に替へて諷誦を上げたると思ひ候。さあらば只今の者は人商人にて候べし。彼は道理此方は僻事にて候程に、御身の留めたる分にてはなり候まじ。狂言詞「人商人ならば東國へくだり候べし。大津松本へ某走り行き留めうずるにて候。シテ詞「暫く、御出で候分にてはなり候まじ。居士此小袖を持ちて行き、彼女に代へて連れて歸うらずるにて候。狂言詞「いやそれは今日までの御說法が無になり候べし。シテ詞「いやいや說法は百日千日聞し召されても、善惡の二つを辨へん爲ぞかし。今の女は善人商、

曲もなやーつまちがきこと

松本ー勝所附近

願以此功德―法華經の文句

音曲し―制する詞

さまされ―興をさまさるゝこと妨害をいふ

人は悪人。善悪の二道こゝに極つて候は如何に。謡今日の說法は是迄なり。願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道修行の爲なれば、地謡身を捨て人を助くべし。ワキ、ツレ謡今出て其處ともいさや白波の、此舟路をや急ぐらん。シテ謡舟無とても說く法の、地謡道に心を留めよかし。シテ詞なう〳〵其御船へ物申さう。ワキ詞是は山田矢橋の渡舟にてもなきものを、何しに招かせ給ふらん。シテ詞我も旅人にあらざれば、渡りの舟とも申さばこそ。其御舟へ物申さう。ワキ詞さて此舟をば何舟と御覽じて候ぞ。シテ詞其人買舟の事ざうよ。ワキ詞あよ音高し何と〳〵。シテ詞道理々々、よそにも人や白波の、音高しとは道理なり。ひとかひと申しつるは、其舟漕ぐ櫂の事ざうよ。ツレ謡艫には唐艫といふ物あり、詞人買と云ふ櫂はなきに。シテ詞水の煙の霞をば、一霞二霞。一汐二汐なんどといへば、謡今漕ぎ初むる舟なれば、一櫂舟とは僻事か。ワキ詞實に面白くも述べられたり。さて〳〵何の用やらん。シテ詞是は自然居士と申す說經者にて候が、說法の場さまされ申す、恨申しに來りたり。ワキ謡說法には道理を述べ給ふ。詞我等に僻事なきも

笑止―困りたる意

のを。シテ詞「御僻事とも申さばこそとにかくに、本の小袖は參らする。舟に離れて叶はじと、裳裾を波に浸しつゝ、舷に取り付き引きとどむ。ワキ詞「あら腹立やさりながら、衣に恐れて得は打たず、是も汝が科ぞとて、艪櫂を持つて散々に打つ。シテ詞「打たれて聲の出でざるは、若し空しくやなりつらん。ワキ謡「何しに空しくなるべきと、シテ謡「引き立て見れば、ワキ謡「身には繩、地謡「口には綿の轡をはめ、泣けども聲が出でばこそ。シテ詞「あら不便の者や。やがて連れて歸らうずるぞ心安く思ひ候へ。ワキ詞「なう自然居士舟より御下り候へ。シテ詞「此者を賜はり候へ。小袖を召され候上は御損も候まじ。ワキ詞「參らせたくは候へどもこゝに笑止が候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「さん候我等が中に大法の候。それを如何にと申すに、人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候程に、え參らせ候まじ。シテ詞「委細承り候。又我等が中にも堅き大法の候。かやうに身を徒になす者に行き逢ひ、若し助け得ねば、再び庵室へ歸らぬ法にて候程に、其方の法をも破るまじ、又此方の法をも破られ申すまじ。所詮此者と連れて奥陸奥の國へは下るとも、舟よりは下

まじく候。ワキ詞「舟より御下りなくは栲訴を致さう。シテ詞「栲訴といつぱ捨身の行。ワキ詞「命を取らう。シテ詞「命を取るともふつつと下りまじい。ワキ詞「何と命を取るともふつつと下りまじいと候や。シテ詞「なか〳〵の事。ワキ詞「いや此自然居士に持て扱うて候よ。なう渡り候か。ワキツレ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「さて是は何と仕り候べき。ツレ詞「是は御歸しなうては叶ひ候まじ。よく〳〵物を案じ候に、奥より人商人の都に上り、人に買ひかねて、自然居士と申す說經者を買ひ取り下りたるなんどと申し候はゞ、一大事にて候程に、御歸しなうては叶ひ候まじ。ワキ詞「我等も左樣に存し候さりながら、唯歸せば無念に候程に、色々になぶつて歸さうずるにて候。ワキツレ詞「尤も然るべう候。ワキ詞「なう〳〵自然居士急いで舟より御上り候へ。シテ詞「いや〳〵聊爾には下りまじく候。ワキ詞「何の聊爾の候べき只御上り候へ。シテ詞「あゝ船頭殿の御顏の色こそ直つて候へ。ワキ詞「いやちつとも直り候まじ。又是なる人の申され候は、今度始めて都へ上りて候が、自然居士の舞の事を承り及びて候。一さし舞うて御見せあれと申され候。シテ詞「總じて居士は舞まうたる事はなく

ふつつと―決して　持て扱ふ―持て餘す

聊爾―麁忽

候。ワキ詞「それは御偽にて候。一年今のごとく說法御述べ候ひし時、いで聽衆の眠覺まさんと、高座の上にて一さし御舞ひ有りし事、奥までも其聞え候程に、一さし御舞ひ候へ。シテ詞「おうそれは狂言綺語にて候程に、さやうの事も候べし。舞をまひ候はゞ此者を賜り候べきか。ワキ詞「先御舞を見て、其時の仕義によつて參らせ候べし。是に烏帽子の候、是を召して御舞ひ候へ。シテ詞「よく〳〵物を案ずるに、終には此者を賜はらんずれども、唯返せば無念なり、居士を色々になぶつて恥を與へうと候な。餘りにそれはつれなう候。ワキ詞「何のつれなう候べき。シテ謠「志賀辛崎の一つ松、地謠「つれなき人の心かな。シテ、クリ謠「抑舟の起りを尋ぬるに、水上黃帝の御宇より事起つて、地謠「流れ貨狄が謀より出でたり。シテ、サシ謠「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。地謠「彼を亡さんとし給ふに、烏江といふ海を隔てゝ、攻むべき樣もなかりしに、クセ黃帝の臣下に、貨狄と云へる士卒あり。ある時貨狄庭上の、池の面を見渡せば、折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉水に浮みしに、又蜘蛛といふ蟲、是も虛空に落ちけるが、其一葉の上に乘りつゝ、次第

無念―今は損と謠ふ

抑―これより舞になる

黃帝―五帝第の一

次第にさょがにの、いとはかなくも柳の葉を、吹きくる風に誘はれ、汀に寄りし秋露の、立ちくる蜘蛛の振舞、實にもと思ひそめしより、たくみて舟を造れり。黄帝是に召されて、烏江を渡り渡りて、蚩尤を安く亡し、御代を治め給ふ事、一萬八千歳とかや。シテ謡「然れば船のせんの字を、地謡「公にすょむと書きたり。さて又天子の御顔を、龍顔と名づけ奉り、舟を一葉と云ふ事、此御字より始まれり、又君の御座舟を、龍頭鷁首と申すも、此御代より起れり。

ワキ詞「如何に申し候、我等が舟を龍頭鷁首と御祝ひ候事過分に存じ候。とてもの事に籌を摺つて御見せ候へ。シテ詞「さらば竹を賜はり候へ。ワキ詞「折節船中に竹が候はぬよ。シテ詞「苦しからず候。彼佛の難行苦行し給ひしも、一切の衆生を助けん爲ぞかし。居士も亦其如く、身をこつかに碎きても、彼者を助けん爲なり。夫れ籌の起りを尋ぬるに、東山に在る御僧の、扇の上に木の葉のかょりしを、持ちたる數珠にてさらり〳〵と拂ひしより、さょらといふ事始りたり。居士も亦其如く、さょらのこには百八の數珠、さょらの竹には扇

せんの字―前(すゝむ)の古字。海の事なちんといふ。龍顔―龍柯なちんとの訛あり。龍頭鷁首―龍の頭鷁といふ水鳥の首を船の首に作り設く。

こつか―谷下と書き谷下石こづめの修行の事といふ。籌のこ―こは籌を盛る一方の竹

手を摺る―憐みを乞ふこと

の骨、おつ取り合はせ是を摺る。謡所は志賀の浦なれば、地謡「さゝ波や、さゝ波や、志賀辛崎の松の上葉を、さらり〳〵とさゝらのまねを、琇數にてすれば、さゝらより猶手をも摺る物、今は助けてたび給へ。

ワキ詞「手を摺るなどと、承り候程に参らせ候ふべし。とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。地謡「本より鼓は波の音、（羯鼓）本より鼓は波の音、寄せては岸をどうとは打ち、雨雲迷ふ鳴神の、とどろ〳〵と鳴る時は、降來る雨はばら〳〵はらと、小笹の竹の籔をすり、池の氷のとう〳〵と、鼓を又打ち籔を猶摺り、狂言ながらも法の道、今は菩提の岸に寄せくる、船の内より　ていとうと打連れて、共に都に上りけり。共に都に上りけり。

地の氷の一朗詠　集の地氷東頭風　度解を引く

大會

梗概

山僧に命を救はれたる天狗、その恩返しに、釋迦牟尼佛說法の靈場のさまを、まのあたりに現出して見する事を作る。此の物語の出所十訓抄なり。（五番目）

シテ　天狗（前は客僧）　ツレ　帝釋天
ワキ　山僧

ワキ、サシ謡「それ一代の教法は、五時八教をけづり、教内教外を分たれたり。五時と云つぱ、華嚴阿含方等般若法華、四教とは是れ藏通別圓たり。遮那教主の祕藏を受け、五想成身の峰を開きしより此方、たれか佛法を崇敬せざらん。げに有難き御法とかや。上歌地謡「鷲の御山をうつすなる、鷲の御山をうつすなる、一佛乘の嶺には、眞如の恵日まとかなり。鳥三寶を念じて、風常樂と音づるよ、げにたぐひなき深山かな。けにたぐひなき深山かな。

教内教外―教内とは釋迦の說法を聽きて得道す教外とは自ら悟るなり
遮那教主―大日如來
一佛乘の嶺―比叡山

シテ、ワキ謡「月は古殿の燈を挑げ、風は空廊の幕となつて、石上に塵なく滑らかなる、苔路を歩みよるべの水。あらすごの山洞やな。詞　いかに此庵室の内へ案内申し候。ワキ詞「我禪閑の窓に向ひ心を澄ます處に、案内申さんとは如何なるものぞ。シテ詞「是は此あたりに住居する客僧にて候。我既に身まかるべきを、御憐みにより命助かり申すこと、かへすがへすも有難う候。此事申さん爲に是まで參りて候。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。命を助け申すとは更に思ひもよらず候。シテ詞「都東北院のあたりにての御事なり、定めて思召し合はすべし。かばかりの御志などかは申し上げざらん。詞　此報恩に何事にてもあれ、御望みの事候はど、利那に適へ申すべし。ワキ詞「げにさる事のありしなり。又望みを適へ給はん事、此世の望更になし。たゞし釋尊靈鷲山にての御說法のありさま、まのあたりに拜み申したくこそ候へ。シテ詞「それこそ易き御望みなれ。まことさやうに思召さば、卽ち拜ませ申すべし。さりながら、貴しと思召すならば、必ず我爲惡かるべし。かまへて疑ひ給ふなと、上歌地謡「返すゞ〳〵も約諾し、かへすゞ〳〵も約諾し、

客僧―山伏

東北院―一條の南京極の東

さあらばあれに見えたる、杉一村に立ちよりて、目をふさぎ待ち給ひ、佛の御聲のきこえなば、其時兩眼を開きて、よく〳〵御覽候へと、云ふかとみれば雲霧、降りくる雨の足音、ほろ〳〵と歩み行く道の、木の葉をさつと吹きあげて、梢に上り谷に下り、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

後シテ謡「それ山はちひさき土くれを生ず、かるがゆゑに高き事をなし、海は細き流を厭はず、故に深き事をなす。上歌地謡「ふしぎや虛空に音樂ひゞき、ふしぎや虛空に音樂ひゞき、佛の御聲あらたに聞ゆ。兩眼を開きあたりを見れば、シテ謡「山は卽ち靈山となり、地謡「大地は金瑠璃、シテ謡「木は又七重寶樹となつて、地謡「釋迦如來獅子の座に、現れ給へば、普賢文殊左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し。砂の上には龍神八部おの〳〵拜し圍繞せり。シテ謡「迦葉阿難の大聲聞、地謡「迦葉阿難の大聲聞は、一面に坐せり。空より四種の花ふりくだり、天人雲に連り、微妙の音樂を奏す。如來肝心の法文を說き給ふ。實に有難き景色かな。ワキ謡「僧正其時たちまちに、地謡「僧正其時たちまちに、信心を發し隨喜の

それ山は云々―管子に山不辭土石故能成其高また桑の李新の文に泰山不讓土壤故能成其大河海不擇細流故能就其深の意
迦葉阿難―二尊者とも釋迦の高弟

喜見城―帝釋天の居城
大會―大法會

涙眼に浮み、一心に合掌し、歸命頂禮大恩教主、釋迦如來と、恭敬禮拜するほどに、俄に台嶺響き震動し、帝釋天よりくだり給ふを、見るより天狗おの〳〵騒ぎ、恐れをなしける不思議さよ。

上歌地謡　刹那が間に喜見城の、刹那が間に喜見城の、帝釋あらはれ數千の魔衆を、あさましになせば、有りつる大會ちり〴〵になつてぞ見えたりける。（舞）帝釋

地謡「帝釋此時怒り給ひ、かばかりの信者をなど驚かすと、忽ちさん〴〵に苦を見せ給へば、羽風をたてゝ翔らんとすれども、もぢり羽になつて飛行も叶はねば、恐れ奉り、拜し申せば、帝釋卽ち雲路をさして、上らせ給ふ。其時天狗は岩根を傳ひ、下るとぞ見えし、岩根を傳ひ下ると見えて、深谷の岩洞に入りにけり。

内十八

三輪

梗概

三輪明神、里の女として玄賓僧都の庵を訪ひ、後神と示現して、神楽を奏することを作る。神事能の一つなり。蓋し三輪の大物主神の神話は、古事記、舊事記に見え、畝道の方よりは八雲御抄にも見ゆ。（四番目）

シテ　三輪明神（前は女）　ツレ　玄賓僧都

ワキ詞「是は、和州三輪の山陰に住まひする玄賓と申す沙門にて候。さても此程何くともなく女性一人毎日閼伽の水を汲みて來り候。今日も來りて候はゞ、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第謡「三輪の山本道もなし、三輪の山本道もなし、檜原の奥を尋ねん。サシ實にや老少不定とて、世のなか〳〵に身は殘り、幾春秋をか送りけん。あさましやなす事なくて徒

玄賓―河内に住ゐ相武御宇の人

に、憂き年月を三輪の里に、住まひする女にて候。詞又此山陰に玄賓僧都とて、貴き人の御入り候程に、いつも樒閼伽の水を汲みて参らせ候。今日もまた参らばやと思ひ候。ワキ謡山頭には夜孤輪の月を戴き、洞口には朝一片の雲を吐く。山田もるそほづの身こそ悲しけれ、秋はてぬれば訪ふ人もなし。シテ詞如何に此庵室の内へ案内申し候はん。ワキ詞案内申しさんとはいつも来れる人か。シテ謡山影門に入つて推せども出でず、ワキ謡月光地に鋪いて掃へども又生ず。シテ、ワキ謡鳥聲とこしなへにして、老生としづかなる山居、地謡柴の編戸を押し開き、かくしも尋ね切樒、罪を助けてたび給へ。上歌地謡秋寒き窓の内、秋寒き窓の内、軒の松風うちしぐれ、木の葉かきしく庭の面、門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も、苔に聞えて靜なる、此山住ぞ寂しき。シテ詞如何に上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば、御衣を一重賜はり候へ。ワキ詞易き間の事此衣を参らせ候べし。シテ詞あら有難や、さらば御暇申し候はん。ワキ詞暫く　さて〳〵御身は何くに住む人ぞ。シテ詞妾が栖は三輪の里、山本近き處なり。其上我庵は、三輪の山本戀しくはとはよみたて

山頭夜靄―孤輪月洞口朝吐一片雲―百聯抄解の詩
山田もる―續古今集に出づ玄賓の歌、そほづは案山子なり僧都に掛く
山影入門推不出月光鋪地掃還生―百聯抄解の詩
我庵は三輪の山本戀しくはとむらひ來ませ杉立てる門―古今集

れども、何しに我をば訪ひ給ふべき。なほも不審に思召さば、謡とむらひ來ませ、地謡「杉立てる門をしるしにて、尋ね給へと云ひ捨てゝ、かき消すごとくに失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「此草庵を立ち出でて、此草庵を立ち出でて、行けば程なく三輪の里、近きあたりか山陰の、松はしるしもなかりけり。杉村ばかり立つなる、神垣は何くなるらん。神垣は何くなるらん。不思議やな是なる杉の二本を見れば、有りつる女人に與へつる衣の懸かりたるぞや。詞寄りて見れば衣の褄に金色の文字すわれり。讀みて見れば歌なり。謡三つの輪は清く淨きぞ唐衣、くると思ふな取ると思はじ。

後シテ謡「千早振、神も願の有る故に、人の値遇に逢ふぞうれしき。ワキ謡「不思議やな是なる杉の木陰より、妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願をかなへ、御姿をまみえおはしませと、念願深き感涙に、墨の衣を濡らすぞや。シテ謡「恥かしながら我姿。上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。ワキ謡「いや罪科は人間にあり。是は妙なる神道の、シテ謡「衆生濟度の方便なるを、ワキ謡「暫し迷ひの、シテ謡「人心や。上歌地謡「女

の歌之れを三輪の神詠と云ひ傳ふ

松はしるしもなし―今昔物語の「我宿の松はしるしもなかりけり杉村ならば尋ね來てまし」を引く

三つ輪―身口意の三業

禅―小袖衣の類古くは襖の類を云へり

五濁―劫、煩悩、見、有情の五つ

姿と三輪の神、女姿と三輪の神、禅掛帯引きかへて　只祝子が著すなる、烏帽子狩衣、裳裾の上に掛け、御影あらたに見え給ふ。かたじけなの御事や。

クリ地謡　夫れ神代の昔物語は、末代の衆生の爲め、濟度方便の事業、品々もつて世の爲なり。シテ、サシ謡「中にも此敷島は、人敬つて神力增す。地謡「五濁の塵に交り、しばし心は足引の、大和の國に年久しき、夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿、變らぬ色を頼みけるに、クセされども此人、夜は來れども晝見えず。ある夜の睦言に、御身如何なる故によりかく年月を送る身の、晝をば何と烏羽玉の、夜ならで通ひ給はぬは　いと不審多き事なり、唯同じくはとこしなへに、契をこむべしと有りしかば、彼人答へ云ふやう、實にも姿は羽束師の、もりてよそにや知られなん。今より後は通ふまじ。契も今宵ばかりなりと、懇に語れば、さすが別れの悲しさに、歸る所を知らんとて、苧環に針をつけ、裳裾に之を閉ぢつけて、跡をひかへて慕ひ行く。シテ謡「まだ青柳の糸長く、地謡「結ぶや早玉の、おのが力にさよがにの、糸くり返し行く程に、此山本の神垣や、杉の下枝に留り

結ぶや早玉の―結早玉共に熊野の神

相好―姿

たり。こはそもあさましや、契りし人の姿か、其糸の三わけ殘りしより、三輪のしるしの過ぎし世を、語るに付けて恥かしや。

ロンギ地謡「實に有難き御相好、聞くにつけても法の道、猶しも賴む心かな。シテ謡「とても神代の物語、委しくいざや現し、彼上人を慰めん。地謡「先は岩戸の其初め、隱れし神を出ださんとて、八百萬の神遊び、是ぞ神樂の始なる。シテ謡「ちはやぶる、(神樂)ヲカ天の岩戸を引き立てよ、地謡「神は跡なく入り給へば、常闇の世と早なりぬ。シテ謡「八百萬の神たち岩戸の前にて之を歎き、神樂を奏して舞ひ給へば、地謡「天照大神其時に、岩戸を少し開き給へば、又常闇の雲晴れて、日月光り輝けば人の面白々と見ゆる。シテ謡「面白やと神の御聲の、地謡「妙なる始の物語、サリ思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神、一體分身の御事、今更何と岩倉や、其關の戸の夜も明け、かく有難き夢の告、覺むるや名殘なるらん。覺むるや名殘なるらん。

面白やー岩戸明けて世明るくなれる時諸神の稱へし語　一體分身ー異身同體

安宅

梗概

安宅の何たるを知らぬ人も、勧進帳の外題ならば合點すべし。能樂歌舞伎を通じて最も有名なる物の一つなり。言ふも事々しけれど、義經次第に窮し、今ははや安宅の關に、身の危きにかゝりける折しも、辨慶の苦忠功を奏し、虎口を免れて奥州へ落行く事を作る。辨慶の沈勇、義經の述懐、富樓が武士の情、三つ巴に絡まりて、脚色頗る整ひ、人をして一掬の涙を催さしむ。（四番目）

シテ　辨慶　子方　義經　ツレ　同行山伏
狂言　強力　ワキ　富樓

富樓―加賀の地名なり異本義經記に富樓介家直が關所と見ゆ　作り山伏―假の山伏　固く選み申せ―固く吟味せよとなり

ワキ詞「かやうに候者は、加賀國富樓の何某にて候。さても賴朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作山伏と爲つて、奥へ御下向の由賴朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立てゝ、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し付けばやと存じ候。如何に誰かある。狂言詞「御前に候。

鴻門云々―漢高祖項羽と鴻門に会す。高祖危し。樊噲を遣して入り高祖を庇ふ。伊勢の三郎―義盛。河の次郎―清

片岡―八郎丸常増尾―十郎兼房常陸房―源尊二月の十日の夜―文治三年とみえたり。是やこの―蟬丸の歌を引く。山隠す云々―古今集「山隠す霞ぞ春は恨めしき何れ都の境なるらん」。源津―近江有乳山―近江越前の国境―敦賀比の海―越前太秦―越前板取―近江越前

三国―筑紫の国―加賀浅水―越前国府―越前

花の安宅―嵐は花の仇なりと言ひ掛く安宅は加賀

ワキ詞「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ。狂言詞「畏つて候。

ツレ次第「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。サシ「鴻門楯破れ都の外、伊勢の三郎盛義、河の次郎清経、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙なれ。シテ謡「さて御供の人々には、ツレ謡「伊勢の三郎駿河の次郎、片岡増尾常陸坊、シテ謡「弁慶は先達の姿となりて、シレ謡「主従以上十二人、未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。上歌時しも頃は二月の、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を立ち出でて、是やこの、行くも帰るも別れては、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隠す、霞ぞ春は恨めしき。霞ぞ春は恨めしき。下歌波路遙に行舟の、波路遙に行舟の、海津の浦に著きにけり。東雲はくや明け行けば、淺茅色づく有乳山、上歌氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行くさきに見えたるは、杣山人の板取、河根の水の淺水や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。花の安宅、著きにけり。

シテ詞「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著にて候。暫く此所に御休あらうずるにて候。判官詞「如何に辨慶。シテ詞「御前に候。判官詞「只今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテ詞「いや何とも承らず候。判官詞「安宅の湊に新關を立てよ　山伏を堅く選むとこそ申しつれ。シテ詞「言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。是はゆゝしき御大事にて候。まづ此傍にて暫く御談合あらうずるにて候。是は一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御異見御申しあらうずるにて候。ツレ詞「我等が心中には何程の事の候べき　唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。シテ詞「暫く、仰せの如く此關一所打ち破つて御通りあらうずるは易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然るべからうずると存じ候。判官詞「ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ詞「畏つて候。某急度案じ出だしたることの候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿隱れ御座なく候間、此まゝにては如何と存じ候。恐れ多き申事にて候へども、御縛懸をのけられ、あの強力が

無異―無事
につくい山伏―一廉の山伏に見ゆれども強力―能雲

負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、如何にもくたびれたる御體にて、我等より跡に引きさがつて御通り候はゞ、なか〳〵人は思ひもより申すまじきと存じ候。判官詞「實に是は尤にて候。さらば篠懸を取り候へ。シテ詞「畏つて候。如何に強力。狂言詞「御前に候。シテ詞「笈を持ちて來り候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんほう冥加もなき事にてはなきか。先汝は先へ行き關の樣體を見て、眞に山伏を選むか、又さやうにもなきか、懇に見て來り候へ。狂言「シカ〳〵、シテ詞「さらば御立ちあらうずるにて候。謠實にや紅は園生に植ゑても隱れなし。ツレ謠「強力にはよも目を懸けじと、御篠懸を脫ぎ替へて、麻の衣を御身にまとひ、シテ謠「あの強力が負ひたる笈を、判官謠「義經取つて肩に懸け、ツレ謠「笈の上には雨皮形箱取り付けて、判官謠「綾菅笠にて顏を隱し、ツレ謠「金剛杖にすがり、判官謠「足痛げなる强力にて、地謠「よろ〳〵として歩み給ふ御有樣ぞ痛はしき。シテ詞「我等より跡に引き下つて御出あらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。ツレ詞「承り候。

紅一ぺに花のこと人品は如何にかくしても顏はあるとの意

狂言詞「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。ワキ詞「何と山伏の御通りあると申すか心得てある。なう〳〵、客僧達是は關にて候。シテ詞「承り候。是は南都東大寺建立の爲に、國國へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。先勸めに御入り候へ。ワキ詞「近頃殊勝に候。勸めには參らうずるにて候さりながら、是は山伏達に限つて留め申す關にて候。シテ詞「さて其謂れは候。ワキ詞「さん候。賴朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を賴み給ひ。十二人の作り山伏となつて、御下向の由其聞え候間、國々に新關を立てよ、山伏をかたく選み申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。殊に是は大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。シテ詞「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ出だされ候ひつらめ、よも誠の山伏を留めよとは仰せられ候まじ。狂言「いや昨日も山伏を三人迄斬つつる上は。シテ詞「さて其斬つたる山伏は判官殿か。ワキ詞「あらむつかしや問答は無益、一人も通し申すまじい上は候。シテ詞「さては我等をも是にて誅せられ候はんずるな。ワキ詞「なか〳〵の事。シテ詞「言語道斷かよる

不祥なる所へ來かょつて候ものかな、此上は力及ばぬ事、さらば最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り候へ。ッレ詞「承り候。

シテ謡「いで〳〵最期の勤を始めん、夫れ山伏といつぱ、役の優婆塞の行義を受け、ッレ謡「其身は不動明王の尊容をかたどり、シテ謡「兜巾といつぱ五智の寶冠なり。ッレ謡「十二因縁の襞をうるて戴き、シテ謡「九會曼荼羅の柿の篠懸、ッレ謡「胎藏黑色の脚絆をはきシテ謡「さて又八目の草鞋は、ッレ謡「八葉の蓮華を踏まへたり。シテ謡「出で入る息に阿吽の二字を稱へ、ッレ謡「卽心卽佛の山伏を、シテ謡「こょにて討ちとめ給はん事、ッレ謡「明王の照覽計り難う、シテ謡「熊野權現の御罰を當らん事、ッレ謡「立ちどころにおいて、シテ謡「疑あるべからず。地謡「唵阿吽羅吽欠と、數珠さら〳〵と押しもめば、ワキ詞「近頃殊勝に候、先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳を遊ばされ候へ。是にて聽聞申さうずるにて候。シテ詞「何と勸進帳を讀めと候や。ワキ詞「なか〳〵の事。シテ詞「心得申して候。もとより勸進帳はあらばこそ。

五智―法界體性大圓鏡平等、妙觀察、成所作の五智
十二因緣―無明、行、識、名色、六入觸、受、愛、所有生、老死を煩惱の十二因といふ
九會―卽、理趣降三世、降三世三昧成身觸、塵微細供養、四印の九會
阿吽の二字―字母の本なれば之を尊ぶ

往來―往復文（書簡文）のこと　夫れ―以下勘進帳の文

盧舍那佛―光明遍照佛なり大佛のこと

笈の中より往來の巻物一巻取り出だし、勸進帳と名付けつゝ、謡たからかにこそ讀み上げけれ。夫れつら〳〵、惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲にかくれ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします、御名をば聖武皇帝と名付け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみがたく、滂泣眼に荒く、涙玉を貫く思ひを、善途に翻して盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の、絕えなん事を悲しみて、俊乘坊澄源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、此世にては無比の樂に誇り、當來にては、數千蓮華の上に座せん。歸命稽首敬つて白すと、天も響けと讀み上げたり。ワキ謡關の人々肝を消し、地謡恐れをなして通しけり。恐れをなして通しけり。ワキ詞「急で御通り候へ。シテ詞「承り候。

狂言詞「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候。ワキ詞「如何に是なる强力とまれとこそ。シテ謡すは我君をあやしむるは、一期の浮沈極まりぬと、皆一同に立ち歸る。シテ詞「あゝ暫く。あわてゝ事を仕損ずな。やあ何とてあの强力は通らぬぞ。ワキ詞「あれは此方より留

めて候。シテ詞「それは何とて御とめ候ぞ。ワキ詞「あの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さて留めて候よ。シテ詞「何と人が人に似たるとは、珍しからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ詞「判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間留めて候。シテ詞「や、言語道斷、判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは、能登の國まで指さうずると思ひつるに、わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪むれ。總じて此程、憎つくしにくしと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて散々に打擲す。通れとこそ。や、笈に目を懸け給ふは謀盜人ざうな。ツレ詞「かたゞくは何故に、何故にかほど賤き強力に、太刀刀を抜き給ふは。めだれ顔の振舞は、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかゝれる有樣は、如何なる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ詞「近頃誤りて候。はや〳〵御通り候へ。シテ詞「先の關をば早抜群に程隔たりて候間、此所に暫く御休みあらうずるにて候。皆々近う御參り候へ。如何に申し上げ候。さても只今は餘りに難義に候ひし程に、不思議の働

落居―事件の落着
めだれ顔―見苦しきの意

を仕り候ふ事、謡是と申すに君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよ〳〵あさましうこそ候へ。判官詞「さては悪しくも心得ぬと存ず。如何に辨慶、さても只今の機轉更に凡慮より爲すわざに非ず　唯天の御加護とこそ思へ。謡關の者ども我を怪しめ、生涯限有りつる處に　とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く　散々に打つて我を助くる、是れ辨慶が謀に非ず八幡の、地謡御託宣かと思へば、忝くぞおぼゆる。クリ地謡「夫れ世は末世に及ぶといへども、日月はいまだ地に落ち給はず、たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬことや有るべき。判官ヮシ謡「實にや現在の果を見て、過去未來を知ると云ふ事、地謡「今に知られて身の上に、憂き年月の二月や　下の十日の今日の難を遁れつるこそ、不思議なれ。判官謡「唯さながらに十餘人、地謡「夢の覺めたる心地して、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる有樣かな。クセ然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を賴朝に奉り、屍を西海の波に沈め、山野海岸に、起き臥し明かす武士の、鎧の袖枕、片敷く隙も波の上、ある時は

もんだはずして―彼是言はずして

西海―屋島堅浦の合戰をさす

山脊の云々―一谷の戦をさすとかく―明石の門と冒掛く

遼遠云々―東南は吉野落西北は北國落の事を云へるならん

舟に浮み、風波に身を任せ、ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の内に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨明石の、とかく三年の程もなく敵を亡し靡く世の、其忠勤も徒に、なりはつる此身のそも何といへる因果ぞや。判官謡「實にや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれと、地謡「知れどもさすがなほ、思ひ返せば梓弓の、直なる人は苦しみて、讒臣は彌増に世に在りて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂き世や、あら恨めしの憂き世や。

ワキ詞「如何に誰かある。　官詞「御前に候。　ワキ詞「さても山伏達に聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つ付き申し酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きて留め申し候へ。　狂官詞「畏つて候。如何に申し候。先には聊爾を申して餘りに面目もなく候とて、關守の是まで酒を持たせて參られて候。　シテ詞「言語道斷の事、やがて御目に懸らうずるにて候。　狂言「シカ〳〵、　シテ詞「實に〳〵是も心得たり。人の情の盃に、浮けて心を取らん

心なくれそ―油断すな

三塔―叡山には東塔西塔横川とあり

舞延年―南都北嶺にて行はるゝ舞の一種

鳴るは瀧の水日は照るとも絶えずとうたり―延年の唱歌

虎の尾を云々―危き所を通るる形容

とや　是に付きて　なほ〳〵人に、謡「心なくれそ呉織、地謡「怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、此山陰の一宿に、さらりと圓居して、ところも山路の菊の酒を飲まうよ。シテ謡「面白や山水に、地謡「面白や山水に、盃を浮めては、流に引かゝる曲水の、手まづ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。本より辨慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌、是なる山水の、落ちて巖に響くこそ、地謡「鳴るは瀧の水。シテ詞「たべ酔ひて候程に、先達御酌に参らうずるにて候。ワキ詞「さらばたべ候べし。とてもの事に先達一さし御まひ候へ。地謡「鳴るは瀧の水、（男舞）シテ謡「鳴るは瀧の水、地謡「日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり　とく〳〵立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々、暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩に打懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥國へと下りける。

東北

梗概　東北院の名木の梅につきて、和泉式部の靈現れて物語する事を作る。末段歌道の事を交へ説けり。東北院は上東門院御所もとの法成寺内也。此曲一名軒端梅と云ふ。（靈物）

シテ　和泉式部（前は女）　ワキ　僧

ワキ次第「年立ち返る春なれや、年立ち返る春なれや、花の都に急がん。ワキ詞「これは東國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候ほどに、此春思ひたち都に上り候。道行ワキ三人「春立つや、霞の關を今朝越えて、霞の關を今朝越えて、はてはありけり武藏野を、分け暮らしつゝ跡遠き、山復山の雲を經て、都の空も近づくや、旅までのどけかるらん。旅までのどけかるらん。

ワキ詞「急ぎ候程に、是ははや都に著きて候。又これなる梅を見候へば、今を盛と見えて候。いかさま名のなき事は候まじ、此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。狂言「シカ〳〵。ワキ詞「さ

和泉式部―和泉守道貞妻のち藤原保昌に嫁す

好文木―菅原帝の故事

鶯宿梅―貫之の女の故事

上東門院―一條天皇の中宮

ては此梅は和泉式部と申し候ぞや。暫くながめばやと思ひ候。シテ詞「なう〳〵あれなる御僧、其梅を人に御尋ね候へば、何と教へ参らせて候ぞ。ワキ詞「さん候人に尋ねて候へば、和泉式部とこそ教へ候ひつれ。シテ詞「いやさやうにはいふべからず。梅の名は好文木、又は鶯宿梅などとこそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ひ給ふべからず。此寺未だ上東門院の御時、和泉式部此梅を植ゑ置き、軒端の梅と名づけつゝ、目離れせずながめ給ひしとなり。謡かほどに妙なる花の縁に、御経をも讀誦し給はゞ逆縁の御利益ともなるべきなり。詞是こそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候へ。ワキ詞「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候ひけるぞや。又あの方丈は。和泉式部の御休所にて候か。シテ詞「中々の事和泉式部のふしどなりしを、作りもかへず其まゝにて、今に絶えせぬながめぞかし。ワキ謡「ふしぎやさては古の名を殘しおく形見とて、シテ謡「花も主を慕ふかと、年々色香もいやましに、ワキ謡「さもみやびたる御氣色、シテ謡「猶も昔を、ワキ謡「思ふかと、上歌地謡「年月を、ふるき軒端の梅の花、ふるき軒端の梅の花、主

を知れば久方の、天ぎる雪のなべて世に、聞えたる名殘かや、和泉式部の花心。

ロンギ地謡「けにや古へを、聞くにつけても思ひ出の、春や昔の春ならぬ、我身ひとりぞ心なき。シテ謡「ひとりとも、いさしら雪の古事を、誰に問はまし道芝の、露の世になけれども、此花に住むものを、地謡「そも此花に住むぞとは、とぶさに散るか花鳥の、シテ謡「同じ道にと歸るさの、地謡「先だつ跡か、シテ謡「花の陰に、地謡「やすらふと見えしまゝに、我こそ花の主よと、ゆふぐれなるの花の陰に、木がくれて見えざりき、木がくれて見えずなりにけり。（中入）

三人上歌「終夜、軒端の梅の蔭に居て、軒端の梅の蔭に居て、花も妙なる法の道、迷はぬ月の夜と共に、此御經を讀誦する、此御經を讀誦する。後シテ一聲「あらありがたの御經やな、あらありがたの御經やな。只今讀誦し給ふは寶喩品よなう。詞「思ひ出でたり閻浮のありさま。此寺未だ上東門院の御時、御堂の關白この門前を通り給ひしが、御車の内にて法華經の寶喩品を高らかに讀み給ひしを、式部この門の内にて聞き、謡「門の外法の車の音き

天ぎる雪―空も烟る程の雪古今集の「梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れば」を引く
春や昔―業平の歌を引く
とぶさ―木の梢
寶喩品―法華經の巻の名

けば、我も火宅を出でにけるかなと、かやうによみし事、今の折から思ひ出でられて候ぞや。ワキ謡「げに〳〵此歌は、和泉式部の詠歌ぞと、田舎までも聞き及びしなり。詞さては詠歌の心の如く、謡火宅をばはや出で給へりや。シテ詞「なか〳〵の事火宅は出でぬさりながら、詠みおく歌舞の菩薩となりて、ワキ謡「なほ此寺にすむ月の、シテ謡「出づるは火宅、ワキ謡「今ぞ、シテ謡「すでに、上歌地謡「三界無安の内を去りて、三の車に法の道、すはや火宅の門を今ぞ、和泉式部は成等正覺を得るぞ有難き。

クリ地謡「それ和歌と云つば、發心說法の妙文たり。たま〳〵後世に知らるゝ者はたゞ、和歌の友なりと、貫之もこれを書きたるなり。シテ、ツレ謡「かるが故に天地を動かし鬼神を感ぜしむる事業、地謡「神明佛陀の冥感に至る。殊に時ある花の都、雲居の春の空までも、のどけき心を種として、天道にかなふ詠吟たり。クセ所は九重の、東北の靈地にて、王城の鬼門を守りつゝ、惡魔を拂ふ雲水の、水上は山陰の賀茂河や、末白河の波風も、いさぎよき響は、常樂の緣をなすとかや。庭には池水を湛へつゝ、鳥は宿す池中の樹、僧は

成等成覺―悟り

貫之も云々―古今集眞字序の文意を取れりこは紀淑望の作なれど貫之と云へるなり

鬼門―東北

見佛聞法―佛を見法文を聞くこと

春の夜の云々―古今集の歌

敲く月下の門、出で入る人跡數々〳〵の、袖を連ね裳裾を染めて、色めく有樣は、ゆに〳〵花の都なり。シテ謠「見佛聞法の數々、地謠「順逆の緣はいやましに、日夜朝暮に怠らず、九夏三伏の夏たけて、秋來にけりと驚かす、澗底の松の風、一聲の秋を催して、上求菩提の機を見せ、池水にうつる月影は、下化衆生の相を得たり。東北陰陽の、時節もゆにと知られたり。地謠「春の夜の、（序ノ舞）シテ、ワカ謠「春の夜の、闇はあやなし梅の花、地謠「色こそ見えね、香やは隱るゝ香やは隱るゝ。香やは隱るゝ。シテ謠「げにや色に染み香にめでし昔を、地謠「よしなや今更に、思ひ出づれば我ながら懷しく、戀しき涙を遠近人に、洩らさんも恥し、いとま申さん。シテ謠「これまでぞ花は根に、地謠「今は是までぞ花は根に、鳥は舊巢に歸るぞとて、方丈のともし火を、火宅とや猶人は見ん。こゝこそ花の臺に、和泉式部が臥床よとて、方丈の室に入ると見えし夢はさめにけり。見し夢はさめて失せにけり。

蟬丸

梗概

蟬丸は延喜第四の宮なるが盲目なるため剃髪して逢阪山に捨てられ琵琶を弾じて藁屋の内にわびしく住めるを姉宮なる逆髪といふ狂乱の姿なるが、たま〳〵琵琶の調をたよりにおとづれ給ふ事を作る。兄弟の情哀れ深し。尤も蟬丸は宇多天皇の御子敦實親王の雑色なりとは今昔物語の傳ふる所なり。（四番目）

シテ　逆髪　ツレ　蟬丸　ワキ　臣下

ワキ、ツレ「定めなき世のなか〳〵に、定めなき世のなか〳〵に、憂きことや頼みなるらん。次第　謡「是は延喜第四の御子、蟬丸の宮にておはします。ワキ、ツレ二人謡「實にや何事も報有りける浮世かな。前世の戒行いみじくて、今皇子とはなり給へども、襁褓の内よりなどやらん、兩眼盲ひまし〳〵て、蒼天に月日の光なく、闇夜に燈火暗うして、五更の雨もやむ事なし。ワキ謡「明かし暮らさせ給ふ所に、帝如何なる叡慮やらん、密に具足し奉

延喜―醍醐天皇
襁褓の内―むつきの内に在る頃
幼児をいふ
蒼天に云々―盲目の形容

り、逢坂山に捨て置き申し、御髪をおろし奉れとの、綸言出でて歸らねば、御痛はしさは限りなけれども、勅諚なれば力なく、下歌足弱車忍路を、雲居のよそに廻らして、上歌しのゝめの、空も名殘の都路を、空も名殘の都路を、今日出で初めて又いつか、歸らん事も片糸の、よるべなき身の行方、さなきだに世の中は、浮木の龜の年を經て、盲龜の闇路たどり行く、迷ひの雲も立ちのぼる、逢坂山に著きにけり。逢坂山に著きにけり。ツレ詞「如何に清貫。ワキ詞「御前に候。ツレ詞「さて我をば此山に捨て置くべきか。ワキ詞「さん候宣旨にて候程に、是までは御供申して候へども、何くに捨て置き申すべきやらん。

さるにても我君は、堯舜より此方、國を治め民を憐れむ御事なるに、かやうの叡慮は何と申したる御事やらん。かゝる思ひもよらぬ事は候はじ。ツレ詞「あら愚の清貫が言ひ事やな。本より盲目の身と生るゝ事、前世の戒行拙き故なり。然れば父帝も、山野に捨てさせ給ふ事、御情なきには似たれども、此世にて過去の業障を果し、後の世を助けんとの御はかりこと、是こそ誠の親の慈悲よ。あら歎くまじの勅諚やな。ワキ謡「宣旨に

盲龜―前に注す

て候程に、御髪をおろし奉り候。ツレ謡「是は何と云ひたる事ぞ。ワキ詞「是は御出家とてめでたき御事にて渡らせ給ひ候。ツレ謡「實にやこうくわんもとゞを切り、半だんに枕すと、唐土のせいしが申しけるも、かやうの姿にて有りけるぞや。ワキ謡「此御有様にては、なか〳〵盗人の恐れも有るべければ、御衣を賜つて簑と云ふ物を参らせ上げ候。ツレ謡「是は雨による田簑の島と詠み置きつる、簑と云ふ物か。ワキ詞「又雨露の御爲なれば、同じく笠を参らする。ツレ謡「是は御侍御笠と申せとよみ置きつる、笠と云ふ物よなう。ワキ謡「又此杖は御道しるべ、御手に持たせ給ふべし。ツレ謡「實に〳〵是も突くからに、千年の坂をも越えなんと、彼の遍昭がよみし杖か。ワキ謡「それは千年の坂行く杖。ツレ謡「こゝは所も逢坂山の、ワキ謡「關の戸ざしの藁屋の竹の、ツレ謡「杖、柱とも頼みつる、ワキ謡「父帝には、ツレ謡「捨てられて、地謡「かゝるうき世に逢坂の、知るも知らぬも是見よや、延喜の皇子の、成り行く果ぞ悲しき。行人征馬の數々、上り下りの旅衣、袖をしをりて村雨の、ふり捨て難き名殘かな。ふり捨て難き名殘かな。さりとては、いつを限に有明の、盡きぬ

こうくわん―群なちず治集抄に后宮譽を切り半斷に枕す、唐土の西施が申しけるとも字を當てたり
雨による―古今集貫之の歌「雨により田簑の島をけふ行けばなにはかくれぬ物にぞありける」
御侍―古今集に「御侍御笠と申せ宮城野の木下露は雨にまされり」
つくからに―「千早振神のきりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり」

涙をおさへつゝ、早歸るさになりぬれば、皇子は跡に唯獨、御身に添ふ物とては、琵琶を抱きて杖を持ち、臥し轉びてぞ泣き給ふ。臥し轉びてぞ泣き給ふ。

シテ、サシ「これは延喜第三の御子、逆髪とは我事なり。我皇子とは生れども、いつの因果の故やらん、詞心より〳〵狂亂して、謠邊土遠鄉の狂人と成つて、髮の髮は空樣に生ひ上つて、撫づれども下らず。詞如何にあれなる輩どもは何を笑ふぞ。何我髮の逆さまなるがをかしいとや。實に逆さまなる事はをかしいよな。謠さては我髮よりも、汝等が身にて我を笑ふこそ逆さまなれ。詞面白し面白し。是等は皆人間目前の境界なり。夫れ花の種は地に埋もつて千林の梢に上り、月の影は天にかゝつて萬水の底に沈む。是等をば皆何れをか順と見逆なりと言はん。謠我は皇子なれども庶人に下り、髮は身上より生ひ上つて星霜を戴く。是皆順逆の一つなり。面白や柳の髮をも風は梳るに、地謠「風にも解かれず、シテ謠手にも分けられず。地謠「かなぐり捨つるみての袂、シテ謠拔頭の舞かやあさましや。

みての袂―兩の袂の事ならん
拔頭の舞―樂の名

上歌地謡「花の都を立出でて、花の都を立出でて、憂き音に鳴くか鴨川や、末白河を打ち渡り、粟田口にも著きしかば、今は誰をか松坂や、關の此方と思ひしに、跡になるや音羽山の、名殘惜しの都や。松蟲鈴蟲きりぐ〳〵すの、鳴くや夕陰の山科の、里人も咎むなよ。狂女なれど、心は清瀧川と知るべし。シテ謡「逢坂の、關の清水に影見えて、地謡「今や引くらん望月の、駒の歩も近づくか。水も走井の影見れば、我ながら淺ましや、髪は蓬を戴き、黛も亂れ黑みて、實に逆髪の影映る、水を鏡と夕波の、現なの我姿や。ツレ、サシ謡「第一第二の絃は索々として秋の風、松を拂つて疎韻落つ、第三第四の宮は、我蟬丸が調めも四つの、折柄なりける村雨かな。あら心凄の夜すがらやな。世の中はとにもかくにも有りぬべし。宮も藥屋も果てしなければ。シテ謡「不思議やな是なる藥屋の内よりも、撥音けだかき琵琶の音聞ゆ。そも是程の賤が屋にも、かゝる調めの有りけるよと、思ふにつけてなどやらん。世になつかしき心地して、藥屋の雨の足音もせで、ひそかに立ちより聞き居たり。ツレ謡「誰そや此藥屋の外面に音す

逢阪の關の清水に云々―貫之の歌望月は信濃の牧第二、第二絃索々秋風拂松疎韻若、第三第四絃冷々夜聽猨子箱中鳴―白氏文集四つの折柄―折に緒をかく四つの緒は琵琶のこと世の中は―蟬丸の歌今昔物語にはとてもかくてもすごしてんとあり

博雅―廷喜の御子兵部卿親王の子蟬丸を訪ふ事今昔物語にあり

禅蔵云々―兄弟の例を佛説より引く

連理―連枝なり兄弟のこと

せうと―兄弟の意

るは、此程をり〳〵とむらはれつる、博雅の三位にてましますか。シテ謡近づき聲をよく聞けば、弟の宮の聲なりけり。謡なう逆髪こそ参りたれ。蟬丸は内にましますか。ツレ謡何逆髪とは姉宮かと、驚き藁屋の戸を明くれば、シテ謡さも淺ましき御有様、ツレ謡互に手に手を取りかはし、シテ謡弟の宮か。ツレ謡姉宮かと、地謡共に御名を木綿附の、鳥も音を鳴く逢坂の、せきあへぬ御涙、互に袖やしをるらん。

クリ地謡夫れ桐檀は二葉より香ばしといへり。ましてや一樹の宿りとして、風橘の香を留めて、花も連なる枝とかや。シテサシ謡遠くは淨藏淨眼、早離速離、近くは又應神天皇の御子、地謡難波の皇子宇治の尊、互に即位讓譲の御志、皆是れ連理の情とかや。シテ謡さりながらこゝはせうとの宿とも、地謡思はざりしに藁屋の内の、一曲なくはかくぞとも、いかで調めの四つの緒に、シテ謡引かれてこゝによるべの水の、地謡淺からざりし契かな。クセ世は末世に及ぶとても、日月は地に落ちぬ、習ひとこそ思ひしに、我等如何なれば、皇子を出でてかくばかり、人臣にだに交はらで、雲居の空をも迷ひ來て、都

鄙遠境の狂人、路頭山林の賤となつて、邊土旅人の憐れみを頼むばかりなり。さるにても昨日までは、玉樓金殿の、床を磨きて玉衣の、袖引きかへて今日は又、かゝる所の臥所とて、竹の柱に竹の垣、軒も檜もまばらなる、藁屋の床に藁の窓、敷く物とても藁筵、是ぞ古の、錦の茵なるべし。ツレ謡「たま〳〵事訪ふ物とては、地謡「峯に木傳ふ猿の聲、袖を濕ほす村雨の、音にたぐへて琵琶の音を、彈き鳴らし彈き鳴らし、我音をも泣く涙の、雨だにも音せぬ、藁屋の軒のひま〴〵に、時々月は漏りながら、目に見る事の叶はねば、月にも疎く雨をだに、聞かぬ藁屋の起臥を思ひやられて痛はしや。シテ謡「ロンギ謡「是までなりやいつまでも、名殘は更に盡きすまじ。暇申して蟬丸。ツレ謡「一樹の陰の宿とて、それだに有るにまして實に、せうとの宮の御別れ、とまるを思ひやり給へ。シテ謡「實に痛はしや我ながら、行くは慰む方もあり、留るをこそと夕雲の、立ち休らひて泣き居たり。ツレ謡「鳴くや關路の夕烏、浮かれ心はむば玉の、シテ謡「我黒髪の飽かで行く、ツレ謡「別路とめよ逢坂の、シテ謡「關の杉村過ぎ行けは、ツレ謡「人聲遠くなるまゝに、シテ謡「藁

むば玉の＝黒にかゝる枕詞

屋の軒に、ツレ謡「たよおみて、地謡「互にさらばよ。常には訪はせ給へと、幽に聲のする程聞き迄りかへりみ置きて、泣く〳〵別れおはします。泣く〳〵別れおはします。

猩々

梗概―唐土のかうふうと云ふ酒賣る男の孝行なるにめでて、猩々楯―來りて、無盡の酒泉を湛へ、めでたく舞ひ收むる曲なり。（五番目）

シテ　猩々　ワキ　かうふう

ワキ詞「是は唐土かね金山の麓、楊子の里にかうふうと申す民にて候。さても我親に孝あるにより、或夜不思議の夢を見る。楊子の市に出でて酒を賣るならば、富貴の身となるべしと、教へまよになす業の、謡時去り時來りけるにや、次第々々に富貴の身となりて候。

詞　又こよに不思議なる事の候。市毎に來り酒を飲む者の候が、盃の數は重なれども、面色は更に變はらず候程に、餘りに不審に存じ、名を尋ねて候へば、海中に住む猩々とかや申し候程に、今日は潯陽の江に出でて、彼の猩々を待たばやと存じ候。上歌謡潯陽の江の邊にて、潯陽の江の邊にて、菊をたよへて夜もすがら、月の前にも友待つや、又傾くる

かね金山―徑山（キンザン）に對して金山を兩點訓みにせりかうふう―孝夫とも高鳳とも書けり

菊をたよへて―菊花を酒にひたすこと

盃の、影をたゝへて待ち居たり、影をたゝへて待ち居たり。

地謡「老いせぬや、老いせぬや、薬の名をも菊の水、盃も浮かみ出でて、友に逢ふぞ嬉しき、此友に逢うぞうれしき。シテ謡「御酒と聞く、地謡「御酒と聞く、名も理や秋風の、シテ謡「吹けども、吹けども、地謡「更に身には寒からじ。シテ謡「理や白菊の、地謡「理や白菊の、著せ綿を溫めて、酒をいざや酌まうよ。シテ謡「客人も御覽ずらん、地謡「月星は隈もなき、シテ謡「所は潯陽の、地謡「江の内の酒盛、シテ謡「猩々舞を舞はうよ。地謡「蔦の葉の笛を吹き、波の鼓どうと打ち、シテ謡「聲澄み渡る浦風の、地謡「秋の調や殘るらん。（舞）シテ謡「有難や御身の心すなほなるにより、此壺に泉を湛へ、只今返し與ふるなり。よも盡きじ、地謡「よも盡きじ、萬代までの竹の葉の酒、酌めども盡きず、飲めども變らぬ秋の夜の盃、影も傾く、入江に竝立つ、足元はよろ〳〵と、ゑひに臥したる枕の夢の、覺ると思へば泉は其儘、盡きせぬ宿こそめでたけれ。

著せ綿―九月九日菊花に綿をきせて句を移すことあり

竹の葉―酒の異名

志賀の山越―白河より越ゆる道　眞野の入江―湖水近傍

内十九

白髭

梗概　白髭明神は近江志賀郡に在り猿田彦命を祀る。勅使參向あり、明神示現ある事を作る。明神の縁起は太平記の本文に據る。著しく佛説を交へたり。（脇能）

シテ　白髭明神（前は漁翁）　ツレ　漁夫

ワキ　勅使

ワキ次第「三人連れ立つ旅衣、三人連れ立つ旅衣、志賀の山越えうち過ぎて、眞野の入江の道すがら、鳰の浦風さえかへり、

ワキ詞「君と神との道直に、君と神との道直に、治まる國ぞ久しき。

ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。扨も江州白髭の明神は靈神にて御座候。君此程不思議の御靈夢の御告ましますにより、急ぎ參詣申せとの宣旨を蒙り、只今白髭の明神に、勅使に參詣仕り候。

道行　ワキ・三人「九重の、空も長閑けき春の色、空も長閑けき春の色、霞む行くへは花園の、志賀の山越うち過ぎて、眞野の入江の道すがら、鳰の浦風さえかへり、

立ち寄る波も白髭の、宮居に早く著きにけり。宮居に早く著きにけり。シテ、ツレ一聲「釣のいとなみいつまでか、隙も波間に明け暮れん。ツレ謡「棹さしなるゝ海士小舟、シテ、ツレ謡「渡り兼たる浮世かな。シテ、サシ謡「風歸帆を送る萬里の程、江天渺々として水光平かなり。シテ、ツレ謡「舟子は解く是れ明朝の雨。おもしろや頃しも今は春の空、霞の衣はころびて、峯白妙に咲く花の、嵐も匂ふ日影かな。下歌賤しき海士の心まで、春こそ長閑けかりけれ。上歌花誘ふ比良の山風吹きにけり、比良の山風吹きにけり、漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで、鳰の浦わもはる〳〵と、霞み渡りて天つ雁、歸る越路の山までも、眺めに續く氣色かな、眺めに續く氣色かな。

花誘ふ云々―新古今集の歌末句

ワキ詞「如何に是なる翁、汝は此浦の者か。シテ詞「さん候此浦の漁夫にて候が朝な〳〵沖に出で釣を垂れ候。まづ御姿を見奉れば、このあたりには見馴れ申さぬ御事なり。もし都よりの御參詣にて御座候か。ワキ詞「實によく見て有る物かな。是は當今に仕へ奉る臣下なるが君此程不思議の御靈夢の御告ましますにより、勅使に參詣申して候。シテ詞「有

近江―逢ふを掛く

此國の起り―日本の開闢　第九の減劫―劫は佛説にて極めて長き時をいふ　之を成住壞空の四に分つ此壞劫を減劫といひ其の二度循る間を第九といへり　波止土濃―波止りて土濃かなりの義と云ふ

難や君としてだにかほどまで、敬ひ給ふ御神の、御威光の程こそ有難けれ。シテ、ツレ謡「曩しき海士の此身までも、直なる御代に近江の海の、深き恵みを頼むなり。ワキ謡「實に誰としても君を仰ぎ、神を敬ふ心あらば、などか恵にあづからざらん。シテ謡「殊更こよは、ワキ謡「所から、上歌地謡「瑞垣の、年も經にけり白髭の、年も經にけり白髭の、神の誓は今とても、變らざりけり。實に有難や頼もしや。我は心も波小舟、釣の翁の身ながらも、安く樂しむ此時に、生れあふ身は有難や。生れあふ身は有難や。

クリ地謡「夫れ此國の起り、家々に傳る所、おの〳〵別にして、其説まち〳〵なりといへども、暫く歸する所の一義に依らば、天地既に分つて後、第九の減劫人壽二萬歳の時、シテ謡「迦葉世尊西天に出世し給ふ時、地謡「大聖釋尊其授記を得て、都率天に住し給ひしが、シテ謡「われ八相成道の後、遺教流布の地いづれの所にか有るべきとて、地謡「此南瞻部州を普く飛行して御覽じけるに、漫々とある大海の上に、一切衆生悉有佛性如來、常住無有變易の波の聲、一葉の蘆に凝り固まつて、一つの島となる。いまの大宮權現の波止土濃なり。

頭北面云々ー入滅の状　抜提ー河名

佛法結界ー佛法に縁故ある土地

二佛ー醫師と釋尊

クセ其後人壽百歳の時、悉達と生れ給ひて、八十年の春の頃、頭北面西右脇臥、抜提の波と消え給ふ。されども佛は、常住不滅法界の、妙體なれば昔、蘆の葉の島となりし中津國を御覽ずるに、時は鵜草、葺不合の、尊の御代なれば、佛法の名字を人知らず。こゝに比叡山の麓、さゝ波や志賀の浦の邊に、釣を垂るゝ老翁あり。釋尊かれに向つて、翁若し此地の主たらば、此山を我に與へよ、佛法結界の地となすべしと宣へば、翁答へて申すやう、我人壽六千歳の初より、此山の主として、此湖の七度まで、芦原になりしをも、正に見たりし翁なり。但し此地結界となるならば、釣する所失せぬべしと、深く惜み申せば、釋尊力なく、今は寂光土に、歸らんとしたまへば、シテ謡「時に東方より、地謡「淨瑠璃世界の主藥師、忽然と出で給ひて善きかなや、釋尊此地に佛法を廣め給はん事よ、我人壽二萬歳の昔より、此所の主たれど、老翁未だわれを知らず、なんぞ此山を惜み申すべきやは、開闢し給へ、我も此山の主となつて、共に後五百歳の、佛法を守るべしと、固く誓約し給ひて、二佛東西に去り給ふ。其時の翁も、今の白髭の神とかや。

ワキ詞「不思議なりとよかほどまで、妙なる神祕を語る翁の、其名は如何に覺束な。レテ詞「今は何をか包むべき、其古も釣を垂れし翁なるが、勅使を慰め申さんとて、只今こゝに來りたり。殊更今宵は天燈龍燈神前に、來現の時節なれば、謠暫く待たせ給ふべしと、地謠「夕の雲もたち騷ぎ、夕の雲もたち騷ぎ 汀に落ち來る風の音、老の波もよりくる、釣の翁と見えつるが、我白髭の神ぞとて、玉の扇を押開き、社壇に入らせ給ひけり。社壇に入らせ給ひけり。（中入）

地謠「八少女の、返す袂の色々に、宣禰が鼓も聲すみて、神さび渡れる折柄かな。後シテ謠「神は人の敬ふによつて威を增す。ましてや是は勅の使、仰ぎても猶餘あり。上歌地謠「不思議や社壇の內よりも、不思議や社壇の內よりも、眞に妙なる御聲を出だし、扉もおのづから、朱の玉垣かゝやき渡る、白髭の神の御姿現れたり。

ワキ謠「あら有難の御事や。かゝる奇特に逢ふ事も、唯是れ君の御蔭ぞと、感涙袖を濕せり。

シテ謠「いざ〳〵さらば夜もすがら、舞樂の曲を奏しつゝ、勅使を慰め申さんと、上歌地謠「神

樂催馬樂とりぐ〳〵に、神樂催馬樂とりぐ〳〵に、糸竹の役々祕曲を盡し、拍子を揃へて、夜遊の舞樂は有難や。（笛）シテ謡「面白や此舞樂、地謡「面白や此舞樂の、鼓は自ら、磯打つ波の聲、松風は琴を調め、心耳を澄ます折柄に、天つ御空の雲居かょやき渡り、湖水の面鳴動するは、天燈龍燈の來現かや。地謡「天地の兩燈現れて、天地の兩燈現れて、神前に供ふる御燈の光、山河草木かょやき渡り、日夜の勝劣見えざりけり。シテ謡「かくて夜もはや明方の、地謡「かくて夜もはや明方になれば、各〳〵神前に御暇申し、歸れば明神も御聲をあげて、善哉々々〳〵と感じ給へば、天女は天路に又立ち歸れば、龍神は湖水の上に翔つて、波を返し雲を穿ちて、天地に別れて飛び去り行けば、明け行く空も白髭の、明け行く空も白髭の、神風治まる御代とぞ、なりにける。

日夜勝劣―日光と燈火との優劣

明け行く空も―白むを白髭に掛く

盛久

梗概

平家譜代の侍、主馬八郎左衛門尉盛久といふ者、京都に隠れ居たるが、囚はれの身となりて鎌倉に下り、首打たるべき折しも、日頃清水の観世音を信仰したる利益により、霊験を受け、めでたく赦免にあづかる事を作る。その次第は長門本平家物語に傳ふ。（四番目）

シテ　盛久　　ワキ　土屋三郎

ワキツレ　太刀取

土屋殿―三郎宗遠、土肥實平の弟

頼朝の家臣

清水の方へ―観音を遥拝せんとなり

シテ詞「如何に土屋殿に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「只今關東に下りなば、是が限りなるべし。清水の方へ輿を立てよ給はり候へ。ワキ詞「それこそ易き御事、如何に面々、東山の方へ輿を立てられ候へ。

シテ、サシ謡「南無や大慈大悲の觀世音さしも草、さしも畏き誓の末、一稱一念猶頼みあり、ましてや多年値遇の御結縁空しからんや。あら御名殘惜しや。一聲いつかまた清水寺の

花盛、地謡歸る春なき名殘かな。シテ謡音に立てぬも音羽山、地謡瀧つ心を人知らじ。シテ、サシ謡見渡せば柳櫻をこき交ぜて、錦と見ゆる故郷の空、地謡又いつかはと思出の限なるべき東路に、思ひ立つこそ名殘なれ。シテ謡我なまじひに弓馬の家に生れ、世上に隱れなき身として、地謡思はざる外の旅行の道、關の東に赴けば、跡白河を行く波の、いつ歸るべき旅ならん。下歌こゝは誰をか松坂や、四の宮河原四の辻、上歌これやこの、行くも歸るも別れては、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも、逢坂の關守も、今の我をばよも留めじ。勢田の長橋うち渡り、立ち寄る影は鏡山、さのみ年經ぬ身なれども、衰へは老會の森を過ぐるや美濃尾張、熱田の浦の夕汐の、道をば波に隱されて、廻れば野邊に鳴海潟又八橋や高師山、又八橋や高師山。ロンギ地謡汐見坂橋本の、濱名の橋を打ち渡り、シテ謡旅衣、かく來て見んと思ひきや、命なりけり小夜の中山は是かとよ。地謡變る淵瀬の大井河、過ぎ行く波も宇津の山、シテ謡越えても關に淸見潟、地謡三保の入海田子の浦、打ち出でて見れば眞白なる、雪の富士の嶺箱根山、猶明け行くや星月夜早鎌

鏡山―古今集黒主の歌に「鏡山いざ立寄りて見て行かん年經ぬる身は老やしぬると」
命なりけり―新古今集西行の歌に「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」
星月夜―鎌倉の枕詞

倉に著きにけり。鎌倉に著きにけり。

シテ、サシ謡「夢中に道あつて塵埃を隔つ。實にやそことも知らざりし。山を越え水を渡つて此關東に著きぬ。百年の栄花は塵中の夢、一寸の光陰は沙裏の金。實にや故郷は雲居のよそ、千代もと契りし友人も、變る世なれや我一人、鎌倉山の雲霞、實にかょる身の習ひかや。詞「かくてながらへ諸人に面をさらさんより、謡「天晴疾う斬られればやと思ひ候。

ワキ詞「あら痛はしや盛久の獨言を仰せ候。如何に申し候、土屋が參りて候。シテ詞「土屋殿と候や此方へ御入り候へ。ワキ詞「御下向の由を披露申して候へば、急ぎ誂し申せとの御事にて候。シテ詞「只今も獨言に申しょ如く、かくてながらへ諸人に面を曝さんよりも、天晴疾う斬られればやとの念願。さては早適ひて候よ。さて最期は只今にて候か。ワキ詞「いや御最期は此曉か、然らずは明夜かと仰せ出だされて候。シテ詞「さては暫くの時刻にて候よ。さても此程土屋殿の御芳志、申すも中々愚なり。また無からん跡一片の念佛をも御回向に預からば、謡「二世までの御芳志たるべし。詞「我此年月清水の觀世音を信じ、毎日彼御經を

怠る事なし。さりながら今日は未だ讀誦申さず候程に、御暇を賜はり候へ。彼御經を讀誦申したく候。ワキ詞「それこそ有難う候へ。土屋も是にて聽聞申さうずるにて候。シテ詞「有難や大慈大悲は薩埵の悲願、定業亦能轉は菩薩の直道とかや。謠願はくは無縁の慈悲を垂れ、我を引導し給へ。今生の利益もし缺けば、後生善所をも誰か頼まん。二世の願望若空しくば、大聖の誓約豈虚妄にあらずや。或遭王難苦臨刑欲斬終、念彼觀音力刃尋段々壊。

ワキ詞「有難や此御經を聽聞申せば、御命も頼もしうこそ候へ。シテ詞「實によく御聽聞候ものかな。此文と云つぱ、たとへ人王難の災に逢ふといふとも、その劍段々に折れ、ワキ謠「又衆怨悉退散といふ文は、射る矢も其身に立つまじければ、シテ謠「實に頼もしやさりながら、全く命のために此文を誦するにあらず。シテ、ワキ謠「種々諸惡趣地獄鬼畜生、生老病死苦以漸悉令滅。地謠「此文の如くば、諸の惡趣をも、三惡道は遁るべしや有難しと、夕露の命は惜しまず、只後生こそは悲しけれ。

薩埵―菩薩に同じ
定業云々―觀音の慈悲はいかなる定まれる罪業も亦能く轉じて救ふとなり
或遭王難云々―法華經普門品の句

八聲の鶏―暁を告ぐること
金泥―紺紙に金字もて書けるなり
念珠―数珠

上歌地謡「昔在靈山の、御名は法華一佛、今西方の主又、娑婆示現し給ひて、我等が爲の觀世音、三世の利益同じくは、かく刑戮に近き身の、誓にいかで洩るべきや。盛久が終の道、よも闇からじ頼もしや。

シテ詞「あら不思議や、少し睡眠の内に、あらたなる靈夢を蒙りて候は如何に。あら有難や候。ワキ謡「既に八聲の鶏鳴いて、御最期の時節只今なり。早々御出で候へとよ。シテ詞「待ち設けたる事なれば、左には金泥の御經、右には念の珠の緒の、謡命も今を限なれば、是ぞ此世を門出の場に、足よわ〳〵と立ち出づる。ワキ謡「武士前後を圍みつゝ、是ぞ別れの鶏の聲、シテ謡鐘も聞うる東雲に、ワキ謡「牢より籠の輿に乗せ、シテ謡「由比の汀に、ワキ謡「急ぎけり。次第地謡「夢路を出づる曙や、夢路を出づる曙や、後の世の門出なるらん。

ワキ謡「さて由比の汀に著きしかば、座敷を定め敷皮しかせ、早々直らせ給ふべし。シテ詞「盛久やがて座に直り、清水の方は其方ぞと、西に向ひて觀音の、御名を稱へて待ちければ太刀取謡「太刀取後にまはりつゝ、稱念の聲の下よりも、太刀振り上ぐれば詞「こは如何に、御

經の光眼に塞がり、取り落したる太刀を見れば、二つに折れて段々となる。謡こはそも如何なる事やらん。シテ詞「盛久も思ひの外なれば、只茫然とあきれ居たり。ワキ謡「いやいや何をか疑ふべき、此程讀誦の御經の文、シテ謡「臨刑欲壽終、ワキ謡「念彼觀音力、シテ謡「刀刃、ワキ謡「段々壞の、地謡「經文あらたに曇無き、劍段々に折れにけり。末止にては無かりけり、あら有難の御經や。やがて此由聞し召し、急ぎ御前に參れとの、御使度々に重なれば、召に隨ひ盛久は、鎌倉殿に參りけり。鎌倉殿に參りけり。

ワキ詞「如何に盛久御前にて候。君此曉不思議なる御靈夢の御告あり。盛久も若し夢や見けるとの御事にて候。シテ詞「何をか隱し申すべき、今夜不思議の御靈夢を蒙りて候。ワキ詞「さらば其靈夢の樣を御前にて眞直に申し上げられ候へ。シテ詞「畏つて候。

シテ、クリ謡「それ不就正覺の御誓ひ、今もつて始ならず、地謡「過去久遠の大悲の光、何く不到の所ならん。シテ、サシ謡「然るに我此光陰を賴み、地謡「日夜朝暮に怠らず、彼御經を修讀せしに、取り分き此時節刑戮に近き身を思つて、片時怠る事もなく、シテ謡「初夜より後

不就正覺一人三惡道に落ちば成佛せしめじとの佛の誓

夜の一點まで、地謡「蕭然として座したりしに、クセ六窓未だ明けざるに、耿然たる一天虚明なる内に思はずも、八旬にたけ給ひぬと見えさせたまふ老僧の、香染の袈裟を懸け水晶の數珠を爪ぐり、鳩の杖にすがりつゝ、妙聞たどしき御聲にて、我は洛陽東山の、清水のあたりより、汝が爲に來りたり。本より大慈大悲の、誓願なとか空しからん。唯一音なりとても、我を念ずる時節の、王難の災は遁るべし。シテ謡「況んや汝年月、地謡「多年の誠を抽んでて、發心人に越えたり。心安く思ふべし、我汝が、命に代るべしと宣ひて、夢は即ち覺めにけり。盛久貴く思ひて、歡喜の心限りなし。

ロンギ地謡「頼朝是を聞し召し、此曉の御夢想も、同じ告ぞとあらたなる、御信感は限なし。シテ謡「其時盛久は、夢の覺めたる心地して、感涙をとめかね、御前を罷り立ちければ、地謡「如何に盛久暫しとて、御簾を上げて召さるれば、シテ謡「せんかたもなき盛久が、地謡「命は千秋萬歳の春を祝ふぞと、御盃を下さるれば、シテ謡「種は千代ぞと菊の酒、地謡「花を受けたる袂かな。

八句―八十歳
妙聞―妙音なるべし

小松殿ー重盛

ワキ詞「如何に盛久、盛久は平家譜代の侍武略の達者、殊には亂舞堪能の由聞し召し及ばれたり。一年の小松殿北山にて甘狩の遊路の御酒宴にて、主馬の盛久一曲一奏の事關東までも隱れなし。殊更是は悦びの折なれば、唯一さしとの御所望なり急いで仕り候へ。シテ詞「有難しありがたし。得がたきは時、去りがたきは貴命なり。盛久かゝる時節に逢ふ事、世以てためし有るべからず、謡治り靡く時なれや、一天四海の内のみか、人の國まで日の本の、唐土が原も此所。（男舞）キリ地謡「酒宴半の春の興、酒宴半の春の興、曇らぬ日影のどかにて、君を祝ふ千秋の、鶴が岡の松の葉の、散り失せずして正木のかづら、シテ謡「長居は恐れあり、地謡「長居は恐れありと、罷り申し仕り、退出しける盛久が、心の内ぞゆゝしき。心の内ぞゆゝしき。

唐土が原ー片瀬川の邊

佛原

梗概　祇王祇女とて姉妹の白拍子あり、清盛祇王を寵す。時に加賀より佛といふ白拍子來り、其寵を奪へり。祇王姉妹は母と共に、世をはかなみ、尼となりて嵯峨野の奥に隱れしが、之を聞きたる佛も亦遁世して同じ所に籠り、往生の素懷を遂げたる事、平家物語にあり。これによりて佛の幽靈を出し、僧の弔ひを受けしむる事を作る。（靈物）

シテ　佛御前（前は里女）　ワキ　旅僧

ワキ次第謠「よそは梢の秋深き、よそは梢の秋深き、雪の白山尋ねん、同是は都方より出でたる僧にて候。我未だ白山禪定せず候程に、此秋思ひ立ち白山禪定と志して候。道行謠遙遙と、越の白山知らざりし、越の白山知らざりし、其方の雲も天照らす、神の柞の紅葉ばの、誓の色もいや高き、峯々早く廻り來て、參詣するぞ有難き　參詣するぞ有難き。同急ぎ候程に、是は早加賀の國佛の原とやらん申し候。日の暮れて候程に、是なる草堂

白山―加賀

禪定―靈山に登りて修行すること

佛の原―今は越前の內佛原山月應寺あり

に立寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵あれなる御僧、なにとて其草堂には御泊候ぞ。ワキ詞「不思議やな道もなく里もなき方より、女性一人来りつゝ、我に言葉をかけ給ふは、如何なる人にて在すぞ。シテ詞「是は此佛の原に住む女にて候。時もこそあれ今宵しも、此草堂に御泊こそ、有難き機縁にてましませ。今日は思ふ日に當れり、御經を讀み佛事をなしてたび給へ。謡さなきだに五障三從の此身なれば、迷ひの雲も晴れ難き、心の水の濁りを澄まして、涼しき道に引導し給へ。ワキ詞「御經を讀み佛事をなせと承る、それこそ出家の望なれ。さてさて弔ひ申すべき、亡者は誰にてましますぞ。シテ詞「さらば其名を顯すべし。いにしへ佛御前と申しゝ白拍子は、此國より出でし人なり、都に上り舞女の譽に勝れたまひしが、後には故郷なればとて此國に歸り、終にこゝにて空しくなる、跡のしるしも此草堂の、露と消えにし其跡なり。ワキ謡「不思議やさてはいにしへの、其名に聞えし佛御前の、亡き跡までも名を留めて、シテ詞「佛の原といふ名所も、昔を留むる名殘なれば、ワキ謡「今弔ふも

三從―幼にしては父兄に、嫁しては夫に、老いては子に從ふ
涼しき道―淨土

平相國―太政大臣清盛

疑ひなき、成佛の緣ある其人の、シテ謠「名も賴もしや一佛成道、ワキ謠「觀見法界、シテ謠「草木國土、シテ謠「悉皆成佛と聞く時は、上歌地謠「佛の原の草木まで、佛の原の草木まで、皆成佛は疑はず。有難や折からの、野もせにすだく蟲の音までも、聲佛事をやなしぬらん。山風も夜嵐も、聲澄み渡る此原の草木も心あるやらん。草木も心あるやらん。

ワキ詞「猶々佛御前の御事くはしく御物語り候へ。クリ地謠「昔平相國の御時、祇王祇女佛刀自とて、溫顏舞曲花めきて、世上に名を得し遊女有りしに、シテ、サシ謠「はじめは祇王を召し置かれて、遊舞の寵愛甚しくて、地謠「色香を飾る玉衣の、袖の白露起臥の、御簾の內を立ち去らで、さながら宮女の如くなりしに、シテ謠「思はざるに折を得て、地謠「佛御前を召されしより、御心移りていつしかに祇王は出だされ參らせて、シテ謠「世を秋風の音更けて、地謠「涙の雨もをやみもせず。クセ實にや思ふ事、叶はねばこそ浮世なれ。我は本より優色の、花一時の盛なれば、散るを何と恨みんや。嵐は吹けども松は本より、常磐なり。いつ歎き、いつ驚かん浮世ぞと、思へばかゝる折節の、來るこそ教なれ。しかも迷ひを照

西山―嵯峨野なり西方淨土のことにかけて云ふ
浮世の嵯峨―性（さが）をかく

らすなる、シテ謡「彌陀の御國も其方ぞと、地謡「頼みをかけて西山や、浮世の嵯峨の奥深き、草の庵の隠れがの、隠れて住むと思ひしに、思ひの外なる佛御前の、樣を變へ來りたり。こはそもさるにてもかく捨つる身となりぬれど、猶も御身の恨めしさの、執心は殘るに、そもかゝる心持つ人かや。今こそ誠の、佛にてましませとて、祇王は手を合はせ感涙を流すばかりなり。

ロンギ地謡「昔語はさて置きぬ。さて今跡を弔ひ給ふ、御身如何なる人やらん。シテ謡「我は誰とか岩代の、松の葉結ぶ露の身の、行方を何と問ひ給ふ。地謡「行方いづくと白雪の、跡を見よとは此原の、シテ謡「草の庵はこゝなれや、地謡「露の身を置く、シテ謡「草堂の、地謡「主は佛よといひ捨てよ、立ち去る影は草衣、尾花が袖の露分け、草堂の内に入りにけり。草堂の内に入りにけり。（中入間語）

岩代の松―紀伊にあり結び松といふ
尾花が袖―風に靡くを招く袖と見ていふ

アト上歌謡「松風寒き此原の、松風寒き此原の、草の假寐のとことはに、御法をなして夜もすがら、かの跡弔ふぞ有難き。かの跡弔ふぞ有難き。

山かづら―暁の雲を形容していふ

天に浮べる云々―古今集眞字序を引く　一歩云々―一念不生を佛心とをすゝめ

後シテ一聲謡「あら有難の御經やな。早明方にもなるやらん、遠寺の鐘も幽に響き、月落ちかかる山かづらの、嵐烈しき假寝の床に、夢ばし覺まし給ふなよ。ワキ謡「不思議やな佛の原の草枕に、優女の影の見え給ふは、如何樣きょつる佛御前の、幽靈にてぞましますらん。シテ詞「恥かしながら古の、佛といはれし名を便にて、輪廻の姿も歌舞をなすワキ詞「極樂世界の御法の聲、シテ謡「佛事をなすや、ワキ謡「此原のシテ謡「佛の舞の妙なる袖、地謡「草木も靡く氣色かな。(舞)シテ、ワキ謡「ひとり猶佛の御名を尋ね見ん。地謡「おの〳〵歸る法の場人法の場人の、シテ謡「法の教も幾程の世ぞや。地謡「前佛は過ぎぬ。シテ謡「後佛は未だなり。地謡「夢の中間は、シテ謡「此世の内ぞや。地謡「鐘も響き、シテ謡「鳥も音を鳴く地謡「夜半の內なる夢幻の、一睡の內ぞ佛も有るまじ。まして人間も、シテ謡「嵐吹く雲水の、地謡「嵐吹く雲水の、天に浮める波の、一滴の露の始をば、何とか返す舞の袖、一歩擧げざる先をこそ、佛の舞とはいふべけれと、謡ひ捨てょ失せにけりや。謡ひ捨てょ失せにけり。

善知鳥

梗概

和漢三才圖會に「按善知鳥鷗之屬形色似鷗而黃嘴末勾脚淡赤色奥州卒土濱有之特津輕安濃浦邊多」と見え合類大節用集には鴾字を訓めり。拾葉抄に曰く「善知鳥は鷗とも書く異名よな鳥と云其子をひな鳥といへり人其子を取る時は恨みなげきて鳴泪紅也」と云ひ又或説を引いて「うたふとは鳥の名に非ず雁の子を親の呼聲を云也其故は雁は砂の中に巢を造り子を産置て我さへ其所を覺えざる程に隱し置くは獵者の捜さんを恐るる也斯て親鳥飼を與へんとて空より其子を呼聲人の歌うたふに似たれば雁をばうたふと名付たり、やすかたとは巢の中に子は養はれ安らかに居侍るといふ事にて、やすかたとは云也」とあり。松屋筆記には善知鳥は鷗の類として、うたうは母鳥の鳴聲、やすかたは雛の鳴聲とす。此曲は「陸奥の」の歌に基きて殺生戒を破れる獵師の死して地獄の苦患を受くる事を作る。（四番目）

シテ　獵師幽靈　ツレ　妻

子方　千代童　ワキ　旅僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我いまだ陸奥卒都の濱を見ず候程に、此度思ひ立ち卒都

卒都の濱―輕津海邊

の濱一見と志して候。又よき序にて候程に、立山禪定申さばやと存じ候。急ぎ候程に、是は早立山に著きて候。心靜に一見せばやと思ひ候。諷さても我此立山に來て見れば、まのあたりなる地獄の有樣、見ても恐れぬ人の心は、鬼神より猶恐ろしや。山路に分つ衢の數、多くは惡趣の嶮路ぞと、涙もさらにとどめ得ぬ、慚愧の心時過ぎて山下にこそは下りけれ。山下にこそは下りけれ。

惡趣の嶮路―地獄畜生餓鬼等の惡道へ通路

シテ詞「なう〳〵あれなる御僧に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「陸奥へ御下り候はゞ言傳申し候べし。卒都の濱にては獵師にて候者の、去年の秋身まかりて候。其妻や子の宿を御尋ね候ひて、それに候簑笠手向けてくれよと仰せ候へ。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。屆け申すべき事はやすき程の御事にて候。さりながら上の空に申してはやはか御承引候べき。シテ詞「實にたしかなるしるしなくてはかひあるまじ。諷思ひ出でたり有りし世の、今はの時まで此尉が、木曾の麻衣の袖を解きて地謠「是をしるしにと、涙を添へて旅衣、涙を添へて旅衣、立ち別れ行く其跡は、雲や煙の立山

木曾の麻衣―木曾にて織出す

の木の芽も萌ゆる遙々と、客僧は奥へ下れば、亡者は泣く〳〵見送りて、行く方知らずなりにけり。行く方知らずなりにけり。

忘れ形見―幼児をさす

ツレ謡「實にや本よりも定めなき世の習ひぞと、思ひながらも夢の世の、あだに契りし恩愛の、別れの後の忘れ形見、それさへ深き悲みの、母が思ひを如何にせん。

ワキ詞「如何に此屋の内へ案内申し候はん。ツレ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候が、立山禪定申し候處に、其樣冷き老人の有りしが、陸奥へ下らば言傳すべし、卒都の濱にては獵師にて候者の、去年の秋身まかりて候、其妻子の宿を尋ねて、それに候簑笠手向けてくれよと仰せ候程に、上の空に申してはやはか御承引候べきと申して候へば、其時召されたる麁衣の袖を解きて賜はりて候程に、是まで持ちて參りて候。若し思召し合はする事の候か。ツレ謡「是は夢かやあさましや、四手の田長のなき人の、上聞きあへぬ涙かな。詞さりながら餘りに心もとなき御事なれば、謡いざや形見を簑代衣、まどほに織れる藤袴、ワキ謡「頃も久しき形見ながら、ツレ謡「今取り出し、ワキ謡「よく見れば、

四手の田長―時鳥の異名

藤袴―葛布の袴

上歌地謡「疑ひも、夏立つ今日の薄衣、夏立つ今日の薄衣、一重なれども合はすれば、袖ありけるぞ、あらなつかしの形見や。やがて其まゝ弔ひの、御法を重ね数々の、中に亡者の望むなる、簑笠をこそ手向けれ。簑笠をこそ手向けれ。ワキ謡「南無幽霊出離生死頓證菩提。

陸奥の云々―夫木抄定家の歌といへど今の本には見えず

智火―佛の智を氷の苦みを救ふ故に火といふ

衆罪云々―観普賢經の文

後シテ一聲謡「陸奥の卒都の濱なる呼子鳥、鳴くなる聲は、うとうやすかた。一見卒都婆永離三悪道。此文の如くば、たとひ拝し申したりとも、長く三悪道をば遁るべし。如何にいはんや此身の爲、造立供養に預からんをや。たとひ紅蓮大紅蓮なりとも、名號智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも、法水には勝たじ。さりながら此身は重き罪科の心はいつかやすかたの、鳥獣を殺しよ、地謡「衆罪如草露惠日の日に、照らし給へ御僧。

上歌地謡「所は陸奥の、所は陸奥の、奥に海ある松原の、下枝に交じる汐蔫の、末引きしをる浦里の、籬が島の笘屋形、圍ふとすれど疎にて、月の爲には卒都の濱、心ありける住まひかな、心ありける住まひかな。

籬が島―圍籬の浦

ツレ謡「あれはとも言はゞ形や消えなんと、親子手にて手を取り組みて、泣くばかりなる有樣かな。シテ謡「あはれや實にいにしへは、さしも契りし妻や子も、今はうとうの音に泣きて、やすかたの鳥の安からずや。何しに殺しけん、我子のいとほしき如くにこそ、鳥獸も思ふらめと、千代童が髪をかき撫でて、あらなつかしやと言はんとすれば、地謡「横障の、雲の隔てか悲しやな。雲の隔てか悲しやな。今まで見えし姫小松の、はかなや何處に、木隱れ笠ぞ津の國の、和田の笠松や箕面の、瀧津波も我袖に、立つや卒都婆のそとは誰、簑笠ぞ隔てなりけるや。松島や、小島の苫屋内ゆかし。我は卒都の濱千鳥、音にたてよ、泣くより外の事ぞなき。

ワキ地謡「往事渺茫としてすべて夢に似たり、舊遊零落して半泉に歸す、シテサシ謡「とても渡世をいとなまば、士農工商の家にも生まれず、地謡「又は琴碁書畫を嗜み身ともならず、シテ謡「唯明けても暮れても殺生を營み、地謡「遲々たる春の日も所作足らねば時を失ひ、秋の夜長し夜長けれども、漁火白うして眠る事なし。シテ謡「九夏の天も暑を忘れ、地謡「玄冬

千代童―子の名
姫小松―子を譬ふ
和田の笠松―攝津笠面―同名の二名所は笠の緣に引けり
往事渺茫都似夢舊遊零落半歸泉―白氏文集歌は貫泉なり

の朝も寒からず。

ク七地謡「鹿を逐ふ獵師は、山を見ずといふ事あり。身の苦しさも悲しさも、忘れ草の追鳥高縄をさし引く汐の、末の松山風荒れて、袖に波こす沖の石、又は干潟とて、海ごしなりし里までも、千賀の鹽竈身を焦がす、報いをも忘れける、事業をなしゝ悔しさよ。そもそも善知鳥、やすかたのとりぐ〳〵に品かはりたる殺生の、シテ謡「中に無慙やな此鳥の、地謡「愚なるかな筑波嶺の、木々の梢にも羽を敷き、波の浮巣をもかけよかし。平沙に子を生みて落雁の、はかなや親は隠すとすれど、うとうと呼ばれて、子はやすかたと答へけり。さてぞ取られやすかたシテ謡「うとう、地謡「親は空にて血の涙を、親は空にて血の涙を、降らせば濡れじと菅簑や、笠を傾けこゝかしこの、便を求めて隠笠、隠簑にもあらざれば、猶降りかゝる血の涙に、目も紅に染み渡るは、紅葉の嘴の鵲か。

地謡「婆婆にては、善知鳥やすかたと見えしも、善知鳥やすかたと見えしも、冥途にしては化鳥となり、罪人を追つ立て鐵の、嘴を鳴らし羽をたゝき、銅の爪を磨ぎ立てゝ

鹿を逐ふ―准南子に「獣を逐ふ者は目に太山を見ず」

紅葉の橋の鵲―七夕の故事

は、眼をつかんで肉を、さけばんとすれども猛火の煙に、むせんで聲をあげ得ぬは、鴛鴦を殺しょ科やらん。遁げんとすれど立ち得ぬは、羽抜鳥の報いか。シテ謡「うとうは却つて鷹となり、地謡「我は雉とぞなりたりける。遁れ交野の狩場の吹雪に、空も恐ろし地を走る、犬鷹に責められて、あら心うとうやすかた、安き隙なき身の苦しみを、助けてたべや御僧、助けてたべや御僧と、いふかと思へば失せにけり。

小鹽

梗概

在原業平の靈現れ出でて、伊勢物語の故事を物語る。これを小鹽山に配したるは、「大原や」の歌によりて也。此優しき物語を更に美しからしむるは、煙る霞の遠山櫻、里は軒端の家櫻、たゞこれ春光和煦の景を以てせる事なり。（四番目）

シテ　在原業平（前は老翁）　ワキ　男

ワキ、ツレ次第「花にうつろふ嶺の雲、花にうつろふ嶺の雲、かよるや心なるらん。ワキ詞「かやうに候者は、下京邊に住まひする者にて候。さても大原野の花、今を盛なる由承り及び候間、若き人々を伴ひ申し、只今大原山へと急ぎ候。サシ謡面白やいづくはあれど所から、花の都の名にし負へる、大原山の花櫻、上歌「今を盛と木綿花の、今を盛と木綿花の、手向の袖もひとしほに、色ぞふ春の時を得て、神も交はる塵の世の、花や心に任すらん。花や心に任すらん。

大原野―社は春日社と同體

手向の袖―參詣の人

年ふれば云々―古今集の歌

光にあたるー古今集に「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」

シテ一聖謡「しをりして、花をかざしの袖ながら、老木の柴と人や見ん。サシ年ふれば齢は老いぬしかはあれど、花をし見れば物思ひも、なしと詠みしも身の上に、今白雪を戴くまで、光にあたる春の日の、長閑けき御代の時なれや、上歌散りもせず、咲きも殘らぬ花ざかり、咲きも殘らぬ花ざかり、四方のけしきも一しほに、にほひ繕ち色にそふ、情の道に誘はるゝ、老な厭ひそ花心。老な厭ひそ花心。

ワキ詞「ふしぎやな貴賤群集の其中に、ことに年たけたる老人花の枝をかざし、さも花やかに見え給ふは、そも何くより來り給ふぞ。シテ詞「思ひよらずや貴賤の中に、わきて言葉をかけ給ふは、さも心なき山賤の、身にも應ぜぬ花ずきぞと、お笑ひあるか人々よ。謡「姿こそ山のかせぎに似たりとも、心は花にあらばこそ、なさばならめや心からに、地謡「をかしとこそは御覽ずらめ。よしや此身は埋木の、朽ちは果てし無や、心の色も香も知る人ぞ、知らずな問はせ給ひそ。

ワキ詞「あら面白の戯れやな。よも誠には腹立て給はじ。いか樣故ある心言葉の、奥床しき

姿こそ―夫木抄の歌下句心は花になさばなりなん、かせぎは鹿綴ぎに掛く

を語り給へ。シテ詞「何と語らん花盛、いふに及ばぬけしきをば、いかゞは思ひ給ふらん、ワキ謡「けに〳〵妙なる梢の色、うつろふ影も大原や、シテ詞「小鹽の山の小松が原より、煙る霞の遠山櫻、ワキ謡「里は軒端の家ざくら、シテ謡「匂ふや窓の梅も咲き、ワキ謡「茜さす日も紅の、シテ謡「霞か、ワキ謡「雲か、シテ謡「八重、ワキ謡「九重の、上歌地謡「都遷は、なべて錦となりにけり。なべて錦となりにけり。櫻を折らぬ人し無き、花衣著にけりな。時も日も日も彌生、逢ひにあふ眺めかな。けにや大原や、小鹽の山も今日こそは、神代も思ひ知られけれ。神代も思ひ知られけれ。

詞さすー日の枕詞

大原や云々ー業平の歌下句神代の事も思ひ出づらめ

后ー二條の后

ワキ詞「かよる面白き人に參りあひて候ものかな。此まよ御供申し花を眺めうずるにて候。又只今の言葉のすゑに、謡大原や小鹽の山も今日こそは、詞神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。是は如何なる人の御詠歌にて候ぞ。シテ詞「事新しき問事かな。此大原野の行幸に、在原の業平供奉し給ひし時、かたじけなくも后の御事を思ひいでて、神代の事とはよみしとなり。謡申すにつけて我ながら、空恐ろしや天地の、神の御代より人

の身の、妹背の道は淺からぬ、上歌地謡「名殘小鹽の山深み　名殘小鹽の山深み、のぼりての世の物語、語るも昔男あはれ、舊りぬる身の程、歎きてもかひなかりけり。歎きてもかひぞなかりける。

しばふる人―柴掻人か鍛冶人の戲もあり

花のながえ―枝と長轅をかく

ロンギ地謡「げに山暁のさしもげに、しばふる人と見ゆるにも、心ありる姿かなけ。シテ謡「心知られば、とても身の、姿に恥ぢぬ花の友に、馴れてさらば交らん。地謡「交れや交れ老人の、心若木の花の枝、シテ謡「老隱るやとかざさん。地謡「かざしの袖を引き引かれ、このもかのもの陰ごとに、シテ謡「貴暁の花見、地謡「輿車の、花のながえをかざしつれて、よろほひさぞらひ、とりぐにめぐる盃の、天も花にや酔へるらん、紅うづむ夕霞、かげろふ人の面影、ありと見えつゝ失せにけり。ありと見えつゝ失せにけり。（中入）

ワキ詞「ふしぎや今の老人の、唯人ならず見えつるが、さては小鹽の神代の古跡、和光の影に業平の、花に詠じて衆生濟度の、謡姿現じ給ふぞと、上歌ワキ・ツレ謡「思ひの露もたまさかの、思ひの露もたまさかの　光を見るも花心、妙なる法の道のべに、猶も奇特を待ち居たり。

月やあらぬ―業平の歌下句我身一つはもとの身にして

猶も奇特を待ち居たり。

後シテ謡「月やあらぬ春や昔の春ならぬ、我身ぞ本の身も知らじ。ワキ謡「ふしぎやな今までは、立つとも知らぬ花見車の、やごとなき人の御有様、是は如何なる事やらん。シテ謡「けにや及ばぬ雲の上、花の姿はよも知らじ。詞有りし神代の物語、謡姿現すばかりなり。ワキ謡「あら有難の御事や。他生の縁は朽ちもせで、シテ謡「契りし人も様々に、ワキ謡「思ひぞいづる、シテ謡「花も今、上歌地謡「今日來ずは、明日は雪とぞ降りなまし、明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありと、花と見ましやと詠ぜしに、今はさながら花も雪も、皆白雲の上人の、櫻かざしの袖ふれて花見車、暮るるより月の、花よ待たうよ。

今日來ずは―業平の歌

クリ地謡「それ春宵一刻價千金、花に清香月に陰、惜まるべきは只此時なり。シテ、ツレ、シテ謡「思ふ事いはで唯にや止みぬべき、地謡「我にひとしき人しなければ、とは思へども人しれぬ、心の色はおのづから、思ひ内より言の葉の、露しなくに漏れけるぞや。クセ春日野の、若紫の摺衣、しのぶの亂れ、限りしらずとも詠ぜしに、陸奥の忍ぶもぢずり誰故、亂

思ふ事―同上

春日野の―同上

唐衣―前の杜若を見よ

むさし野は―伊勢物語の歌末句我もこもれり

要か現か―伊勢物語の「君やこし我や行きけん思ほえず要か現か寝てかさめてかこ」を引く

れんと思ふ我ならなくにと、よみしも紫の、色に染み香にめでしなり。または唐衣、著つゝ馴れにし妻しあれば、はるゞきぬる旅をしぞおもふ心の奥までは、いさ白雲のくだり月の、都なれや東山、是もまたあづまの、はてしなの人の心や　シテ謡「むさし野は、今日はな焼きそ若草の、地謡「つまもこもれり我も亦、こもる心は大原や、小鹽につゞく通路の、ゆくへはおなじ戀草の、忘れめや今も名は、昔男ぞと人もいふ。シテ謡「昔かな。（序ノ舞）ワキ謡「昔かな。花も所も月も春、地謡「ありし御幸を、シテ謡「花も忘れじ。地謡「花も忘れぬ、シテ謡「心や小鹽の、地謡「山風吹き亂れ散らせや散らせ散りまよふ木のもとながら、まどろめば、櫻に結べる夢か現か世人定めよ、夢か現か世人定めよ。寢てか覺めてか、春の夜の月、曙の花にや殘るらん。

内二十

邯鄲

梗概

昔蜀の國に少年盧生といふ者あり。邯鄲の道中にて、呂翁といふ仙術を得たる者に逢ひ、丈夫爲すあらんとする志を述ぶ。呂翁嚢中より一の枕を出し、眠らば萬志の如くならんと云ふ。此くて盧生は次第に出世して燕國公に至り、子孫繁昌し、年八十にして病死すと見て、覺めて欠伸す。此間僅に黄粱一炊の間なりしといふ。この曲は右の傳説に基き多少趣を變へ、主として夢中の樣をあらはし、世間無常の思想を出離遁世の機縁となせり。（四番目）

シテ　盧生　子方　夢中の美人
ワキ　夢中の勅使　ワキツレ　夢中の大臣
狂言　邯鄲

シテ次第「浮世の旅に迷ひきて、浮世の旅に迷ひきて、夢路をいつと定めん。サシ是は蜀の

國のかたはらに、廬生といへる者なり。詞われ人間にありながら佛道をも願はず、謡ただ茫然と明かし暮らすばかりなり。詞眞や楚國の羊飛山に、貴き知識のましますよし承り及びて候程に、身の一大事をも尋ねばやと思ひ、只今羊飛山へと急ぎ候。道行謡住み馴れし國を雲路のあとに見て、國を雲路のあとに見て、山又山を越えゆけば、そこともなき旅衣、野暮れ山暮れ里暮れて、名にのみ聞きし邯鄲の、里にもはやく著きにけり。里にもはやく著きにけり。詞急ぎ候程に、是ははや邯鄲の里に著きて候。未だ日は高く候へども、此所に旅宿せうずるにて候。いかに案内申し候。狂言「シカ〜シテ詞「是は旅人にて候。一夜の宿を御かし候へ。狂言シカ〜シテ詞「是は蜀の國のかたはらに、廬生といへる者なり。われ人間にありながら佛道をもねがはず、たゞ茫然と明かし暮すところに、楚國の羊飛山に、尊き知識のましますよし承り及びて候程に、身の一大事をも尋ねばやと、思ひ立ちて候。狂言シカ〜シテ詞「さて其枕はいづくに御座候ぞ。狂言シカ〜シテ詞「さらば立ち越え一睡見うずるにて候。狂言シカ〜シテ詞「さてはこれなるが聞き及びにし邯鄲の枕な

羊飛山―四川夔州府
知識―人の爲に說法敎化する者を善知識ともいふ
邯鄲―もと戰國の時の趙の都
さて其枕は―枕の事狂言方の詞に云ふ
さらば云々―これに狂言方翠の飯を炊ぐことを云ふ

これより夢中の事

るかや。是は身を知る門出の、世のこゝろみに夢の告、天の與ふる事なるべし。上歌語「一村雨の雨やとり、地謡「一村雨の雨やとり、日はまだ殘る中宿に。假寢の夢を見るやと邯鄲の枕に伏しにけり。邯鄲の枕に伏しにけり。

ワキ詞「如何に盧生に申すべき事の候。シテ詞「そもいかなる者ぞ。ワキ詞「楚國の帝の御位を、盧生にゆづり申さんとの、勅使是まで參りたり。シテ詞「思ひよらずや王位には、そも何故にそなはるべき。ワキ詞「是非をばいかではかるべき。御身代を持ち給ふべき、其瑞相こそましますらめ。はや〳〵輿にめさるべし。シテ詞「こはそも何と夕露の　光かゝやく玉の輿、乘りも習はぬ身のゆく末。ワキ謡「かゝるべきとは思はずして、シテ謡「天にもあがる、ワキ謡「こゝちして、上歌地謡「玉の御輿に法の道、玉の御輿に法の道、榮花の花も一時の、夢とは白雲の、上人となるぞ不思議なる。地謡「有難の氣色やな、有難の氣色やな。もとより高き雲の上、月も光はあきらけき、雲龍閣や阿房殿、光も滿ち〳〵て、げにも妙なる有樣の、庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を、出で入る人までも、光を飾るよ

雲龍閣阿房殿ハ共ニ宮殿ノ名

そほひは、眞や名に聞きし、寂光の都喜見城の、樂みもかくやと思ふばかりの氣色かな。下歌千貨萬貨の御寶の、數をつらねて捧げ物、千戸萬戸の旗のあし、天に色めき地にひゞく、雷の聲も夥し。雷の聲も夥し。シテ謡「東に三十餘丈に、地謡「銀の山を築かせては、黄金の日輪を出だされたり。シテ謡「西に三十餘丈に、地謡「黄金の山を築かせては、銀の月輪を出だされたり。たとへばこれは、長生殿の内には、春秋をとゞめたり不老門の前には日月遅しといふ心をまなばれたり。

ワキツレ詞「如何に奏聞申すべき事の候。御位に卽き給ひては、早五十年なり。然らば此仙藥をきこしめさば、御年一千歳まで保ち給ふべし。さる程に天の濃漿や沆瀣の盃、これまで持ちて參りたり。シテ詞「そも天の濃漿とは、ワキツレ詞「是れ仙家の酒の名なり。シテ謡「沆瀣の盃と申す事は、ワキツレ詞「おなじく仙家の盃なり。シテ謡「壽命は千世ぞと菊の酒、ワキツレ謡「榮花の春も萬年、シテ謡「君も豐に、ワキツレ謡「民榮え、上歌地謡「國土安全長久の、國土安全長久の、榮花もいやましに、なほ喜びは增り草の、菊の盃とりぐ〳〵に、いざや飲まうよ。シテ謡「めぐ

寂光の都―佛住所　喜見城―須彌山頂にあり帝釋の所居

長生殿裡春秋富　不老門前日月遲―朗詠集

增り草―菊の異名

れや盃の、地謡「めぐれや盃の、流れは菊水の、流に引かれて疾く過ぐれば、手まづ遮る菊衣の、花の袂をひるがへして、さすも引くも光なれや、盃の影の、めぐる空ぞ久しき。子方謡「わが宿の、地謡「わが宿の、菊の白露今日ごとに、幾世つもりて淵となるらん。よも盡きじよも盡きじ、藥の水も泉なれば、汲めども汲めども、いやましに出づる菊水の、飲めば甘露もかくやらんと、心も晴れやかに飛び立つばかり有明の、夜晝となき樂みの、榮花にも榮耀にも、げにこの上やあるべき。(舞)シテ謡「いつまでぞ、榮花の春も常磐にて、地謡「なほ幾久し有明の月。シテ謡「月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつよ、喜びの歌を、謡ふ夜もすがら、地謡「謡ふ夜もすがら、日は又出でて明らけくなりて、夜かと思へば、シテ謡「晝になり、地謡「晝かと思へば、シテ謡「月又さやけし。地謡「春の花さけば、シテ謡「紅葉も色濃く、地謡「夏かと思へば、シテ謡「雪もふりて、地謡「四季をり〳〵は目の前にて、春夏秋冬萬木千草も一日に花咲けり。面白や、不思議やな。上歌地謡「かくて時過ぎ頃されば、かくて時過ぎ頃されば、五十年の榮花も盡きて、眞は夢の内なれば、皆消え

我宿の云々―拾遺集元輔の歌

月人男―月の異名

消えと失せ果てよ、有りつる邯鄲の枕の上に、眠の夢はさめにけり。シテ謡「盧生は夢さめて、地謡「盧生は夢さめて、五十年の春秋の、槿花もたちまちに、たど茫然と起きあがりて、シテ謡「さばかり多かりし、地謡「女御更衣の聲と聞きしは、シテ謡「松風の音となり、地謡「宮殿樓閣は、シテ謡「たど邯鄲の假の宿、地謡「槿花のほどは、シテ謡「五十年、地謡「さて夢の間は粟飯の、シテ謡「一炊の間なり。地謡「不思議なりや測りがたしや。シテ謡「つら〳〵人間の有樣を案ずるに、地謡「百年の歡樂も、命終れば夢ぞかし。五十年の槿花こそ、身の爲には是までなり。槿花の望も齡の長さも五十年の、歡樂も、王位になれば是までなり。げに何事も一炊の夢。シテ謡「南無三寶南無三寶。地謡「よく〳〵思へば出離を求むる、知識はこの枕なり。げに有難や邯鄲の、げにありがたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、望かなへて歸りけり。

女御更衣―女官

南無三寶―驚歎の詞

出離―遁世

殺生石

梗概

鳥羽院の上童に、玉藻の前といふ美人あり。清涼殿の御會に奇端を示す。帝御惱となる。安倍泰成調伏す。玉藻の前、身より光を放ち、野干となりて那須野に飛び去る。三浦介上總介野干退治を、犬にて稽古す。これ犬追物の起原なり。野干退治せられて、その氣心凝つて石となり、鳥獸の命を斷つ。殺生石是れ也。玄翁の回向を受けて石魂遂に成佛す。（五番目）

シテ　石魂（前は里女、後は野干）
ワキ　玄翁　狂言　能力

ワキ次第謠「心を誘ふ雲水の、心を誘ふ雲水の、浮世の旅に出でうよ。詞是は玄翁といへる道人なり。我知識の床を立ち去らず。一大事を歎き一見所を開き、終に拂子を打ち振つて世上に眼をさらす。此程は奥州に候ひしが、都に上り冬夏をも結ばばやと思ひ候。道行謠雲水の、身はいづくとも定めなき　身はいづくとも定めなき、浮世の旅に迷ひゆく

玄翁―源翁禪師　弘安三年寂　道人―僧　一大事―世人の迷　一見所―一見識なり悟なり　眼をさらす―親　冬夏を結ばばや―安居として修行すること

結びこめたる―羅といふべきを下野にかけたり

上童―昇殿許されたる官女

心の奥を白河の、結びこめたる下野や、奈須野の原に著きにけり。那須野の原に著きにけり。狂言ジカ〜

シテ詞「なう其石の邊へな立ち寄らせ給ひそ。ワキ詞「そも此石のほとりへよるまじき謂れの候か。シテ詞「それは奈須野の殺生石とて、人間は申すに及ばず、鳥類畜類までもさはるに命なし。謡かく恐ろしき殺生石とも、知し召されで御僧達は、求め給へる命かな。詞そこ立ちのき給へ。ワキ詞「さて此石は何故かく殺生をばいたすやらん。シテ詞「むかし鳥羽の院の上童に、玉藻の前と申しゝ人の、執心の石と爲りたるなり。ワキ謡「不思議なりとよ玉藻の前は、殿上の交はりたりし身の、此遠國に魂を、留めし事は何故ぞ。シテ詞「それも謂れのあればこそ、昔より申し習はすらめ。ワキ詞「御身の風情言葉の末、いはれを知らぬ事あらじ。シテ詞「いや委しくはいさ白露の玉藻の前と、ワキ謡「聞きし昔は都すまひ、シテ謡「今たましひは天離る、ワキ謡「鄙に殘りて惡念の、シテ謡「猶もあらはす此野邊の、ワキ謡「往來の人に、シテ謡「仇を今、上歌地謡「奈須野の原に立つ石の、那須野の原に立つ石の、

苔に朽ちにし跡までも、執心を殘し來て、又立ち歸る草の原、物冷ましき秋風の、梟松桂の、枝に鳴きつれ、狐蘭菊の花に隱れ住む、此原の時しも物凄き秋の夕かな。

ワキ地謡「そも〳〵此玉藻の前と申すは、出生出世定まらずして、いづくの誰とも白雲の、上人たりし身なりしに、シテ・ツレ謡「然れば紅色を事とし、地謡「容顔美麗なりしかば、帝の叡慮淺からず。シテ謡「ある時玉藻の前が智惠をはかり給ふに、一事として、とどこほる事なし。地謡「經論聖教和漢の才、詩歌管絃に至るまで、問ふに答への暗からず、シテ謡「心底くもりなければとて、地謡「玉藻の前とぞ召されける。

ワキ地謡「或時帝は清涼殿に御出なり、月卿雲客の、堪能なるを召し集め、管絃の御遊ありしに、頃は秋の末、月まだ遲き宵の空の、雲の景色冷ましく、うちしぐれ吹く風に、御殿の燈消えにけり。雲の上人立ち騷ぎ、松明疾と進むれば、玉藻の前が身より、光を放ちて清涼殿を照しければ、光大内に滿ち〳〵て、畫圖の屏風秋の戸、闇の夜の錦なりしかど光にかゝやきて、ひとへに月の如くなり。シテ謡「帝それよりも、御惱とならせ給ひしかば、

菊鳴松桂枝狐藏蘭菊葉ー白氏文集にあり

畫圖の屏風ー清涼殿に立てたる四季の屏風秋の戸ー清涼殿の内

勘状―占ひ考へたる上申書

衣鉢を授く―佛道を傳授すること

汝元來云々―引の

地謡「安部の泰成占なつて、勘状に申すやう、是はひとへに玉藻の前が爲なりや、王法を傾けんと、化生して來りたり、調伏の祭あるべしと、奏すれば忽に、叡慮もかはり引きかへて、玉藻化生を本の身に、那須野の草の露と消えし跡は是なり。

ワキ詞「かやうに委しく語り給ふ、御身はいかなる人ならん。シテ詞「今は何をか包むべき。其古は玉藻の前、今は那須野の殺生石、其石魂にて候なり。ワキ詞「實にや餘りの惡念は、かへつて善心となるべし、然らば衣鉢を授くべし。同じくは本體を、謡再び現し給ふべし。シテ詞「あら恥かしや我姿　謡晝は淺間の夕煙の、上歌地謡「立ち歸り夜になりて、立ち歸り夜になりて、懺悔の姿現さんと、夕闇の夜の空なれど、此夜は明し燈火の、我影なりと思召し、恐れ給はで待ち給へと、石に隱れ失せにけりや。石に隱れ失せにけり。（中入）

ワキ謡「木石心無とは申せども、詞「草木國土悉皆成佛と聞く時は、本より佛體具足せり。況んや衣鉢を授くるならば、成佛疑ひあるべからずと、花を手向け燒香し、石面に向つて佛事をなす。汝元來殺生石、問ふ石靈、何れの所より來り、今生かくの如くなる。

謡急々に去れ去れ、自今以後汝を成佛せしめ、佛體眞如の善心となさん。攝取せよ。後シテ謡石に精あり、水に音あり、風は大虚に渡る。地謡像を今ぞ現す石の、二つに割るれば、石魂急ち現れ出でたり。恐ろしや。ワキ謡不思議やな此石二つに割れ、光の内をよく見れば、野干の形は有りながら、さも不思議なる仁體なり。シテ謡今は何をか包むべき天竺にては班足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒姒と現じ、我朝にては鳥羽の院の、玉藻の前とは爲りたるなり。詞我王法を傾けんと、假に優女の形となり、玉體に近づき奉れば御惱となる。既に御命を取らんと悦びをなしょ處に、謡安倍の泰成調伏詞の祭を始め、壇に五色の幣帛を立て、謡玉藻に詞御幣を持たせつょ、謡肝膽をくだき祈りしかば、地謡やがて五體を苦しめて、やがて五體を苦しめて、幣帛をおつ取り飛ぶ空の、雲居を翔り海山を、越えて此野に隱れ住む。シテ謡其後勅使立つて、地謡其後勅使立つて、三浦の介、上總の介兩人に綸旨をなされつょ、那須野の化生の者を、退治せよとの勅を受けて、野干は犬に似たれば犬にて稽古あるべしとて、百日犬をぞ射たりける。是れ犬追物の始と

野干―狐

班足太子―天竺國王の太子外道のために千人の王の頭を取りて塚神を祭るといふこと佛經にあり

幽王―周の王、褒姒は美人

三浦介―義明　上總介―廣常

犬追物―犬を追ひてなす騎射の法

さくりにつけて―さくりは犬の足の運びをいふ

御法―玄翁の引導をさす

かや。シテ謡「両介は狩装束にて、地謡「両介は狩装束にて、數萬騎那須野を取り込めて、草を分つて狩りけるに、身を何と那須野の原に、顯れ出でしを狩人の、追つつまくつつさくりにつけて、矢の下に射伏せられて、即時に命を徒に、那須野の原の露と消えても、猶執心は此野に殘つて、殺生石と爲つて、人を取る事多年なれども、今逢ひ難き御法を受けて、此後悪事をいたす事、あるべからずと御僧に、約束固き石と爲つて、約束固き石と爲つて、鬼神の姿は失せにけり。

野宮

概　楔

六條御息所といふは、光源氏通ひし方なるが、賀茂祭の折、源氏の正室葵上との車爭ひにいたく恥見せられ、その嫉妬の怨は生靈となりて、葵上を取　しぬ。がくて源氏との間も遠しくなり居しが、御息所の女齋宮に立ちて、野の宮に在しゝ頃、源氏の訪れ給ふ事あり。此物語により、御息所の幽靈現れて、昔を語り、僧の弔ひを受くる事を作る。源氏物の一つ。（雙物）

シテ　六條御息所（前に里女）

ワキ　僧

野の宮―齋宮の皇女籠りて齋し給ふ所　黒木の鳥居―皮

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此ほどは都に候ひて、洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りて候。又秋も末になり候へば、嵯峨野の方ゆかしく候間、立ち越え一見せばやと思ひ候。是なる森を人に尋ねて候へば、野の宮の舊跡とかや申し候程に、逆緣ながら一見せばやと思ひ候。謂われ此森に來て見れば、黒木の鳥居小柴垣、昔にかはらぬ有樣なり。こ

はそも何といひたる事やらん。よしく〳〵かよる時節に參りあひて、拜み申すぞありがたき。下歌伊勢の神垣隔てなく、法の教の道すぐに、こゝに尋ねて宮所、こゝろも澄める夕べかな。こゝろも澄める夕かな。

シテ次第謡「花に馴れ來し野の宮の、花に馴れ來し野の宮の、秋よりのちは如何ならん、サシをりしもあれ物のさみしき秋暮れて、猶しをりゆく袖の露、身を碎くなる夕まぐれ、心の色はおのづから、千草の花にうつろひて、衰ふる身のならひかな。下歌人こそ知らね今日ごとに、昔の跡に立ち歸り、上歌野の宮の、森の木枯秋ふけて、森の木枯秋ふけて、身にしむ色の消えかへり、思へば古を、何と忍ぶの草衣、きてしもあらぬ假の世に、行き歸るこそ恨みなれ。行き歸るこそ恨みなれ。

ワキ詞「われ此森の陰に居て古を思ひ、心を澄ますをりふし、いとなまめける女性一人忽然と來り給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「いかなる者ぞと問はせ給ふ、そなたをこそ問ひ參らすべけれ。是は古齋宮に立たせ給ひし人の、假に移ります野の宮な

附の木の鳥居なり源氏物語賢木の卷に小柴を大垣にでといひ黒木の鳥居どもはさすがに神々しくなどいへる語に據る

長月七日の一賢木巻に人ぎきなさけなくやと思し起して野宮に詣で給ふ九月七日なればけふあすと思すに云々其時云々一同巻に月頃のつもりをつきづきしう聞え給はんもまばゆき程に成にければ榊をいささか折りて持たまへりけるをさし入て麹らぬ色をしるべにてこそいがきをもこえ侍にけれ云々

り。然れども其後は此事絶えぬれども長月七日の今日は又、昔を思ふ年々に、謡人こそ知らね宮所を清め、御神事をなす所に、行方も知らぬ御事なるが、來り給ふは憚りありとく〳〵歸り給へとよ。ワキ詞「いや〳〵是は苦しからぬ、身の行末も定めなき、世を捨人の數なるべし。さて〳〵こゝは舊りにし跡を今日毎に、昔を思ひ給ふ、謡いはれはいかなる事やらん。シテ詞「光源氏此所に詣で給ひしは、長月七日の日けふに當れり。其時いさゝか持ち給ひし榊の枝を、いがきの内にさし置き給へば、御息所とりあへず、謡神垣はしるしの杉もなき物を、詞いかにまがへて折れる榊ぞと、詠み給ひしも今日ぞかし。ワキ謡「けに面白き言の葉の、今持ち給ふ榊の枝も、昔にかはらぬ色よなう。シテ詞「昔にかはらぬ色ぞとは、榊のみこそ常磐の陰の、ワキ謡「杜の下道秋暮れて、シテ謡「紅葉かつ散り、ワキ詞「淺茅が原も、上歌地謡「うらがれの、草葉に荒るゝ野の宮の、草葉に荒るゝ野の宮の、跡なつかしきこゝにしも、其長月の七日の日も、今日にめぐり來にけり。ものばかなしや小柴垣いとかりそめの御住ひ、今も火燒屋のかすかなる、光は我思ひ内にある、色や

外に見えつらん。あらさみし宮所、あらさみし此宮所。

ワキ詞「猶々御息所のいはれ懇に御物語り候へ。クリ地謡「そも〳〵此御息所と申すは、桐壺の帝の御弟、前坊と申し奉りしが、時めく花の色香まで、妹背の心あさからざりしに シテサシ謡「會者定離のならひもとよりも、地謡「驚くべしや夢の世と、ほどなくおくれ給ひけり。シテ謡「さてしもあらぬ身の露の、地謡「光源氏のわりなくも、忍び〳〵に行き通ふ、シテ謡「心の末のなどやらん、地謡「また絶々の中なりしに、クセつらき物にはさすがに、思ひ果て給はず、遥けき野の宮に、分け入り給ふ御心、いと物あはれなりけりや。秋の花みな衰へて、蟲の聲もかれ〴〵に、松吹く風の響までも、寂しき道すがら、秋の悲しみも果てなし。かくて君こゝに、詣でさせ給ひつゝ、情をかけて様々の、言葉の露も色々の御心の内ぞあはれなる。シテ謡「其後桂の御祓、地謡「白木綿かけて河波の、身は浮草のよるべなき、心の水に誘はれて、ゆくへも鈴鹿川、八十瀬の波にぬれ〳〵ず、伊勢まで誰か思はんの、言の葉は添ひゆく事も、ためしなきものを親と子の、多氣の都路におもむき

遥けき野の宮に―同巻に遥けき野邊を分入り給ふよりいと物哀れ也秋の花皆衰へつゝ逢坂が原もかれ〳〵なる蟲のねに松風すごく吹合て云々桂の御祓―桂川にて御祓あるなり　鈴鹿川―御息所の歌の末句思ひもこさん

し、心こそ恨みなりけれ。

ロンギ地謡「げにやいはれを聞くからに、唯人ならぬ御氣色、其名を名乗給へや。シテ謡「名のりても、かひなき身とてはづかしの、もりてやよそに知られまし。よしさらば其名も、なき身ぞと訪はせ給へや。地謡「なき身と聞けば不思議やな。さては此世をはかなくも、シテ謡「去りて久き跡の名の、地謡「御息所は、シテ謡「我なりと、地謡「夕暮の秋の風、森の木の間の夕月夜、影かすかなる木の下の、黒木の鳥居の二柱に、立ちかくれて失せにけり。跡たちかくれ失せにけり。（中入）

ワキ上歌「かたしくや、森の木陰の苔衣、森の木陰の苔衣、同じ色なる草むしろ、思ひをのべて夜もすがら、彼御跡を弔ふとかや。彼御跡を弔ふとかや。

後シテ一聲「野の宮の秋の千種の花車、われも昔にめぐり來にけり。ワキ謡「ふしぎやな月のひかりも幽なる、車の音の近づく方を、見れば網代の下簾、思ひかけざる有樣なり。いかさま疑ふ所もなく、御息所にてましますか。さもあれ如何なる車やらん。シテ詞「いかなる車

と問はせ給へば、思ひ出でたり其昔、謡加茂の祭の車爭ひ、主は誰とも白露の、ワキ謡所狭きまで立て竝ぶる、シテ謡物見車のさま〴〵に、殊に時めく葵の上の、ワキ謡御車とて人を拂ひ、立ち騒ぎたる其中に、シテ謡身は小車の遣る方も、なしと答へて立て置きたる、ワキ謡車の前後に、シテ謡ばつと寄りて、上歌地謡人々轅に取りつきつゝ、人だまひの奥に押しやられて、物見車の力もなき、身のほど思ひ知られたる。よしや思へば何事も、報いの罪によも洩れじ。身は猶牛の小車の、めぐり〳〵來ていつまでぞ。妄執を晴らし給へや。忘執を晴らし給へや。

シテ謡昔を思ふ花の袖、地謡月にと返す氣色かな。（序ノ舞）シテ謡野の宮の、月も昔や思ふらん。地謡影さみしくも森の下露、影さみしくも森の下露。シテ謡身の置き所もあはれ昔の、地謡庭のたゝずまひ、シテ謡よそにぞかはる。地謡氣色も假なる、シテ謡小柴垣、地謡「露うち拂ひ、訪はれし我も其人も、只夢の世とふりゆく跡なるに、誰松蟲の音はりんりんとして、風茫々たる野の宮の夜すがら、なつかしや。キリこゝはもとより黍くも、

奏の上―源氏の正妻、御息所と車の置場を爭ふ事奏の巻にあり
人だまひ―從者の乘る車
神風や―伊勢の枕詞
内外―内宮外宮

神風や伊勢の内外の、鳥居に出で入る、姿は生死の道を、神は受けずや思ふらんと
た車に打乗りて、火宅の門をや出でぬらん、火宅の門。

錦木

梗概

陸奥なる男女の戀物語を錦木、細布の故事に據りて作る。もと俊賴口傳集、袖中抄などの歌道の古書にあげつらへる趣に基きたるにて、その謂れを語らしめたるところ、さながら歌學の講義なりといふべし。（五番目）

シテ　男　ツレ女　ワキ　旅僧

ワキ次第謡「實にや聞きても忍山、實にや聞きても忍山、其通路を尋ねん。詞是は諸國一見の僧にて候。我未だ東國を見ず候程に、此度思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。道行謡何處にも、心とめじと行く雲の、心とめじと行く雲の、旗手も見えて夕暮の、空も重なる旅心、おくは其方か陸奥の、希婦の里にも著きにけり。希婦の里にも著きにけり。

シテ、ツレ次第謡「けふの細布をり〳〵の、けふの細布をり〳〵の、錦木や名立なるらん。シテ謡「陸奥の忍ぶもぢずり誰故に、亂れそめにし我からと、シテ、ツレ謡「藻に住む蟲の音に泣きて、

希婦の里―此里より幅狹き布を織出す　名立―木を立つるといふより浮名の立つことにかく　陸奥の云々―古今集の歌　藻に住む―同集に「海士の刈る藻に住む蟲の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」

起きもせず―業平の歌下句春の物とて眺め暮しつ

夢か現か―古今集の歌上句は君や来し我や行きけん思ほえず流れて早き―同集に「きのふといひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」

流れては―同集に「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」鳥の羽にて云々―俊頼口傳集に鳥の羽して織りける布なり云々と見ゆ

壁生草のいつかさて、思ひを乾さん衣手の、森の下露起きもせず、寝もせで夜半を明しては、春のながめも如何ならん。あさましやそも幾程の身にしあれば、なほ待つことの有り顔にて、思はぬ人を思ひ寝の、夢か現か寝てか覚めてか、是や戀慕のならひなる。下歌徒に、過ぐる心は多けれど、身になす事は涙川流れて早き月日かな。流れて早き月日かな。上歌實にや流れては、妹背の中の川と聞く、妹背の中の川と聞く、吉野の山は何處ぞや。こゝはまた、心の奥か陸奥の、けふの郡の名にしおふ、細布の色こそ變れ錦木の、千度百夜いたづらに、悔しき頼みなりけるぞ。悔しき頼みなりける。

ワキ詞「不思議やな是なる市人を見れば、夫婦と思しくて、女性の持ち給ひたるは、鳥の羽にて織りたる布と見えたり。又男の持ちたるは美しく色どり飾りたる木なり。何れも〳〵不思議なる賣物かな。是は何と申したる物にて候ぞ。ツレ詞「是は細布とて機ばり狭き布なり。シテ詞「是は錦木とて色どり飾れる木なり。いづれもいづれも當所の名物なり。これこれ召され候へ。ワキ詞「實に〳〵錦木細布の事は承り及びたる名物なり。さて何故の名

物にて候やらん。ッレ謡「うたての仰せ候や。名におふ錦木細布の、其のかひもなくよそまでは、聞きも及ばせ給はぬよなう。シテ詞「いや〳〵それも御理。其道々に縁なき事をば、何とて知ろしめさるべき。ツレ謡「見奉れば世を捨人の、戀慕の道の色に染む、此錦木や細布の、知ろしめさぬは理なり。ワキ詞「あら面白の返答やな。さて〳〵錦木細布とは、戀路によりたる謂れよなう。シテ詞「なか〳〵の事。三年まで、立て置く數の錦木を、日毎に立てゝ千束ともよみ、ッレ謡「又細布は機ばり狭くて、さながら身をも隠さねば、胸合ひ難き戀とも詠みて、シテ謡「恨みにも寄せ、ッレ謡「名をも立てゝ、シテ謡「逢はぬを種と、ッレ謡「詠む歌の、上歌地謡「錦木は、立てながらこそ朽ちにけれ。立てながらこそ朽ちにけれ。けふの細布胸合はじとやとさしもよみし細布の、機ばりもなき身にて、歌物語恥かしや。實にや名のみは岩代の、松の言の葉取り置き、夕日の影も錦木の、宿りにいざや歸らん。宿りにいざや歸らん。

ワキ詞「猶々錦木細布の謂れ御物語り候へ。シテ詞「昔より此所の習ひにて、男女の媒に

胸合ひ難き―袖中抄俊頼口傳集などに見ゆる歌に「陸奥のけふの細布ほど狭み胸合ひ難き戀もする哉」
錦木は立てながらこそ―能因の歌

は此錦木を作り、女の家の門に立つるしるしの木なれば、美しく色どり飾りて之を錦木と云ふ。さる程に逢ふべき男の錦木をば取り入れ、逢ふまじきをば取り入れねば、或は百夜三年までも立てしによつて千束とも詠めり。又此山陰に錦塚とて候。是こそ三年まで錦木立てたりし人の古墳なれば、取り置く錦木の數ともに塚に築きこめて、之を錦塚と申し候。ワキ詞「さらば其錦塚を見て、故郷の物語にし候べし。教へて給はり候へ。シテ詞「おういでくさらば教へ申さん。ツレ謡「此方へ入らせ給へとて、シテ、ツレ謡「夫婦の者は先に立ち、彼旅人を伴ひつよ、地謡「けふの細道分け暮らして、錦塚は何處ぞ、彼岡に、草刈る男心して、人の通路あきらかに、教へよや道芝の、露をば誰に問はまし。眞如の玉は何處ぞや。求めたくぞ覺ゆる。シテ謡「秋寒げなる夕まぐれ、地謡「嵐木枯村時雨、露分けかねて足曳の、山の常蔭も物さび、松桂に鳴く梟蘭菊の花に隱るなる、狐栖むなる塚の草、紅葉ば染めて錦塚は、是ぞと言ひ捨てよ、塚の内にぞ入りにける。夫婦は塚に入りにけり。（中入）

彼岡に―萬葉集の旋頭歌に「此岡に草刈るをのこしかな刈りそね有りつゝも君がきまさん御秣にせん」朗詠集には彼岡に作る

ワキ上歌謡「牡鹿の角の束の間も、牡鹿の角の束の間も、寝られん物か秋風の、松の下臥夜もすがら、聲佛事をやなしぬらん。聲佛事をやなしぬらん。

ツレ一聲謡「如何に御僧、一樹一河の流を汲むも、他生の縁ぞと聞くものを、ましてや値遇のあればこそ、かく宿りする草の枕の、夢ばし覺まし給ふよ。あら貴の御法やな。

シテ謡「あら有難の御弔ひやな。二世とかねたる契だにも、さしも三年の日數積る、此錦木の逢ひ難き、法の値遇の有難さよ。いで〳〵姿を見え申さん。今こそは、色に出でなん錦木の、地謡「三年は過ぎぬいにしへの、シテ謡「夢又夢に、今宵三年の値遇に、今ぞ歸るなれと、地謡「尾花か本の思草の、陰より見えたる塚の幻に、現れ出づるを御覽ぜよ。シテ謡「いふならく、奈落の底に入りぬれば、刹利も首陀も變らざりけり。刹利も首陀も變らざりけり。あら恥かしや。

ワキ謡「不思議やなさも古塚と見えつるが、内はかゝやく燈火の、影明かなる人家の内に、機物を立て錦木を積みて、昔を現す粧なり。是は夢かや現かや。ツレ謡「かきくらす心

いふならく云々―慈覺大師の歌　刹利は王族首陀は農民

の闇にまどひにき。夢現とは世人定めよ。シテ詞「實にや昔に業平も、世人定めよといひし物を、夢現とは旅人こそ、よく〳〵知ろしめさるべけれ。ワキ詞「よし夢なりとも現なりとも、早々昔を現して、夜すがら我に見せ給へ。シテ詞「いで〳〵昔を現はさんと、夕陰草の月の夜に、ツレ謡「女は塚の内に入りて、秋の心も細布の、機物を立て　機を織れば、シテ詞「夫は錦木取り持ちて、さしたる門をたゝけども、ツレ謡「内より答ふる事もなく、ひそかに音する物とては、シテ謡「機物の音　ツレ謡「秋の蟲の音、シテ謡「聞けば夜聲も、ツレ謡「きり、シテ謡「はたり、ツレ謡「ちやう、シテ謡「ちやう、上歌地謡「きりはたりちやう〳〵、きりはたりちやう〳〵。織織松蟲きり〳〵す、つゞりさせよと鳴く蟲の、衣の爲かなわびそ、おのが住む野の千種の糸の、細布織りて取らせん。

クリ地謡「實にや陸奥の、けふの郡の習ひとて、所からなる事業の、世に類ひなき有樣かな。シテ、サシ謡「申しつるだにはゞかりなるに、猶も昔を現せとの、地謡「御僧の仰せに從ひて、織る細布や錦木の、千度百夜を經るとても此執心はよも盡きじ。シテ謡「然れども今逢ひ難き緣

なわびそ―わびしく思ふ勿れ

によりて、地謡「妙なる」一乗妙典の功力を得んと懺悔の姿、夢中に猶も現ずなり。シテ夫は錦木を運べば、女は内に細布の、機織る蟲の音に立てよ、問ふまでこそなけれども、互に内外にあるぞとは、知られ知らるよ中垣の、草の戸ざしは其のまゝにて、夜はすでに明けゝれば、すご〳〵と立ち歸りぬ。さる程に、思ひの數も積り來て、錦木は色朽ちて、さながら苔に埋木の、人知れぬ身ならば、かくて思ひも止るべきに、錦木は朽つれども、名は立ち添ひて逢ふ事は、涙も色に出でけるかや。戀の染木とも、此錦木をよみしなり。シテ謡「思ひきや、榻のはしがきかきつめて、地謡「百夜も同じ丸寢せんと、詠みしだに有るものを、せめては一年待つのみか、二年あまり有り〳〵て、はや陸奥のけふまでも、年紅の錦木は、千度になれば徒に、我も門邊に立ち居り、錦木と共に朽ちぬべき、袖の涙のたまさかにも、などや見みえ給はぬぞ。さていつか三年は滿ちぬ、あらつれなつれなや。

地謡「錦木は、シテ謡「千束になりぬ今こそは、地謡「人に知られぬ閨の内見め。シテ謡「嬉しや

戀の染木―顯照の「もしは燒く海士のまてかたならねども戀のぞめきもいとなかりけりのぞめき(塵)を染木と誤りて云ふ　思ひきや―俊成の歌末句丸寢せんとは

な、今宵鶏鳴の盃の、地謡雪を廻らす舞の袖かな。雪を廻らす舞の袖かな、（舞）シテ謡舞なまひ、地謡舞をまひ、歌をうたふも妹背の媒、立つるは錦木、シテ謡織るは細布の中ノ地謡とりくさまくの夜遊の、盃にうつりて有明の、影恥かしや有明の、影恥かしや、あさましやなりなん。覚めぬさきこそ夢人なるもの、覚めなば錦木も細布も、夢も破れて、松風颯々たる朝の原の野中の塚とぞなりにける。

朝の原―大和の名所なるを朝の意に用ひる

唐船

梗概

唐土の祖慶官人といふ者、久しく我國に逗留し、箱崎の何某に召使はれ、此地にて生める子ども二人と共に、牛馬を飼へり。時に彼土なる子ども二人、父を賻ひて歸らんとて迎に來り、官人は遂に歸國する事となりて解纜す。その折、父子互に別を惜しむ事を作る。（四番目）

シテ　祖慶官人　　子方　唐子二人
子方　日本子二人　　ワキ　箱崎殿

ワキ「かやうに候者は、九州箱崎の何某にて候。さても一年唐と日本と船の爭ひあつて、日本の船をば唐にとどめ、唐の船をば日本にとどめ置きて候。某も船を一艘とどめ置きて候。其船に祖慶官人と申す者をとどめ置きて候が、はや十三回に成り候。某は牛馬をあまた持ちて候程に、彼祖慶官人に申しつけ野飼をさせ候。今日も申しつけばやと存じ候。

十三回―回は年

明州―今の寧波
そんしそいう―諺本漢字所傳なし

松浦潟―肥前
狂言方と敢次の問答あり

物語―外出

屠子二人「一聲謡」唐船の揖枕、夢路ほどなき名殘かな。ソンシ「是は唐土明州の津に、そんしそいうと申す兄弟の者なり。二人謡」さても我父官人は一年日本の賊船にとらはれ、昨日今日とは思へども、十三回に早なりぬ。餘りに父の戀しさに、いまだ此世にましまさば、今一度對面申さんと、下歌思ひ立つ日を吉日と、船の纜解き始め、上歌明州河を押し渡り、明州河を押し渡り、海漫々と漕ぎ行けば、はや日の本もほの見えて、心づくしの果にある、忍び妻を松浦潟、波路はるかに行く程に、名にのみ聞きし筑紫路や、箱崎に早く著きにけり。箱崎に早く著きにけり。狂言シカ〳〵。

ワキ詞「唐の人のわたり候か。ソンシ詞」是に候。祖慶官人未だ存生にて、箱崎殿に召し使はれ候由承り候程に、數の寶に代へ連れて歸國仕るべき爲に唯今此所に渡りて候、ワキ詞「さん候。祖慶官人は未だ存生にて候。唯今物詣とて御出で候。暫くそれに御待ち候へ。御歸り候はゞ引き逢はせ申し候べし。ソンシ詞「さらば是に待ち申さうずるにて候。

シテ、サシ謡「如何にあれなる童部とも野飼の牛を集めつゝ、早々家路に急ぐべし。日本子二人謡「か

七夕のたとへ―彦星牛星の事をいふ

かる業こそ物憂けれ。シテ謡「よし我のみか天の原、一聖七夕のたとへにも似ぬ身のわざの、三人謡「牛牽く星の名ぞしるき。子二人謡「秋咲く花の野飼こそ、三人謡「老の心の慰めなれ。シテ謡「是は唐土明州の津に、祖慶官人と申す者なり。詞我圖らざるに日本に渡り、謡牛馬をあつかひ、草刈笛の、高麗唐土をば名にのみ聞きて過ぎし身の、あら故郷戀しや。詞かくて年月を送る程に二人の子を持つ。謡又唐土にも二人の子あり。彼等が事を思ふ時はそれも戀しく、又これもいとほしょ。一方ならぬ箱崎の、二人の子供なかりせば、老木の松は雪折れて、此身の果は如何ならん。上歌地謡「あれを見よ、野飼の牛の聲々に、野飼の牛の聲々に、子故に物や思ふらん。況んや人倫に於てをや。我身ながらも愚なり、我身ながらも愚なり。下歌いざや家路に歸らん。いざや家路に歸らん。

ロンギ子二人謡「如何に父御よ聞しめせ。さて住み給ふ唐土に、牛馬をば飼ふやらん。御物語り候へ。シテ謡「なか〳〵なれや唐土の華山には馬を放し、兆林に牛をつなぐ。是花の名所なり。子二人謡「さて唐土と日の本はいづれまさりの國やらん、委しく語り給へや。シテ謡「愚

唐の華山は云云―書經歸馬于華山之陽放牛于桃林之野の意

九牛が一毛一値少の譬

なりとよ唐土に、日の本をたとふれば、唯今尉が牽いて行く九牛が一毛よ。二人「さほど樂しむ國ならば、痛はしやさこそ實に、戀しく思召すらめ。シテ「いやとよ方々を、儲けて後は唐衣、歸國の事も思はずと、地謡「語り慰み行く程に、嵐の音の少なきは、松原や末になりぬらん、箱崎に早く著きにけり。箱崎に早く著きにけり。

ワキ詞「いかに祖慶官人、何とて遲く歸りてあるぞ。シテ詞「さん候餘りに多き牛馬にて御座候程に、さて遲く罷り歸りて候。ワキ詞「尤にて候。又尋ぬべき事の候隱さず申すべきか。シテ詞「是は今めかしき事を承り候ものかな。何事にてもあれ申し上げうずるにて候。ワキ詞「さて御事は唐土に二人の子を持ちてあるか。シテ詞「さん候子を二人もちて候。ワキ詞「其名をそんしそいうと申すか。シテ詞「あら不思議や、何とて知ろしめされて候ぞ。左樣に申し候。ワキ詞「其のそんしそいう、汝未だ存生の由を聞き、數の寶に易へ連れて歸國すべき爲に、只今此所に渡りて候。シテ詞「是は思ひもよらぬ事にて候ものかな。さて其船はいづくに御座候ぞ。ワキ詞「此方へ來り候へ。あれに繫かりたる船こそ、彼雨人

の船にて候へ。シテ詞「實にこれは某が船にて候。ワキ詞「さらば對面し候へ。シテ詞「餘りに見苦しく候程に、引き繕ひて給はり候へ。ワキ詞「心得申し候。シテ詞「やあいかにあれなるは唐土に留め置きたる二人の者か。唐子二人謠「さん候童名そんしそいうなり。シテ謠「是は夢かや夢ならば、二人謠「所は箱崎、シテ謠「明けやせん。地謠「春宵一刻其價、千金も何ならず、子ほどの寶よもあらじ。唐土は心なき、夷の國と聞きつるに、かほどの孝子ありけるよと、日本人も隨喜せり。尊とや箱崎の、神も納受し給ふか。

ソンシ詞「如何に申し候。追風が下りて候、急ぎ御船に召され候へ。シテ詞「いかに箱崎殿へ申し候。追風がおりて候程に船に乘れと申し候。御暇申し候べし。ワキ詞「めでたうや、がて御歸國候へ。日本子詞「あら悲しや我等をも連れて御出で候へ。シテ詞「げに〳〵出船の習とてはたと忘れてあるぞ此方へ來り候へ。ワキ詞「暫く、祖慶官人の事は力なき事、このをさなき者どもは、此所にて生まれ相續の者にて候程に、いつまでも某召し使はうずるにてあるぞ。此方へ來り候へ。日本子二人謠「あら情なの御事や。大和撫子の花だにも、同じ種

引き繕ひて―服裝を改むる意
明けやせん―明くは箱の綴語
撫子―子の喩

とて唐土の、唐紅に唉く物を、薄くも濃くも花は花。情なくこそ候へとよ。

序歌「時刻うつりて叶ふまじ、急ぎ御船に召されよと、はや纜を疾く〳〵と、シテ謠「呼ぶ子もあれば、日本子謠「取り留むる、シテ謠「中にとどまる、五人謠「父ひとり、地謠「たづきも知らず泣き居たり。身もがな二つ箱崎の、恨めしの心づくしや。たとへば親の子を思ふ事、人倫に限らず。燒野の雉子夜の鶴、梁の燕も、皆子故こそ物思へ。クセ況んや我らさなきだに、明日をも知らぬ老の身の、子故に消えん命は、何なか〳〵に惜からじと、シテ謠「今は思へばとにかくに、地謠「船にも乘るまじ留まるまじと、巖にあがりて十念し、既に憂き身を投げんとす。唐土や日の本の、子供は左右に取りつきて、これを如何にと悲しめば、さすが心もよわ〳〵と、なり行く事ぞ悲しき。

ワキ詞「よく〳〵物を案ずるに、物のあはれを知らざるは、唯木石に異ならず。殊更出船の障なれば、はや〳〵暇とらするぞ、とく〳〵歸國を急ぐべし。シテ詞「餘りの事の不思議さに、更に眞と思はれず。ワキ詞「こはそも何の疑ひぞや。當社八幡も御知見あれ、偽更に

あるべからず。とく〳〵船に乗り給へ。シテ謡これは眞か。ワキ謡なか〳〵に。地謡ありがたの御事や。眞に諸天納受して、此子を我等に、あたへ給ふか有難や。斯くて餘りのうれしさに、時刻を移さず、暇申して唐人は、船に取り乗り押し出だす。悦びの餘りにや、樂を奏し舟子ども、棹のさす手も舞の袖、をりから波の鼓の　舞樂につれて面白や。（樂）キリ陸には舞樂に乗じつゝ、陸には舞樂に乗じつゝ、名殘おしてる海面遠く、なりゆくまゝに、招くも追風、船には舞の、袖の羽風も追風とやならん。帆を引きつれて舟子ども、帆を引きつれて舟子どもは悦び勇みて、唐土さしてぞ急ぎける。

内二十一

弓八幡

梗概　拾葉抄に此謡を弓矢幡と名つくる事は源家の氏神、弓矢の守護神なれば弓と矢と幡との三つの兵具に譯して弓矢幡とは名付る也と云へり。八幡宮の御神事に勅使參向あり、高良の神現れて神託を示し給ふ事を作る。（脇能）

シテ　高良明神（前は老翁）　ツレ　男

ワキ　陪從

次第　三人「御代も榮ゆく男山、御代も榮ゆく男山、名高き神に參らん。ワキ詞「抑是は後宇多の院に仕へ奉る臣下なり。扨も頃は二月初卯八幡の御神事なり。郢曲のみぎんなれば、陪從の參詣仕れとの宣旨を蒙り、唯今八幡山に參詣仕り候。道行　三人「四つの海、波しづかなる時なれや、波しづかなる時なれや、八洲の雲もをさまりて、ゆに九重の道すがら、往

御代も榮ゆく男山―古今集の「今こそあれ我も昔は男山榮ゆく時もありこしものを」を引く　郢曲―朗詠催馬樂の如き謡物をいふ　みぎん―神なり時節なり

來の旅もゆたかにて、廻る日影も南なる、八幡山にも著きにけり。八幡山にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候ほどに、八幡山に著きて候。心靜かに神拜を申さうずるにて候。シテ、ツレ「一聲」謠「神祭る、日も如月の今日とてや、のどけき春の氣色かな。ツレ謠「花のみやこの空なれや、シテ謠「雲も收まり風もなし。シテ、サシ謠「君が代は千代に八千代にさゞれ石の、いはほとなりて苔のむす、シテ謠「松の葉色も常磐山、緣の空ものどかにて、君安全に民あつく、關の戸ざしもさゝざりき。本よりも君を守りの神國に、わきて誓も澄める夜の、月かげろふの石清水、絕えぬ流の末までも、生けるを放つ大悲の光、げにありがたき時世かな。下歌神と君との道すぐに、歩みを運ぶこの山の、上歌松高き、枝も連なる鳩の嶺枝も連なる鳩の嶺、曇らぬ御代は久方の、月の桂の男山、げにもさやけき影に來て、君萬歳と祈るなる、神に歩を運ぶなり。神に歩を運ぶなり。ワキ詞「今日は當社の御神事とて、參詣の人々多き中に、是なる翁錦の袋に入れて持ちたるは弓と見えたり。そも何くより參詣の人ぞ。シテ詞「是は當社に年久しく仕へ申し、君安全、

民あつく―民俗敦厚の意
生けるを放つ―放生會のこと
久方の云々―續古今集の歌下句さやけき影は所からかも

と祈り申す者なり。又是に持ちたるは桑の弓なり。身の及びなければいまだ奏聞申さず。只今御參詣を待ち得申し、君へ捧げ物にて候。ワキ詞「ありがたし〳〵。先々めでたき題目なり。さて其弓を奏せよとは、私に思ひよりけるか、もし又當社の御託宣か、謡分きて謂れを申すべし。シテ詞「是は御言葉ともおぼえぬ物かな。今日御參詣を待ち得申し、桑の弓をさゝげ申す事、即ち是こそ神慮なれ。ツレ謡「其上聞けば千早ぶる、シテ、ツレ謡「神の御代には桑の弓、蓬の矢にて世を治めしも、直なる御代のためしなれ。よく〳〵奏し給へとよ。ワキ謡「げに〳〵是は泰平の、御代のしるしは現れたり。詞まづ其弓を取り出だし、謡「神前にて拜み申さばや。シテ詞「いや〳〵弓を取り出しては、何の御用のあるべきぞ。ツレ謡「昔唐土周の代を、治めし國のためしには、シテ詞「弓箭を包み干戈を納めし例を以て、ツレ謡「弓を袋に入れ、シテ謡「劍を箱に納むるこそ、ツレ謡「泰平の御代のしるしなれ。シテ、ツレ謡「それは周の代これは本朝、名にも扶桑の國を引けば、地謡「桑の弓、取るや蓬の八幡山、取るや蓬の八幡山、誓の海もゆたかにて、君は船、臣は瑞穗の國々も、殘りなく靡く草木の、

桑の弓蓬の矢―桑弧蓬矢の語歷記に左り

菅唐土周の云々―武王の事をさす毛詩に載す職干戈一載櫜弓矢とあり　扶桑の國―日本　臣は云々―臣は水といふを瑞穗に言出く

惠も色もあらたなる、御神託ぞめでたき、神託ぞめでたかりける。

ワキ詞「桑の弓蓬の矢にて世を治めし謂れ猶々申し候へ。クリ地謡「そも〳〵弓箭を以て世を治めし始と謂つぱ、人皇の御代始まりても、卽ち當社の御神力なり。レタ、シ謡「然るに神功皇后、三韓を鎭め給ひしより。地謡「同じく應神天皇の御聖運、御在位も久し國富み民も、豐に治る天が下、今に絕えせぬ御貢とかや。クセ上雲上の月卿より、下萬民に至るまで、樂しみし聲盡きもせず。然りとは申せども、君を守りの御惠、猶も深き故により、欽明天皇の御宇かとよ、豐前の國宇佐の郡、蓮臺寺の麓に、八幡宮とあらはれ、八重旗雲をしるべにて、洛陽の南の山高み、曇らぬ御代を守らんとて、石淸水いさぎよき靈社と現じ給へり。されば神功皇后も、異國退治の御爲に　九州四王寺の峯に於て、七箇日の御神拜、例も今は久方の、天の岩戸の神遊び、群居て謠ふや榊葉の、靑和弊白和弊、とりどりなりし神靈を、レタ謡「うつすや神代の跡すぐに、地謡「今も道ある政事、あまねしや神籬の、をかたまの木の枝に、金の鈴を結びつけて、千早ぶる神遊び、七日七夜の御神

四王寺―肥後

をかたまの木―榊をいふとぞ

八幡三所ー祭神　應神天皇神功皇后玉依姫の三柱

放す一今放つと謡ふ　高良の神ー上の高良下の高良とてあり上は武内宿禰下は玉垂命

如月の云々ー八幡の神詠と傳ふ

拜、誠に天も納受し、地神も感應の海山治まる御代に立ち歸り、國土を守り給ふなる、八幡三所の、神託ぞめでたかりける。

ロンギ地謡「げにや誓も影高き、げにや誓も影高き、このきさらぎの神祭、かよる神慮ぞありがたき。シテ謡「ありがたき千代の御聲を松風の、更け行く月の夜神樂を、奏して君を祈らん。地謡「祈る願も瑞籬の、久しき代より仕へてき、シテ謡「我は眞は世々を經て、地謡「今此年になるまでも、シテ謡「生けるを放つ、地謡「高良の神とは我なるが、此御代を守らんと、只今こゝに來りたり。八幡大菩薩の、御神託ぞ疑ふなとて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「都に歸り神勅を、都に歸り神勅を、悉く奏しあぐべしと、いへばお山も音樂の聞えて異香薫ずなり。げにあらたなる奇特かな、げにあらたなる奇特かな。

後シテ謡「もとよりも人の國より我國、他の人よりも我が人と、誓の末も明らけき、眞如實相の槻弓の、八百萬代に至るまで、動かず絕えず君守る、高良の神とは我が事なり。地謡「如

月の、初卯の神樂おもしろや。シテ謡「謡へや謡へ日影さすまで、地謡「袖の白木綿返すく〳〵も、千代の聲々謡ふとかや。(神樂)ロンギ地謡「げにや末世といひながら、げにや末世といひながら、神の威光はいやましに、かくあらたなる御影向、拜むぞ尊がりける。シテ謡「君を守りの御恵、本より定めある上に、殊に此君の神德、天下一統と守るなり。地謡「げに〳〵神代今の代の、しるしの箱の明らかに、シテ謡「此山上に宮居せし、地謡「神の昔は、シテ謡「久方の、地謡「月の桂の男山、さやけき影は所から、畜類鳥類、鳩吹く松の風までも、皆神體と現れ、げに賴もしき神心、示現大菩薩八幡の、神託ぞ豐なりける、神託ぞ豐なりける。

鉢木

梗概

鎌倉幕府の執權北條時頼、最明寺入道といふ。民情視察のため、行脚僧となりて國々へ微行す。たま〳〵途中大雪に遭ひ、佐野常世の宿に泊る。常世、身の零落を嘆きつゝ、而も鉢の木を焚き、粟の飯を供へて待遇し、一朝事あらんには、武士の本分を盡すべきを誓ふ。これ前段なり。後段には、鎌倉に武士の勢揃あり、常世、前言の如く、駈け參じ、時頼より其忠義を賞せられ、めでたく本領に安堵す。武士道を最もよく表したるなり。（四番目）

シテ　佐野常世　　シテツレ　常世妻

ワキ　最明寺時頼（前は旅僧）　ワキツレ　從者

狂言　從者

ワキ次第「行方定めぬ道なれば、行方定めぬ道なれば、來し方も何くならまし。詞是は一處不住の沙門にて候。我此程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候ほどに、まづ此度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。道行謡信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、

沙門―山僧
信濃なる云々―伊勢物語の歌下句遠近人の見やはとがめぬ

友野里―宿湯伴野庄ならん

淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友野里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に著きにけり。佐野の渡に著きにけり。

ワキ詞「急ぎ候程に、上野國佐野の渡に著きて候。あら笑止や又雪の降り來りて候。此所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申し候。シテツレ詞「誰にてわたり候ぞ、ワキ詞「是は修行者にて候。一夜の宿を御貸候へ。シテツレ詞「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候まじ。シテワキ詞「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。シテツレ詞「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、此由を申さばやと思ひ候。シテ詞「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を著て立つて徘徊すと言へり。されば今ふる雪も、もと見し雪にかはらねども、我は鶴氅を著て立つて徘徊すべき。謡袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。詞あら思ひよらずや。此

雪似鵝毛飛散亂人　被鶴氅立徘徊―白氏文集の句、鶴氅は鶴毛の裘なり王恭の故事

もと見し雪―もとは以前の栄華の時をいふ　袖せばき云々―前の錦木を見よ

大雪に何とて是にたゝずみて御入り候ぞ。シテツレ詞「さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずるよし仰せ候程に、是まで參りて候。シテ詞「さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。シテツレ詞「あれに御入り候。ワキ詞「我等が事にて候。いまだ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘じて候ほどに、一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「易き御事にて候へども、餘りに見苦しく候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。ワキ詞「いや〳〵見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。シテ詞「留め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか〳〵御宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。ワキ詞「さてはしかと御貸しあるまじいにて候か。シテ詞「御痛はしくは存じ候へども、御宿は參らせがたう候。ワキ詞「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。

曲もなやーつまらなきこと

シテツレ謡「あさましや我等かやうに衰ふるも、前世の戒行つたなき故なり。せめてはかやう

の人に値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべくは御宿を、参らさせ給ひ候へ。シテ詞「さやうに思召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御出候まじ。某追附き留め申し候べし。なう〳〵旅人御宿参らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬけに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打ち拂ひ打ち拂ひし給ふ氣色、謡古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うちはらふ陰もなし、詞佐野の渡の雪の夕暮。詞かやうによみしは大和路や、謡三輪が崎なる佐野のわたり、地謡「是は東路の　佐野の渡りの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。上歌げに是も旅の宿、げに是も旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の陰のやどりも、此世ならぬ契なり。それは雨の木陰、是は雪の軒ふりて、憂き寢ながらの草枕。夢より霜や結ぶらん。夢より霜や結ぶらん。

シテ詞「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ參らせうずる物もなく候はい

駒とめて云々ー定家の歌大和路や云々ー右の歌は萬葉集「苦しくも ふりくる雨か三輪が崎佐野の渡に家もあらなくに」を據としたれば大和の佐野なり夜より一夜より雪も先に霜が結ぶなりんとなり

盧生―前の邯鄲を見よ

かに。ツレ詞「折節これに粟の飯の候ほどに、苦しからずは参らせられ候へ。シテ詞「さらば其由申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にても参らせうずる物もなく候、折節これに粟の飯のあるよし申し候。苦しからずは聞し召され候へ。ツレ詞「それこそ日本一の事にて候賜はり候へ。シテ詞「なうきこし召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。シテツレ詞「心得申し候。シテ詞「總じて此粟と申す物は、古へ世にありし時は、歌に讀み詩に作りたるをこそ承りて候に、今は此粟をもつて身命を繼ぎ候。げにや廬生が見し榮花の夢は五十年。其邯鄲の假枕。一睡の夢のさめしも、粟飯かしく程ぞかし。あはれやげに我も打ちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、扨なう御覽ぜよかほどまで、地謡「住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寢られねば夢も見ず、何思出のあるべき。

シテ詞「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候べき。や、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。是を切り火に焚いてあて申し候べし。ツレ詞「げ

にげに鉢の木の候よ。シテ詞「さん候某世にありし時は、鉢の木に好き數多木を集め持ちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや〳〵木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候さりながら、今も梅櫻松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、是を火に焚きあて申さうずるにて候。ワキ詞「いや〳〵是は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又おこと世に出で給はん時の御慰みにて候間、中々思ひもよらず候。シテ詞「いやとても此身は埋木の花咲く世に逢はん事、今此身にてはあひ難し。シテツレ謠「唯いたづらなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテ詞「是ぞ誠に難行の、法の薪と思召せ。ツレ謠「しかも此程雪ふりて、シテ詞「仙人に仕へし雪山の薪、シテツレ謠「かくこそあらめ。シテ謠「我も身を、地謠「捨人の爲の鉢の木、切るとてもよしや惜からじと、雪打ち拂ひて見れば面白やいかにせん、先冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべき。見じといふ、人こそうけれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪になすべし

鉢の木に—喜多流にては鉢の木をと謠へり

窓梅北面雪封寒—朗詠集　見じといふ—曾家の歌に「山里の折掛垣の梅の花いかなる人の見じといふらん」

と、かねて思ひきや。ワキ櫻を見れば春ごとに、花少し遅ければ、此木やわざると、心をつくし育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ謡「さて松はさしもげに、地謡「枝をため葉をすかして、かよりあれと植ゑ置きし、其かひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるも理や、切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はお爲なり、よく寄りてあたり給へや。

ワキ詞「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。シテ詞「御出でにより我等も火にあたりて候。ワキ詞「いかに申し候。主の御名字をば、何と申し候ぞ承りたく候。シテ詞「いや某は名字もなき者にて候。ワキ詞「何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。なにの苦しう候べき。御名字を承り候べし。シテ詞「此上は何をか包み候べき。是こそ佐野の源左衛門の尉常世がなれる果にて候。ワキ詞「それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。シテ詞「其事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となりて候。ワキ詞「なうそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて、其御沙汰は候はぬぞ。シテ詞「運の盡くる所は

かまくら―風情
煙にて―もと常盤にてとありしを幕府時代に徳川氏の松平姓に憚りてかへて謡へる也

最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ是に物の具一領長刀一えだ、又あれに馬をも一疋つないで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參じ著到に附き、謠さて合戰始まらば、地謠敵大勢ありとても、敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひて、死なん此身の、此儘ならば徒に、飢に疲れて死なん命、何ほう無念の事ぞ。ロンギワキ謠よしや身の、かくては果てじ只賴め、我世の中にあらんほど、又こそ參り候はめ、暇申して出るなり。シテツレ謠名殘惜しの御事や。始めはつゝむ我宿の、さも見苦しく候へど、しばしは留まり給へや。ワキ謠留まる名殘のまゝならば、さて幾たびか雪の日の、シテツレ謠空冴え寒き此暮に、ワキ謠いづくに宿を狩衣、シテツレ謠今日ばかり留まり給へや。ワキ謠名殘は宿にとまれども、暇申して、シテツレ謠御出でか。ワキ謠さらばよ常世。シテツレ謠また御入り。地謠自然鎌倉に、御上りあらばお尋ねあれ。希有がる法師なり。かひ〳〵しくはなけれども、公

著到に附き―名字を張面に記入せらるゝこと

無念の事ぞ―ぞうぞ又候ぞと今延べて謔ふ

希有がる―あやしの法師なりと早下して云ふ公方―今は披露と謔ふ

方の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなと、いひすてゝ出船の、共に名殘やをしむらん、共に名殘やをしむらん。（中入）

後シテ謡「いかにあれなる旅人、詞鎌倉へ勢の上るといふは眞か。何夥しく上る。さぞあるらん。東八個國の大名小名、思ひ〳〵の鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる糸毛の具足に、金銀をのべたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きらびやかに、うちつれうちつれのほるなかに、常世が常にかはりたる、馬物具や打物の、物其ものにあらざる氣色、謡さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる痩馬の、あら道おそや。地謡「急げども、急けども、弱きに弱き柳の糸の、シテ謡「よれによれたる痩馬なれば、地謡「打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。

ワキ謡「いかに誰かある。ワキツレ謡「御前に候。ワキ詞「國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。ワキツレ詞「さん候悉く參りて候。ワキ詞「其諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著

乘習—訓〈馬中間—口取男

あふれどもーあふるは鎧にて蹴ること

錆たる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し候へ。ワキツレ詞「畏つて候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキツレ詞「君よりの御諚には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、痩たる馬を自身控へたる武者有るべし、急いで尋ねて御前へ參れとの御事にて候。狂言詞「畏つて候。いかに申し候。シテ詞「上意にて候。何事にて候ぞ。狂言「急いで御前へ御參り候へ。シテ詞「何と某に御前へ參れと候や。狂言詞「なか〳〵のこと。シテ詞「思ひよらずや。これは定めて人違にて候べし。狂言詞「いや〳〵其方の事にて候。其仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて參れとの御事にて候が、見申せは其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候へ。シテ詞「何とたとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れと候や。狂言詞「なか〳〵の事。シテ詞「さては某が事にて候べし。畏つたると御申し候へ。狂言詞「心得申し候。

シテ詞「ゆに〳〵是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ、御前に召し出だされ頭を

上意にて候―今諚はずこれは―同上

大床―廣間

きら星の如く―美しきことをいふ

當參―今集まれる人々

刎ねられん爲な。よし〳〵それも力なし。いで〳〵御前に參らんと、謠大床さして見渡せば、地謠「今度の早打に、今度の早打に、上り集る兵、きら星の如くなみ居たり。さて御前には諸侍、其外數人なみ居つゝ、目を引き指をさし笑ひあへる其中に、シテ謠「横縫のちぎれたる、地謠「古腹巻に錆長刀、やう〳〵に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前に畏る。

ワキ詞「やあ如何にあれなるは佐野の源左衞門の尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け、錆びたりとも其長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參るべきよし申しつる。言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。先々今度の勢づかひ、全く餘の義にあらず。當世が言葉の末、眞か僞か知らんためなり。又當參の人々も訴訟あらば申すべし。理非によつて其沙汰いたすべき處なり。先々沙汰の始には、常世が本領佐野の庄、三十餘鄉返し與ふる所なり。又

何よりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いで其時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。其返報に、加賀に梅田、越中に櫻井上野に松井田、合はせて三箇の庄、子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀、謡安堵に取り添へ給ぴければ、シテ謡常世は之を賜はりて、地謡常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り　これ見給へや人々よ。始め笑ひしともがらも、是ほどの御氣色、さぞ羨ましかるらん。さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。シテ謡其中に常世は、地謡其中に常世は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め此馬に、うちのりて上野や佐野の舟橋とりはなれし、本領に安堵して、歸るぞうれしかりける。歸るぞうれしかりける。

安堵―本領に落著けよとの御敎書

佐野の舟橋―前の舟橋を見よ

羽衣

梗概

駿河なる三保の松原に、天女天降りて、松に掛けし羽衣を、漁夫の取りしため、飛行の術なく、漁夫に乞ひて、衣を返さしめ、その所望により、舞樂を奏でて、昇天する事を作る。蓋し羽衣神仙、東遊の故事を加味したる物也。その背景を秀麗の山水に取れる所雅趣眞に掬すべし。（三番目）

シテ　天人　　ワキ　伯眞

ワキツレ　漁夫

ワキ三人謡「風早の、三保の浦わをこぐ舟の、浦人騒ぐ浪路かな。ワキ、サシ謡」是は三保の松原に、伯眞と申す漁夫にて候。ワキ三人謡「萬里の好山に雲忽に起り、一樓の明月に雨始て晴れり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつゞく朝霞、月も殘りの天の原、及なき身の眺めにも、心そらなるけしきかな。下歌忘れめや、山路をわけて清見潟遙に三保の松原に、立ちつれいざや通はん、立ちつれいざや通はん。上歌風向ふ、雲の

風早の云々―萬葉集の歌末句波立つらしも明れりー古く晴るゝと謡ふ　萬里の好山ー千里好山愁作歟ー樞明月雨初晴と詩人玉屑にまるを引く　風向ふ云々ー爲相の歌下句つりせぬ先に歸る舟

浮浪たつと見て、雲の浮浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春ならば吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。釣人おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虛空に花ふり音樂きこえ、靈香四方に薫ず。是唯事と思はぬ所に、これなる松にうつくしき衣がゝれり。よりてみれば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なうその衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞「是は拾ひたる衣にて候程に取りて歸り候よ。シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くに置き給へ。ワキ詞「そも此衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり、衣を返す事あるまじ。シテ詞「かなしやな羽衣なくては飛行の道も絕え、天上に歸らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ謡「此御詞を聞くよりも、いよ〳〵伯艮力を得、詞本より此身は心なき、天の羽

天人の五衰―天人命終の時五の衰相現はる頭上の華鬘忽ち萎むといふはその一也　天の原云々―丹後風土記の歌　迦陵頻迦―極楽浄土の鳥

衣とりかくし、謡かなふまじとて立ちのけば、シテ謡「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、ワキ謡「地にまた住めば下界なり、シテ謡「とやあらんかくやあやらんと悲めど、ワキ謡「伯艮衣をかへさねば、シテ謡「力及ばず、ワキ謡「せんかたも、地謡「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謡「天の原ふりさけみれば霞たつ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謡「住み馴れし空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。上歌「迦陵頻迦のなれ〳〵し、迦陵頻迦のなれ〳〵し、聲今さらにわづかなる、隔のかへりゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、ゆくか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれしやこなたへ給はり候へ。ワキ詞「誓く。承り及びたる天人の

舞樂、只今こゝにて奏し給はゞ、衣をかへし申すべし。シテ謡「うれしやさては天上に歸らん事をえたり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり、只今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとては先かへし給へ。ワキ謡「いや此衣をかへしなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ謡「いや疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ謡「あら恥かしやさらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謡「少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謡「天の羽衣風に和し、シテ謡「雨に潤ふ花の袖、ワキ謡「一曲を奏で、シテ謡「舞ふとかや。地謡「東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、此時や始めなるらん。クリ地謡「それ久方の天といつぱ、二神出世の古、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名づけたり、シテ、サシ謡「然るに月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地謡「白衣黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ謡「我も數ある天少女、地謡「月の桂の身を分けて、假に東の駿河舞、世に

霓裳羽衣―樂の名

東遊の駿河舞―同二神―伊弉諾伊弉冊の二尊　十方―東西南北乾坤巽艮上下　月宮殿―月界三五に分つて各十五人づつあることを云ふ

春霞云々―後撰集の歌末句花や咲くらん

君が代は云々―拾遺集の歌末句殿なるらん、是は佛説に天人大なる石を三年に一度羽衣にて撫でつくすを一劫といふかく撫ても〳〵つきぬとはめでたき事の譬なり

宮人―今色人と謡ふ

蘇命路―須彌山

傳へたる曲とかや。ワセ春霞たなびきにけり久方の、月の桂も花や咲く。けに花かつら、色めくは春のしるしかや。面白や天ならで。こよも妙なり天津風、雲の通路吹きとぢよ、少女の姿、しばし留りて、此松原の、春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も松風も、長閑なる浦の有様。其上天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や、シテ謡「君が代は、天の羽衣まれに來て、地謡「撫づとも盡きぬ巌ぞと、聞くも妙なり東歌、聲添へてかず〳〵の、笙笛琴箜篌、孤雲の外に滿ち〳〵て、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、けに雪を廻らす、白雲の袖ぞ妙なる。シテ謡「南無歸命月天子、本地大勢至。地謡「東遊の舞の曲、（序ノ舞）シテ、ワカ謡「あるひは、天つ御空の綠の衣、地謡「又は春立つ霞の衣シテ謡「色香も妙なり少女の裳裾、地謡「さゆふさ、さゆふ颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖。（急ノ舞）ヤリ地謡「東遊の數々〳〵に、東遊の數々〳〵に、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿月眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶を降

本地大勢至―月天子を勢至菩薩なりといふ

し、國土に是を施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、足高山や富士の高嶺、かすかになりて天つ御空の、霞にまぎれて失せにけり。

道成寺

梗概

紀州道成寺の鐘に怨を殘したる女の撞鐘再興の砌、白拍子となりて詣で來り鐘樓に上りて鐘ひきかづきたるを、寺僧の祈禱によりて、大蛇となりて、日高川の深淵に飛入れりといふ事を作る。この資料は早く今昔物語に出でたる話にして、卽ち此曲中のワキの語に其趣見えたり。重き能なり。

シテ　白拍子の靈前は白拍子後は蛇體）
ワキ　道成寺住僧　ワキツレ　從僧　狂言　能力二人

退轉―中絕

鐘の供養―鐘の出來たる祭

女人禁制―女子の入るを禁ずること

ワキ詞「是は紀州道成寺の住僧にて候。さても當寺に於てさる仔細有つて、久しく撞鐘退轉仕りて候を、此程再興し鐘を鑄させて候。今日吉日にて候程に、鐘の供養を致さばやと存じ候。いかに能力、はや鐘をば鐘樓へ上げて有るか。ヲカン「さん候ばや鐘樓へ上げて候御覽候へ。ワキ詞「今日鐘の供養を致さうずるにて有るぞ。又さる仔細ある間、女人禁制にて有るぞ。かまひて一人も入れ候な。其分心得候へ。狂言「畏つて候。

シテ次第謡「作りし罪も消えぬべし。作りし罪も消えぬべし。鐘の供養に參らん。是は此國のかたはらに住む白拍子にて候。詞さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候由申し候程に、只今參らばやと思ひ候。上歌謡月は程なく入汐の、月は程なく入汐の、煙滿ちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺に著きにけり。日高の寺に著きにけり。詞急ぎ候程に、日高の寺に著きて候。やがて供養を拜まうずるにて候。狂言シカ〳〵。シテ詞「是は此國の傍に住む白拍子にて候、鐘の供養にそと舞をまひ候べし。供養を拜ませて給はり候へ。狂言シカ〳〵。シテ詞「あら嬉しや涅分舞をまひ候べし。嬉しやさらば舞はんとて、あれに座す宮人の、烏帽子を誓し假に著て、謡既に拍子を進めけり。花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん。ワカ道成の卿承り、始めて伽藍橘の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名づけたりや。地謡山寺のや、シテ謡「春の夕ぐれ來てみれば、地謡「入相の鐘に花ぞ散りける。入相の鐘に花ぞ散りける、花ぞ散りける。シテ謡「さるほどに、さるほどに、寺々の鐘、地謡「月落ち烏鳴いて霜雪天

涅分―力一ぱいのこと

山寺の云々―新古今集の歌

龍頭―鐘のとつて

狂言―女に拝ませたる由を言ひて鐘の落ちたる事を告ぐ

まなご―愛子の意あり

に、滿汐ほどなく日高の寺の、江村の漁火愁に對して、人々眠ればよき隙ぞと、立舞ふ樣にてねらひよりて、撞かんとせしが、思へば此鐘恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし、ひきかづきてぞ失せにける。狂言シカ〳〵。

ワキ詞「言語道斷。かやうの儀を存じてこそ、固く女人禁制の由申して候に、曲事にて有るぞ。なう〳〵皆々かう渡り候へ。此鐘について女人禁制と申しつる謂の候を御存じ候か。

ワキツレ詞「いや何とも存ぜず候。ワキ詞「さらば其謂を語つて聞かせ申し候べし。ワキツレ詞「懇に御物語り候へ。ワキ語「むかし此所に、まなごの庄司と云ふ者あり。彼者一人の息女を持つ。又其頃奥より熊野へ、年詣する山伏の有りしが、庄司がもとを宿坊と定め、いつも彼所にきたりぬ。庄司娘を寵愛の餘りに、あの客僧こそ汝がつま夫よなんどと戯れしを、幼心に誠と思ひ年月を送る。又或時彼客僧庄司がもとに來りしに、彼女夜更け人靜つて後、客僧の閨にゆき、いつまでわらはをばかくて置き給ふぞ、急ぎむかへ給へと申しょかば、客僧大きに騷ぎ、さあらぬ由にもてなし、夜にまぎれ忍びいでて此寺にきた

り、ひらに賴む由申しょかは、隱すべき所なければ、鐘撞をおろしそのうちに此客僧を隱しおく。さて彼女は山伏を、遁すまじとて追つかくる。折節日高川の水以ての外に增りしかば、川の上しもをかなたこなたへ走りまはりしが、一念の毒蛇となつて、河を易易とおよぎこし此寺にきたり、こゝかしこを尋ねしが、鐘のおりたるを怪しめ、龍頭をくはへ七まとひ纏ひ、焰を出だし尾を以てたゝけば、鐘はすなはち湯となつて終に山伏を取り挫んぬ。なんぼう恐ろしき物語にて候ぞ。ワキツレ詞「言語道斷。かゝる恐ろしき御物語こそ候はね。ワキ詞「其時の女の執心殘つて、また此鐘に障碍をなすと存じ候。我人の行功も、かやうのためにてこそ候へ。涯分祈つて此鐘を二度鐘樓へ上げうずるにて候。ツレ詞「尤しかるべう候。

ワキ謠「水却つて日高川原の、眞砂の數は盡くるとも、行者の法力つくべきかと、ワキツレ謠「みな一同に聲をあはせ、ワキ謠「東方に降三世明王、ワキツレ謠「南方に軍荼利夜叉明王、ワキ謠「西方に大威德明王、ワキツレ謠「北方に金剛夜叉明王、ワキ謠「中央に大日大聖不動地謠「動くか動か

取挫んぬ―取殺したること

東方に云々―不動に祈る詞

ぬかさづくの、襄謨三曼陀嚩日羅南、旋多摩訶嚕遮那、娑婆多耶吽多羅吒干鉢、聽我說者得大智恵、知我身者卽身成佛と、今の蛇身を祈るうへは、ワキ謨何のうらみか有明の、撞鐘こそ、地謡すはゝ動くぞ祈れたど、すはゝ動くぞ祈れたど、引けや手ん手に千手の陀羅尼、不動の慈救の偈、明王の火焔の、黒烟を立てゝぞ祈りける。祈り祈られ撞かねど此鐘びくきいで、引かねど此鐘躍るとぞ見えし、程なく鐘楼に引きあげたり。あれ見よ蛇體は顯れたり。キリ地謡謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の、恒沙の龍王哀愍納受、哀愍自謹の砌なれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつぱと轉ぶが、又起上つて忽に、鐘に向つてつく息は、猛火となつてその身を燒く、日高の川浪深淵に、飛んでぞ入りにける。望み足りぬと驗者達は、わが本坊にぞ歸りける。わが本坊にぞ歸りける。

謹請云々―龍王に祈る詞

本坊―わが住む僧坊

龍虎

梗概　入唐沙門、山中にて龍虎相搏つ有様を見たる事を作れり。かゝる作のあらはれしは、或は支那畫の影響にやあらん。（五番目）

シテ　虎（前は樵夫）　ツレ　龍（前は樵夫）
ワキ　旅僧

ワキ次第「法の道にと思ひ立つ、法の道にと思ひ立つ、波路遙けき船路かな。詞是は諸國一見の僧にて候。我若年の時よりも、諸國修行の志あるにより、日の本をば殘らず見廻りて候。又承り及びたる佛法流布の跡を尋ね、入唐渡天の望あつて、此間は九州博多の津に候處に、よき便船の候間、此春思ひ立ち渡唐仕り候。道行「天の原、八十島かけて漕ぎ出づる、八十島かけて漕き出づる、船路の末も不知火の、筑紫を跡になしはてゝ、行くへにつゞく雲の波、霞を分くる海原に、又山見えて程もなく、早唐土に著きにけり。

天の原云々―古今集小野篁の歌を引く

江霞隔浦人煙遠湖水連天雁點遙—朗詠集

五嶺蒼々霽往來但憐大庾萬株梅—朗詠集 五嶺は大庾始安臨賀桂陽湟陽の五山

はや唐土に著きにけり。詞あら嬉しや候。遙々と思ひしに、佛神の御加護もや有りけん。行進安穩に布帆恙もなく渡唐仕りて候。心靜に所々を一見せばやと存じ候。實にや江霞浦を隔てゝ人煙遠し、巨水天に連なつて雁點遙なり。眺めやる遠山本の群竹の、霞みこめたる面白さよ。又是なる岨傳ひを山人の來り候。此者を待ち名所をも尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ「一聲謠」折を得て、春の薪にさす花の、にほひを運ぶ山風、シテツレ謠「谷の下庵はるゞゝと、シテ、ツレ詞「霞に遠き眺かな。シテ、ワキ謠五嶺蒼々として雲往來す。ただ憐む大庾萬株の梅。シテ、ツレ謠「梢も殊に色深き、木陰によれば心なき、身にもあはれは有明のつれなき命ながらへて、又廻り逢ふ春べかな。誠に知んぬ老も、風情少き有樣を、上歌見る度に、かはる姿やます鏡、かはる姿やます鏡、移る月日は程もなく、昨日は少年、今日白頭の雪とのみ、積り積りて老が身の、春の光にあたれども、わびしき業を柴取りて、歸る山路の苦しさよ。

星の國―天竺

ワキ詞「如何に是なる山人に尋ね申すべき事の候。シテ詞「不思議やな見馴れ申さぬ御姿なりいかさま是は入唐の沙門にて御座候な。ワキ詞「實によく御覽じて候ものかな。我日の本より此國に渡り、佛法流布の古跡を尋ね、是より渡天の志あるにより、遙々思ひ立ちて候。シテ詞「さては渡天の御爲かや。昔は聞きつ近き世には、有難かりける御事かな。シテツレ謠「實に痛はしや遙々と、行くへも遠き旅衣の、シテ詞「立ち出で給ひし日の本、佛法東漸を振り捨てよ、ワキ謠「去り來し法の跡遠き、シテ謠「昔語を今更に、ワキ謠「誰か委しく夕月夜、上歌地謠「星の國にと行く雲の、星の國にと行く雲の、はてしはあらじ人心、心せよ胸の月、よその光を尋ねても、何にかはせんまのあたり、見るを尋ぬるはかなさよ、見るを尋ぬるはかなさよ。

ワキ詞「かよる面白き御答へこそ候はね。先々尋ね申したき事の候。見え渡りたる山河のけしき、何れも妙なる眺の内に、あれに霞める遠山本の、向ひに見えたる竹林に、俄に雲の打ち掩ひ、風冷ましく吹き落ちて、さながら氣疎き其けしき、是は如何なる事やら

帝の御衣―袞龍の御衣をいふ

内の清き―中空のこと

ん。シテ詞「實に御不審は御理。あの竹林の岩洞は、虎の住家にて候を、向ひに見えたる高山より　常々雲の掩ひつゝ、龍虎の戰あるものを、ワキ謠「不思議の事を聞くものかな。音に聞きしをまのあたり、龍虎あらそふ其有樣を、今見る事の不思議さよ。シテ詞「畜類なれどもかくの如く　其勢をあらはして、ワキ謠「何をかさのみ、シテ謠「あらそひの、上歌地謠「蝸牛の角の上にして、はかなや何事を、爭は人の身も、かはらぬものを世の中の、習なればや畜類の、戰ふ事も理や、戰ふ事も理や。

ワキ詞「猶々龍虎の戰の有樣委しく御物語り候へ。クリ地謠「それ生を受くるもの、その身の威勢を爭ふ事、人間以て是に同じ。必ず龍虎に限るべからず。シテ、サシ謠「然れば金龍雲を穿ち、猛虎深山に風を起す。地謠「何れも勢妙にして、互の勢を爭ふ事、畜類といへ共も位高く雲居に住めば龍虎の紋、シテ謠「帝の御衣にも之を織り、地謠「殊に天子の御顏を、龍顏と申し御乘物を、龍駕とも又名づけたり。クセ　さて又虎はかりそめに、住むも千里の道しめて、住家と定むとか。もとより竹は直にして、月の淸きを我友と、賴む千

尋のかけ清く、曇らぬ法の道を知る、羅漢に仕へ奉る。又は四睡の一つにも、あらはれけると聞くものを、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風生ずと、聞きしもまのあたり、見るこそ不思議なりけれ。シテ謡是ぞ和國の物語、地謡委しく猶も見給はど、此山陰の岨傳ひ、竹の林の此方なる、巖の陰に立ちよりて、身を隠し見給へと、夕日も傾きぬ、暇申さんと結ふ柴の、薪を肩に打ち懸けて、谷の下道はる〳〵と、家路をさして下りけり。

家路をさして下りけり。（中入）

ワキ謡さても不思議や山人の、教のまゝに山路を分け、竹林を遙に見渡せば、煙葉蒙籠として夜の色を侵す、風枝蕭颯として秋の聲より冷ましや。上歌地謡あれ〳〵嶺より雲起り、あれ〳〵嶺より雲起り、俄に降りくる雨の音、鳴神稻妻、天地に耀く光の内に、現れ出づる金龍の勢、遙によそめも肝を消し、身の毛もよだつばかりなり。

地謡かくて黑雲竹林におほひ、かくて黑雲竹林におほひ、覆ひかゝると見えつるが、竹林の岩洞に籠れる虎の、現れ出づれば岩屋の内より、悪風を吹き出だし、一方に雲を吹

四睡―通解に臥聖千應師と虎と寒山と拾得との熟睡したる圖を云ふ虎は禪師の愛獸かりとあり

龍吟ずれば云々―王褒の頌

煙葉蒙籠侵夜色風枝蕭颯欲秋聲―白氏文集の句朗詠集には夜を侵すと訓めり

き返し、敵を追手に勢ひ勇む、恐しかりける氣色かな。

地謡「かゝりける所に、かゝりける所に、金龍雲よりおり下つて、悪虎を取らんと飛んでかゝり、飛龍の戰隙もなし。（舞）シテ謡「もとより虎亂の勢猛く、地謡「もとより虎亂の勢猛く、左も右も劍の如くに、竹枝を折つて金龍にかゝれば、悪虎を卷かんと覆ひかかるを、背けて追つめ食はんとすれば、金龍雲居に遙に上れば、悪虎はいきほひ巖に上り、はるかに見送り、無念の勢あたりを拂ひ、又竹林に飛び歸り、又竹林に飛び歸つて、そのまゝ岩洞に入りにけり。

内二十二

蘆刈

概　模

大和物語に見えたる舊説を本として作る。日下左衛門といふ者貧窮のあまりに、妻と離別して、難波の浦に蘆刈る男と零落せり。かくて久しく音信せでありしうちに、妻は世に出でて、其身榮えたれば、難波に下りて、昔の夫を尋れ、遂にうちつれて上洛す。（四番目）

シテ　日下左衛門　ツレ　同妻
ワキ　従者　狂言　里人

ワキ次第謡「古き都の道なれや、古き都の道なれや、難波の浦を尋ねん。詞かやうに候者は、都さる御方に仕へ申す者にて候。又是に御座候御事は、頼み奉り候人の若子の御乳の人にて御座候。御里は津の國日下の里にて候が、今一度御下りありたき由仰せ候程に、

水野の原―山城
水無瀬川―山城
摂津の境
渚の森―河内
大江の岸―今の大阪の内

此度我等御供申し、淀より舟に乗せ申し、只今難波の浦へと急ぎ候。道行謡淀舟や、水野の原の曙に、水野の原の曙に、影も殘りて有明の、山本霞む水無瀬川、渚の森をよそに見て、なほ行末は渡邊や、大江の岸もうつり行く、浪も入江の里つゞく、難波の浦に著きにけり。難波の浦に著きにけり。詞御急ぎ候程に、是は早津の國日下の里に御著きにて候。是に暫く御待ち候へ、日下の左衞門殿を尋ね申さうずるにて候。此のあたりの人の渡り候か。狂言詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「此あたりに日下の左衞門殿と申す人の渡り候ふか。狂言詞「もとは此所に御座候ひしが、散々御無力にて今は此所には御座なく候。ワキ詞「あら何ともなや候。此由をやがて申さうずるにて候。如何に申し候。左衞門殿を尋ね申して候へば、今は此所には御座なき由申し候。シテツレ、サシ謡「げにや家貧にしては親も知すくなく、賤しき身には故人疎しとかや申すなれば、身には限らぬ習なれども、餘りにあさましき有様かな。詞さりながら様々契り置きし事有り。此所に暫く逗留し、彼人の行方を尋ねばやと思ひ候。ワキ詞「げに〳〵仰尤にて候。此所に暫く御逗留候へ。猶々

御無力―貧窮のこと
家貧親知少身賤故人疎―本朝文粋の句

名草―難波の蘆とて名高ければ云ふ

見つとは―御津をかく

御行方を委しく尋ね申さうずるにて候。いかに以前の人の渡り候か、此浦に如何なる面白き事は候はぬか。都の人に見せ申したく候よ。狂言詞「さん候、この浦に濱市の候。色色の物を賣り買ひ候中に、若き男の此難波の蘆を刈りて賣り候が、色々に戯れごとを申して面白き者にて候間、名草の事にて候程に皆々買ひ取り候。暫く御待ち候ひて彼者を御覽候へ。ワキ詞「あら嬉しや候。さらば彼者を待つて見うずるにて候。

シテ、サシ謡「足引の山こそ霞め難波江に、向ふは波の淡路潟。げにや所から異浦々の氣色までも、眺めにつづく難波舟の、出で浮みたる朝ぼらけ　心も澄める面白さよ。一聲難波なる、見つとはいはじかょる身に、地謡「我だに知らぬ面忘れ、シテ謡「立ち舞ふ市の中々に地謡「隱れ所はあるものを、シテ、サシ謡「げに受けがたき人界を、たま〳〵受くる身なりせば榮花の家には住みもせで、かょる貧家に生るょ事、前の世の戒行こそ拙けれ。今とても爲す業もなき身の行方、昨日と過ぎ今日と暮れ、明日又かくこそ荒磯海の、濱の眞砂の數ならぬ、此身命をつがんとて、あだなる露の草の葉に、蘆刈人となりたるなり。

下歌地謡「何とかならん難波江の、浦に出で里に雪の、寒き日をもいとはず、上歌汐垂るゝ我身のかたはつれなくて、我身のかたはつれなくて、異浦見れば夕煙、うらめしや終に身を、立てかねてこそ賤しけれ。蘆田鶴の、雲居のよそに詠めこし、月の下蘆刈り持ちて、露をも運ぶ袖の上、猶ありがほの心かな　猶ありがほの心かな、ワキ詞「いかに是なる人に申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「見申せば色々の物を賣り候中に、難波の蘆を御賣り候事優しうこそ候へ。シテ詞「さん候このあたりにては賣る者も買ふ人も、唯何となくあつかふ所に、都の人とて難波の蘆を御賞翫こそ、返すゞ〳〵もやさしけれ。謡我も昔は難波津の、名におふ古き都人の、縁の露のおちぶれたる、身は枯蘆の色なくとも、よしとて召され候へ。ワキ謡「あら面白や候。さてよしと蘆とは同じ草にて候か。シテ詞「さん候〳〵へば薄ともいひ　穂に出でぬれば尾花ともいへるが如し。ワキ謡「さては物の名も所によりて變はるよなう。シテ詞「中々の事此蘆を、伊勢人は濱荻といひ、ワキ謡「難波人は、シテ謡「蘆と云ふ。地謡「むつかしや難波の浦のよしあしも、難

物の名も云々―勢陽雜記の連歌に「草の名もところによりてかはるなり難波のあしに伊勢の濱荻」

波の浦のよしあしも、曉しき海士はえぞ知らぬ。唯世をわたる爲なれば、假の命つがんとて、蘆を取り運びて、此市にいづる足數に、おあし添へて召されよや、おあし添へて召されよ。露ながら、難波の蘆を刈り持ちて、よるは月をも運ぶなりや。暇惜しタ汐の晝の内に召されよや、晝の内に召されよ。

ワキ詞「如何に申し候。さて御津の濱とは何くにて候ぞ。シテ詞「忝くも御津の濱の御在所はあれにて候。ワキ詞「不思議やな何とて忝きなどとは仰せ候ぞ。シテ詞「あら何ともなやさらば何とて御津の濱とは御尋ね候ぞ。忝くも仁德天皇、此難波の浦に大宮造し給ふ。御津と書いて御津の濱とは申すなり。ワキ謠「げに面白き謂れかな。皇居なりつる浦なれば、御津の濱とは理なり。シテ詞「波濤海邊の大宮なれば、漁村に燈す篝火までも、禁裏雲居の御火かと見えて、上雲上の月卿より、下萬民の民間までも、有難かりし惠ぞかし。や、あれ御覽ぜよ御津の濱に、網子どもの ふる網船の、えいや〳〵と寄せ來るぞや。地謠「名にし負ふ難波津の、名にし負ふ難波津の、歌にも大宮の、内まで聞ゆ網引すと、網

あれ御覽ぜよ―以下笠の段と云ふ　大宮の云々―萬葉集の歌

子とよのふる、海士の呼聲と詠みおける、古歌をも引く網の、目の前に見えたる有樣、あれ御覽ぜよや人々。シテ謠「面白や心あらん、地謠「面白や心あらん、人に見せばや津の國の、難波わたりの春のけしき。おぼろ舟こがれ來る、沖の鷗磯千鳥、つれだちて友呼ぶや、海士の小舟なるらん。シテ謠「雨に著る、地謠「雨に著る、田簑の島もあるなれば、露も眞菅の笠はなどか無からん。ロンギ難波津の春なれや、シテ謠「名におふ梅の花笠、地謠「縫ふてふ鳥の翼には、シテ謠「鵲も有明の、地謠「月の笠に袖さすは、シテ謠「天つ少女の絹笠、地謠「それは少女、シテ謠「是はまた、地謠「難波女の、難波女の、かづく袖笠肘笠の、雨の蘆邊も亂るゝかたを波、あなたへざらり、ざらり〳〵ざら〳〵ざつと、風のあゆたる古簾、つれ〴〵もなき心おもしろや。

シテツレ詞「いかに誰かあるぞ。ワキ詞「御前に候。シテツレ詞「あの蘆賣る人に、其蘆一本持ちて來れと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。いかに申し候。あのお輿の内へ、其蘆一本持ちて御參りあれと仰せ候。シテ詞「畏つて候。さらば此蘆を參られ候へ。ワキ詞「いや唯直に參らせられ候

心あらん云々―能因の歌末句春のけしきをもぼろ舟―朽ちたる舟　雨にきる云々―古今集に「雨により田蓑の島をけふ行けば名には隱れぬ物にぞありける」梅の花笠―古今集に「霞の笠に繼ふてふ梅の花折りてかざさん老いかくるやと」肘笠―袖笠に同じ　ざらり―蘆の波に打たるゝ形容

へ。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「あら不思議や、今の蘆賣る男の、御姿を見參らせ、是なる所へ隱れて候は、何と申したる御事にて候ぞ。シテツレ詞「今は何をか包み參らせ候べき。只今の蘆賣る人は、わらはが古人にて候。謠是は夢かや、あらあさましや候。ワキ詞「言語道斷の御事、更に苦しからぬ事にて候。某やがて參り御供申し候べし、御心易く思召され候へ。シテツレ詞「いや暫く。皆々御出であらば、定めて恥ぢ參らせられ候べし。わらはひそかに行き、斯くと申さばやと思ひ候。ワキ詞「げに是は尤にて候。さらは御出であらうずるにて候。

シテツレ謠「如何にいにしへ人、わらはこそ是まで參りて候へ。行末かけし玉の緒の、結ぶ契のかひありて、今は世にある樣なれば、はるゞ〳〵尋ね參りたるに、何くへ忍ばせ給ふらん。とく〳〵出でさせ給ひ候へ。シテ謠「是は唯夢にぞあるらん現ならば、よその人目も如何ならんと、思ひ沈めるばかりなり。シテツレ謠「かくは思へど若しは又、人の心は白露の、おき別れにしきぬ〴〵の、妻や重ねし難波人。シテ詞「蘆火たく屋は煤垂れて、おのが妻衣それな

畏つて候―この一句今は謠はず

古人―以前のつれあひ

きぬ〴〵―朝の別れ後朝と書く　蘆火たく屋は云云―萬葉集に「難波人蘆火たくやは煤してあれど己が妻こそとこ珍しき」

らで、又は誰にか馴衣。謡 君なくてあしかりけりと思ふにぞ、いとど難波の浦は住みうき。ツレ謡「あしからじよからんとてぞ別れにし、何か難波の浦は住みうき。シテ謡「げにや難波津淺香山の、道は夫婦の媒なれば、地謡「さのみは何をか包井の、隱れてすめる小屋の戸を、押しあけて出でながら、面なのわが姿や。三年の過ぎしは夢なれや、現にあふの松原かや　木蔭に圓居して難波の昔語らん。

ワキ詞「かょるめでたき御事こそ候はね。やがて都へ御供あらうずるにて候。先々烏帽子直垂を召され候へ。鰪て御盃を參らせうずるにて候。餘に目出度折にて候程に、某御酌に參らうずるにて候。クリ地謡「夫れ高き山深き海、妹背戀路の跡ながら、ことに難波の海山の、所からなる情とかや。シテ、ツレ謡「あるは男山の昔を思ひ出でて、地謡「女郎花の一時をくねると云へども、いひ慰むる言の葉の、露もたわょに秋萩の、本の契の消えかへり、つれなかりける命かな。シテ謡「さればかほどに衰へて、地謡「身を羽束師の森なれども、言葉の花こそ便なれ。クセ難波津に、さくやこの花冬ごもり、今は春べと咲くや、この

君なくて云々―左衛門の歌

あしからじ云々―妻の返歌―隱れてすめる―拾遺集に「蘆の葉にかくれてすみし津の國のこやもあらはに冬は來にけり」こやは昆陽に小屋を掛くあふの松原―長門

鰪て―以下三句今諺はず

あるは男山の云云―古今集序を引く

花と榮え給ひける、仁徳天皇と、聞えさせ給ひしは、難波の御子の御事、又淺香山の言の葉は、采女の盃とりあへぬ、怨をのべし故とかや。此二歌は今までの、歌の父母なる故に、代々に背ねき花色の、言の葉草の種とりて、我等如きの、手習ふ初なるべし。然れば目に見えぬ、鬼神をもやはらけ、武士の心慰むる、夫婦の情知る事も、今身の上に知られたり。シテ謡「津の國の、難波の春は夢なれや、地謡「蘆の枯葉に風渡る、波の立居の隙とても、淺かるべしやわたづみの、濱の眞砂はよみ盡くし、盡くすとも、此道は盡きせめや。唯玩べ名にしおふ、なにはの怨うち忘れて、有りし契に歸りあふ、縁こそ嬉しかりけれ。ワキ詞「いかに申し候、めでたう一さし御舞ひ候へ。シテ詞「さらばそと舞はうずるにて候。謡「今は怨も波の上、地謡「立ちまふ袖のかざしかな（男舞）キリ地謡「浮寢忘るゝ難波江の、浮寢忘るゝ難波江の、蘆の若葉を越ゆる白浪。月も殘り、花も盛に津の國の、こやの住まひの冬ごもり、今は春べと都の空に、伴ひ行くや大伴の、御津の浦わの見つつを契に、歸る事こそ嬉しけれ。

津の國の云々―新古今集西行の歌末句風渡るなり

置の若葉を―新古今集の歌上句は夕月夜汐みち來ちし難波江の大伴の―御津の枕詞

敦盛

梗概

平敦盛一の谷の戦に、熊谷直實に打取らるゝ物語は、平家物語にあり。直實それより無常を感じ、遁世して蓮生と號し、たま〳〵須磨に來りしに敦盛の幽靈現れて、昔を語りしを、跡懇に弔ふ事を作る。（二番目）

シテ　敦盛（前は草刈男）　前ツレ　草刈男

ワキ　蓮生法師

ワキ次第謡「夢の世なれば驚きて、夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん。詞是は武藏の國の住人、熊谷次郎直實出家し、蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に懸け申しし事、餘りに御痛はしく候程に、かやうの姿となりて候。又是より一の谷に下り、敦盛の御菩提を弔ひ申さばやと思ひ候。道行謡九重の、雲居を出でて行く月の、雲居を出でて行く月の、南に廻る小車の、淀山崎を打ち過ぎて、昆陽の池水生田川、波こゝもとや須磨の浦、一の谷にも著きにけり。一の谷にも著きにけり。詞急ぎ候程に、津の國一の谷に著

生田川―攝津

きて候。誠に昔の有樣今のやうに思ひ出でられて候。又あの上野に當つて笛の音の聞え候、此人を相待ち、このあたりの事ども委しく尋ねばやと思ひ候。

シテ、ツレ三人次第謠「草刈笛の聲添へて、草刈笛の聲添へて、吹くこそ野風なりけれ。シテ、サシ謠「かの岡の草刈る男野を分けて、歸るさになる夕まぐれ、三人謠「家路もさぞな須磨の海、すこしが程の通路に、山に入り浦に出づる、憂き身の業こそ物うけれ。下歌問はどこそ、ひとりわぶとも答へまし、上歌須磨の浦、もしほ誰とも知られなば、もしほ誰とも知られなば、我にも友のあるべきに、餘りになればわび人の、親しきだにも疎くして、住めばとばかり思ふにぞ、憂きにまかせて過ごすなり。憂きにまかせて過ごすなり。

ワキ詞「如何に是なる草刈達に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。

ワキ詞「只今の笛はかたゞ〳〵の中に吹き給ひて候か。シテ詞「さん候我等が中に吹きて候。

ワキ詞「あらやさしや其身にも應ぜぬわざ、返すゞ〳〵もやさしうこそ候へ。シテ詞「其身にも應ぜぬ業と承れども、夫れ優るをも羨まざれ、劣るをも賤しむなとこそ見えて候へ。其上

樵歌牧笛とて、シテ、ツレ「草刈の笛樵の歌は、歌人の詠にも作りおかれて、世に聞えたる笛竹の、不審な爲させ給ひそとよ。ワキ謡「實に〳〵是は理なり。さて〳〵樵歌牧笛とは、シテ謡「草刈の笛ワキ謡「樵の歌の、シテ謡「浮世を渡る一節を、ワキ謡「諭ふも、シテ謡「舞ふも、ワキ謡「吹くも、シテ謡「遊ぶも、上歌地謡「身の業の、好ける心に寄竹の、好ける心に寄竹の、小枝蟬折さま〴〵に、笛の名は多けれども、草刈の、吹く笛ならば是も名は、青葉の笛と思召せ。住吉の汀ならば、高麗笛にやあるべき。是は須磨の鹽木の、海士の焚きさしと思しめせ。海士の焚きさしと思しめせ。

ワキ詞「ふしぎやな、餘の草刈達は皆々歸り給ふに、御身一人留まり給ふ事、何の故にて有るやらん。シテ詞「何の故とか夕波の、聲を力に來りたり。十念授けおはしませ。ワキ謡「易き事十念をば授け申すべし。それに付きても御事は誰そ。シテ詞「誠は我は敦盛の、ゆかりの者にて候なり。ワキ謡「ゆかりと聞けばなつかしやと、掌を合せて南無阿彌陀佛、シテ、ワキ謡「若我成佛十方世界、念佛衆生攝取不捨、地謡「捨てさせ給ふなよ。一聲だにも足

小枝―敦盛の持ちたる笛にても
と祖父忠盛が鳥羽院より賜りたるなり
蟬折―笛の名器
胥簧の笛―笛の名之を敦盛所持の物として混じ來れり
住吉の汀―高麗船の泊なれば云ふ

りぬべきに、毎日毎夜の御弔ひ、あら有難や我名をば、申さずとても明暮に、向ひて回向し給へる、其名は我と言ひ捨てよ、姿も見えず失せにけり。姿も見えず失せにけり。（中入）

ワキ上歌「是に付けても弔の、是につけても弔の、法事をなして夜もすがら、念佛申し敦盛の、菩提を猶も弔はん、菩提を猶も弔はん。

後シテ謡「淡路潟、通ふ千鳥の聲聞けば、寢覺も須磨の、關守は誰そ。如何に蓮生、敦盛こそ参りて候へ。ワキ謡「不思議やな鳧鐘を鳴らし法事をなして、まどろむ隙もなき所に、敦盛の來り給ふぞや。さては夢にて有るやらん。シテ詞「何して夢にて有るべきぞ、現の因果を晴らさん爲に、これまで現れ來りたり。ワキ謡「うたてやな一念彌陀佛即滅無量の、罪障を晴さん稱名の、法事を絕えせず弔ふ功力に、何の因果は荒磯海の、シテ謡「深き罪をも訪ひ浮め、ワキ謡「身は成佛の得脫の緣。シテ謡「是又他生の功力なれば、ワキ謡「日頃は敵シテ謡「今は又、ワキ謡「眞に法の、シテ謡「友なりけり。地謡「是かや悪人の友を振り捨てよ、善

人の、敵を招けとは、御身の事か有難や、有難し有難し。とても懺悔の物語、夜すがらいざや申さん、夜すがらいざや申さん。

累葉枝を連ねー兄弟のこと

クリ地謡「夫れ春の花の樹頭に上るは上求菩提の機を勸め、秋の月の水底に沈むは下化衆生の形を見す。シテ、サシ謡「然るに一門門を竝べ、累葉枝を連ねし粧、地謡「眞に槿花一日の榮に同じ。善を勸むる教には、逢ふ事かたき石の火の、光の間ぞと思はざりし、身の習はしこそはかなけれ。シテ謡「上に在つては下を惱まし、地謡「富んでは驕を知らざるなり。クセ然るに平家、世を取つて二十餘年、眞に一昔の、過ぐるは夢の內なれや、壽永の秋の葉の、四方の嵐に誘はれ、散々になる一葉の、舟に浮き波に臥して、夢にだにも歸らず、籠鳥の雲を戀ひ、歸雁列を亂るなる、空定めなき旅衣、日も重なりて年月の、立ち歸る春の頃、此一の谷に籠りて、しばしはこゝに須磨の浦、シテ謡「後の山風吹き落ちて、地謡「野もさえ歸る海際に、舟のよるとなく晝となき、千鳥の聲も我袖も、波にしをるゝ磯枕、海士の苫屋に共寢して、須磨人にのみ磯馴松の、立つるや夕煙、柴と云ふもの折

一葉—舟のこと

り斃きて、思ひを須磨の山里の、かゝる所に住まひして、須磨人になりはつる、一門の果ぞ悲しき。

シテ詞「さても二月六日の夜にもなりしかば、親にて候經盛我等を集め、今様を謠ひ舞ひ遊びしに、ワキ謠「さては其夜の御遊なりけり、城の内にさも面白き笛の音の、寄手の陣まで聞えしは。シテ詞「それこそさしも敦盛が、最期まで持ちし笛竹の、ワキ謠「音も一節をうたひ遊ぶ、シテ謠「今様朗詠、ワキ謠「聲々に、地謠「拍子を揃へ聲をあげ（中ノ舞）シテ謠「さる程に御舟をはじめて、地謠「一門皆々船に浮めば、乘りおくれじと汀に打ちよれば、御座舟も兵船も、遙かにのび給ふ。シテ謠「せんかた波に駒をひかへ、あきれはてたる有樣なり。かかりける所に、地謠「後より、熊谷次郎直實、のがさじと追つ懸けたり。敦盛も馬引返し、波の打物拔いて、一打三打は打つとぞ見えしが、馬の上にて引つ組んで、波打際に落ち重なつて、終に討たれて失せし身の、因果は廻りあひたり。敵は是ぞと討たんとするに、仇をば恩にて、法師の念佛して弔はるれば、終には共に生るべき、同じ蓮の蓮生法

御座舟―安徳天皇乘御あり

打物―刀のこと

波の打つと言掛く

師、敵にては無かりけり。跡弔ひて給び給へ。跡弔ひて給び給へ。

木賊

梗概

信濃に木賊刈をなりはひとせる老人あり。愛子の行方を失ひて、あけくれ悲歎に沈みしが、たま〳〵泊り合せたる旅人、その子を伴ひたれば、こゝに父子再會の喜をなす。文中、箒木の故事を用ひたり。重き能がらなり。

シテ　父　子　方　子
ツレ二人　里人　ワキ　旅人

ワキ次第謡「信濃路遠き旅衣、信濃路遠き旅衣、日も遙々の心かな。詞是は都の者にて候。又是に渡り候御方は、本國は信濃國の人にて御座候。いまだ父を御持ち候が、今一度御對面ありたきよし仰せられ候間、我等御供申し、信濃の國へと急ぎ候。道行謡道あるや、旅の關の戸明け暮れて、旅の關の戸明け暮れて、宿はいづくと定めなく、行方も知らぬ身ながらも、伴なふ人は有明の、月日程なく木曾路經て、園原山に著きにけり。園原山に著きにけり。

木賊―信濃木賊とて昔より名高し

木曾の御坂―園原の東

木曾の桟―筑摩郡

木賊刈る云々―夫木抄の歌

木賊刈る云々―新勅撰集の歌下句摩かぬ露も玉と散りけり

シテ、ツレ一聲謡「木賊刈る、山の名までも園原や、伏屋の里も秋ぞ來る、ツレ謡「梢はいづれ一葉ちる、シテ、ツレ謡「嵐や音を殘すらん。シテ、サシ謡「面白や處は鄙の住まひなれども、實に名所の故やらん。山野の詠も氣色だつ、シテ、ツレ謡「木曾の御坂の梢より、浮む雲間の朝づく日、園原山にうつろひて、木賊かる野の青綠、草の袂もなほ深し。下歌男鹿鳴く野の行方まで、妻やこもりしそのはらの、上歌所は信濃路や、所は信濃路や、木曾の桟かよる身の、うき世を渡るならはしに、さも馴衣しほたれて、袖の露もいとなし。草筵、露を片敷く有明の、朝な〳〵出づるや、牧笛の野人ならまし。下歌地謡「いざ〳〵木賊刈らうよ。いざ〳〵木賊刈らうよ。

ロンギ地謡「刈るや木賊の言の葉は、いづれの詠なるらん。シテ謡「本賊刈る、園原山の木の間より、磨かれ出づる秋の夜の、月影をもいざや刈らうよ。地謡「影も假なる草の原、露分衣しほたれて、刈れや刈れや花草。シテ謡「木賊刈る、木賊刈る、木賊刈る、木曾の麻衣袖ぬれて、みがかぬ露の玉ぞ散る。地謡「散るや霰のたま〳〵も、心の亂れ知るならば、シテ謡「胸なる

われもまた木賊刈—成す事もなき意

園原や云々—坂上是則の歌

月は曇らじ。地謡「實に誠何よりも、研くべきは眞如の玉ぞかし。思へば木賊のみか、われもまた木賊の、身をたど思へ我心、磨けや磨け身の爲にも、木賊刈りて取らうよや。木賊刈りて取らうよ。

ワキ詞「如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ謡「見申せば年たけ給ひたるが、手づから木賊を刈り持ち給ふ事、其身にも應ぜぬ業と見えて不審にこそ候へ。シテ詞「其身にも應ぜぬ業と承れば、人がましうこそ候へ。さりながら園原山の木賊は、名所といひ名草といひ、歌人も御賞翫なれば、手づから刈りもち家苞と志し候。ワキ詞「實に〳〵尤にて候。さて此所に伏屋の森と申す森の候か。シテ詞「さん候。あれに見えたるこそ伏屋の森にて候へ。ワキ詞「あの伏屋の森に、箒木と申す木の候か。シテ詞「御覽候へ梢に一木うす〳〵と見えたるこそ箒木にて候へ。箒草に似たる木にて候により、箒木と申しならはして候。これは宿り木にて候。ワキ詞「古言のおもひ出でられて候。謡「園原や伏屋に生ふる箒木の、詞ありとは見えて逢はぬ君かなとよめ

り。何とてありとは見えて逢はぬ君かなとはよまれて候ぞ。シテ詞「賤しき身にて候へば、其心を何とて知り候ふべきなれども、所に申し習はしたる義を以て、歌の心を推量申し候に、あの箒木を此邊より見れば見え候が、木陰によりては見え候はぬぞとよ。其心を歌人知りて、有りとは見えて逢はぬ君かなとよまれたる歌にて候やらん。ワキ詞「さて今もよりては見え候はぬか。シテ詞「なか〳〵の事只今その證據を見せ申さんと、ワキ謡「たがひに近づき立ちよりて、シテ謡「見ればありつる箒木の、ワキ謡「陰にて見ればかきたえて、シテ謡「何れかそれぞ。ワキ謡「不思議やな。上歌地謡「よそにては、正しく見えし箒木の、正しく見えし箒木の、陰に來て見ればなかりけり。實にも正しく、ありとは見えて逢はぬ君かなと、よみおく言のはゝき木は面白や。ゆにや道ある心とて、眞なりける歌人の、言葉の林しげるもや、其箒木の種ならん、其箒木の種ならん。

シテ詞「いかに御僧たちに申し候。我らが私宅は旦過にて候。一夜を明して御通り候へ。ワキ詞「あら嬉しやさらば參らうずるにて候。シテツレ詞「如何に御僧達御心安く御座候へ。今の

旦過―翌朝發足して行き過ぐる意にて旅宿のこと

尉殿は少し身に思の候ひて、時々は現なき風情の候。其時は心得有つて御あひしらひ候へ。ワキ詞「心得申して候。

シテ詞「いかに御僧たち、今夜は心靜かに尉が身の上を語つて聞かせ申し候べし。此尉は子を一人持ちて候を、行方も知らぬ人に誘はれ暮に失ひて候。若も行方や聞くと思ひ、此路次に居所を立て、行來の人を留め申し候。我子の常は小歌曲舞に好きて、友を集め舞ひ謡ひ候ひし程に、此尉も時々は舞ひ謡ひ候。誰かある御盃を參らせ候へ。

子詞「いかに申し候。只今の尉殿は我らが親にて候。ワキ詞「何只今の尉殿は、御親父にて御座候とや。さらばやがて御名のりあらうずるにて候　子詞「いや暫く、思ふ仔細の候へばまづ知らぬよしにて御入り候へ。ワキ詞「心得申し候。

シテ詞「いかに御僧たちに申し候。餘りに夜長に候程に、酒を持ちて參りて候。ワキ詞「御志はありがたけれど、飲酒は佛の戒にて候。シテ謡「飲酒は佛の御戒はさる事なれども、彼廬山の惠遠禪師、虎溪を去らぬ禁足にだに　陶淵明が志にて飲酒を破りしぞかし。

ましてや我子の翫びし、舞曲の酒宴の戯れにて、謡老生を慰む志をば、などかあはれみ給はざらん。地謡「廬山の古へを思召さば、心の底までも汲みて知る、法の眞水と思召して、飲酒の心とけて、一つきこしめされよ。

クリ地謡「夫れ謬つて仙家に入つて、半日の客たりといへども、舊里に歸つて、七世の孫に逢ふ事をともいへり。シテ、サシ謡「いはんや一世の親として、などかその情なからざらん。地謡「ていたいは薪を採り、老いたる母をはごくみ、虞舜は頑なる父を敬ふとも言へり。シテ謡「たとひ老後の愚なりとも、地謡「孝恩の心なからんやと、恨みの涙漣々たり。クセ然るに教主釋尊も、羅睺爲長子と說き給へり。いはんや二佛の、中間の衆生として恩愛のあはれを知らざらんは、木石に異ならず。石の火の光の間をだにも、などや添ひもせぬ。親は千里を行けども　子を忘れぬぞ眞なる。子はありて千年を經れども、親を思はぬならひとは、今身の上に知られたり。シテ謡「げにや人の親の、地謡「心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、誠なりや我ながら、其面影の忘られぬ、昔に返す舞の袖、我子は

謬入仙家一雖爲半日之客恐歸舊里纔逢七世之孫一朗詠集の句王質及び劉阮の故事ていたいー未詳

かうこそ舞ひしものを、此手をばかうこそさしょぞとて、左右に颯々の袖を垂れ、一つは又酔狂も、まじると人や御覧ずらん。酔泣きも子を思ふ、涙とや人の見るべき。地謡「子を思ふ、（舞）シテ、ワカ謡「子を思ふ、身は老鶴の鳴くものを、地謡「げにや子を思ふ、闇の夜鶴の聲は盃中、シテ謡「廻るも盃、地謡「五老の月の、影に酔ひふす枕の上に、シテ謡「來らば我子よ。地謡「親、物に狂はど、子は離すべき物を、シテ謡「あら恨めしや只、地謡「うらめしやたど、舞も歌も現なさも、子故なれば老の波の、あはれ立ち歸り、今一目父に見えよかし

ロンギ地謡「この上は、何かつょまんこれこそは、別れし御子松若と、言ふにもすょむ涙かな。シテ謡「誰そや我子と夕月夜、おほつかなしや何れさて、別れし我子なるらん。地謡「變る姿の衰へは、げにそれならぬ有樣を、シテ謡「よく〳〵見ればさすがに、地謡「親なりけり。シテ謡「子なりけるぞや。地謡「恨めしやなどされば、とくにも名のり給はぬぞと、逢ふ時たにも恨みある、こは夢か夢にても逢ふこそ嬉しかりけれ。キリ地謡「かくて親子に合

聲は盃中―白氏文集の聲來枕上千年鶴影巡盃中一五老峰を引く

夕月夜―もぼつかなしの枕詞

竹の、かくて親子に合竹の、世を故郷をあらためて、佛法流布の寺と爲し、佛種の縁となりにけり。あとに伏屋の物語、浮世語になりにけり。浮世語になりにけり。

葵上

梗概

前の野宮と關聯せる曲なり。祭見の車爭より、いたく嫉妬の心起して、葵上を惱ませる六條御息所の生靈、巫女の梓にかゝりて、それと名のり出で、遂に山伏の加持によりて、調伏せらるゝ事を現在的に脚色す。（五番目）

シテ　六條御息所生靈（前は上﨟後は鬼女）
シテツレ　巫女　ワキ　山伏（横川小聖）
ワキツレ　大臣　狂言　從者

大臣詞「是は朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女、葵上の御物の氣、以ての外に御座候程に、貴僧高僧を請じ申され、太法祕法醫療さま〴〵の御事にて候へども、更に其驗無し。こゝに照日の神子とて隱れなき梓の上手の候を召して、生靈死靈の間を、梓に掛けさせ申せとの御事にて候ふ程に、此由申し付けばやと存じ候。いかに誰かある、照日の神子を召して來り候へ。やがて梓に御かけ候へ。神子謠「天清淨地清淨、內外清

朱雀院―桐壺帝の皇子光源氏の御兄

いかに云々―これより一句今謠はず　梓―梓弓を叩きして靈を呼寄す

淨六根清淨。寄人は、今ぞ寄りくる長濱の、蘆毛の駒に手綱ゆりかけ。シテ、一聲謡「三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん。夕顔の宿の破車、やる方なきこそ悲しけれ。シテ次第謡「浮世は牛の小車の、浮世は牛の小車の、廻るや報なるらん。サシ凡そ輪廻は車の輪の如く、六趣四生を出でやらず、人間の不定芭蕉泡沫の世の習、昨日の花は今日の夢と、驚かぬこそ愚なれ。身の憂きに人の恨の猶添ひて、忘れもやらぬ我思、せめてや暫し慰むと、梓の弓に怨靈の、これまで現れ出でたるなり。下歌あら、恥かしや今とても忍車の我姿、上歌月をば詠めあかすとも、月をば詠めあかすとも、月には見えじかけろふの、梓の弓のうら弭に、立ち寄り憂きを語らん。立ち寄り憂きを語らん。梓の弓の音は何くぞ、梓の弓の音は何くぞ。神子謡「東屋の母屋の妻戸に居たれども、シテ謡「姿なければ訪ふ人もなし。神子謡「不思議やな誰とも見えぬ上臈の、破車に召されたるに、青女房と思しき人の、牛もなき車の轅に取りつき、さめ〴〵と泣き給ふ痛はしさよ。詞若しかやうの人にてもや候らん。大臣詞「大方は推量申して候。唯つゝまず名を御名乗り候へ。

寄人は—先代萩事歌歌本紀に徊詫歌として「寄神は今ぞ寄來る長濱に蘆毛の駒に手綱掛懸け」とあり
夕顔の宿—光源氏の訪れしことを云ふ
芭蕉泡沫—維摩經に是身如泡不得久立是身如芭蕉中無有堅実
忍車—加茂祭見物の折のこと

シテ謡「それ娑婆電光の境には、恨むべき人もなく　悲むべき身もあらざるに、いつさて浮かれ初めつらん。只今梓の弓の音に、引かれて現れ出でたるをば、如何なるものとか思召す。是は六條の御息所の怨靈なり。我世に在りしいにしへは、雲上の花の宴、春の朝の御遊に馴れ、仙洞の紅葉の秋の夜は、月に戯れ色香に染み、華やかなりし身なれども、衰へぬれば橦の、日影待つ間の有樣なり。只いつとなき我心、物憂き野邊の早蕨の萌え出でそめし思ひの露、かゝる恨みを晴らさんとて、これまで現れ出でたるなり。

下歌地謡「思ひ知らずや世の中の　情は人のためならず、上歌我人のためつらければ、我人のためつらければ、必ず身にも報うなり。何を歎くぞ葛の葉の、恨はさらに盡きすまじ。恨はさらに盡きすまじ。

シテ謡「あら恨めしや、詞今は打たでは叶ひ候まじ。神子謡「あら淺ましや六條の、御息所程の御身にて、うはなり打の御ふるまひいかでさる事の候べき。只思召し止り給へ。シテ詞「いや如何に云ふとも、今は打たでは適ふまじと、枕に立寄りちやうと打てば、神子謡「此上は

とて立ち寄りて、妾は跡にて苦を見する、シテ謡「今の恨は有りし報、神子謡「瞋恚の焔は、シテ謡「身を焦す。神子謡「思ひ知らずや、シテ謡「思ひ知れ。地謡「恨めしの心や、あら恨めしの心や。人の恨の深くして、憂き音に泣かせ給ふとも、生きて此世にましまさば、水暗き、澤邊の螢の影よりも、光る君とぞ契らん。シテ謡「妾は蓬生の、地謡「もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへ殊に恨めしや。夢にだにかへらぬものを我契、昔語になりぬれば、猶も思ひは増鏡、其面影も恥かしや。枕に立てる破車、打ち乗せ隠れ行かうよ、打ち乗せ隠れ行かうよ。（中入）大臣詞「如何に誰かある。葵上の御物の氣、いよいよ以ての外に御座候程に、横川の小聖を請じて來り候へ。狂言シカ〳〵。ワキ謡「尤識の窓の前、十乗の床のほとりに、瑜伽の法水をたゝへ、詞三密の月の澄ます所に、案内申さんとは如何なる者ぞ。狂言シカ〳〵。ワキ詞「此間は別行の仔細あつて、何方へも罷り出でず候へども、大臣よりの御使と候程に、やがて參らうずるにて候。大臣詞「只今の御出御大儀にて候、ワキ詞「承り候。さて病人は何くに御座候ぞ。大臣詞「あれ

憂き音に泣かせ給ふとも―葵上の事をさす

横川―叡山三塔の一　瑜伽―教法　三密―身、語、意の三密

なる大床に御座候。ワキ詞「さらばやがて加持し申さうずるにて候。大臣詞「尤にて候。ワキ謡「行者は加持に參らんと、役の行者の跡を繼ぎ、胎金兩部の峯を分け、七寶の露を拂ひし篠懸に、詞不淨を隔つる忍辱の袈裟、赤木の數珠のいらたかを、さらり〳〵と押しもんで、謡一祈こそ祈つたれ。曩莫三曼陀縛曰羅赦。シテ謡如何に行者、早歸り給へ。歸らで不覺し給ふなよ。ワキ謡たとひ如何なる惡靈なりとも、行者の法力盡くべきかと、重ねて珠數を押しもんで、地謡「東方に降三世明王、シテ謡南方軍荼利夜叉、地謡「西方大威德明王、シテ謡北方金剛、地謡「夜叉明王、シテ謡中央大聖、地謡「不動明王、曩莫三曼陀縛曰羅赦、旋陀摩訶盧遮那、娑婆多耶吽多羅吒干帰、聽我說者得大智恵、知我身者卽身成佛、シテ謡「あら〳〵恐ろしの般若聲や。是までぞ怨靈、此後又も來るまじ。ヤリ地謡「讀誦の聲を聞く時は、讀誦の聲を聞く時は、惡鬼心を和らげ、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もこゝに來迎す。成佛得脫の、身となり行くぞ有難き。身となり行くぞ有難き。

輪藏

梗概　太宰府居住の僧上洛して北野の天滿宮に詣で、輪藏の守護神の示現を拜する事を作る。（脇能）

シテ　傳大士　ツレ　火天　アキ　太宰府の僧

ワキ次第謡　東に殘る法の道、東に殘る法の道、迷はぬ教賴まん。詞　是は筑前の宰府に居住の僧にて候。我若年の昔より、佛法修行の志淺からず候へども、いまだ都を見ず候程に、洛陽の寺社に參り、殊には北野の天滿天神は、當社御一體の御事なれば、參詣申さんと只今思ひ立ちて候。道行謡　筑紫舟、法のためにと思ひ立つ、法のためにと思ひ立つ、雲路につづく天の原、出づる日影の程もなく、難波の浦に著きしかば、是よりやがて旅衣、日も重なれば程もなく、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。詞　急ぎ候程に、都に著きて候。是より北野に參らばやと思ひ候。サシ謡　ありがたや釋迦一代の藏經を、大唐よりも渡しつゝ、末世の衆生濟度のために、輪藏に納め結緣の、手に觸れ緣を結ばせ

當社御一體―太宰府と同一の御神體

釋迦一代の藏經―一切經のこと　輪藏―轉輪藏といふ經藏の中央に設けたる書棚にて廻轉する仕掛とす

んとの、御神の誓ぞ有難き。南無や傅大士普建普成、現受無比樂後生淸淨土。火天詞「なうなうはれなる御僧御身は、筑前の宰府より來り給ひて候か。ワキ詞「不思議やな都始て一見の者を、宰府の者とは何とて見知り給ふらん。火天詞「あら愚の仰やな。其方は知ろしめされずとも、我は朝夕白雲の、迷はぬ法の友人なれば、などかは知らで候べき。ワキ詞「是は不思議の御事かな。さて〳〵かやうに承る、御身は如何なる人やらん。火天詞「今は何をか包むべき、五千餘卷の御經を、晝夜に守護し奉る、十二天の其中に、火天是まで來りたり。ワキ謠「そも火天とはまのあたり、天部を拜み申す事よと、感涙肝に銘じつゝ、現ともに更に辨へず。火天謠「此方ら御身の貴さに、ワキ謠「隨喜渴仰、火天謠「さま〴〵に、上歌地謠「說き置きし、御法の花も色々に、御法の花も色々に、教は多き道ながら、悟は一つぞ胸の月、曇らじや三界、只一心の外ならじ。所は北の宮居、北辰は動かず、天滿つ星のめぐるなる、輪藏を開きて、靜かに拜み給へや。ワキ詞「あら有難の御事や。五千餘卷の御經を、一夜に拜ませおはしませ。火天詞「五千餘卷の御經を、一夜に御僧の拜まんとは、おほけなき

傅大士―東陽大士ともいふ。雙林寺に居す。藏經の宏覽に便せんとて輪藏を設く。一日其身相水に映じ圓光寶蓋を現ずその二子普建指し普成笑ふといふ。

十二天―日、月、帝釋、伊舍那、焰魔、羅刹、水風、火地、多聞、梵天

おほけなき―過分の意

御事なれどもさりながら、謡御身父母の胎内を出でしより此方、五戒を亂さず慈悲を起し、佛道修行し給ふ事、地謡「其功既に年久し。火天サシ謡「然るに此御經に於て、大唐よりも渡されし、地謡「傳大士普建普成とて、其身は俗體なりといへども、此三人の如何なれば、彼御經に値遇の緣、深き心の隙もなく、晝夜に經を守護し給ふ。クセ　其後日の本に渡りし法の舟の内、波路遙かに漕がれ來し、心筑紫の果よりも、佛法東漸の、都の北の宮寺に、火天謡「納め給ひし昔より、地謡「今末の世といひながら、類稀なる上人の、結緣の利益仰ぎつゝ、衆生を濟度し給へ。我も姿を改めて、必ずこゝに來りつゝ、行道の利益なさんと、いふかと見えて失せにけり。いふかと見えて失せにけり。（中入）

ワキ謡「月は隈なき後夜の鐘、聲澄み渡る折節に、地謡「不思議や異香薰じつゝ、音樂聞え紫雲たなびく絕間より、花降り下るぞあらたなる。云ひもあへねば妙經の、いひもあへねば妙經の、守護神の御厨子の、扉は忽ち四方へ開けで、傳大士二童子現れたり。シテ謡「釋迦一代の御法の御箱、地謡「釋迦一代の御法の御箱を、彼上人に悉く與へんと、普

御法の御箱―經匣

建普成の二童子に持たせ、上人の御前にさし置き給へば、ヤテ謡「傅大士座を立つて、地謡「傅大士座を立つて、竹杖にすがり、膝を屈めて上人を禮し、彼御經を讀誦し給へば、善哉なれや善哉なれと、夜遊を奏して舞ひ給ふ。地謡「いづれも妙なる舞の袖、いづれも妙なる舞の袖、月も照り添ふ雲間より、天部の姿は隱れもなく、天降るこそ有難けれ。火天謡「そも〳〵是は、釋迦一代の藏經の守護神、十二天の其内に、火天の姿を現すなり。地謡「火天忽ち天降り、火天忽ち天降り、程なく目前に現れ出でて、上人に向ひ、卽ち結縁の行道の利益、めぐらし給へと、各〳〵立ち寄り上人を誘ひ、輪藏に御手をかけまくも、かたじけなしと互に押廻り、廻り廻るや日月の光、曇らぬ御法のあらたさよ。(舜)火天謡「是はこれ　妙經の守護神なれば、地謡「妙經の守護神なれば、夜の間に轉經の儀式をあらはし、上人悉く披見の其後、各御箱をとりぐに、遙の神前に運び給ふ。傅大士伴ひ神前に積み置き、いよ〳〵當社當寺の佛法、繁昌の靈地を崇め給へと、上人に教へ、天部は雲居に上らせ給へば、七寶莊嚴の瑠璃の座の上に、傅大士二人の童子を伴ひ、傅大士

二人の童子を伴ひ、歸り給ふぞ有難き。

大正十五年五月二十二日印刷
大正十五年五月二十五日發行

有朋堂文庫
謠曲集 上
（非賣品）

不許複製

編輯者 東京府下大久保町西大久保二百三十六番地 塚本哲三

印刷兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 三浦理

印刷所 東京市神田區錦町三丁目九番地 有朋堂印刷所

發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 有朋堂書店

岡山製本